Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

戴季陶における「中国革命」とその思想 : 中国・日本・アジアをめぐって

久保, 純太郎

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2005-03-25

(Date of Publication)
2007-09-05

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲3482

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003482

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

平成１７(２００５)年3月３１日　提出

戴季陶における「中国革命」とその思想
――中国・日本・アジアをめぐって――

指導教員
(主)藤田 裕嗣 教授
(副)森 紀子 教授、緒形 康 助教授

大学院文化学研究科 社会文化専攻 地域社会文化論講座（教育研究分野：地域文化論）

９８４Ｄ７１５Ｈ
久保　純太郎

論文内容の要旨

氏　　名　　久保　純太郎

専　　攻　　大学院文化学研究科 社会文化専攻 地域社会文化論講座
（教育研究分野：地域文化論）

論文題目　　戴季陶における「中国革命」とその思想――中国・日本・アジアをめぐって――

指導教員　　(主)藤田 裕嗣 教授
(副)森 紀子 教授
(副)緒形 康 助教授

要　旨

これまでの戴季陶研究における問題点の一つは、政治路線(対日外交路線を含む)の根本にある思想についての考察がなお不十分なことにあった。中国大陸、台湾の学術界では、戴季陶が政治路線において一貫して三民主義を信奉し、孫文が主導する革命に従事したという見方が定説となり、戴季陶が人道主義や社会主義に傾倒しながら、精神的な葛藤を経て三民主義を信奉するに至ったという経過が看過されてきた。日本の学術界では、近年、戴季陶が中国の自強、中日戦争の勃発回避、中国の近代化の推進のために、時期によって対日批判(反日)と中日提携(親日)の両極端の発言をするなど、戦術的な対日外交路線を取ったことが明らかにされた。しかし、それらの戴季陶の対日外交路線研究は、1920年代までが主な対象となっており(その理由として、戴季陶は1930年代以降、日本を論じることが激減したからであるとする)、1930 年代以降については検討が不十分なままであった。その結果、戴季陶の思想に内在していた一貫した論理の形成とその生涯に亘る展開過程の把握が重要な課題として残されたままとなっていた。

そこで本論文では、とくに戴季陶の対日外交路線、孫文の理論学説に対する解釈、アジア認識と中国辺疆認識の側面に着目して、彼の全著作と生涯に亘る言動を対象として追求し、整理し、分析を加え、その政治路線の根拠である中国の国家の独立・発展を実現させるためには国民精神を形成しなければならないという思想が、どのような過程を経て生まれ、発展していったかを明らかにしようした。

具体的には次の三つの問題に取り組んだ。

第一に、戴季陶の対日外交路線における対日批判と、国民精神形成についての主張のつながりを説明することである。

第二に、戴季陶の五四運動時期のマルクス主義理論研究および1920年代半ばの孫文の理論学説の体系化と、国民精神形成についての主張を関連づけて捉えることである。

第三に、戴季陶の大アジア主義理解、移民問題に関する言説および礼に関する言説と、国民精神形成についての主張を関連づけて捉えることである。

本論文では検討の結果、以下の事柄を明らかにし得た。

第一に、戴季陶は執筆活動を始める直前に日本の韓国併合に際会し、日本政府の朝鮮政策と中国政策は非人道であると批判した。彼は中国の革命の成就、中国の自強のために、日本が中国を援助することを説いた。これが彼の中日提携論の本質である。また、彼は日本政府の朝鮮政策と中国政策が中国革命の進展を阻害するとして批判したが、その政策は日本の国家の独立(明治維新)や発展の延長線上に位置づけられ、その政策の方向を規定しているのが国民精神である、と考えていた。また、日本国民が政治的に覚醒して中国政策の転換を政府に要求する期待は抱き続けた一方で、中日関係は途切れないという確信を持っていた。彼は対日批判を通じて、中国国民に自省を促し、国民の意志を団結させることを考えていた。

第二に、戴季陶は五四運動時期に、当時の社会変動に応じた国民精神を構築する必要があると考えた。彼は国民精神として、「仁」、「義」と階級意識に注目した。しかし、孫文の反対もあって共産主義グループから遠ざかった戴季陶は、1920 年前半苦悶しつつ、利他(仁愛)の精神に価値を見出し、利他の精神を孫文の三民主義の中から導き出した。1920年代後半には、救国主義としての三民主義を信奉し仁愛精神を持った中国国民党員(中国国民党改組によって入党した中国共産党員も含む)が、西方の科学文明を受容して国民を指導し中国の自強を図ることを主張した。

第三に、戴季陶は、中国はアジアの大国であり、またアジアは世界で被抑圧国の最も多い地域である。アジア諸民族の独立こそが、中国革命の最終的な目標であると考え、一貫して、日本政府の朝鮮政策と中国政策が中国革命の進展を阻んでいることを批判した。彼が1920年代後半から1930年代にかけて述べた中日提携、「民族国際」、新亜細亜の構想は、まず中国革命を成就させなければならないという確信に基づいていた。彼は終始、中国の国家的独立を主要任務と

考え、独立し富強となった後、周辺のアジア諸民族の独立を援助し、最後に全世界の被抑圧民族と提携することを展望していたのである。中国革命の目標には辺疆建設が含まれており、戴季陶は1920年代半から、その重要性を認識していた。辺疆建設に当たっては、三民主義を信奉した、有識、自立的、利他的な精神を身に付けた精鋭分子を養成し、その精鋭分子が移民や辺疆の国民を指導することを考えた。1930年代から1940年代に亘る礼の研究においても、中国固有の文化の復興から始めて世界の最新の科学を受容し、国民精神を形成することを主張した。

以上から、本論文は、戴季陶は中国革命の対象を帝国主義列強や軍閥、さらには、国民の精神と能力に関心を向けつづけたが、それは、共和政治の失敗、社会主義への盲信、列強による抑圧を中国国家にもたらした責任が、他ならない共和政治の主体である国民にあるという判断に基づいていたことを明らかにし得た。したがって、戴季陶の政治路線における思想的な変化について考察する場合、中国の国家の独立・発展を実現させるためには国民精神を形成しなければならないという思想が一貫して存在した、と捉えることが妥当であると言えよう。

ただし、本論文では史料不足のため、戴季陶が清末に日本留学から帰国して新聞記者として政治について発言していった動機と、国民精神の形成を主張する中で仏教と三民主義との関係をどのように論じたのか、さらに、「民族国際」構想の顛末、礼論の時期的発展、中印学会については深く検討することができなかった。今後の課題として引き続き取り組んで明らかにさせていきたい。

本論文を作成するに当たり、51種類の戴季陶の著作集(戴季陶とほかの人物の著作を収めた著作集を含む)や戴季陶の著作を収めた史料集を収集した。また、戴季陶の著作や講演記録(講演した事実だけを報道する記事を含む)を収めた、漢語・日本語・朝鮮語・英語・ドイツ語の書籍、新聞雑誌、政府档案を収集した。これらの史料の中には、「孫文主義之哲学的基礎」の2種類のテキスト、『国立中山大学日報』、『国立中山大学校報』(一時期『国立第一中山大学日報』、『国立第一中山大学校報』と改称)、『政治訓育』(中山大学)、『湖州』、『考試院月報』、『考試院公報』、『新亜細亜』など、従来知られなかったものが多数含まれている。そして、これらの史料を整理して「戴季陶活動略年譜・著作目録(初稿)」を作成し、本論文の附録とした。

また、「雑誌『新亜細亜』論説記事目録」(『神戸大学史学年報』第17号,2002年5月)を参考論文とする。漢語雑誌『新亜細亜』(1930年10月-1937年4月、1944年7月-8月)は、戴季陶が会長を務めた新亜細亜学会の機関誌であり、1930年代、1940年代中国における辺疆問題と東方民族の解放問題に関する理論、研究成果を見ていく上で重要な史料である。ところが、いかなる事情によるものか、『新亜細亜』を所蔵している研究機関、図書館が少ない上に、いずれも不揃いであり、そのために『新亜細亜』の全容を把握することは極めて困難であった。そこでひとまず、論説記事の目録を作成した次第である。

平成１７(２００５)年3月３１日　提出

参 考 論 文

雑誌『新亜細亜』論説記事目録

指導教員
(主)藤田 裕嗣 教授
(副)森 紀子 教授、緒形 康 助教授

大学院文化学研究科 社会文化専攻 地域社会文化論講座（教育研究分野：地域文化論）

９８４Ｄ７１５Ｈ
久保　純太郎

平成１７（２００５）年3月３１日　提出

戴季陶における「中国革命」とその思想
――中国・日本・アジアをめぐって――

指導教員

(主)藤田 裕嗣 教授

(副)森 紀子 教授、緒形 康 助教授

大学院文化学研究科 社会文化専攻 地域社会文化論講座（教育研究分野：地域文化論）

９８４Ｄ７１５Ｈ

久保　純太郎

目　次

序

はじめに　・・・

序

はじめに

20 世紀前半の中国においては、立憲と革命をめぐる政治体制の問題、三民主義と共産主義をめぐる政治や経済を含む国家全体の体制の問題、対日関係の問題、対ソヴィエト・ロシア(ソ連)関係の問題、国内の民族問題、新旧文化の問題など、今日まで議論の尽きないさまざまな問題が一度に噴出していた。そのような中で根本的な課題の一つと見なされたのは、国民形成、国家形成の求心力をどのように構築していくかということであった。

本論文は、中国国民党、中華民国国民政府の重要構成員の一人である戴季陶の対日外交路線、孫文の理論学説に対する解釈、アジア認識、中国辺疆認識を結び合わせて検討することにより、彼の政治路線の基盤となっていた、中国の国家の独立・発展を実現させるためには中国の国民精神(後述)を形成しなければならないという思想が、どのような過程を経て生まれ、発展していったかを明らかにすることを主題とする。

戴季陶、名は伝賢、字は季陶など、号は天仇、晩号は孝園、法名は不空・不動、筆名は散紅・泣民・思秋など。庚寅年(光緒十六年)十一月二十六日(1891 年 1 月 6 日)、四川省成都府漢州(民国期は広漢県)に生まれた。原籍は浙江省湖州府(民国期は呉興県)。1949 年 2 月 12 日、広東省広州市で没した。戴季陶はその生涯ほぼ全時期を通じて、日本政府の朝鮮政策と中国政策を批判し、中国における共和政治建設を追求し、また、西方に対する東方(中国を代表とする)の復興を追求し続け、その条件として、国民の意志や理念といった、ある国民をその国民たらしめるものとしての思想(本論文では「国民精神」と言うことにする)を重視し、その統一を図らなければならないとして、そのために、東方(中国)古来の利他の精神を復興させつつ、西方の人道や平等の思想を受容すべきであると訴えた。

戴季陶の国民精神形成の主張に着目し、彼の政治路線全体の本質を検討するのに際し、彼の対日外交路線、孫文の理論学説に対する解釈、アジア認識、中国辺疆認識を結び合わせて考察する必要があろう。また、戴季陶の政治路線は、彼を取り巻く諸状況の中で取り上げる必要がある。そこで、本論文の対象時期は、戴季陶の執筆活動の全時期に該当する 1910 年代から 1940 年代までとした。彼の執筆活動の全時期に該当する 1910 年代から 1940 年代までは、中華民国を成立させた辛亥革命(1911 年)、1920 年代の「北伐」(国民革命)が勃発しており、加えて、1930 年代には抗日戦争が、引き続いて 1940 年代後半には国共内戦が勃発し、中国の変動過程に大きな影響を与えた。フランス革命(1789 年)やロシア革命(1917 年)と異なり、権力や社会の変化という点において、中国の変動過程は長期に亘って進行した。本論文の題目に掲げた「中国革命」とは、このような諸状況の中で、20 世紀前半の中国が直面していた政治的独立の課題を解決しようとする長期の過程を表している。

第 1 節　先行研究

戴季陶の政治路線は時期によって変化したのかどうか、また、変化したとするならば、それは戦術(戦略)上の変化に過ぎなかったのか、それとも思想上の大きな変化を基礎とす

るものであったのかという問題に関しては、種々の解釈がなされてきた。

中華民国政府(国民政府、総統府)が中国大陸を統治していた1949年以前は、もっぱら、戴季陶の政治路線――孫文没(1925年3月)後における、戴季陶の政治活動や孫文の理論学説に対する理解――が論議の的となっていた。中国共産党員は、戴季陶が三民主義と共産主義を峻別し中国国民党主導の国民革命を主張し、国共合作と国民革命から中国共産党の勢力を排除しようとしている、と批判した。そして、戴季陶の政治活動や孫文解釈を批判するために、中国共産党の立場から彼の政治活動や孫文解釈を総称する語として「戴季陶主義」という語を生み出し、定着させていった。管見の限りでは、瞿秋白「中国国民革命与戴季陶主義」(1925年9月)[1]が初めて「戴季陶主義」の語を用いている。しかし、瞿秋白以前にすでに、戴季陶の孫文解釈や政治行動を批判する中国共産党員の論文が発表されている。惲代英「読『孫文主義之哲学的基礎』」(1925年8月8日)[2]、蕭楚女「国民革命与中国共産党」(1925年8月10日)[3]、陳独秀「給戴季陶的一封信」(1925年8月30日)[4]、施存統「評戴季陶先生的中国革命観」(1925年9月1日)[5]などがその代表的な例である。一方、中国国民党員では、孫鏡亜が、孫文の理論学説の哲学的基礎は民生であるとする戴季陶の解釈に異議を唱えた[6]。しかし、汪精衛[7]、邵元冲[8]らの主要党員は孫文の理論学説の淵源が中国固有の智仁勇にあるとする戴季陶の解釈を支持した。また、戴季陶の政治活動や孫文解釈の動機は国民革命を遂行することにあり、戴季陶の立場は中国国民党が右傾・左傾せず「正軌」を保つことが肝要だということを主張するものである、と理解する者も現れた[9]。

1949年(中華人民共和国成立)以降は、第一に、中国国民党史(台湾)あるいは中国共産党史(中国大陸)の立場から、戴季陶の政治路線の孫文没後における変化を無視するか、あるいは変化があったにしても戦術上の変化に過ぎないとする見方が広く認められる。台湾の

---

[1]秋白「中国国民革命与戴季陶主義」(嚮導週報社編『反戴季陶的国民革命観(一)』(嚮導週報社,1925年9月))。

[2]代英「読『孫文主義之哲学的基礎』」(『中国青年』第87期,1925年8月8日付)。

[3]抽玉「国民革命与中国共産党」1925年8月10日(原載不詳。中央党史研究室《蕭楚女文存》編輯組・広東革命歴史博物館編『蕭楚女文存』(北京:中共党史出版社,1998年7月)から転引)。

[4]独秀「給戴季陶的一封信」1925年8月30日(『嚮導』第129期-第130期,1925年9月11日付、18日付)。

[5]存統「評戴季陶先生的中国革命観」(『中国青年』第91・92期合刊,1925年9月1日付)。

戴季陶と施存統との関わり――施存統が上海の星期評論社(『星期評論』主筆は戴季陶)の「事務補助員」に就いたこと、戴季陶が施存統の東京留学を世話したこと、戴季陶が自著「孫文主義之哲学的基礎」の出版に際し施存統に意見を求めたこと、施存統による「戴季陶主義」批判、施存統が中山大学(校長(一時期委員長)は戴季陶)の政治訓育工作に参与したこと――については、石川禎浩「施存統と中国共産党」(京都『東方学報』第68冊,1996年3月)に詳しい。

[6]孫鏡亜は、三民主義の思想的基礎は博愛であると言う。『対於『孫文主義之哲学的基礎』之商榷』(上海:三民公司,1926年6月第三版)1頁。なお、張継がこの著書に序文を寄せている。

[7]戴季陶「孫文主義民生哲学系統表及説明」に附された汪精衛の文章(1925年5月21日付)(広州『革命週刊』第3期,1925年5月16日付)28頁。出版日は5月21日以降と考えられる。

[8]元冲「我們要做純粋的孫文主義的信徒」(『広州民国日報』1925年5月23日付)。邵元冲「読『国民革命与中国国民党』書後」(戴季陶『国民革命与中国国民党(上編)』(上海:季陶辦事処,1925年7(8?)月))。

[9]銭義璋「読了国民導報以後」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1925年8月25日付-28日付)。

陳天錫は戴季陶の思想の変化を無視する代表的な例である。彼は、戴季陶が一貫して三民主義を信奉し、孫文、中国国民党が率いる全民主義的な革命に従事したと述べている[10]。現在もなお、台湾の学術界においては、孫文の政治路線について種々の解釈が行われているものの、戴季陶の政治路線については陳天錫の上述のような解釈がほぼ定説とされている。また、中国大陸の学術界においても、戴季陶が中国国民党改組によって新たに定義された三民主義(連ソ・容共・扶助農工の「三大政策」実行を主旨とする「新三民主義」)を受容せず、反共を旨とする南京(後に重慶)国民政府、中国国民党(蒋介石を最重要な構成員とする)の政治理論を形成したという点では、陳天錫と同一の見方が一般的である。もっとも、戴季陶の政治路線に対する評価は、たとえば、台湾の李雲漢が「堅決反共的健将」、「国民党人反共的先駆」として戴季陶を称え[11]、中国大陸の鄭則民が「資産階級右派反共反人民」の「“新右派”的頭目」として戴季陶を批判する[12]ように、台湾と中国大陸の学術界で相反している。

なお欧米では、マーティン・ベーナル、そしてハーマン・マストとウィリアム・セイウェルが、伝統(保守)と近代を対立した概念として用い、辛亥革命前後から国民革命期における戴季陶の思想を「保守主義(conservatism)」[13]、「文化的民族主義(cultural

---

[10]陳天錫は、孫文の思想は連ソ・容共を旨とする中国国民党改組(1924 年 1 月)による影響をほとんど受けなかった、という見解を示している。『戴季陶先生的生平』(台北:台湾商務印書館,1968 年 5 月)21 頁、197-198 頁、200 頁、295 頁。

[11]李雲漢「戴季陶」(中華文化復興運動総会・王寿南主編『中国歴代思想家』23(台北:台湾商務印書館,1978 年初版、1999 年 10 月更新版)更新版 117 頁)。

近年の研究としては、王宗文による「孫文主義之哲学的基礎」の書評が発表されているだけである。「書評:戴季陶著「孫文主義之哲学的基礎」」(台北『国立台湾大学中山学術論叢』第 3 期,1982 年 12 月)。

[12]鄭則民「戴季陶」(朱信泉・厳如平主編『民国人物伝』第 4 巻(北京:中華書局,1984 年 3 月)125 頁)。

近年の研究では、唐文権が、辛亥革命前後から五四運動時期(1919 年-1920 年)までの戴季陶の政治路線が孫文の三民主義の範疇を超えなかったと言い、依然「戴季陶主義」を批判している。「前言」(唐文権・桑兵編『戴季陶集(1909-1920)』(武漢:華中師範大学出版社,1990 年 7 月)22-27 頁)。「戴季陶小伝」(桑兵・黄毅・唐文権編『戴季陶辛亥文集(1909-1913)』(香港:中文大学出版社,1991 年)ｘｘｘｖ頁-ｘｘｘix頁)。また賀淵が、戴季陶のマルクス主義理論に対する理解が不完全であったと言い、同じく「戴季陶主義」を批判している。『三民主義与中国政治』(北京:社会科学文献出版社,1995 年 2 月初版、1998 年 4 月第二版)。

近年の戴季陶研究は主に中国大陸から発表されている。劉利民「近 20 年来戴季陶研究綜述」(蘭州『甘粛社会科学』2003 年第 4 期)を参照のこと。

最近発表された戴季陶研究は各研究機関のオンライン検索システムを用いて調べることができるが、とくに中国大陸と台湾で発表された研究については、以下の目録から調べることもできる。

(ｉ)「戴季陶伝記資料目次」(朱伝誉主編『伝記資料　第一至第五輯総目』(天一出版社,出版年不詳))――1940 年代までの中国大陸、1950 年代から 1970 年代までの台湾で発表された研究

(ⅱ)「戴伝賢有関参考資料」(朱匯森主編『戴伝賢与現代中国』(新店:国史館,1989 年 1 月))――1950 年代から 1980 年代までの台湾で発表された研究

(ⅲ)復旦大学歴史系資料室編『辛亥以来人物伝記資料索引』(上海:上海辞書出版社,1990 年 12 月)――1950 年代から 1980 年代までの中国大陸と台湾で発表された研究

(ⅳ)上海図書館編『全国報刊索引　哲学社会科学版』

(ｖ)中国人民大学書報資料中心編『復印報刊資料　中国近代史』と同編『復印報刊資料　中国現代史』の巻末目録

[13]Bernal,Martin,“The Tzu-yu-tang and Tai Chi-t'ao:1912-1913”(*Modern Asian Studies*,Vol.1

nationalism)」[14]、欧米化や共産主義化と一線を画す近代化を提唱する「中国の保守的民族主義(Chinese conservative nationalism)」[15]として位置づけている。

1980 年以降の中国大陸では、かつて戴季陶が自らの著作の発表の場とした『建設』(上海の月刊誌)、『星期評論』(上海の週刊誌)、上海『民国日報』や、戴季陶の 1920 年以前の主要著作集[16]が公刊されるようになり、戴季陶研究にもこれらの新史料を利用した新しい見方が現れた。台湾の呂芳上は、五四運動時期の戴季陶は国民党(当時は中華革命党)系知識人の中でマルクス主義理論によく通じ、中国の労働運動の後進性(産業組織の幼稚さ、労働者階級の知識の低さ)を指摘し、即時的に階級闘争が実現することを期待せず、まずはマルクス主義理論や各国の労働運動・社会主義運動の経験に学び、穏健な労働運動を通して労働者が階級的自覚を高めることを求めていたことを明らかにし、当時の国民党系知識人の積極的な新思想摂取はその後の中国国民党改組、および中国国民党が主導権を握る形での国民革命の「再起」を促すことにつながった、と述べている[17]。中国大陸の郭聖福や陶季邑、日本の望月敏弘や湯本国穂は、五四運動時期の戴季陶が先駆的に中国の知識人にマルクス主義理論を紹介したことを論じ[18]、石川禎浩は、戴季陶が日本語のマルクス主義関連の文献を通じてマルクス主義理論に接近したことを明らかにしている[19]。緒形康は、「戴季陶主義」は中国国民党員が三民主義を信奉し、党員の自覚心を維持するためには、党内の異なる主義を信奉する者を「粛清」しなければならないということを意味した点で、当時の中国国民党右派の思想のレヴェルを超え、国共合作の根幹を揺さぶるような「破壊力」や「破壊性」を持っていたと論じている。また、緒形は陳独秀と瞿秋白による戴季陶の孫文解釈や政治行動に対する批判の言説を比較し、両者の見方の相違が後に中国共産党の政策遂行過程において陳独秀路線と瞿秋白路線の対立として現れたと指摘している[20]。韓国の白永瑞は、孫文没後における戴季陶の孫文解釈や政治行動の目的が反共ではなく、中国国民党が国民革命の主導権を保ち、ソ連・英国・日本との対等な関係を築くこと、そして、仁愛精神を体得した「真の三民主義信徒」からなる中国国民党(公)があらゆる社会勢力(私)を調整・教育・訓練し公へと変容させることにあったと整理している[21]。

No.2,April 1967).

[14]Mast,Herman Ⅲ and Saywell,William C., “Revolution Out of Tradition:The Political Ideology of Tai Chi-t'ao”(*Journal of Asian Studies*,Vol.34 No.1,November 1974).

[15]Saywell,William C., “Modernization without Modernity:Tai Chi-t'ao,a Conservative Nationalist”(*Journal of Asian and African Studies*,Vol.5 No.4,October 1970).
Mast,Herman Ⅲ, “Tai Chi-t'ao,Sunism and Marxism During the May Fourth Movement in Shanghai”(*Modern Asian Studies*,Vol.5 No.3,July 1971).

[16]前掲『戴季陶集』。前掲『戴季陶辛亥文集』。

[17]呂芳上『革命之再起』(台北:中央研究院近代史研究所,1989 年 4 月)。

[18]郭聖福「五四時期戴季陶対馬克思主義的介紹和研究」(上海『学術月刊』1990 年 9 月号)。陶季邑『中国近代民主革命派与社会主義思潮』(貴陽:貴州人民出版社,1997 年 12 月)。望月敏弘「五・四時期における戴季陶の政治主張に関する一考察」(小平『嘉悦女子短期大学研究論集』第 29 巻第 2 号,1986 年 12 月)。湯本国穂「五四運動状況と戴季陶の思想」(東京『現代中国』第 61 号,1987 年 6 月)。

[19]石川禎浩『中国共産党成立史』(東京:岩波書店,2001 年 4 月)。

[20]緒形康『危機のディスクール』(東京:新評論,1995 年 10 月)28-32 頁。

[21]白永瑞「戴季陶の国民革命論の構造的分析」青柳純一訳(神戸『孫文研究』第 11 号-第 12 号,1990

また、中国大陸の范小方・包東波・李娟麗、黎潔華・虞葦は、依然として「戴季陶主義」を批判する一方、戴季陶が 1930 年代から 1940 年代にかけての抗戦時期に辺疆建設、民族政策の展開の面で貢献したと述べている[22]。

第二に、戴季陶の政治路線における対日外交路線は時期ごとに戦術的な面で大きな転換を遂げたものの、思想的な面(動機)では全くあるいはほとんど変化しなかった、とする見方が存在する。日本在住の張玉萍と嵯峨隆の研究がその代表的な例である。

張玉萍は、戴季陶が「中国自強」を動機として戦術的に対日批判と中日提携を説いたと述べている(表a)[23]。しかし、張玉萍の研究では、対日外交路線における戦術的な面での変化の解明に重点が置かれ、思想的な面(「中国自強」という動機)が深く追究されてこなかった。

(表 a)張玉萍による分析

時期名称	時期	対日外交路線の特徴
留学時期	1909 年まで	「関心」を持つ。「認識・研究対象」と見なす。
辛亥革命期	1909 年-1912 年	「日本敵視論」
討袁運動期	1913 年-1916 年	前時期から「180 度転換」した「日中提携論」
護法運動期	1917 年-1918 年	「日本敵視論」と「日中提携論」を基礎にした「批判的提携論」
五四運動期	1919 年-1923 年	前時期の「批判と提携の対象をより明確化」した「対決・連合論」
国民革命期	1924 年-1928 年	留学時期からの日本との関わりを「総決算」した「幻滅的日本論」
国民革命後	1929-1949 年	日本の中国侵略という現実問題に対処するための「日本非(ママ)敵論」

また嵯峨隆は、戴季陶が日中戦争の勃発を回避して中国の近代化を優先的に推進することを動機として、やはり戦術的に対日批判と日中提携を説いていたと論じている(表b)[24]。

年 5 月、12 月)。

[22]近年、中国大陸の学術界における戴季陶研究の中で、彼の辺疆建設、民族政策に関するものが増えている。代表的なものが本文に挙げた、范小方・包東波・李娟麗『国民党理論家戴季陶』(鄭州:河南人民出版社,1992 年 5 月初版、1996 年 10 月第二版)第二版 334-340 頁と、黎潔華・虞葦『戴季陶伝』(広州:広東人民出版社,2003 年 6 月) 250-257 頁である。

後者の伝記は、黎潔華の「戴季陶在中山大学」(広州『中山大学学報(社会科学版)』1992 年第 4 期)、「戴季陶早期文化観初探」(『中山大学学報(社会科学版)』1997 年第 6 期)、「戴季陶与他的賢妻嬌妾」(南京『民国春秋』1998 年第 2 期)、「論戴季陶的民族主義」(『中山大学学報(社会科学版)』2001 年第 7 期)などを基礎としている。

また、台湾においても、戴季陶の辺疆建設、民族政策に対する評価は高い。例えば、前掲『戴季陶先生的生平』511-535 頁。姚誠「民国辺政史上的重要媒介人物――戴季陶」(台北『中国辺政』第 89 期,1985 年 3 月)。蒋武雄「戴伝賢先生対我国辺政之貢献」(前掲『戴伝賢与現代中国』)。

[23]張玉萍「戴季陶の日本観の研究」(東京大学大学院総合文化研究科博士論文,2001 年)。

この論文は、「辛亥期における戴季陶の日本認識(1909-1912 年)」(東京『中国研究月報』第 610 号,1998 年 12 月)、「討袁運動期における戴季陶の日本認識(1913-1916 年)」(東京『近きに在りて』第 36 号,1999 年 12 月)などを基礎としている。

[24]嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』(東京:東方書店,2003 年 7 月)。

この著書は、「国民革命時期における戴季陶の対外観について」(東京『近きに在りて』第 33 号,1998

しかし、嵯峨隆の研究にしても、対日外交路線における戦術的な面での変化の解明に重点が置かれ、思想的な面(日中戦争の勃発を回避して中国の近代化を優先的に推進する、という動機)が深く追究されてこなかった。

(表 b)嵯峨隆による分析

時期名称	時期	対日外交路線の特徴
初期	1910 年-1918 年初頭	批判的姿勢と日中提携論。批判的姿勢が「本来のもの」。
五四時期	1919 年-1920 年	日本の国家の侵略的本質を歴史的・文化的側面から「分析」し、その侵略的本質を支える政治構造の「変革」を求め、日本を含む帝国主義列強全体を批判。
第一次国共合作時期	1922 年-1925 年	イギリス主敵論。日本に対し「決して対決的な姿勢を取ることなく、アジアへの回帰」を主張。
国民革命時期	1925 年-1927 年	日本を中国内政の「国家建設の精神的モデル」、中国外交の「克服すべき対象」と位置づける。
満州事変以降	1931 年-1946 年	日本への「直接的な抵抗」より「内政的安定」の優先を主張。

一方、張玉萍と嵯峨隆の研究の長所は、戴季陶の執筆活動の全時期に該当する 1910 年代から 1940 年代までの著作(日本に関する著作、中国革命に関する著作など)を対象とし、後学の者に、戴季陶の対日外交路線の形成、発展を検討するには『日本論』[25]やそのほか数編の著作だけに依拠して彼の対日外交路線の全体を説明するには限界があること[26]を示唆していることである。

日本の学術界では、戴季陶への関心が日本認識、すなわち(ⅰ)『日本論』の内容分析を中心とした日本認識、(ⅱ)孫文の日本認識の異同、(ⅲ)五四運動時期の日本認識、の 3 点に集中していた。(ⅰ)については、竹内好[27]による『日本論』執筆の動機に対する解釈―

年 5 月)、「五四時期における戴季陶の対日観について――社会主義認識との関連で」(東京『東洋学報』第 82 巻第 2 号, 2000 年 9 月)、「国民革命時期における戴季陶の対日観について――『日本論』の再検討を通して」(慶應義塾大学『法学研究』第 75 巻第 1 号, 2002 年 1 月)、「満州事変の中での戴季陶――その対外観と現実との接点」(静岡県立大学『国際関係・比較文化研究』第 2 巻第 1 号, 2003 年 9 月)などを基礎としている。

[25]戴季陶『日本論』(上海:民智書局, 1928 年 4 月初版)。

[26]戴季陶の対日外交路線の形成、発展を検討するには『日本論』やそのほか数編の著作だけをもって彼の対日外交路線の全体を説明するには限界があると、桑兵・黄毅「《戴季陶文集》与戴季陶研究」(桑兵『孫中山的活動与思想』(広州:中山大学出版社, 2001 年 10 月))がすでに指摘している。この論文の日本語訳は、「戴季陶文集の編集状況について」田中比呂志訳(東京『近きに在りて』第 22 号, 1992 年 11 月)。

しかし、桑兵、黄毅は実際に、戴季陶の 1910 年代から 1940 年代までの対日外交路線を追究していない。

[27]竹内好と市川宏は、竹内が主宰する「中国の会」の機関誌『中国』に、『日本論』を翻訳、発表した。編集部(竹内好)訳(第 56 号、第 57 号)、市川宏訳(第 58 号-第 63 号)「戴季陶[の]『日本論』」(東京『中国』第 56 号-第 63 号, 1968 年 7 月-1969 年 2 月)。

また、竹内は『日本論』についての座談会を催し、識者に『日本論』についての論評を求めた。『中国』にはその座談会の記録と識者の評論が掲載されている。竹内好「戴季陶の日本論・はじめ

―田中義一内閣を批判し、日本人に日本の朝鮮や中国への「侵略」停止を勧告するというもの――が広く認められていて[28]、台湾の黄福慶[29]、中国(日本で博士学位を取得した)の兪慰剛[30]の見解もこれに近い。(ⅱ)については、山口一郎[31]、藤井昇三[32]、近藤邦康[33]、望月敏弘[34]、兪慰剛[35]の詳細な研究がある。(ⅲ)については、五四運動時期の戴季陶は日本の労働問題や社会運動に関心を寄せ、日中の労働者階級の連帯と日本を含む列強の諸政府や中国の軍閥からの解放を訴えたことを明らかにしている湯本国穂[36]の研究がある。

上述の張玉萍、嵯峨隆の研究は、これらの日本の学術界における戴季陶の日本認識に関する先行研究を踏まえ、深化させている。それゆえに、張玉萍、嵯峨隆の研究は、対日外交路線における思想的な面が深く追究されていないという短所があるにもかかわらず、戴季陶研究において土台としなければ前に進むことはできないような重要な研究である。

また、董世奎は、戴季陶は1928年4月に『日本論』を出版し、日本の対外侵出が日本国民の思想や理念によって規定された日本国民の意志の現れであり、日本の発展の延長線上に位置するという考え(董世奎は「意志論」と言う)を展開して、近代日本の対外拡張の道

に」(『中国』第56号,1968年7月)、今村与志雄・小松茂夫・関寛治・山口一郎・竹内好・橋川文三「戴季陶『日本論』をめぐって」(『中国』第62号,1969年1月)、松田道雄「私たちの罪はふかい」・市井三郎「歴史と人生のパラドックス」・葦津珍彦「書いてないことの意味を」・色川大吉「民族再生の痛切な叫び」(『中国』第64号,1969年3月)、村上一郎「哀しいかな海上の三山」・関戸嘉光「私の答案」(『中国』第65号,1969年4月)。

竹内の『日本論』についての評論としては、ほかに「明治維新と中国革命」1967年(『竹内好全集』第4巻(東京:筑摩書房,1980年11月))、「中国近代革命の進展と日中関係」1968年(前掲『竹内好全集』第4巻)、「1968年の読書」(東京『みすず』1969年2月号)、「中国と日本の歴史――戴季陶の『日本論』」(東京『草の実』第143号,1969年4月)、「戴季陶の『日本論』」(原題「わが痛憤の記――戴季陶の『日本論』と日中友好への道」1969年4月)(戴季陶『日本論』市川宏訳(東京:社会思想社,1972年3月))、「人間の解放と部落解放運動」1970年(前掲『竹内好全集』第8巻,1980年10月)、「わが回想――毛沢東の思想」1975年(前掲『竹内好全集』第13巻,1981年9月)がある。

[28]董世奎「戴季陶『日本論』の構造および文体」(東京『中国研究月報』第670号,2003年12月)16頁、が指摘している。

[29]黄福慶「論中国人的日本観」(台北『中央研究院近代史研究所集刊』第9期,1980年7月)。

[30]兪慰剛の「戴季陶『日本論』の研究」(新潟大学大学院現代社会文化研究科博士論文,1997年11月)、「関於戴季陶日本観的変化――従《我的日本観》到《日本論》的再考察」(古厩忠夫教授還暦紀念論文集編輯委員会編『中日関係多維透視』(香港:香港社会科学出版社,2002年11月))。

前者の博士論文は、「戴季陶「わが日本観」から『日本論』へ」(新潟大学『環日本海研究年報』第3号,1996年3月)、「戴季陶と日本」(東京『東瀛求索』第8号,1996年8月)、「孫文の日本観・アジア観と戴季陶」(新潟大学『現代社会文化研究』第6号,1996年11月)、「戴季陶の日本人論――『日本論』を中心にして」(『現代社会文化研究』第7号,1997年2月)、「中国人の武士道論――戴季陶の『日本論』を中心にして」(『埼玉大学紀要(教養学部)』第34巻第2号,1998年)、「抗日戦争期における戴季陶の日本観について」(『東瀛求索』第10号,1999年3月)などを基礎としている。

[31]山口一郎『近代中国対日観の研究』(東京:アジア経済研究所,1970年9月)。

[32]藤井昇三「中国人の日本観」(東京『社会科学討究』第20巻第2･3号合刊,1975年3月)。

[33]近藤邦康「1930年代中国における抗日の思想」(東京大学社会科学研究所「ファシズムと民主主義」研究会編『運動と抵抗』下(東京:東京大学出版会,1980年3月))。

[34]望月敏弘「中国国民党の日本観」(宇野重昭・天児慧編『20世紀の中国』(東京:東京大学出版会,1994年3月))。

[35]前掲「孫文の日本観・アジア観と戴季陶」。

[36]湯本国穂「五四運動状況における戴季陶」(『千葉大学教養部研究報告』B-19,1986年11月)。

程を解明しようとした、と指摘している[37]。董世奎は『日本論』の内容分析を中心とした日本認識に関する研究であり、戴季陶の執筆活動の全時期の思想を対象としたものではない。しかし私は、董世奎の指摘する、国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという戴季陶の見方は、彼の執筆活動の全時期に見られると考える。本論文は、董世奎の指摘(戴季陶は国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方を持っていたこと)をふまえて発展させたものである。

第２節　研究視角と編別構成

戴季陶の政治路線(対日外交路線を含む)が、その時々の情況に応じて戦術的な面で変化したことはこれまでの研究によって明らかになったが、その根本にある思想的な変化については考察がなお不十分である。それは次の理由による。

一、従来、戴季陶が政治路線において一貫して三民主義を信奉し、孫文が主導する革命に従事したということと、対日外交路線において「中国自強」、中日戦争の勃発回避、中国の近代化の推進を動機として戦術的に時に対日批判、時に中日提携を説いたことを、総合的に把握して論じた研究はほとんどなかった。嵯峨隆にしても、辛亥革命直前の戴季陶の対日外交路線について､「これが中国革命の達成という課題との関連で考えられていたかどうかは、また別の問題である」[38]と述べるに止めている。

二、また従来、戴季陶が 1931 年 12 月に中国国民党中央執行委員会政治会議特種外交委員会委員長を辞任した後、1930 年代、1940 年代に亘り、わずかにしか対日外交について論じなくなったことと、その同時期に頻繁に中国辺疆やインドについて論じるようになったことを、関連させて論じる研究もほとんどなかった。嵯峨隆にしても、戴季陶の特種外交委員会委員長時期の対日外交路線を詳細に説明したが、戴季陶の委員長辞任以降、1930 年代、1940 年代における言動を詳細に論じていない。

私は、戴季陶の政治路線における思想を考察した結果、中国の国家の独立・発展を実現させるためには中国の国民精神を形成しなければならない、という彼の思想は、生涯に亘って変化しなかったと考える。それは次の理由による。

戴季陶は、辛亥革命前後から最晩年の 1940 年代末まで一貫して、中国革命は中国国民が主導権を執って進めるべきこと、日本政府の中国政策は日本国民の運動によって転換されるべきこと、朝鮮独立は朝鮮民族自身が運動すべきことを主張し続けたのであるが、このような一貫した主張は、戴季陶が国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方を持ち続けていたことにより可能であった。すなわち、戴季陶は辛亥革命前後から中国の国民精神を形成する必要性を認識し、その考えを晩年まで堅持し、そのような考えに立脚して、1910 年代から 1930 年代にかけて対日外交方針を組み立て、1920 年代を中心に孫文の理論学説を解釈し、1930 年代、1940 年代には中国辺疆やインドについて論じた、と考えられる。

以上述べてきたことを前提として、本論文では次のような問題について具体的に検討す

[37]前掲董世奎「戴季陶『日本論』の構造および文体」。
[38]前掲『戴季陶の対日観と中国革命』15 頁。

る。

第一は、戴季陶は中国の国民精神を形成することと対日外交路線を組み立てることをどのように結びつけていたのかという問題である。従来、このように戴季陶の国民精神についての思想と対日外交路線を関連させて本格的に論じた研究はなかった。戴季陶は辛亥革命の失敗を分析し、失敗の原因について隣国日本の中国政策がその外因であり、また、中国の国民精神の不在が内因であると結論づけ、革命の成就のために日本国民の道徳精神を参考にし、その長所を取り入れようとした、と考えられる。そこで、第一章「対日批判に見る国民精神論」では、辛亥革命前後から 1940 年代末までの戴季陶の対日批判を対象とするが、特に激烈な対日批判を展開した、日本の韓国併合(1910 年)、五四運動時期(1919 年-1920 年)、柳条湖事件(1931 年)の各時期の対日批判を取り上げて、戴季陶が国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方をとるようになった経緯を説明し、このような見方が彼の対日批判にどのように反映されたのか、さらには、そのような見解は中国や日本の国民にどのように受け止められたかを明らかにする。

第二は、戴季陶は国民精神形成の課題と孫文の理論学説解釈とをどのように結びつけていたのかという問題である。戴季陶は五四運動の中で社会変動に対応して新しい倫理構築を主張し、人道主義と社会主義を支持したが、1924 年になって三民主義を本格的に支持するようになり、儒教の徳目である仁愛精神を備えた中国国民党員が中国国民を訓練し、まず中国革命を成就させ次第にアジアの民族解放運動へ拡大させるべきであると主張した。そして、孫文の理論学説が東方(中国)文化の復興と西方文化の受容を意味していると解釈し、とくに中国文化の復興を強調した。こうして、戴季陶は中国の国民精神を形成するに当たり中国固有の思想道徳の徳目(とくに儒教の仁愛精神)に着眼したものと考えられる[39]。そこで、第二章「孫文理論学説に対する解釈」では、このような、1919 年から 1926 年までの、戴季陶が孫文の理論学説を研究し始めてから、孫文の理論学説における中国文化の復興を強調するようになるまでの過程を、とくに戴季陶の中国国民党員論の展開に重点を置いて、検討を加える。

第三は、戴季陶は国民精神形成の課題と中国辺疆建設の問題とをどのように結びつけていたのかという問題である。戴季陶は南京国民政府(1927 年設立)の重要構成員となる前後から、孫文の大アジア主義と「物質建設(産業計画)」に沿った辺疆建設――とくに移民を通じて中国の国民精神を形成すること――の必要性を認識し、その辺疆建設に際しては三民主義や仏教を中国の国民精神に据えることを提唱していた。そこで、第三章「大アジア主義と辺疆建設」では、戴季陶の「民族国際」構想、1927 年の訪日を取り上げ、戴季陶が孫文の大アジア主義をどのように解釈したかを明らかにし、さらに、新亜細亜学会の活動、仏教認識を取り上げ、辺疆建設に関する見解において移民問題をどのように論じていたかを検討する。最後に、戴季陶の礼認識を取り上げることによって、戴季陶は中国固有の文化をどのようにとらえ、それを現実にどう生かそうとしていたのかという問題を取り上げる。ただし残された課題もある。一つは、戴季陶が三民主義や仏教を中国の国民精神の基

[39]先行研究では、仁愛精神そのものを受容したとする見解(台湾、中国大陸における研究全般)と、国民革命遂行における中国国民党の排他的指導性を主張するために便宜主義的に仁愛精神を強調したとする見解(白永瑞、嵯峨隆ら)がある。後者は前掲白永瑞「戴季陶の国民革命論の構造的分析」第 12 号,30-34 頁、前掲嵯峨隆『戴季陶の対日観と中国革命』70 頁。

盤に据えるに当たり、三民主義と仏教との関係[40]をどのように扱ったのか、というものである。もう一つは、戴季陶が 1940 年代に関与した中印学会についてである。いずれの課題も、現段階では史料不足のために十分な検討を行うことができず、今後の課題とせざるを得なかった。

第３節　史料

本論文を執筆するに当たり、51 種類の戴季陶の著作集(戴季陶とほかの人物の著作を収めた著作集を含む)や戴季陶の著作を収めた史料集を収集した。また、戴季陶の著作や講演記録(講演した事実だけを報道する記事を含む)を収めた、漢語・日本語・朝鮮語・英語・ドイツ語の書籍、新聞雑誌、政府档案を収集した(巻末の「参考文献一覧」を参照のこと)。これらの史料の中には、『孫文主義之哲学的基礎』の 2 種類のテキスト、『国立中山大学日報』、『国立中山大学校報』(一時期『国立第一中山大学日報』、『国立第一中山大学校報』と改称)、『政治訓育』(中山大学)、『湖州』、『考試院月報』、『考試院公報』、『新亜細亜』など、従来知られなかったものが多数含まれている。

そして、これらの史料を整理して「戴季陶活動略年譜・著作目録」を作成し、本論文の附録とした。

なお、史料の引用に際しては、次のような基準に従った。

一、原則として日本語の常用漢字で新字体を採用している漢字は、新字体を採用する。そのほか、数字や外国人の名前などは原文のままとする。

二、仮名の清濁・半濁、ひらがなとカタカナの表記については、両者が混用されている場合を含めて原文のままとする。

三、引用文の省略は「……」で表す。

四、補訂のために施す説明は〈*　〉の中に記す。

当時の日本側の用いた地名・組織名・事件名(「満洲」、「臨時政府」、「日韓併合」など)は、呼称自体が政治的な意図をはらんでいることに注意を要する。ただし、現在の学問的状況ではすでにその政治的な意図に関する研究が蓄積されている上に、すべてに「　」を用いると煩瑣になるので、「　」は原則として省略する。

---

[40]戴季陶は仏教の衆生済度に体現される仁愛精神と三民主義の救国救民主義の共通性を強調した。荘宏誼「戴季陶与仏教」(台北『中国歴史学会史学集刊』第 15 期, 1983 年 5 月)364-365 頁。前掲『国民党理論家戴季陶』第二版 348-349 頁。前掲『戴季陶伝』298-299 頁。

また、戴季陶らが出版した『新亜細亜』は「創刊宣言」において「亜細亜民族は亜細亜有色人種の復興の観点から堅く三民主義を信奉(原文は「信仰」)しなくてはならない」と謳い、三民主義に基づくアジア民族の自決を主張した。「亜細亜之将来――創刊宣言」(上海『新亜細亜』創刊号, 1930 年 10 月)。

第一章　対日批判に見る国民精神論

本章では、戴季陶が国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方をとるようになった経緯を説明し、このような見方が彼の対日批判にどのように反映されたのか、さらには、そのような見解は中国や日本の国民にどのように受け止められたかを明らかにする。

第１節　日本の韓国併合

１．早期の経歴

戴季陶は 1891 年 1 月 6 日、四川省成都府漢州(民国期は広漢県)に生まれた。12 歳の冬に州試、府試に合格したものの、院試で落第し[1]、この時点で官職を求めることを断念した(彼は留学から帰国した後一時期官職に就くのだが。後述)。翌年から、成都の東游予備学校[2]、客籍学堂高等科[3]、華英学堂に就学し、さらに、日本人教習服部操(東文学堂)や小西三七(客籍学堂)から日本語の訓練を受けた[4]。15 歳もしくは 16 歳の時、すなわち 1904 年から 1906 年の間に、漢州から日本に渡った[5]。その後 1907 年まで、戴季陶の行動は管見の限りでは定かではない[6]。1907 年(丁未年)の春から一時期、東京の振武学校に在学し[7]、同年、東京の(専門学校令による)

---

[1]「記少時事」1944 年中秋前十日(『戴季陶先生文存』599 頁)。「12 歳の冬」とは、12 歳が数え歳であると推定して、辛丑年の冬(1901 年末から 1902 年初にかけて)のことと考える。

[2]成都には省内の生員の日本留学志望者を対象とした東文学堂という学校が設置されていた。ところが、学堂の定員以上に入学希望者が多いため、徐炯(子休)は東游予備学校を創設し、生員であるなしにかかわらず留学志望者を受け入れた。「余之読書記」1933 年 3 月(南京『新亜細亜』第 5 巻第 4 期,1933 年 4 月)。

[3]当時、省内の官立学校は外省出身の学生を受け入れなかったため、外省出身者有志は自分たちの子弟を受け入れる客籍学堂中学・高等科を設立した。前掲「余之読書記」。

戴季陶の祖先は清朝乾隆帝の代に、浙江省湖州府(民国期は呉興県)から四川省に移った。「致鍾福長甥書」1937 年 3 月 6 日(『戴季陶先生文存』1572 頁)。戴氏は外省出身者と見なされていたようである。

[4]前掲「余之読書記」。

[5]前掲「記少時事」には 15 歳(599 頁)、「先母行略」には 16 歳と見える。「先母行略」1929 年 3 月(『戴季陶先生文存』1346 頁)。15 歳、16 歳が数え歳であると推定して、それぞれ甲辰年(1904 年から 1905 年にかけて)、乙巳年(1905 年から 1906 年にかけて)のことと考える。

[6]乙巳年から丁未年(1907 年から 1908 年にかけて)まで「某師範学校」に就学したと述べる伝記が存在するだけである。陳天錫『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊続編第 43 輯 421,1977 年 6 月影印)9 頁、11-12 頁。現在、このことを裏づける史料を得られていない。

[7]戴季陶は「日本の陸軍士官学校に留学した時、総統<*蒋介石>と一緒であった」と述べているが、台湾の陳天錫は陸軍士官学校を振武学校に訂正している。陽春暄記「総理行誼演講詞」1942 年 1 月 19 日(『戴季陶先生文存三続編』120 頁、139 頁)。

蒋介石は 1907 年春から 1909 年冬まで振武学校に就学していたことが分かっている(中国

日本大学専門部法律科(法科)[8]に入学した。1908年(戊申年)の秋、日本大学の留学生同学会会長に選出され[9]、翌年退学した[10]。

以上から、戴季陶の日本留学時期は1904年～1906年の間から1909年まで、期間は4年ないし6年であったと言える。戴季陶が留学の間に修めた学問のうち、法律学に関して、彼はとりわけ国民の精神が国家を形成するという考え方に関心を抱いていたことが、留学から帰国後、蘇州の官立「江蘇自治研究所」(後述)で行った講義より推察できる[11]。

彼の講義によると、国家は「国地」、「国民」、「権力」、「法律」により成立する。「国地」は国土のことである。「国民」は「国地」内の「常住不遊移者」、「常住一定之人」を指す。そして、「国民」である各個人は「智識」、「理想」、「判断」、「感触」、「情欲」の源泉である「自由意力」に基づいて活動することができる。個人は「自由活動」の中で、別の個人と「同姓」、「親類」、「同郷」、「同学」、「同僚」、「友

第二歴史档案館編『蒋介石年譜初稿』(北京:档案出版社,1992年12月)14-16頁)ので、私は陳天錫による訂正が妥当であると考える。

[8]日本大学専門部法律科の修業年限は3ヶ年(ただし1906年4月の学則改正により、修業が3ヶ年を満たなくとも、所定数の科目の試験に合格すると卒業試験を受けることができるという科目制度が採用された)、4月1日始業、3月31日終業であった。専門部法律科では、「憲法」、「刑法」、「行政法」、「民法」、「商法」、「民事訴訟法」、「刑事訴訟法」、「国際公法」、「国際私法」、「経済学」、「財政学」、「法学通論」、「羅馬法(ローマ法)」、「擬律擬判」、「法学実習」、「警察監獄学」、「法理学」、「論理学」、「外国語(英語・ドイツ語・フランス語)」が開講され、筧克彦、美濃部達吉、寺尾亨、戸水寛人などが講師を務めていた。日本大学編『日本大学七十年略史』(東京:日本大学,1959年10月)118-119頁、127-128頁。

史料の限界により、各講師がいずれの講義を担当したか、そして、戴季陶がいずれの講義を受けたかは不詳である。ただし、戴季陶は筧克彦が担当した憲法学の講義を受けたことが分かっている。戴季陶は「以前、私の先生で、筧克彦という国法学の専門家がいた。彼の学問は確かに極めて広く深かった。しかも、以前、彼が私たちに憲法学を講義していた頃は、彼の思想は確かに極めて進歩的であった」。「私自身は、思想的にかれから多くのものを学んだ。そのころのかれの法理論は、法文ばかり重視して理論を軽視する当時の日本の法学界において、あきらかに革命的色彩を帯びるものであった」と記している。季陶「我的日本観」(上海『建設』第1巻第1号,1919年8月)3-4頁。

[9]謝健『謝鋳陳回憶録』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊第91輯909,1973年5月影印)27頁。

[10]戴季陶と同級生であった謝健によると、丁未年(1907年)の秋頃に日本大学専門部法律科に入学(?)し、戴季陶と知り合った。そして明治42年(1909年)、留学費用が底をついたため「卒業せずに」帰国する戴季陶を見送った、という。前掲『謝鋳陳回憶録』24-25頁、28頁。

ちなみに、興亜院政務部編『日本留学中華民国人名調』(東京:興亜院,1940年10月)には、日本大学専門部法律科の卒業生ではなく推薦校友として「戴天仇」の名が見える(629頁)。戴天仇は戴季陶の筆名である。このことは戴季陶が日本大学専門部法律科を卒業しなかったことを示している。

[11]戴季陶が江蘇自治研究所で「欽定憲法大綱」(1908年8月公布)について講義した時のノート(未完)が、1909年末から『江蘇自治公報』に掲載されている。「憲法綱要」(上海商務印書館出版,上海蘇属地方自治籌辦処印行『江蘇自治公報』第8-15期,1909年12月2日付-1910年3月1日付)(『戴季陶辛亥文集』1-28頁)。

この講義のノートには、戴季陶が受講した筧克彦の著作などが引用されている。戴季陶は日本大学で受講し理解した内容を江蘇自治研究所で講義した、と考えられる。

誼」などの関係を通じて結合し、「団体」を作る。さまざまな「団体」はさらに結合して国家を成立させる。また、個人の「自由意力」が結合して「合成意力」、「社会心理」と作り、国家の「権力」(対外的・対内的に自国の存在を認めさせる権力である「自主権」と、「国地」内の事物全体を強制し支配する権力である「統治権」)と「法律」を生み出す。「権力」と「法律」は国家成立の「精神的要素」である。「人は国家の根本である」[12]、とする。

このように戴季陶は、個人の活動が国家を成立させ、個人の精神が法律を作り、国家成立の要素となる、と認識していた[13]。

また、彼は留学の間に、日本のことを詳細かつ全面的に知ったわけではないが、おおよそのことを理解したという[14]。実に、日本語の新聞を音読し、徳富蘆花『自然と人生』(1900 年)、『徒然草』、『枕草子』、近古の詩歌を暗誦できるようになるまで熟読し、日本の「漢学者の著作」を多読するなどして日本語の訓練に励んだ[15]。そして積極的に日本人と交流し日本語会話の能力を伸ばした[16]。また、東京の中国人留学生が組織した新派の劇団「春柳社」に出入りした[17]。さらに、「ひじょうに多く」の朝鮮人と交流した[18]。例えば、韓国政府から政治犯に指定されていた僧侶の金永基[19]、在東京朝鮮人留学生の趙素昂[20]などである。また、李姓の韓国皇族

---

[12]前掲「憲法綱要」(『戴季陶辛亥文集』1-6 頁)。

[13]ちなみに、戴季陶は講義の中で、自分はルソーの社会契約論をとらず、国家と個人の関係は絶対的関係・非相対的関係であり国家の成立要素として契約を挙げることは当たらないと述べている。前掲「憲法綱要」(『戴季陶辛亥文集』2 頁)。

[14]天仇「日本人之気質」(上海『天鐸報』1910 年 10 月 17 日付)(『戴季陶辛亥文集』177 頁)。

[15]前掲「余之読書記」。

また、散紅という筆名を用いて「散文」を執筆し、日本の新聞に投稿したという。謝健「戴季陶先生逝世二週年紀念献詞」(『戴季陶先生文存三続編』295 頁)。現時点ではその散文を確認できていない。

末永節の記録によると、戴季陶は酒宴の席上、興に至るとサノサ節(人は武士　気概は高山彦九郎　京の三条の橋の上　遥かに皇居を(ネエ)伏し拝み　落つる涙は鴨の水(アサノサ))を謡い満座の拍手を得たという。前掲「座談会　日本外交の岐路――戴季陶『日本論』をめぐって」15-16 頁の竹内好の発言。

[16]戴季陶が日本大学就学時期に寄宿していた松浜館(東京麹町)は日本人専用の旅館であった。松浜館の主人は、戴季陶が日本語に長けているので、戴季陶の入居を許したという。また、戴季陶は日本大学の留学生同学会を設立するにあたって、中国人留学生を代表して大学当局と交渉したという。前掲『謝鋳陳回憶録』25 頁、27 頁。

[17]戴季陶は春柳社社員ではなかったが、社員とともに演劇に関する問題を議論し、時には社員に替わり台本に修改を施したという。「芸術的目的在生死人而肉白骨講詞」1929 年 7 月 4 日(『戴季陶先生文存』924 頁)。

[18]天仇「天仇叢話」(上海『民権報』1912 年 4 月 1 日付、7 日付、28 日付)(『戴季陶辛亥文集』730 頁)。

[19]前掲「天仇叢話」730 頁。

[20]趙素昂、1887 年京畿道坡州生。成均館に就学。1904 年から皇室派遣の留学生として日本に渡る。東京府立第一中学、明治大学法学部に就学。在京朝鮮人留学生団体の「共修学会」評議員、「大韓興学会」会報主筆、「留学生親睦会」初代会長に就く。留学時期に宮崎滔天『三十三年の夢』の漢語訳版――黄中黄(章士釗)訳『孫逸仙(大革命家孫逸仙)』――を読み、中国革命に関心を持ち始める。1920 年代末には三均主義を掲げて朝鮮独立を主張する。

趙素昂は朝鮮人留学生団体の組織的中心人物であり、戴季陶は日本大学の留学生同学会

の女性と婚約したが破約に終わったという逸話もある[21]。

一方、戴季陶は中国人留学生の政治活動とは距離をとっていたようである[22]。帰国後(1913 年 5 月)、戴季陶は同時期に留学していた中国人学生の内、政治学や法律学を科学として捉えず立身出世のための道具と見なした者を、彼らの「人格の卑劣さ、品性の低さ、思想の汚さは想像するに難くない」と批判している[23]。

このように、戴季陶は日本留学においては、真剣に日本語の習得や法律学の修得、演劇に没入し、政治活動と縁遠いものであったが、帰国後しばらくして、言論を通じてさかんに政治批判を行っていった。

戴季陶が政治に関する言論活動を行うに至った契機は、おそらく生計を立てるためであっただろう。彼は 1909 年、日本大学専門部法律科を中途退学し、「日金八角(80 銭か?)」を持って身寄りや頼りのない上海に帰国した[24]。上海では数ヶ月間張俊生から生活の援助を受け[25]、同年、蘇州の官立「江蘇自治研究所」(上海蘇属地方自治籌辦処)の教職に就き[26]、清朝の官吏として生計を立てたのである。しかし

会長であったから、東京で朝鮮人と中国人の留学生団体が交流する中で知り合いになったと考えられる。戴季陶と趙素昻は 1908 年 10 月 25 日に初めて知り合い、趙素昻は戴季陶の文才を高く評価していたという。裴京漢『従韓国看的中華民国史』(北京:社会科学文献出版社,2004 年 1 月)64-69 頁。

[21]婚約直後、女性は戴季陶の前から姿を消した。戴季陶はこのことをほとんど語らなかったという。謝健は、「政治上の関係」から第三者が彼女を戴季陶から引き離したのだろう、と推測している。前掲『謝鋳陳回憶録』26 頁。

後年、戴季陶は一度だけこのことについて述べている。「革命的知識与革命的工作講詞」1926 年 11 月-12 月 2 日の間(『革命先烈先進詩文選集』第 4 冊,527 頁)。

> 私は世界の革命家とよく交流し、世界各国の革命の事情を実につねづね気にかけているが、朝鮮の革命に対して特別に関心を持っている。これは私が初めて婚約した相手が朝鮮人であったからだ……

[22]管見の限り、戴季陶が日本留学時期に立憲(改良)や革命を論じたことを示す史料を確認できない。また、戴季陶を会長とする日本大学の留学生同学会と中国人留学生の政治活動との関係を示唆する史料も確認できない。

戴季陶は「東京で同盟会が成立した時……同盟会の同志に対する」孫文の演説を「初めて」聴いたと述べている。前掲「総理行誼演講詞」118 頁。しかし、戴季陶は 1911 年半に英領ペナンで中国同盟会に入会したことをふまえると、日本留学時期に中国同盟会と直接的な繋がりがあったとは考えがたい。

なお、戴季陶は東京で発行された中国同盟会の機関誌『民報』に寄付金を出し、投稿したという説がある。徐鰲潤「戴伝賢対『民族国際』的推行与貢献」(中華民国史専題第一届討論会秘書処編『中華民国史専題論文集　第一届討論会』(新店:国史館,1992 年 12 月)249-250 頁、280 頁。徐論文によると、戴季陶は「西川漢使」、「不共天」(以上第 17 号,1907 年 10 月 25 日付)、「我亦漢民」(第 24 号,1908 年 10 月 10 日付)の変名で計 16 元(16 円?)を寄付し(当時『民報』1 部の定価は 2 角(20 銭?)である)、闕名「仇一姓不仇一族論」(第 19 号,1908 年 2 月 25 日付)を執筆したという。しかし私はこのことに関する確たる傍証を得られていないので、注記に止めておく。

[23]天仇「愛之真理」(上海『民権報』1913 年 5 月 20 日付-6 月 1 日付)(『戴季陶辛亥文集』1490 頁)。

[24]前掲「致鍾福長甥書」1572 頁。

[25]「写八覚経過及目的講詞」1926 年 7 月-9 月(『革命先烈先進詩文選集』第 4 冊,565 頁)。

[26]前掲「余之読書記」。前掲「記少時事」599 頁。前掲「致鍾福長甥書」1572 頁。散紅「近世之国民活動」(上海『中外日報』1910 年 8 月 21 日付)(『戴季陶辛亥文集』101 頁)。

約「一年」後、周りの研究所員の讒言により教職を解かれたという。戴季陶は蘇州から上海に行き、1910 年 8 月、中外日報記者となり、翌 9 月、俸給のよい天鐸報[27]記者に転じ、ほどなく編集主任に抜擢された。また天鐸報に勤めた時期に『民立報』にも泣民の筆名で寄稿した。この時期の戴季陶の活動ぶりは、彼が天鐸報記者時期に用いた筆名「天仇」を取って、「天仇時代」と賞されるほど際立ったものであった[28]。当時の戴季陶の著作を見る限りにおいては、彼は新聞記者の職に就いた後、研究所で行った講義の提綱を新聞記事に転用して国民精神形成の重要性を論ずる一方[29]、詩や小説[30]、文学評論を執筆したり、南社[31]や劇団「新舞台」[32]の文芸活動に参加したりしている。

戴季陶は研究所を解職され収入がなくなり、生計を立てるために、帰国直後上海のツテを頼って新聞記者となり、趣味の文学を楽しみながら、徐々に新聞記者としての才能を開花させ、清朝の悪政への義憤と研究所を解職させられたことに対する清朝への私怨とを清朝打倒の筆鋒に込めていったというのが実態であろう。この点に関しては、今後さらに関連史料を収集し分析することで明らかにしていきたい。

２．国民精神論の形成

1909 年、戴季陶は帰国後、中国における外国列強の侵入、国民の疲弊、政治の腐敗、経済・産業の停滞を問題視した。彼は清朝の憲政運動が一部の人間のものであり、国民全体の意志に基づいたものでないと批判し[33]、国民が「実業団体」や「自治団体」を設立し、民意を集約させる必要性を訴え、フランス人権宣言を取り上げ、

---

[27]『天鐸報』は 1910 年 3 月 11 日(宣統二年二月初一日)に創刊され、1913 年 3 月に停刊される。発行者は元浙江省諮議局議長の湯寿潜(蟄仙)、後に陳芷蘭(止瀾とする史料がある)が引き継ぐ。経理は陳訓正(陳布雷実兄)。洪允祥(仏矢)、李懐霜、戴季陶、陳布雷、馮開、周浩などが記者を務めた。当初の方針は「憲政を促進し、外国事情を推究し、実業を提倡し、人民の苦しみを公に伝える」というものであり、広州黄花崗起義(1911 年 4 月)後、革命支持の主張を明らかにする。民国時期には袁世凱政権を批判する。史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』(福州:福建人民出版社,1991 年 2 月)71-72 頁。王檜林、朱漢国主編『中国報刊辞典』(太原:書海出版社,1992 年 6 月)45 頁。陳布雷『陳布雷回憶録』(台南:王家出版社,1989 年 10 月)73 頁、75-77 頁。

[28]陳天錫以後の諸研究は、戴季陶は政治や世界情勢を分析して簡明な文章で評論するという新聞記者としての才能を備えていた、と評価する。

[29]散紅「近世之国民活動」(上海『中外日報』1910 年 8 月 21 日付)(『戴季陶辛亥文集』101-105 頁)。戴季陶「民国政治論」(上海『民権報』1913 年 2 月 10 日付)(『戴季陶辛亥文集』1370-1400 頁)。

[30]戴季陶は、鴛鴦蝴蝶派(上海を中心に活動する通俗文学グループ)の呉双熱や徐天嘯と親しかったとされる。洛生「戴季陶輓呉双熱」(香港『星島日報』1965 年 10 月 15 日付)。

[31]戴季陶は 1911 年 1 月 25 日から 2 月 18 日の間に南社の入社書に記入し、入社している。管見の限り、戴季陶の入社書番号は 115 番(記入日不詳)である。記入日が明白な 115 番前後付近の入社書は、111 番(陳子范、1911 年 1 月 25 日)、125 番(陳其美、2 月 18 日)である。柳無忌編『南社紀略』(上海:上海人民出版社,1983 年 4 月)211-212 頁、220 頁、229 頁。楊天石、王学荘編『南社史長編』(北京:中国人民大学出版社,1995 年 5 月)181-182 頁。

[32]前掲「芸術的目的在生死人而肉白骨講詞」924 頁。

[33]散紅「立憲救国乎立憲亡国乎」(上海『中外日報』1910 年 8 月 17 日付)(『戴季陶辛亥文集』95 頁)。

国民の精神に基づいた憲法を制定するべきである、と主張した[34]。

また、戴季陶は欧米の個人主義、国権主義、社会自由主義、社会主義、国家社会主義を紹介し[35]、とりわけトルストイの人道主義を高く評価した[36]。このことは戴季陶がフランス人権宣言に着目したことと関連していよう。彼の理解する人道主義とは、次の通りである。人間は自然状態にあると自己の「発達」を求める「自然意志」を発揮して、他人の生存を脅かしてしまう。人間が生存する真の目的は、弱肉強食の競争や戦争を引き起こす物質的な幸福ではなく、人間同士が共存していくことである[37]。国家は法律と政治を通して大多数の一般国民の安寧と幸福を図らなくてはならない。学者は一般国民を啓蒙しなくてはならない[38]。そして、人間の活動範囲はすでに一国を越え世界に及んでいるため、「人道」の道徳と知識は、国境を越えた「公徳」として世界に通用するものでなければならない。今後、人々は世界の国民として「公徳」を体得するべきであり、「一国の発展を図ろうと欲すれば、すなわちまず世界の平和を求めなくてはならない」[39]。戴季陶は人道主義を評価するに伴い、社会主義は、国民が啓蒙され国家間の競争がなくなり、世界平和を達成することで人間の幸福を図るという点で、人道主義の別名であると高く評価した[40]。

しかし 1911 年に入ると、彼は国民の国家・政治は共和国家・共和政治であり、国民の法律は省単位の自治によって作られるべきことを主張し[41]、武力革命を支持するに至った。

---

[34]天仇「嗚呼将来之欽定憲法」(上海『天鐸報』1910 年 12 月 11 日付)(『戴季陶辛亥文集』354 頁)。

[35]前掲「近世之国民活動」101-105 頁。

[36]泣民「托爾斯泰先生伝」(上海『民立報』1910 年 11 月 22 日付-12 月 13 日付)(『戴季陶辛亥文集』291-303 頁)。

[37]天仇「人生論」(上海『天鐸報』1910 年 10 月 9 日付-10 月 14 日付)(『戴季陶辛亥文集』138-141 頁)。

[38]泣民「人道主義論」(上海『民立報』1910 年 10 月 12 日付-10 月 13 日付)(『戴季陶辛亥文集』152-155 頁)。

[39]泣民「世界国民論」(上海『民立報』1910 年 10 月 14 日付-10 月 16 日付)(『戴季陶辛亥文集』165 頁,170 頁)。

[40]天仇「社会主義論」(上海『天鐸報』1910 年 12 月 4 日付)(『戴季陶辛亥文集』324-325 頁)。天仇「社会党之風雲」、「世界各国之現状」(上海『天鐸報』1910 年 12 月 25 日付、26 日付、30 日付、1911 年 1 月 1 日付)(『戴季陶辛亥文集』389-393 頁)。

ちなみに、戴季陶はこの時期、無政府主義は現在の世界情勢に即応できる思想でないと評価していた。天仇「無政府主義之神髄」(上海『天鐸報』1911 年 2 月 2 日付-3 日付)(『戴季陶辛亥文集』518-521 頁)。

[41]天仇「地方分治論」(上海『天鐸報』1911 年 1 月 13 日付-16 日付)(『戴季陶辛亥文集』468-473 頁)。天仇「共和与自治」(上海『天鐸報』1911 年 3 月 3 日付)(『戴季陶辛亥文集』561 頁)。天仇「区域問題」(上海『民権報』1912 年 4 月 9 日付-10 日付)(『戴季陶辛亥文集』757-760 頁)。

戴季陶は 1912 年 12 月に梁啓超の廃省論(1912 年 4 月『中国立国大方針商榷書』を上海の共和建設会から出版。同年 12 月雑誌『庸言』に連載)に反駁し、省自治が民国の根本であることを力説している。天仇「民国之省制問題――並駁梁啓超」(上海『民権報』1912 年 12 月 18 日付-20 日付)(『戴季陶辛亥文集』1339-1350 頁)。胡春恵『民初的地方主義与聯省自治』(台北:正中書局,1983 年 6 月)120 頁、169 頁。

戴季陶は 1911 年 4 月頃[42]、両江総督張人駿、上海道台劉襄蓀から上海の『天鐸報』紙上で清朝政府を攻撃した罪状で指名手配され、長崎に亡命した。長崎で 2 週間ばかり過ごし、上海を経て、浙江省湖州に移った。湖州にて、これまで「会ったことのない」雷鉄崖(昭性)からペナンに来るようにとの電報を受け取り、1911 年半から 10 月頃まで、英領シンガポール、そしてペナンに移った。雷鉄崖は戴季陶と同じく南社の社員であり、おそらく社員の情報網を通じて戴季陶が両江総督、上海道台から指名手配されたことを知り、戴季陶に興味を持ち自分の許に招いたのであろう[43]。こうして戴季陶はペナンで光華日報記者となり[44]、さらに『光華日報』の重役が主盟人や紹介人となり中国同盟会に入会した[45]。1911 年 10 月には、武昌蜂起の報を聞き、ペナンを離れ武漢に向かった。帰国後の 1912 年 2 月、社会改良会を発起し、また、進徳会に入り甲部特別会員となった[46]。翌 3 月には中華民国自由党機関紙『民権報』[47]の編集職に就いた。

戴季陶は『民権報』の紙上で辛亥革命の失敗を究明した。彼によると、辛亥革命の目的は政府の専横防止、社会の幸福、国民経済の発展、民生の安定(民食、秩序、実業、教育、交通)であったが、革命後に実現されていない。武力革命は革命のためにやむを得なかったが、平和という世界の真理に反していたのである。今後、未完の目標を実現するために、政府や資本家が一般国民を苦しめないようにしなけれ

---

[42]上海『天鐸報』では、戴季陶の執筆した記事は 1911 年 4 月 27 日付が最後である。

[43]雷鉄崖の南社入社は戴季陶の入社より早かった(入社書番号 59 番)。

[44]季陶「到湖州後的感想」(上海『建設』第 2 巻第 6 号,1920 年 8 月)1-3 頁。

雷鉄崖は 1873 年、四川省富順の生まれ。東京留学時期の 1905 年 8 月、中国同盟会に入会。1910 年 12 月、ペナンで『光華日報(Kwong Wah Yit Poh Press)』を創刊し主筆を務める。東京での『民報』と『新民叢報』の論戦の延長として、革命を主張する『光華日報』は、立憲(改良)を主張する『檳城新報』と論戦を行う。雷鉄崖は 1911 年 5 月と 7 月、『光華日報』の記事のなかで上海の新聞を取り上げている(7 月の記事には天鐸報の名が見える)。鉄崖「論上海報紙観察広東義師之誤」1911 年 5 月 22 日(唐文権主編『雷鉄崖集』(武漢:華中師範大学出版社,1986 年 7 月)277-278 頁)。鉄崖「嫉悪」1911 年 7 月 4 日(前掲『雷鉄崖集』320 頁)。戴季陶が雷鉄崖の招きに応じ光華日報記者となったのはこの頃のことである。

[45]主盟人は黄金慶(光華日報第一期董事正監督)、紹介人は陳新政(光華日報第一期董事委員)である。「解除政治職責宣言」1925 年 12 月 13 日(『戴季陶先生文存』978 頁)。劉洪鐘「光華日報七十年」(鍾城芳主編『光華日報七十週年紀念刊』(Penang:光華日報有限公司,1981 年 12 月)116 頁)。

[46]戴季陶は孫文から蔡元培を団長とする袁世凱歓迎使節団員に指名された。天津に向かう船中で李石曾、宋教仁、蔡元培などとともに社会改良会を発起(規約は進徳会から派生し結成されたとされる)。また、進徳会に入り甲部特別会員となった。天仇「都市罪悪論」(上海『民権報』1912 年 6 月 11 日付-12 日付)(『戴季陶辛亥文集』936 頁)。嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』(東京:研文出版,1994 年 11 月)239-243 頁。

[47]中華民国自由党は 1912 年 1 月上海で結成された。「社会の自由を維持し、共和の障碍を一掃する」ことを宗旨に掲げ、「男女平等を提唱し、共和政府を監督し、実業の発展を監督促進することによって、国計民生を厚く利せしむることを期する」ことを主義とする。正主裁は孫文、副主裁は黄興、臨時(副)主裁は李懐霜。戴季陶は入党したとされるが、その時期は不詳である。1913 年 8 月袁世凱政権により解党された。陳長河「民国初期的中華民国自由党」(上海『档案与史学』1997 年第 6 期)。張玉法『近代中国民主政治発展史』(台北:東大図書,1999 年 7 月)96-97 頁。

ばならない、とした[48]。そして1912年8月、中国同盟会の後身である国民党が議会政党として結成された際に、戴季陶は民主立憲によって袁世凱政権の専制を穏和に改革することを希望した[49]が、次第に孫文支持の論陣を張り、頻繁に袁世凱政権を批判する記事を発表するようになった[50]。彼は1912年末から1913年初にかけて、国民の愛国心の発揚を訴え[51]、国民共通の意志に基づいた臨時約法(1912年3月制定)を支持し、袁世凱政権が臨時約法を遵守しないことを批判していったのである[52]。以上のように、戴季陶は、辛亥革命の失敗として袁世凱(戴季陶は彼を「盗国逆賊、専制魔王」や「中華民国国民之公敵」[53]、「黄種公敵」[54]などと非難した)政権の専横を挙げ、「真共和」の復活を図るには袁世凱政権を打倒すべきことを主張する[55]が、同時に国民精神の形成が必要であることをくりかえし主張した。たとえば、彼が1913年7月、『民権報』の編集職を離れ第二革命に参画する直前に、国民精神の形成という問題から袁世凱の尊孔令を批判する世論を批評し、国家の存立には国民精神の形成が必要であると主張した。

> 革命以来、一大問題すなわち孔子尊崇と孔子軽蔑の激戦が勃発した。……孔子はわが国の学術史上、文明史上の前人の事業を受け継ぎ将来の発展に道を拓いた偉人であり、袁が憎いから孔子まで憎み、人民の歴史上の信仰心が日に日に堕落していくことは決してよくない。……尊孔は一事であり、袁の尊孔令はまた別の一事である。……一国の存亡は、兵力の強さや財政の豊かさにあるだけでなく、必ず歴史上の感情や道徳上の模範に関わっている。であるから、歴史を愛する心は愛国心の源泉であり、道徳的模範の薫育は愛国心を養成する元素である。これらを失ってしまえば、その国は国とはいえない。もしこの二千年余りの歴史人物をいったん唾棄するならば、人民の精神は恃むところを失ってしまう。……さらに言うならば、満政府が倒れたのは戦争の力によるものでは

---

[48]天仇「公道与人道」(上海『民権報』1912年6月19日付)(『戴季陶辛亥文集』956-958頁)。天仇「今日之国是」(上海『民権報』1912年7月1日付-10日付)(『戴季陶辛亥文集』984-1000頁)。

[49]天仇「国民国家与国民党——我所希望於国民党者」(上海『民権報』1912年8月29日付-30日付)(『戴季陶辛亥文集』1157-1161頁)。

[50]胡繩武、金沖及『辛亥革命史稿』第4巻(上海:上海人民出版社,1991年9月)253-258頁。
1912年9月9日、袁世凱は孫文を全国鉄路籌劃督辦に任命し、10月14日、孫文は中国鉄路総公司を設立し、自ら総理に就任することと上海に辦事処を開設することを発表した。戴季陶は同年8月、9月頃から10月まで南洋に出かけて、上海に戻った後、孫文の機要秘書に就いた。またこの頃、国民党上海交通部評議部議員に任命された。

[51]天仇「国家精神論」(上海『民権報』1912年12月21日付)(『戴季陶辛亥文集』1357-1360頁)。

[52]前掲「民国政治論」1370-1400頁。天仇「約法与憲法」(国民党上海交通部『国民月刊』第1巻第1号,1913年5月)。

[53]たとえば、天仇「華盛頓与袁世凱」(上海『民権報』1913年4月12日付)(『戴季陶辛亥文集』1421-1424頁)。

[54]たとえば、天仇「討叛逆」(上海『民権報』1913年4月26日付)(『戴季陶辛亥文集』1457頁)。

[55]たとえば、天仇「中華民国与世界」(上海『民権報』1913年4月12日付)(『戴季陶辛亥文集』1417-1420頁)。

ない。国民の歴史を愛する心が醸し出されて、満政府が倒れたのである。当時革命を提倡し、第一に人心を激しく感動させたのは、内と外を厳格にする弁であった。……この意味を〈*現在に〉当てはめるならば、国は容易に富強の域に達し、国民の外敵を防ぎ内を安んじる気持ちは自ずから起こるであろう[56]。

戴季陶は袁世凱政権に追われて、1913年9月末に東京に亡命した。管見の限り戴季陶は、大連での武装蜂起準備[57]、高知での選挙応援(1915年3月)[58]、神戸訪問(1915年5月)[59]以外は、1916年4月末に離京、帰国するまで、ほぼ毎日孫文と行動を共にした(附録の略年譜を参照のこと)。中華革命党の結成(1914年7月8日結成大会が開催された)をめぐって孫文は黄興と争い、黄興らは中華革命党は孫文の独裁が強く非民主的性格であると批判して入党を拒否した。こうして辛亥以降の革命を担ってきたグループは分裂したが、戴季陶は1913年10月2日中華革命党に入り(党員「誓約書」第6号)、同年9月から12月にかけて孫文が主宰した革命方針を検討する会議[60](17回開催された)に11回出席して書記を務め、翌1914年5月から中華革命党の機関誌『民国』の主筆を務め、孫文支持を表明していった。戴季陶はそれ以来1916年4月末に離京・帰国するまで、再度、辛亥革命から第二革命までの失敗の原因を究明し、その改善を図る理論構築に努めた。それは『民権報』時期と同じく国民精神の形成の必要性を論ずるものであったが、『民権報』時期に比べてより本格的で理論的な究明であったと言える。なぜなら、彼は中国の「今日の問題は政治にあらず、実業にあらず、国民の思想否国民の精神的統一にあると思ふ」[61]と述べ、中国国民の精神を考察し、その中に中国国民の意志の根源や実態を求めようとしたからである。彼は、中国の立憲派(「君主立憲」派)も革命派(「排

---

[56]天仇「孔子」(上海『民権報』1913年7月4日付)(『戴季陶辛亥文集』1507-1508頁)。
戴季陶は1925年半に、昨今、一般の人々は孔子を尊崇する者はすべて反革命であるとし、中国国民文化の堕落の原因は彼らにあったとする傾向にある。「思想上から見れば、革命と反革命の区別が中国的であるか非中国的であるかという区別に転化してしまった。これは実に悲しむべき現象である」、と述べている。『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』(上海:民智書局,1925年8月)46-47頁。

[57]戴季陶は1914年1月半から3月半まで、陳其美、山田純三郎とともに大連に行き、中国東北の在地軍事勢力と連絡を取り、反袁世凱政権の武装蜂起を企てようとした。陳其美が病気で行動できなかったなどの理由で失敗に終わった。

[58]中島及は、戴季陶が日本亡命中に犬養毅の選挙運動で応援演説を行ったという通説を覆し、1915年3月の第12回帝国議会総選挙で萱野長知が高知市から衆議院議員に立候補した時、孫文の代理として犬養毅とともに応援演説を行ったことを明らかにした。後に崎村義郎が、当時の孫文の推薦状や戴季陶が演説したという記録(第2次大隈重信内閣内務大臣大浦兼武より黒岩周六(涙香)宛の書簡,1915年4月11日付)などを用い中島説を確認した。中島及「戴季陶のこと二つ」(東京『中国』第67号,1969年6月)88頁。崎村義郎「浜口雄幸と争った選挙戦」(久保田文次編『萱野長知研究』(高知:高知市民図書館,1996年9月)129-130頁)。
なお、大浦兼武の書簡に「先年英国ニ遊ビシコトアリ」の一節があるが、戴季陶が渡英した事実は管見の限り確認できない。

[59]「戴天仇密かに来る」(『神戸新聞』1915年5月11日付)。

[60]この会議において中華革命党の「革命方略」が起草、制定された。

[61]戴季陶「支那に於ける共和思想」(東京『支那と日本』第2年5月号,1914年5月)。

満革命」派)も「国勢の微弱に鑑み、野郎自大なる支那を世界的国家に進ましむるに由つて生じたる民党」であり、革命は中国固有の革命思想と攘夷思想によって生じたが、共和思想がなかったため失敗した[62]、と論じている。

また戴季陶は、「一国の将来を論ずるに当つて其の国の歴史精神より見ざれば其の国の事情を了解し得ざるのである」[63]と述べ、日本国民の精神と中国国民の精神を対照させている。

彼によると、日本国民は共同信仰を持っている。それは「天皇先祖神天」に対する「絶対的な尊重、信仰、畏服」である。「歴代天皇および先祖を神格化した」ことにより、時代が変わってもこの信仰は変わることなく、「中国の儒教、インドの仏教、ヨーロッパの科学文明が日本に輸入された後、全部日本化され、日本文明を形成した」。日本が強盛となった最大の要因は、「日本国民の共同信仰なる固有精神」にある。数十年前の日本は「政治の紊乱」、「実業の不振」、「兵力の微弱」、「学問の進歩せざる」点において、現在の中国よりも甚だしかった。しかし日本国民は共同信仰を維持し、そのために「間もなく百政整頓して今日の堂々たる世界の一等国となつた」のである。一方、中国国民は「天命を畏敬し、祖先を崇拝するのが国民の共同信仰であるということが日本と同じ」であるが、「日本はそれを天皇に帰着するが、中国は皇帝ではなくほかの人格に帰着する」のであり、すなわち三皇から尭、舜、さらに孔子である。ヨーロッパの科学文明の輸入により、孔子に対する国民信仰は減退し、これが中国が衰退した根本的な原因である。「今後我が国民は歴史的信仰の中心点を持続し得るか如何か若し出来なければ此の中心点を失つた後に新しく将来の信仰の中心点を作ること〈*が〉出来るか如何かは即ち今後我が国の存在し得るか何かの問題であると思ふ」[64]、と言う。

そして、上海に戻った後においても、国家の存立において国民精神の形成が必要であることを論じ続けた。

> 余は一重に偉大なる政治家の出でんよりは、偉大なる思想家の出現を期待して已まざるなり。健全なる思想なくして如何でか健全なる国家の形成を見るを得んや。健全なる思想家の健全なる思想、利害の上に超然たる大思想の上に中心を求めざれば茲今健全なる国家の建立は不可能なりと云ひて過言には非ざるべし[65]

このように、戴季陶は袁世凱の専制を批判し、孫文の反袁世凱の運動を支持して中華革命党に入り、中国の革命失敗の思想的根源の所在を追究した。戴季陶は、国民精神の形成を訴えたが、彼のこのような考え方は、当時の孫文が中華革命党員に対し党首孫文への忠誠を求め、党員を団結させ、反袁世凱の革命を行おうとするという考え方と区別されるべきである[66]。

---

[62]前掲「支那に於ける共和思想」。
[63]戴季陶「国家精神より見たる支那」(東京『国家及国家学』第 2 巻第 3 号,1914 年 5 月)。
[64]前掲「国家精神より見たる支那」。
[65]戴天仇氏「支那に於ける共和制体」1918 年 1 月 11 日(上海の東亜同文書院『滬友』第 4 号,1918 年 3 月)。
[66]管見の限り、当時の戴季陶は中華革命党と党員の在り方について明確に論じていない。

３．対日批判の目的

戴季陶は1909年末、日本と韓国(大韓帝国)の関係は「保護国と被保護国の関係」であるが、将来英国とインドの関係のような「主従関係」になるであろうと述べた[67]。そして、1910年8月初[68]、日本の韓国政策の最終目的が韓国併合であると認識し[69]、日本の韓国併合を「日韓合邦」と表現したが、その意味は日本と韓国の「友誼の合邦」でなく、日本による韓国の「併呑」、「滅」、「亡」であった[70]。戴季陶の日本留学時期は、上述の通り1904年から1906年の間に始まり1909年まで続いたのであり、日本が韓国と議定書(1904年2月)、そして三度の協約(1904年8月、1905年11月、1907年7月)を締結し、ロシアとポーツマス条約(1905年9月)を締結し、韓国の外交権を、次いで内政権を掌握した時期に該当する。戴季陶は併合条約調印の前から、日本は韓国を「併合」の名の下に「併呑」し「滅」ぼそうとしている、ととらえていた。

さらに彼は、日本は中国の「属国」である朝鮮[71]を滅ぼし、これを足がかりとして満洲、揚子江流域、福建、浙江などにその勢力を及ぼそうとしている[72]と考え、「日本人は毎日東亜の平和を言いつつ、韓国を併合し満洲に侵出している」[73]、日本の「前途の害ははかりしれない」[74]と述べ、日本の朝鮮政策と中国政策を結びつけて警戒した。

戴季陶は日本の朝鮮政策と中国政策を批判する中で、日本の国民精神をも批判している。日本人が韓国人に対し残虐な刑罰を執行したこと[75]で日本人の非人道性を批難し[76]、東洋一の国力を有する日本の国民の程度は「世界的国民の域」には達し

---

[67]前掲「憲法綱要」19頁。

[68]併合条約は1910年8月22日に調印され、同月29日に公布された。

[69]散紅「短評」(上海『中外日報』1910年8月5日付)(『戴季陶辛亥文集』29頁)。

[70]散紅「日韓合邦与中国之関係」(上海『中外日報』1910年8月5日付)(『戴季陶辛亥文集』31-32頁)。戴季陶は「日韓合邦」を「滅国」、「亡国」にすぎないと述べている。天仇「哭庚戌」(上海『天鐸報』1911年1月21日付-25日付)(『戴季陶辛亥文集』502頁)。

[71]戴季陶は朝鮮を、ヴェトナム、ビルマ(ミャンマー)、シャムとともに中国の「属邦」と呼んだことがある。天仇「東亜陽秋」(上海『天鐸報』1910年10月8日付)(『戴季陶辛亥文集』133頁)。

[72]前掲「短評」(『戴季陶辛亥文集』29頁)。前掲「日韓合邦与中国之関係」30-32頁。戴季陶は後に、日本政府の朝鮮政策と中国政策を日本の「北進政策」や「伝統的政策」と名づけている。前掲「哭庚戌」502頁。「張継何天炯戴伝賢告日本国民書」(上海『民国日報』1919年5月9日付)。季陶「我的日本観」(上海『建設』第1巻第1号,1919年8月)28-29頁。

[73]泣民「世界国民論」(上海『民立報』1910年10月14日付-16日付)(『戴季陶辛亥文集』166頁)。

[74]前掲「日本人之気質」178頁。

[75]天仇「刑罰与人道」(上海『民権報』1912年7月6日付)(『戴季陶辛亥文集』1011-1012頁)。

[76]天仇「珠璣砂礫」(上海『天鐸報』1910年10月14日付)(『戴季陶辛亥文集』173頁)。

また、日本人は天から降りてきた人種と自任しているが、実際はマレー、朝鮮、中国などの種族が混合した種族であるに過ぎず、しかも、島国の民であるため「狡猾で変わりやす」く、「闘争的」で「極端に走りやす」いと述べていた。前掲「日本人之気質」177-178

ておらず[77]、自由に思索する能力が衰えている[78]と批判した。

しかし、戴季陶は日本が韓国を滅ぼし中国にその勢力を及ぼそうとしている原因を日本国民の精神の非人道さに求めなかった。彼は孫文のアメリカ人軍事顧問ホーマー=リー(Homer Lea)の自然趨勢的な解釈を援用し、国家の対外拡張はその国の政治家の野心からではなく、国民の「自然的殖民性」による、と述べている[79]。そして、その一方で「朝鮮が滅んだのはその国民が無能であるから」[80]であり、日本の中国「侵略」は日本国民が「日本のために図ったことである」から、中国国民は「徒に日本を恐れ、日本を憎み、日本を怖がる」のではなく、むしろ日本国民に倣って、進歩を求るために学習に勤しみ、外敵に抵抗するために兵を強くし、人を服させるために己を修めよ[81]、と訴えている。すなわち、戴季陶の対日批判の目的は、批判が目的というより、中国革命の成就のために中国国民に自己批判を促し、日本国民の精神を参考にしてその長所を中国国民の精神に取り入れることにあった、と言うことができる。ここに、戴季陶の国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方を窺うことができる。

第２節　五四運動時期における対日批判の展開

戴季陶は 1912 年半から全国鉄路籌劃督辦・中国鉄路総公司総理孫文の機要秘書に就き、1913 年 2 月、3 月に孫文訪日に随行し日本語通訳を務め、孫文とともに日本の政軍財界の要人と接触する中で、黄白人種闘争の危険性[82]、および中日提携による中国革命の成就を主張し始めた。

> もし日本が黄色人種の存立をともに図るためにわが国と連合しなければ、全世界はみな白色人種の領土となり、日本にも存亡の危機が迫ることになる。……今民国が既に成立し、全国の人心は一変し、……翻然と政治上、思想上の大革命を行い、以前の古いものをことごとく破壊し、新共和国を建設しようとしている。……これこそ日本人がわが国との連合を望む理由である。……もし連合できるならば、内にはわが国の建設を助けられるし、外には野心国の侵略を防

頁。

[77]天仇「日英美之新条約観――東洋之緊急風雲」(上海『天鐸報』1911 年 4 月 15 日付)(『戴季陶辛亥文集』686 頁)。これより前に戴季陶は、日本はアジアで「最も文明が進ん」でいるが、日本政府は清朝政府と同様に専横無道である、と述べたことがある。天仇「社会之大不幸」(上海『天鐸報』1910 年 11 月 12 日付)。

[78]天仇戴伝賢「存歿亡歿――日本の覚悟如何(十四)」(東京『民報』1914 年 12 月 12 日付)。

[79]天仇「日本政治方針之誤」(上海『民権報』1912 年 8 月 4 日付-8 月 5 日付)(『戴季陶辛亥文集』1092 頁)。本論では次の日本語訳を参照した。戴天仇君「日本政治方針之誤」(上海『滬上評論』第 1 号,1912 年 9 月)。

[80]天仇「嗚呼無能国嗚呼無能国之民」(上海『天鐸報』1910 年 10 月 18 日付-21 日付)(『戴季陶辛亥文集』180-182 頁)。

[81]天仇「大国民当学小国民」(上海『天鐸報』1910 年 11 月 28 日付)(『戴季陶辛亥文集』313 頁)。

[82]思秋「中国革命論」(東京『民国』第 1 年第 2 号, 1914 年 6 月)。

止することができる[83]

彼は、1914年7月末に勃発した第一次世界大戦を中国革命の成就(袁世凱政権打倒および臨時約法復活)の絶好の契機と捉え[84]、日本の中国政策の転換を期待した。彼によると、第一次世界大戦の性質は「泥棒同士」の戦争であり[85]、その目的は「英露の両国が、自分たちの<*が>世界に雄飛する妨げになる独逸を叩き潰す為に過ぎないので、特に亜細亜に於て各自の将来に活動すべき地位を安全にする」[86]ことである。日本の大敵は露・米・英であり、第一次世界大戦に参戦したドイツと交戦することは賢明でない。孫文・桂太郎の会談(1913年2月)にあった「連独、制英、防露」認識、外モンゴル独立問題に起因する対露警戒観より、満蒙の権益をめぐって、中日両国は対露・米・英警戒観を共有し得る[87]、ということであった。戴季陶は1915年3月、孫文の代理として日本の官憲に対し、中華革命党が中国人留学生による「対華二十一か条」(1915年1月に日本政府が提出、同年5月に中国政府が受諾)に関する中日交渉反対運動を煽ったという指摘を否定した[88]。そして1917年9月、孫文の命令を受け、張継とともに原敬を訪ね[89]、孫文ら南方派に対して好意的な政策を取ってほしいと要望した。それに対し原敬は「君等の如き理想は何年か後には兎に角今日の実際には行はれず、寧ろ行はるゝ範囲に於て事を処するを要す」と述べたとされる[90]が、戴季陶と張継は広州の非常国会に対し、原敬は南方派を支持していると報告している[91]。戴季陶は原敬を訪ね帰国する途中で大阪を訪問し、一般市民に対して中日両国が提携して中国革命を成就させることに理解を求めた[92]。

戴季陶は1917年12月から翌1918年1月にかけて、「最近之日本政局及其対華政策」を上海『民国日報』に約40日に亘って発表した。この中で彼は、中国国民に自己批判を促し、中国国家の自強を主張した。

彼によると、中国をめぐる東アジアの国際環境は日本の強国化で「東漸する欧洲勢力を防ぎ」[93]、「列強諸国のアジア問題における勢力均衡」を保っているのであ

---

[83]天仇「強権陰謀之黒幕」(上海『民権報』1913年4月3日付)(『戴季陶辛亥文集』1401-1402頁)。

[84]外務省記録『各国内政関係雑纂　支那ノ部　革命党関係(亡命者ヲ含ム)』乙秘第1615号「支那革命党員戴天仇ノ談話」1914年8月24日付。

[85]天仇戴伝賢「存歿亡歿——戦争の目的(五)」(東京『民報』1914年11月26日付)。

[86]天仇戴伝賢「存歿亡歿——不安の将来(六)」(東京『民報』1914年11月27日付)。

[87]天仇戴伝賢「存歿亡歿——明日の準備(七)」(東京『民報』1914年11月28日付)。

[88]外務省記録『各国内政関係雑纂　支那ノ部　革命党関係(亡命者ヲ含ム)』乙秘第435号,1915年3月1日付。

[89]孫文らは当時、原敬が野党の立憲政友会総裁(1914年6月就任)の頃から南方派に対して同情的な、あるいは少なくとも南北両派に対して中立的な主張を有する政治家として認識していた、と考えられる。

[90]原奎一郎編『原敬日記』第7巻(東京:乾元社,1951年6月) 230頁の1917年9月9日の条。

[91]「日本対於西南護法之態度——戴天仇在非常国会之報告」(上海『民国日報』1917年10月1日付)。

[92]「中国政界の近状」(『大阪朝日新聞』1917年9月14日付)。

[93]商孫漫記,雲巣道士増刪「最近之日本政局及其対華政策(28)」(上海『民国日報』1918年1月13日付)。雲巣道士は戴季陶の筆名であることは戴季陶本人が認めているので確実で

り、独力で列強諸国のアジア政策に対処できない現在の弱国中国にとっては実は「福利」である[94]。社会進化論の「優勝劣敗は進化の原則」であり、「わが国の不振の原因はわが国にあり、日本にはない」。一方、日本が今日「わが国で利権を得たのは僥倖ではなく、ほかならずその国民が奮闘した結果である」[95]。今後「わが国民がはたして自覚を持ち自力で国の基礎を鞏固なものにしようとすることができるならば、わが国が強盛となった時はすなわち日本がわれわれに親しむ時になるだろう。さもなければ、わが国には滅亡すべき原因だけがあり、危機はたちまちやって来るであろう。また、日本人のわれわれを滅亡させる動きを制することはできないだろう」[96]。現在の対日外交には有効な政策や手段がなく、「唯一の救国の方法は、第一に内政の再建(原文は「整理内治」)、第二に内政の再建、第三に内政の再建であり、……内政の再建のほかに自立自存を図る道はない」[97]。現在、「わが国民の自立と自助を希望することがますます切実になり、依存と憤恨はともに無用な感情であり、決して救国に足りない」[98]のであり、学校や新聞雑誌を通じて「日本事情を研究」して「国民の注意を喚起」し、日本に対する「無思慮、無目的の排斥の挙動があれば〈*日本の〉人々の敵愾心を挑発するので、〈*わが〉国民は極力戒めなくてはいけない」[99]、とした。

戴季陶は第一次世界大戦終結(1918 年 11 月)を機に対日批判を強めていった。彼は、日本が第一次世界大戦後、戦勝国として中国における敗戦国ドイツの諸権益を継承したことに、不満だったからであり[100]、そして、日本が中国侵略上単独で先頭に位置したために、列強の中でも日本の特殊性を追究することが必要であると考えたからである。また、戴季陶はこの時期から、国家主義と資本主義が破綻を来たし世界の国々で国家と社会の改造が求められていると展望し、日本での社会運動とマルクス主義理論研究の高まりや朝鮮での独立運動の勃興に着目し、マルクス主義

あるが、商孫の名については史料がないので今後の研究に待ちたい。季陶「資本主義下面的中日関係」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1920 年 7 月 17 日付)。

[94]前掲「最近之日本政局及其対華政策(33)」(上海『民国日報』1918 年 1 月 18 日付)。

[95]前掲「最近之日本政局及其対華政策(28)」(上海『民国日報』1918 年 1 月 13 日付)。

[96]前掲「最近之日本政局及其対華政策(12)」(上海『民国日報』1917 年 12 月 24 日付)。

[97]前掲「最近之日本政局及其対華政策(37)」(上海『民国日報』1918 年 1 月 22 日付)。

[98]前掲「最近之日本政局及其対華政策(23)」(上海『民国日報』1918 年 1 月 7 日付)。

[99]前掲「最近之日本政局及其対華政策(39)」(上海『民国日報』1918 年 1 月 24 日付)。

翌 1919 年 8 月、戴季陶は「我的日本観」を発表し(上海『建設』第 1 巻第 1 号)、その冒頭で次のように述べた。

> 中国から日本へ留学した人は少なくない。確実な数字は不明であるが、おそらく 5 万人を下ることはないであろう。だが、この 5 万人の留学生が「日本」という題目でどのような研究をしただろうか。

次いで、戴季陶は「日本」という題目で、日本人の性格、思想、風俗習慣、国家および社会の基礎、生活の根拠、日本の過去と現状を、自らの思索力と批判力を通じて、中国人の前に、きちんと解剖し、提示したいという希望を述べた(1 頁)。

1919 年に発表した、戴季陶の中国における日本研究が不足しているという認識と日本研究に対する意欲は、字句の加除を施されながらも、『日本論』(1928 年 4 月)の冒頭でも述べられた。

[100]戴伝賢「対日本朝野之通電」(上海『民国日報』1918 年 12 月 25 日付)。

理論の研究を始めた。その研究の中で、中国と日本ではそれぞれ社会改造を自覚した国民(戴季陶はとくに労働者階級を想定している)が互助組織をつくり生活改善と民主国家の建設を実現し、中日労働者階級が連携して平等な中日外交を実現することが急務であると考えた[101]。

戴季陶によると、日本社会の改造では「根本的に政治組織を改造し、伝統政策を廃棄する」[102]必要がある。日本の「伝統政策」とは、日本政府の朝鮮政策と中国政策、シベリア出兵を指す[103]。日本の政治改造・社会改造は「実に世界に対し東洋に対して大なる援助になるのである」[104]。中日労働者階級の連携は、「両国の平等、自由、互助を標識とする社会革命がともに成功した後に、初めて実現することができる」[105]のであり、中国の労働者階級は「決して日本の貴族、軍閥、党閥と親善を図ら」ず、「日本の平民の政治的社会的勝利を希望して止まない」[106]。「アジア問題を解決するには、アジアの列島および大陸で政権を執る「ブルジョワジー」の支配を除くことに努力し、アジアの「プロレタリア」の大結合を図るだけである」[107]、とする。

「張継何天炯戴伝賢告日本国民書」(1919年5月8日)は、中華革命党員が広汎な階層の信頼を取り戻し、ほかの政治勢力と共同して、上海に設けられた国民大会(5月11日に開催され日貨排斥を宣言)の事務所(5月13日に役員が決定)での発言力を高めるために発した宣言であり[108]、上海駐在の日本の新聞社や通信社の特派員などにも発表された。この宣言によると、日本の台湾・朝鮮支配は中国国民の日本に対する「恐怖と怨念の心理」を生み出した。日本はアジアの各国家、各民族に対し黄色人種の独立自存を掲げながら、弱い黄色人種の国家の財産を強奪している。中国国民は日本の言う中日親善を、日本による中国の領土の侵略と利権の壟断と考えている。「中国人は、日本の伝統的政策を強力に支持し弁護しているのは専ら貴族、軍閥であり、平民的な政治家の意見は必ずしもそれと同一ではなかろうと考えていた。ところが日本初の政党内閣[109]が成立してみると、その対華方針はやはり伝統

---

[101]湯本国穂「戴季陶」(佐藤慎一編『近代中国の思索者たち』(東京:大修館書店,1998年12月)171-172頁)を参照した。

[102]前掲「我的日本観」28頁。引用部分は「張継何天炯戴伝賢告日本国民書」(上海『民国日報』1919年5月9日付)について論じた箇所である。

[103]戴季陶「満蒙山東与東部西比利亜」(上海『民国日報』1920年1月1日付)。

[104]戴天仇「三民主義」1920年1月7日(東京『解放』第2巻第2号,1920年2月)。この文章は、戴季陶が日本の社会主義運動家堺利彦に宛てた書簡である。

[105]季陶「資本主義下面的中日関係」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1920年7月17日付)。

[106]前掲「三民主義」。

[107]前掲「満蒙山東与東部西比利亜」。

[108]末次玲子「五・四運動と国民党勢力」(中央大学人文科学研究所編『五・四運動史像の再検討』(八王子:中央大学出版部,1986年3月)309頁)を参照した。

[109]孫文は、寺内正毅前内閣の中国政策の西原借款、日中軍事協定などが、孫文ら革命派を抑圧し、袁世凱以後の北京の政権を援助していることを批判していた。一般の日本国民の間で、原敬新内閣(1918年9月-1921年11月)は藩閥打破によって成立した非藩閥内閣と評価され、原敬は平民宰相と親しまれた。孫文や戴季陶は、この日本国民の原敬内閣に対する評価に影響を受け、原敬内閣を歓迎し、寺内正毅前内閣に対する敵意があっただけにそれだけ一層過大に原敬内閣の中国政策に期待したものと考えられる。

的政策を踏襲するものであった。しかも最近、各政党や新聞が山東問題について述べている意見を見ると、どれ一つとして伝統的政策を弁護していないものはない。そこで中国国民は日本の大多数の国民がひとしく伝統的政策の擁護者であることを改めて確認する」。日本国民が「その政治組織を改革し、その伝統政策を廃棄」すること切望する[110]、と言う。

以上の、日本の政党政治への失望と、日本国民が覚醒して日本政府の朝鮮政策と中国政策を阻止することへの期待が合わさった戴季陶らの宣言は、日本では対日批判の側面ばかりが強調され日本国民の反発を生み、日本国民への期待の側面が汲み取られなかった。たとえば、北京の日本人経営の新聞『順天時報』は、この宣言を「ほかの排日の文章が徒に慷慨悲憤の語を並べ挑発、中傷を目的としていることとは頗る異なる」「穏健な言論」であり、「真摯な態度」で「中日親善の方法」を研究していると評価する一方、「日本の伝統的政策が中国侵略であると根本的に断定していることに対し首肯できない」と反駁している[111]。戴季陶によると、「今夏以来貴国〈*日本〉の新聞紙上に於いて時々小生が過激派たること並に露西亜の列寧一派と気脈を通ずること等の如き諸言蜚説を見る、此は多分本年五月六日小生と張継、何天炯二氏と共に〈*発表した〉「貴国国民に告ぐ」と題する公開状に対して不満を抱く人達の悪戯であらうと竊に想像し一笑に付し去つて更に介意することなかつた」[112]と言う。

しかし、戴季陶は宣言発表後の 7 月、日本語雑誌『解放』に一文を寄せ、日本の「貴族、軍閥、乃至党閥に由つて行ふ政治」による「朝鮮、台湾に対する態度」を批判し、「決して日本の貴族、軍閥、党閥と親善を図られません。蓋し支那国民の国家思想、社会思想、世界思想は日本の現在の治者階級の奉ずる主義とは相容れないからであります」と述べ、日本の中国政策を転換させるには日本国民(戴季陶は「平民」と言う)の政治的覚醒が必要であり、日本国民の政治的覚醒に対する期待を表明した。そして、この批判と期待の両者が日本国民に伝わらないならば、戴季陶らの宣言は「空言」に陥り、「日本も支那も亜細亜のあらゆる民族も最後だ」と述べ、中日労働者階級の連携が困難になる恐れがあり、「支那の国民は日本の貴族、軍閥、党閥に由つて征服される事は避け得ないかも知れません」と警戒を表明していた[113]。

---

[110]「張継何天炯戴伝賢告日本国民書」(上海『民国日報』1919 年 5 月 9 日付)。
後に戴季陶は、日本は東方民族を圧迫する最大の「禍魁」であり、日本共和国の建設、日本の領土を琉球処分(1879 年)以前のものに改めること、朝鮮共和国の建設、台湾人民と琉球人民の自主投票による帰属決定、日本の中国における特権の放棄、秘密条約の廃棄、東亜平和協会の設立、を「東亜永久和平策」とする、と述べている。季陶「東亜永久和平策」(上海『星期評論』第 27 号,1919 年 12 月 7 日付)。

[111]「論説　読告日本国民書」(北京『順天時報』(上)1919 年 5 月 20 日付、(下)27 日付)。飯倉照平編「侵略者への抗議――日本とのかかわりから見た五四運動」(東京『中国』第 66 号,1969 年 5 月)18 頁。

[112]「戴天仇氏より」1919 年 11 月 7 日(『大阪朝日新聞』1919 年 11 月 17 日付)。

[113]「軍閥外交の惨害――戴天仇君最近の書簡」(東京『解放』第 1 巻第 2 号,1919 年 7 月)。

第３節　柳条湖事件前後における対日批判の展開

１.『日本論』

1928 年に出版した『日本論』の前半部分(第 1 章-第 14 章)は、1919 年 8 月に上海の月刊誌『建設』に発表した「我的日本観」を基礎にしている。

対外拡張は、国民意志の現れとして、その国家の独立や発展の延長線上に位置づけることができる。その意志の方向を規定しているのは、国民の精神である。戴季陶は、このような論理で日本の対外拡張を解明しようとした。彼がまず日本国民の精神から考察を始めたのは、その中に日本の対外拡張の根源があると考えたからである[114]。戴季陶によると、日本では、固有思想の神権思想が抬頭する一方、外来思想の儒教の仁愛精神や自由民権精神を受容し、内外の思想が合わさり明治維新の思想が形成された。「道徳としての武士道」(利他)と「信仰としての武士道」(利己)を併せ持つ武士階級が維新の主導権を掌握した。利益追求の「町人根性」が「信仰としての武士道」と合流し、「道徳としての武士道」を凌駕して維新後の新思想を代表するに至った。維新後の政治指針は「攘夷」と「進取」であり、「攘夷」には征韓論などの大陸侵略の意図(北進と南進)が含まれていた。維新後は「高徳の士」が政界を去り、「長州閥の貪官」が藩閥を形成した。また「失意の武士」が財界に入り、「武士と町人の結託」によって軍閥と財閥を形成した。政党は藩閥政治を抑えられないまま腐敗、堕落し、民権は神権に敗れた。日本の国家主義は覇道の軍国主義へと転化し、王道の民族主義の萌芽を摘み取った。東方民族の復興を謳い世界の大勢を弁えた首相は桂太郎が最後であり、政治理念を持たず、侵略的伝統思想に染まった田中義一首相は中日戦争を発動しようとしており、このままでは中日戦争は回避できないだろう。

２．対日批判の展開

戴季陶は、1928 年の時点で中日戦争の勃発が不可避であると捉え、その後唯一の回避の方法は中国が「自強に努める」ことである[115]と考えていた。1931 年 8 月に駐日全権公使に任命された蒋作賓は、同年春に蒋介石の指示を受け東北三省を視察した時に、中日関係の悪化を指摘し、中日交渉委員会を設立し対日交渉に取り組むべきことを提議した[116]が、赴任前の 8 月 22 日に戴季陶と会談した。蒋作賓の記録によれば、戴季陶はその時、「対日問題は問わず聞かずというのが唯一の良策である。国家の存亡、生死の関頭に至った時に、懸命にやればよい」[117]と助言している。戴季陶は柳条湖事件勃発前の時点において、対日外交路線について具体的な見解を持っていなかったと言えるだろう。

---

[114]前掲董世奎「戴季陶『日本論』の構造および文体」21 頁、23-24 頁を参照した。
[115]伝賢「中日俄三民族之関係」1930 年 10 月 10 日(上海『新亜細亜』第 1 巻第 2 期,1930 年 11 月)。
[116]北京師範大学・上海市档案館編『蒋作賓日記』(南京:江蘇古籍出版社,1990 年)321 頁の 1931 年 5 月 6 日の条。
[117]前掲『蒋作賓日記』351 頁の 1931 年 8 月 22 日の条。

しかし、柳条湖事件勃発(1931 年 9 月 18 日)後の 9 月 30 日、戴季陶は中国国民党中央執行委員会政治会議特種外交委員会委員長に就任し、事件の処理は中日直接交渉ではなく[118]、国際連盟および九カ国条約締結国(とくにアメリカ)の介入による対日制裁に求めるべきこと、そして、国際的な中国に対する同情と支持を勝ち取り、国民の士気の維持と国民の政府に対する信頼の保持を図るべきこと、最終的には日本軍に抗戦するがぎりぎりまで自強と内政の安定に努めるべきことを主張した。戴季陶が特種外交委員会委員長を務めた時期の言動については、兪慰剛、張玉萍、嵯峨隆および鹿錫俊[119]が詳細に整理している。

当時、戴季陶が何度も主張したことは、中国国民の団結の必要性であった。

> 数年来、主義を信奉して懸命に努力してきた政府は能力が確かに足りなかったので、全党、全国の満足を得られなかった。……ほかの国家がこのような環境にある時、必ず二つの要素が容易に成立するであろう。すなわち、一つは、国民はこの極めて困難な環境の中で、……何の躊躇もなく挙国一致してともに国難を処理する道を進み、奮闘努力するであろう。二つは、国民はこの国家危急存亡の時に、自国の建国の精神と主義に対して、……これが国家の生命と民族の生存を保障する最も根本的な力であることを知り、みなが懸命になってこの力を用いることを決心し、別の方途を求めないであろう[120]。

ここでの「自国の建国の精神と主義」とは三民主義を指す。戴季陶は、すべての国民が三民主義を信奉し、三民主義の下に一致団結することによって外敵に立ち向かうことができると述べたのである。彼がこのように国民の団結を強調しなくてはならなかったのは、それほど当時、政府の対応策への鋭い批判があったことを示している。事変勃発当初から中国国民の中の反日感情は高まっており、しかも南京の大学生らによる国民政府外交部長王正廷殴打事件(9 月 28 日)に現れたように、国民の批判の矛先は政府に向けられつつあった。さらに、戴季陶の回想によれば、事変勃発以来中国国民党員の心が広東の反蒋介石派と南京の中央支持派の間で完全に分裂し、団結を図ろうとしてもそれが実現できない状況にあったという[121]。

---

[118]このような主張には、戴季陶の日本の韓国併合に関する認識が濃厚に反映されていた。彼によれば、日本は中国に強制し締結させた日清講和条約の朝鮮独立条項を、日本側から破り朝鮮を「滅ぼした」。日本は「最も古くからの大恩徳がある隣国を滅ぼしたのであり、もはや今後締結する条約の有効性は保証できない。……中日間のあらゆる問題は国際的集団行動の下で初めて解決でき、解決後に初めて適切な保証を得られると確信する」。「六中全会決議案綱領草案」1939 年 10 月 28 日(『戴季陶先生文存』1071 頁)。

なお、日清講和条約(1895 年 4 月 17 日調印)の第 1 条は「清国ハ朝鮮国ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認ス。因テ右独立自主ヲ損害スベキ朝鮮国ヨリ清国ニ対スル貢献典礼等ハ将来全ク之ヲ廃止スベシ」となっている。

[119]鹿錫俊『中国国民政府の対日政策 1931-1933』(東京:東京大学出版会,2001 年 1 月)。

[120]戴伝賢「民国明日的希望」1931 年 12 月 14 日(南京『中央党務月刊』第 41 期,1931 年 12 月)。

[121]「題民国二十年外交三文件」1942 年冬月(『戴季陶先生文存』381 頁)。

戴季陶は「外患や外敵は憂慮する必要がない。憂慮すべきことは自らが一致団結することができないことである」と述べたことがある。前掲「民国明日的希望」。

なお、1935 年 6 月、胡適は王世杰に対し、「三年あるいは四年の混戦、苦戦、失地、壊

また、戴季陶は 1932 年に、柳条湖事件を起こした日本を批判して、中国から文化を学んでいた「小学生」に過ぎない「ちっぽけな日本(原文は「一個小小的日本」)」[122]が「ここ数十年間に豊かになったが仁をなさず、強くなったが礼の行為を守らないことによって、まさに後にその子孫に無窮の禍の種を蒔いた」[123]と述べた。

彼は中日戦争における日本の敗北を予測していたが、その根拠は主に日本国民の政治的不覚醒と、日本の東洋文化からの逸脱であった。日本国民の政治的不覚醒とは、日本国民の大多数は中国革命に対して理解を示さず、政府の中国政策を転換させられないでいることを指す。また、日本の東洋文化からの逸脱とは、日本はこれまで東方文化の恩恵に浴してきたのであるから、当然、東方文化の祖国である中国に対しては、中国革命の意義を理解し援助するべきなのである。ところが日本はそれを裏切って、中国革命の進展を阻害し武力侵攻を行った。日本は中国に「恩を仇で報いる」ような「不忠不孝不仁不義」の行いをなした[124]ということを指す。

他方、戴季陶は日本国民の主体性への期待も忘れていなかった。すなわち、日本は「国際連盟憲章[125]、非戦公約、九ヶ国ワシントン条約、およびあらゆる国際公法上の原則と慣例に違反」し、「世界公理を蔑視し、世界正義に違反」したと批判する一方、「日本軍閥の横暴さは……ただ中国に横蛮暴虐なる圧迫を加えるのみならず、日本にも同じことをしている。……もし日本人民の道徳観念がまだ睡っていないならば、必ずや覚醒し正しい奮闘をなし、自らの国家の運命を維持することを期すであろう」[126]とも論じたのである。

盧溝橋事件勃発(1937 年 7 月 7 日)後、戴季陶は、日本国民の主体性と道徳観念が「狂ってしまった」[127]と断じ、他方で、中国の「積弱」ぶりが日本を狂わせた一因であると認識した[128]。

> われわれは努力し懸命になることで、すでに狂ってしまった日本国民に〈*中国に学ばなくなり、大陸の侵略を企てたような〉七十余年前の中国に対する態度を二度と取らせないことができるのである。……われわれ中国人が力を有し、

滅を決心」して犠牲を払い、「太平洋での国際戦争の実現」が促進されるのを待つことを提案した。王世杰は胡適に対し、胡適の提案は、戴季陶、居正、孫科らが主張する、国民が団結することによって苦戦を遂行することと通じている、と述べた。「胡適致王世杰函」1935 年 6 月 20 日、「王世杰致胡適函」1935 年 7 月 11 日(胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿』第 4 冊(台北:聯経出版,1984 年 5 月)1387-1388 頁、1391 頁)。蒋永敬『抗戦史論』(台北:東大図書,1995 年 10 月)381-383 頁より転引。

[122]「童子軍対於社会国家民族世界人類応負的責任講詞」1932 年 11 月 8 日(『戴季陶先生文存』813 頁)。ちなみに戴季陶は、朝鮮(原文は「高麗」)を「われわれ〈*中国〉の学生」と述べている。

[123]「東北血痕序」1932 年 4 月(『戴季陶先生文存』1353 頁)。

[124]「先烈朱執信先生殉国紀念大会」1931 年 9 月 21 日(南京『中央党務月刊』第 38 期,1931 年 9 月)。

[125]ヴェルサイユ条約の冒頭に該当する。

[126]戴伝賢「東北事件近状及国人応有的努力」1931 年 10 月 26 日(南京『中央党務月刊』第 39 期,1931 年 10 月)。

[127]「抗敵救国的要点」1937 年 8 月 5 日(南京『中央日報』1937 年 8 月 8 日付)。

[128]この言説と同様な言説は柳条湖事件後にも見られる。たとえば、前掲「童子軍対於社会国家民族世界人類応負的責任講詞」813 頁。

この力を用いることで初めて、日本人の狂った感覚を……そうでなかった昔のような状態に戻すことができるのである。また、日本の国家を生存の危険に晒させてやることで初めて、狂った者が改心できるのである[129]。

ここには「中国の隣国の二強国はロシア〈*ソ連〉と日本である。中国が弱ければ日本は中国の仇となり、中国が強ければ日本は中国の友となる」[130]、という中日の相互連関性についての戴季陶の認識が表明されている。他方で戴季陶は、日本文化の独自性を否定する一方で明治以来の「西方の制度」の摂取という点では日本を評価するという、一般的な近代中国の日本文化認識を共有しており、次のようにも述べている。

中国が刻苦発奮し自ら富強に努め、アジアのために盟主となり世界のために文明を進めるならば、日本は中国の妃となる。そうでなければ日本は中国の仇となる、ただし中国の敵ではない。思うに敵とは、相対した完全なる独立体であり、自生の特性、特質を有するものである。ところが日本民族は、自生の歴史を持たぬ東方の幼い民族である。日本の宗教は、自生でなく、また創造的でない東方の幼い宗教である。日本の言語、文字は、中国とインドで発明された語文であり、独立したものでなく発明されたものではない。日本の文物、制度は、世界各国の文物、制度によって作られたものであり、独自に建設されたものではない。このようなものがどうして敵であり得ようか。不仲の連れ合いを仇というが、これこそよくいい当てている。しかしながら日本の進歩は驚くべきものであり、実に学び取るに値するのである。その上、中国の文物で大陸において失われたものが、なお少なからず海島には存在し、日本を考察することはとりわけ必要である。近代において西方の制度を採用し、東方に新しい国をうち建てたという、日本が卵を孕みそれをかえしてきた道については、さらによく専門的に研究しなくてはならない[131]

ここで戴季陶は、日本国民に対する文化的批判への傾斜を強めつつも、日本を救うため(ひいては中国を救うため)に、中国国民、中国国民党員に対し自強を促そう(日本を研究することを含む)と訴えたのである。

さらに戴季陶は、日本の中国侵略について次のように分析する。

日本がわれわれ中国を亡ぼそうとする一貫した計画の主要な点は、第一点は、日本は中国の辺疆、たとえばモンゴル、新疆、チベットなどで悪辣な破壊、離間運動を実施し、われわれの大部分の領土内の同胞を知らぬ間にだまして中国から離脱させることである。第二点は、〈*日本は〉われわれ中国内部の団結を破壊し、中国政府を混乱させ、本党の力を分散させることである。……このような計画は、外からわれわれを侵攻するものであり、また、内部からわれわれ

[129]前掲「抗敵救国的要点」(南京『中央日報』1937年8月8日付)。

[130]前掲「中日俄三民族之関係」。戴季陶は、「ロシア〈*ソ連〉はいつまでも中国の敵である」と述べている。

また、この言説と同様な言説は柳条湖事件後にも見られる。たとえば、「救国週刊序」1934年10月24日(『戴季陶先生文存』1383頁)。

[131]「游日紀要序」1933年2月(『戴季陶先生文存』1361頁)。

を侵攻するものであると言える。……国民は互いに固く信じることができないならば、抵抗する力は減ることになり、国家の根本まで危機に晒してしまう。……われわれ中央を強化することこそ、全国民の生命の唯一の活路である[132]。

戴季陶は、中日関係は行くところまで行かざるを得ないと割り切りながら、将来は「古き良き時代を取り戻す」時が来ると希望を付け加えている[133]。

私は両国の将来が必ず一つに結合すると堅く信じている。しかしいかにしてそこに達するのか、いつ達するのか、達した後どのようになるかについて、私の見るところひじょうに心を痛めるものである。……俗話に黄河に到らざれば心死なず(物事がどうにもならぬところまで行き着くまでは決して心を翻さない)というが、中国もこの通り、日本もこの通りで、中日両国共同の関係もまたこの通りである[134]。

私は現在の世界の変わり果てた姿について、最後に必ず……行くところまで行けば道が開かれる時がくる。また二千年来の交流を有する中日両国民も、必ずその古き良き時代を取り戻す、と深く信じている[135]。

戴季陶は東方(中国)文化に対する信頼を示し、強大な日本に立ち向かうためには、日本を小さく中国を大きく見ることによって、自己の抵抗の精神的よりどころとしていた。さらに、そのような東方文化論は党、政府の重要構成員として自強と内政の安定を指導するための思想的根拠でもあった。当時の中国人の抵抗のよりどころであった民族意識には、そのような側面があったことを窺うことができる。

まとめ

第一章を通して次のことを明らかにした。

第一に、戴季陶が国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方をとるようになった経緯である。戴季陶は日本留学を通じて、辛亥革命以前から、個人の活動が国家を成立させ、個人の精神が法律を作り、国家成立の要素となると認識するようになった。そして、第二革命後には日本の国民精神を分析し、日本の中国政策を研究し、中国の革命を成就させるためには国民精神の形成が必要であると論じるようになった。

第二に、第一で述べたような戴季陶の見方が彼の対日批判の言動にどのように反映されたかである。戴季陶は一貫して、中国が日本よりも弱く、日本国民が理想的な中日関係について覚醒していないために、日本は対外侵出を行っているのであると分析していた。戴季陶はとくに五四運動時期以降、日本国民に対し、政治的に覚醒し、日本政府に運動して中国、朝鮮政策を転換させるように呼びかけると同時に、

---

[132]「団結救国」1933年4月17日(南京『中央日報』1933年4月18日付)。

[133]戴季陶の中日関係に対するこのような考え方は、すでに1910年代半に表明されていた。例えば、戴天仇「日支親善の理想境」(東京『第三帝国』第45号,1915年7月5日付)。

[134]「示安国児」1934年9月3日(『戴季陶先生文存続編』334頁)。

[135]「致張孟劬先生書」1935年8月11日(『戴季陶先生文存』63頁)。

中国国民に対し、内政の再建と富強を訴えたが、日本国民、中国国民には、それぞれ戴季陶が期待するような反応を得られず、苦心した。また、1930年代以降は、東方(中国)文化に対する信頼を示し、党、政府の重要構成員として抗日および自強と内政の安定を指導するための思想的根拠とした。

(念紀權民)

戴季陶は1912年3月、上海で中華民国自由党機関紙『民権報』の編集職に就いた。**(前列左4)**

1912年3月から1913年7月にかけての撮影

【典拠】上海『民権素』第1集,1914年4月

第二章　孫文理論学説に対する解釈

本章では、国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという戴季陶の見方が、彼の孫文の理論学説解釈にどのように反映されたのかを、中国国民党員論の展開に重点を置いて論じていく。

第１節　五四運動時期における国民精神論

五四運動時期における社会的特徴は、工業化による都市労働者の激増と、教育機会の拡大を背景とする性の社会的序列の動揺[1]、国家志向から解放された自立した知的活動に基盤を持つ知識人の形成であった。この新しい知識人は、堕落した共和政治への失望、第一次世界大戦とその終結後の諸革命の勃発と列強の植民地問題の処理への反発を背景とする資本主義への懐疑、農民や新たに出現した都市労働者との関わり方などを問題視した。そして彼らは、強権に対する公理の勝利を追求すること、個人の社会倫理を喚起し真に人間的で平等な社会を形成することを課題と考え、その課題の解決方法として社会革命を模索した。

無政府主義は労働と相互扶助を基礎とし、啓蒙と科学教育の活動を展開する小集団が連合して、個人の社会倫理が喚起され、人間的で平等な社会が形成されるという展望を示し、社会革命の方法を示唆する思想として、知識人の間に浸透した。知識人は、農民や都市労働者を政治的能力を持たない存在と見なしつつも、教育によって農民や都市労働者は自己組織能力を備えた社会の構成員となるだろうと展望した。新村運動、工読互助団、ギルド社会主義、サンディカリズムの提唱はこのような思索から生み出されたのである。

またマルクス主義も、ロシア革命の成功、カラハン宣言による不平等条約の撤廃、民族問題と植民地問題の解決に科学的な正当性を与えてくれる理論として、知識人の間に浸透した。同時に、知識人の中にはその経済決定論と階級闘争の主張に対して、個人の主体的役割が軽視される恐れと、また、階級という全社会の一部分だけが利益を得る不平等を生むのではないかという懐疑を表明する者もあった[2]。

五四運動時期の戴季陶[3]は、世界からは「デモクラシーの新気運」が押し寄せ、国内にあっては「国民の大覚醒」がある中で、ついに労働者の政治的自立の時が到来したことを実感し、労働者に現れた「組織能力」が「国民という大集団社会へ拡

---

[1]五四運動時期の社会主義的な女性解放の言説と優生思想(人口管理)の関係については、坂元ひろ子『中国民族主義の神話』(東京:岩波書店,2004 年 4 月) から示唆を受けた。

[2]五四運動時期の思想の歴史的意義については、A.Dirlik,*The Origins of Chinese Communism*,Oxford University Press,1989 から示唆を受けた。同書の日本語要約については、湯本国穂「国民党統治開始期における政治的思惟(1)――『新生命』、羅隆基、胡適を中心に」(『千葉大学法学論集』第 7 巻第 1 号,1992 年 6 月)を参照した。

[3]当時、戴季陶は上海で生活していたため、主に上海の労働問題を取り上げていた。

げ」られ、国民が「自由で自主的な結合」を作り上げていくことを熱望した[4]。どのようにして中国の国民精神を形成するかという戴季陶の考えは、階級社会を消滅させるまでは労働者と知識人による独裁を強化しなくてはならないというマルクス主義理論と親和した。

戴季陶は辛亥革命前には、「社会主義は人道主義であり、世界主義である」[5]と述べ、社会主義を人道精神に基づいて国家間の競争を解消し世界平和を展望する[6]思想として認識していたが、五四運動時期には、マルクス主義が世界中の社会主義諸思想の代表的思想になっていると認識するに至った。彼によると、マルクスは「社会主義の「集大成者」であり、社会主義の「科学的根拠」の創造者である」が、独・仏・露・英などの国々で「マルクス主義の分化」が生じた。分化の原因は「各民族の歴史的精神と現代の境遇の違い」である。マルクス主義は「厳格な主義ではなく、ただの世界的時代精神」に過ぎない、と言う。そして、「各国が行く道はいずれも自らで自由に選択して切り拓いたのである。われわれが世界の時代精神に適応して進歩した生活を求めるならば、われわれが歩むべき道は自ら開拓しなければならない。自ら開拓した道こそ自らの正しい道である」[7]、と言う。戴季陶にとって第一に問題なのは中国社会の実情であり、世界での社会変革の経験を、中国での社会変革に活用させようとしたのである。このことは、彼が、革命の究極の目的は「全人類の普遍的で平等な幸福」の実現であるが、目下の目的は「中国国家と社会の改造」、「中国人民の全体的経済生活の改善と経済の機会均等」であると述べていることからも明らかである[8]。

戴季陶は、五四運動(1919 年 5 月)が旧政治勢力の強い北京で勃発したことは「迷信」に対する「科学」の勝利であり、「科学の知識を持って初めて愛国を知るのであり、科学の知識から発生した愛国心こそ真の価値を持つ」[9]と謳い、また 1920 年には、マルクス主義への傾倒を強めた。この時期、彼は労働者と資本家が相容れない存在であり、階級闘争が不可避であると明言している[10]。

戴季陶は、「革命独裁」に対し理解を示し、労働者が階級的自覚を持ち、社会革命に参加することを構想した。この構想は、労働者が政治の舞台に登場し、マルクス主義理論が伝播してきたという、五四運動時期に生じた新しい出来事を背景として、民主と経済発展をともに追求して社会主義に至ることを展望したものである[11]。

彼によれば、第一次世界大戦後の世界は「国家主義と資本主義の破綻」が生じ、発達した資本主義国では「大衆が担う社会主義共和国への転換」、「労働者による産

---

[4]季陶「中国人的(組織能力)」(上海『星期評論』第 1 号,1919 年 6 月 8 日付)。
[5]天仇「無道国」(上海『天鐸報』1911 年 2 月 2 日付)(『戴季陶辛亥文集』516 頁)。
[6]天仇「社会主義論」(上海『天鐸報』1910 年 12 月 4 日付)(『戴季陶辛亥文集』325 頁)。
[7]季陶「「世界的時代精神」与「民族的適応」」(上海『星期評論』第 17 号,1919 年 9 月 28 日付)。
[8]戴伝賢「革命!何故?為何?――復康白情的信」(上海『建設』第 1 巻第 3 号,1919 年 10 月)。
[9]季陶「潮流発動地点的変動」(上海『星期評論』第 1 号,1919 年 6 月 8 日付)。
[10]季陶「新年告商界諸君」(上海『星期評論』第 32 号,1920 年 1 月 11 日付)。
[11]戴季陶の五四運動時期における思想については、湯本国穂の前掲「五四運動状況と戴季陶の思想」と「戴季陶」(前掲『近代中国の思索者たち』)から示唆を受けた。

業管理の出現」が起こった。これらは、資本活動が世界的規模に拡大して世界の労働者の生活が困難になったことから生じる、「共作、共有、共享の互助世界の建設」という世界的な動きであると言える。中国国内で労働者が政治の舞台に登場したことも、その世界的な動きの一環であり、中国の「国家と社会の改造」を要求するものである。したがって、今後中国は、労働者の生活の必要に根ざし、改造の必要性を自覚した労働者が組織化されることによって、労働者の生活改造と民主国家の建設を達成しなければならない[12]。

また、彼は、マルクス主義(戴季陶は「科学的社会主義」と称することもある)理論とともに、イギリスの労働組合やフランスの労働総同盟の社会的地位の向上やアメリカの農民運動から誕生したＩＷＷ(世界産業労働者組合)の活動、そして第一次世界大戦における欧洲諸国の社会政策などを研究し、それらにみられる制度的工夫を中国の問題の解決に役立てようとした[13]。そして、ロシアのボルシェビキが建設した政治組織と経済組織やイギリスの労働者のように、中国の労働者も五四運動を通じて自己の社会的、経済的利害を自覚し、自主的に労働者組織を作っていくことを期待した。

しかし、戴季陶は、現実の上海の労働者は賃金が極端に低く、「知識欲を生じる余地」がなく、自主的団結の条件が整っていないと判断し、政府による労働者「保育」と「訓練」はやむを得ない、と考えるに到った。彼はこの政府による労働者「保育」、「訓練」を「労働者政府の準備」と称し、中国の問題を解決しつつ社会主義へ移行する過渡的必要と位置づけた。そして、広州に「広東労工政府」を設立し実施する計画を立てた[14]。その計画によると、「広東労工政府」は、「生活の中で欠乏と痛苦を体験し、その由来を理解している」ために「階級意識」を持っている労働者と失業者、そして「社会の欠陥を認識している」ために「階級意識」を持っている一部の知識人から組織される、というものであった。

ただし、戴季陶は、社会変革において、労働者と知識人は「階級意識」を持つだけでは不十分であると考えた。彼は、労働者と知識人は社会変革によって作られる新しい社会と国家に適した国民精神を先取りして身に付けなければならないと考えたのである。その国民精神とは、人々の普遍的な救済を目指す「自由、平等、博愛の精神」と、自己の物的満足を犠牲にして、社会的良心の満足を願う「犠牲的精神」であった。戴季陶はこれらをそれぞれ「仁」、「義」と称した[15]。彼にとって「仁」、「義」は、将来の社会と国家に対応し、現在の労働者と知識人に必要とされる、内容を一新した道徳を意味した。

---

[12]季陶「国家主義之破産与社会的革命」(上海『星期評論』第 47 号,1920 年 4 月 25 日付)。
[13]季陶「関於労動問題的雑感」(上海『星期評論』第 48 号第 4 張,1920 年 5 月 1 日付)。
[14]戴季陶「我所起草的三法案」、同前「広東省商会法草案理由書」、同前「産業協作社法草案理由書」1920 年 11 月、同前「広東省工会法草案理由書」(広州『新青年』第 9 巻第 1 号,1921 年 5 月)。
[15]前掲「革命!何故?為何?――復康白情的信」。季陶「旧倫理的崩壊与新倫理的建設(上)」(上海『星期評論』第 20 号,1919 年 10 月 19 日付)。季陶「旧倫理的崩壊与新倫理的建設(二)」(上海『星期評論』第 25 号,1919 年 11 月 23 日付)。

第２節　孫文理論学説の受容[16]

１．背景

戴季陶は中国同盟会に入会(1911 年)して以来、中華民国自由党、国民党、中華革命党、中国国民党に属し、孫文の理論学説に普段から接近し、研究できる立場にあったのであるが、実際に孫文理論学説に接近し、研究を行っていったのは、1924 年からである。

1924 年以前における戴季陶は、一貫して、中国が自強していくために教育を通じて国民精神を形成し、国民生活の安定、国際平和の実現を図ることを主張して、人道主義や社会主義に接近してきた。

戴季陶の 1924 年以前における著作の中には、国民党の政策を論じたもの[17]や「三民主義」の語を用いて辛亥革命の失敗原因を追究したもの[18]があったが、彼はそれらの著作において、三民主義そのものが政治理論として現実にどれほど指導性と主動力を発揮でき得るかを追究していたわけではなかった。そして、彼は 1919 年 6 月頃上海で孫文と会談し、孫文が中国を平和、自由、平等な国家に改革する主義は

---

[16]本節では基本的に、前掲陳天錫『戴季陶先生的生平』、前掲李雲漢「戴季陶」、前掲鄭則民「戴季陶」、前掲范小方・包東波・李娟麗『国民党理論家戴季陶』、前掲黎潔華・虞葦『戴季陶伝』の戴季陶の伝記、および、前掲白永瑞「戴季陶の国民革命論の構造的分析」第 12 号,18-26 頁、30-32 頁を参照した。

また、戴季陶の孫文理論学説の解釈については、次の先行研究からも示唆を受けた。

・李雲漢『従容共到清党』(台北:中国学術著作奨助委員会,1973 年 8 月影印)398-409 頁

・前掲王宗文「書評:戴季陶著「孫文主義之哲学的基礎」」1982 年 12 月,151-162 頁

・陸宝千「中国国民党対総理遺教解釈之確定」(中央研究院近代史研究所編『抗戦前十年国家建設史研討会論文集』下冊(台北:中央研究院近代史研究所,1985 年 5 月再版)5-26 頁)

・袁偉時『中国現代哲学史稿』上巻(広州:中山大学出版社,1987 年 6 月) 542-556 頁、811-827 頁

・高軍ほか主編『中国現代政治思想評要』(北京:華夏出版社,1990 年 3 月)333-354 頁

・王功安主編『国共両党関係通史』五巻合訂本(武漢:武漢大学出版社,1991 年 8 月)178-180 頁

・前掲賀淵『三民主義与中国政治』1995 年 2 月初版、1998 年 4 月第二版,第二版 100-102 頁、135-141 頁

・北村稔『第一次国共合作の研究』(東京:岩波書店,1998 年 4 月)72-73 頁

・呉雁南ほか主編『中国近代社会思潮』第 3 巻(長沙:湖南教育出版社,1998 年 8 月)151-163 頁

・陳哲夫ほか主編『現代中国政治思想流派』上巻(北京:当代中国出版社,1999 年 2 月)494-516 頁

・曹躍明『五四以来的保守主義思潮』(西安:西北大学出版社,2000 年 9 月)44-53 頁

・楊奎松「“容共”,還是“分共”?――1925 年国民党因“容共”而分裂之縁起与経過」(北京『近代史研究』2002 年第 4 期)54-60 頁

[17]たとえば、天仇「国民国家与国民党――我所希望於国民党者」(上海『民権報』1912 年 8 月 29 日付-30 日付)(『戴季陶辛亥文集』1157-1161 頁)。

[18]たとえば、前掲「中国革命論」1914 年 6 月。戴季陶は、辛亥革命の失敗は、革命党員が満洲族排斥の「種族革命」を実行するために三民主義の中の民族主義ばかりを取り上げ、「民権自由主義と社会主義に力を用いることが少なかった」ためである、と言う。しかし、この著作では「民権自由主義」(民権主義)と「社会主義」(民生主義)に関する具体的な検討は行われていない。

三民主義であり、知識人による労働者への教育が重要であると述べたことに対し賛意を示しつつも、中国における労働問題の発生を労働者の直接行動ではなく、知識人が「温和な社会思想」について社会を啓蒙し、労働者を教育することで平和的に解決すべきであるとし、戴季陶自身も労働問題の「研究、批評」の立場を守り、実際に労働者の直接行動を指導しないとして、民生主義を取り上げて労働問題に関する具体的な対応策を検討することはなかった[19]。

また、戴季陶は中国の経済や国民の知識程度から判断して、階級闘争は中国社会の実情に適さないことと、中国国民は古来の「平和、互助の精神」や「利他」の精神を発揮して、西方の「科学の精神」を受容し、理想的な「平和国家」、「互助社会」、真の「デモクラシーの国家」、「デモクラシーの社会」の建設を行うべきこと、を主張した。この時、彼はいまだ三民主義に基づく中国革命の必要性を主張していなかった[20]。

さらに、1920 年代初には、新村運動、工読互助団、ギルド社会主義、サンディカリズム、聯省自治、地方自治、そして戴季陶の「広東労工政府」構想は、いずれも挫折するか、そうでないとしても大した成果を挙げないまま知識人の関心を惹かなくなってしまった。

戴季陶は五四運動時期に陳独秀、施存統、陳望道、李漢俊、兪秀松、張国燾など共産主義グループと交流し、1920 年 6 月、上海の共産主義グループによる「社会共産党」の設立の第一回会合に関与したとされる[21]。しかし彼は、その共産主義グループの二度目の会合が開かれる前（6 月 17 日前後）に、孫文の反対もあり、精神衰弱の療養のために上海から浙江省呉興県に発ち、共産主義グループの活動から遠ざかった[22]。

戴季陶は 1920 年末から 1922 年初にかけて、上海証券物品交易所での仲買事業と浙江省呉興県での読書生活を併せて行ったが、政治活動と執筆活動を行うことはなかった。1922 年 9 月になって彼は、孫文から四川省の各将領に戦争を止め実業発展を図るように説得するという任務を負わされ、上海から長江を遡り成都に向かった。

---

[19]季陶「訪孫先生的談話」（上海『星期評論』第 3 号,1919 年 6 月 22 日付）。

[20]季陶「対付「布爾色維克」的方法」（上海『星期評論』第 3 号,1919 年 6 月 22 日付）。

[21]「党」の設立のために二度会合がもたれ、二度目の会合で「党」の結成がなされたが、戴季陶は一度目の会合に出席したとされる。

[22]「社会共産党」の結成過程とその時期の戴季陶の言動については、前掲石川禎浩『中国共産党成立史』57-58 頁、182-184 頁、355 頁、393 頁、395 頁を参照した。

また、末次玲子によると、五四運動時期の戴季陶は、孫文側近の一部による安福派（徐樹錚、王揖唐らを中心とした国会議員グループ,段祺瑞ら安徽派と結び付く）との政治取引に反対したという。前掲末次玲子「五・四運動と国民党勢力」316-318 頁。そして、桑兵によると、同時期の戴季陶、胡漢民、廖仲愷、朱執信らは、孫文や彼の理論学説を離れて、孫文による北京政府との政治取引に反対するだけでなく、胡適、陳独秀らの五四新文化運動に積極的に参加し、唯物史観の影響を受けソヴィエト・ロシアと共産主義者に共感し、その上、共産主義グループによる党の結成にも関与したため、孫文の不満を買ったという。桑兵の「陳炯明事変前後的胡適与孫中山」（前掲『孫中山的活動与思想』254-259 頁）と「世界主義与民族主義――孫中山対新文化派的回応」（北京『近代史研究』2003 年第 2 期）86 頁。

この途中、戴季陶は船から身を投げてしまう。結局、彼は近くの漁師に救われ、そのまま成都に向うことができた。その後約 1 年間、彼は成都に留まり[23]、1923 年 12 月にようやく上海に戻った。

戴季陶が入水したことについて語ることは少なかった。1924 年 11 月に彼が語ったところによると、入水によって「精神状態は一変」し、「仏化」したという。

> 私が揚子江に投身自殺を図つたことですか〈*が〉、別にこれといふ憤慨した事もなければ不満があつた訳でもありません、一言にして云へば無常の感とでも云ひませうか、あれからは私の精神状態は一変しました、私はこの世のすべてを歴史的宿命であると考へるやうになつた、人間のする仕事はその時は非常に大きなやうに思つても十年二十年経つて顧みて見るとすべては歴史が定めた宿命です、私は之を考へて〈*、〉人間は出来るだけ努力するにあると思つてゐます〈*。〉努力の中には悲観も楽観もないと云ふ結論に到達したのです、私は今仏教の本を読む様になつた〈*。〉
>
> 日本では私が余程赤化したかのやうに思つてゐるらしいが〈*、〉さう思つてゐる人があるならばそれは赤化でなく仏化であると告げて下さい[24]

戴季陶が言う「仏化」とは、彼の 1926 年における回想によると、彼が 1922 年に長江に入水し救助される間に、この世に仏法があることに思い至り、仏教信仰の念が確定した[25]ことを指すものと考えられる。

そして、戴季陶は自分が「仏化」し仏教を信仰していることを、「赤化」していないことと絡めて述べていることから、中国国民党改組(1924 年 1 月)による国共合作に対する戴季陶の考えも含まれていたであろう。

以下、中国国民党改組による国共合作に対する戴季陶の考えを検討し、戴季陶が 1924 年頃から孫文理論学説に接近し、研究を行っていった原因を明らかにしたい。

戴季陶は 1924 年 1 月、広州で開かれた中国国民党一全大会に出席した。彼は一全大会の会期中、1922 年から 1923 年までの四川滞在時に見聞した四川省の内戦、政治的混乱、人心退廃の原因は、中国同盟会以来中国国民党の党員の訓練不足、組織不足にあると指摘し、中国国民党が一全大会を機にボリシェヴィキの訓練、組織の方法を取り入れ、「訓練され組織された戦闘的な団体」に改造されることを期待し、彼は孫文と三民主義に対して忠誠を示した[26]。

---

[23]1922 年、四川省議会は戴季陶を四川省憲法起草委員会主任委員に任命した。1923 年 1 月四川省憲法起草委員会が設立し、3 月同委員会は四川省議会に「四川省憲法草案」を提出した。「四川省憲法草案」(上海『太平洋』第 3 巻第 10 号,1923 年 6 月)。前掲『民初的地方主義与聯省自治』266-267 頁、355 頁。

[24]村田特派員〈*村田孜郎〉「孫文氏と同船して」1924 年 11 月 22 日(『大阪毎日新聞』1924 年 11 月 23 日付)。

[25]「八覚――序言」1926 年 7〈*7-9〉月(『戴季陶集』上巻(上海:三民公司,1929 年 11 月)10-16 頁、20-22 頁)。

[26]戴季陶は、中国国民党総理孫文は中国国民党の「主義の導師」であり(戴季陶は「三民主義之革命導師」とも言う)、孫文の「博愛」精神や「仁愛的道徳」は党員の模範である。したがって、中国国民党の総理制は「主義の人格化」を意味し、ほかの一般的な総理制と全く異なる、と述べている。「致熊錦帆諸先生書」1924 年 1 月 27 日(『戴季陶先生文存』952 頁、962-964 頁)。

そして、戴季陶は一全大会直後、辛亥以来の革命の失敗を顧みて、「人道主義」(戴季陶は「中山先生の博愛を基礎とした世界的文化的な民族主義」とも言う)を理解せず「排満」のみを革命と考える者、欧米の憲政に憧れ自国民の知識程度を慮らずに国会設立に奔走した「憲政派と自称民主主義派」、「無政府主義者」を「一民主義者」として批判し、中国国民党の改組と一全大会を経て「有志青年」(中国国民党員)は、「世界で民族主義が押し寄せて来ている真象」と、欧米、日本が強盛である「根源としての文化は何か」を見、生活苦の中国国民の「泣き声」を聞き、孫文と彼の三民主義を信奉しなければならない、と主張した。彼は、現在の「中国の青年」は、ロシア革命とワシントン会議の「二つの歴史的事件を教訓と見なして、次第に覚醒してきて、学問の世界だけの(原文は「清談的」)文化運動を部分的な社会的運動に進め、部分的な社会<*的>運動をさらに具体的な政治運動に進」めてきた。これにより「国民党の改造運動の機運が熟したのである」。「もし中華民国が動揺しないならば、三民主義は動揺することはあり得ない。もし三民主義が発展できるならば、中華民国は発展できる」、とも述べた[27]。

戴季陶はこのように、一全大会からその直後にかけて、中国国民党改組後の党員が中国国民を指導することによって国家の自強が実現されることを期待すると表明していたのであるが、一全大会閉幕後(1月)、党の役職に就くことを辞退し広州を離れてしまった。結局、廖仲愷、次いで孫文が、戴季陶に広州で役職に就くことを再三呼びかけたため、戴季陶は4月初、広州に戻り中央の党務と政務に就いた。しかしながら、6月に再び離職して広州を離れてしまった[28]。戴季陶の回想によると、彼は広州に戻った後の5月、中国共産党員の(国共合作により新たに中国国民党員となった)譚平山と中国共産党員の二重党籍の問題で対立し[29]、次いで翌6月、中国国民党の古参党員で容共政策に反対する張継と感情的に衝突した[30]ため、再び離職したのであるという。

離職し上海に着いた(6月末)戴季陶は、この時初めて、孫文の理論学説を体系化する意思を表明している。

---

[27]「国民党的継往開来」1924年(1月?)(『戴季陶先生文存』946-949頁)。

[28]「呈総理懇辞中央執行委員会秘書及宣伝部長文」1924年6月20日(『戴季陶先生文存三続編』163-164頁)。邵元冲『邵元冲日記』王仰清・許映湖標注(上海:上海人民出版社,1990年10月)20-21頁の1924年6月19日の条、20日の条、22日の条。

[29]「致蒋介石先生書」1925年12月13日(『戴季陶先生文存』981-982頁)。

[30]前掲「致蒋介石先生書」983頁。戴季陶は、張継とのこの衝突を戴季陶が1924年8月に離職し広州を発った原因であると述べているが、これは彼の記憶違いであろう。

中国共産党員の包恵僧によると、戴季陶と張継などが中国共産党の問題について討論する中で、張継が戴季陶を「共産党の走狗」と罵り、戴季陶が張継を「北洋軍閥の使い走り」と罵り返した。そして二人が次第に口論を始めて、激昂した張継が戴季陶を「保皇党から共産党へと至った転変常なき小人」と罵倒し殴打したという。包恵僧『包恵僧回憶録』(北京:人民出版社,1983年6月)147頁。

包恵僧の回想ではこの戴季陶と張継の衝突が起きた日付を記していないが、白永瑞は「中央執行委員会反共産党的大武劇」(香港『華字日報』1924年6月23日付)(著者未見)を引用し、その日付を1924年6月19日と確定している。前掲白永瑞「戴季陶の国民革命論の構造的分析」第11号,6頁、23頁。

孫先生自身が発表された主張を根拠にし、孫先生の人格および思想、〈*思想の〉発生の経路と時代背景について科学的方法を用いて系統的に組織立て、本の原稿にまとめ、孫先生に審査を願って出版したい[31]

ここで注意しておきたいのは、戴季陶は中国国民党改組を支持しつつ、孫文の理論学説の体系化を行おうとしたことである。彼は同じ時期に、現在の中国国民党は「組織上優れた方法」で党内に「活気を呼び起こしている」[32]と述べ、党の改組に対して支持を表明していた。

その後、広州の中国国民党中央執行委員会が戴季陶の復職を要請した[33]ことに対し、戴季陶は8月初頃孫文に対し、復職の条件として、党内問題[34]を議論するために中国国民党中央拡大委員会を開催することを提案した。孫文は戴季陶の提案を承認し、戴季陶は8月10日前後に広州に着いた。しかし、戴季陶は拡大委員会(8月15日から25日にかけて広州で開催され、「国民党内の共産派問題」などを議論した中国国民党第一期中央執行委員会第二次全体会議のことか?)に出席しないまま、14日前後には広州を離れてしまった[35]。戴季陶が再び政治活動を行うのは、同年11月17日に上海で、政局の収拾に当たるために北京に向かう[36]孫文一行と合流してからであった[37]。

以上のように、戴季陶は1924年の中国国民党改組以降、党員(改組によって新たに入党した中国共産党員と中国社会主義青年団員(1925年1月、社会主義青年団は共産主義青年団に改称)を含む)が孫文と彼の三民主義を信奉し、規律を明確にして党の一体性を強化し、国民を指導することによって、国家の自強が実現されること

---

[31]「戴季陶在滬之談話」(『広州民国日報』1924年7月2日付)。

[32]「戴季陶之談話」(広州『中国国民党週刊』第29期,1924年7月13日付)。

[33]1924年7月9日付、10日付。羅家倫・黄季陸主編,秦孝儀・李雲漢増訂『国父年譜』第4次増訂本下冊(台北:中国国民党中央委員会党史委員会,1994年11月)1498頁。

[34]戴季陶の回想では、彼はこの時「民族国際」構想(後述)を提案する用意があったと言う。

[35]前掲「致蒋介石先生書」983頁。前掲『邵元冲日記』40-42頁の1924年8月10日の条、11日の条、12日の条、13日の条、14日の条。

[36]1924年9月18日に第二次奉直戦争が勃発し、同日に孫文は「北伐宣言」を発表し、軍閥一般、帝国主義列強に反対すると述べたが、とくに直隷派への対決姿勢を明らかにした。10月23日、直隷派の馮玉祥が大総統曹錕を下野させ、段祺瑞(安徽派)や張作霖(奉天派)と手を結び、さらに孫文に対しても、北京に来るようにと呼びかけた(北京政変)。そこで孫文は、急遽北伐を中断し、北京行きを決意して11月10日に「北上宣言」を発表した。その中で、国民革命の時期には武力と国民とを結合させなければならないとし、具体的には国民会議の開催を目指すこと、対外的には一切の不平等条約の撤廃、対内的には「民治」の実現を追求することを宣言した。同月13日、孫文は宋慶齢、汪精衛などとともに広州を発ち、17日に上海に着いた。陳徳仁・安井三吉『孫文と神戸』補訂版(神戸:神戸新聞総合出版センター,2002年1月)239頁。

[37]前掲『邵元冲日記』77頁の1924年11月17日の条。

戴季陶の1925年12月における著作によると、1924年末における孫文の「北上」(北京行き)と外遊(北京での会談後に外遊する予定であった)の目的は、孫文の以前から主張していた、コミンテルンと国際連盟から独立し、イギリスに対抗するための国際組織である「大陸同盟」あるいは「民族国際」(後述)の設立を準備することにあった。戴季陶は孫文の「大陸同盟」あるいは「民族国際」の構想に賛同していたために、北上する孫文一行に合流したという。前掲「致蒋介石先生書」982-983頁。

を期待する立場から、改組を支持した。しかし、彼は改組後の党内で展開された共産反共産をめぐる党員の中傷を嫌い、1924 年に 3 度も広州(中国国民党中央の所在地)を離れた。そして、彼は中国国民党員の精神を形成する根拠を確保するために、孫文の理論学説を体系化する意志を表明したのである。

２．解釈の実際

戴季陶は 1924 年 12 月、孫文の「政治思想の根本」は「国家主義」である。すなわち、孫文は「世界の統一即ち国境をなくして世界の人々がお互(ママ)に手を握り合ふといふ時代の出現を理想」とし、そのように「世界を健全にする為めには国を強くせねばならぬ、一足飛びに世界の統一を図ることは出来ない。支那民族を率ゐて世界統一の事業に参加するためには先づ支那の国家を強くせねばならぬ」と考え、「国を強くする為めには個人を健全にせねばならぬ」のであり、「誠心、修身、斉家、治国平天下の階段を規則正しく踏んで行く」ことを主張した[38]、と論じた。

また、孫文没(1925 年 3 月)後、孫文の生涯で最も偉大な点は「創造的な精神により中国の文化を復興させること」[39]であり、孫文が創造かつ実践した三民主義は文化の復興を基礎としている[40]、「中山先生の逝去は、国民の政治訓育の基礎がいまだない時において、実に中国民族復興運動と文化的革命運動の一大挫折である」[41]と述べ、広州で開催された中国国民党第一期中央執行委員会第三次全体会議(一期三中全会)(1925 年 5 月)に出席し、「接受総理遺嘱宣言」案を代表執筆した(案は 5 月 24 日に採択された)。

> われわれの今日唯一の責任は、わが総理<*孫文>の遺嘱を完全に接受することにあり、……わが党の同志はただ全体一致して総理の遺嘱をその通りに実行するだけである[42]

戴季陶が孫文の理論学説を体系化し、著作の形で初めて公表したのは、1925 年 5 月 19 日付の「民生哲学系統表」(表ｃ)と「民生哲学系統表説明」である。この表と説明は、孫文の理論学説を戴季陶が初めて体系化したものであり、『孫文主義之哲学的基礎』(1925 年 6 月完稿)の執筆の準備作業であった。

(表ｃ)戴季陶「民生哲学系統表　<*民国>十四年五月十九日広州東山に於て」

誠(決心)	知(民族精神の原動力)(之を行うは艱きに非ず、之を知るは惟れ艱し)	知の能力	先知先覚、後知後覚、不知不覚	
		知の内容(格致誠正修斉治平)	学問	博学、審問、慎思、明弁
			経験	篤行

[38]戴天仇「支那を救ふは国家主義――孫文氏の思想に就て」(2)孔子に還れ(『大阪毎日新聞』1924 年 12 月 29 日付)。
[39]戴季陶「孝」(上海『民国日報』1925 年 3 月 20 日付)。
[40]戴季陶「革命与文化復興」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1925 年 3 月 14 日付)。
[41]「戴季陶回滬後之言論」(上海『民国日報』1925 年 4 月 18 日付)。
[42]「接受総理遺嘱宣言」1925 年 5 月 24 日中国国民党一期三中全会採択(栄孟源主編『中国国民党歴次代表大会及中央全会資料』上冊(北京:光明日報出版社,1985 年 10 月)80-81 頁)。「中国国民党接受総理遺嘱宣言」(『戴季陶先生文存』968-969 頁)。本稿では前者から引用した。

<table>
<tr><td rowspan="12">（善を択んで堅持す）

（終始貫徹す）</td><td colspan="6">↓（仁を知る）</td></tr>
<tr><td rowspan="11">仁（博愛）

（民生は歴史の中心を為す）</td><td>倫理的方面（民族精神の抽象的表現）</td><td colspan="4">忠孝、仁愛、信義、和平</td></tr>
<tr><td rowspan="10">政治的方面（民族精神の具体的表現）</td><td rowspan="10">三民主義（天下公と為す）</td><td rowspan="3">民族主義（民有）（人群進化）</td><td colspan="2">中国民族は自ら解放を求む</td></tr>
<tr><td colspan="2">国内各民族の一律なる平等</td></tr>
<tr><td colspan="2">世界の被抑圧民族全体の解放</td></tr>
<tr><td rowspan="2">民権主義（民治）</td><td>政権</td><td>選挙権、罷免権、創制権、複決権</td></tr>
<tr><td>治権</td><td>司法権、立法権、行政権、考試権、監察権</td></tr>
<tr><td rowspan="4">民生主義（民享）（世界大同）</td><td>目的（新共産社会の建設）</td><td>世界大同</td></tr>
<tr><td>方法（国家資本主義の建設）</td><td>平均地権、節制資本</td></tr>
<tr><td>主要問題（協作共享）</td><td>食、衣、住、行、育、楽</td></tr>
<tr><td colspan="6">↑（仁を行う）</td></tr>
<tr><td>勇</td><td colspan="5">敢えてす　（恐れず）　仁と為す</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="5">敢えてせず　（恐る）　仁と為さず</td></tr>
</table>

「民生哲学系統表」に附された戴季陶の説明（「表心」）によると、

天下の達道〈*人が行うべき永久不変の道〉は三、民族、民権、民生である。之を行う所以のものは三、智仁勇である。智仁勇の三は天下の達徳〈*変わらざる道徳〉である、之を行う所以のものは一、一とは何ぞ、誠である。誠とは善を択んで之を堅持するものである[43]。

[43]「民生哲学系統表――表心」1925年5月19日付。本論では次の日本語訳を参照した。「民生哲学系統表　表の核心」（戴季陶『孫文主義の哲学的基礎』中山志郎（山本秀夫）訳（東京：生活社，1939年10月）48頁と49頁の間）。なお、国民党赴日専使戴溥〈*傳（伝）〉賢「民生哲学の基本的概念」1927年3月12日（東京『支那時報』第6巻第4号，1927年4月）にも同様の説明が見られる。

戴季陶は1925年5月19日に「民生哲学系統表」と「民生哲学系統表説明」を作成し、21日に中国国民党の広州全市党員大会で講演した時に、講演者の一人である汪精衛に「民生哲学系統表」と「民生哲学系統表説明」を渡したようである。戴季陶演講，梁紹文筆記「怎様接受総理的遺教?」（『広州民国日報』1925年5月23日付）。汪精衛ら主要党員は「民生哲学系統表」と「民生哲学系統表説明」を読み、戴季陶の孫文解釈を支持したことが窺える。前掲戴季陶「孫文主義民生哲学系統表及説明」に附された汪精衛の文章（1925年5月21日付）。

季陶同志のこの著作は、総理の学説の系統脈絡を、精細にして明瞭に示している。中国を救おうと思うならば、総理の学説を研究しないわけにはいかない。同志が総理の学説を服膺し、至誠をもって総理の遺嘱を接受するならば、自然に総理の学説についてよく学び深く思考し、心からその意を知ることができるようになり、総理の学説を

つまり、誠は智、仁、勇を貫徹させる決心であり、智とは仁を知ること、勇は仁を行うことである。仁は仁愛そのものである。

また、「民生哲学系統表説明」によると、

孫中山先生の主義を研究する人はまさに先づ九事を知らねばならぬ。

第一、先生の基本思想は完全に中国正統思想たる中庸の道に淵源する。先生は実に孔子この方中国道徳文化における継往開来(過去の文化価値を再興し同時に将来の為に新たなる軌道を打開すること)の大聖である。

第二、先生の知識は近代最新科学を包含し、その一切の問題解決には必ず近代の科学的方法を以てする。

第三、先生の三民主義の原理は全部民生主義の内に包含され、その全部の著作は強いて之を名づければ民生哲学と曰ひ得る。

第四、先生一生の努力はすべて革命的手段を以て救国救民一切の個人主義的迷夢を打破し三民主義を実現するに在る。

第五、三民主義の最初の目的は民族の自信力を恢復するに在る。けだし民族の自信力にして恢復する能はずんば則ちこの弱且大(ママ)なる古き文化民族の衰老(ママ)病は救ふべからず、一切の新活動はそれと共に生れ得ずよし〈*、〉生れ得るとするも病理的状態たるを脱れず民族の危亡を救ふことが出来ぬ。

第六、三民主義の実行方法は全民族の共同の努力により国民革命を完成し国民革命の勢力を集中し、国家資本主義を以て民国建設の基礎を為す。

第七、三民主義の終極の目的は全世界の資本主義によつて発生せる社会病を対治〈*退治〉し、全人類の共同の努力を以て新共産社会を建設し、真正の民有・民治・民享の大同世界を完成するに在る。すなはち「均しく貧なく寡なく傾くことなきに安んず」る世界を造成せんとする。

第八、民生主義は共産主義と目的相同じく、哲学的基礎と実行方法とに於いて完全に相違す。先生曰く「共産主義は民生の理想であり、民生主義は共産の実行である」と、また曰く「マルクスは社会病理学者にして社会生理学者ではない」と。この四句は民生主義を研究する人の最も注意すべき格言である。

第九、先生の全人格は仁愛をその基本となしその一切のものが仁愛を表現してゐる。人に過ぐるの智はたゞ仁を知る為にのみ用ひ、人に過ぐるの勇はたゞ仁を行ふためにのみ用ひられた。こゝからして仁愛なくしては絶対に革命の存せぬことが明らかである。先生は宇宙の大徳の表現にして仁愛は即ち民生哲学の基礎である。その他一切の道徳は皆こゝより派生し仁愛を完成するに役立つのみである。

この九個の要点は一切の研究者の先づもつて理解し置かねばならぬものであり、先生の信徒たらんと願ふ人に至つては更に九個の条件を受け入れねばならぬ。もしかれの系統を離れかれの民生哲学の倫理性を抛棄し、たゞ我田引水

実行する場合には過ちを犯さないのである。わたしは季陶同志のこの著作に対し完全に同意し、その上季陶同志の篤勤ぶりに対し敬意を示すものである。汪精衛謹識　十四年五月廿一日

式に任意に個々の一点を利用してそれだけで孫文主義なりと説くならそは根本的に誤謬である。孫文主義と共産主義を同時に信ずることは不可能である、そこからは和衷共済の実は挙がらず革命勢力の統一は望まれない。他日一波いまだ静まらざるに一波また起り、国民の自殺を演成するに至る、これ痛苦の極である。中国人は千余年の老衰病に害せられ、歴史上強且小(ママ)なる民族に亡ぼされたこと数回に及んだ。今や欧米の科学文化に刺激されやうやく老衰病の中から脱れ出でんとして而もまた一個の小児病にとりつかれて了つた。老衰病の状態の中にあつて革命同盟会よりこの方種々なる歴史の事実は少なからぬ方面において革命党の小児病を現出するに至つた。私自身も亦この小児病にとりつかれた一人である。癸丑(一九一三年)以後早くより小児病に害なはれてゐた人は次第に少なからず老衰化の徴を示して来た。欧洲大戦ののち社会革命の潮流は中国に激流し来たり〈*。〉中国の革命青年はこれを迎へて春の筍の如く至るところに成長し始めた。まさに老衰せんとしてゐた、革命党はかゝる新たなる潮流を得て始めて一種の活気を吹き込まれたのであつて、確かに中国更生への一転機を劃すけれども、これと同時に一種の新たなる革命小児病が発生して来た。老衰せる民族のうちにあつて小児病に害された一群の青年層を指導し善を択つて固執しこれを始終にわたつて貫徹しつゝ革命の為に奮闘せる中山先生は人をしのぐ強壮なる肉体と精神を以て六十年の生涯を生き通し遂に不治の病ひに倒れた。これ実に老衰病および小児病に対する心痛がその活活たる気力を破壊し去つたのである。こゝに掲げる表は私が最近二ヶ月にわたつて北京および広州で各種の学校においてなせる講演の要稿である。講演の記録は四五万言を下らず一時に訂正して出版することは出来ないので、差し当つてこの系統表を印刷して同志各位に送るのである。この一個の簡略なる表は私の先生に従へる十余年間の成績なることを信じてゐる、「学びて思はざれば則ち罔し、思ひて学ばざれば則ち殆ふし」。されば愛国の志士、先生を崇敬するの信徒に希望す。諸子、切切実実に客気を棄てゝ一番研究工夫を做されんことを[44]。

戴季陶によれば、孔子が古代中国において編み出されてきた国家組織と社会組織の形態を理論的に整理して「学術的文化」(すなわち智、仁、勇、誠という儒教の徳目)にまで体系化し、孫文は「尭舜によって継承され孔孟に至って中断された仁義道徳」を継承したことにより、孫文の理論学説は中国の「正統思想」である、と言う[45]。確かに、戴季陶はこれまでにも、仁愛の徳目は農村社会で調和的な生活が維持できるように作用している、と述べたことがある[46]。彼はその著作で、中国の農村社会はボリシェヴィキの理論によると落伍していると認識されるが、仁愛の徳

[44]「民生哲学系統表説明」1925 年 5 月 19 日付。本論では次の日本語訳を参照した。「民生哲学系統表の説明」(前掲『孫文主義の哲学的基礎』中山志郎訳,48-50 頁)。

[45]前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』43 頁。戴季陶「科学与迷信」(上海『湖州』第 2 巻第 1 号,1925 年 4 月)。彼の言う「迷信」とは利己的であること、西方の科学技術を拒否すること、現実から逃避することを指し、彼は「迷信」の源泉を「個人主義」と名づけている。

[46]ここでは、戴季陶の原籍である浙江省呉興県が想定されている。前掲「致湖州後的感想」1920 年 8 月。

目に照らせば社会組織として機能していると言うことができるのであり、現在の中国では国家組織と社会組織の現状を的確に分析し将来の建設を着実に指示し得る理論研究が必要であると主張した。したがって、戴季陶の仁愛や「文化の復興」の主張は、中国の自強のために、中国固有の思想道徳の徳目に国民に対する説得力を付与し、儒教の組織化された(と戴季陶は認識するところの)精神、組織、制度を積極的に利用しようとした彼の意志の現れである[47]。

> 科学の文化はすでに頭打ちの域に到達してしまった、欧洲における五年大戦が二千万人もの生命を犠牲にしたことこそ科学文化の結果であり、われわれは二度と科学の文化を尊重することはできない、と言う人がいる。この種のエセ議論は一笑にも値しない。
>
> わたしの言うところの文化復興とは、われわれ中国人が古い時代の発明能力と発明を重視する精神とを恢復しようとすることである。みんなに古文、古詩、古賦をつくらせようとすることでなく、また、みんなに目を閉じさせ古代の道徳について空論をさせようとすることでもない[48]。

戴季陶は一期三中全会閉幕後(6 月)、上海に移り、7 月から 8 月にかけて執筆活動に専念し、『孫文主義之哲学的基礎』と『国民革命与中国国民党』を発表した。彼はその後孫文の理論学説を体系的、専門的に論じるまとまった著作を発表していない。そこで本論では、これら二つの著作をテキストにして、戴季陶の孫文理論学説に対する解釈を見てみたい[49]。

ただし、『孫文主義之哲学的基礎』のテキストについては、初版と第二版の間に大きな違いがあるので、まずこの点において触れておきたい。初版[50]は

---

[47]島田虔次は、「抽象せられた伝統は古代黄金時代を構想し、その構想せられたものによって堕落した現実を批判するであろう。もしそのような批判の機能を持たないとしたら、思想・文化の伝統、文明の伝統というものに、いったい何の意味があるであろうか。儒教に対して信頼と確信をもつ民族革命家が、儒教について論ずる場合、……形式面を拠りどころにするのは、あまりにも当然のことではなかろうか」、と述べ、革命と伝統の二項対立的な構図を相対化させる論拠を提示している。「孫文の儒教宣揚の動機論をめぐって」(『隠者の尊重』(東京:筑摩書房,1997 年 10 月)135 頁)。

[48]前掲「科学与迷信」。

[49]戴季陶は 1940 年 3 月 29 日、『孫文主義之哲学的基礎』と『国民革命与中国国民党』は、「一方」が大著を執筆するための提綱として、「あと一方」が上中下三巻本の一冊として書かれたと述べる。戴季陶『三民主義之哲学的基礎』(重慶:中央組織部党員訓練処秘書処文化駅站総管理処,1940 年 3 月)の序文。「重印三民主義哲学之基礎序」(『戴季陶先生文存』1407 頁)。

上の戴季陶の文章からは、『孫文主義之哲学的基礎』と『国民革命与中国国民党』のどちらが提綱であり、どちらが三巻本の一冊であるか不明である。前掲『国民革命与中国国民党(上編)』には「上編」とあり、巻末に「後篇」の出版予告が収められているため、「国民革命与中国国民党」が三巻本の一冊であり、『孫文主義之哲学的基礎』が提綱である、と考えられる。

[50]日本語訳は以下の通りである。ただし全訳ではない。

・「孫文主義の哲学的基礎」林六夢訳(上海『上海時論』第 1 巻第 3 期-第 4 期,1926 年 3 月、4 月)

・「孫文主義の哲学的基礎」訳者不詳(大連の中日文化協会(旧、満蒙文化協会)『満蒙』第 9 年第 1 冊-第 2 冊,1928 年 1 月、2 月)

・「孫文主義之哲学的基礎」[51]（上海『民国日報』副刊「覚悟」1925 年 7 月 27 日付-8 月 1 日付、3 日付）
・「孫文主義之哲学的基礎　附民生哲学系統表」（上海:中国国民党中央執行委員会上海執行部印行）[52]
・「孫文主義之哲学的基礎　附民生哲学系統表」（上海:民智書局,1925 年 7 月）

であり、第二版[53]は

「孫文主義之哲学的基礎　附民生哲学系統表　校正増補第二版」（上海:民智書局,1925 年 8 月）

である。

第二版の表紙には「校正増補第二版」の文字が書き加えられているだけである。初版と第二版の本文には執筆年月が書かれているが、両版とも同じく「民国 14 年 5 月広州にて起稿、同年 6 月上海にて完稿」となっている。そのためであろうか、従来、初版と第二版の違いについては指摘されることはなかった。そこで本論は、二種の版本の違いを指摘して、戴季陶の孫文理論学説に対する解釈をより具体的に検討を加えた。

附録の**【表１】**のように、上海の民智書局から出版された初版(7 月版)と第二版(8 月版)の違い(**【表１】**に下線を施した箇所)を比較すると、加筆(7 月版になく 8 月版にある)、削除(7 月版にあるが 8 月版にない)、部分的修正(数字の修正など字句の一部が別の字句に置換されている)の 3 種類、およびそれらを組み合わせたものに分かれるが、加筆が最も多いことが分かる[54]。

ここに見られる加筆や修正は論旨の変更を意図するものでなく、むしろ論旨のいっそうの明確化を期したものといえる。例えば、「8」番の民生主義の「育」(年少者への保育、教育)と「楽」(高齢者への福祉。原文の説明では「送死」――看取ることとある)の説明や、「12」番、「21」番、「22」番の中国の現状は共産主義を実行させることができないという説明が加筆されている。また、「28」番の孫文の「大アジア主義」講演(1924 年 11 月)に関する説明が加筆されている(後述)。

---

[51]7 月 29 日付-8 月 1 日付の題は「孫文学説之哲学的基礎」となっている。

[52]奥付を確認できなかった。「孫文主義之哲学的基礎　附民生哲学系統表」出版の広告は、上海『民国日報』の 1925 年 7 月 27 日付に初めて掲載された。

[53]ドイツ語訳と日本語訳は次の通りである。

・“*Die geistigen Grundlagen des Sun Yat Senismus*”訳者不詳(Berlin:Würfel Verlag,1931)
巻頭に Richard Wilhelm(尉礼賢もしくは衛礼賢)の序文(1928 年 11 月,Frankfurt にて)が収められている。

・前掲『孫文主義の哲学的基礎』中山志郎(山本秀夫)訳,1939 年 10 月
山本秀夫は 1938 年、東亜研究所第三部支那社会班(のち、支那社会文化班。班長は大上末広)に入り、汪精衛の重慶離脱(1938 年 12 月)と「和平建国」運動の「思想的根拠」とされる「純正三民主義」研究の一環として、『孫文主義之哲学的基礎』を翻訳した。「はしがき」1939 年 10 月 2 日(前掲『孫文主義の哲学的基礎』3 頁)。山本秀夫,聞き手:山口一郎「私の三民主義研究」(神戸『孫文研究』第 5 号,1986 年 8 月)21-25 頁。

[54]『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』出版の広告によると、戴季陶自らが校正し、分量が 4 分の 1 増加した、とある。戴季陶『中国独立運動的基点』増訂第二版(広州:広州民智書局,1925 年 8 月)巻末。

さて、戴季陶は民族・民権・民生という三民主義のうち、その真髄は民生主義であると解釈した。

三民主義は決して三つの部分ではなく、その本体上から見ればただ一つの民生主義であり、方法上から見れば民族、民権、民生という三つの主義である[55]

彼によると、民生主義は国民の衣、食、住、行(交通、通信)、育(年少者への保育、教育)、楽(高齢者への福祉)を完全に充足させることを目的とする。そして、民生主義の実現を阻害する勢力を排除し、その実行の基礎をつくることが民族主義の目的であり、また、圧迫を受けている労働者、農民自身が権力の担い手となり民生の問題を解決することが民権主義の目的である。民生主義は、共産主義と目的・性質は同じであるが、その哲学的基礎は異なる。共産主義が唯物史観を基礎として経済生活のみを問題とするのに対し、民生主義は中国固有の倫理哲学を基礎として、その問題は「育」と「楽」を含み、経済生活だけではない[56]。彼は、民生主義の目的は共産主義の目的と同一であるとしたが、彼が言う共産主義とは無政府主義と同じく「空想病」であり[57]、共産主義は現在の中国の条件では実現の可能性がない迂遠な理想である、とした[58]。

３．中国国民党員論

戴季陶が孫文の理論学説の体系化に専念していたのは、五・三〇運動の高揚時の上海であった。そのため、検討の対象はもっぱら一般国民による社会変革と中国国民党の関係に向かっていた。

彼は、五四運動時期において、覚醒した知識人と労働者、失業者を社会革命の主体に設定していた[59]が、五・三〇運動時期においては、一般国民による社会変革の重要性を認識していたものの、具体的な検討を展開しなかった。わずかに「中国国家の独立と民族の自由は、中国民衆の最大多数たる農工階級の人民を覚醒、団結させ、一つの優れて大きな組織を形成して民国の真の基礎とした後に、初めて獲得できることをはっきりと認識しなければならない」[60]。「われわれは今日国民革命の進行中に農民や労働者のために闘争するが、決して唯物史観を最高原則にしてはならない」[61]と述べるに止まっている。

彼は、1926 年から 1927 年にかけて、広州の中山大学(一時期、第一中山大学)にて、一般国民による社会変革と中国国民党の関係について頻繁に講演を行った。彼は、知識青年や農民、労働者が、中国共産党の「幼稚で従順な労農大衆を自分の専用品にすると同時に、労農大衆の集団心理と集団威力を利用して社会的闘争と国際的闘争を拡大」させることを重点に据えた「幼稚な左傾政策」に引きずられて運動

[55]前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』17 頁。
[56]前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』18-19 頁。
[57]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』51 頁。
[58]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』61 頁。
[59]戴季陶「致陳競存論革命的信」1920 年 1 月 13 日(上海『建設』第 2 巻第 1 号,1920 年 2 月)。
[60]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』36 頁。
[61]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』49 頁。

し、「一切の活動は表面上歩みがとても速いが、実際の内容はむしろ極めて空虚」となってしまったこと、そして、中国共産党は中国国民党の熱心な党員が社会変革のための運動に加わることを妨害した、と批判した。彼によると、その結果、当時実際に政治的な責任を担っていた中国国民党は、正しい政策を立てられないまま、社会の平和と発展を保障できる能力を喪失してしまった[62]。「国民党自体は、どうしてこのように政治上、法律上の原則と建国の責任を放棄してしまったのか」[63]、と慨嘆している。

戴季陶は、中国国民党による指導・教育・訓練の下で、一般国民が社会変革に携わることを主張していた。中国共産党は一般国民(とくに農民、都市労働者)の運動を政権奪取の手段とするだけで国民の実生活の利害に注意しない[64]ために、一般国民による社会変革の指導的役割を、中国共産党に担わせることは決して許されないことと考えた。

しかしながら、彼は、改組以来「左傾右傾」した中国国民党が一般国民による社会変革の指導的役割を担い得ると考えたわけではなかった。すでに、1925 年 7 月から 8 月にかけて、党員の団結が弱い中国国民党の現状を批判した。

> 民国は今十四年を経過したが、今日はこの幾人かが連合してあの幾人かに反対し、ほどなくしてまた分化が生じて、昨日の敵は今日の友となり、昨日の友で今日の敵となった者に攻撃してかかる。紛糾はいつまで経っても止まるところを知らない。党内では……一群の私人の結合は見られても、一つの主義に基づいた団体を見たことがない[65]。

彼は改組後の問題として「左傾右傾の現象」[66]を挙げた。彼によると、「本来、同志に主義、政綱、組織の規律を受け入れさせる」ことでそれらの意義が活きるにもかかわらず、現実には「主義、政綱、章程、規律は党員を一丸とすることができなかった」[67]。つまり、改組により中国国民党の「主義、政綱、組織」、「章程、規律」が党員に徹底されず、党員の団結が危うくなった、というのである。

彼は「左傾右傾」の両方を批判する。「右傾」者は三民主義に無関心であり、昇

---

[62]前掲『青年之路』32 頁、39-40 頁。
[63]前掲『青年之路』70 頁。
[64]前掲『青年之路』137 頁。
[65]前掲戴季陶『国民革命与中国国民党(上編)』38 頁。
なお、『国民革命与中国国民党(上編)』の初版(季陶辦事処発行)は奥付がないため、出版年月が不詳である。『国民革命与中国国民党(上編)』出版の広告は、上海『民国日報』の 1925 年 8 月 3 日付に初めて掲載されている(広告での書名は「国民革命与中国国民党　前編」)。また、『国民革命与中国国民党(上編)』には戴季陶の「導言」と邵元冲の文章が収められている。戴季陶の「導言」は 7 月 23 日に上海で書かれ、彼は 7 月 23 日、24 日、25 日に邵元冲を訪ね、また邵元冲は 7 月 27 日に上海を離れたことが確認できる。前掲『邵元冲日記』173-174 頁の 1925 年 7 月 23 日の条、24 日の条、25 日の条 27 日の条。したがって、『国民革命与中国国民党(上編)』の出版年月は 1925 年 7 月末から 8 月初までの間と考えられる。
[66]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』31 頁。
[67]戴季陶『青年之路』(上海:民智書局,1928 年 2 月初版、1928 年 8 月第四版)第四版 52 頁。

官発財に関心を払う「保守退嬰分子」を指す[68]。彼らは「国民党が積極的に努力しなければならない工作を放棄したまま、帝国主義反対、軍閥官僚反対の活動をしないだけでなく、民衆に近づきもしないで、ただ消極的に反共産党だけを叫ぶ。彼らは共産党に反対するからといって、決して堅実な三民主義の観点に立ったものではなく、言うことなすこと全てが帝国主義者や官僚軍閥の反赤運動とは異なるところがない」[69]。また、「左傾」は中国共産党員(戴季陶は「C.P.」と称する)と中国共産主義青年団員(戴季陶は「C.Y.」と称する)の中国国民党の規律に合わない言動を指す。戴季陶は、孫文を核にした政治集団がほかの政治集団と異なり、さまざまに分化しながらも終始革命精神を維持し得たのは、社会革命を主張してきたためであると考えていた[70]。そのため、改組によって共産主義を信奉する中国共産党員と中国共産主義青年団員が中国国民党を活性化していることを評価していた[71]。したがって、「左傾」に対する批判は中国共産党員と中国共産主義青年団員の信奉する主義(共産主義)そのものに向けられたのではなかった[72]。

戴季陶にとって、中国共産党員と中国共産主義青年団員の言動は、国民革命を目的とせず、三民主義を信奉せず、中国国民党の主義や政策を批判し、中国国民党員を中傷し[73]、「中国国民党の体を借り、自分自身の組織を発展」させようとする「寄生政策」を推進していると映っていた[74]。しかし、戴季陶は「みなさんが本当に三民主義を唯一の理論として認め、中国国民党を唯一の救国政党として認めて欲しい……。そうでなければ、本当に労働党(原文は「工党」)を組織するなり、みなさん自身の党を作り、自らを欺瞞し、かつ他人を欺瞞する態度を捨てて明々白々、青天白日の下に道徳的な規準を示」せと言った[75]。つまり、彼の意図は中国共産党員と中国共産主義青年団員の「寄生政策」を阻止するために国共合作を解消することではなかった。彼によると、「寄生政策」の大部分はボロディン(M.M.Borodin)(戴季陶は「中国のレーニン」と言う)の策略であった[76]。戴季陶はまず、ボロディンと、ボロディンに従う中国共産党員と中国共産主義青年団員の言動を批判し、そして、中国共産党員と中国共産主義青年団員は中国共産党、中国共産主義青年団との友好

---

[68]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』47頁。
[69]前掲『青年之路』61-62頁。
[70]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』17頁。
[71]戴季陶は、「右傾」した党員は、C.P.一派が加入し活発に革命運動を行うや、初めてこれまで自分たちがとってきた態度に対し反省するようになった、と述べている。前掲『国民革命与中国国民党(上編)』54頁。
[72]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』59頁。
戴季陶は、孫文の「民生主義は社会主義であり、また共産主義とも名づけられ、つまり大同主義であります」という定義に基づき、民生主義と共産主義は目的と性質において同一であり、全世界を主義を実行する対象と考える点についても同じである、と述べている。前掲孫文「民生主義　第一講」275頁。前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』18頁。
[73]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』62-63頁。
[74]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』58頁。
[75]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』57頁。
[76]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』63頁。

関係の程度に応じて、中国国民党員を「右派、新右派、中派、左派、新左派、極左派、なりかけの左派……」などに分け[77]、孫文没後にはこのような中国共産党員の分け方が中国国民党員にまで浸透し、「向左」はよく、「向右」は悪いと考えるようになった、と中国国民党員の言動を批判したのである[78]。

また、戴季陶は、帝国主義の圧迫により資本主義が十分に発展できない中国社会では、「大貧小貧」現象はあっても階級分化現象は深刻にならず、階級対立は起こりえない。そのような中国の社会状況を観察して作られた三民主義は、仁愛精神の「利他」の道徳に基づいて革命を遂行することを求める。「不仁」は反革命である。革命と反革命の対立は、覚醒者(自覚した者)と不覚醒者との対立であって、階級対立ではない。したがって、当面の課題は、ある階級を覚醒させて階級闘争を助長させることではなく、各階級を連合させて国民全体の覚醒を促すことであり[79]、中国国民党の主導権は「左傾右傾」に偏らない「中庸の正道」を堅持する「真の三民主義信徒」が掌握し、党員全体が孫文の理論学説を信奉して、相互に信頼し、団結しなければならない、と主張した[80]。

戴季陶は中国国民党といえども、万一国民のために自己犠牲、利他の精神を発揮し得ずに国民の信頼を失うならば、中国国民党の政治生命は必然的に失われる、と考えていたのである[81]。したがって、彼は一般国民による社会変革の意義を認め、「真の三民主義信徒」で構成された中国国民党が、一般国民による社会変革を指導・教育・訓練しなければならないと認識し、そのような一般国民による社会変革が、あらゆる階級の利益をも犠牲にせずに中国国民の意志を革命の成就に向けて団結させることができるならば、国民生活の基礎を持続的かつ漸進的に発展させ、「三民主義の民国」[82]の建設に寄与できるであろうと展望したのである[83]。

戴季陶の言う「三民主義の民国」とは、政府の強力な統制(戴季陶は「革命専政」と言う)下で「社会的共同経済組織」を建設し、漸進的に階級を消滅させることで、民生主義を実現する国家を意味していた[84]。

---

[77]前掲『青年之路』50 頁。
[78]前掲『青年之路』48-49 頁。
[79]前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』40-41 頁。
[80]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』79 頁。前掲「致蒋介石先生書」985 頁。
さらに戴季陶は、中国国民党の「高級幹部は二重党籍を持つことはできない」とも述べる。前掲『国民革命与中国国民党(上編)』60 頁。
彼は「共に信立たずんば、互いに信生ぜず。互いに信生ぜずんば、団結固からず。団結固からずんば、生存すること能わず」と強調している。「導言」と「結論」(前掲『国民革命与中国国民党(上編)』4 頁、237-238 頁)。
[81]前掲『青年之路』139 頁。
[82]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』74 頁。
[83]前掲『青年之路』139-140 頁。
[84]前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』19 頁。
戴季陶は「民族的全民衆的国家」と称したこともある。戴季陶演講,林霖筆記「三民主義的国家観(六)」1926 年 12 月 24 日(『広州民国日報』副刊「現代青年」第 14 期,1927 年 1 月 12 日付)。
戴季陶は孫文の以党建国論、以党治国論について、中国国民党が持つ辛亥以来の革命の正統性を主張し、中国国民党の中華民国における建国、治国の役割を提示することで、中

三民主義の国家の基礎は、第一に、ある民族が他民族を抑圧して統治するのではなく、第二に、少数の人が政権を掌握することなく、第三に、特定の階級の利益のためにではなく、人民全体の経済生活の増進の責任を負うことであり、すなわち人民のために生産の増加と分配の適宜を図ることである[85]

国国民党の中華民国の政権把握と国家統治に正統性を与え、革命党としての中国国民党の地位とその存在意義を主張した。

戴季陶は、中国国民党は「中華民国の創造者孫中山先生主唱するところの三民主義を信奉して最高原則とし、民主的集権制の厳格な組織訓練の下に在つて、全国各階級中の救国の熱誠を具する革命分子を集合して、強固な団結を造成し、革命的方法を以て政権を取得し、孫先生定むるところの三程序に遵照して政治的権力と方法とを運用し、中国の国家独立、民族平等を完成し、中国の政治と社会とを改造し、民主的国家組織を完成し、人民の衣食住行育楽等の生活需要の均等的満足、国民文化の世界的発展を図り、並びにこの目的を達するため、世界上平等を以て我を待つ民族と聯合して共同奮闘し、以て世界大多数人類の利益を掠奪し人群の進化<*、>世界大同を阻碍する帝国主義に反抗し、その勢力を消滅せしめる革命的政党である」と定義し、中華民国における三民主義の革命の成就を、ソ連のような政党国家によって達成しようと考えたのである。前掲『国民革命与中国国民党(上編)』1 頁。本論では次の日本語訳を参照した。波多野乾一『中国国民党通史』(東京:大東出版社,1943 年 8 月初版、1944 年 4 月再版)再版 2 頁。――波多野乾一は、戴季陶による中国国民党の定義を「寥寥たる二百余字中に、遺憾なくこの党の特質を描き尽してゐるから、私としては、これ以上の説明を加へる必要を発見しないのである」と述べている(3 頁)。

また、戴季陶は「われわれ中国国民党は以党治国と以党建国を堅持する革命団体」であり、訓政時期は「建国工作を推進させ、国家に代わって政権を執行し、国家に代わって行政をつかさどる党である」とも定義した。前掲『青年之路』96 頁。

戴季陶の言う訓政とは、国民に将来の自由と民主を約束しながら、憲政への安定的な移行を保障するため、過渡期における独裁政治の必要性を肯定する政治であり、彼の言う「民族的全民衆的国家」としての「三民主義の民国」は、ほかでもなく「真の三民主義信徒」、すなわち三民主義を信奉し仁愛精神を持った中国国民党による中華民国の政権把握と国家統治という訓政の理想像であった。

戴季陶は、「三民主義の民国」建設の原動力として、中国国民党が指導・教育・訓練する一般国民の社会変革とともに、中国国民党が率いる革命軍を挙げている。前掲『青年之路』第 9 章-第 12 章。

彼によると、革命軍の意義とは、「主義のある革命者」、「主義のある宣伝者」となり、上から下までの各層に「主義のための監督の役割」を担い、軍隊全体が「一つの主義に支配された」、「分業協作の互助の団体」となるべきである。「もしその主義に反対する勢力とぶつかったならば、すべてを犠牲にして奮闘することができる。全軍が壊滅しても一つの「主義」が残され、将来の革命の原動力となる」ことが求められる。「「革命」はある個人の事業ではなく、その団体全体の事業であり、その団体全体の団員自身の事業であり、その団体が全人類のために貢献する事業」であるからだ。「「宣伝団の軍隊」を組織することができるならば、その主義が失敗しないかぎり、決して失敗することはないと断言することができる。これこそが二十世紀の「科学的、組織的革命軍」である」と言う。前掲「致陳競存論革命的信」。

なお、呂芳上は、孫文の『革命方略』では革命軍をどのように組織し、確立するのかが言及されなかった。戴季陶の党軍に関する考えは、レーニンという「革命理論家」の理論に影響された。また 1923 年以後、三民主義に基づき奮闘することを目標とする革命軍を組織しようとした孫文に大きな影響を与えた、と指摘している。前掲『革命之再起』263 頁、452-453 頁、468 頁。

[85]前掲「三民主義的国家観(七)」(『広州民国日報』副刊「現代青年」第 15 期,1927 年 1 月 13 日付)。

戴季陶は1927年4月、上海での反共クーデタ(中国国民党側から「清党」と呼ばれる)が勃発した時、クーデタを消極的に支持し[86]ながらも、このような事態に陥ったのは、何よりも中国国民党の「失敗の結果」であり、中国共産党に対する「消極的な仕打ちである清党は決してわれわれの活路ではない」[87]と述べている。

> 総理が亡くなられてから、三民主義の名は全国に知られることになり、郷村の小学生ですら三民主義の名を知らない者はいない。しかし……多くの怠惰な党員は〈*三民主義に対し〉懐疑と反対の念を抱き、……三民主義の理論と実際の工作は消失し、総理がわれわれに残された建国綱領は忘れ去られたままである。……一部は「……盲従」者、一部は「……空想」家、一部は「……乱暴」家である。……いついかなる場合であろうと、みな一知半解のばらばらの知識であらゆる国事を判断し、その時その時の思いで……長期的な方針を決定する。このように……団体に拠るべき法がなく、個人に頼るべき理がなければ……どうしてみなの信を得ることができるだろうか。まして組織を論じ団結を図るなどということができるだろうか。……敢えて断言する。国民党の一切の誤り、一切の失敗は、主義を理解せず、主義に確信を持たず、主義を建設する工作に努力しなかったことにのみ由来するのである[88]。

彼は、マルクス主義の研究がマルクス主義を信奉する多くの者によって積み重ねられてきたことに対し、三民主義については同様の科学化と体系化が推進されず、中国国民党員の思想的方向性が定まらず、党員の団結が希薄化していることを慨嘆した。彼の言う中国国民党の「失敗」とは、まさにこのことであった。

まとめ

国民精神を形成し国家を独立・発展させるという戴季陶の考えと、労働者に政治的自立を促し、階級社会を消滅させるまでは労働者と知識人による独裁を強化しなくてはならないというマルクス主義理論は親和していたため、戴季陶は五四運動時期に、マルクス主義理論を積極的に紹介し、研究した。

その後、1922年に入水を図り政治活動、言論活動から遠ざかった。そして、戴季陶は1924年から孫文理論学説を研究し、体系化していった。戴季陶は国民精神形成による国家独立・発展を論じることから、孫文の理論学説解釈を行うことによっ

---

[86]戴季陶は「このたびの清党運動を冷静に事実に立脚して論じるならば、民衆自身が切実に要求したものであり、国民党自身の独断的行動ではない」と述べている。前掲『青年之路』69頁。

[87]前掲『青年之路』73頁。

[88]前掲『青年之路』237-239頁、255-256頁。

戴季陶は1925年4月、「過去14年間の紛糾と混乱の歴史を生み出した最大の原因は、革命の同志が先生〈*孫文〉の主義を明らかにしなかったことに求められる。そして、同志が不勉強である原因は、国民が学問を求めないという悪習に求められる。このため、中山先生は倒袁の後に国民の知識を求めようとしない弊害に憤慨して、心理建設を著し、知難行易の理論を打ち出した。……先生の業を受け継ぎ前途を拓く責任はわれわれにある」、と述べている。「戴季陶対青年之意見」1925年4月14日(天津『大公報』1925年4月19日付)。

て、中国国民党員が三民主義を信奉することで団結し、国民を教育・訓練することによって国家の独立・発展を図ることを論じるように変化した。

中国国民党改組後、党務に関与する(せざるを得なかった)戴季陶にとって、孫文の理論学説を研究し体系化することは、何よりも中国国民党の今後の進路に関わる問題であり、また中国国民党の政治的位置づけに関わる問題であった。

支那革命の意義を說いた戴天仇氏（中央）

戴季陶は 1927 年 3 月 17 日、吉野作造に請われ、東京帝国大学学友会弁論部主催の講演会に出席し、「中国革命の思想と実際の歴史的考察」と題する講演を行った。

【典拠】「支那革命の解決は世界平和の鍵」（東京『帝国大学新聞』1927 年 3 月 21 日付）

戴季陶　先生歡　宴班禪　喇嘛太　虛大師　及于右　任馬福　祥鈕惕　生陳立　夫謝鑄　陳諸先　生攝影

戴季陶（第 1 列左 1）、于右任（第 2 列左 1）、太虛（第 2 列左 2）、パンチェンラマ 9 世（第 2 列左 3）、馬福祥（第 2 列左 4）などの集合写真

1931 年 5 月から 7 月にかけての撮影

【典拠】『海潮音』第 12 巻第 9 号, 1931 年 9 月

第三章　大アジア主義と辺疆建設

本章では、国民の思想・精神や理念そして能力が国家の独立・発展を規定するという見方を持つ戴季陶が、南京国民政府(1927 年設立)の重要構成員となる前後から、孫文の大アジア主義と「物質建設(産業計画)」に沿った辺疆建設――とくに移民を通じて中国の国民精神を形成すること――の必要性を認識し、その辺疆建設に際しては三民主義や仏教を中国の国民精神に据えることを提唱したことを検証し、さらに、戴季陶の礼認識を取り上げて、彼は中国固有の文化をどのようにとらえ、それを現実にどう生かそうとしていたのかを論じていく。

第１節　大アジア主義に関する見解

１．大アジア主義理解

戴季陶は孫文が初めて「大亜細亜主義」について講演を行った(1913 年 3 月、大阪のキリスト教青年会館[1])時に日本語通訳を務めたことを蒋海波が指摘している[2]。また、戴季陶は孫文の「大アジア主義」講演(1924 年 11 月)[3]を解釈するにあたり、それが孫文の理論学説の中心思想であると強調していたと安井三吉が指摘している[4]。

ところで、戴季陶自身の著作に大アジア主義の語が初めて現れるのは、管見の限り、1914 年 7 月に桂太郎の「東亜の大局」論を説明した文章においてである[5]。その中で戴季陶は、日本は中国における欧米列強の勢力を単独で排除できるだけの実力がないために、まず中国の富強化を援助し、その上で中国と提携して欧米列強の勢力を排除するべきである、と言う。大アジア主義の目的は、あくまでも中国の自強と独立なのである。

戴季陶が次に大アジア主義の語を用いるのは、1917 年 12 月末に対日批判を行った時である[6]。彼は、日本が標榜する大アジア主義は、「日本国民の、国力発展への

---

[1]「大阪基督教徒の孫逸仙氏歓迎演説会」(大阪『基督教世界』1913 年 3 月 13 日付)。

[2]蒋海波「孫文のキリスト教理解と大亜細亜主義」(神戸『孫文研究』第 23 号,1998 年 1 月)。

[3]孫文が 1924 年 11 月 28 日、兵庫県立神戸高等女学校で一般市民に対して行った講演。題目は「大亜細亜問題」で、後に「大アジア主義」と呼ぶようになった。「孫先生「大亜洲主義」演説辞」黄昌穀の記録(上海『民国日報』1924 年 12 月 8 日付)。

[4]安井三吉は、戴季陶の自著『孫文主義之哲学的基礎』(1925 年)に見られる孫文の「大アジア主義」講演に対する解釈には、中国文化が孫文に与えた影響が強調される一方、欧米の文化、思想、欧米での体験が孫文に与えた影響については言及されていない、と言う。「孫文の講演「大アジア主義」と戴天仇」(日本孫文研究会編『孫文とアジア』(東京:汲古書院,1993 年 6 月)61-62 頁)。

[5]季陶「欧羅巴大同盟論」(東京『民国』第 1 年第 3 号,1914 年 7 月)。

[6]前掲「最近之日本政局及其対華政策(5)南進論北進論与大亜細亜主義」(上海『民国日報』1917 年 12 月 17 日付-18 日付)と「(7)五款二十一条之要求与其政局」(上海『民国日報』1917 年 12 月 20 日付-22 日付)。この著作には、対日批判だけでなく、中国国民は「同文同種」

希望」に応じて発生した中国への勢力拡張の根本政策であり、「大日本帝国主義」と同義であると述べた。彼の理想とする「大アジア主義」とは、「一時的感情、利害を去つ」た「温かく高大なる思想上の結合」であり[7]、日本が第一次世界大戦時に英仏露に対抗して、アジアから列強勢力を駆逐することであり、「軍国主義」の反対概念であった[8]。

孫文の「大アジア主義」講演に対する近年の解釈は区々に分かれる。それらを大別するならば、講演における孫文の主旨を日本に対する不平等条約撤廃の要求と捉えるものと、その主旨を日中ソ提携の提倡と捉えるものに二分することができる。前者の例は藤井昇三[9]、安井三吉[10]の研究である。ただし、藤井は、孫文は日本政府が不平等条約撤廃(関税自主権回復と領事裁判権廃止)を実行することを期待しなかったと述べているのに対し、安井は、孫文は自分が接触した代議士を通じて不平等条約撤廃の可能性があると考えていたと述べている。後者の例は森永優子[11]、高綱博文[12]、嵯峨隆の研究である。いずれの研究でも、講演の日本語通訳を務めた戴季陶が講演直後(1925 年 3 月)に発表した著作「日本の東洋政策に就いて」[13]を取り上げ、講演の主旨に接近しようとする分析方法は共通している。

戴季陶は「日本の東洋政策に就いて」の中で、「日本は日露戦争によつて東方諸国民の独立運動の機運を促進したが日韓併合によつて東方諸国民の信頼を失つた」と述べ、次のように日本の採るべき具体的政策を挙げた。

> (一) 対支政策に関しては支那国民の国家的独立運動に援助し治外法権撤廃と関税独立とを列国に勧告すると同時に日本が列国に率先して其の範を示し二十一ヶ条の抛棄を宣言す、此れに由つて両国の対等的関係を作り同盟の基礎を築く〈*。〉
>
> (二) 日本国内の問題に関しては今までの殖民地統治方針を抛棄して朝鮮及び台湾の民族的自由を尊重し人民議会召集と自治政府設立を許し各民族の自由なる聯合に由つて統一的国家の基礎を定む、又南洋の日領諸島に於いても人民

の友誼を信じて、「思慮深き日本人」が「帝国主義を抛棄する」ことを期待することも述べられている。

[7]前掲「支那に於ける共和制体」1918 年 1 月 11 日。

[8]戴季陶「世界戦争与中国▲為太平洋社訳『世界戦争与中国』作的序」1920 年 1 月 15 日(上海『建設』第 2 巻第 1 号,1920 年 2 月)。

[9]「孫文の民族主義再論」(東京『歴史評論』第 549 号,1996 年 1 月)。

[10]「孫文の最後の訪日について」(東京『中国研究』第 65 号,1975 年 9 月)。「講演「大亜細亜問題」について――孫文と神戸(一九二四年)」(神戸大学教養部『近代』第 61 号,1985 年 3 月)。「孫文「大亜洲主義」のテキストについて」(『近代』第 64 号,1988 年 3 月)。「講演『大亜細亜問題』の成立とその構造」(陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』(京都:法律文化社,1989 年 9 月))。「孫文・講演「大アジア主義」の研究を深めるために」(東京『歴史評論』第 498 号,1991 年 10 月)。前掲「孫文の講演「大アジア主義」と戴天仇」。

[11]「近代中国の対日観」(早稲田大学『史観』第 93 冊,1976 年 3 月)。

[12]「孫文の「大アジア主義」講演をめぐって」(東京『歴史評論』第 494 号,1991 年 6 月)。「日中関係史における孫文の「大アジア主義」――戦前編」(東京『近きに在りて』第 32 号,1997 年 11 月)。

[13]戴天仇「日本の東洋政策に就いて」(東京『改造』第 7 巻第 3 号,1925 年 3 月)。

の自治を許すべく出来得るかぎり土人の政治智識を養成すると共に彼の経済的独立を導く政治を施行し以つて民族平等の範を示す。

（三）ロシア〈*ソ連〉と速に無条件にて国交を恢復し、独逸に対しては列強共同の独逸人民の経済的自由を剥奪し独逸の国家的復興を阻害する政策より独立して、日露間及び日独間の自由なる合意的条約を結び以つて日露独の親善の機運を促進せしめ日本の国際的孤立状態を除去す。

戴季陶は、日本が中国革命を支援し、中国に対して不平等条約を撤廃し、植民地政策を撤廃して朝鮮、台湾、南洋の自治を認めるという「仁政」を施し、また、「日本を中心とした東方民族の大同団結」と日中ソ独の提携を行わなければならない、と主張したのである。

彼は同じ著作の中で、東洋の道徳文化を基礎とした上で西洋の科学文化を学ぶことによって、一国民は独立富強を実現し、同時に、強権覇道に向かうことを回避できるという孫文の考えを引いて、日本国民は「仁義道徳的陶融が缺乏して居る」と批判し、孫文は単に「神戸にて東洋の王道文化の復興を鼓吹した」のでは決してなく、「近代の国家的民族的道徳の衰沈を憂ひ〈*、〉近代の政治哲学の余りに進歩せざるを慨し」たために、「東洋古代の政治哲学特に孔孟の政治哲学の真義を高唱した」のである、とも述べている。戴季陶は、中日提携は中国革命の成就を目的とし、中国革命が成就し中国が独立富強することによって、真に東洋文化の道統を守ることができると展望していた。

戴季陶が東洋の王道と西洋の覇道の点から対日批判を展開したのは、彼が中国は中国政策を転換しない日本政府、すなわち日本の帝国主義と提携する必要はないと考えていたからである。そのような考えは、彼の孫文「大アジア主義」講演に対する解釈や、「民族国際」構想(後述)の中で明示されている。

まず、戴季陶の孫文「大アジア主義」講演に対する解釈を見ていく。

戴季陶は『孫文主義之哲学的基礎』(1925 年 7 月)において、孫文の中心思想を最も明確に表現し得ているのは「大アジア主義」講演であると述べている[14]。彼によると、この講演の第一の特徴は、孫文はまず「愛国」によって「中国民族の独立」を実現し、その後「全アジアの被抑圧民族の解放」、そして「世界大同」を論じるべきであると順序づけたことと、中国革命を「事実上全アジアの民族解放運動のなかで最も主要な活動」と位置づけたこと、に認められる。第二の特徴は、孫文は、歴史の中心が民生であり、民生の基礎が中国固有の思想・道徳の仁愛であることを明らかにし、仁愛精神の復興を主張して、「欧洲文化の基本思想に対して宣戦」し、そして、ロシア革命の成功を「東方文化の勝利」であり、「三民主義の思想的基礎は西方文化から来たものではない」と捉えていたことに認められる。孫文にあってアジアとは地理的概念ではなく、「アジア八億の被抑圧民族の憐れむべき痛苦の事実」である。一方、孫文は西方文化である軍国主義、資本主義、帝国主義、そして「資本主義の基礎となる個人主義」に反対し、「物質問題を歴史の中心とし、階級闘争を絶対的手段とする社会革命思想」も人類生存、民生哲学の倫理性から是正さ

[14]前掲安井三吉「孫文の講演「大アジア主義」と戴天仇」59-61 頁を参照した。

れなくてはならないと考えた。孫文は「中国の道徳で最も発達し最も進歩したものはとりわけ「国家の道徳」であると認識した」。「世界の平和もまた必ず中国人が固有の民族的精神を恢復し、偉大な実力を備えた後、初めて真に実現できる」。日本は「東方民族の道徳を放棄し、完全に欧洲帝国主義を学んだ」。そして琉球、朝鮮を滅ぼし、「東方民族の団結が阻礙された」。「世界主義を空想するのは、もとより自己の民族を認識していない」のであり、欧米の帝国主義に追随して「国家主義を高唱する人はまた世界を認識していない」。「いずれも中山先生の三民主義とは相容れない」[15]。

戴季陶はこのような孫文の「大アジア主義」講演に対する解釈を基礎に、ヨーロッパ列強の覇道強権政治およびそのあとに続いた日本政府の中国政策と朝鮮政策に反対した。彼は大アジア主義を取り上げ、そして孫文の「大アジア主義」講演を解釈する中で、強権的な覇道と仁愛精神を唱える王道を区別し、後者を大アジア主義の基礎とするように主張した。弱国のアジア諸国(中国を含む)は独立を獲得し自強に努め、他方、強国の日本は「仁政」により覇道に反対しなくてはならない。さらに中国は独立富強することによって、真に東洋文化の道統を守らなくてはならない。戴季陶が日本国民に「仁政」を実行するように述べたのは、まさに東洋文化の道統(当面はその現実的な行動の方策を伴わないとしても)の自負を持った中国国民の立場から、日本政府の覇道を糾弾したものであった。

さらに、戴季陶は孫文の「中心思想」が示すところの中国が王道の道統である(現在は実質を伴わないとしても)ことを、より明確に表現するために、日本政府の朝鮮政策と中国政策に関する批判を加筆[16]して、『孫文主義之哲学的基礎』の第二版

---

[15]前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』32-39 頁。

同様の内容は、戴季陶が日本語訳『全訳三民主義』に寄せた序文(1929 年 9 月)にも見られる。

> 中国の文化は巍然として世界に特立す。六百兆(ママ)の黄色人種は固より其の薫陶を受けざるなく、而して現代の欧洲文明も亦多く其の感化を受く。中山先生は此の道統を受け、而して益之を輝かし、三民主義を創られる。僅にわが東方諸民族の薫風化雨たるのみならず、誠に世界人類の福音なり。

沈覲鼎訳『全訳三民主義』(上海:中国国民党中央執行委員会宣伝部,1930 年 8 月)の序文。本論では次の日本語訳を参照した。「戴季陶の筆蹟」(東京『中国』第 62 号,1969 年 1 月)7 頁。

[16]戴季陶は初版(第二版にも見られる)において「先生の日本神戸高等女学校におけるこの講演は、東方文化の精神を極めて高らかに謳い上げたものであり、先生の中心思想の表現である」。「みなが、もし先生の一生の全著作を系統的な方法を用いて繰り返し研究できるならば、先生の一生の事業の最後となった神戸での二大講演は、決して軽々しく見過ごしてはならないということを明確にできる。この点をはっきりさせて、初めて、三民主義の革命思想は、社会革命の意味から見ると、共産主義と異なるからといって共産主義と妥協、譲歩しようとするのではなく、また故意に共産主義を排斥しようとするのでもない。それは実に三民主義の本体であり、さらに本質的で該博な思想的基礎を備えている、ということを理解できるのである」、と述べた。前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』39 頁。――戴季陶の言う「神戸での二大講演」とは、1924 年 11 月 28 日の「大アジア主義」講演と、その講演の直後に行った「日本応助中国廃除不平等条約」講演を指す。

第二版で加筆されたのは、「大アジア主義」講演が孫文の「中心思想の表現」とする理由の末尾に当たり、理由全体をまとめた部分である。すなわち、孫文は、「中国の道徳」こそ

(1925 年 8 月)を出版した。

戴季陶が日本批判を加筆した背景には、彼が孫文の大アジア主義を、東方の文化的伝統に基づいた中国、日本、アジア諸国が提携して、欧米帝国主義の抑圧から解放されることを目指すものである。そして、アジア民族の解放は全世界の被抑圧民族の解放の第一歩であり、アジア民族の解放が他民族への抑圧につながることを禁じ、日本が仁愛を核とする東方文化に立ち返り、侵略政策を放棄しなくてはならないと解釈し、日本に中日提携にはまず日本が不平等条約を撤廃することを繰り返し主張していたことが存在する。1925 年 3 月、戴季陶は対英批判を展開し、その中で、「大日本帝国主義」はこの数年、経済恐慌と関東大震災によりその発展力が阻害されていると分析する一方、孫文が「日本人をイギリスに抵抗するように立ち上がらせること」であり、そのためには「今日インドの独立を援助し、その上、ロシア〈*ソ連〉およびトルコと修好関係を結ばなければならない」。日本はこのようにすることによって「アジアに復帰した証」を得られると考えていた、と述べた[17]。また、五・三〇事件勃発(5 月)後の 7 月、戴季陶はイギリス(戴季陶は「世界帝国主義の覇王」と言う)のアジア政策とそれに抵抗する民族運動勢力が衝突することで第二次世界大戦が勃発すると予測し、中国国民はイギリスを盟主とする国際連盟に抑圧されているソ連、ドイツ、オーストリア、トルコと提携し、かつ、アジアにおいて帝国主義に抑圧されているインド、ペルシャ、アフガニスタン、南洋、朝鮮の諸民族と提携し反帝国主義運動を展開しなければならない。日本に対しては、日本帝国主義を代表する政府を批判する一方、日本国民に覚醒を期待し「東方に戻れ(回東方来)」の運動を展開しなければならない。そのために「日本の東洋政策に就いて」(東

世界で最も発達し、最も進歩したものであり、とりわけ「国家道徳」、すなわち「以大事小」こそ「平天下」の真義であると考えた。現在の世界で、中国民族ほど大きな民族はなく、中国の文字言語ほどたくさんの人に使われている文字言語はない。中国人が立ち上がるならば、全東方の弱小民族はもとよりアフリカ洲、アメリカ洲の多くの有色人種も自由平等の機会を得られるだろう。中国民族の振興と、民族道徳と国家道徳の回復こそが全世界大同の基礎である。世界平和も、中国人が固有の民族精神を回復し、偉大な実力を備えるようになった後、初めて実現できるのである。小さな日本(原文は「小小一個日本」)が東方で強盛になっただけで、東方の民族運動が多く勃発した。しかし、日本はすでに東方民族の道徳を捨て、完全に欧州の帝国主義を学んでしまった。日本は琉球と朝鮮を滅ぼし、東方民族の団結を阻害してしまった。もし日本がそうしなかったら、ここ三十年の東方の情況は必ずまったく違ったものとなり、おそらく全世界の関係も変わっていただろう。ロシアは革命の後、帝国主義の国家目的を捨て、弱小民族の独立と自由を助けることを主張した。そして、トルコの革命はロシアの援助によって成功し、蒙古民族も国民の自覚に目覚め、中央アジア一帯の民族運動も陸続と現れた。中国民族が勃興するならば、世界に対する影響力は日本の維新、ロシア革命の比ではないだろう。中国の国民は必ずこのように自覚することで、本当に徹底して目醒めることができるのである。またこの責任を負うことこそ、世界第一の偉大な民族の責任なのである。「世界主義」を空想するのは、自民族を知らないことであり、欧米の帝国主義に追随して「国家主義」を声高に叫ぶのは、世界を知らないことであり、いずれも三民主義とは相容れない、との長文が加筆された。前掲『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』36-39 頁。

[17]戴季陶「我們要推翻大英帝国主義――中山先生手書『民族主義自序』書後」1925 年 3 月(広州『革命』第 3 期,1925 年 5 月 16 日付)。

京『改造』1925 年 3 月)で、日本国民に対し日本が「東方に戻」る 3 項目の条件、すなわち「一、国際連盟を退出すること。二、朝鮮と台湾の自治を許可し、朝鮮と台湾に自治議会と自治政府を組織させること。三、中国に対する一切の不平等条約を取り消し、ならびに、中国の不平等条約を撤廃する運動を助けること」を提出していた。日本は人種、文化、経済のいずれの関係からも、将来の第二次世界大戦勃発の際にはイギリスへの対抗上、中国と手を結ばざるを得ない。イギリスのアジアへの抑圧は日本も中国も同様に受けているのであり、中国は日本の帝国主義に対して政治上絶対に反対するが、国民経済上絶交することはしない、と述べた[18]。

このような戴季陶の主張は 1927 年の訪日時にも繰り返されたが、日本側が彼の主張を真摯に受け止めることはなかった(後述)。

ちなみに、戴季陶のその後に発表された「大アジア主義」講演に関する見解を見るならば、講演を孫文の「帝国主義国家の建国治国政策」、「覇道の文明」、「不平等条約」の撤廃と、「中国固有の王道的和平政策」、「王道の文明」の支持、選択を求めた「全世界人類に対する最後の告別詞」と位置づけ[19]、日本国民という「最も真の友人に対し……諄々と忠告して戒め、信義は周到極まっていたが、愚人は覚醒しないまま現在に至る」と批判していたことが分かる[20]。そして、孫文の中日関係において果たした役割を高く評価し、とくに柳条湖事件以後、もし孫文が生きていたならば彼の働きによって中日間は戦争状態に陥らなかっただろう[21]、と述べていた。戴季陶は 1928 年 4 月出版の『日本論』の中で中日戦争の不可避を予測し、その後、日本国民が政治的に覚醒して自国の武力侵攻政策を阻止することや、中国が富強に努めて日本の武力侵攻を防御することを主張したが、現実にはこれらが不可能であることを深く思い知らされていたのだろう。1934 年 9 月に次のように述べている。

> 民国以来、孫先生ただお一人が最も誠を尽くし、心を砕いて仕事をされてきた。そして、先生を助ける仕事をしてきたのは私であったが、〈*中日〉両国の政府と国民の心を動かすことは全くできなかった、と私は考えている[22]。

---

[18]戴季陶「因五卅事件告中国国民」(上海『湖州』第 2 巻第 4 号,1925 年 7 月)。

ここでの第二項目と第三項目は「日本の東洋政策に就いて」上の(二)と(一)に該当するが、第一項目は「日本の東洋政策に就いて」上の(三)ソ連、ドイツとの親善を図ること、を言い換えている。

[19]戴伝賢「総理北上之志願及対世界人類之貢献――二十五年三月十二日在総理陵前挙行総理逝世第十一週紀念会講」1936 年 3 月 12 日(南京『中央党務月刊』第 92 期,1936 年 3 月)。

[20]「致譚伯羽世講書」1939 年 3 月 19 日(『戴季陶先生文存』375-376 頁)。

[21]「題国父最後演講留影」1948 年(『戴季陶先生文存』1479 頁)。

「国父」の称号は、国民政府が 1940 年 4 月 1 日に孫文の尊称を「中華民国国父」と定めたことに基づく。孫文は「国民革命を倡導し、中華民国を手ずから創り、政体を更新し、邦基を永く奠め、世界大同を謀り、国際平等を求め、光は四表を被い、功は万世に高く、凡そ我が国民は、本に報い遠を追い、宜しく尊崇を表すべきである。全国に通令し、先生を尊称し中華民国国父と為す」(「国民政府民国二十九年四月一日渝文字第三一九号訓令」重慶『国民政府公報』渝字第 245 号,1940 年 4 月 3 日付,11 頁)。

[22]「示安国児」1934 年 9 月 3 日(『戴季陶先生文存続編』334 頁)。

２.「民族国際」構想

戴季陶の「民族国際」構想は、「戴季陶対於時局之談話」(上海『民国日報』1925年7月31日付)、「戴季陶君関於民族国際的談話」(上海『民国日報』同年9月2日付)という史料に見られる。

まず、「民族国際」について説明を行いたい。日本語のインターナショナル、つまり、プロレタリア世界主義に基づく労働者・労働運動・社会主義運動の国際機関を、漢語では簡単に「国際」と表している。たとえば、コミンテルン(第三インターナショナル)は漢語で「共産国際」、「第三国際」と表す。ただし戴季陶は、「国際」を社会主義運動などの国際機関に限らず、国際連盟など、ひろく国際機関一般を指すために用いている。

さて、戴季陶の説明によると[23]、「中国というこの一つの弱くて大きな民族(中国這一個弱而且大的民族)」は、「帝国主義の国際連盟に哀願してわれわれに一条の活路を与えてもらうことはもとより不可能である。そして、〈*われわれが〉設立の思想を受け入れられず、構成分子について〈*われわれと〉一致できないコミンテルンと根本的に妥協することも事実上あり得ない。このような国際環境において、〈*われわれが〉不平等条約撤廃の目的に到達し、国家の独立と民族の自由を完成しようとすることは、空想であると言わざるを得ない」。そこで、われわれは「純正の、民族の自由連合主義によって民族国際を組織しなければならない」。「民族国際」は中国、ソ連、ドイツ、オーストリア、トルコを基礎とし、「全世界の一切の弱小民族の国民的政党[24]」を含んで「偉大な国際勢力を作り上げ、一方では帝国主義の縦断的な国際連盟に対抗し、一方ではそれぞれの社会主義の横断的な国際[25]と提携する」のであり、「この一つの自由連合を基礎とする新縦断的な国際が成立すると、全世界の国際組織は鼎立し三つになる。一つは帝国主義の縦断的な国際、一つは社会主義の横断的な国際、一つは三民主義の新しい縦断的な国際である[26]」。

戴季陶の言う「横断」とは、第一に社会主義の政党が「世界の一切の特権を打破

---

[23]主に「戴季陶君関於民族国際的談話」(上海『民国日報』1925年9月2日付)を引用、参照する。そうでない場合は、適宜注記する。

[24]戴季陶は、エジプト・ポーランド・インド・アフガニスタン・ヴェトナム・朝鮮・フィリピン・南アフリカを挙げている。「戴季陶対於時局之談話」(上海『民国日報』1925年7月31日付)。

[25]戴季陶は、ロンドンの第一インターナショナル(彼は「社会主義国際」、「第二国際」と言う。「第二国際」の言い方は第一国際の誤りであり、戴季陶本人か記者が誤ったのだろう)、アムステルダムの国際労働組合連盟(彼は「黄色国際」と言う。漢語の「黄色」は妥協、腐敗、堕落を示し、日本語の御用組織と同様に軽蔑の意味を持つ)、ウィーンの国際社会主義党行動同盟、モスクワのコミンテルンとその支配下にあるプロフィンテルン(彼は「赤色(ママ)職工国際」と称する)や「赤色(ママ)農民国際」を挙げている。前掲「戴季陶君関於民族国際的談話」。

これらのインターナショナルの内、1925年8月もしくは9月当時存在したものは、国際労働組合連盟、コミンテルン、プロフィンテルンである。

ただし、戴季陶の言う「赤色(ママ)農民国際」が何のインターナショナルを指すのか不詳である。

[26]前掲「戴季陶君関於民族国際的談話」の副題に「新天下三分策」とある。

しようとする」こと、第二に世界主義を意味している。一方、「縦断」とは、第一に、帝国主義の国際連盟が「世界の一切の特権を維持しようとする」こと、すなわち欧米日の列強が植民地支配を展開していること、第二に、「種族、文化、地域などの差異によって〈*世界を〉数多くの小さな塊に分割し、各自が世界全体に対し権利を主張する」民族主義を意味している。

戴季陶は民族主義を、「今日〈*1925 年 9 月当時〉、全世界の国際政治の各種潮流における指導的な精神」と定義した。その民族主義は「種族、文化、地域などの差異によって〈*世界を〉数多くの小さな塊に分割し、各自が世界全体に対し権利を主張するものであるから、世界主義と必然的に衝突する」。「民族主義の性質は……もともと縦断的なものであり、当然横断的な国際と連携して一体になることはできない」。しかし、今日実際問題として、各民族の世界文化を建設する能力が統一するまでには至っておらず、そして、「軍国主義と資本主義を基礎とした帝国主義」が、世界の民衆の覚醒によって自らの支配の座を失っているので、「世界の大多数の文化と経済の遅れた民族が、おしなべて帝国主義の抑圧から脱し、自由に発展できる地位を得、自動的に世界統一の偉大な事業に参与しなければならないことは、民族主義の発展として、まさに当然の途径である」。したがって、「現在の民族主義は……世界主義を求めるものであり、現在の初歩的な事業であるところの、世界大同が進行する中での民族主義と、民主的な国民運動が進行する中での自治主義とは、頗る多くの類似した点が見られる」、とする。

そこで戴季陶は、「民族国際」とは、国際連盟と同様に「種族、文化、地域などの差異によって〈*世界を〉数多くの小さな塊に分割し、各自が世界全体に対し権利を主張するものである」が、究極的に世界主義を志向する点で国際連盟とは一線を画するために「新縦断的な国際」と称した。

さらに戴季陶は、「民族国際」の組織について、中国もしくはトルコで召集されなければならず、人口、経済力、地位から言えば、中国が「民族国際」の中心とならなければならない。ならびに、一つの常設機関を設け、抑圧者に対する抗戦のほかに、加盟諸国の国民経済、文化、交通、国際法、移民などの重要問題について計画を立て、文化、経済が完全に立ち遅れた多くの国民の進歩と発展を図らなければならない、とした[27]。

従来の研究として、戴季陶は孫文没後の 1925 年 7 月と 9 月に「民族国際」構想を発表し、その構想の起源は孫文のイギリスへの対抗、アジア民族の解放、中日提携の主張にまで遡ることができることを李雲漢、森永優子、徐鰲潤、白永瑞、張玉萍、嵯峨隆が指摘している。それらの研究は、戴季陶が孫文のそのような主張に同意して、上海の五・三〇運動の中で、単独対英論を展開し、対日批判を自己抑制した[28]ことを述べている。

---

[27]前掲「戴季陶対於時局之談話」。

[28]たとえば白永瑞は、戴季陶の単独対英論と「民族国際」構想は「非現実的」であり、単独対英論は「当時イギリスにつぐ帝国主義国家だった日本」の中国政策の転換(不平等条約撤廃)が実現しなければ、構想の意義は薄れる。その意味において、「戴の「単独対英論」は安易な日本観と表裏をなしていた」と捉えている。前掲「戴季陶の国民革命論の構造的

本論ではすでに、戴季陶の大アジア主義理解には対日批判の意味合いが濃厚であることを確認しており、彼の「民族国際」構想では対日批判が抑制されたとする見方については、なお検討を要すると考える。私は、戴季陶の「民族国際」構想に対英批判と対日批判が併存していたと考えている。

戴季陶が中国革命を世界的な反帝国主義運動の中に位置づけ、世界の最大の帝国主義をイギリスと見なし、国際連盟に対する不満をも表明していたことは確かである。彼は次のように論じていた。第一次世界大戦前、「世界列強の矛盾は一般的な植民地争奪にあつた」が、大戦後、「その総ての矛盾が悉く支那問題に現れて居る」ので、中国革命が成功しなければ世界列強の矛盾を取り除くことができない[29]。「東方問題」とは「欧洲列強争覇の問題」、「欧洲列強の東方政策の衝突」であり、「東方民族の種々の失敗、屈辱、痛苦の悲惨な歴史が充満したもの」[30]である。「現在世界で最大の罪悪を犯しているのは帝国主義の国際連盟であり……イギリスは東方で最大の覇王であるにもかかわらず、真の問題が生じる時には必ず国際連盟の全勢力を合わせてわれわれを圧迫してくる。それゆえに、抗英はわれわれの国是である」[31]。「帝国主義の国際性はたいへん顕著である。帝国主義による、経済と文化が立ち遅れた中国に対する侵略は一国一国が行うのでない。帝国主義諸国は一つに結合し共同して〈*中国への〉侵略を行い、中国人民の利益を搾取する。……全世界の被抑圧民族および帝国主義国家内の被抑圧民衆はこの事実を解決の対象にして、みなが連携し、共同して奮闘することによって初めて目的に達することができる」[32]。「帝国主義の国家で、東方において最もひどいのはイギリスである」[33]。

しかしながら、戴季陶が「民族国際」構想の中で対日批判を抑制したと見ることはできない。その理由は、戴季陶が「民族国際」構想を発表したのは、彼が上海での学生デモに工部局警察が発砲した五・三〇事件(1925 年 5 月)に関して、対英批判と対日批判を展開していた時期と重なっているからである。彼によると、東方ではイギリスが唯一の強国であり、全東方民族の 90 パーセントはイギリス帝国の圧政下にある。それゆえに、われわれの反帝行動は第一目標がイギリスであることを認識しなければならない。もし、行動に当たって、すべての帝国主義国家を同一に扱うならば、それは事実上、イギリスに対する追及を遅らせてしまうことになる。日本国民に対しては「東方に戻れ」と呼びかけるだけに止める。日本と経済断交を行うべきではない。なぜならば、日本は将来の第二次世界大戦勃発の際、イギリスへの対抗上、人種、文化、経済のいずれの関係においても中国と手を結ばざるを得なくなるからである。ただし、日本政府には断固たる反対の立場を堅持するべきであ

分析」第 12 号,28 頁。

[29]戴天仇「中国国民革命の意義」(東京『事業之日本』第 6 巻第 4 号,1927 年 4 月)10 頁。

[30]「東方問題与世界問題」1924 年 3 月 14 日(『戴季陶先生文存』1730-1731 頁)。

[31]前掲「戴季陶対於時局之談話」。

[32]戴季陶演講,林霖筆記「三民主義的一般意義与時代背景(七)」1926 年 12 月 21 日(『広州民国日報』副刊「現代青年」第 24 期,1927 年 1 月 25 日付)。

[33]前掲「三民主義的国家観(三)」1926 年 12 月 24 日(『広州民国日報』副刊「現代青年」第 11 期,1927 年 1 月 8 日付)。

る、とする[34]。

これは、中国側は中国政策を転換しない日本政府、すなわち日本の帝国主義と提携する必要はない、という戴季陶の考えの表明である。そして、彼は日本側こそ中国との提携を必要とせざるを得なくなる時期が到来することを展望していた、と言うことができる。

また、戴季陶は次のように言う。五・三〇運動に関する「今回の問題は、上海で学生を殺害したという単独の小さな問題ではなく、また単に日本の紡績工場と労働者団体との経済闘争でもない。これは、外国人が中国の独立運動を圧迫したことに対し、中国人が国際的平等、国家独立を要求するという大問題である」。その問題を解決するには、まず中国国民が政治的に自覚し自強に努め、その上で「われわれを平等に扱う民族や、われわれと同じ被抑圧的地位にある民族と連合して奮闘」しなければならない[35]。彼はこれまで、日本が不平等条約を撤廃することによってはじめて中日提携が実現できる、と主張してきたのであるから、上の彼が言う「われわれを平等に扱う民族や、われわれと同じ被抑圧的地位にある民族」の中には、日本国民が含まれているとは考えがたい[36]。

次に、戴季陶の「民族国際」構想の目的について考察する。

戴季陶は五・三〇運動を中国の独立問題として認識し、この問題解決の方法として、まず中国国民が政治的に自覚し自強に努め、その上で中国国民と対等な国民と提携することを挙げた。すなわち、彼は中国革命を達成するために、国際提携の手段、すなわち「民族国際」設立を提起したのである。

戴季陶は、コミンテルンによる中国国内問題への干渉を認めなかったが、国際問題ではコミンテルンを支配するソ連と提携することを主張した。彼は、中国が列強に束縛されて自由な国際関係を持たない状況下で、ソヴィエト・ロシアが「カラハン宣言」(1919 年)を出し、率先して不平等条約を撤廃した(孫文が掲げた最大の政治目標の一つが不平等条約の撤廃であった)ことにより、中国国民はソ連に対して「好感を持ち、同時に親交を結びたい」[37]と認識している、と判断したからである[38]。ただし戴季陶は、中国国民は「自分の必要を見極めなくてはならず、とくに自

---

[34]前掲「因五卅事件告中国国民」。前掲「戴季陶対於時局之談話」。

[35]前掲「戴季陶対於時局之談話」。

[36]「戴季陶君対国民運動之談話」(上海『民国日報』1925 年 7 月 3 日付)。

戴季陶は 1925 年 7 月中旬、上海の民智書局から『日本革命之過去現在与将来』を出版する予定であった。しかし、管見の限り、この書籍名はさまざまな研究機関の所蔵文献目録や先行研究論文の引用文献目録に見当たらない。実際に出版されたか否かは不詳である。「戴季陶著作出版」(上海『民国日報』1925 年 7 月 1 日付-7 月 3 日付)。

[37]福田徳三・戴天仇・後藤新平「日・支・露問題討議」1927 年 3 月 10 日(東京『改造』第 9 巻第 4 号,1927 年 4 月)19-20 頁。

[38]戴季陶は五四運動勃発以前に、ロシアの南下政策を批判したが、革命後のロシアが不侵略政策を採ったことを歓迎し、中国の国益と東アジアの平和と幸福のためにロシアと親善を図ることを説いている。季陶「俄国之近況与聯合国的対俄政策」(上海『星期評論』1919 年 11 月 30 日付)。

そして、「カラハン宣言」を「人類史上空前の美挙」、「いかなる民族、いかなる国家でも歴史上このような偉大な事業はなく、このような高潔、高尚な道徳はなかった」。中国国民

己の独立性を尊重しなければならない。自民族の独立性を放棄してソ連に依存してはならない。さらに、自己の必要を忘れてソ連に盲従してはならない」と述べて、中国がソ連と連合する目的を、「「中国の独立と中国民族の自由」のため」とした[39]。

戴季陶はソ連を「民族国際」の重要な一員として位置づけたが、彼が最も熱心に提唱し確立しようとしたのは、まずは中国革命の成就、中国の自強(つまり国家建設)である。彼は国共合作における中国共産党を中国国民党に「寄生」していると述べたが、それは中国共産党の背後に存在するコミンテルンの干渉があったので、中国共産党に独立性がないことを批判したものであった。また彼は、国際連盟とコミンテルンとの間に世界戦争が勃発し、中国がその戦争に巻き込まれることに危機感を示していた。「民族国際」が国際連盟とコミンテルンの国際組織と鼎立し、国際連盟と対抗し、コミンテルンと提携するという戴季陶の構想は、国内では中国国民党がコミンテルンの支部となっている中国共産党を統制し、国際的には弱国中国が、列強(イギリス、日本など)によって構成された国際連盟に対抗できない状況で、コミンテルンを代表するソ連との提携を維持し、国際連盟とコミンテルンとの間に世界戦争が勃発した場合は独自の対応を取ろう、という彼の国際認識を表している。

しかし、上海での反共クーデタ(1927 年 4 月)後の翌 5 月、戴季陶は対ソ批判を展開し、中国が世界戦争に巻き込まれない方途として中国の自強と世界民衆との連携を挙げるに止まった。彼はこの時「民族国際」を挙げなかったのである。彼は、過去二年間中国国民党は、中国共産党の問題についてソ連と交渉を持つことができず、コミンテルンについて何らの要求や主張を発することができなかった。一方、ソ連は「われわれ国民政府を正式に承認せず」、「われわれの革命を正確に了解し、同情して援助しようとしていない」。中国に対し不平等条約を撤廃している国はソ連だけでなく、ドイツやメキシコもそうである。「われわれは真正に平等にわれを待遇する国家と提携するべきであり、真実(ママ)に平等にわれを待遇しない国家に反対するべきである」、と述べている[40]。管見の限り、1927 年 5 月以降戴季陶は、「民族国際」構想を具体的に展開していない。この理由については、現在手許にある史料から明確に挙げることはできない。ただし、戴季陶は日本に対し、抗日戦争中においても、日本国民が政治的に覚醒することを期待し、中日関係が途切れない(良不良に関わらず)ことを述べていたことと比べるならば、当時戴季陶のソ連やコミンテルンに対する不信感が極めて深まったことが窺える。そのために、ソ連を重要な一員とし、コミンテルンと提携するべき「民族国際」構想は展開されなくなったのではないだろうか。

は「世界の被侵略者の自由のために戦う自由の人民とならなければいけない」と述べている。季陶「俄国労農政府通告的真義」(上海『星期評論』1920 年 4 月 11 日付)。

[39]前掲『国民革命与中国国民党(上編)』71 頁。

[40]戴季陶「告国民党的同志並告中国国民」1927 年 5 月(上海『民国日報』副刊「覚悟」1927 年 5 月 29 日付)。「戴季陶告国民党的同志並告中国国民(四)」(『広州民国日報』1927 年 6 月 9 日付)。

なお、第一章にあるように、戴季陶は柳条湖事件の処理について、中日直接交渉ではなく、国際連盟および九カ国条約締結国(とくにアメリカ)の介入による対日制裁に求めるべきことを主張している。

３．1927 年における訪日

戴季陶は 1927 年 2 月から 3 月にかけて、門司、別府、神戸、東京、大阪、長崎などを訪ね、外務次官出淵勝次、外務省条約局長佐分利貞男、亜細亜局長木村鋭市、情報部次長小村欣一や犬養毅、渋沢栄一など日本の政官財の重鎮や実務者、頭山満、吉野作造などの孫文旧知の民間人と会談し(一部の史料によると総理大臣若槻礼次郎、海軍大臣財部彪と会談したともされるが、確証を得ていない)、日本国民の中国革命への理解と、中日関係の再構築を求めた。

訪日中、彼は日本国民に対し繰り返し、中ソ両国は対等である(中国革命はソ連、コミンテルンに統制されていない)ことを説明し、中日両国の懸案事項である満洲問題に触れることを極力避け、直接的な日本批判を行わずに日本が不平等条約を撤廃することを主張し、日本の世論を喚起して政府の中国政策転換を図ろうとした。彼がこのような婉曲な言い方をしたのは、上述のように当時、日本国民は北伐に伴う在留日本人の生命、財産の安全性の問題や満洲への影響に注目し、中国とソ連の接近に過敏になっている、と判断したためであろう。

以下、主に日本の新聞雑誌を利用し、(1)訪日の目的、(2)講演・会談の内容、(3)戴季陶の訪日に対する日本の評価、の 3 点について検討する。なお、日本、中国の新聞雑誌、個人書簡、回想録、年譜などを整理し、**【表２】**戴季陶の活動と戴季陶の訪日をめぐる周囲の動き、**【表３】**戴季陶の訪日前後の講演・会談・談話・著作、**【表４】**戴季陶の訪日に対する評論、に関する 3 種の表を作成した(巻末の表を参照のこと)。

（１）訪日の目的

従来、蒋介石が日本朝野の国民革命に対する理解と協力を求めるために戴季陶を派遣した、と陳天錫、森永優子、張玉萍、嵯峨隆が指摘している。台湾の陳天錫は中日提携を強調するのに対し、森永優子、張玉萍は蒋介石の政治目的(武漢の中国国民党左派から権力を勝ち取ろうとするもの)が反映されていたと述べている。前者の見方は、台湾から発表された関係者の回想録[41]にも見られ、また、後者の見方は、中国大陸から発表された戴季陶の伝記や関係者の回想録[42]にも見られる。

管見の限り、戴季陶の訪日は、1926 年 11 月 11 日に開かれた中国国民党中央執行委員会政治会議第 45 次会議(広州)が、李煜瀛、戴季陶、易培基の三名を日本に派遣することを決議[43]したことに基づく。ただし私はこの会議録を確認できなかったため、その目的が何であるかは不詳であると言わざるを得ない。戴季陶は 12 月 3 日に、中山大学を参観した日本人の教育視察団に対し、日本国民は国民革命を理解し、中国に対する不平等条約を撤廃するよう政府に要求して欲しいと主張した。彼は、中日「両国の親善を求めるには、日本の民衆のみなさんが自分たちの迷夢から

[41]たとえば、沈亦雲『亦雲回憶』(台北:伝記文学出版社,1968 年 4 月)259 頁。
[42]たとえば、夏衍『懶尋旧夢録』(北京:生活・読書・新知三聯書店,1985 年 7 月)。日本語版は、『日本回憶――夏衍自伝』阿部幸夫訳(東京:東方書店,1987 年 3 月)。前掲范小方・包東波・李娟麗『国民党理論家戴季陶』。前掲黎潔華・虞葦『戴季陶伝』。
[43]前掲『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』79 頁。

目覚め、三民主義を理解し(原文は「信奉三民主義」)、世界大同の実現の第一歩となるほかはありません。三民主義を理解していることをどのように表現するのかと言えば、それは〈*みなさんが〉両国間のあらゆる不平等条約の撤廃に努力していくことです」、と述べた[44]。1927 年 1 月 13 日、戴季陶は広州を発ち、海路上海に向かった。上海を経由して、21 日武漢に到着し孫科などを訪ねた。25 日には、武漢政府の徐謙の言として、国民政府は日本との「諒解を図る」ため、戴季陶を国民政府非公式代表として日本に派遣することを決議した、と報じた[45]。2 月 2 日、戴季陶は廬山に蒋介石を訪ね、12 日上海に到着し、15 日鈕有恒、秘書陳以一(志羣)[46]と

---

[44]「戴季陶対日本参観団之重要演説」1926 年 12 月 3 日(『広州民国日報』1926 年 12 月 6 日付-7 日付)。

[45]「各社要電　東方社二十四日漢口電」(上海『申報』1927 年 1 月 25 日付)。

[46]陳以一(経歴不詳)は、戴季陶が訪日中に行った講演を記録し、その重要と思われる講演詞を編纂して、『東亜之東』を出版した。この書籍は一部の伝記で「陳照『東亜之東』」、「陳以一『亜東之東』」と記されているが誤りである。

私は南京図書館古籍・特蔵部所蔵本(書籍番号+D693/74)を見たが、それには奥付が欠けている。出版年月は、南京図書館の目録カードによると 1927 年 5 月とあるのだが、同書には 6 月 16 日付の文章が収められているので、本論では 1927 年 6 月と推定しておく。

同書の内容は以下の通りである。

【写真】東亜二介聯歓図

＊蒋介石、宮崎龍介、菊池良一、宮崎震作の集合写真(1927 年 5 月 24 日,南京鉄湯池丁園)。記録者の陳以一が「この時、胡展堂先生、林赤民先生、戴季陶先生および〈*陳〉以一が同席した」と附記している。

【写真】戴先生墨跡(自書所撰革命軍歌)

＊「軍歌　戴伝賢」とある。歌詞は「歌国旗(其三)」(戴季陶「無涯的悲痛与無限的責任――哀悼仲愷先生」(上海『民国日報』1925 年 8 月 24 日付)所載)に同じ。

【写真】戴季陶、陳以一近影(1927 年 5 月 24 日,南京鉄湯池丁園)

序　(高冠吾,徐州警備司令部,1927 年 6 月 16 日)

志羣領使見貽巨著読竟感意即題補白　(黄覚)

自序　(陳以一,上海東亜旅館,1927 年 5 月 30 日)

＊戴季陶の訪日の目的は、「中国が自由と独立を求める理由を説明」することであった。戴季陶は一月半の間に「64 回の講演を行い、行った談話の回数は忘れてしまった。ここに主要な講演を選び、その記録を整理し、一冊の本に編んだ。……〈*講演で〉述べていることはすべて遠東の平和および世界の平和の嚆矢である。題を東亜之東とする。すなわち、遠東の呼称は廃すべきである。ヨーロッパ人はわれわれを遠と称するが、われわれ東亜の主人は二度とヨーロッパ人の主客転倒で迂遠な方法をとるようなことをさせない」。

(一)対於華僑之演辞

＊1927 年 3 月 26 日,大阪中華総商会

(二)対於国民党同志之演辞

＊1927 年 3 月 27 日晩,中国国民党神戸支部

(三)対於中日二国人共同列席之演辞

＊1927 年 3 月 30 日,長崎通天閣

(四)対於日本人之演辞

＊1927 年 3 月 19 日晩,(東京)陶陶亭

(五)答日本実業家之質問

＊1927 年 3 月 26 日,大阪クラブ主催の歓迎午餐会

(六)与新聞記者談話一斑

ともに郵船山城丸に乗った。

確かに、武漢政府関係者の一部は、戴季陶の訪日は蒋介石が日本の帝国主義勢力と結合した現れであると糾弾した[47]が、管見の限り、この時期、戴季陶による武漢政府批判は見当たらないし、また、蒋介石支持の発言も見当たらない。

実は、武漢政府は当時、中日関係の悪化を懸念していた。国民政府交通部長孫科は、国民政府とソ連は対等の関係であること、日本が不平等条約(満蒙関係を除く)を「改訂」するならば両国の提携が実現するであろうこと、満蒙問題、租界回収や

(甲)三月二十七日大阪毎日新聞所載(訳)
(乙)三月三十一日長崎日日新聞所載(訳)
(丙)四月一日発行東京支那時報所載(訳)
＊戴伝賢「民生哲学の基本的概念」(東京『支那時報』第6巻第4号,1927年4月)
(丁)四月一日上海各報所載
(戊)五月三十日六月三日上海時事新報連載
＊湘君「戴季陶氏在日言論之片段」(上海『時事新報』1927年5月30日付、6月3日付)
(七)緊要文告
(甲)対日声明書
＊1927年3月22日
(乙)闢謡通電
＊戴季陶が上海の林煥庭、漢口交通部の孫科、中山大学の朱家驊にあてた電報
(八)赴東行程紀要
【附録一】宮崎龍介在南京之演講
＊1927年5月27日,国民革命軍総司令部政治訓育部主催の歓迎会
【附録二】五月卅日告中国旅客　(陳以一)
六月六日与大英地界　(陳以一)

[47]「国人皆日可殺之蒋介石　各地電訊」(『漢口民国日報』1927年5月19日付)。路易(ロイ)「注意領導人」1927年3月9日(羅伯特・諾思(Robert C.North)、津尼亜・尤丁(Xenia J.Eudin)『羅易赴華使命　一九二七年的国共分裂』王淇、楊雲若、朱菊卿訳(北京:中国人民大学出版社,1981年4月)159-161頁)。「討蒋運動委員会討蒋宣伝大綱」(『漢口民国日報』1927年6月21日付)。語罕(高語罕)「社論　歓迎汪精衛同志!!!」(『漢口民国日報』1927年4月6日付)。高語罕「社論　反対?打倒!」(『漢口民国日報』1927年4月13日付)。

1927年3月12日、武昌で開催された「総理逝世二週年各界紀念大会」が決議した「大会臨時通電」に、「戴季陶先生が赴日代表として派遣されたのは外交部の命令ではない」の文が見える。　また、『漢口民国日報』の社論は、「三月二十日事件」(1926年3月20日に勃発した中山艦事件)は「武装した戴季陶主義が革命的孫文主義を修改しようとした企図であった」。「孫文主義を修正し総理の三大政策に反対する方針については、継続して努力しなくてはいけない」、と論じている。渭漁「社論　去年三月二十到今年三月二十」(『漢口民国日報』1927年3月20日付)。

蒋介石が中国国民党中央執行委員会に宛てた書簡によると、中国国民党長沙市党部が蒋介石に戴季陶の訪日の真義を質してきた。蒋介石は、戴季陶の訪日は中国国民党中央が広州にある時に決議されたことであり、自分は全く関与していない、と答えたと言う。蒋介石「為声明種種致中央執行委員会函」年月日不詳(海巫亜公編,時希聖校訂『革命偉人書牘菁華』(上海:中央書店,1927年10月)書翰70-73頁)。長沙市党部は1927年3月14日、全体党員大会を開き、主席の張白黄は、蒋介石が戴季陶を日本に派遣して日本帝国主義と結合した、と報告していた。「湖南救党運動之急進　反対蒋介石軍事独裁――党員大会之重要表示　▲党員大会」(『漢口民国日報』1927年3月20日付)。

治外法権の問題は武力を用いず、「外交上平和的解決を図る」と述べた[48]。また、国民政府外交部長陳友仁は、日本が政治的に覚醒して、今後中国全体の政権を握る中国国民党と提携することを求め、国民政府は日本に対する好意により、漢口の日本租界回収に漢口のイギリス租界回収の方法を採用することなどは、中国国民党と国民政府はまったく考えていない、と語った[49]。

他方、武漢政府と対立していた蒋介石は、1月26日と27日、廬山で日本留学時代から親交があった小室敬二郎と会談した。小室によると、この会談で蒋介石はイギリスの出兵を攻撃し、漢口のイギリス租界は返還しないことを明らかにしたが、上海の租界については、武力回収を行わず、杭州、南京などを占領してから回収の合理的提議を行うと述べた。そして、国民政府は委員制をとっているのでボロジンなどソ連人顧問の提案も自主的に採否を決定していること、ソ連から利用も指導もされていないことを強調した。日本と握手することができるかとの小室の問いに対し、蒋介石は日本の真意は諒解し難いが、外務大臣幣原喜重郎の演説通り実行してくれるならば結構である、と幣原の外交方針を高く評価した。幣原の演説とは、1月18日第51帝国議会で行った外交演説を指すものと考えられる。蒋介石・小室敬二郎会談のうち、日本にとって最も重要と見られる満洲権益や朝鮮独立問題[50]に関する部分に対し、蒋介石はきわめて慎重な発言をしている。

問〈*小室〉「満洲問題は如何に考へて居るか」

答〈*蒋〉「吾等の主義に基けば満洲も当然回収す可きものである、併し満洲問題は日本にとつて政治経済上重大であり日本人が日露戦争に血を流したといふ感情上の問題のあることも諒解して居る、又孫文氏が日本と満洲問題に就いて特殊の諒解があつたことも知つて居るから之は特別の考慮を払はねばならない問題だと考へて居る」

問「朝鮮の独立運動を革命軍が援助して居るといふが事実か」

答「革命軍の将校中に朝鮮人の居ることは事実であるが彼等の頭脳明敏なる為め使つて居るに過ぎない、又朝鮮独立党の本部が広東へ移転して来た上革命軍に援助を求めて居るが未だ何等の援助を与へて居ない、被圧迫民族の解放は吾等の主義であるから朝鮮人も被圧迫民族であるとすれば解放の為め努力してやらねばならないがボロヂン氏も常に支那の国民革命の目鼻が附けば後は印度革命だと云つて居るから差当り印度民族解放の為め其準備として西蔵方面に活動することにならう」[51]

---

[48]「孫科与東方社記者談話」1927年1月19日(上海『申報』1927年1月22日付)。

[49]「陳外長対中日邦交之談話」(『広州民国日報』1927年1月26日付)。

[50]戴季陶は1926年12月、孫文が1925年に戴季陶に向かって「日本問題に対する最低限の主張」の3項目を語り、その第二項目は「台湾、朝鮮両民族に少なくとも自治を実現させるべきである」というものであったと述べている。戴季陶は朝鮮独立運動を支持したが、党や政府に対して朝鮮独立運動の支援策を提案することはなかった。彼は現実的判断に立脚し、即時独立の主張は日本政府の中国政策を修正させる力を持ち得ないという状況認識を働かせていたと言える。戴季陶演講,秀哲筆記「孫中山先生与台湾」1926年12月19日(『広州民国日報』副刊「現代青年」1927年2月23日付、25日付)。

[51]「革命軍の総帥蒋介石氏と語る――外人中最初の会見者小室敬二郎氏の談」(東京『時事

また蒋介石は 1927 年 2 月、黄郛を派遣して駐漢口日本総領事高尾亨と中日提携の方策について会談させた[52]。

ところで、日本国内では、国民革命軍の北伐の急速な勢力拡大と過激な言動を目の当たりにして、中国全土がソ連の指導の下に共産主義化するのではないかと、本格的に焦慮する声が高まった。また、政友会による幣原の外交方針に対する批判や、陸軍当局による「独自の動き」が現れた[53]。幣原は、外務省条約局長佐分利貞男を中国南方へ視察に行かせ、国民政府内部の動向を観察させており[54]、蒋介石をはじめとするいわゆる「穏健派」が「過激派」(いわゆる左派、中国共産党員)と関係を断つことを期待していた。しかし、幣原外交に対する評価には議論があり[55]、幣原が蒋介石など国民政府内の「穏健派」に対して同情を持っていたか否か、日本政府が「穏健派」を支援し「過激派」を駆逐することを積極的に企図したか否かは不明である。ただし、幣原が蒋介石など国民政府内の穏健派と密に意思疎通を行っていたことだけは明らかである[56]。幣原は 3 月 2 日、駐日イギリス大使ティリー(J.Tilley)に対し、蒋介石はセオリーは過激だが、行動は「穏健派」であり、「国民政府の使者として来日した戴天仇は穏健派である」と述べている[57]。

（2）講演・会談の内容

戴季陶の発言を掲載した主な新聞雑誌の記事は、**【表 3】**の通りである。以下、戴季陶の発言が比較的よく整理された記事を用い、戴季陶の発言を(a)訪日の目的、(b)講演・会見の内容に分けて整理する。

用いる記事は次の通りである。

新報』1927 年 2 月 9 日付)。

[52]沈予「国民革命与日蒋関係」(北京『近代史研究』1997 年第 2 期)44 頁。

[53]西田敏宏「東アジアの国際秩序と幣原外交(二)・完――一九二四～一九二七年」(京都大学法学会『法学論叢』第 149 巻第 1 号,2001 年 4 月)110 頁。服部龍二『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918-1931』(東京:有斐閣,2001 年 10 月)169-176 頁。

[54]佐分利貞男は、中国国内に三民主義の民族主義が浸透しつつあり、国民の国民政府に対する支持が高まっていると認識していた。「支那に対して執るべき日本の態度に就て」1927 年 3 月 25 日(東京銀行集会所『銀行通信録』第 83 巻第 495 号,1927 年 4 月 20 日付)36 頁。

> 能く言ひまする帝国主義を打破するとか、或はもう少し穏かな言葉で申しますると、不平等条約を廃除するとか云ふやうな思想、即ち外部の圧迫に反抗し、外部の圧迫から免れやうと云ふ気分になりまするとと、北と南との間に差異が無く、詰り今の支那と元の支那の間に相違があるであります。……現在に於ては、例へば南方に於て孫文主義に依る国民革命運動、革命精神が相当に強いものである。是から出る力は相当の力であると云ふことは認めなければならないと思ふのであります。……現在に於ては北と言はず南と言はず、日本に対する感情は著しく好(ママ)くなつた。

[55]前掲西田敏宏「東アジアの国際秩序と幣原外交(二)」111 頁に詳しい。

[56]江口圭一は、「北伐にたいしイギリスの共同出兵提議を拒否し強硬手段を回避したその裏面では、幣原は蒋介石に反共クーデターの遂行を迫る工作を密かに進め、四月三日には蒋から「国民政府内部の粛正……準備整ひ次第断行すへし其の期間は四五日の内なるへし」(『日本外交文書　昭和期Ⅰ　第一部第一巻』五四八頁)と四一二クーデターの内報を確保していた」、と述べる。『日本帝国主義史研究』(東京:青木書店,1998 年 2 月)145 頁。

[57]臼井勝美『中国をめぐる近代日本の外交』(東京:筑摩書房,1983 年 9 月)86-88 頁。

①「重大使命を帯び戴天仇氏来朝す」(『神戸新聞』2 月 18 日付)
②「国民党の使として乗込んだ戴天仇氏」(『大阪朝日新聞』2 月 18 日付)
③「わが『朝日』を通じて」(『大阪朝日新聞』2 月 18 日付)
④「国民政府代表　戴天仇氏来る」(『大阪毎日新聞』2 月 18 日付)
⑤「支那の運動は民族運動」(『東京朝日新聞』2 月 18 日付)
⑥「戴天仇氏来神」(『神戸新聞』2 月 23 日付)
⑦「南方国民党の大立者　戴天仇氏今朝紅丸で来神す」(『神戸又新日報』2 月 23 日付)
⑧「翻へる青天白日旗に大得意の戴氏夫妻」(『大阪朝日新聞』2 月 23 日付)
⑨「戴天仇氏を迎へて　日華実業協会総会」(『神戸新聞』2 月 25 日付)
⑩「日支両国を精神的に結びたい」(『神戸又新日報』2 月 25 日付)
⑪「戴天仇氏　神戸の歓迎会上で演説」(『大阪毎日新聞』2 月 25 日付)
⑫「張作霖氏とは到底融和し能はず」(『神戸新聞』2 月 26 日付)
⑬「来訪の使命は単純　日支親善の促進に」(『東京朝日新聞』2 月 26 日付)
⑭「日本の諒解を求めた戴天仇氏」(『大阪朝日新聞』2 月 27 日付)
⑮「先づ外務省を訪ふ」(『大阪毎日新聞』2 月 27 日付)
⑯「分院各派代表の戴氏請待」(『大阪朝日新聞』3 月 2 日付)
⑰「苦しみの支那を援けよ」(『東京朝日新聞』3 月 2 日付)
⑱「日本国際倶楽部歓迎戴季陶盛況」(『広州民国日報』3 月 25 日付)
⑲「無根の風説に戴天仇氏の迷惑」(『東京朝日新聞』3 月 20 日付)
⑳「去るに臨んで親愛なる日本国民に告ぐ」(内務省警保局『特秘外事警察報』第 57 号,3 月)
㉑「革軍の第一着手は揚子江一帯の統一」(『神戸新聞』3 月 25 日付)
㉒「民国統一の成就を信ずる」(『大阪朝日新聞』3 月 25 日付)
㉓「親善の根本義は国民的の諒解」(『神戸新聞』3 月 27 日付)
㉔「支那の自由と独立は世界平和の基礎」(『大阪朝日新聞』3 月 27 日付)
㉕「戴季陶在大阪演辞」(上海『民国日報』4 月 28 日付)
㉖「議会政治への第一階梯として先づ予備議会を」(『神戸新聞』3 月 29 日付)
㉗「戴天仇氏の帰国」(『神戸新聞』3 月 30 日付)
㉘「戴季陶之談話」(上海『民国日報』4 月 3 日付)

(a)訪日の目的

中国国民党の非公式代表として、第一に、日本朝野に中国の現状、国民革命の方向と目的を説明し、日本国民の理解、同情、精神的援助を得ること。第二に、不平等条約撤廃を訴えること。

(b)講演・会見の内容

【中国の現状、国民革命の方向と目的】

孫文没後、孫文の思想は中国国民に浸透し始めている(④⑦⑩⑪⑯⑰㉔㉕)。国民革命は孫文の思想を柱に(⑱㉖)、明治維新の教訓、第一次大戦後の民族革命の刺激

を得て推進する(④⑨㉔㉕)。これは全国民の自覚的な政治運動であり(④⑤⑥⑦⑩㉔㉕㉖㉘)、「政権を一部の持権者〈*有権者と同じ〉の手に委ぬることに反対なる〈*と〉共に、無産階級の手に委ぬることにも反対で、政治を国民全体の手に帰せしむるを以て目的とする」(㉖)。この過程で国民の科学的組織化を図り(②⑦⑩㉖)、民権を基調とする国民会議を備えた独立国家を建設することを最終目的とする(⑥⑦⑩㉖)。中国「国民党そのものは孫文氏の三民主義の実現に向つて進むものであつて決して他国の政治に関係し又はその政治組織を批評するが如き事は絶対にしない」(⑬)。ソ連は国民革命に同情を示し、不平等条約の撤廃、既得権益の抛棄を実現させた。ゆえに中ソ両国民の親交が図られたのである(①④⑥⑦⑫)。どうして「赤化」といえようか(④⑤⑩㉖)。国民革命は妥協を許さず、成功なくして中国国民の生存は有り得ない(㉔㉕)。よって張作霖との融和は有り得ず(②⑫⑬㉑)、先の観点からすれば現在の上海でのストライキ(⑦⑧)、国民党内の南昌派と武漢派との対立は表面的なものに過ぎぬ(㉑㉒㉖)。国民政府による中国全土の統一は遠くないことである(①⑥⑦⑬㉑㉒)。

【戴季陶の日本に対する要望】

もともと日中両国は、経済的のみならず、歴史的、文化的、地理的、民族的に密接な関係を有していた(①④⑯⑰㉔)。だが国民革命に対する日本国民の諒解はなく、誤解に満ちている(①④⑥⑦⑬㉓)。これは不平等条約の存在が理解を妨げているのである(①④)。日本はかつて明治維新、不平等条約撤廃の大業を成就させた(⑯⑰㉔)。このことを顧みて、日本朝野は公正な態度をもって(⑬)中国の現状を知ってほしい(①②③④⑤⑦⑨⑪⑮⑯⑰㉔)。そうすれば、対英問題で中国国民の意思を尊重し(①②④⑥⑦⑬)、上海でのストライキに対して冷静に対応できるだろう(⑦⑧)。また、中日親善の障害たる不平等条約の撤廃に努力してほしい(①②③④⑯⑰㉔)。不平等条約撤廃の後、中国は産業(生産力)を発達させ、中日は経済的な提携から文化的政治的な提携へと発展していく(②③④)と展望しているが、産業(生産力)発達には多分に時間を要する(⑬)。だが日中両国の利益は大きい(③④⑦⑩㉔)。「支那は今や全世界の問題となつて来た〈*という〉時代に対する〈*、〉日本の理解を望んで已まない」(㉑)。

【中国国民党・国民政府の対日方針】

今回の訪日の目的は「日本朝野に対する一般的諒解を求むるにあるから当局に対しても何等具体的問題を提出せず、また具体的なものをもつて帰国しやうとも思つてゐない」(⑭、ほか①⑤㉔)が、日本とは互譲の精神(⑥)で、「国民政府対外宣言」(1928 年 6 月 15 日)に基づき合法的に不平等条約問題の解決を図ることになるであろう(②)。その先の対外策の基調は日露支提携におかなければならぬと考える(②)。満蒙問題に関して、「日本の満蒙における特殊地位についてはこれを現在の事実として見てはゐるが国民党として具体的に考慮した事はない〈*。〉将来本問題を如何にすれば合理的であるかは日本国民が自ら研究せんことを希望するものである」(⑬、ほか②⑫)。租界問題に関して、「国民政府は合理的平和的手段によつてその回

収を実現せんとするもので、上海共同租界も未だ具体的には何等考へてゐないが、必ずや近き将来において国民政府は支那における一般租界の回収に成功するであらう、これは現世界の趨勢であり民族の自由独立運動の現れである」(⑬、ほか⑫)。国民政府承認問題に関して、「日本政府が考慮すべきことで、吾人国民政府当局が云々すべき問題ではない〈*。〉しかしながら近き将来において東京に大阪に大使が派遣さるゝ時期が到来するであらう」(⑫)。台湾、朝鮮問題に関して[58]、個人の見解を有するが、その見解は国民政府の政策、方針ではない(②)。

【戴季陶の日本に対する感想】

「日本は以前より著しく思想一般に民衆的となりつゝあるが今後普選の結果は更に大いに期待すべきところがある、私は今回の訪日にて東京だけにおいてもあらゆる会合にて講演にテーブルスピーチを合すれば六十回もこれを試みたのであるがこれが日本国民への反響の程度は何とも窺知することは出来ない」(㉑)。

日本「国民が非常に民衆的になつたことでいよいよ普選が実施された暁にはより一層よくなることゝ思ふ非常に喜ばしいことである」(㉒)。

日本「朝野ともに思想的に非常な進歩を認めた……対支態度もこれがために一段と理解あるものとなりませう」(㉗)。

また、戴季陶は訪日中もしくは帰国後、日本の雑誌に数編の著作を発表した。

【「戴季陶致日本萱野長知書」[59]】

戴季陶は訪日前に萱野長知に書簡を送り、「日本の諸友と日本民衆に対する私の忠告」を述べた。書簡の内容の一部が、上に挙げた記事②に掲載されている。

書簡によると、「日本の諸友と日本民衆に対する」戴季陶の「忠告」とは、第一に、中国国民はロシア革命の教訓と刺激を受け、不平等条約の撤廃と平等な外交関係の締結を行い、中国民族の政治的独立、経済的自由を獲得しようとしている。これは中国国民党の奉じる三民主義の目的である。中国国民党の政綱と策略には共産の実行を含んでいない。第二に、対英問題で中国国民の意思を知ってほしい。第三に、ソ連は国民革命に同情を示し、不平等条約と既得権益の抛棄を宣言した。ゆえに中ソ両国民の親交が図られたのである。ソ連による中国の共産主義化の考えも、中国の共産主義化の原因、事実もない。第四に、中国国民党の目的は中国民族解放にあり、国民政府がこれを実施する。その根本政策は、(甲)中国と平等に接するソ連やそのほかの各民族と親交を図る。ロシア革命の経験に学び、諸弱小民族と連合し、国民革命を完成し世界大同を促進させる。(乙)農民労働者の組織化を図り、寄生階級による専制と浪費を制限し、多数の勤勉倹約な人民に政権を掌握させる。(丙)三民主義を実現する。(丁)帝国主義国家に対し不平等条約撤廃を要求する。第五に、現在日本軍閥によるイギリス帝国主義追随の外交は破産し、民衆の意思に基

[58]「戴季陶致日本萱野長知書」(『広州民国日報』1927 年 2 月 23 日付)(後述)の内容について、日本の新聞記者が戴季陶に問い質した。
[59]『広州民国日報』1927 年 2 月 23 日付。

づいた外交が誕生しつつある。日本に期待することは(一)不平等条約を撤廃すること、(二)ソ連との親交を図りイギリス追随の政策を改革すること、(三)中国の軍閥を援助し中国の内乱を延長させる政策を撤廃すること、(四)朝鮮および台湾の民族に憲法制定と自主の権利を与えること。以上のことが実現して初めて、中国国民は日本国民と友誼を交わすことができる。今日の両国国民の親交は日本の帝国主義的政策によって阻害隔絶されている。

【福田徳三・戴天仇・後藤新平「日・支・露問題討議」[60]】

戴季陶の発言によると、特に上海辺りは十数年前まで「一般的に日本に好感を持つて居ない」ので「排日運動が非常に激烈であつた」。これが緩和しつつあるのは、第一に孫文が 1924 年に訪日した後、日中関係重視を説いたこと、第二に対英関係が最近緊張していることによる。よって「此支那の国民が日本に対して親交を結びたいと云ふ考は十分にある」。「好感は持たぬが、好感を持たぬと云ふのは過去の事に関しての事で、将来の事に付ては親交を持ちたい、親交を作り上げたいと云ふ希望を一般に持つて居る」。であるから「此両国の関係を厚くして、別に一つの別天地を作ると云ふ将来の両国国民間の関係は、最も注目し注意すべき事である、是が総ての問題の根本義である」(21 頁)。「強権と云ふ鎖は文明の創造に力になるでせうが文明の共享を要求する民衆の力は必ず強権を打破するのである。……小より大に少数より多数に異より同に特殊的より普遍的に進む社会的進化の原則は充分に吾々に確信を与へるのである」(27 頁)。このたび「日本に来て日本の民衆が非常に進歩したのを見て悦んだ勿論満足にはなりません然し満足し得ない処は世界進化の真なる目的が存在し大なる力量が存在する、お互に努力しよう」(27-28 頁)。

彼は日本に対して以下のように要望を表している。

> 一、支那国民とロシア国民との親交は不平等条約撤廃の上に建立したのであつて……日本と支那との関係は歴史的、文化上血統上の関係を充分に持つて居り特に近代に於いては経済的需要供給の関係に由つて蜜切の度を加へて居る。若し両国間に於ける親交を真に建立せむと欲せば不平等条約の撤廃より始まるではないのか、……
>
> 三、今日全世界の問題は民族問題、民権問題、民生問題以外にない〈*。〉此れに根本的而して統一的解決を与へるのは三民主義の原則である〈*。〉国民党の奉持してる三民主義は一個の最も事実的実際的革命理論にして国家又社会建設の原則である。其の実際の建設政策は中山先生の建国方略に書してある、諸君の一讃を乞ふ。(28 頁)

【「中国国民革命の意義」[61]】

戴季陶は孫文の「実業計画(物質建設)」を詳説し、次のように言う。

> 支那革命の本統(ママ)の建設的意義は、即ち支那に現代の科学的文化、殊に工

[60]1927 年 3 月 10 日の会談(東京『改造』第 9 巻第 4 号,1927 年 4 月)。
[61]東京『事業之日本』第 6 巻第 4 号,1927 年 4 月。

業的文化を民主的原則に由つて建設するに在る。……而して、支那に工業的文化を確実に建設するには如何にしても、支那国民自身の覚悟と組織と団結とに由らなければならぬ。(10 頁、12 頁)

今後の凡ての国際関係は単に外交家の意思に由つて築上げることの出来るものでなく国民的諒解に由らなければ、真の国家的親交が出来ない。中日両国の一切の関係を親睦的にするには先づ今まで両国間に存在して居る両国民の親交を阻害する不平等条約を撤廃しなければ、真の国民諒解が円満に行はれないのである。願くば日本国民が世界の将来、両国民の将来を思ひ、三十年前に日本国民のなめた苦しい経験に由つて、支那国民の革命運動に理解を持ち、支那国民の独立運動に同情を寄せる事を希望して止まない。此れは単に、両国民の福利のみならず、世界の平和と人類文化の発展は、全人類四分の一を占めて居る支那民族の解放を基礎とするに外ならないからである。(12 頁)

【「中国革命運動の歴史的考察」[62]】

現代の支那民族の国民運動は単に支那一国の復興を意味するのみではなく、世界人類の四分の一を占めて居り、そして一番古い文明的訓練を経た東方の民族が、一番新しい西方の文明を引き入れて、それに依つて世界の統一的文明を創り上げるのは、即ち支那国民運動の根本義でなければならない。……若し支那自身が完全に独立し、而して完全に統一した現代の世界的文明を建設し得なければ世界の闘争は熄まないであらう。故に支那の民族的文化的復興は世界平和の基調であり、又東西文化調和の基調である。この意味に於てでなければ、支那の革命の真義を了解し、又その歴史的使命を了解することが出来ない。日支両国の凡ての親交は、この了解の上に立てられなければならない……一切の具体的問題の解決は了解の出来た後でなければならない。……今日私が日本国民に一番切望するところは、支那を知ると云ふ一事である。……今日の支那問題は、既に一個の世界問題の全部を意味して居る。この解決は支那民族自身の努力に依らなければならないと同時に、最も利害関係の深い日本国民の了解が、非常なる力を致すものなることを信ずる。(42 頁)

以上から、戴季陶の発言の特徴は次のように整理される。

第一に、日本の新聞が、国民政府が漢口のイギリス租界を武力回収したこと、中国国民党がロシア(ソ連)人顧問団を重用していること、国民革命軍が南京と上海に近づき在留日本人が生命と財産の安全が脅かされるのではないかと不安に感じていることなどを書き、戴季陶に見解を求めている。それに応じ戴季陶は発言し、国民革命という大業の中の小事に過ぎない、と北伐の推進を強調した。ただし、訪日中の戴季陶が北伐の進展状況をどれほど正確に把握していたのか、かりに把握していたとしてもそれを新聞記者に語ったか否かは不明である。たとえば、南京入城後の国民革命軍と列強の武力衝突に関して「未だ詳細なる真相に接せず、真相を知る

[62]東京『中央公論』第 471 号,1927 年 4 月。

に由なき故今直に意見を述べ難し」(26)、「まだ私の意見は真相が少しも分からぬので申述べることは出来ません」(27)と述べるに止まっていた。

第二に、日本の新聞は、戴季陶の訪日中に起こったトラブルとその顛末を報道している。たとえば、『読売新聞』は戴季陶が日本人から革命援助の巨額の資金を得たと伝えた(3 月 19 日付)が、彼は日本の他の新聞や中国の新聞でこの記事を否定し、読売新聞社に抗議して訂正を求めた。また、郵船争議に対し、戴季陶は中日労働者の連携を評価し、争議団支持を表明した(3 月 24 日)。このように戴季陶は、中国国民党員は外国からの借款によって中国革命を行わないことをアピールし、主体的、政治的に覚醒した中日労働者の連携を支持した。

（3）戴季陶の訪日に対する在東京中国国民党員の対応と日本側の反応

戴季陶が『孫文主義之哲学的基礎』と『国民革命与中国国民党』の中で、三民主義と共産主義の違いを論じたことは、中国国民党員と中国共産党員の間で大きな関心を引き起こし、戴季陶は中国共産党から「新右派」と批判された。日本の中国国民党支部の内、東京支部は青年会派(左派)と西巣鴨派(右派)に分裂していたが、両派は戴季陶の着京前から彼を「担(かつ)カント(が)争ヒ居」、「着京後其競争愈甚シ」くなった。そのため、戴季陶は「此状況ヲ見テ〈*左〉右両派何レノ集会ニモ出席セサルコトヲ言明」した[63]。しかし、当時青年会派に属した張天放と濮清泉は、戴季陶が青年会派の要請を受け青年会派事務所で講演したが、聴講者の詰問攻めに遇い逃げ出した、と言う[64]。

一方、日本の政官財や民間の人物および新聞雑誌では、【表４】に明らかなように、次のことが関心をよんでいた。

第一は、反帝国主義を掲げソ連と連絡している国民革命軍が北上すると、満蒙問題、上海の共同租界の問題などによって日本と直接対決に及ぶのか否か、ということである。

> いふまでもなく国民政府と日本との諒解を防止する原因ありとすれば、満洲問題の次は上海に対する実業家の懸念であらう。……以上の二点は、戴天仇氏の決し得べきところでなく、国民政府が戴氏派遣の前に決定すべき方針である。この二大方針の確立なくしては、如何に多数の友人を日本に有する戴氏でも、日本において活動の余地あるか疑問である[65]

第二は、国民政府、中国国民党とソ連の関係である。

> その迷ふのは、勿論最早北方軍閥との関係ではない。たゞロシアとの関係だけ

---

[63]「戴天仇氏ノ動静」作成年月日不詳(外務省記録『各国名士ノ本邦訪問関係雑件　中華民国人ノ部』第 1 巻(東京:外務省外交史料館 L.3.3.0.8-1))。

[64]張天放・濮清泉「国民党東京支部的左右派闘争」1975 年 5 月(北京『文史資料選輯』総第 60 輯,1979 年 4 月)150-151 頁。同じく青年会派に属した沈乃熙(夏衍)が当時を回想した『日本回憶――夏衍自伝』には、そのようなことは述べられていない。

[65]社論「国民政府の対日方針　戴氏の使命」(『東京朝日新聞』1927 年 1 月 27 日付)。

である[66]

（4）戴季陶の日本に対する評価と『日本論』

当時の戴季陶は日本国民の政治的覚醒についてそれほど期待せず、中国が革命を成就させ、生産力を高め、自強に努めることで、日本の中国政策を予防することを考えていた。そのために彼は、まず中国国民党員、中国国民の意志を団結させるべきであると訴えた。訪日直前には「私はとくに日本に行きたくないのです。私は、日本の民衆が今日まだ私の忠告を受け入れる勇気と決心がないことを深く知っているからです」と打ち明けている[67]。帰国直後の4月1日、訪日の感想として「革命は自覚自救自強の国民事業である。ただ自らの党、政府、民衆が一致団結し一致努力することによってのみ求められる。外交は才知度量と事実の問題であり、空話でない。世界民族で中国と平等に接するところにはこれと連携し、ほかには一般的宣伝をおこない、民衆を覚醒させるに限るのである。私は十余年前から何度も総理の命で日本へ行くたび、このように感じていた。このたび全局を顧みて、この思いが最も深くなっている。日本民衆は覚醒と組織が初期のところにあり、この時点では中国の革命民衆と連帯する気持ちはあるが実行力はない」と述べている[68]。また翌2日、中国国民党、国民政府、中山大学要人に宛てて、訪日の任務は「主要な活動は日本の朝野に対し、国民革命の目的と位置を説明することにあった。そして昔日の侵略干渉政策を抛棄し、再び欧米の後を追い中国民族の敵となること、あるいは中国軍閥を援助し中国民衆を圧迫することをせぬよう、彼らに覚醒を求めた。各方の人士は頗るよく傾聴してくれた。しかし、〈*日本の朝野に対し〉わが党と政府の関係について説明することはひじょうに困難であった。……まず党の統一と団結が必要であり、世界に対し中国国民党の基礎が民衆にあり、党の行動が民主集権制の組織にあることを表現せねばならない」と訴えていた[69]。

イギリスのアジア政策、ソ連の中国政策、日本の山東出兵(1927年5月-6月)、中国政府の支配力欠如と中国国民の政治能力欠如が「東方の将来の世界大戦」を招来することを警戒し、中国の自強には統一した国民精神の形成が必要である、と論じた『日本論』(1928年4月)の中で、戴季陶は、明治維新以来急速に軍国化していく日本の現状を分析し、日本民族の特性であった倫理性、武士道に現れた「尚武」精神が、1927年の訪日時には荒廃していたと嘆いた。そして、中国国民は三民主義を信奉して国民精神を形成し、革命を成就させ自強に努め、日本の中国における勢力に抵抗することと、中国の国家は民族主義を発揮して日本のような軍国主義に向かうのを回避し、強国となった暁には東方道徳の王道の道統となることを展望した[70]。

---

[66]社説「戴天仇氏を迎へて」(『東京日日新聞』1927年2月26日付)。
[67]「戴季陶致日本萱野長知書」(『広州民国日報』1927年2月23日付)。
[68]「戴季陶之談話」1927年3月31日もしくは4月1日(上海『民国日報』1927年4月3日付)。
[69]「戴季陶対党事宣言」1927年4月2日(『広州民国日報』1927年4月12日付)。
[70]戴季陶は、孫文「三民主義」講演の「民族主義第一講」にあるように、「民族」と国家は

第２節　辺疆建設に関する見解――移民を中心として

１．国立中山大学

（１）校長就任と民族統一への関心

戴季陶は広州の中国国民党一期三中全会(1925 年 5 月)閉幕後、上海に移り『孫文主義之哲学的基礎』、『国民革命与中国国民党』を発表するなど、著作活動に専念した。中国国民党中央執行委員会は 7 月、戴季陶を国民政府委員会委員に選出し、彼は就任を承諾したが、休暇を申請し、その後も広州に向かわなかった。戴季陶は 11 月半、葉楚傖、邵元冲、沈玄廬などと上海から北京に行き、広州の国民政府に反発する鄒魯らが主宰する「中国国民党一期四中全会」(いわゆる北京「西山会議」)の予備会議に出席した[71]。その直後、彼は北京の宿泊先で、反共を旨とし国民政府を批判する中国国民党「同志倶楽部」に関係する暴漢に襲われ、「西山会議」の本会議に出席せぬまま北京を離れた[72]。12 月半、今後一切の政務や党務の職責を負わず、政治に関わる言動を行わず、自らの能力と動機に基づいて学術に専念することを宣

区別され、前者は「自然力」すなわち「王道」で作られ、後者は「武力」すなわち「覇道」によって作られる。そして、「民族」を成立させる要素は血統、生活、言語、宗教、風俗習慣の 5 つであり、これら 5 つの要素は自然の進化によって生まれるもので、武力で征服して得られるものではない。しかし、これら 5 つの要素は歴史的過程で混合し、その混合が重なれば重なるほど民族の文化程度が高くなり、しかもその混合は「力」によって――強者が弱者を、大が小を吸収するという形で――行われる。「主義」は「一種の思想であり、そこから信仰が生まれ、さらにその信仰が力に変わる」。したがって、「民族主義」とは「一民族を主体とする国家が他民族の国家を圧迫する」こと(彼は「軍国主義」と言う)ではなく、それぞれの民族の国家の「平等な存在と発展」を図ることであり、「一民族を主体とする国家」を建設するためには訓練され組織された軍事力が必要である、と述べている。戴季陶『日本論』市川宏訳(東京:社会思想社,1972 年 3 月初版、1983 年 2 月文庫版)文庫版 76-78 頁、172-173 頁。

[71]戴季陶より蒋介石宛の書簡によると、戴季陶は、ただ鄒魯らに対する「朋友の情誼」に心動かされ「中国国民党一期四中全会」に参加しただけである。そして予備会議で、呉稚暉の主張――国民政府主席汪精衛に対しては、勧告の形を取るのはよいが弾劾の形を取ってはならないこと、中国共産党の「同志」に対しては、李大釗などと誠意の限り話し合い、〈*中国国民党が〉一方的に分裂の行動を取ってはならないこと――に賛同したと言う。前掲「致蒋介石先生書」985 頁。

[72]前掲『邵元冲日記』212-213 頁の 1925 年 11 月 19 日の条、20 日の条。「致呉稚暉李石曾先生請共挽危局護持本党函」1925 年 11 月 23 日(『戴季陶先生文存三続編』165-166 頁)。

戴季陶より蒋介石宛の書簡によると、戴季陶は「同志倶楽部」関係者に襲われた「原因が何であるか分からないが、事件が起こった後、いわゆる同志は、結局誰一人慰問に訪ねてくれなかった。その前因後果を遡って尋ねてみると、他人が私を見る眼がどのようであるかを知ることができた」、と中国国民党内での疎外感を訴えている。前掲「致蒋介石先生書」985 頁。

なお、従来の研究では、戴季陶が「西山会議」出席の動機や「同志倶楽部」関係者に襲われ「同志倶楽部」の事務所に監禁されたことを述べている著作として、「国民党中反動劇之一幕」1925 年 11 月(『戴季陶先生文存』975-978 頁)という文章を取り上げている。しかし、この文章には、戴季陶を三人称扱いする「戴季陶氏」、「戴季陶」、「戴氏」の語が使われ、当時の戴季陶が自称する時に用いた「吾人」、「弟」の語が使われていない。したがって、「国民党中反動劇之一幕」は戴季陶の著作ではなく、第三者の手記、おそらく当時の新聞や雑誌の記事であると考えられるため、この文章を本論文の附録「戴季陶活動略年譜・著作目録」に載せなかった。

言し[73]、原籍地の浙江省呉興県に移った[74]。

> 党内の思想上の左傾、右傾の危機と人事上の分裂という難局に対して、それを救おうとして、舌が擦れ唇が焼けるほどの精力を注込んだが何ら益を補うところはなかった。……数ヶ月以来、あらゆる見聞きするものは〈*私を〉憂えさせ、左傾、右傾がすでに騎虎の勢いとなり、理と情で鎮められないことをますます明らかにしている。〈*中国国民党と国民政府の〉系統を正して思想と事業の中堅を作ることは、懦弱な私にとって決して耐えられるところではない[75]。

そして、中国国民党の純化を主張する孫文主義学会に関与することを避け[76]、神経衰弱を口実に広州で復職することを辞退した[77]。

中国国民党二全大会(1926 年 1 月)は、「弾劾西山会議決議案」を採択し、戴季陶が中国国民党一期三中全会で「関於容納中国共産党分子加入本党之訓令」[78]を起草して1ヶ月を経たぬ内に、中国国民党中央執行委員会の許可を得ずに個人名義で『国民革命与中国国民党』を執筆し、「良からぬ影響を生み、党内の紛糾を惹起した」ことに対し、「懇切な訓令を与え、二度と誤りを犯さないように猛省を促」す[79]ことを決める一方、彼を第二期中央執行委員会委員に選出した。中国国民党の戴季陶に対する処分は、「中国国民党一期四中全会」関係者の中で最も軽いものであり、党の首脳が戴季陶を排除する意思がなかったことと、戴季陶に対し極端な批判を自制しようとする中国共産党の公式的な立場を表していた。例えば、中国共産党員の譚平山は二全大会直前に、戴季陶は鄒魯に騙され利用された[80]と言い、また、中国共産党員の鄧演達は二全大会会期中に国民政府が主催した宴会の席上で、戴季陶が『孫文主義之哲学的基礎』と『国民革命与中国国民党』を著した本意は、中国国民党員の一部があまりにも弱くて頼りなく奮起せず、革命の方法を認識できていないので、党員を一斉に奮起させて革命を行わせることにあったが、後に戴季陶は、党の綱領に背き反革命の工作を行う者に騙されて「中国国民党一期四中全会」に出席した、と述べている[81]。戴季陶は鄧演達の発言に反発し[82]、党による「中国国民党

---

[73]「解除政治職責電」1925 年 12 月 13 日(『戴季陶先生文存』978 頁)。「解除政治職責宣言」1925 年 12 月 13 日(『戴季陶先生文存』978-979 頁)。

[74]戴季陶より山田純三郎宛の書簡,1925 年 12 月 20 日付(中下正治「山田純三郎宛の書簡――孫文関係・未公開資料」(東京『東洋大学中国哲学文学科紀要』創刊号,1993 年 3 月))。

[75]前掲「解除政治職責宣言」978-979 頁。

[76]戴季陶より上海の孫文主義学会宛の書簡,1925 年 12 月 30 日付。「戴季陶貽書勉励孫文主義学会」(上海『民国日報』1926 年 1 月 3 日付)。戴季陶より広州の孫文主義学会宛の書簡,1926 年 1 月 12 日付。「戴季陶覆孫文主義学会同志書」(上海『民国日報』1926 年 1 月 26 日付)。

[77]「覆中央執行委員会因病不能赴粤請予解除一切職務函」1926 年 1 月 12 日(『戴季陶先生文存三続編』168 頁)。

[78]「関於確定最高原則事訓令全体党員」案(1925 年 5 月 24 日中国国民党一期三中全会採択)を指すのか。前掲『中国国民党歴次代表大会中央全会資料』上冊,87-91 頁。

[79]「弾劾西山会議決議案」1926 年 1 月 19 日中国国民党二全大会採択(前掲『中国国民党歴次代表大会中央全会資料』上冊,152 頁)。

[80]譚平山「党務報告――在十二月七日第八次総理紀念週各級党部代表大会」1925 年 12 月 7 日(広州『政治週報』第 2 期,1925 年 12 月 13 日付)。

[81]「国民政府讌会第二次全国代表大会中鄧演達報告遊歴各国之経過(三)」1926 年 1 月 1 日

一期四中全会」関係者の処分が不公平であり、党の団結のためにその処分の執行を停止すべきこと、および、自らは第二期中央執行委員会委員に就任しないこと、を表明した[83]。

1926 年 6 月、国民政府は戴季陶を国立広東大学(同年 8 月国立中山大学に改称)校長に任命した。彼は健康上の理由で就任を辞退した。しかし、国民政府や大学の再三の要請を受け、同年夏に就任を受諾した[84]。戴季陶は前年 12 月に一切の政務や党務の職責を負わないと宣言していたが、学術と教育に強い関心を持っていたために、国立広東大学校長の就任を受諾したと考えられる。戴季陶は校長就任の受諾直後に、早くも、大学に「アジア各民族およびそのほかの有色人種各民族の青年を集めて特殊な教育を実施すること」の必要性を述べ[85]、9 月半までに「中山大学の基本を鞏固にし、中山大学の特色を発展させる」ために、「各科系」から独立した「専門院(原文は「専院」)」の東方民族院を設置する計画を立てた。

> 東方民族院は、専門的に東方各民族の青年を集めて特殊な革命政治教育を施し、各被抑圧民族と提携し<*各被抑圧民族を>革命に従事させる中心を作るものである。国内各民族の内、特別に重きを置かなければならないのは、モンゴル、チベット、青海、四川の辺疆、雲南の辺疆の各族であり、わが中山大学がこの革命教育の責を負わないならば、それら各族の進歩を促し、それら各族の発展を助ける術がない[86]。

戴季陶は 9 月末、国民政府と中国国民党に対し、国立中山大学の運営と政治教育(原文は「政治訓育」)を分離し、前者は校長制を委員会制に改めて委員会が行い、後者は中国国民党が行うこと、そして自らは委員に就くことを提案した[87]。国民政府は 10 月半、戴季陶を国立中山大学委員会委員長に任命した。彼は同月 17 日に就任し[88]、就任以降、学生や教職員が大学内で「国民党」派と「共産党」派に対立せ

(『広州民国日報』1926 年 1 月 7 日付)。

[82]鄧演達は戴季陶が「中国国民党一期四中全会」に受動的に引き込まれたと発言したが、この発言は戴季陶の人格を侮蔑している、と戴季陶は述べている。

[83]「戴季陶対於鄧演達報告的弁明」1926 年 1 月 22 日(上海『民国日報』1926 年 1 月 26 日付)。「戴季陶対党事意見」(上海『民国日報』1926 年 1 月 27 日付)。「呈中央執監委員会対二全大会処分西山会議関係者諸同志失其公平請停止執行文」1926 年 1 月 27 日(『戴季陶先生文存三続編』168-169 頁)。

[84]「受任広東大学校長宣言」1926 年夏(『戴季陶先生文存』609 頁)。

[85]「赴粤後作法」1926 年夏(『戴季陶先生文存』611 頁)。

[86]戴季陶「対於中山大学組織上之意見」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1926 年 9 月 19 日付)。

[87]前掲「対於中山大学組織上之意見」。「上中央執行委員会請准解除中山大学校長一職並陳明大学行政組織委員制較校長制便利呈」1926 年 9 月 30 日(『戴季陶先生文存続編』193 頁)。また、戴季陶はこの時、海外(とくにヨーロッパの教育組織)考察を希望していた。

[88]「中山大学委員就職再誌(続)▲戴季陶先生第二次演説詞」(『広州民国日報』1926 年 10 月 20 日付)。

この記事によると、戴季陶はこの「第二次演説」で学生など就職典礼出席者に対して、「中国共産党は機関車のようであり、国民党は貨車のようであり、中国共産党が国民党に加入したことは客車や貨車と機関車が繋がったようなことである。機関車がないと中国の革命を世界革命の隊伍にまで引っ張って行くことは容易でない。しかしただ車両だけでは

ず、衝突せずに孫文の人格と三民主義を信奉するように、くりかえし諭した[89]。さらに、戴季陶は学科や課程の整備、施設の充実、教員の招聘、在籍学生の評価など大学の運営の大部分を企画したが、それらの企画を実現させる人材や財政を得られなかった[90]。彼は 11 月に再び海外(とくにヨーロッパやソ連の教育組織)考察を計画し[91]、蒋介石の支持を取り付けた[92]が、実現しなかった。11 月末、先述したように中国国民党は戴季陶を日本に派遣することを決議したのである。

戴季陶は 12 月、「三民主義の国民革命」の基礎は、第一に、中国の国家を作り、世界で独立、自由の地位を得ることである。第二に、全世界の被抑圧民族および帝国主義国家内の被抑圧民衆と提携し、共同して奮闘し、各民族の問題を解決することである。孫文の「民族主義」講演を引用して、「今日の中国民族は決して強い民族ではない。多くの〈*民族問題に関する〉理論や主張は、科学文化が進歩し経済組織が発達した強盛の民族に適用することはできるが、中国に適用することはできない。中華民族は現在まだ文化が立ち遅れ経済が立ち遅れた衰弱した地位にあるために、固有の自由、平等の地位を恢復しなければならないのである」[93]、と述べた。

また戴季陶は同月、救国、建国を行おうとすれば、国境線を確定し、国族の意義を理解しなくてはならない、と述べている。彼によると、「数千年の中国の歴史を見れば、中国は一主要民族が〈*国内で〉同一の文化を作ってきたのであるから、中国の民族は国族であると言うことができる」。民族は文化(血統、生活、言語、宗教、風俗習慣など)を基礎とし、国家は武力を基礎とする。複数の民族が文化上結合して一つの民族を作り、一つの国族を作る。「われわれが言う国とは、武力を基礎とすることを主張しない。……われわれが救おうとする国は民族の国家であり、建設しようとする国もまた民族の国家である」、とする。戴季陶は民族の生活領域にそ

走ることができない。われわれの総理の偉大な思想と偉大な人格こそ……この全部の車両の発動力である」。「みなさんは立ち上がって(大家起来)」、ボロディン(就職典礼出席者の一人)が孫文の中国国民党の改組を助けて新たな革命の力を起こし、現在のわれわれに「よい方法とよい思想を与えてくれた」ことに感謝の意を表したい、と述べ、会場に「大拍手」が起こったという。このことが、戴季陶はボロディンの前で学生に最敬礼をさせた、と報道された(たとえば、毅廬「中山大学委員之就職」(上海『申報』1926 年 10 月 27 日付))。鄒魯は、昨年まで中国共産党に反対していた戴季陶が、今やボロディンの前で学生に最敬礼をさせた、と戴季陶の変節ぶりを強調し、「共産党のための首切り役となった」と批判している。「戴季陶為共産党做劊子手了(打倒智識階級)」(梅蕘編『鄒魯文存』第 3 集(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊三編第 3 輯 23,1985 年 6 月影印)57 頁)。

[89]戴季陶がこのようなことを何度も諭したということは、彼が委員長就任した後、依然として学生や教職員の「国民党」派と「共産党」派との対立、衝突が収まらなかったことが推測される。林増華「“五四”運動後至大革命時期広州学生運動中的左右派闘争」1966 年 6 月(広州『広東文史資料』第 24 輯,1979 年 9 月)。戴季陶が委員長就任した後の中山大学における、中国共産党籍を持つ中国国民党員の活動については、徐彬如『六十年歴史風雲紀実』(北京:中国文聯出版社,1991 年 8 月)15-16 頁を参照した。

[90]朱家驊「戴季陶先生与中山大学」(『戴季陶先生三続編』316-317 頁)。

[91]「戴季陶請赴欧考査教育」(『広州民国日報』1926 年 11 月 6 日付)。

[92]前掲『蒋介石年譜初稿』782 頁。

[93]前掲「三民主義的一般意義与時代背景」1926 年 12 月 21 日(『広州民国日報』副刊「現代青年」第 25 期,1927 年 1 月 26 日付)。

って中国の境界線が引かれると考えた。

では国家の基礎である「民族」とは何を指すのか。彼によると、一つは国内の少数民族である。たとえば苗族、回族、猺族、羅羅族(ロロ族)などは人数が少なく、独立の必要や能力はない。したがって、中国国民党は彼らを一律平等に統治し感化しなければならない。もう一つは外モンゴルのモンゴル族とチベット族である[94]。彼らは「中国本部」の「中華民族」との雑居をあまり行わず、一民族を基礎に一つの政治、経済生活の集団を形成している。したがって、中国国民党は外モンゴルやチベットの独立を承認し、賛助し、その上でそれらの独立国と提携することが望ましい。しかしながら、内容をチベットに限ると、チベット民族はイギリスに唆され、清朝のチベット政策と民国のチベット政策の違いを知らぬままに、中国からの「離脱」を表明し中国に反抗している。そのために、中国国民党はチベット民族に対し、チベット民族の独立を尊重するという党の主張を知らしめ、中国とチベットはともにイギリス帝国主義の抑圧と侵略を受けており、提携し鞏固な戦線を作り、イギリス帝国主義を倒さなくてはならないと気づかせるべきである。このようにすれば、漢とチベットの両民族は利害において同じ地位に立ち、〈*両民族の〉感情は自ずから融合できるであろう、とした[95]。

（2）移民科と東方民族院の設置計画および華僑学生に対する教育システム案

戴季陶は 12 月末、中山大学を発ち香港に向かう途中、発作的に珠江に身を投げようとしたため、同行の朱家驊などによって広州で静養させられた[96]。翌 1927 年 1 月、広州を発ち武漢、廬山、上海を経て日本(門司、別府、神戸、東京、箱根、大阪、長崎)に向かい、3 月末上海に帰国し、5 月南京に移った。広州の第一中山大学(1927 年 2 月中山大学から改称、実施されたのは同年 7 月頃)に戻ったのは 7 月末であった。彼は国立第一中山大学校長(国民政府は 1927 年 6 月、委員会制を校長制に改めて戴季陶を校長に任命)に復職し、学生や教職員に対し、大学に法律科(法科)専門部[97]移民科と東方民族院を設置し、海外華僑学生の教育システムを確立する計画を発表した。

彼の説明によると、今後の建国の要義は孫文の建国方略である。その中に、人口[98]を過密地域から国内外の過疎地域に移し、過疎地域の資源を開発することが挙げ

---

[94]戴季陶は、満洲族と内モンゴルのモンゴル族は「中華民族」に同化してしまった、と言う。

[95]前掲「三民主義的国家観」1926 年 12 月 24 日(『広州民国日報』副刊「現代青年」第 9 期-第 15 期,1927 年 1 月 6 日付-8 日付、10 日付-13 日付)。同様の内容は、前掲「革命的知識与革命的工作講詞」1926 年 11 月から 12 月 2 日の間,521-524 頁にも見られる。

[96]朱家驊「追念戴季陶先生」1951 年 2 月 5 日(『戴季陶先生文存三続編』276 頁)。

[97]戴季陶の説明によると、法律科を理論研究を重んじる大学部と実際訓育を重んじる専門部に分け、修業年限は前者の方が後者より 1 ヶ年多い。前掲『青年之路』189 頁。

[98]戴季陶は、人口問題が帝国主義の根本原因であるとして次のように述べた。前掲『国民革命与中国国民党(上編)』68 頁。

> 社会主義者は世界平和〈*実現〉の問題においては、民族競争の基本である人口問題を完全に無視している。彼らはつねに、経済問題を解決することによって全ての問題が解決すると考えているが、こうした考えは完全に誤りである。……全世界の資本主義

られている。国内の移住地域は北部(東三省[99]、モンゴル、三特区[100])、西北部(甘粛、新疆)、西部(四川の辺疆、青海、チベット)、各省内の開墾し得る荒蕪地(四川の松潘・理県・茂県・雷波・馬辺・屏山、雲南の蛮地、広西の苗区など)である。国外の移住は帝国主義のコントロールによって各地で排斥を受け停滞しているため、移民の質と量の改良と増進は緊要である。国外の移住の失敗(アメリカや南洋にて華僑排斥が盛んであること)は、移民に科学と政治経済の知識素養が欠けていたから、生存競争に敗れたためである。

そこで、法律科専門部移民科を設け、現代文化の意義を了解し、民族の歴史を発展させる精神と、以下の 4 種類の能力を備えた移民の「領袖」、「幹部」を養成する。

第一……生産〈*活動〉での管理や労働に従事し、生活を維持し、富源を開発し、村市を組織する能力、第二……文明を増進し、教育を発展し、民衆を組織し、自治を実行する能力、第三……強権覇道に抵抗し、自己を保護する能力、第四……民族を融合し、人種を改良し、新しい文明社会を作る能力

また、法律科専門部移民科では以下の 7 種類の教育や訓練を行う。

第一　彼らに……歴史、地理、政治、経済、商工業の組織管理の常識に関する教育を受けさせ、同時に、彼らに実際に観察し練習する機会を得させなければならない。最も緊要なことは、彼らに孫文遺嘱が定めた 4 種類の遺教〈*建国方略、建国大綱、三民主義、中国国民党一全大会宣言〉と中国文化の精神を了解させることである。

第二　彼らに結社、集会の知識と訓練を持たせなければならない。

第三　彼らに調査、測量、統計、会計の知識と訓練を持たせなければならない。

第四　彼らに必要な……一般的で実用的な土木工程〈*の知識と訓練〉を持たせなければならない。

第五　彼らに必要な医薬の知識と公共衛生の知識を持たせなければならない。

第六　彼らの在学中、彼らに厳格な軍隊式の生活を過ごさせ、必要な軍事訓練を受けさせなければならない。そして彼らに、組織し、団結し、規律を遵守し、秩序を維持し、また自由に活動できる団体生活の習慣を養成しなければならない。

第七　彼らに必要な方言を学ばせなければならない。方言の教授を 4〈*3〉つの類に分ける。第一類は苗蛮語、チベット語、青海の土語、回疆の土語、モンゴル語である。第二類はシャム語、ヴェトナム語、マレー語である。第三類は英語、スペイン語、オランダ語、フランス語などである。……

もし一般の華僑青年に上記の高等な常識を持たせられるならば、大きな効果を得られるだろう。たとえ彼らを帰国させ短期間で彼らに一般的な教育を行ったとしても、得られるものは多いだろう。そのために、今後移民科には 3 種類の予備生(一

の経済組織が打破せられた時、その後に真正の単純な民族競争が現れるのである。

[99]黒龍江省、吉林省、奉天省を指す。1929 年 2 月奉天省は遼寧省に改められた。

[100]熱河特別区域、綏遠特別区域、察哈爾特別区域を指す。1928 年 9 月それぞれ熱河省、綏遠省、察哈爾省に改められた。

つは華僑子弟、両広(広東、広西)、福建の各省[101]出身者。一つは山東、直隷[102]の両省[103]出身者。一つは雲南、貴州、四川の各省[104]出身者)を収容することを計画している、とした[105]。

次に、海外華僑学生の教育システムとして、中山大学は入学試験の評価基準を特別に設けること、授業料の免除、国文・歴史・地理の補習、華僑学生の管理事務の改善、海外の華僑教育機関との連携を行うことを挙げている。戴季陶は海外の日本人移民が華僑を排斥し、華僑はそれに対抗できるだけの知識、経験、本国の保障、社会の援助を持っていないため、「いかに海外華僑の勢力を発展させ」、「いかに華僑と現地の住民との連携を図るか」が、三民主義の実際の運用の問題として現れてくる、と提起し、「中華民国の建国は華僑の努力と犠牲の結晶である」。華僑は外国の強盛と自国の衰退をよく認識し愛国心を持ち、数十年来の中国の革命運動を支援してきた。欧洲大戦後、世界で被抑圧民族の独立運動が続々と勃興しているため、帝国主義の国家は植民地に居住する現地人や彼らを抑圧している。さらに、最近3、4年来、中国でも反帝国主義の運動が勃興しているため、帝国主義の国家は植民地

---

[101]歴史的に、国外への移民を多数生み出してきた地域である。戴季陶は自らの言う国外、各省内の荒蕪地への移住に対応して挙げた、私は考える。

[102]1928年6月河北省に改められた。

[103]戴季陶は自らの言う「北部」への移住に対応して挙げた、と私は考える。

[104]戴季陶は自らの言う「西北部」、「西部」、各省内の荒蕪地への移住に対応して挙げた、と私は考える。

[105]前掲『青年之路』189頁、217-228頁。

なお、戴季陶は日本大学大学部商科附属殖民科の例を挙げ(彼はかつて同大学専門部法律科に留学していた)、その方法と業績が極めて優れていて、その帝国主義の思想と開拓の野心には反対するが、その技能養成の方法は多く採用されるべきだ、と述べている。前掲『青年之路』224頁。

日本大学の大学部商科附属殖民科は1897年4月に設けられた。

殖民科設立趣旨

今や我帝国、興国の機益然(ママ)内に熟し、勇武の偉隆然(ママ)外に徴せらる。旭然たる版図により兵甲砲艦の雄をもつて、今世紀に於ける武力の覇を唱へし露国も王師一度起つや、鎧袖一触の労に値せざりき。此の秋に際し本学は茲に殖民科を設け、以て汎く殖民貿易及探検に関する知識を授けんとす。

威武の帝国は既に世界に闊歩せり。洗兵振旅の今日における平和的我大和民族亦宇内を席捲するの覚悟なかるべからず。

敢て天下年少気鋭の士に檄す。大鵬の志を抱いて徒らに朽廃すること勿れ。大日本帝国の新気運は卿等の手腕に俟つもの多し。屑々として掌大の天地に跼蹐するが如きは、業に大国民たるの気宇に非ず。彼の山、彼の水、卿等を迎へて其蹂躙に委せんとす。大いに来つて我殖民科に学べ。

修業年限は2ヶ年、4月1日始業、3月31日終業であった(1906年4月の学則改正により随時入学が許可された)。大学部商科附属殖民科では、「外国語(英語・支那語)」、「法学通論」、「経済学」、「簿記学」、「商品学」、「財政学」、「商法」、「商業実習」、「工学綱要」、「衛生学」、「地理学」、「殖民地制度」、「慣習」、「殖民学」、「林学」、「鉱学」、「農学」、「漢学」、「測量学」、「国際公法」が開講されていた。1907年4月専門部商科に改編された。前掲『日本大学七十年略史』116頁、118頁、124-125頁。

史料の限界により、誰がいずれの講義の講師を務めたか、そして、戴季陶がいずれの講義を受けたかは不詳である。

にある華僑の教育機関を妨害し取り締っている。そのため、今後中国は華僑を苦境から救う政策をとらなければならない、と述べた[106]。

最後に、東方民族院の設置計画について、戴季陶は、一民族の形成の要は文字言語の完全な統一である。文字言語の統一によって、宗教信仰、社会風習、思想系統が統一される。現在の世界の弱小民族の 8、9 割はアジアに住み、歴史地理では中国との関係が最も深いので、中国はアジア諸民族と提携しなければならない。そして、中国とアジア諸民族は中国民族とアジア諸民族の淵源や歴史地理を研究しなければならない。また中国民族とアジア諸民族の血統を進化、改良、交換させなければならない[107]。中国は三民主義を信奉し、「絶世を継ぎ廃国を挙げ、乱れたるを治め危うきを持し[108]、往くを厚くして来たるを薄くする」(『中庸』第 9 章)の国家道徳を恢復するために、この事業の政治面では「民族国際」の設置、教育面では東方民族院の設置を考えている。東方民族院は、各弱小民族の学生で社会科学や歴史文化を研究する有志を収容し、共同してアジア文化(アジア諸民族の言語文字、風俗習慣、歴史地理)を研究する機関である。そのアジア諸民族とは、第一に「蒙古、新疆、青海、西蔵、南方の諸苗蛮など」、「歴史、地理、制度において中国とすでに一つの生活共同体を作っている国内諸民族」である。「われわれ」は彼らに「高等的人類の覚悟」を得させて、彼らが「われわれ中国民族」と協力して「中国の新文化」を建設することを希望する。第二は、朝鮮、シャム、ミャンマー、ヴェトナム、マレー、インドなど、中国と「姻戚」関係のある諸民族である。「われわれ」は彼らに自由な教化を得させて、彼らが「われわれ」と協力して東方民族の自存と共存に努力することを希望する、と説明した。

戴季陶は、東方民族院の設置計画の中で、ソ連の東方大学が東方各民族の学生にコミンテルンの革命理論や手段を教育していることを批判した。彼は、東方大学の教育には帝国主義国家の植民地に対する教育という気風があり、ソ連の利己的心理が働いている。第一に、西方の優れて勝った民族をモデルにした革命理論や手段を教える。第二に、弱小民族を支配統治する心理を教える。第三に、各民族の実際の知識、組織力をはからず、武装闘争ばかりを教える。第四に、各民族文化の発揚を目的とせず、各民族の自存、共存の歴史思想と歴史原則を切り捨て、政治教育を行い、各民族を世界革命の道具にしようとしている。第五に、教育、学術を目的とせず、各民族を世界革命に動員する手段と見なしている。そのため、東方大学の学生は、国際観念と革命の観念を発達させたが、自己の民族や国家を愛護する観念や、自己の民族の現状や歴史、今後必要な制度に対する関心や知識、学んだことを自己

[106]前掲『青年之路』228-236 頁。

[107]戴季陶は 1913 年 2 月(彼は当時、孫文の機要秘書に就いていた)、「民国の政治方針」として、社会において「一つの共同生活団体」を作り、国家において「一つの共同政治団体」を作るために、蒙、回、蔵、苗、瑤などの諸民族と漢族との「種族同化」を励行しなければならない。「中華民国は五大族より組織されてできているので、五大族が全て一国に統合しないならば、共和の目的に完全に到達することはできない」、と論じている。なお彼は、満洲族はすでに漢族と同化した、と述べている。前掲「民国政治論」1913 年 2 月 10 日付,1388 頁。

[108]戴季陶の文章では、「朝聘は時を以てせしめ」の字句が欠けている。

の民族の生存発展の法則に応用させる力を持っていない[109]と述べ、東方民族院の設置をソ連の東方大学に対抗させようと考えた。

さらに、戴季陶は、ここ数年の東方と世界の情勢は「二つの不可能で空想的な世界主義――実際は、一民族が諸民族を統治しようとする〈*その民族の〉潜在意識が自然に現れたのである――」、すなわち帝国主義と共産主義、が衝突してアジア諸民族を統治する権威を争うために第二次世界大戦を起こそうとしている。この局面において三民主義の理論的基礎を作り、革命原理を打ち立て広く宣伝することは、中国の建国、救国の唯一の方途であると同時に、アジア諸民族を救済し、彼らが受け入れられない世界主義の支配から離脱させ、自由に団結させ、天下為公の大同の基礎を建設させる唯一の方途でもある、と述べた[110]。

このように戴季陶は、孫文没後の 1920 年代半から、孫文の三民主義や大アジア主義に沿って中国国内の民族問題を取り上げ、国民政府が移民を通した辺疆建設によって、国境線内全域の少数民族を含む中国国民を教育・訓練して中国革命を成就させ国家建設を行い、アジア諸民族、そして全世界の被抑圧民族の解放運動を展開させるという構想を打ち立てた。すなわち、「民族国際」構想と移民を通じた辺疆建設が中国内外への移民の精鋭分子の養成・派遣構想によって繋がるのである。その後、戴季陶の移民の精鋭分子の養成・派遣構想は、彼が国民政府考試院の設立(1930 年 1 月)準備に忙殺され(1928 年 10 月中国国民党は彼を考試院院長に選出、1930 年 1 月就任)、また大学が財政難であったため、実現に至らなかった。しかし、彼はその後も、中国国民党中央党務学校の特別班設置[111]、陝西省武功の西北農業専科学校の建設[112]、新亜細亜学会の語学学校の建設計画(1932 年 11 月)[113]・辺疆文

[109]前掲『青年之路』212-216 頁。
[110]前掲『青年之路』253 頁。
[111]1927 年、第一中山大学校長であった戴季陶は、駐西康四川軍総司令の劉禹九に対し、西康、チベットの内地留学を希望する青年を募り、中山大学に派遣するように委託した。ところがその後、戴季陶は中央の党務と政務に復帰し中山大学を離れ、東方民族院設置計画はつぶれてしまった。そのために、劉禹九は募った青年を当時戴季陶が生活していた南京に派遣した。彼らは 1928 年末、南京に到着した。そこで、戴季陶は中国国民党に対し中央党務学校に特別班を附設し、彼らを入学させることを建議した。1929 年中央党務学校は中央政治学校に改制され、翌 1930 年特別班は附設蒙蔵学校に改制された。1931 年中央政治学校の分校を甘粛省粛州(酒泉)、青海省西寧、西康省康定、綏遠省包頭、雲南省大理に設置した。羅家倫「我所認識的戴季陶先生」(『戴季陶先生文存三続編』337 頁)。中国国民党第五期中央執行委員会常務委員会第 125 次会議(1939 年 7 月 13 日)は、回族子弟を収容しているため南京の附設蒙蔵学校を辺疆学校に改称し、中央政治学校の 5 分校を辺疆学校の分校に改制することを決議した。
[112]戴季陶は 1932 年 5 月、現在の西北(陝西、甘粛)では、外国勢力の抑圧と過去 30 年来の全国教育学術上の錯誤により、天災、人禍に対処できずに人口が激減し、思想が不良、綱紀が不振、教育管理の方法が適切でなく、教育管理によい人材がなく、悪影響をもたらしている。これらの情況は西北だけに見られるのではないが、西北の国民は性情愚直、西北の文化は沿江沿岸の文化に比べて程度が低いために、西北の現況を注意しなければならない、と分析し、以下のような西北における専門教育建設の計画案を、中国国民党中央執行委員会に提出した。「建設西北専門教育之初期計劃」(戴季陶『関於西北農林教育之所見』(南京:新亜細亜学会,1934 年 7 月))。
一、西北の経済事業を発展させるのに必要な各級専門人材を作る。

化陳列館の建設計画(1936 年 2 月)[114]に関与していった。

２．新亜細亜学会

戴季陶は 1928 年 2 月に南京で中国国民党二期四中全会に出席し、実質上中央の党務と政務に復帰した(1930 年 9 月に国立中山大学校長を辞任)。

1929 年 3 月、中国国民党三全大会(戴季陶は出席した)は、「国民革命によって産み出された中華民国の人民は、政治的知識と経験において幼稚であり、実に生まれたばかりの嬰児に等しい。中国国民党はこの嬰児を産んだ母であり、すでに産んだからには、その嬰児を保育し、教育することによって、革命の責務を負わなければならない。訓政の目的は、この主人を保育し、教育し、成人にさせて、彼らに政〈*権〉を還すことを、その全部の根本精神とする」と決議した[115]。その中で、とくに

二、現在の各中学生に確実で正当な生活の活路を持たせる。

上記 2 点を重視した実際の計画とは、次の通りである。

今後西北の新興の大学は理科を中心として、農、林、礦、工、医の各学科を周囲に設けなければならない。……

第一に、最初に国立農林専科学校を建設する。附属事業として、農場、林場、牧場、……天文気象台、……国営黄河造林局、……西北地質調査所、……西北生物研究所……〈*を設置する〉

第二に、農林専科学校完成の満 3 年後、西北理学院を建設する。……

第三に､理学院建設の満 2 年あるいは 3 年して､主要な各学系の内容と設備が充実し、人材が集まったならば、次に工学院、あるいは、工学院と医学院を同時に建設する。そして、農林専科学校を農学院に拡充してもよい。工学院の内容は、西北を開発する必要上、採礦、冶金、水利を最重要とする。……

民国二十二年に〈*農林専科学校の〉予科を設置し、同時に全力で現行の高級中学校の改良に従事しなければならない。……

第四に、……国立としなければならない。……学生は全員を宿舎に住まわせ、〈*学生の〉管理は全て軍事学校に照らして応じなければならない。……外国語は訓練を強化しなければならない。……体育の奨励は特に必要である。……

「国立農林専科学校」、すなわち西北農林専科学校は、1934 年 4 月に奠基典礼(定礎式)を行い(戴季陶は出席した)、1940 年 8 月末頃に日本軍の空襲に遭った。「致王捷三庁長、周伯敏校長書」1940 年 9 月 10 日(『戴季陶先生文存』695 頁)。そのほかの情況は史料不足のため不詳である。また、「農場」、「林場」、「牧場」、「天文気象台」、「国営黄河造林局」、「西北地質調査所」、「西北生物研究所」、「西北理学院」、「工学院」の情況も史料不足のため不詳である。

[113]「〈*新〉亜細亜学会　設蒙蔵日俄文講習班」(南京『中央日報』1932 年 11 月 20 日付)。

戴季陶は 1935 年 10 月、朱家驊に対して、「蒙蔵回語文学校の建設――このことについて名称は未定である。まず一種の普通講習班を設け、徐々に講習班を一つの学校に固定させていく。その後 10 年以内に一つの高等専門学校として完成させる。蒙、回、シャム、ミャンマーなどの言語および深遠な文学、哲学、歴史、地理などを専門的に研究するものとする。これは以前私が中山大学にいた時に定めた東方学院〈*東方民族院の誤り〉設置の計画であるが、新亜細亜学会はこの計画に基づいて主要な事業を行って欲しい」、と述べている。「致朱騮先先生書」1935 年 10 月 3 日(『戴季陶先生文存』931 頁)。

[114]戴伝賢「新亜細亜月刊前途之工作要点」1936 年 2 月 21 日(南京『新亜細亜』第 11 巻第 2 期,1936 年 2 月)。

[115]「確定訓政時期党、政府、人民行使政権治権之分際及方略案」1929 年 3 月 21 日中国国民党三全大会採択(前掲『中国国民党歴次代表大会及中央全会資料』上冊,658 頁)。

辺疆問題については「蒙蔵と新疆」という項目が設けられ、以下のように示されている。

本党は国民革命に努め、三民主義実現を唯一の目的とする。すなわちわれわれはモンゴル、チベット、新疆の辺疆の省に対しても、三民主義実行のほか第二の要求はない。これらの地方の人民の方言習俗は他省と異なり、国家行政上やや特殊の形式を呈してはいるが、歴史上、地理上、国民経済上は固より中華民族(ママ)の一部であって、同じく帝国主義の抑圧を受ける立場にある。辛亥以前、満洲は一民族で国内各民族(ママ)の上に宰制し、列強の帝国主義は中国を侵略し分割する(原文では「瓜分」)ことを謀っていた。ゆえに、辛亥革命の意義は一方では満洲の宰制政策を除き、一方では列強の分割政策を打破することであった。満清は倒れたが、不幸にして国内の軍閥がそれに代って興り、列強の帝国主義は一方で軍閥を援助して国内各民族(ママ)を抑圧しつつ、分割の説を共管の説に変え、武力的侵略を経済的抑圧に変えた。その結果ついにモンゴル、チベット、新疆の人民の、経済上、政治上、教育上の立場を少しも増進させることができなかった。今幸いにして軍閥の悪勢力が打破された。中国国内の民族(原文は「中国境内之民族」)は、互いに親しみ愛しんで三民主義の下に一致団結することを、外来の帝国主義を完全に排除する目的を達成する唯一の途径としなければならない。本党の三民主義の真義は、民族主義の面では、漢、満、蒙、回、蔵の人民の密切な団結を求め、一つの強固で有力な国族(ママ)を作り、外に対して国際平等の地位を争うことである。民権主義の面では、国内諸民族(ママ)の自治能力と幸福を増進することを求め、人民に直接民権を行使させて国家の政治に参与させることである。民生主義の面では、国内における一切の人民の経済力を発展させることを求め、国内経済の組織を完成し、自らの衣、食、住、行の生活需要の問題を解決することである。

大会はここにおいて、今後はこの主義の真義に基づき、全力でモンゴル、チベット、新疆の人民に昭示し、国家生存上共同の利益を根拠として、漢、満、蒙、回、蔵諸族が組織的に密切に団結することを実現するために努力し、ともに経済上、政治上、教育上の建設を図るべきであると認める。思うに、ただ国内民族(ママ)の政治の鞏固な力だけが、国外の帝国主義の政治掠奪を止めるに足るのである。ただ各民族(ママ)の経済および教育の充実の力だけが、国外の帝国主義の経済侵略を排除するに足るのである。本党は敢えて鄭重に次のように述明する。われわれは今後、満清、軍閥両時代のモンゴル、チベットを愚弄し、新疆人民の利益を漠視した悪政を努めて正し、各民族の経済、政治、教育の発達を誠心に扶植し、文明進歩の域に同じく進んで、自由統一の中華民国を作ることを努めて期す。このように行うことで、必ずや中国の永久の和平を保持し、世界の大同を促進することができるであろう[116]。

この中で、中国国民党が国民に政治能力を持つように訓練する役割を担うこと、

[116]「対於政治報告之決議案」1929 年 3 月 27 日中国国民党三全大会採択(前掲『中国国民党歴次代表大会及中央全会資料』上冊,646-647 頁)。

しかも、国境線内全域の少数民族を含む中国国民(「国族」)を教育・訓練することを、党の訓政の施政方針に設定した点が注目される。

戴季陶は中国国民党三全大会後、孫文の実業計画に則って中国の辺疆建設を実行することを主張した。

> 総理〈*孫文〉の実業計画は、実に中国の天然資源を開発し、中国の辺疆を拓殖するための壮大な計画である……訓政時期の出発は建設にある。建設の出発は民生になくてはいけない[117]。

また、孫文の「物質建設」(産業計画)で挙げられた建設項目を次のような表に整理して発表した[118]。この表にも、孫文の「物質建設」の一項目として辺疆への移民が挙げられている。

物質建設　建国方略題表　民国十九年仲春月戴伝賢節録(印)(印)			
交通を開発する	全国の鉄路網を完成する	中央系統	東方大港塔城線……
		東南系統	東方大港重慶線……
		東北系統	東鎮葫蘆島線……
		西北系統	多倫恰克図線……
		高原系統	拉薩蘭州線……
	自動車道を建設する		
	河川を浚渫し治水する	大水を整備し治水する	揚子江、黄河……
		新たに運河を開く	遼河松花江間運河……
		運河を修復し浚渫する	杭州天津間運河……
	全国に電話、電報、無線電を増設する		
港湾、埠頭を建設する	大海港	北方大港、東方大港、南方大港	
	二等海港	営口、海州、福州、欽州	
	三等海港	葫蘆島……	
	漁業港	海洋島……	
	内河商埠	鎮江及北岸……	
食糧、衣服、住居、交通の工業を始める	食糧工業	農地を測量する……	
	衣服工業	製糸工場を設立する……	
	住宅工業	建築材料を製造し運輸する……	
	交通工業	長距離道路を建設する……	

[117]戴伝賢「戴序」1930 年 8 月(華企雲著,張振之編『中国辺疆』(上海:新亜細亜月刊社,1932 年 4 月))。戴伝賢「中国辺疆之実況序言」1930 年 8 月 10 日(上海『新亜細亜』第 1 巻第 5 期,1931 年 2 月)。

[118]戴伝賢「物質建設　建国方略題表」1930 年仲春月(南京『考試院月報』1930 年第 7 期)。

各種の大工場を建設する	セメント工場、冶鉄工場、錬鋼工場、各種の製砿工場、造船工場、車輌工場……
水利を発展する	
モンゴル、新疆および西北一帯を灌漑する	
中国北部および中部に森林地帯を設ける	
東三省、モンゴル、新疆、青海、チベットなどの土地へ移民させる	

そして、戴季陶は 1932 年 2 月、「三民主義を信奉して行動し、中国文化を発揚し、アジア民族を復興すること」を宗旨とし、「専門的に中国の辺疆問題と東方民族の問題を研究すること」を掲げる新亜細亜学会の会長に選出された。

新亜細亜学会は、馬鶴天、林競などが 1931 年 3 月に発起し、1931 年 5 月に南京の考試院で成立大会(第一次会員大会)を開いた。成立大会では大会主席を務めた林競が、開会詞の中で新亜細亜学会の意義について述べた。

> 私たちの新亜細亜学会の意義は、名を見るとすぐに分かります。私たちはアジア洲について次のことを知っています。アジア洲はどの方面から見てもそのほかの各洲の先輩であり、とりわけ文化の方面では世界文化の母とまで称することができる、と。しかし産業革命より後、……アジア各国は相継いで植民地、あるいは次植民地の地位に陥ってしまい、とりわけ文化の方面でも失敗して再起不能となり、そして民衆の信念(原文は「信仰力」)は消失してしまいました。ですから、日本は戦って自由と独立の地位を得ましたが、精神の方面では帝国主義に同化してしまいました。私たちは亜細亜の三文字の上に「新」の一字を加えました。この新の文字の意味は、すなわち欧米各国の新しい科学的方法を採用して、遅れを取り戻し最高の段階に達してアジア文化を「振興」し、アジア固有の精神的意義を恢復することです[119]。

新亜細亜学会は1932年2月に第二次会員大会を開き、戴季陶を会長に選出し[120]、南京江蘇路大方巷を会址と定めた。同年 12 月 24 日に南京の考試院で第三次会員大会を開き、三民主義を信奉しそれをもとに行動することによって、中国文化を発揚し、アジア民族を復興することを目的となすこと(第 2 条)、中国の辺疆問題と東方民族の問題を研究すること(第 3 条)、会務を統括する董事会が月刊社(月刊とは雑誌『新亜細亜』のこと。後述)を管轄すること(第 25 条)を定める「新亜細亜学会総章」を採択した[121]。その後、新亜細亜学会は、1934 年 1 月 14 日に第四次会員大会

[119]「新亜細亜学会成立」(南京『中央日報』1931 年 5 月 11 日付)。
[120]戴季陶は 1932 年 2 月に会長に就いて以来、1944 年頃まで名誉董事、理事長を歴任している。会長、名誉董事、理事長は名誉職に過ぎなかったのであろうか、戴季陶は、「〈*民国〉20 年より後は、私は学会の責任を辞去し……」と述べている。前掲「新亜細亜月刊前途之工作要点」。
[121]「会報」(南京『新亜細亜』第 5 巻第 1･2 期合刊,1933 年 1 月)。

[122]、1935 年 1 月 27 日に第五次会員大会[123]、1936 年 3 月 8 日に第六次会員大会、1937 年 3 月 21 日に第七次会員大会[124]を開いた(いずれも南京の考試院)。しかし、同年 11 月、国民政府が重慶に遷都したことにより学会員が四散したため、活動を停滞させた。1942 年 6 月になり、戴季陶らが学会組織の回復に関する許可を国民政府行政院社会部に申請した。1943 年 9 月に重慶の考試院で理監事評議聯席会議を開き、学会活動の再開を確認し、これまでの活動の総括と今後の活動方針(主に叢書の刊行と『新亜細亜』の復刊)の策定を行い、重慶中四路上清寺陶園(考試院内)を会址と定めた。1944 年 7 月、『新亜細亜』を復刊した。この時の編輯者は新亜細亜学会、発行者は史学書局であった。抗日戦争後、新亜細亜学会は国民政府の南京への還都(1946 年 5 月)により会址を南京に移したとされているが、その詳しい時間や経緯、南京での活動およびその後の情況は不詳である[125]。

【表 5】にあるように、南京の中国国民党・国民政府の要人や中堅幹部が、学会の幹部として名を連ねている[126]。彼らは個人、党機関、政府機関の名義で学会に資金を援助した。たとえば、1932 年 12 月に、会址敷地や図書の購入、叢書や雑誌『新亜細亜』の刊行にあてて、3 万 2 千元余りを援助している(蒋介石 1 万元、国民政府参謀本部 3 千元、戴季陶 2 千元ほか)。1932 年における学会の年間(2 月-11 月)収入額が 3 千元ほど(うち、中央党部からの援助が 2 千 1 百元。残りが会費収入[127]など)、支出額が 2 千 3 百元ほどであったから、学会運営は彼らの資金援助によって大きく支えられていたと言えよう。また、1942 年度から、国民政府行政院社会部、国民政府軍事委員会政治部が学会に資金援助を行ったことが分かっている[128]。

雑誌『新亜細亜』(英文誌名は The New Asia)は、1933 年 1 月刊行の第 5 巻第 1 期以降、新亜細亜学会の機関誌と位置づけられた漢語月刊誌である。創刊は 1930

---

[122]「新亜細亜学会今晨挙行年会」(南京『中央日報』1934 年 1 月 14 日付)。
[123]「新亜細亜学会今在考院開年会」(南京『中央日報』1935 年 1 月 27 日付)。
[124]「新亜細亜学会昨開第七届大会」(南京『中央日報』1937 年 3 月 22 日付)。
[125]「復刊詞」、黄次書「新亜細亜学会会務概況」(重慶『新亜細亜』第 14 巻第 1 期,1944 年 7 月)。張憲文、方慶秋、黄美真主編『中華民国史大辞典』(南京:江蘇古籍出版社,2001 年 8 月)1821 頁。
[126]「新亜細亜学会成立会彙紀」(上海『新亜細亜』第 2 巻第 3 期-第 4 期,1931 年 6 月-7 月)、「会報」(南京『新亜細亜』第 5 巻第 1･2 期合刊,1933 年 1 月)、新亜細亜学会「会務概要」(南京『新亜細亜』第 6 巻第 1 期-第 13 巻第 4 期,1933 年 7 月-1937 年 4 月)、黄次書「新亜細亜学会会務概況」(重慶『新亜細亜』第 14 巻第 1 期,1944 年 7 月)。
[127]入会費は 2 元、年会費は 2 元。会員数は、1932 年 2 月時点で 170 余人、同年 12 月時点で 370 余人(うち、南京在住者が 200 余人)であった。
単純に、1932 年 2 月-11 月にかけての会員(1932 年 2 月までに入会した者)が 170 人、入会者が 200 人とすると、1932 年 2 月-11 月における会費収入は 1140 元である。しかし、会員、入会者全員が年会費や入会費を収めていないと仮定するならば、会費収入は 1140 元を下回るであろう。
学会の収入として、叢書や『新亜細亜』の刊行物売上が考えられるが、それに関する資料は見つけられていない。
会費収入(および刊行物売上?)が 9 百元ほどであったのではないだろうか。
[128]「会報」(『新亜細亜』第 5 巻第 1･2 期合刊,1933 年 1 月)。黄次書「新亜細亜学会会務概況」(重慶『新亜細亜』第 14 巻第 1 期,1944 年 7 月)。

年 10 月 1 日。「全中国の建設」と「民族主義の実現」のために「中国の辺疆問題」と「東方民族の解放問題」を研究することを「使命」とした[129]。実際に編集を担っていた新亜細亜月刊社同人は、印維廉、張振之、丁慕陶、魏崇陽、蒋用宏であり、その中心人物は考試院院長辦公室に勤めていた張振之であった[130]。張振之の後は、陳大斉など考試院に勤務する新亜細亜学会員が編集を担った[131]。『新亜細亜』には、毎期、戴季陶の著作や講演記録、戴季陶の口述内容を張振之などが文章化したものが掲載された。『新亜細亜』は 1937 年 4 月に第 13 巻第 4 期を刊行した後休刊し、1944 年 7 月重慶で復刊して、第 14 巻第 1 期を刊行した。1944 年 8 月(第 14 巻第 2 期)の刊行まで確認されているが、停刊の詳しい時間や経緯は不明である。

『新亜細亜』に掲載された論説の執筆者は、大部分が学会員であった。おおよそ次の四つに分類することができる。(一)考試院職員：戴季陶、許崇灝、馬鶴天、張振之など。(二)南京の中国国民党・国民政府における辺政・文化・教育方面の要人：胡漢民(立法院院長)、于右任(監察院院長)、張継(蒙蔵委員会委員)、唐柯三(蒙蔵委員会委員)、ケサンツェレン[チベット](蒙蔵委員会委員)、クーシンオ[内モンゴル](蒙蔵委員会委員)、劉家駒[西康](中国国民党中央政治学校蔵文教授)など。(三)辺疆の党・政府の要人：パンチェンラマ 9 世[チベット](西陲宣化使公署宣化使)、林競（甘粛省政府委員兼甘粛省民政庁庁長)など。(四)そのほか、辺疆問題、民族問題の専門家：印維廉、魏崇陽、譚雲山、方保漢、任乃強、楊玉清、華企雲など。

売上部数は、第一巻の刊行中で三千冊から八千冊以上に増加したと言われている[132]。その理由として、中国国内で辺疆問題を専門的に研究する雑誌の中でも、『新亜細亜』が最も早くから刊行されたものの一つであったからと考えられる。

また、『新亜細亜』に連載された論説の一部やそのほかの原稿が、新亜細亜月刊社と新亜細亜学会（一九三三年以降は学会に一本化）から「新亜細亜学会叢書」として刊行された。たとえば、「新亜細亜学会辺疆叢書」として、戴季陶、馬鶴天等

---

[129]「新亜細亜之使命」(上海『新亜細亜』創刊号,1930 年 10 月初出)。

[130]「張振之周年忌」所収の写真(上海『新亜細亜』第 4 巻第 6 期,1932 年 10 月)。
張振之(1906～1931 年)は名・振、原名・振家、字・振之、小字・挺英、筆名・真知、枕志で、江蘇省崇明島虹梅鎮生まれ。1926 年群治大学から中華法政大学(両大学とも上海)に転学、中華法政大学の図書館に勤めつつ、『人性新論』を執筆。その後、国民革命軍東路軍前敵総指揮部、中国国民党中央党部などに職場を移しつつ、『民生主義与共産主義』、『革命与宗教』を執筆。1928 年冬、国民政府考試院院長戴季陶の推薦を受けて院長辦公室に勤める。この時、『目前中国社会的病態』、『党政民三位一体論』、『知難行易説繹義』、『中国婦女自殺的解剖』などを執筆。その後、中国の辺疆問題と東方民族の解放問題に関心を寄せ、問題研究の一環として、1930 年 10 月に雑誌『新亜細亜』を創刊。『新亜細亜』の編集では、辺疆問題、民族問題に関する戴季陶や胡漢民らの口述内容を文章化しそれを掲載することも行う。また、『新亜細亜』の編集とは別に、戴季陶のもとで新亜細亜学会設立の資金集めに奔走。1931 年 10 月、南京で病没。蒋用宏「張振之行述」(上海『新亜細亜』第 4 巻第 6 期,1932 年 10 月)。

[131]新亜細亜学会「会務概要――本年一月至六月」(南京『新亜細亜』第 6 巻第 1 期)。新亜細亜学会「会務概要――第一次董事監察委員聯席会議紀要」(南京『新亜細亜』第 11 巻第 4 期)。

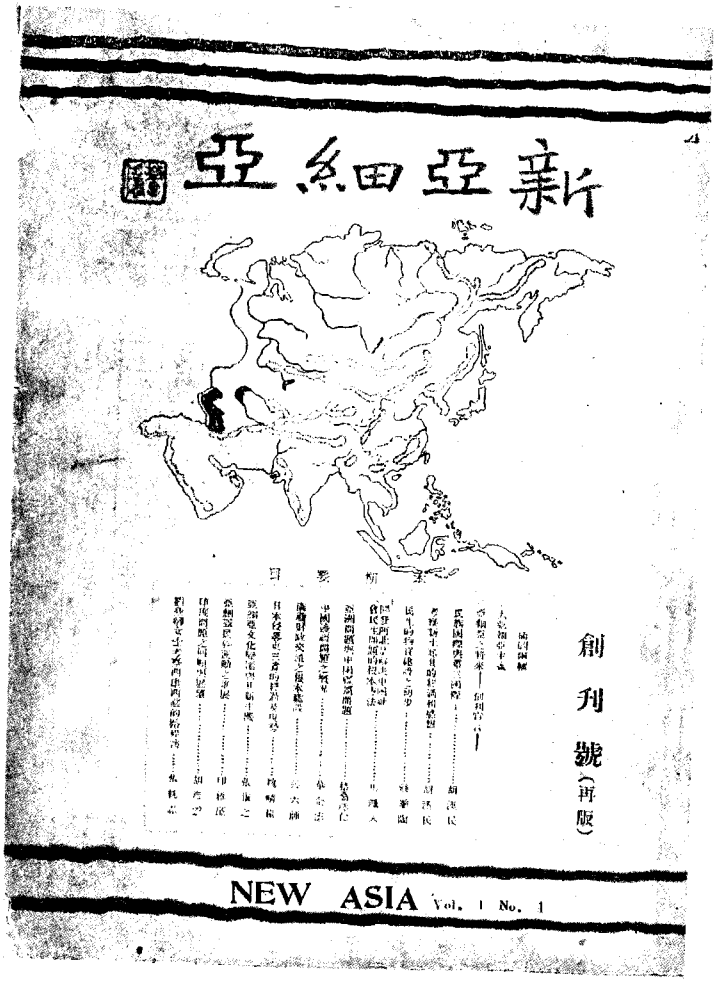
[132]「第二巻的本刊」(上海『新亜細亜』第 1 巻第 6 期,1931 年 3 月)。前掲蒋用宏「張振之行述」。

著、張振之編『西北』[133]、華企雲著『中国辺疆』[134]、馬鶴天著『内外蒙古考察日記』[135]、任乃強著『西康図経境域篇』[136]、任乃強著、魏崇陽校閲『西康図経民俗篇』[137]、任乃強著『西康図経地文篇』[138]、青海省政府民生庁編『最近之青海』[139]、唐柯三著『赴康日記』[140]など。「新亜細亜学会水利叢書」として、王応榆著『黄河視察日記』[141]など。「新亜細亜学会東方叢書」として、Marguerite Harrison(哈利生)女士(ママ)著、華企雲訳、蒋用宏校閲『亜洲之再生』[142]、譚雲山著『印度周遊記』[143]など。そのほか、楊杜宇著『導淮之根本問題』[144]、楊希尭著、林競校訂『青海風土記』[145]、戴季陶著『関於西北農林教育之所見』[146]、許公武(崇灝)著『遊日紀要』[147]、許公武著『内蒙古地理』[148]、陳有豊著『日本考試制度調査報告書』[149]、馬洪煥著『日本銓敍制度調査報告書』[150]、沈觀鼎著『日本官制官規之研究』[151]、馬鶴天著『東北考察記』[152]、馬鶴天著『西北考察記青海篇』[153]、劉家駒著『康蔵』[154]、劉家駒著『西蔵情歌』[155]、任乃強著『西康札記』[156]、美濃部達吉著、楊開甲訳、陳大斉、徐天嘯、董道寧校閲『日本行政法撮要』[157]など、がある。

『新亜細亜』創刊号の表紙には世界地図の一部が描かれた(次頁)。東は日本列島、北はシベリア、南はインドネシア(当時オランダ領東インド)、西はトルコを限りとしている。この範囲がおおよそ「新亜細亜」の地域であると考えられる。「新亜細亜」とはどのような地域的特徴を持つのであろうか。

---

[133]別名は「西北之実況与其開発」。南京:新亜細亜学会,1931 年 10 月。
[134]南京:新亜細亜学会出版科,1932 年 4 月初版、1933 年 8 月再版。
[135]南京:新亜細亜学会,1932 年 12 月。
[136]南京:新亜細亜学会,1933 年 10 月。
[137]南京:新亜細亜学会,1934 年 7 月。
[138]南京:新亜細亜学会,1935 年 7 月。
[139]南京:新亜細亜学会出版科,1934 年 1 月。
[140]南京:新亜細亜学会出版科,1934 年 1 月。
[141]南京:新亜細亜学会出版科,1934 年 1 月。
[142]原題は「Asia Reborn」。南京:新亜細亜学会,1932 年 6 月。
[143]南京:新亜細亜学会,1933 年 4 月。
[144]新亜細亜月刊社,1931 年 9 月。
[145]南京:新亜細亜学会出版科,1931 年 8 月初版、1933 年 5 月再版。
[146]南京:新亜細亜学会出版科,1934 年 7 月。
[147]南京:考試院収発股,1933 年 4 月。
[148]出版者不詳,出版年月不詳。
[149]南京:新亜細亜学会,出版年月不詳。
[150]南京:新亜細亜学会,1933 年 4 月。
[151]南京:新亜細亜学会,出版年月不詳。文末に「<*民国>20 年 9 月 3 日脱稿」とある。
[152]南京:新亜細亜学会,1934 年 12 月。
[153]南京:新亜細亜学会,1936 年 3 月。
[154]新亜細亜月刊社,出版年月不詳。馬鶴天の序文(1932 年 10 月 10 日付)が附されている。
[155]出版者不詳,出版年月不詳。
[156]上海:新亜細亜月刊社,1931 年 11 月初版、1932 年 5 月再版。
[157]南京:考試院,1933 年 9 月。



『新亜細亜』創刊号には「新亜細亜の使命」が掲げられ、それによると、中国を建設するには中国の辺疆を開発することが必要であり、中華民族を解放するには東方民族を一律に解放することが必要である。みんなで「三民主義の中国」、「三民主義のアジア」をつくろう、とある[158]。そして、創刊号の巻頭論文に孫文が神戸で行った「大アジア主義」講演(1924年11月)を掲載している。しかもその題名に「総理の東方民族に対する遺教」との副題を附している。また、戴季陶も新亜細亜学会成立大会で講演を行い、国内諸民族が三民主義に基づいて「融合」して中国文化を「復興」させ、次に「世界平和」を達成し、さらに人類の文化発展を達成しようと訴えた[159]。

このように、新亜細亜とは、国民精神が形成され辺疆建設が完成し国内の民族問題が解決され国外の被抑圧民族を平等に遇することのできるようになった富強の中国と、その中国を核とし、まず被抑圧民族のうち影響力の大きい民族の独立を援助し、次いで多くの弱小民族の独立を助けるという方法を通じて、欧米や日本の列強の植民地支配から脱却したアジア諸国家からなる。『新亜細亜』と新亜細亜学会

158「新亜細亜之使命」(上海『新亜細亜』創刊号,1930年10月)。
159戴季陶「新亜細亜学会之使命」1931年5月10日(上海『新亜細亜』第2巻第3期,1931年6月)。

が抱く、中国の建設から始まり中国の援助と協力による周辺の被抑圧民族の独立に至る構想は、まさに、孫文「大アジア主義」講演を孫文思想の中心と見なす戴季陶の解釈と一致している。

それでは、戴季陶は辺疆建設において、孫文の大アジア主義という反帝国主義の理念に基づく被抑圧民族の連帯の思想と、「物質建設」に挙げられた辺疆への移民という計画を、どのように調和させたのだろうか。民族自決の方針を徹底させれば、多くの少数民族を含む中華民国の統合も危機に瀕するという矛盾が存在した[160]。戴季陶は、漢族と弱小民族との関係について、とりわけ同祖論に基づいて、少数民族も中国に対して求心的傾向を保持すべきことを述べている。彼によると、「今日の中国内の五大民族および各小民族は、元来すべて一種族」であり、「みな中華民国の内では国民となり、相親しみ相愛し、心を同じくし徳を同じくしなくてはいけない」[161]。そして「全国の各民族を団結することによって一大国族をなすことは、とりわけ救国救世の大道なのであ」り[162]、「経済を発展させ、辺疆に拓殖することは、今日中国の唯一の主要な計画なのである」[163]という。したがって戴季陶は、漢族と満、蒙、回、蔵の四民族が同祖を根拠に「国族」として団結することは、近代の政府の少数民族に対する植民政策での抑圧と服従の関係に勝ると考えていた。彼は民族間の抑圧と服従関係には反対したが、国内諸民族の歴史的により形成された繋がりを重視し、民族平等原則を提唱すると同時に、なお同祖論により五族が漢族を中心に団結することを理想型と見なした。

そのことは、戴季陶がチベット仏教文化を儒教文化、三民主義と結びつけ、仏教が(辺疆を含む)中国の国民精神を形成し、国民意志を団結させることを可能にすると考えたことと関係がある[164]。彼は、チベット仏教文化は中国を統一する文化的力量を有していると認識し[165]、中国の「領土と政権が今日あるのは、ツォンカパ大師

---

[160]平野健一郎によれば、孫文はこの問題に関して、少数民族の「自決」(「分離独立」でなく)を認めた上で、五族共和(満、漢、蒙、回、蔵)に基づく多民族国家の形成を志向し、1924 年の中国国民党一全大会では、中国の全ての民族集団の「自決」を認める宣言を発した。しかし、1925 年の孫文没後、蒋介石は、少数民族の「分離独立」はもちろん、「自決」も中国統一への阻害要因であると強調した、と言う。「中国における統一国家形成と少数民族――満洲族を例として」(平野健一郎ほか編『アジアにおける国民統合』(東京:東京大学出版会,1988 年 4 月)56-59 頁)。

[161]戴伝賢「告青海同胞書」1934 年 4 月(南京『新亜細亜』第 7 巻第 5 期,1934 年 5 月)。

[162]「発表四年間致広慈、広慧両大師函電弁言」1936 年 2 月 4 日(『戴季陶先生文存』302 頁)。

[163]前掲「戴序」1930 年 8 月。前掲「中国辺疆之実況序言」1930 年 8 月 10 日。

[164]このような戴季陶の考えには、清朝のチベット問題を論じた平野聡が指摘するようなチベット仏教文化と儒教文化の緊張関係を窺うことができない。『清帝国とチベット問題』(名古屋:名古屋大学出版会,2004 年 7 月)。

[165]戴季陶「中国之宗教改革与救国事業」1933 年 3 月 22 日(南京『新亜細亜』第 5 巻第 5 期,1933 年 5 月)。

戴季陶は、チベットは文化上、パスパ文字、チベット仏教とチベットの宗教指導者が元朝と清朝の統一に大きな影響を与え、中国統一の最大の要素がチベット仏教にあると捉えていた。「致班禅大師書」1932 年 6 月 21 日(『戴季陶先生文存』1215 頁)。

そして彼は、チベットは国防上、満洲族と蒙古族の勢力を均衡に保つスケープボードで

[166]の徳のおかげであることをゆめゆめ忘れてはいけない。思うに、雪山〈*崑崙山脈〉から長白山までの数万里の間で、数百年の統一を作り上げた発端はここにある」[167]、と述べている。戴季陶がこのように主張したのは、彼が仏教の衆生済度の考えに体現された仁愛精神と三民主義の救国救民主義が共通している、と認識していたからである。

> 総理の三民主義は、完全に自己を犠牲にすることから始まり、救人救世のために奮起しようというものであります。三民主義と大乗仏教の衆生救済の心はまったく同じであり、相い通じるものであります[168]。

彼は国内諸民族を統合させるには、初めに仏教を振興させ、仏教徒に三民主義を信奉させなければならない[169]と考えたのである。

1930 年代における辺疆建設問題の浮上は、南京(のちに重慶)の中国国民党や国民政府に改めて国家建設の重要性を認識させる契機になった。挙国一致の国民動員が要請される中で、具体的、日常的に生起する民族問題や宗教問題に直面せざるを得なくなったのである。さらに柳条湖事件(1931 年 9 月)以降になると、国民政府は抗日運動を遂行する上でも、具体的で詳細な辺疆政策を策定しなければならなくなった。

戴季陶は「今日救国を行う道は、断じて辺疆を遺棄してはならない」[170]と述べ、辺疆建設を救国と結びつけて捉えた。また、中国国民党、国民政府の政令を辺疆各地まで通達させ、辺疆建設を進展させるためには、党、政府の威信が必要であると

あり、東に位置する「大敵」日本が中国国民の精神を東に向けさそうとしても、北に位置する「大敵」ソ連が中国国民の精神を北に向けさそうとしても、チベットが西南における信仰の中心になるならば、中国国民の精神は東に靡かず西に向き、北に靡かず南に向くだろう」と述べた。前掲「呈中央政治会議文」299 頁。

また、チベットは地理上辺疆に位置し、チベットとの関係を考察すれば、他の辺疆である西康、青海、蒙古、満洲、南方の雲南・貴州、北方の新疆・甘粛との関係を考察する場合の参考になると考えていた。「呈中央政治会議文」1934 年 5 月 24 日(『戴季陶先生文存』298 頁)。彼はそのような認識に基づいて、地理、文化、国防の面からチベットに関心を寄せた。

管見の限り、『新亜細亜』の論説には、非漢民族執筆者による民族問題に関する中央への注文(ひいては警告)、非漢民族を夷狄視する伝統的観念を脱して辺疆の問題を漢族による収奪と支配の歴史として検証しようとするものも散見できる。しかし日本の侵略に対して中華世界の統一を回復しようと主張する色彩が濃く、漢族中心の辺疆開発(同化)の視点を相対化できたとは言えない。

彼はそのような認識に基づいて、地理、文化、国防の面からチベットに関心を寄せた。

[166]チベット仏教の一派ゲルク派(黄帽派)の祖師。初代ダライラマはツォンカパの弟子とされる。

[167]馬福祥『蒙蔵状況』に寄せた戴季陶の序文(1931 年 10 月 17 日付)(馬福祥『蒙蔵状況――回部新疆附』(南京:蒙蔵委員会,1931 年 10 月))。

[168]「致蒙蔵青康各地同胞書」1931 年 7 月(『戴季陶先生文存』1257-1258 頁)。同様な発言は「致班禅大師書」1932 年 10 月 3 日(南京『新亜細亜』第 11 巻第 1 期,1936 年 1 月〈*実際は 2 月〉)、「中印両国国民的救世精神」1942 年 3 月 17 日(許崇灝著,黄士華校対『中印歴代関係史略』(重慶:独立出版社,1942 年 8 月))にも見られる。

[169]前掲「致蒙蔵青康各地同胞書」1260 頁。

[170]前掲馬福祥『蒙蔵状況』に寄せた戴季陶の序文(1931 年 10 月 17 日付)。

認識し[171]、党や政府の関係者は誠信、和平、仁愛、慈悲の精神を持たなければならないことを繰り返し強調した[172]。彼は 1935 年 11 月南京で中国国民党五全大会に出席し、大会宣言案を代表執筆した(案は 11 月 23 日に採択された)が、辺疆問題については次のように述べた。

第八　辺政を重んじ、教化を弘め、国族を固くして統一を成すこと

総理の民族主義の遺教を実施するには、……必ず国内各民族の文化、経済の発展を扶助し、その社会および家族、個人の自治の能力を培養し、その宗教信仰と社会組織の優点を尊重し、以て国家の統一を鞏固にし、国族の団結を増進することを期さねばならない。その基本実施綱領は、……

一に曰く、辺疆各地と西南各省の民族に対して、その一切の施政綱領は、まず当地の土着人民のために利益を図ることを前提としなければならない。……

二に曰く、今後国内のモンゴル族、チベット族、新疆の回族、および内地に散住する各小族(ママ)が代表を選挙するには、当地で確実な籍貫を持つ者を充て、各族人民の情意を充分に達せさせなければならない。

三に曰く、上記各民族の教育について、中央は妥善な方案を制定してその発展を図ることに切実に努力しなければならない。国家は各族の教育について、潤沢に経費を計上し予算を確立しなければならない。

四に曰く、上記各地の経済建設について、保育政策を取らなければならない。その原有の産業と技能について、できる限り逐漸改良し人民に直接利益を得させるようにしなければならない。

五に曰く、政府は辺地の人材を培養し、中央各機関に充分に辺地出身人員を任用させ、多数の人々の考えを集め有益な意見を吸収し、真正の統一した力を厚くしなければならない。

……

第十　総理の遺教に恪遵し、民族の自信を恢復し、正当の対外関係を確立することによって国家独立平等の尊厳を保持し、世界大同の目的を達すること

吾人は中国の国難の構成は一朝一夕の故でなく、自救救国の道はまた、ただ……総理遺訓に求める外ないと考える。それゆえに、第一に、吾人は……民族運動が、外に対しては自由平等を求め、内に対しては自立自強を求めるという二義を実に包含し、後者が前者に到達するための必然的努力であることを認識しなければならない。……第二に、国際関係を決定するには、全国家の命運と民族永久の利害を対象としなければならず、一時の変化と感情に牽引されては

---

[171]「致教育部陳部長<*陳立夫>書」1938 年 2 月 9 日(『戴季陶先生文存』305 頁)。

[172]前掲馬福祥『蒙蔵状況』に寄せた戴伝賢の序文(1931 年 10 月 17 日付)。「致蒋委員長電」1932 年 4 月 27 日(『戴季陶先生文存』288 頁)。「覆蒙蔵委員会馬委員電」1932 年 4 月 29 日(『戴季陶先生文存続編』169 頁)。「致向副軍長<*向育仁>電」1933 年 12 月 23 日(『戴季陶先生文存』293-295 頁)。「致蒙蔵委員会委員長呉忠信書」1937 年 2 月 2 日(『戴季陶先生文存』302 頁)。「致蒙蔵委員会委員長呉忠信書」1938 年 2 月 9 日(『戴季陶先生文存』306 頁)。前掲「致教育部陳部長書」1938 年 2 月 9 日,305 頁。「致朱騮先先生書」1938 年 3 月(『戴季陶先生文存』308 頁)。「覆朱秘書長電」1938 年 10 月(『戴季陶先生文存続編』174-175 頁)。前掲「対於辺疆問題之指示」1942 年 7 月 21 日,325 頁。

ならない。……第三に、……国家の中心基礎を完成させる工作について、共同の鞏固な信念を立て、心力を尽くして障碍を排除し、……同時に臨機応変に国家の生存利益の責任を保障し、中枢に臨機応変の権能を付し、一致して命令を聞かなければならない。……吾人がこの国難厳重の時期にあたって、危局に応じるには、またただ総理〈*孫文〉の「人定まって天に勝つ」、と「これを操る我よりすれば則ち存し、これを操る人に在れば則ち亡ぶ」の二大遺訓を持し、最大の忍耐と決心によって国家生存と民族復興の活路を保障するだけである。和平がまだ完全に絶望した時に到らないならば、決して和平を放棄せず、もし国家が犠牲を払わなければならない時に到れば、自ずから必ず決然として犠牲を払わなければならない。最後の犠牲の決心をしっかりと抱き、和平に対して最大の努力をする。……これが中国国民のこの時期における最大の義務である……[173]

戴季陶は終始、辺疆への移民について、一部の精鋭分子に依拠して周囲の者に影響を与え指導する方式を一貫して主張した[174]。彼は政府による教育・訓練の施さない移民は失敗すると認識し、堅忍、刻苦、有識な精鋭分子を養成して移民として派遣し、移住先で辺疆建設の指導を行うことを移民事業の根幹にしようと考えた。彼から見れば、移民の大勢は受動的な存在であり、移民の精鋭分子の育成はある程度強者の弱者に対する責任と義務なのであった。彼は青海、陝西、四川、広東などの教育機関に書籍を寄付し[175]、それらの教育機関を資金補助するように各関係機関に対して訴えた[176]。また、辺疆出身者の南京での入学を斡旋し[177]、辺疆出身者の登用を促進させることを政策として取り上げた[178]。彼は辺疆建設の綱領として「辺疆人材を選抜することによって、辺疆人民の事業意欲を鼓舞すること」を挙げ、「辺疆人材の選抜について言うと、最も重要なことは、各部族の優秀分子を網羅するように、適当な仕事を賦与し、辺地人民の特長を発揮させ、彼らの事業意欲を引き出

173「第五次全国代表大会宣言」1935年11月23日中国国民党五全大会採択(前掲『中国国民党歴次代表大会及中央全会資料』下冊,298-302頁)。

174「致朱騮先先生書」1938年6月28日(『戴季陶先生文存』312頁)。

175青海省西寧の青海図書館、陝西省鄜県の民衆教育館、四川省成都の蜀華中学校、広東省の翠亨村中学校などに漢語書籍を寄贈した。「致青海馬〈*勳臣〉主席書」1934年3月31日(『戴季陶先生文存』1519頁)。「編訂贈送青海図書館図書目録序」1934年6月29日(『戴季陶先生文存』1380-1381頁)。「覆黎雨民先生電」1934年9月25日(『戴季陶先生文存続編』249頁)。

176「致甘粛教育庁長書」1934年7月19日(『戴季陶先生文存』1528頁)。「覆蒋委員長電」1935年1月15日(『戴季陶先生文存続編』172頁)。

177「致蒋委員長電」1934年8月29日(『戴季陶先生文存続編』172頁)。「致何玉書主任書」1935年8月12日(『戴季陶先生文存』703頁)。

戴季陶は1936年2月、新亜細亜学会に対し、学会内に人事部を設け、辺地から求学のために内地を訪れる学生と、内地からチベット、モンゴル、青海、西康、新疆や国外のアジア各地に向かう者を招待、案内する(将来的には事業の紹介なども行う)ことを提案した。戴伝賢「新亜細亜月刊前途之工作要点」1936年2月21日(南京『新亜細亜』第11巻第2期,1936年2月)。

178国民政府考試院は1935年8月、「高等考試首都普通考試辺区応考人従寛録取暫行辦法」(国民政府公報1935年8月20日院令第1826号)を公布した。

させ、自然に事業〈*辺疆建設〉に努力させることである」と述べている[179]。さらに、漢唐の制度に倣い辺疆出身の学生に漢族式の学名をつけたという逸話がある[180]。

戴季陶は、辺疆への移民は辺疆の資源開発と防衛を充実させるだけでなく、国内諸民族を中国国民として統合する有効な手段でもあると考えていた。

三民主義や仏教あるいはチベット仏教が、国内諸民族の国民統合にどれほど現実的有効性を持つものであったのかは疑問視される。例えば、戴季陶はウイグル族のイスラーム信仰に対してどれほど配慮していたのか、管見の限り不明なのである。しかし、日本の侵略により、政府機関や各種団体が内陸部へと後退、移転した(1937年11月、国民政府の重慶遷都)ために、大後方の西北(内モンゴル、甘粛、青海、新疆)と西南(貴州、雲南、四川、チベット)の両地域の戦略的重要性がかつてなく高まった。そして、産業立地や戦時物資の供給、地下資源の確保の上から、辺疆の安定が重慶国民政府の至上課題となり、また、大後方、すなわち西北、西南に在住する少数民族といかに団結し協力関係を築いていくのかが、辺疆建設の最大の課題となった。戴季陶の辺疆問題への取り組みはこうした緊迫した情勢と連関していた。

第3節　中国文化に関する見解――礼を中心として

戴季陶は、1910年代に人道主義や社会主義を論じ、日本政府の中国政策と朝鮮政策に対する批判を展開する一方、中国の国民精神の形成によって中国の自強を図ることを主張した。五四運動時期には、政治改革の前提となる社会改革(専門を持つ人材と国民生活を改良する経済)をまず実践すべきであり、その社会改革に適応した新しい国民精神(階級意識と「仁」、「義」)を建設すべきであると主張した。その頃孫文の意向もあり、世界主義を掲げる共産主義グループから離脱し一時政治活動から遠ざかっていたが、1924年に中国国民党改組の中で党務に就くことを決意した。そして、党内における党員の中傷に巻き込まれる中、早くも1924年には党員の団結の弱さを批判し、党員の規範として孫文の人格と理論学説に対する忠誠を訴え始めた。加えて、孫文没後の1925年以降、中国を抑圧する帝国主義や、中国共産党員を統制するコミンテルン、ソ連から自立した中国革命の道を模索するために、孫文の三民主義、大アジア主義に解釈を加え、中国革命の成就を優先し、徐々にアジア、全世界への民族運動の範囲を拡大させるという考えを打ち出した。

戴季陶の思想的軌跡は、日本の強盛と中国の衰退を生み出した、それぞれの国民精神がそれぞれの国家の独立や発展を規定することとその歴史の重さを理解する過程であるとともに、近代西方国家の覇道という負の部分を析出し、近代へ批判的に継承すべき東方文化(中国文化)の可能性を模索する道でもあった。彼は、中国革命は、西方文化に中国を合わせることではなく、三民主義を支点にし、中国固有の

---

[179]「対於辺疆問題之指示」1942年7月21日(『戴季陶先生文存』325-326頁)。

[180]戴季陶は、発音にしたがって姓をつくり、よい意味を取って名づけた。西康、チベットの学生には「西」の文字を入れ、新疆の学生には「新」の文字を入れたという。「為第二期新疆纏回学生倣漢唐易名旧制易名文」1935年11月(『戴季陶先生文存』1385-1386頁)。陳強立「格桑沢仁、諾那、劉家駒」(『四川文史資料選輯』第27輯,1982年10月)。

文化を「復興」して西方の最新文化を吸収することによって、中国の現状に根ざした国民精神(戴季陶は「民族主義」と言う)を形成することによって実現可能なものであると考えたのである。1928 年に戴季陶は、三民主義は「民族主義の発生」と「世界観念の明確化」を同時に行う思想である、と述べている。彼によると、孫文は、「中国のような久遠にして偉大な歴史」と、「国家関係」が密接になり「民衆生活の組織」が発達してきた現代世界を研究して三民主義を築き上げた。「中国の国家道徳を復興するこの思想〈*三民主義〉こそ、世界の政治生活の改革のための起点であるとの確信をますます深める」[181]、とする。また、彼は次のように述べ、文化の形成が多くの戦争を伴いながらも相互の不断の交流によって進展していくことの意義を説きつつ、しかし、それがつねに望ましい方向に進むわけではなく、歴史の逆説がもたらす災厄についても注意を促した。すなわち、武力行使が時に文化の推進の原動力となる。しかし野蛮な民族の勝利が文化の逆行をもたらすこと、そして、戦勝の結果として文化の進歩が大きく妨げられたり破壊が行われたりするという事態も往々に出現することに注意を促した。

> 今や世界のあらゆる民族の生活は、互いに交流しあい、産物を交換しあう段階に達しており、したがってすべての関係は相互的である。……相互影響、相互感化、相互圧迫の関係が大同の基礎をつくる。したがって、「車は軌を同じくする」となれば、必ず「書は文を同じくする」が実現し、「書は文を同じくする」時代になれば、必ず「行は倫を同じくする」が達成される。しかし、国家が生きているかぎり、この人類文化大同の運動は、つねに武力を原動力として推進される。いうまでもなく世界文化の交流には、多くの悲惨な戦闘の歴史が秘められているのだ。この盲目的な戦闘において、文明民族が勝利を収めた場合には、当然、文化の進歩は格段に順当かつ迅速となる。しかし実際の歴史は、これとは逆の場合が多い。……したがって、もし文明民族が「奮闘」を忘れ、「武力が文化推進の原動力である」ことを忘れたとしたら、それは「文明の堕落」を意味する。「自然」が要求するものは、人類の努力であり、人類の生存である。……「自然」はただ堕落を罰する。文明の浪費者、みずから努力せずして生存を求めるなまけ者を罰する。生存のために奮闘する者には、自然は生存を許す。文化のために奮闘する者には、文化を広めさせる。……中国民族が日一日と堕落の道をたどっていた。最初に日本に文化を与えた朝鮮も、堕落して見る影もなくなっていた。もし朝鮮が衰弱していなければ、鼎の軽重を問う者が出るはずはない。もし中国が衰弱していなければ、日本が中国侵略の野心を抱くはずがない[182]。

このような戴季陶の文化形成と戦争の関係に対する認識は、中国国民に対し、今後日本に抗戦する(第一章で述べたように、戴季陶は中日戦争勃発の可能性が大きいことを認識していた)覚悟を促す警告であった。また、彼自身が今後勃発する対日抗戦下においても、三民主義を支点にし、中国固有の文化を「復興」して世界の最

[181]前掲『日本論』文庫版 91-92 頁。
[182]前掲『日本論』文庫版 92-93 頁。

新文化を吸収することによって、国民精神を形成しようという決意表明でもあった。

戴季陶は1929年10月、国民に団体生活能力、奮闘精神を訓練させる必要があり、国民の軍事教育が不可欠であることを主張した。その中で彼は、教育を通じて国民に礼の持つ人間関係のあるべき「法式」や秩序[183]を徹底して身に付けさせるべきことを強調して訴えた[184]。

1930年代以降、戴季陶は礼楽に関する著作を数多く残すことになる。実際のところ、彼は礼と楽を併せて論じることもあったが、特に礼を多く論じている。現在その理由を明らかにできるだけの史料を持っていないために、今後の課題としたい[185]。

戴季陶の言う礼とは、「人類共通の生活秩序の体制および〈*生活秩序の〉行為の総称」[186]、「性情の節制」[187]、「人類の間の一切の秩序や規律」、西方の法治国家における法律との普遍性を持つ「法を含む一切の社会秩序儀式」のことであった[188]。

戴季陶は1933年3月に、中国の「近世」では礼教が破壊され、礼は「今世の法律制度」、「成文となっていない公共秩序」、「善良な風俗」など「公共で信じられている理や〈*公共で〉行われている習わしを標準とするもの」であることが忘れられている。「たとえば、欧米の法体系のある国は、実は礼教によって国を建てている良い例である。ただ最近の人はそれを礼と言わず、法と言うだけである」。また、中国の近世では、文明は音楽から始まり、音楽に由来することが忘れられている、と述べる[189]。そして1934年1月、「礼楽は建国の大成であり、民生は建国の首要である。……礼楽の学問を今日より始めなければならない。……固有の道徳智能を恢復し、努力して世界の科学文化の先端に追いつくことは、……前者が本で後者が末であり、……後者が原因であり前者が結果である」[190]、と論じる。さらに1943年11月には、「今後の礼制は、一面では固より固有の道徳精神を発揚するものでなければならず、また一面では世界の文明、国家の大同の道に適応するものでなければならない」[191]、と言う。

このように戴季陶は、国民精神を形成するには、まず中国固有の道徳文化を復興した後に、西方の科学を吸収することに至らなければならないと認識していたのである。

---

[183]戴季陶はこの時、礼楽は国家の基本、骨髄である。礼楽が亡ぶと国家や社会は自ずから凋落し、民族は自ずから衰亡する、とも述べている。ただし、楽について詳細に述べていない。

[184]「国民教育与軍事教育講詞」1929年10月(『戴季陶先生文存』721-727頁)。

[185]楽とは中国音楽であり、「説音楽」1933年3月(『戴季陶先生文存』343頁)、「贈中国口琴会序」1933年8月16日(『戴季陶先生文存』343-344頁)、「致教育部顧次長書」1943年11月8日(『戴季陶先生文存』352-353頁)、「論中華楽教」1947年11月23日(『戴季陶先生文存』359-360頁)、前掲「学礼録――読礼札記」292-294頁、で論じられている。

[186]「中華民国礼制之基本観念」1943年11月13日(『戴季陶先生文存』355頁)。

[187]「学礼録――礼制通議前編初稿」1945年5月(『革命先烈先進詩文選集』第4冊,268頁)。

[188]「勗本院〈*考試院〉同人書」1936年2月12日(『戴季陶先生文存』346頁)。

[189]前掲「説音楽」。

[190]戴伝賢「礼楽与民生」1934年1月1日(南京『新亜細亜』第7巻第1期,1934年1月)(南京『考試院公報』1934年第1期)。

[191]「制礼原則示要」1943年11月3日(『戴季陶先生文存』351頁)。

戴季陶の礼制の概念・分類(1943 年～1945 年)[192]

礼の定義			体(身体)、理(道理)、履(実行)、宜(適宜)
中華民国礼制の宗旨	三民主義	誠、敬、公	民族固有の道徳智能を恢復する
			民権主義の政治を建設する
			民生主義の社会を建設する
民国礼制建設の基礎			簡易を重んじる。統一を重んじる。大同を重んじる。往来を重んじる。節倹を重んじる。
五礼・三大類別・八類	吉	民礼(民間通用の礼儀)	男女の礼(別を重んじ平を尚ぶ)
			家族の礼(孝を重んじ親を尚ぶ)
	凶		郷里の礼(徳を重んじ歯を尚ぶ)
			学校の礼(賢を重んじ知を尚ぶ)
	軍		社会の礼(信を重んじ倹を尚ぶ)
		国礼(国家の礼制、政府が行う儀式)	軍隊の礼(命を重んじ任を尚ぶ)
	賓		政府の礼(能を重んじ位を尚ぶ)
	嘉	国際礼(国と国の間で行われる往来の礼、政府が国際間で行う儀式)	国際の礼(和を重んじ同を尚ぶ)
国民守則十二条		八徳(忠、孝、仁、愛、信、義、和、平)	忠勇は愛国の本
			孝順は斉家の本
			仁愛は交際の本
			信義は立業の本
			和平は処世の本
		四維(礼、義、廉、恥)	礼節は治事の本
			服従は責任を果たすの本
			勤倹は服務の本
			整潔は強身の本
		三達徳(知、仁、勇)	人を助けるは快楽の本
			学問は救世の本
			根気は成功の本
礼の七用			国家を建てる。社会を安んずる。人民を和す。事業を立てる。風俗を厚くする。万国と協和する(絶世を継ぎ廃国を挙げ、乱れたるを治め危うきを持し[193]、往くを厚くして来たるを薄くする(『中庸』第 9 章))。後世

[192]前掲「中華民国礼制之基本観念」355-356 頁と、前掲「学礼録――礼制通議前編初稿」267-280 頁から作成した。
[193]戴季陶の文章では、「朝聘は時を以てせしめ」の字句が欠けている。

	に利させる。
礼の六事(これは生活の全てを含む)	食、衣、住、行、育、楽
礼の四儀(これは生活の全てを含む)	視、聴、言、動
礼の四宜[194]	時、地、人、事
礼と教育	礼によって教は成り立ち、教によって礼は行われるので、礼をはなれて教は成り立たず、教なしに礼は行われることはあり得ない。建国は教学を優先させ、教学は礼楽を重視し、礼楽は中和を極意とする。

戴季陶は、礼は世界の文化の中で普遍性を有するものと認識していたため、礼を基準にして、日本、欧洲、インドを批評するに至った。

日本――戴季陶は 1934 年、日本では 1927 年当時(彼が訪問した年)、「社会における礼と義」、「人々の慈悲と信仰」が彼の東京留学時期(1904 年から 1906 年の間～1909 年)に比べて格段に衰え、「思想が過度に功利に走り、行為が過度に機械的にな」ってしまった。強国である日本の社会がこのように荒廃したのは「東方の不幸、また世界の深い憂い」である、と述べた[195]。

欧洲――戴季陶は国民政府特使としてベルリンオリンピックに派遣され訪欧し(1936 年)、招宴に応じる以外は努めて、「一国の文化がどのようなものであるか」を知るために教会と歌劇場[196]を参観した(彼はアメリカで生活したことのある国民

---

[194]「礼とは宜である。歴代の王朝が建てられた時間が異なるので、その礼楽も異なるであろう。五方の民はそれぞれの宜がある。地方によって生活が制約され、それぞれの民の教育が異なるので、その礼楽も異なるであろう。……時、地、人、事が異なれば、その行われる礼楽もまた異なる。……現代の中華民国の礼楽は、古代の礼楽と異なるだけではなく、外国の礼楽とも異なる。その中には継承されるべきものもあるが、削減、増加するものもある。これこそが宜の真意である。」前掲「学礼録――礼制通議前編初稿」(『革命先烈先進詩文選集』第 4 冊,269 頁)。

[195]「致駐日蒋公使<*蒋作賓>書」1934 年 9 月 20 日(『戴季陶先生文存』1534 頁)。

戴季陶は独立を保ち富強に達し、朝鮮を滅ぼし中国を侵略する日本を、「忘仁」と詰っている。

儒家は人に報徳を教え
仏家は人に報恩を教えたが
日本人めらは二つながらともに報じなかった
王仁(わに)は忘仁(仁を忘れる)を創り出したのだ

「南游雑詩――由曼徳里返仰光舟中雑感」の一節,1940 年(『戴季陶先生文存』1409 頁)。戴季陶の注記によると、「朝鮮の王仁は千字文と論語とを持参して倭の朝廷に献上した。これが日本が中華の文教に親しんだ始めである。その後、隋唐二代、使者を派遣して学びに来ることがつづいた。今日の「開明」王仁は、実にその祖先である」、と言う。本論では次の日本語訳を参照した。「日本をよんだ戴季陶の漢詩」(東京『中国』第 62 号,1969 年 1 月)18 頁。

[196]戴季陶は、パリの歌劇院(歌劇「Golden Cock」とバレエを観る)、エッフェル塔、ブリュッセルの国立歴史美術博物館、陸軍体育学校、古代美術館、ワーテルロー戦場址を訪ねたことが確認できる。程天放(当時、駐ドイツ特命全権大使)の「従莱因区域到法比――使

政府主席林森からそのことを教わった)。戴季陶は帰国後、「大小十余りの国を遊歴し、……あえて得るものがあったと言わないが、各国の政教風俗について見たものは多かった。要するに、欧洲諸国は祭や宴において礼楽が行きとどいて備わっており、プロテスタントと歌劇の礼楽がとくに盛んで美しい。もしこのことを評論するならば、私は、〈*礼楽の〉形式は中国のものと同じではないが、礼楽の意味は、とくにわれわれに伝わる礼経の義と大きく違わないと思った。歌劇、話劇、雑劇および映画館、遊楽場には未成年者は入ることが決して許されていない。また家庭での宴会も同じである」、との感想を残した[197]。

インド――戴季陶は 1940 年 10 月から 12 月にかけて、重慶国民政府と中国国民党を代表し、ミャンマーを経由してインド各地を訪問し、タゴール(Rabindranath Tagore)、ガンディーと会談した(戴季陶はネルーを訪ねたが、ネルーは当時投獄されていたため会談し得なかった)。戴季陶は中印連携をくりかえし論じたが、その根拠は中印両国がアジアの文化大国であり[198]、仏教国であることにあった[199]。

戴季陶は、抗日戦争が終わった知らせを聞いた時、「和気」、「忍耐」、「節省」を国民に訴える必要があると考えた、という[200]。彼は、中国が人力と物力の不足により戦後復興が困難であることを憂慮していたからである。

日本はすでに戦争に敗れ無条件降伏した。〈*中国は〉国を固め、民を安んじ、

徳回憶之五」(台北『伝記文学』第 3 巻第 6 期-第 4 巻第 1 期,1963 年 12 月-1964 年 1 月)、「第十一届世界運動会――使徳回憶之六」(台北『伝記文学』第 4 巻第 2 期-第 3 期,1964 年 2 月-3 月)。

[197]前掲「礼楽与政教」361 頁。管見の限り、戴季陶の訪欧の感想はほかの史料に見あたらない。

[198]戴季陶はもともと、東方文化の内では日本文化の独自性を認めていなかった。季陶「我的日本観」(上海『建設』第 1 巻第 1 号,1919 年 8 月)10 頁。

> いったい日本の文明とは何か。日本の学者は熱心にこじつけや粉飾に努めているが、もし日本の歴史文献から、中国、インド、欧米の文化を全て取り除いてしまうならばどうなるか。思うに、裸にされた日本に残る固有の本質は南洋の土人並みのものであろう。

[199]戴季陶は従前から中印関係を重視していた。1926 年 12 月、主要敵をイギリスとし、中国革命とチベット革命とインド革命の連携の必要を説いた。前掲「三民主義的国家観(三)(四)」1927 年 1 月 8 日付、10 日付。また、中山大学東方民族院の設置計画(1927 年)では、インドを中国と「姻戚」関係のある諸民族と見なした。

さらに、中国側の中印学会(1935 年 5 月設立)監事会主席(監事長)として学会活動に関与し、またインド在住の譚雲山と協力してサンティニケタン(Santiniketan)(言語の意味から漢語では「和平郷」と記される)の国際大学(Visva-Bharati)に中国書を贈り、中国学院の設立(1937 年 3 月)に関与した。

しかし、南京国民政府設立(1927 年)以降、党務と政務の中枢にあった戴季陶は、インドの独立やチベットの主権など、中印関係の外交、国防に関する問題について発言することを慎重に避けていた。鄭彦棻「永念季陶先生」(『戴季陶先生文存三続編』186 頁)。

「中印両国文化興衰離合因縁頌」1940 年 12 月 10 日(『戴季陶先生文存』1155-1157 頁)、「告別印度人士書」1940 年仲冬月(『戴季陶先生文存』1291-1292 頁)、「中印両国国民的救世精神」1942 年 3 月 17 日(『戴季陶先生文存』1333-1335 頁)、林承節『中印人民友好関係史』(北京:北京大学出版社,1993 年 12 月)、譚中編『譚雲山与中印文化交流』(香港:中文大学出版社,1998 年)を参照のこと。

[200]「三事偈」1946 年 6 月(『戴季陶先生文存』1450 頁)。

世界と協和する活動にこれから着手しなくてはならない。その困難さは倭寇に抵抗する戦争の百千倍も困難である。思うに、戦争に勝つことは固より困難であるが、和平を保持することはさらに困難なのである[201]。

ここに言う「和平を保持することはさらに困難なのである」とは、戴季陶が戦後の東北(満洲)[202]、内外モンゴル[203]、新疆をめぐる中ソ関係、国共関係について決して楽観していなかったことを表している[204]。中国国民党と中国共産党との内戦が激化しつつあった 1948 年 1 月には、

最も自ら悲しむことは、民国の建国から一昨年(ママ)の大戦終了時までの約 35 年間において、最近の日本降伏という、実にわが国とって弱を転じて強となるような時の運が最も有利な日であり、全国一切の建設を整頓し、国際的な地位が与えられる百数十年来未曾有のよい巡り合わせを、まったくうまく利用できずに、甘んじて自暴自棄になってしまったことである[205]

と慨嘆している。

戴季陶は 1948 年 1 月、中国は古来「礼楽を政教の本源とし、……ことごとく民生を重んじ」たが、「近年の中国では礼楽が滅びて久しいために、中国は衰えかつ乱れているのである」。さらに、現在(当時)の中国における人心の荒廃(彼は「悖叛暴乱淫殺貪嗔愚痴狂妄」と言う)と宗教の衰退を危惧し、科学技術ばかりを崇拝する風潮を厳しく批判した[206]。彼は、富強は覇道(軍国主義)でなく王道(民族主義)の中で実現し、礼が守られる。しかし、中国はいまだ内政を再建できず、富強を達成できず、貧しく弱い国家として王道と礼を守れず、覇道の国際社会から自立できないままに冷戦に巻き込まれるのではないか、と憂慮した。そして、戦後の日米ソはすでに科学や功利ばかりを重視する覇道の国家になってしまったと認識し、日本の戦後改革や日本国憲法の施行、および戦後の冷戦、米ソ対立に直接言及することはなかった。戦後戴季陶は、国策を誤り敗戦した日本が、琉球、朝鮮、ロシア、中

---

[201]「題民国十六年使日事竣告別書」1945 年初冬(『戴季陶先生文存』1441 頁)。

[202]朱家驊によると、戴季陶は「日本が投降した翌晩に」、中国共産党の軍事力を牽制するために東北接収より先に華北を安定させることを主張した、という。前掲「追念戴季陶先生」278 頁。

[203]陳立夫によると、蒋介石が中国国民党中央執行委員会政治委員会に外モンゴルの独立自治案を提出したことに対し、陳立夫と戴季陶は「外蒙古の独立を正式に承認する必要はなく、他日これを撤回する余地を残しておくべきである」と主張した、という。陳立夫『成敗之鑑――陳立夫回想録』下巻,松田州二訳(東京:原書房,1997 年 7 月)173 頁。

結局、1945 年 7 月 6 日、蒋介石、孫科、鄒魯、戴季陶、于右任、呉稚暉、陳誠、王世杰が討議し、外モンゴルの独立を認めることを決定した。『王世杰日記』手稿本,第 5 冊(台北:中央研究院近代史研究所,1990 年影印)117-118 頁。前掲『抗戦史論』581 頁より転引。

[204]「致向議長書」1945 年 12 月 12 日(『戴季陶先生文存』330-332 頁)。「在白崇禧委員宣読閻錫山委員報告中共活動情形後之発言」1946 年 3 月 9 日(『戴季陶先生文存三続編』143-144 頁)。

[205]前掲「礼楽与政教」364 頁。

[206]「礼楽与政教」1948 年 1 月(『戴季陶先生文存』360 頁、363-364 頁)。

戴季陶は 1944 年 6 月、「中国は礼教の国であり、礼はわが先人だけが伝えてきた学問である」と述べた。戴伝賢「自序」1944 年 6 月 16 日(戴伝賢『学礼録』(重慶:正中書局,1945 年 5 月))。

国などの「隣国との交際」にあたって、古来の教えである儒教に背き、「仁を忘」れたために「自滅してしまった」、と慨嘆した[207]。

戴季陶は 1948 年 6 月に考試院院長を辞任し、湯山に隠居した。中国共産党軍の南下により、蒋介石や蒋緯国は戴季陶に南京から台北に移るように勧めたが、戴季陶は成都の実家に戻ることを希望し、台北行きを拒否した。戴季陶は 12 月末、南京を発ち広州に移り成都行きを準備したが、翌1949年2月12日広州東山で没した。享年58歳。睡眠薬を大量に服用し(持病の神経痛のために睡眠薬を常用していた)、心臓が衰弱して停止したことが直接の死因であり、遺書は見つからなかったという。

戴季陶の礼論は 1930 年代に急増し、インドへと関心が広がった。彼は、まず中国固有の道徳文化を復興した後に、西方の科学を吸収することに至らなければならないと認識していたが、この認識は、戴季陶が入水(1922 年)直後に、民権報以来「殺伐とした言論を鼓吹」して「でたらめに(原文は「糊乱」)」西洋の学説を輸入し、中国の実業や道徳を破壊したことに対して「重い責任」を負わなければならず、今後は、西洋の「純正な科学」の「輸入」と「実業の建設」、農民や労働者など「平民階級」の社会に「わずかに残されている」利他の精神の回復を、自らの使命としなければならない、と悟った[208]内容と通じている。彼にとって礼の研究は、1910 年代からの国民精神を形成の課題を達成するための作業であり、その動機は 1920 年代以降における孫文の理論学説解釈の動機と通じていた。

---

[207]「哀日本」(『戴季陶先生文存』1449 頁)。戦後における戴季陶の日本に関する文章はこの詩 1 篇だけである。本論では次の日本語訳を参照した。前掲「日本をよんだ戴季陶の漢詩」18-19 頁。

三百年来努力	三百年来努力して、
学風定於晦庵	学風は朱子に定まっていたが、
長崎一興蘭学	長崎に蘭学がおこってから、
全国遂起不安	全国は不安動揺しはじめた。
尊皇攘夷自大	尊皇攘夷は自大であり、
開国進取争先	開国進取はわれがちであった。
一挙而滅琉球	まず兵をおこして琉球を滅し、
再挙而制朝鮮	ふたたび兵を出して朝鮮を制し、
三挙而勝察汗	三たび兵を派してロシアに勝ち、
四挙而侵中原	四たび兵をつかって中国を侵した。
交鄰不遵古教	隣国との交際にあたって古来の教えに背き、
学風不継当年	学風は往年とは切れてしまった。
三毒十悪既満	多くの悪業を重ねて、
九横八難自全	そのために数々の禍難を招いてしまった。
千年長崎旧港	千年の歴史ある長崎の港だが、
一弾尽化灰煙	原子爆弾によってすべては灰と煙になってしまった。
可知立国有道	国の建前には道が大事なのであり、
富強不在覇権	富強は覇権に存在しないということは明らかである。
可惜王仁教化	惜しいかな、王仁が教化したけれども、
後代忘仁自殲	後世、忘仁(仁を忘れること)によって自滅してしまったことを。
東望不勝太息	東の方を眺めて歎息にたえない。
哀哉海上三山	哀しきかな、海上の三島。

[208]これは 1926 年 7 月頃の回想である。前掲「八覚——序言」(『戴季陶集』上巻,10-16 頁、20-22 頁)。

結　論

これまでの戴季陶研究における問題点の一つは、政治路線(対日外交路線を含む)の根本にある思想についての考察がなお不十分なことにあった。中国大陸、台湾の学術界では、戴季陶が政治路線において一貫して三民主義を信奉し、孫文が主導する革命に従事したという見方が定説となり、戴季陶が人道主義や社会主義に傾倒しながら、精神的な葛藤を経て三民主義を信奉するに至ったという経過が看過されてきた。日本の学術界では、近年、戴季陶が中国の自強、中日戦争の勃発回避、中国の近代化の推進のために、時期によって対日批判(反日)と中日提携(親日)の両極端の発言をするなど、戦術的な対日外交路線を取ったことが明らかにされた。しかし、それらの戴季陶の対日外交路線研究は、1920 年代までが主な対象となっており(その理由として、戴季陶は 1930 年代以降、日本を論じることが激減したからであるとする)、1930 年代以降については検討が不十分なままであった。その結果、戴季陶の思想に内在していた一貫した論理の形成とその生涯に亘る展開過程の把握が重要な課題として残されたままとなっていた。

そこで本論文では、とくに戴季陶の対日外交路線、孫文の理論学説に対する解釈、アジア認識と中国辺疆認識の側面に着目して、彼の全著作と生涯に亘る言動を対象として追求し、整理し、分析を加え、その政治路線の根拠である中国の国家の独立・発展を実現させるためには国民精神を形成しなければならないという思想が、どのような過程を経て生まれ、発展していったかを明らかにしようした。

具体的には次の三つの問題に取り組んだ。

第一に、戴季陶の対日外交路線における対日批判と、国民精神形成についての主張のつながりを説明することである。

第二に､戴季陶の五四運動時期のマルクス主義理論研究および 1920 年代半ばの孫文の理論学説の体系化と、国民精神形成についての主張を関連づけて捉えることである。

第三に、戴季陶の大アジア主義理解、移民問題に関する言説および礼に関する言説と、国民精神形成についての主張を関連づけて捉えることである。

本論文では検討の結果、以下の事柄を明らかにし得た。

第一に、戴季陶は執筆活動を始める直前に日本の韓国併合に際会し、日本政府の朝鮮政策と中国政策は非人道であると批判した。彼は中国の革命の成就、中国の自強のために、日本が中国を援助することを説いた。これが彼の中日提携論の本質である。また、彼は日本政府の朝鮮政策と中国政策が中国革命の進展を阻害するとして批判したが、その政策は日本の国家の独立(明治維新)や発展の延長線上に位置づけられ、その政策の方向を規定しているのが国民精神である、と考えていた。また、日本国民が政治的に覚醒して中国政策の転換を政府に要求する期待は抱き続けた一方で、中日関係は途切れないという確信を持っていた。彼は対日批判を通じて、中国国民に自省を促し、国民の意志を団結させることを考えていた。

第二に、戴季陶は五四運動時期に、当時の社会変動に応じた国民精神を構築する必要があると考えた。彼は国民精神として､「仁」､「義」と階級意識に注目した。しかし、孫文の

反対もあって共産主義グループから遠ざかった戴季陶は、1920 年前半苦悶しつつ、利他(仁愛)の精神に価値を見出し、利他の精神を孫文の三民主義の中から導き出した。1920 年代後半には、救国主義としての三民主義を信奉し仁愛精神を持った中国国民党員(中国国民党改組によって入党した中国共産党員も含む)が、西方の科学文明を受容して国民を指導し中国の自強を図ることを主張した。

第三に、戴季陶は、中国はアジアの大国であり、またアジアは世界で被抑圧国の最も多い地域である。アジア諸民族の独立こそが、中国革命の最終的な目標であると考え、一貫して、日本政府の朝鮮政策と中国政策が中国革命の進展を阻んでいることを批判した。彼が 1920 年代後半から 1930 年代にかけて述べた中日提携、「民族国際」、新亜細亜の構想は、まず中国革命を成就させなければならないという確信に基づいていた。彼は終始、中国の国家的独立を主要任務と考え、独立し富強となった後、周辺のアジア諸民族の独立を援助し、最後に全世界の被抑圧民族と提携することを展望していたのである。中国革命の目標には辺疆建設が含まれており、戴季陶は 1920 年代半から、その重要性を認識していた。辺疆建設に当たっては、三民主義を信奉した、有識、自立的、利他的な精神を身に付けた精鋭分子を養成し、その精鋭分子が移民や辺疆の国民を指導することを考えた。1930 年代から 1940 年代に亘る礼の研究においても、中国固有の文化の復興から始めて世界の最新の科学を受容し、国民精神を形成することを主張した。

以上から、本論文は、戴季陶は中国革命の対象を帝国主義列強や軍閥、さらには、国民の精神と能力に関心を向けつづけたが、それは、共和政治の失敗、社会主義への盲信、列強による抑圧を中国国家にもたらした責任が、他ならない共和政治の主体である国民にあるという判断に基づいていたことを明らかにし得た。したがって、戴季陶の政治路線における思想的な変化について考察する場合、中国の国家の独立・発展を実現させるためには国民精神を形成しなければならないという思想が一貫して存在した、と捉えることが妥当であると言えよう。

ただし、本論文では史料不足のため、戴季陶が清末に日本留学から帰国して新聞記者として政治について発言していった動機と、国民精神の形成を主張する中で仏教と三民主義との関係をどのように論じたのか、さらに、「民族国際」構想の顛末、礼論の時期的発展、中印学会については深く検討することができなかった。今後の課題として引き続き取り組んで明らかにさせていきたい。

【表１】『孫文主義之哲学的基礎』(上海の民智書局発行)の初版と第二版の違い

	７月版の頁行	初版(７月版)	第二版(８月版)	８月版の頁行
1	2 頁 3－6 行	但是孫先生的思想当中。有没有作他這種具体的実際的主義之最高概念呢。這一点是研究孫先生思想的人所最要注意的。要知道這一点。便要把孫先生的全部著作。作一個総研究。還要把孫先生的一生的言行。作一個総観察。然後才可以看得出来。	但是孫先生的思想当中、有没有作這具体的実際的主義之基礎的最高概念呢。這一点是研究先生思想的人所最要注意的。要知道這一点、便要把孫先生的全部著作、作一個総研究、還要把先生的一生言行、作一個総観察、然後才可以看得出来。	2 頁 3－6 行
2	3 頁 3－4 行	此書著作於民国五年。出版於民国七年。但是先生在距今二十年前。便有著此書的意思。	此書著作於民国五年、出版於民国七年。先生在距今二十年前、便有著此書的意思。	3 頁 3－4 行
3	4 頁 5－12 行	先生是有特殊的政治天才的人。所以四十年来所作的革命事業。和所発表的政治意見。在研究中外聖哲的思想上。他是分析得清清楚楚。能夠独看到他的最重要最正確的部分。在創造新学説新制度上。他是能夠認識得明明白白。独注意到国家和社会所最需要的問題。真所謂先知先覚。……因為他好学深思。所以才知人所不能知。因為能知人所不能知。所以才能行人所不能行。	先生是有特殊的政治天才的人、所以四十年来、所作的革命事業、和所発表的政治意見、非常偉大精深。在研究中外聖哲的思想上、分析得清清楚楚、能夠独看到最重要最正確的部分。在創造新学説新制度上、能夠認識得明明白白、独注意到国家和社会所最需要的問題。真是一個百世難逢的先知先覚。……因為他好学深思、才知人所不能知、因為能知人所不能知、才能行人所不能行。	4 頁 5－12 行
4	5 頁 12 行－6 頁 1 行	因為行並不是一件很難的事情。好像建築一個房子。……	因為『行』並不是一件很難的事情。好像建設一個房子、……	5 頁 12 行－6 頁 1 行
5	6 頁 5－6 行	(三)軍人精神教育。　這一部書。是先生民国十年在桂林集合各軍将校講演的紀録。	(三)軍人精神教育。　這一部書、是民国十年、先生在桂林集合各軍将校講演的紀録。	6 頁 5－6 行
6	8 頁 7	我們看到他在所作的方面。全	我們看到他在所作的方面、	8 頁 7

	－10行	部是従改革現代世界的経済組織。国家組織。国際関係上着眼。創造最新的理論和実際。就可以暁得先生的確是現代世界文化陶融而成的革命導師。是全世界被圧迫民衆的救主。	全部是従改革現代世界的経済組織、国家組織、国際関係上着眼、創造最新的理論和実際、方略、就可以暁得先生的確是現代世界文化陶融而成的革命導師、是全世界被圧迫民衆的救主。	－　10行
7	12　頁11行	這層意思。我聴見先生講過很多次。	這層意思、我聴看先生講過很多次。	12　頁11行
8	13頁7行－14頁5行	此次我在孫夫人処看見先生所親筆記出的民生問題目録当中。在食衣住行之外。還有両個題目。一個是養生。一個是送死。可惜我当初関於這両個問題。都没有聴見先生直接的解釈。先生曾経対夫人談過一点大意。以後想細細的研究一下。把先生関於這両個問題的意思。大概写了出来。先生一生的精神。全部是注在民生主義。我們就三民主義的関係上来説。民族主義是三民主義革命的第一歩工作。也可以説是実行民生主義的基礎。就是要達解決民生問題的目的。便要先排除障礙民生的悪勢力。要排斥障礙民生的悪勢力。第一便先要民族自身具備一種偉大的能力。把国家和民族的地位。扶植起来。脱離帝国主義的圧迫。造成完全自由独立的国家。民族主義的重要。完全是在這一点。	此次我在孫夫人処看見先生所親筆記出的民生問題目録当中、在食衣住行之外、還有両個題目、一個是養生、一個是送死。可惜我当初関於這両個問題、都没有聴見先生直接的解釈、先生曾経対夫人談過一点大意、以後想細細的研究一下、把先生関於這両個問題的意思、大概写了出来。我們看先生講民生問題、在許多地方、都非常注意到生育、養育、教育、的問題。要図一般人民、少有所教、老有所養、男女老幼、各得其所。所以我認定先生所要解決的民生問題当中、除了食・衣・住・行・之外、最重要的就是一個『育』的問題。有了食・衣・住・行・育・了、更要一切人民、都能得到優美高尚的享楽。近代的政治施設、這一個『楽』字、是最緊要的。先生在很多地方、論到這一点。所以把各種帰納起来、可以説食・衣・住・行・育・楽・六個生活需要均等普遍的満足、為先生民生主義的真義所在。先生一生的精	13頁7行　－15頁3行

			神、全部是注在民生主義、我們就三民主義的関係上来説、民族主義是三民主義革命的第一歩工作、也可以説是実行民生主義的基礎。要達解決民生問題的目的、便要先排除障礙民生的悪勢力。要排斥障礙民生的悪勢力、第一便先要民族自身具備一種偉大的能力、把国家和民族的地位、扶植起来、脱離帝国主義的圧迫、造成完全自由独立的国家。民族主義的重要、完全是在這一点。 所以就民生的真義説来、民族問題、実在是民生問題当中最大的一個部分。如果説普通的社会問題是横的民生問題、這民族問題、就可以算是縦的民生問題了。	
9	15 頁 1－3 行	二十多年来。先生每次講演革命的道理。必定是把民生主義。作為最重要的論点。一切問題的中心。	二十多年来、先生每次講演革命道理、必定是把民生主義、作為最重要的論点、一切問題的中心。	15 頁 11 －12 行
10	15 頁 6－11 行	可惜当時一般党人。完全不明白民生主義的重要。而且許多的人。簡直可以説是没有為民生而革命的良心。実際上負党務重責的宋鈍初。就是第一個不明白民生主義的人。……当時宋鈍初的政治活動。第一個工作。就是排去了革命同盟会的革命性。第二個工作。就是排除了三民主義的名実。	可惜当時一般党人、完全不明白民生主義的重要、而且許多的人、簡直可以説是没有為民生而革命的良心。並且因為智識浅薄的原故、把民族主義的真実意義、也不曾認識明白、把全世界民族問題的事実、也不曾看得清楚。所以満清政府一倒、便以為了結了民族革命的責任、這真是可惜可嘆極了。実際上負党務重責的宋純初、就是第一個不明白民生主義的人。……当時宋鈍初	16 頁 4 行 － 17 頁 3 行

			的政治活動、第一個工作、就是排去革命同盟会的革命性、把『革命同盟会』改作『同盟会、』忘記了革命的真義、是在実際的改造、這個影響、足使当時全国国民、政治的認識、都完全錯誤、直到現在、才漸漸的覚悟転来。第二個工作、就是排除了三民主義的名実。僅僅用採用民生政策一句不明不白的話、来騙一般青年同志、避免青年同志們的反対。	
11	16 頁 2－4 行	自此以後。我們可以看出来。革命党的分化。每次都是以関於民生主義的意見。為最要的区分。	自此以後、我們可以看出来、革命党的分化、每次都是以関於民生主義的意見、為最重要的区分。	17 頁 6－7 行
12	17 頁 4－6 行	三、民生主義与共産主義。在哲学基礎上。完全不同。共産主義。是很単純的以馬克斯的唯物史観為理論的基礎。而民生主義。是以中国固有之哲学倫理的和政治哲学的思想為基礎。	三、民生主義与共産主義、在哲学基礎上、完全不同。共産主義、是很単純的以馬克斯的唯物史観為理論的基礎、而民生主義、是以中国固有之哲学倫理的、和政治哲学的、思想為基礎。因之、在範囲上、也就有一個很大的差異点。就是共産主義所要解決的問題、是限於経済生活的問題、而民生主義、在育、与楽、的両個部分、已経超出経済的生活之外。——先生所已定而未講的両個重要問題、就是養生送死両個問題、在先生的思想体系上、実在是有重大意義的。	18 頁 8 行 － 19 頁 3 行
13	17 頁 7－11 行	四、民生主義与共産主義。在実行的方法上。完全不同。……所以主張革命専政。	四、民生主義与共産主義、在実行的方法上、完全不同。……所以主張革命専	19 頁 4－9 行

		以各階級的革命勢力。阻止階級勢力的拡大。而漸進的消滅階級。	政、以各階級的革命勢力、阻止階級勢力的拡大、以国家的権力、建設社会的共同経済組織。而漸進的消滅階級。	
14	17 頁 12 行－18 頁 7 行	更有一件事実。就是俄国的革命。並不能証明共産主義的成功。実足以証明三民主義的成功。這一点在孫先生的民生主義講演中。已経論得很明白。這是很的確的一個証明。今天中国国民党同志当中。我們很看得出有両種人。一種是要民生主義之名而反対民生主義之実的。這一種人。我們看他不単是思想上的落伍者。而且推演下去。很快会要変成被革命的東西。一種是要民生主義的実際。而不願意要民生主義之名的。這一種人。我覚得可以是先生所説中国人失却了民族自信力一種現象。	更有一件事実、就是俄国的革命、並不能証明共産主義的成功、実足以証明三民主義的成功。這一点在孫先生的民生主義講演中、已経論得很明白、這是很的確的一個証明。並且他們口口声声説是要階級専政、而其実在革命的政治勢力上、何嘗完全是無産階級的人来掌握政権、可不依然是革命専政、依然是為無産階級的革命。並且他們的国家基礎漸漸鞏固、而共産的色彩、也就漸漸稀薄。資本主義的実質、依然存在。不過是他們的政府、在政策上、把重要的産業管理、収帰国家之後、産業的競争、去了絶対自由性罷了。至於工銀制度和私有財産両個基礎、也一様没有能夠推翻。可知社会経済組織的改造、這是一個很実際的問題、不能独靠理論的敷衍、便可以成功的。今天中国国民党同志当中、我們很看得出有両種人、一種是要民生主義之名、而反対民生主義之実的。這一種人、我們看他不単是思想上的落伍者、而且推演下去、很快会要変成被革命的東西。一種是要民生主義的実際、而不願意要民生主義之名的。這一種人、我覚得正是先生所	19 頁 10 行－21 頁 3 行

			説中国人失却了民族自信力一種現象。至有在這両種偏見之外、很忠実地確信三民主義、而又能夠有革命的勇気和能力的人、実在不多。並且在很散漫的団体組織当中、更無従有清清楚楚明明白白的表現。	
15	18　頁10－12行	如果這一個民族的精神不能夠恢復。我怕将来即使全世界社会的革命成功之後。中国的民族。依然是世界文化上的失敗者。	如果這一個民族的精神。(ママ)不能夠恢復、我怕将来即使全世界社会。革命成功之後、中国的民族、依然是世界文化上的失敗者。	21頁6－7行
16	20頁3－4行	大多数従事於労動的人民。……	人多数従事於労動的人民、……	22　頁11　－12行
17	20頁8行	近代産業組織	近代生業組織	23頁4行
18	21頁7－8行	就目前的実業状況来説。比起二十五年。雖然有了不少的進歩。……	就目前的実業状況来説、比起二十五年前、雖然有了不少的進歩、……	24頁3－4行
19	22頁2－3行	由革命政府来解決土地問題和資本主義。実在依旧和二十五年相差很有限。	由革命政府来解決土地問題和資本主義、実在依旧和二十五年前、相差很有限。	24　頁10　－11行
20	22頁8－9行	一年以来。所以反革命運動如此之張皇的原故。大都是受帝国主義者的教唆和欺騙。	一年以来、所以反革命運動如此之張皇的原故、大都是受帝国主義者的教唆和欺騙、而一方面也是共産主義者超過実際需要、不合実際情形的過量宣伝的悪影響。	25頁4－6行
21	23頁3－10行	如果用事実做基礎。我們時時刻刻。都能夠充分的得到再証明的保障。可以少了許多錯誤。先生的民生主義的目的。我以為就是要在経済生活平等的基礎上。使人民的『食。衣。住。行。育。楽。』六個生活的要求。得到満足。而満足這六個生活要求的前提条	如果用事実做基礎、我們時時刻刻、都能夠充分的得到再証明的保障、可以少了許多錯誤。並且民生主義与共産主義不同的地方、還有一個重要点、是在対於社会問題的態度。共産主義的態度、是置重在批評和攻撃、而将建設的主張、放在第二	25　頁12　行－　27頁5行

		件。在心理上。是要改変人民的思想。在物質上。是要建設由国家計画。組織。管理。的重要生産機関。所以物質的建設。従目的上説。是要把全世界造成民生主義的新社会。就是完全民有民治民享的社会。而這一個偉大的工作。我們先要従自己的国家做起。	層、甚至絶不顧及。他們以為只要把資本主義攻倒、建設的方法、自然会生出来。而中山先生的民生主義、対於社会問題的態度、是置重在建設的主張和方法。所以一個只是説現社会如何不好、一個是在極力要如何建設。有許多人説、『民生主義不是一個主義、只是一種社会政策。』原因就是在此。其実在産業上、差不多是一張白紙的中国、我們今天的需要、実在並不在怎様去攻撃資本主義、批評資本主義、而是要有一個如何建設的方案、這是産業落後的中国所最緊要的。所以民生主義的目的、是要在経済生活平等的基礎上、使人民的『食・衣・住・行・育・楽・』六個生活的要求、得到満足(ママ)而満足而満足這六個生活要求的前提条件、在心理上、是要改変人民的思想。在物質上、是要建設由国家計画、組織、管理、的重要生産機関。物質的建設、従目的上説、是要把全世界造成民生主義的新社会、就是完全民有、民治、民享、的社会。這一個偉大的工作、我們先要従自己的国家做起。	
22	24 頁 3－7 行	一般人研究先生的民生主義。只従目的論上去尋理由。不暁得従方法論上去求実際。俄国的人。要到了条件不具備的理論行不通的時候。才会懂得回到基本工作的新経済政策	許多人研究社会問題、只従目的論上去尋理由、不暁得従方法論上去求実際。這是很錯誤的、便就共産来説、共産是要共有、不是要共無、是要共富、不是要共貧。	27 頁 10 行－28 頁 8 行

		去。先生却是最初的規画。便以具備民生条件。為実行民生主義的発足点。	像在今天的美国那様生産機関完備、能力偉大、組織、管理的技能、已経很進歩、只要把他現在的能力和材料、変作社会化、就能成一個新的共産組織、是可以主張行共産的。像我們中国今天這様、甚麼新的産業組織都没有、我們去共甚麼。照這様的産、共了起来、於国民経済、有甚麼好処。而且技能和材料、幼稚至於如此、缺乏到如此、拿甚麼做共産的条件。俄国的人、要到了条件不具備的理論行不通的時候、才会懂得回到基本工作的新経済政策去、先生却是最初的規画、便以具備主要的生産条件、為実行民生主義的発足点。	
23	25 頁 6 行	惟這当中有一個很重要的要点。就是孫先生自叙上説的。……	当日先生所擬定的発展実業計画中、有一個很重要的原則、就是自叙上説的、……	29 頁 6－7 行
24	25 頁 8 行－26 頁 2 行	先生所説『当熟読此書。従此触類旁通。挙一反三。以推求衆理。庶幾操縦在我。不致因噎廃食。方能泛応曲当。馳驟於今日世界経済之場。以化彼族競争之性。而達我大同之治。』我以為古人所謂『有伊尹之志則可。無伊尹之志則簒』両句話。剛剛可以作這個意思的註明。就実行之主権上説。固然非由我中国国家握権不可。而何人替国家代握此権行此事。則惟有真正以三民主義為信条的革命党。	先生所説、『当熟読此書、従此触類旁通、挙一反三、以推求衆理、庶幾操縦在我、不致因噎廃食。方能泛応曲当、馳驟於今日世界経済之場、以化彼族競争之性、而達我大同之治。』所以如果事勢変遷、国際的情形、不容完全行使当日所定的策略的時候、自然因該要因時制宜、変更方法的。即就当日先生所定的策略説、古人所謂『有伊尹之志則可、無伊尹之志則簒』両句話、正可以作這個意思的註明。従先生素常政治改造的主張研究	29 頁 9 行 － 30 頁 6 行

			起来、関於実行此計画的策略、就実行之主権上説、固然非由我中国国家握権不可、而何人替国家代握此権行此事、亦惟有真正以三民主義為信条的革命党。	
25	26 頁 4 行－27 頁 3 行	譬如俄国革命之後。与徳国訂屈伏和約。(一九一八年三月)這一件事実。是要有堅決的革命精神的列寧政府。才可以行之無害。……趨向若正。即使方法不十分好。漸漸還可以有改善的希望。這是在革命地位的国民応該切実了解的。	譬如俄国革命之後、与徳国訂屈伏和約、(一九一八年三月)這一件事実、是要有堅決的革命精神的列寧政府、才可以行之無害。……趨向若正、即使方法不十分好、漸漸還可以有改善的希望、這是在革命地位的国民応該切実了解的。更有一層、孫先生対於帝国主義的態度、自幾十年前、直到如今、従来没有変更。只有他適応的策略。却是応乎時勢的需要、而時有不同。研究先生実業計画的人、在這一点、要留心做普遍的観察、才可以不泥於昔時的策略、而忘却今日的適応。也不至泥於反抗帝国主義的原則、而遂不敢和他国訂経済的合作、行産業的交通。便是近年来俄国為了他本国実業、在必要的時候、仍旧要吸収外国的資本。因為生産機関和生産技能、這些都是不能無中生有、只不喪失産業的管理権這一個原則、是絶対緊要的。	30 頁 8 行 － 32 頁 2 行
26	28 頁 8 －11 行	因為先生是真実的革命家。是注重実行不馳騖空想的。所以是真正的博愛主義。大同主義。而同時是一個真正的愛国者。至於先生所以常常注意於	因為先生是真実的革命家、注重実行、不騖空想、所以是真正的博愛主義、大同主義、而同時是一個真正的愛国者。所以常常注意於全亜	33 頁 7 － 10 行

		全亜洲被圧迫民族聯合的原故。也是為此。	洲被圧迫民族聯合的原故、也是為此。	
27	29 頁 5－6 行	中国的民族	中国民族	34 頁 4 行
28	31 頁 5－12 行	先生反対西方文化的意義。従這一点分析開来。我們更看得出。一方面是反対資本主義和由資本主義発展開来的帝国主義与為資本主義基礎的個人主義。一方面対於欧洲純粋以物質問題為歴史中心以階級鬥争為絶対的手段之社会革命思想。也従人類生存的出発点去糾正他的錯誤。而付与社会革命以民生哲学的倫理性。完成『以化彼族競争之性。而達我大同之治』的目的。我所以認為先生在日本神戸高等女学校的這一篇講演。把東方文化的精神。極端的高調起来。是先生中心思想的表現。就是為此。	先生反対西方文化的意義、従這一点分析開来、我們更看得出、一方面是反対軍国主義資本主義、和由軍国主義資本主義発展開来的帝国主義、与為資本主義基礎的個人主義。一方面対於欧洲純粋以物質問題為歴史中心、以階級鬥争為絶対的手段之社会革命思想、也従人類生存的出発点、去糾正他的錯誤、而付与社会革命以民生哲学的倫理性、完成『以化彼族競争之性、而達我大同之治』的目的。先生認為中国的道徳、最発達最進歩的、尤其是『国家的道徳。』孔子所謂『継絶世、挙廃国、治乱持危、厚往而薄来、』孟子所謂『惟仁者惟能以小事大(ママ)、』都是世界国際政治理論当中的異彩。為西方的政治学者、経済学者、所万不及的。他們至多止是主張民族平等、国家平等、而絶不了解『以大事小』為平天下為真義。『継絶世、挙廃国、治乱持危、厚往而薄来、』為平天下的実際政策。先生認為這一種民族道徳、国家道徳、是中国民族的至宝。世界的和平、也必定要靠中国人恢復起固有的民族精神、具備偉大的実力以後、才可以真正実現。的確、在現在	36 頁 3 行 － 39 頁 3 行

			世界当中、没有一個民族、更比中国民族大、没有一種語言文字、更比中国語言文字使用的人多。如果中国人真是能夠振興起来、全東方的弱小民族、固然直接受中国的扶助不少、就是那非洲、美洲、的許多有色人種、在中国民族勢力的提攜誘掖之下、也可以得到自由平等的機会。所以中国民族的振興、和民族道徳、国家道徳的恢復、的確是全世界大同的基礎。只看小小一個日本、在東方強盛了起来、東方的民族運動、由之激起不少。可惜他抛棄了東方民族道徳、完全学了欧洲帝国主義。日本強起来之後、第一就滅了一個琉球、第二就滅了高麗、於是東民族(ママ)的団結、反為之阻礙。倘若日本強盛之後、能夠継承以大事小的東方民族道徳、国家道徳、把継絶、挙廃、治乱、持危(ママ)、的責任負起、這三十年当中的東方情況、固然完全不同、即全世界的関係、也一定大不相同的了。又如俄国革命之後、抛棄了帝国主義的国家目的、主張扶助弱小民族的独立和自由、於是土耳基的革命、便因俄国的扶助而成功。在満清統治下圧伏了三百年的蒙古民族、也新生出一種国民的覚悟。其他中亜一帯的民族運動、也和雨後春筍一様、成長起来。如果中国民族、能夠勃然興起、対於世	

			界的感化和助力、豈是日本維新俄国革命所能比得上的嗎。中国的国民、一定要有這様的覚悟、才是真正澈底的覚悟。也要能夠負起這個責任、才是世界第一偉大民族的責任。那些空想世界主義的、固然是不認識自己的民族、而一味跟着欧美已経凋落的帝国主義墮力、高唱国家主義的人、又是不認識世界。這両種都是和中山先生的三民主義背馳的。我所以認為先生在日本神戸高等女学校的這一篇講演、把東方文化的精神、極端的高調起来、是先生中心思想的表現、就是為此。	
29	33 頁 4－6 行	因為在中国這様的国家裏面。除了生活能夠自如的人而外。実不易得到革命的智識。	因為在中国這様的国家裏面、去了生活能夠自如的人而外、実不易得到革命的智識。	40 頁 7－9 行
30	35 頁 9－12 行	這一個制裁的紀律。是従仁愛的道徳律産生出来。並不是従階級的道徳律産生出来的。 就前面所述中山先生革命理論的系統分析。我們可以看出両要個点来。	這一個制裁的紀律、是従仁愛的道徳律産生出来、並不是従階級的道徳律産生出来、尤其不是従利益的道徳律産生出来的。 就前面所述中山先生革命理論的系統分析、我們可以看出両個要点来。	42 頁 12 行－43 頁 3 行
31	36 頁 10 行	中国国民創造力	中国国民創製力	44 頁 1 行
32	37 頁 4－5 行	被治者階級労動階級農民階級	被治者階級、工人階級、農民階級、	44 頁 7－8 行
33	37 頁 6－8 行	先生認為階級的差別。並不是絶対能夠消滅人類的仁愛性的。那些不来革命的人。只是不知。如果是能知。他的仁愛性依然是能夠発現。依然能夠	先生認為階級的差別、並不是絶対能夠消滅人類的仁愛性的。当初俄国革命党人当中、許多都是貴族。有名的苦魯巴金、還是一個極貴的	44 頁 9 行－45 頁 4 行

		為受痛苦的農夫工人努力。	公爵。在一千八百六十年代、因革命而被放逐於西比利亜的貴婦人三千多人。即此一端、已可以暁得、革命的衝動、並不単是要被圧迫的階級才有、愛人利他的仁心、更不是一定要同階級才能夠具備。那些不来革命的人、只是不知、如果是能知、他的仁愛性依然是能夠発現、依然能夠為受痛苦的農夫工人努力。	
34	39 頁 7－11 行	在一般反革命的頑固保守的人。他們固然不暁得文化的意義是甚麼。也不暁得孔子的思想的本体是甚麼。而在一般革命的青年。雖然従科学的智識裏面。了解了多少文化的意義。但是並不忠実地用科学方法来観察中国的文化。和中国固有思想的価値。	在一般反革命的、頑固保守的人、他們固然不暁得文化的意義是甚麼、也不暁得孔子思想的本体是甚麼、而在一般革命的青年、雖然従科学的智識裏面、了解了多少文化的意義、但是並不能忠実地用科学方法、来観察中国的文化、和中国固有思想的価値。	47 頁 3－7 行
35	41 頁 10－11 行	破壊中国社会道徳和国家徳道的個人主義的思想	破壊中国社会道徳和国家道徳的個人主義的思想	49 頁 6－7 行
36	42 頁 5 行	食衣住行楽五様享受	食・衣・住・行・育・楽・六様享受	50 頁 1 行
37	42 頁 7 行	食衣住行楽五様享受	食・衣・住・行・育・楽・六様享受	50 頁 3 行
38	42 頁 9－10 行	食衣住行楽五様的享受	食・衣・住・行・育・楽・六様的享受	50 頁 5－6 行
39	42 頁 10－11 行	所享受的食衣住行楽	所享受的食・衣・住・行・育・楽	50 頁 7 行
40	43 頁 6 行	謳美讃美	謳歌讃美	51 頁 2 行
41	43 頁 9 行	一切文化的成績	一切文化成績	51 頁 5 行
42	43 頁	所以後代的人。特別対於発明	所以後代的人、特別対於発	51 頁 6

	10－11行	文字的聖人。尤其尊崇到極端。視為一切文明的鼻祖。	明文字的聖人、尊崇到極端、視為一切文明的鼻祖。	－7行
43	44頁9－10行	至於在理論的方面	至於理論的方面	52頁5－6行
44	46　頁10－12行	社会組織雖然変了。而行道的人。依然是人類。人類求生的目的。依然不変的。所以所作只管不同。只管隨着時代的需要来変遷。	社会組織雖然変了、而行道的人、依然是人類、人類求生的目的、依然不変的。所作只管不同。只管隨着時代的需要来変遷。	54頁6－8行
45	48頁8－9行	以将欲取之必固与之将欲弱之必固強之的将欲廃之必固興之的陰賊険很的手段	以将欲取之、必固与之、将欲弱之、必固強之、将欲廃之、必固興之、的陰賊険很的権術	56頁3－4行
46	51　頁11行	這一思想	這一個思想	59頁6行

【表２】戴季陶の活動と戴季陶の訪日をめぐる周囲の動き(1926年9月-1927年6月)

年月日	記事
1926/9/30	戴季陶は中国国民党中央執行委員会に対し、国立中山大学校長を辞し、ソ連、欧米の教育事情を視察するために休暇をとることを申請[1]。
1926/11/7	蒋介石は中国国民党中央執行委員会代理主席張静江に対し、戴季陶が中山大学校長の身分のままでソ連の教育事情を視察することを提案[2]。
1926/11/11	中国国民党中央執行委員会政治会議第45次会議は、李煜瀛、戴季陶、易培基を日本に派遣することを決議[3]。
1926/11/16	中国国民党中央執行委員会政治会議第47次会議は、戴季陶を二期中政会委員に任命し、(1)李煜瀛、戴季陶、易培基が即日日本に出発すること、(2)戴季陶が申請するロシア、ヨーロッパの教育事情視察は訪日の任務が終わってから行うこと、を決議[4]。
1926/11/18	戴季陶は中国国民党中央執行委員会政治会議に対し、訪日の随行秘書二名を自ら選定すること、経費として一万元が支給され、不足分

[1]「上中央執行委員会請准解除中山大学校長一職並陳明大学行政組織委員制較校長制便利呈」1926年9月30日(『戴季陶先生文存続編』193頁)。
[2]前掲『蒋介石年譜初稿』782頁。
[3]前掲『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』79頁。
[4]郭廷以編『中華民国史事日誌』第2冊(台北:中央研究院近代史研究所,1984年4月)107頁。前掲『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』79頁。

	は追加支給されること、を申請。中国国民党中央執行委員会政治会議第 48 次会議は、戴季陶の申請通り行うことを決議[5]。
1926/11/19	蒋介石は陳果夫(中国国民党中央組織部長)に対し、戴季陶が日本に派遣されることに賛成することを伝える[6]。
1926/11/30	中国国民党中央執行委員会政治会議第 52 次会議は広州分会の設立(12 月 21 日正式成立[7])を決議し、戴季陶を二期中政会広州分会委員に任命[8]。
1926/12/末	広州発、香港へ。途中で海に身を投げようとしたが制止される。数日後広州へ[9]。
1927/1/10	頤養院(園?)(広州東壩二沙頭)で休養中、との記事[10]。
1927/1/13	広州発、海路上海へ[11]。
1927/1/20	大福丸に乗船、上海発武漢へ[12]。
1927/1/21(22?)	漢口着[13]。孫科宅に逗留[14]。
1926/1/24	徐謙が人に話したことによると、国民政府は日本と充分な諒解を図るため、戴季陶を国民政府非公式代表として日本に派遣することを決議した、との記事[15]。
1927/1/26	戴季陶は、間もなく李石曾とともに訪日し、非公式の駐日国民政府代表となる、との記事[16]。
1927/1/27	「国民政府は戴天仇を駐日代表として派遣するに決定す」との記事[17]。
1927/2/2	(旧暦正月初一)蒋介石の招きに応じ、江西省廬山で越年[18]。
1927/2/8	中国国民党中央執行委員会政治会議(南昌?)は、徐謙と戴季陶をアメ

[5]前掲『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』79-80 頁。
[6]前掲『蒋介石年譜初稿』799 頁。
[7]「政治会議広州分会成立」(『広州民国日報』1926 年 12 月 24 日付)。
[8]前掲『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』80 頁。「中央政治会議秘書処啓事」(『広州民国日報』1926 年 12 月 1 日付)。
[9]朱家驊「追念戴季陶先生」(『戴季陶先生文存三続編』276 頁)。
[10]「本館専電　香港十日下午十鐘」(上海『申報』1927 年 1 月 11 日付)。「戴季陶在頤養園休養」(『広州民国日報』1927 年 1 月 10 日付)。
[11]「本館要電　広州二十五日上午八鐘」(上海『申報』1927 年 1 月 26 日付)。「戴季陶已抵漢口」(『広州民国日報』1927 年 1 月 25 日付)。
[12]「戴季陶将奉命赴日」(『広州民国日報』1927 年 2 月 10 日付)。
[13]「国民政府委員戴季陶来鄂」(『漢口民国日報』1927 年 1 月 23 日付)。「戴季陶已抵漢口」(『広州民国日報』1927 年 1 月 25 日付)。「本館要電　広州二十五日上午八鐘」(上海『申報』1927 年 1 月 26 日付)には、1 月 22 日に着いたと見える。
[14]「国民政府委員戴季陶来鄂」(『漢口民国日報』1927 年 1 月 23 日付)。
[15]「各社要電　東方社二十四日漢口電」(上海『申報』1927 年 1 月 25 日付)。
[16]「各社要電　東方社二十六日広東電」(上海『申報』1927 年 1 月 28 日付)。
[17]上海『上海』第 718 号, 1927 年 2 月 14 日付。
[18]前掲『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』79 頁。
[19]前掲『中華民国史事日誌』第 2 冊, 142 頁。
『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』によると、中国国民党中央執行委員会政治会議(南昌)は戴季陶を「党部の名義」

	リカ、ソ連に派遣することを決議[19]。
1927/2/10	国民政府は中日民族の平等親善を図るために、戴季陶を日本に派遣する、との記事[20]。
1927/2/11	和服に改め、襄陽丸に乗船、漢口(?)発[21]。
1927/2/12	上海着[22]、虹口豊陽館に逗留[23]。
1927/2/13	居正が「戴天仇に致すの書」を発表した、との記事[24]。
1927/2/15	鈕有恒夫人、随行秘書陳以一(志羣)とともに郵船山城丸に乗船、上海発[25]。
1927/2/17	午前、門司に上陸。戴季陶は木村藤吉(45 歳)、鈕有恒は木下ふじ(40 歳)と名乗る。門司水上署長、三井物産社員、明治専門学校留学生、華僑などが出迎える。三井物産楼で少憩。三井物産主催の歓迎会。安泰楼で講演。門司駅で講演[26]。午後、門司駅発別府へ[27]。門司から宮崎震作が同行。別府温泉亀の井ホテルに逗留。
1927/2/18	夜、なの字館で素人義太夫を観賞[28]。

で日本に派遣すること、その「使命」を「中日両国国民の将来における親善の基礎を、民族平等、人道正義の上に築き、全中国国民が熱誠して貫徹しようとしている国民革命運動の真意を日本に伝え、日本国民の諒解を求める」こととすること、を決議したという(82 頁)。

[20]「本館要電　香港十日下午九鐘」(上海『申報』1927 年 2 月 11 日付)。

[21]「戴天仇前日赴日」(上海『申報』1927 年 2 月 17 日付)。

[22]「戴天仇来滬」(上海『申報』1927 年 2 月 14 日付)。

[23]「戴天仇前日赴日」(上海『申報』1927 年 2 月 17 日付)。

[24]現在のところ、原史料を見つけられていない。白川生(西本省三)「戴天仇の渡日」(上海『上海』1927 年 2 月 21 日付)には書簡の大要が見える。

> 其の内容は「日本が東亜の盟主を以て自任し、赤露を世界の乱源と視て居る際、足下は渡日して果して将に日本に利あらざらんとするか、さうなれば閉門羹で羞を貽すのも猶小である。将に日本を利せんとするか、一層支那の桎梏を増し、禍を貽すこと実に大である。日本は韓非子の説難に在る宋の富人で〈*、〉足下は其隣人の父に譬へらる。ボロヂンは衛君で、足下は弥子瑕に譬へらる〈*。〉軽ければ疑はれ、重ければ罪を獲。足下の処境は難且つ危い」と云ふに在る。

つまり、日本朝野を知で対処することは難しく、さらに、日本に諫言談論するに当たり自らの愛憎の主人(ここではボロディン)を察してから説かなくてはならない、と居正は戴季陶に諭した。居正の見込みでは、戴季陶の訪日はその成果を得ることが難しく、さらに戴季陶の境遇じたいをも危うくする、というものであった。

[25]『東亜之東』によると 2 月 14 日と見える。戴季陶演講, 陳以一紀述『東亜之東』(出版地不詳: 出版者不詳, 1927 年 6 月(?))50 頁。

[26]「国民党の使として乗込んだ戴天仇氏　日本朝野の同情と援助を求む」(『大阪朝日新聞』1927 年 2 月 18 日付)。

[27]「南方政府が南北を統一　時機は近い将来――戴天仇氏の講演」(『大阪朝日新聞附録九州朝日』1927 年 2 月 18 日付)。

[28]「素人義太夫を熱心にきく別府の戴天仇氏」(『大阪朝日新聞附録九州朝日』1927 年 2 月 20 日付)。

1927/2/19	終日囲碁に耽る[29]。呉鉄城と会談[30]。夜、亀の井ホテルで講演。
別府滞在中	丁文江と会談[31]。
1927/2/21	午後、大阪商船紅丸に乗船、別府発。呉鉄城などが見送る[32]。
1927/2/22	午前、神戸に上陸。港で楊寿彭(中国国民党神戸支部支部長)[33]、何世鍋(錩?)(中国国民党東京支部)[34]、胡炳奐(中国国民党大阪支部)、鮑翼君や李景瑞(嶼?)など神戸華僑(華強学校や中華学校の生徒も含む[35])、菊池良一、森ふく(東京杏花楼主)、沈乃熙(夏衍)(中国国民党東京支部青年会派)[36]などが出迎える。オリエンタルホテルに逗留。ホ

[29]同前「素人義太夫を熱心にきく別府の戴天仇氏」。

[30]「呉鉄城氏が戴天仇氏訪問」(『東京日日新聞』1927年2月20日付)。呉鉄城は神戸から別府へ向かった。「戴天仇氏を訪ねて呉鉄城氏別府へ　今後日本における運動方法打合わせ」(『大分新聞』1927年2月22日付)。神戸には呉鉄城の従兄弟である鄭祝三が貿易商を営んでいた。鄭祝三(広東幇貿易商同孚泰号の支配人)は、孫文の革命運動を支持し、神戸中華総商会会長、神阪(京)華僑聯衛会会長を務めた。陳來幸「鄭祝三」(可児弘明・斯波義信・游仲勲編『華僑・華人事典』(東京:弘文堂,2002年6月)532頁)。

[31]「別府で戴天仇と会見した上海市長」(『門司新報』1927年2月22日付)。

[32]「戴天仇氏一行別府を出発　南軍大勝の報に接して晴れやかな面持ち」(『大分新聞』1927年2月22日付)。

[33]残された史料によると、戴季陶と楊寿彭は1917年8月から9月頃には面識があったことが分かる。1917年8月から9月にかけて、戴季陶は楊寿彭に神戸華僑を動員して復辟反対の運動を展開することを依頼したり、上海の『民国日報』の運営に資金援助することを要請したりした。「致楊寿彭先生書」(『戴季陶先生文存続編』209-210頁)。「致楊寿彭先生書」(『戴季陶先生文存続編』210頁)。後者の原典は「居正、戴伝賢致楊寿彭函」(陳三井・居蜜主編『居正先生全集』中(台北:中央研究院近代史研究所,1999年6月)430頁)に掲載されている。なお、中国国民党の出版社である民智書局の運営に華僑から資金援助を得たことは、戴季陶から呉鉄城ら宛の書簡に見られる。「致呉鉄城諸先生書」1947年12月7日(『戴季陶先生文存』1129頁)。

楊寿彭は国民政府から「財務総長」として招聘されたが辞退したという。そして1927年2月末、楊寿彭は「今東京にゐる戴天仇氏から相談があるから一度来て呉との通知に接してゐる」ことから、神戸華僑の間では楊寿彭が再び国民政府から要員として招聘されているのではないかという憶測が飛んだ。「「要職を授けるから貴下の帰国を待つ」と支那革命軍政府から　国民党神戸支部長として功労多き楊寿彭氏に通牒があつたとの噂」、「相談があるから来いと戴天仇氏から上京を促しては来てゐるが本国からは何等の通牒にも接せぬと当の楊氏語る」(『神戸新聞』1927年3月1日付)。

[34]神戸三江公所会頭の何世錩(徳和号)の誤記ではないか。

[35]「戴天仇氏歓迎のいきさつ　在神支那人間に面白からぬ傾向がわく」(『大阪朝日新聞』神戸版1927年3月1日付)には、「支那南方政府の派日使戴天仇氏の来神した際……ひとり〈*神戸華僑〉同文学校の生徒のみは出迎へにゆかなかつたといふので国民党員は憤慨し」た、と見える。

[36]当時、中国国民党駐日総支部は、国内の中国国民党の内部対立の影響を受け、西山会議派を支持した「西巣鴨派」(事務所を西巣鴨に設けた)と、中国共産党の跨党党員と中国国民党の左派党員から構成された「青年会派」(事務所を中華留日基督教青年会(館)に設けた)に分裂していた。「西巣鴨派」と「青年会派」は通称である。呂芳上「中国国民党改組前後東京支部党務糾紛初探」(衞藤瀋吉編『共生から敵対へ――第4回日中関係史国際シンポジウム論文集』(東京:東方書店,2000年8月)536頁)。前掲『懶尋旧夢録』104頁。

なお、夏衍は、「武漢の国民党中央からもたらされた緊急指令を受け」た中国国民党駐日総支部・青年会派を代表して、「西山会議派の軍師」である戴季陶の「行動を監視」するために、戴季陶が神戸に着いてから東京を離れ箱根に行くまで(2月17日-3月10日頃)、戴季陶の随行秘書を務めた。夏衍が随行秘書を務める時、すでに「游」という姓の随行秘書がいた(陳以一の名前は出てこない)。なお、この回想は、夏衍が1967年初め、「文化大革命」の「専門処理班」の強要に応じてなされたものに基づいているため、「游」は記憶ちがいであると考える。前掲『懶尋旧夢録』103-113頁。また、戴季陶には3月23日、24日の時点で「通訳格の陶氏外一名の随員」がいた、とする史料がある。「戴天仇氏けふ午前着神」(『神戸又新日報』1927年3月25日付)。

	テルで周珏(中華民国駐神戸総領事)、李鉄五(中華民国駐神戸総領事館副領事)が出迎える[37]。午後、駐神戸総領事主催の歓迎会[38]。夜、神阪中華会館で講演と歓迎茶話会。中国国民党神戸支部主催の歓迎会[39]。
1927/2/23	山本条太郎(政友会特派)と会談[40]。午後、神戸基督教青年会館で講演[41]。
1927/2/24	午前、山本条太郎と会談[42]。正午、ロータリークラブの午餐会[43]。夜、神戸日華実業協会の春季総会。三ノ宮駅発東京へ。周珏、神戸華僑などが見送る[44]。京都駅で中国人留学生、奥村甚之助(労働評議会)が歓迎[45]。
1927/2/25	午前、東京駅着。中国人留学生、茅原華山、茅原元一郎、茅原退二郎、小村俊三郎、清沢洌などが出迎える[46]。帝国ホテルに逗留[47]。茅

[37]「戴天仇氏来神　全支那に漲る国民運動　上海はやがて国軍の手に帰せん」(『神戸新聞』1927年2月23日付)。同記事によると、戴季陶は記者に「中国国民党中央執行委員　中華民国国民政府委員　政治会議委員　広東孫逸仙大学総長　中国国民党特派赴日専使　戴伝賢」の名刺を出したという。「翻へる青天白日旗に大得意の戴氏夫妻　『日本の方よ冷静なれ』と戴氏語る」(『大阪朝日新聞』1927年2月23日付)。振青「日本特約通信「戴天仇抵神戸紀」」1927年2月23日(上海『時報』1927年3月6日付)。

[38]「国民党熱と支那領事館」(『神戸又新日報』1927年2月23日付)。

> 昨今在留支那人間に燃え立つてゐる国民党熱につき〈*、〉二十二日神戸支那領事館の意見を敲いて見ると〈*、〉曰く〈*、〉当地には広東人が多いから国民党の味方も多いのでせうが〈*、〉併し皆までノーではありますまい〈*。〉而して領事館との間柄は極めて□□〈*円満?〉で証明其他の手続きは引続き当館でやつてをります〈*。〉又アノ青天白日総〈*満〉地紅旗も中華民国創立の最初からあつた革命旗ですから〈*、〉神戸の国民〈*党〉主義者が之を掲げたからとて別段怪しくはない〈*。〉又領事館員も官吏としては格別、個人としては国民党間に沢山の友人を有つてゐるから親交は当然です〈*。〉現に本日周領事が戴天仇氏を招宴するのは領事の資格ではなく一個人として招くのです〈*。〉尤も支那領事館は必ずしも北京政府のものではなく中華民国総体の官署〈*、〉と私共は信じて居る〈*。〉ダから私共外交官の態度は不偏不党です〈*。〉只本国の統一が国民相互の瞭解によりて一日も旨く成立せんことを熱望して居るに過ぎない〈*。〉

[39]「戴天仇氏演説」(『大阪毎日新聞』1927年2月23日付)。

[40]「支那時局に関する報告覚書」(『山本条太郎　論策二』(東京:山本条太郎翁伝記編纂会,1939年8月)505頁)。

なお、23日午後には神阪中華会館で講演する予定であった。実際に行われたのか否か、現在のところ史料が見つからないために不明である。「戴氏滞神日程」(『神戸新聞』1927年2月22日付)。

[41]振青「日本特約通信「戴天仇抵神戸紀」」1927年2月23日(上海『時報』1927年3月6日付)。

[42]前掲「支那時局に関する報告覚書」505頁。『山本条太郎　伝記』(東京:山本条太郎翁伝記編纂会,1942年3月)500頁。

[43]「戴天仇氏東上」(『大阪朝日新聞』1927年2月25日付)。

[44]「人事　戴天仇氏東上」(『神戸新聞』1927年2月25日付)。

[45]「支那留学生に警官が暴行を加ふ　「日本への期待を裏切られた」と目撃の戴天仇氏憤る」、「戴氏の身辺を心配しての事　学生はすぐ放還した――京都七条署員の話」(『大阪毎日新聞』1927年2月26日付)。中国国民党京都支部「声明書――民国留学生に対する京都警察の暴行に関し」1927年3月17日(東京『政治批判』第3号,1927年4月12日付)129-130頁。

[46]戴季陶は東京駅で次のような「歓迎」を受けた。「一人の男が直径二尺価格十五円位の弔用の花輪を一行に手渡した侭姿を晦ました、花輪には日支両文で『東露の走狗戴天仇速かに去れ』と認めてあつた」。「戴天仇氏に弔ひ花輪――添書曰く速かに去れ」(『神戸又新日報』1927年2月27日付)。

[47]「同志に迎へられ戴天仇氏入京」(東京『国民新聞』1927年2月26日付)。「青天白日旗に迎へられ戴天仇氏入京す」(『東京日日新聞』1927年2月26日付)。この時、帝国ホテルには佐分利貞男の部屋があった。「雑報　職員現住所及留守宅異動」(東京『外務省報』第125号,1927年2月15日)9頁。

	原華山、上野田節男(アドヴアタイザー社)、バイヤス(アドヴアタイザー社、ロンドンタイムス東京通信員)と会談。汪栄宝とともに、外務省に佐分利貞男(条約局長)、木村鋭市(亜細亜局長)、小村欣一(情報部次長)を訪問[48]。頭山満と会談[49]。
1927/2/26	吉野作造と会談[50]。午後 3 時半～6 時、菊池良一とともに外務省に出淵勝次(外務次官)、木村鋭市を訪問[51]。
1927/2/27	逗留先を帝国ホテルから旭館に移す[52]。午後、東京記者聯盟創立総会で講演。
1927/3/1	午後 6 時～9 時、衆議院議員各派有志主催の招待懇談会。
1927/3/6	夜、国際倶楽部主催の歓迎会。
1927/3/7	午後 6 時～10 時半、中央亭の支那談話会。
1927/3/8	貴族院議員有志主催の招待会[53]。
1927/3/9	茅原華山と会談[54]。
1927/3/10	午後 1 時、熱海着。熱海ホテルに逗留[55]。改造社の原稿を執筆[56]。

---

[48]「戴天仇氏の諒解運動」(『神戸新聞』1927 年 2 月 27 日付)。戴季陶は「駐日自国公使〈*汪栄宝〉と共に外務省を訪問し」たという。「中国々民政府代表戴天仇の来往」(内務省警保局『特秘外事警察報』第 57 号, 1927 年 3 月)163 頁。

[49]「戴天仇氏うごく」(東京『読売新聞』1927 年 2 月 27 日付)。

[50]『吉野作造選集』第 15 巻(東京:岩波書店, 1996 年 10 月)18-19 頁。

少雨、昼過ぎ戴天仇君を帝国ホテルに訪ふ〈*。〉無事来朝を祝す〈*。戴季陶は〉国民党を代表して来たと云ふ

1914 年に第二革命が失敗して孫文などの亡命者とその子弟が来日すると、寺尾亨は政法学校を設立、政治経済科と法律専修科を設け、吉野作造、小野塚喜平次、浮田和民、美濃部達吉、立作太郎、筧克彦、福田徳三、建部遯吾などが講義を担当して政治学、経済学、法律学、社会学などの理論を講じた。政法学校は孫文、張継、王正廷、頭山満、水野梅暁などが後援し、董事に湯化龍、章宗祥、犬養毅、林権助、伊集院彦吉などが、参事に戴季陶、殷汝耕などが名を連ねていた。授業は通訳を通して行われ、資金は中国国民党員と日本の実業家の寄付によったといわれる。松本亀次郎「中華留学生教育小史」(松本亀次郎『中華五十日遊記』(東京:東亜書房, 1931 年)35-36 頁)。政法学校への吉野作造の関与については、狭間直樹「吉野作造と中国」(『吉野作造選集』第 7 巻, 1995 年 8 月, 解説 404-406 頁)。

[51]「戴天仇氏外務省を訪問」(『東京朝日新聞』1927 年 2 月 27 日付)。「戴天仇氏うごく」(東京『読売新聞』1927 年 2 月 27 日付)。前掲「中国々民政府代表戴天仇の来往」163 頁。

[52]前掲『東亜之東』50 頁。旭館には菊池良一と宮崎震作が同宿し、「警視庁ヨリ派遣セル中島巡査部長外一名平服ニテ戴氏ヲ護衛シ戴氏外出ノ際ハ内一名自動車ニ同乗」した。「戴天仇氏ノ動静」(外務省記録『各国名士ノ本邦訪問関係雑件　中華民国人ノ部』第 1 巻(東京:外務省外交史料館 L. 3. 3. 0. 8-1))。また、少なくとも戴季陶が帝国ホテルに滞在した期間は、警視庁特高課と外事課が日比谷署と協力して、戴季陶の身辺を警戒していたという。「戴氏の身辺を厳重に警戒　反対派の留学生や暴力団が覗ふので」(東京『読売新聞』1927 年 2 月 26 日付)。なお現在のところ、戴季陶の動静を記録した警視庁の文書を見つけられていない。

[53]「訳電:日議員与戴天仇会談」(上海『時報』1927 年 3 月 10 日付)。

[54]華山生「戴天仇来」(東京『内観』第 85 号, 1927 年 4 月 1 日付)17 頁。茅原華山は戴季陶と旧知の間柄であり、茅原華山が主宰する内観社は 1927 年 4 月 1 日付で戴季陶を顧問に迎えた。「社告」(『内観』第 85 号)11 頁。

[55]「戴天仇氏熱海へ」(東京『国民新聞』1927 年 3 月 11 日付)。前掲『東亜之東』50 頁。

[56]「戴季陶氏附記」(東京『改造』第 9 巻第 4 号, 1927 年 4 月)27-28 頁。

1927/3/11[57]	
1927/3/12	熱海で支那時報記者(水野梅暁?)と会談。
1927/3/13	熱海ホテルに逗留。 熱海滞在中に、古島一雄(元衆議院議員・革新倶楽部)[58]、犬養毅[59]などと会談。
1927/3/17	東京着。旭館に逗留[60]。正午～午後 3 時、銀行倶楽部で歓迎会[61]。午後 3 時、東京帝国大学学友会弁論部主催の講演会。午後 6 時～9 時、中央亭で歓迎会。
1927/3/18	午後、児玉呑象(久原房之助の使者)と会談[62]。
1927/3/19	戴季陶は、国民政府援助のために久原房之助から 250 万円、紡績業者から 200 万円以上を受け取るはずである、との読売新聞の記事[63]。戴季陶はこれを否定、読売新聞社に抗議[64]。陶陶亭で講演。
1927/3/20	読売新聞社、取り消し記事を掲載[65]。

[57]一部の史料によると、戴季陶は3月11日午後、外務大臣・幣原喜重郎を官邸に訪ねたとある。
その内容は要するに
一、国民政府の政治的目的に関し日本側の詳解を求め
二、国民政府はあくまでも在留日本人の生命財産に対し不当なる危害、もしくは圧迫を加へることなきを言明し
三、張作霖氏その他に対し偏は(ママ)的援助の態度に出ることなきを希望した
右に対し幣原外相は
日本政府として既定方針通り厳正中立の態度を固持し、一党一派を援助するが如きことなきを表明した、しかして具体的要件に触れないで会見を了したと
「戴天仇氏遂に外相と会見　詳解を求めて会談時余に及ぶ」(東京『報知新聞』1927 年3 月 13 日付)。
戴天仇氏は……国民政府の革命運動に関し詳細に説明し日本政府の諒解を求め〳〵次いで従来通り一党一派に偏せず〳〵将来に於ても張作霖氏に援助を与へる事のなきやうに希望する所があつた、之に対し幣原外相は帝国政府の厳正中立公平な態度は将来に於ても変更する事なき旨を答へ〳〵具体的事項は何等話題に上らなかつたとの事である
「戴天仇氏外相と会見」(『福岡日日新聞』1927 年3 月 13 日付)。
しかし、戴季陶は3月10日と12日は熱海に滞在していること、他紙が報道していないこと、このことを裏付けるほかの史料がないこと、以上からこれを史実とすることは保留したい。
[58]古島一雄「先づ支那を理解せよ」(東京『事業之日本』第6 巻第4 号, 1927 年4 月)11 頁。
[59]犬養道子『花々と星々と』増補版(東京:中央公論社, 1974 年6 月)100-106 頁。
[60]前掲『東亜之東』51 頁。
[61]「日華実業協会記事」(東京『支那時報』第6 巻第4 号, 1927 年4 月)107 頁。渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』別巻第二　日記(二)他(東京:渋沢青淵記念財団竜門社, 1966 年11 月)698 頁。
[62]「革命政府援助に、久原氏二百五十万円を投げ出す　けふ戴氏と自邸で会見して　上海のストライキ防止の為　紡績業者達もやはり二百万円を」(東京『読売新聞』1927 年3 月 19 日付)。
[63]前掲「革命政府援助に、久原氏二百五十万円を投げ出す　けふ戴氏と自邸で会見して　上海のストライキ防止の為紡績業者達もやはり二百万円を」。
[64]「無根の風説に戴天仇氏の迷惑」(『東京朝日新聞』1927 年3 月 20 日付)。
この風説が公にされるや国民党に属する在京支那留学生は極度に憤慨して戴天仇氏の許に事実の真否を確むるべく詰めかけ、また同氏夫人はその説が本国に伝はつた暁には国民は憤怒の極、本国においてきた愛児をなぶり殺しにするに相違ないとて泣き悲しむので〳〵同氏は非常に驚き頭山満翁のもとに駆けつけて善後策を相談した、
[65]「戴天仇氏の迷惑」(東京『読売新聞』1927 年3 月 20 日付)。

1927/3/21	正午～午後 3 時過、渋沢栄一主催の招待午餐会。旧政法学校関係者主催の歓迎会[66]。
1927/3/22	若槻礼次郎(内閣総理大臣)、財部彪(海軍大臣)を内閣総理大臣官邸に訪問[67]。
1927/3/23	夜、東京駅発神戸へ[68]。
1927/3/24	午前、三ノ宮駅着。楊寿彭など神戸華僑(華強学校や中華学校の生徒も含む)、久留弘三(郵司同友会争議本部)、川島民(同前)、劉同嘉(同前)などが出迎える。鮑翼君宅に逗留[69]。夜、中国国民党神戸支部執行委員会。
1927/3/26[70]	午前 11 時前、宮崎震作とともに大阪駅着。大阪華僑などが出迎える。午前 11 時、大阪朝日新聞社[71]。午前 11 時半～午後 12 時半、大阪毎日新聞社[72]。中国国民党大阪支部で少憩。午後 12 時半～午後 2 時半、大阪クラブ主催の歓迎午餐会。中国国民党大阪支部で少憩[73]。大阪中華総商会主催の歓迎会。夜、大阪発神戸へ[74]。
1927/3/27	中国国民党神戸支部で講演。
1927/3/28	午後、宮崎震作とともに神戸新聞社を訪問[75]。
1927/3/29	午前 11 時、郵船上海丸に乗船、神戸発。楊寿彭、鮑翼君など神戸華僑が見送る。宮崎震作は上海まで同行し、4 月下旬高麗丸で長崎に帰る[76]。
1927/3/30	長崎に寄港、上陸。長崎華僑が出迎える。通天閣で講演。長崎中華総商会主催の茶会[77]。
1927/3/31	午後、上海着。
1927/4/2	中国国民党、国民政府、中山大学に対して声明を発表。日本朝野に対して声明を発表。
1927/5/11(13?)	南京に入る[78]。

[66]前掲『吉野作造選集』第 15 巻, 22 頁。
[67]前掲『東亜之東』51 頁。現在のところ、このことを裏付ける史料は見つかっていない。
[68]前掲『東亜之東』51 頁。
[69]前掲『東亜之東』51 頁。
[70]戴季陶は 3 月 25 日、「健康上の都合により大阪における一切の歓迎を辞退した」。よって、大阪朝日新聞社主催の懇談会、紡績聯合会の招待、公開演説などが中止された。「戴天仇氏歓迎午餐会」(『大阪朝日新聞』1927 年 3 月 26 日付)。
[71]「大阪の戴氏」(『大阪朝日新聞』1927 年 3 月 27 日付)。
[72]「戴天仇氏来社」(『大阪毎日新聞』1927 年 3 月 27 日付)。
[73]「親善の根本義は国民的の諒解　きのふ大阪クラブの招待で戴天仇氏演説」(『神戸新聞』1927 年 3 月 27 日付)。
[74]前掲「親善の根本義は国民的の諒解　きのふ大阪クラブの招待で戴天仇氏演説」。前掲『東亜之東』51 頁。
[75]「戴天仇氏本社来訪」(『神戸新聞』1927 年 3 月 29 日付)。
[76]「戴季陶過崎情形及最新行蹤」(上海『時事新報』1927 年 4 月 25 日付)。
[77]前掲「戴季陶過崎情形及最新行蹤」。
[78]5 月 11 日晩とするのが、「戴季陶昨抵寧(本報十二日南京電)」(上海『民国日報』1927 年 5 月 13 日付)。5 月 13 日とするのが、前掲『東亜之東』51 頁。

1927/5/24	宮崎龍介(社会民衆党常務委員)は、菊池良一、宮崎震作とともに蒋介石を訪問[79]。胡漢民、林赤民、戴季陶、陳以一などが同席。
1927/6(?)	『東亜之東』出版。

※麻生久(日本労農党)、赤松克麿(社会民衆党)も戴季陶と会談したか、戴季陶の講演を聴いたと考えられる[80]。

【表３】戴季陶の訪日前後の講演・会談・談話・著作

附:氏名の日本語表記や肩書きの不詳な箇所は●で示した

年月日	場所	誰に対して	内容
1926/12/3	国立中山大学(広州)	中山大学を参観した日本教育団	日本国民は三民主義を理解してほしい[81]。
1926/12/19	国立中山大学	(広東台湾学生聯合会成立大会)	孫文と台湾独立運動の関係について[82]。
1927/1/24(?)	漢口	日本の新聞記者(池田、田中)	日本は東方諸民族の自決を尊重せよ。その後に中日両国国民は自由な経済関係を結ぶことができる。中国は、東方を圧迫する帝国主義を排除するためにいっそうソ連国民と連合し一致して東方の平和と文化を図らなくてはいけない。日本が東方に復帰するならば、孫文が日本国民に勧告した通り、ソ連と親善を図らなくてはいけない[83]。

[79]前掲『東亜之東』1頁。1927年3月31日、社会民衆党中央執行委員会は、宮崎龍介と松岡駒吉に対して国民革命の実情を調査し、社会民衆党と中国国民党(蒋介石)との提携に努力すべきことを決議し、中国国民党に対する声明――中国国民党の「指導」する国民革命に対し「同情と理解」を示し、中国国民党と「提携して全東洋の無産大衆解放の為に貢献」する旨――を発表した。「飽く迄三民主義で突進せよ　社会民衆党が国民党へメツセージを送る」(『東京日日新聞』1927年4月1日付)。松岡駒吉「東洋労働者提携の第一歩」(日本労働総同盟『労働』通巻193号,1927年7月)4-5頁。

[80]麻生久「眠りからさめた支那」(東京『経済往来』一週年記念倍大号,1927年)32頁。赤松克麿「戴天仇の印象其他」(前掲『経済往来』一週年記念倍大号)33頁。

[81]「戴季陶対日本参観団之重要演説」(『広州民国日報』1926年12月6日付-7日付)。

[82]戴季陶「孫中山与台湾」(『広州民国日報』副刊「現代青年」第40期-第41期,1927年2月23日付、25日付)。

[83]「戴季陶与日本記者之談話　▲説明中俄関係＝及紀念列寧原因」(『漢口民国日報』1927年1月25日付)。「戴季陶与日記者重要談話」(『広州民国日報』1927年2月9日付)。

1927/2/17 以前		萱野長知	国民革命の意義。国民政府の対日方針、外交一般、対英方針[84]。
1927/2/17	郵船山城丸	新聞記者	中国国民党から派遣。来日の使命。国民政府の対日方針、内政、外交一般、奉天派に対する態度、対英方針[85]。
1927/2/17	門司倶楽部	(三井物産主催の歓迎会)	不詳。
1927/2/17	安泰楼(門司)	明治専門学校留学生、華僑約30名	国内政治の現状について。「近い将来において南方政府はその圧倒的勢力を以て南北統一を実現し得る自信がある」[86]。
1927/2/17	門司駅	華僑	不詳。
1927/2/17		日本国民	中国国民党から派遣。来日の使命[87]。
1927/2/17	亀の井ホテル(別府)	新聞記者	来日の使命。国民政府の対英方針[88]。
1927/2/19	亀の井ホテル	(大分県キリスト教青年会主催の講演会)	「中国国民党革命の意義について」国民革命の意義。国民革命と日本の関係[89]。
1927/2/19	亀の井ホテル	新聞記者	「本国の風雲急を告げてゐるため一日も早く帰国の必要がある」。「私が広東政府の駐日公使としてこの侭東京に留まると噂する向もあ

[84]「戴季陶致日本萱野長知書」(『広州民国日報』1927年2月23日付)。参考文献:「国民党の使として乗込んだ戴天仇氏　日本朝野の同情と援助を求む」(『大阪朝日新聞』1927年2月18日付)。

[85]「支那の現状を伝へん為め戴天仇氏の来朝　極力不平等条約撤廃を説く」(『門司新報』1927年2月18日付)。「我々の立場を日本に理解して貰ひ度い　三民主義共産主義異同の弁」(『福岡日日新聞』1927年2月18日付)。「革命歌に迎へられ戴天仇夫妻来たる」(『大分新聞』1927年2月18日付)。「重大使命を帯び戴天仇氏来朝す」(『神戸新聞』1927年2月18日付)。「国民党の使として乗込んだ戴天仇氏　日本朝野の同情と援助を求む」(『大阪朝日新聞』1927年2月18日付)。「国民政府代表戴天仇氏来る　支那国民党と赤露を同視すな　日本実業家は不平等条約撤廃で考違ひしてると語る」(『大阪毎日新聞』1927年2月18日付)。「支那の運動は民族運動　赤化運動ではないと戴氏談」(『東京朝日新聞』1927年2月18日付)。「主義遂行のために貴国の人々に訴へる　東洋民族を不利に陥れるな」(東京『報知新聞』1927年2月18日付)。

[86]「南方政府が南北を統一　時機は近い将来　戴天仇氏の講演」(『大阪朝日新聞附録九州朝日』1927年2月18日付)。

[87]「わが『朝日』を通じて　戴氏の声明書」(『大阪朝日新聞』1927年2月18日付)。

[88]「別府に落ちついて打寛いだ戴天仇氏」(『大分新聞』1927年2月19日付)。「別府に着いた戴天仇氏」(『九州日報』1927年2月19日付)。「支那国民は日本に好感を持つ　戴天仇氏談」(『佐賀新聞』1927年2月21日付)。

[89]「十九日夜別府亀の井ホテルで戴天仇氏の大演説」(『大分新聞』1927年2月21日付-23日付)。

			るが……私は他に大きな仕事があるからそんなものにはならない」[90]。
1927/2/22	オリエンタルホテル（神戸）	藤原米造、新聞記者[91]	中国国民党から派遣。来日の使命。国民政府の対日方針、内政、外交一般、奉天派に対する態度、対英方針[92]。
1927/2/22	駐神戸総領事館	（駐神戸総領事周珏主催の歓迎会）	不詳。
1927/2/22	神阪中華会館（神戸）	（華僑主催の歓迎会）「南方中国人のみ」約700名[93]	国民政府の建国方針。不平等条約撤廃について[94]。
1927/2/22	神阪中華会館	（歓迎茶話会）	不詳。
1927/2/22	中国国民党神戸支部	（中国国民党神戸支部主催の歓迎会）	不詳。
1927/2/23	神戸	山本条太郎	不詳。
1927/2/23	神戸基督教青年会	主に神戸市民	不詳。

[90]「廿一日夜別府発戴天仇氏上京　「公使にはならぬ」と語る」（『神戸新聞』1927年2月21日付）。
[91]「英文日本時報神戸支局長広瀬」（The Japan Chronicleのことか）、「大阪夕刊新聞記者柴信一」（不詳）、「大亜細亜雑誌主幹佐藤胆齋」（不詳）の名が見える。振青「日本特約通信「戴天仇抵神戸紀」」1927年2月23日（上海『時報』1927年3月6日付）。
[92]「戴天仇氏来神　全支那に漲る国民運動　上海はやがて国軍の手に帰せん」（『神戸新聞』1927年2月23日付）。「南方国民党の大立者戴天仇氏今朝紅丸で来神す」（『神戸又新日報』1927年2月23日付）。「翻へる青天白日旗に大得意の戴氏夫妻　『日本の方よ冷静なれ』と戴氏語る」（『大阪朝日新聞』1927年2月23日付）。
[93]「戴天仇氏演説」（『大阪毎日新聞』1927年2月23日付）。
[94]振青「日本特約通信「戴天仇抵神戸紀」」1927年2月23日（上海『時報』1927年3月6日付）。

	館（下山手通）		
1927/2/24	神戸	山本条太郎	不詳。
1927/2/24	オリエンタルホテル	ロータリークラブの午餐会	不詳。
1927/2/24	杏香楼（神戸・海岸通）	（神戸日華実業協会春季総会）山縣治郎（兵庫県知事）、周珏、李鉄五、鄭祝三（神戸中華総商会長）、楊寿彭、樫木幹雄、本多一太郎、西川荘三、鶴谷忠五郎、成田惟忠など	来日の使命。国民革命と日本の関係[95]。
1927/2/25	上り列車車中	新聞記者	中国国民党から派遣。来日の使命。国民政府の対日方針（満蒙問題を含む）、内政、外交一般、奉天派に対する態度、対ソ方針[96]。
1927/2/25	帝国ホテル（東京）	茅原華山、上野田節男、バイヤス	不詳[97]。

[95]「戴天仇氏を迎へて日華実業協会総会」（『神戸新聞』1927年2月25日付）。「日支両国を精神的に結びたい」（『神戸又新日報』1927年2月25日付）。「戴天仇氏神戸の歓迎会上で演説」（『大阪毎日新聞』1927年2月25日付）。

[96]「同志に迎へられ戴天仇氏入京」（東京『国民新聞』1927年2月26日付）。「青天白日旗に迎へられ戴天仇氏入京す」（『東京日日新聞』1927年2月26日付）。参考文献:「来訪の使命は単純　日支親善の促進に」（『東京朝日新聞』1927年2月26日付）。「国民党の特使戴天仇氏入京す」（東京『報知新聞』1927年2月26日付）。「張作霖氏とは到底融和し能はず　日支国交上重大なる禍機　戴天仇氏の着京」（『神戸新聞』1927年2月26日付）。「吾等の革命運動に対し至純の諒解を求む　満蒙問題に就ては其の合理的解決を日本人自ら考慮せよと　着京の日戴天仇語る」（『福岡日日新聞』1927年2月26日付）。「青天白日旗に迎へられて戴天仇氏の都入り」（『門司新報』1927年2月26日付）。

[97]「戴君の談話は、当時新聞に出たのと大差はない」。華山生「戴天仇来」（東京『内観』第85号, 1927年4月1日付）17-18頁。

1927/2/25	外務省	佐分利貞男、木村鋭市、小村欣一、汪栄宝	不詳。
1927/2/25		頭山満	不詳。
1927/2/26	帝国ホテル	吉野作造	不詳。
1927/2/26	外務省	出淵勝次、木村鋭市	国民政府の政策。国民革命軍の北伐の情勢。国民革命の意義。国民政府と日本の関係[98]。
1927/2/26	東京	新聞記者	「来朝の目的は日本朝野に対する一般的諒解を求むるにあるから〈*、〉当局に対しても何等具体的問題をも提出せず〈*。〉又具体的なものをもつて帰国しようとは思つてゐないが〈*、〉大体外務当局の意見は略国民政府の意見と一致するものであると感じられた」[99]。
1927/2/27	読売新聞社講堂（東	（東京記者聯盟創立総会）	「中国革命の真相」国民革命の意義。国民革命と日本・世界の関係[100]。

[98]「戴天仇氏外務省を訪問」（『東京朝日新聞』1927年2月27日付）。
　また、『無産者新聞』は『報知新聞』を引用し、戴季陶の意見と外務省の意見を、それぞれ以下のように整理している。
　戴天仇氏は……
　一、国民政府の目的と革命運動は、支那民衆の共鳴するところであるから、早晩必ず成功すべきものである
　二、国民運動は対支帝国主義の打破、不平等条約の撤廃を目的とし、孫文氏の三民主義に立脚するものであるが、支那の共産主義化を企図するものではない
　三、国民政府はその運動を進めるに当り、在留外人の生命財産に不当の危害を加えるが如きことは絶対に避け、合理的手段によつて対外要求を貫徹するものである。
　と述べ更に
　一、民衆の輿論よりも、むしろ武力を基礎とするペキン政府は、支那の代表的政府ではないから、今後国民政府を以て外交の相手とするが至当である
　二、聯合軍対国民軍の対立に関し絶対中立を維持せられたし
　との要求を提示し、之に対し、我が外務省は、従来の行きがゝりその他の関係上、ペキン政府との外交関係を断つことの不可能な事情を述べ、日本としては南北両政府に対し、一視同仁の態度を維持するもので、南北両軍の対立に対しても、厳正中立の方針を固持する事に於て従来と何等の変りはないことを明言した……
「南北両軍主力対峙して上海の風雲急　即時撤兵を要求せよ　日支民衆を欺く外務当局の声明」（『無産者新聞』1927年3月5日付）。
[99]「戴天仇氏外務省を訪問」（『東京朝日新聞』1927年2月27日付）。戴季陶は満蒙問題について、新聞記者に対し次のように語った。「閑話」（東京『国民新聞』1927年2月27日付）。
　日本の人は何かといふと直ぐ満蒙問題について質問するが、一体満蒙問題なるものは日本の方で考へるべきことで、どうすれば合理的であるか正義であるかといふ事は却て此方から承はりたい位だ。
[100]「支那国民の覚醒とその団結運動」（『東京日日新聞』1927年2月28日付）。

	京)		
1927/3/1	中央亭(丸の内海上ビル)	(衆議院議員各派有志主催の招待懇談会)発起人代表は望月小太郎(憲政会)[101]	国民革命の意義。国民革命と日本の関係。日本の不平等条約撤廃を要求[102]。
1927/3/6	文化アパートメント(本郷区元町財団法人文化普及会)	(国際倶楽部主催の歓迎会)〔中国〕葛暁東、権無為、陳祖烈、黄宸芳、張則盛。〔日本〕木下、安部、小村、宮崎、丸山、上原など20名余り。〔ソ連〕●(阿斯沱高夫婦)(駐●大使館●)、●(同書記官)、●(斯列巴枯)など。〔アメリカ〕ケート。〔フィンランド〕ラムステット(駐日公使)。〔ドイツ〕●(許日次)(駐	中国の民衆運動は三民主義を原動力とし、帝国主義者と中国軍閥を打倒しつつある。三民主義と世界平和の関係(国民革命が存在しなければ、世界の矛盾を解決することができない)[103]。

[101]「南軍暴徒の残虐に国論漸く沸騰す　権利の主張のみでは行かぬ・憲政会　望月小太郎」(『東京朝日新聞』1927年3月31日付)。

過般戴天仇、呉鉄城氏などが訪問した時〈*、〉私は日本政府と日本国民は支那の国民運動に対してはいづれの国よりも一層厚い同情を持つてゐるが、支那本部には十五万の日本人があり、長江一帯には紡績業だけでも二億余の資本を投じてゐるから〈*、〉これ等の保護を十分してもらはなければ国論が承知しないと説き〈*、〉両氏は既にその事を南軍に打電してゐた……

[102]「苦しみの支那を援けよ」(『東京朝日新聞』1927年3月2日付)。「戴天仇氏不平等条約廃止を説く」(東京『東京日日新聞』1927年3月2日付)。戴季陶はこの講演で、「故孫先生は二年前北京で逝去せらるゝ前神戸に立寄つて、この世における最後の演説をして日支両国民の握手を力説して、有色人種の解放を説いた」、と述べたという。「分院各派代表の戴氏請待」(『大阪朝日新聞』1927年3月2日付)。

[103]「日本国際倶楽部歓迎戴季陶盛況」(『広州民国日報』1927年3月25日付)。尾崎宏次編『秋田雨雀日記』第2巻(東京:未来社,1965年11月)15頁。

		●大使館●）など。〔そのほかの国の駐●大使館●〕7、8名。〔ヴェトナム〕陳安福など。〔朝鮮〕李載甲など。〔スペイン〕、〔フィリピン〕、〔ビルマ〕、〔トルコ〕、〔イギリス〕などの「代表」数名。鈕有恒。秋田雨雀。	
1927/3/7	中央亭	（支那談話会）木村惇、若杉要、堀内干城、根岸佶、信夫淳平、小村俊三郎、松井等、半沢玉城、水野梅暁、油谷恭一、座間勝平、重藤千秋、井坂秀雄、牧田武、喜多誠一、宇治田直義、板垣征四郎、酒井隆、川口市松など	「民国成立以来の中国思想界の変遷に就いて」。中国国民党、国民革命軍の真相[104]。
1927/3/8	華族会館（東京）	（貴族院議員有志主催の招待会）	不詳[105]。
1927/3/9	旭館	茅原華山	日本国民は張作霖を重視していないことが分

[104]「支那談話会例会」（東京『支那時報』第6巻第4号, 1927年4月）107頁。
[105]講演後の質疑応答は、湘君「戴季陶氏在日言論之片段」（上海『時事新報』1927年6月3日付）に詳しく見える。

	(東京麹町区内幸町)		かった。満洲問題には結論を下さない(日本の特種権益を認めるとも言わない)[106]。
1927/3/10	熱海ホテル	福田徳三、後藤新平、山本實彦	「日・支・露問題討議」[107]
1927/3/10	熱海ホテル		「日・支・露問題討議」の附記[108]
1927/3/12	熱海	支那時報記者	「民生哲学の基本的概念」 「智仁勇の三者を総括すれば一の誠より出発して智仁勇の三者を以て更に善を撰〈*択〉んで固執し、終始貫徹して変らざるの決心をなし、而して後始めて、所謂民族問題、民権問題、民生問題の三者を解決して各のその処を得せしめて相悖らざると云ふ事が〈*、〉即ち孫文主義の民生哲学の依つて生ずる基本的観念である。更に之れを敷衍せんか、孫文主義の民生哲学は、即ち孔子の所謂中国思想を継承してこれを現代に用ひて相悖らざらしめんとするものであると云ふ事が出来る。然れば中山先生の主張は決して唯物史観より出発したる階級争闘を繰返し〈*、〉又赤露の共産主義を踏襲せんとするが如き浅薄なるものでは無いと云ふ事が明にされるのである」[109]。
1927/3/13	熱海ホテ	木村鋭市、佐分利貞男	昨 12 日に孫文追悼会に参加して西神田署に拘置された中国人と朝鮮人の釈放を要望する

[106]華山生「編輯を終へて」1927 年3 月10 日(東京『内観』第85 号, 1927 年4 月1 日付)32 頁。
[107]福田徳三・戴天仇・後藤新平(司会: 改造社社長山本實彦)「日・支・露問題討議」(東京『改造』第9 巻第4 号, 1927 年4 月)。
[108]「戴季陶氏附記」1927 年3 月10 日(東京『改造』第9 巻第4 号, 1927 年4 月)。
[109]戴伝賢「民生哲学の基本的概念」1927 年3 月12 日(東京『支那時報』第6 巻第4 号, 1927 年4 月)2-6 頁。
[110]1927 年3 月12 日午後、東京の中国国民党員が孫文追悼会を開催(西巣鴨派は上野公園自治会館にて、青年会派は神田区北神保町の中華留日基督教青年会にて)。西神田署が青年会派の孫文追悼会に出席する中国人、朝鮮人を拘置した。「にらみ合で追悼　孫文の霊を引張り合ひ　遂に十名検挙さる」(『東京朝日新聞』1927 年3 月13 日付)。「人騒がせの追悼会」(東京『読売新聞』1927 年3 月13 日付)。
　原文は中国語で書かれ、3 月12 日からインタヴューのために戴季陶(熱海ホテル投宿中)を訪ねていた支那時報記者に託し孫文と旧交があった水野梅暁(支那時報記者)に托し(あるいは水野が直接インタヴューに訪れたのかも知

	ル		[110]。
熱海滞在中	雲栖居（三浦梧楼別邸）	古島一雄	不詳。
熱海滞在中	雲栖居	犬養毅	不詳。
1927/3/17	銀行倶楽部（東京丸の内）	〔主に日華実業協会会員〕渋沢栄一、児玉謙次、白岩龍平、小貫慶治、入江海平、森廣蔵、森辨治郎、角田隆郎、鈴木島吉、小田切万寿之助、竹内金平、安川雄之助、天尾敬吉、萩野元太郎など	不詳。
1927/3/17	東京帝国大学法学部	（東京帝国大学学友会弁論部主催の講演会）吉野作造[111]など	「中国革命の思想と実際の歴史的考察」国民革命の思想的背景とその本質。世界における国民革命の意義。三民主義の本質。国民革命と世界平和の関係[112]。

れない）、外務省の木村と佐分利に送られた。外務省記録『外国人ニ関スル暴行殺傷関係雑件　在本邦外国人関係（支那人之部）』第2巻（東京：外務省外交史料館D. 2. 6. 0. 1-2）。

[111]前掲『吉野作造選集』第15巻, 19頁、22頁。

二月二八日月曜　赤松〈*克麿、〉宮崎〈*龍介〉両君〈*、〉戴天仇君と会談の件を相談に来られる〈*。〉

三月一七日木曜　三時から戴天仇君の弁論部に於ける講演をきく〈*。〉四時から中央亭に於ける歓迎会には欠席する〈*。〉

[112]「支那革命の解決は世界平和の鍵」（東京『帝国大学新聞』1927年3月21日付）。

戴季陶は同じ講演で「今より十三年前の民国三年に本学に於て演説した「支那革命の思想」と〈*を〉参照せられたいと希望し」たという。戴季陶が民国3（1914）年、東京帝国大学で行った講演については史料が見つかっていない。戴季陶は1915（民国4）年4月26日、同大学教授・吉野作造に請われ東京帝国大学で講演を行っている（演題は「支那政治思想の変遷」）。『吉野作造選集』別巻（東京：岩波書店, 1997年3月）86頁。

なお、戴季陶の講演を聴いた帝国大学新聞記者は、次のような講演に対する不満を記した。

同氏〈*戴季陶〉は国民党極右翼と目さるゝ西山派に属し〈*、〉且つ現在国民軍内部に軋轢のあることとて〈*、〉具体的な積極的な意見をきくことの出来なかつたことは〈*、〉聴衆の等しく遺憾とするところであつた

1927/3/17	中央亭	頭山満、犬養毅、副島義一、尾崎行昌、ラス・ビハリ・ボース Rash Behari Bose、鈴木正吾、鈕有恒、田中弘文、秋田雨雀[113]など約 120 名	国民革命の情況[114]。
1927/3/19	陶陶亭（東京）	日本の人、陳以一	同盟会以来の中国国民の歴史。三民主義の意義。国民革命とアジア民族の関係。日本国民は国民革命を理解し、誠意によって援助してほしい。中日両国の親善は平等関係により実現される[115]。
1927/3/19 以後		林煥庭、孫科、朱家驊	戴季陶は、国民政府援助のために久原房之助から 250 万円、紡績業者から 200 万円以上を受け取るはずである、との読売新聞の記事を訂正[116]。
1927/3/20 以前	東京	新聞記者	同前[117]。
1927/3/20		朱駿先、顧孟餘	同前[118]。
1927/3/21	渋沢栄一私邸（東京飛鳥山）	（渋沢栄一主催の招待午餐会）渋沢栄一、小田切万寿之助、角田隆郎、奥村政雄、荻野元太郎、天宅敬吉、水野梅暁、油谷恭一	当日出席した諸実業家は「南方政府諸施設<*施策>に対し反省を求む可き点は充分に縷説し」、渋沢は「故孫中山氏との関係より説き起し懇切なる挨拶」をした。 これに対し、戴季陶は渋沢の挨拶、諸実業家の意見を「帰国の上同志一般に伝ふべき」を述べた[119]。

[113]前掲『秋田雨雀日記』第2巻, 16 頁。

[114]「民間有志の戴氏歓迎会」（『東京日日新聞』1927 年3 月 18 日付)。「滞京中の戴天仇氏招待会」（『福岡日日新聞』1927 年3 月 20 日付)。

[115]「対於日本人之演辞」（前掲『東亜之東』19-23 頁)。「国民革命之前因後果」（『戴季陶言行録』258-262 頁)。

[116]「闢謠通電」（前掲『東亜之東』49 頁)。「闢謠通電」（『戴季陶言行録』81 頁)。

[117]前掲「無根の風説に戴天仇氏の迷惑」。

[118]「日本報紙造謠妄言国民政府向日人借款　経戴特派員厳重責問後已申明謝罪」（『広州民国日報』1927 年3 月 23 日付)。「戴委員長注意報紙造謠」（広州『国立中山大学校報』第8 期, 1927 年4 月 4 日付)。「戴季陶啓事」1927 年3 月 22 日(上海『申報』1927 年3 月 23 日付)。

[119]「日華実業協会記事」（東京『支那時報』第6 巻第4 号, 1927 年4 月)107 頁。戴季陶は渋沢栄一に孫文の肖像写真を贈った。前掲『渋沢栄一伝記資料』第39 巻, 1961 年9 月, 444-445 頁。

1927/3/21	燕楽軒（東京）	（旧政法学校関係者の歓迎会）吉野作造、小野塚、牧野、水野梅暁[120]など	不詳。
1927/2/25-3/23	陸軍大臣官邸（東京）	（陸軍省、参謀本部関係者主催の歓迎会）宇垣一成など	不詳[121]。
1927/2/25-3/23	東京	（黒龍会主催の歓迎会）	不詳[122]。
1927/3/22 前	東京	佐分利貞男など外務省関係者	不詳[123]。
1927/3/22 前	東京	（太平洋クラブ主催の歓迎会）徳川家達、各国の公大使約 400 名	不詳[124]。
1927/3/22	東京		訪日の意義。国民革命と日本の関係。中日両国の親善は平等関係により実現される。両国国民の自覚と諒解が必要[125]。
1927/3/22	東京		「去るに臨んで親愛なる日本国民に告ぐ」[126]
1927/3/24	三ノ	久留弘三、川島	郵船争議で中日の労働団体が提携すること

[120]前掲『吉野作造選集』第 15 巻, 22 頁。

[121]「記民国十六年使日時事略」（『戴季陶先生文存』1438-1440 頁）。

[122]前掲「記民国十六年使日時事略」。

[123]戴季陶の回顧によると、外務省の関係者は陸軍、参謀本部、黒龍会などのように侵略主義の思想を抱く者は、日本国民全体でなく、日本政府全体でもないことを、戴季陶に諒解してもらうべく弁解に努めたという。前掲「記民国十六年使日時事略」。

[124]「東京太平洋倶楽部宴会回憶」1947 年 12 月（『戴季陶先生文存』1460-1461 頁）。

[125]「熱望を述べて諒解を――天仇氏は語る」（東京『国民新聞』1927 年 3 月 23 日付）。

[126]「戴氏陳述書発表」（北京『北京週報』第 250 号, 1927 年 3 月 27 日付）。「中国々民政府代表戴天仇の来往」（内務省警保局『特秘外事警察報』第 57 号, 1927 年 3 月）164 頁。「戴氏の陳述書」（東京『支那時報』第 6 巻第 4 号, 1927 年 4 月）89 頁。中国語訳:「謹告親愛之日本国民」（「東方社二十二日東京電」上海『申報』、上海『民国日報』いずれも 1927 年 3 月 23 日付）。前掲「題民国十六年使日事竣告別書」（『戴季陶先生文存』1440-1441 頁）。「対日声明書」（前掲『東亜之東』47-48 頁）。

[127]「戴天仇氏を駅頭に迎へて握手を交はした争議団幹部　「貴下に深甚の謝意を表す」と感謝に咽んだ久留氏」（『神戸新聞』1927 年 3 月 25 日付）。「日支労働者の提携を望む　けさ神戸で郵船争議につき久留氏などと会見した戴天仇氏」（『大阪毎日新聞』1927 年 3 月 25 日付）。

	宮駅	民、劉同嘉	は、中日親善の有力な動機となる[127]。
1927/3/24	神戸	新聞記者	北伐の現状。訪日の感想[128]。
1927/3/24	中国国民党神戸支部	(執行委員会)郵船争議に対し争議団側の支持を決議[129]。	不詳。
1927/3/26	大阪朝日新聞社		不詳。
1927/3/26	大阪毎日新聞社	高石真五郎(主幹)、奥村信太郎(総務)、河野三通士(外国通信部長)、沢村幸夫(支那課長)	不詳。
1927/3/26	大阪クラブ	(大阪クラブ主催の歓迎午餐会)片岡安、陳	南京条約以降の民族意識――「支那の近代史は欧米の侵略の結果であり日本の維新と同じく東洋民族の覚醒である」。「中華民国の思想

[128]「革軍の第一着手は揚子江一帯の統一　中間の反革命派を一掃して馮玉祥軍と地理的関係を保つ　けふ下神した戴天仇氏語る」(『神戸新聞』1927年3月25日付)。「民国統一の成就を信じる　いよゝゝ帰支すべく来神の戴天仇氏談」(『大阪朝日新聞』1927年3月25日付)。

郵船争議(日本郵船株式会社労働争議)は、1927年3月、郵司同友会(日本郵船会社所属の船舶司厨部員より構成され、日本司厨同盟に加盟)が、退職および年度手当の増額そのほか数件の要求を本社に提出したが、本社は給料に関する件を考慮するがその他の件を拒絶すると回答したため、同月19日ストライキを決行したもの。日本司厨同盟が日本労農党を支持する関係から、日本労農党が争議団を応援し、本社が中国人船員を司厨部員として補充することを阻止するために、20日、戴季陶に協力を仰いだ。戴季陶は「本件に関しては斡旋し難き事情あり」といい、中国国民党東京支部(青年会派)の王樹声(中国共産党員)を紹介した。そこで、日本労農党は王樹声に面会し、王樹声は中国国民党から上海総工会に対し中国人船員の補充阻止に努めるよう打電するよう、中国国民党に依頼することを承諾したという。現在のところ、中国国民党の上海総工会あての電報を見つけられていない。

また、争議団の久留弘三、川島民などは、神戸の華厨聯誼会(会長楊官勝)や華僑同志会(会長華盛松)に対し、中国人船員を司厨部員として補充することを阻止する要請を行い、両会から同意を得た。さらに、川島は神戸三江公所会頭何世錩を訪ね、(1)駐神戸領事館より在上海各団体に対し中国人船員を司厨部員として補充することを阻止させるように打電すること、(2)中国より乗船して来た者に対し駐神戸領事館は補充司厨部員でないという証明書を発行すること、の二項目を駐神戸領事館に交渉するよう依頼した。何世錩はこれを承諾し、駐神戸領事館総領事周珏を訪ねた。周珏は(1)については「個人としては争議団に同情するも国家の官吏として承諾を為し難し」、(2)については「郵船会社より正式の手続ありたる場合は之を拒否することを得ざる」旨を回答した。そして、駐神戸領事館は同年4月30日までに計161名の「証明書」を発行したという。社会局労働部編『昭和三年七月調　昭和二年労働運動年報』(東京:明治文献, 1971年10月影印)690-698頁。

[129]「支那からは一人も補給させぬ――戴天仇氏を迎へて――中華〈*国〉国民党神戸支部の決議」(『大阪毎日新聞』1927年3月26日付)。

		以一ほか約200名	的根拠は民族的自覚的であって、これを生んだのは欧洲の科学的進歩であり、日本の自覚である」。 世界問題としての中国問題――「アヘン戦争から支那は世界の一国であるを知り近代的国家に改造しなければならぬといふところに達したが、世界大戦の結果、世界的意義において国民としての意識を持つに及んで」、「支那の」(「民族の」)「完全な独立と自由」と「民衆的勢力によって国民を統一し改革をはかる」(「デモクラシーの原則による三民主義を基調として改造する」)ことを求めた。国民革命が失敗すれば「支那民族は生存することが出来ない」。すると中国問題に関して各国は「衝突」し、世界平和は乱れる。「世界平和の基礎は支那が自由と独立を得るまでは確保されない」。 国民革命と日本――中国国民が国民革命により列強の圧迫を除こうとすることは、中国国民の生存ばかりでなく世界平和の基礎をも打ち立てるためである。日本国民はこのことを諒解し、「意識的の援助」を与えてほしい。そして、中日両国の親善は平等関係により実現されることを理解してほしい[130]。
1927/3/26	大阪中華総商会	陳以一など	同前[131]。
1927/3/27	中国国民	陳以一など	「中国国民党史略」革命が成功するには、主義をはっきりと認識すること、党の組織を密

[130]「支那の自由と独立は世界平和の基礎　その苦しき立場を愬へた　大阪倶楽部における戴天仇氏の演説」(『大阪朝日新聞』1927年3月27日付)。「親善の根本義は国民的の諒解　きのふ大阪クラブの招待で戴天仇氏演説」(『神戸新聞』1927年3月27日付)。講演後の質疑応答は、湘君「戴季陶氏在日言論之片段」(上海『時事新報』1927年6月3日付)、「答日本実業家之質問」(前掲『東亜之東』24-25頁)、前掲『青年之路』148-151頁、以上3点の史料に詳しく見える。

[131]戴季陶はこの講演で、「いま、中国の革命史と中華民族の世界における地位、〈*中華民族の〉今後の努力すべき方向について、みなさんにお話したい。〈*この話は〉先刻大阪クラブで話したこととほぼ同じであります。しかし、〈*大阪クラブでは〉聴講者がみな日本の人であったので、話したいことをうまく話すことができませんでした。いま、同胞のみなさんにこの話をきちんと話したいと思います」、と述べた。「戴季陶在大阪演辞」(上海『民国日報』1927年4月28日付)。「対於華僑之演辞」(前掲『東亜之東』1-8頁)。「中国革命史与中華民族在世界之地位」(『戴季陶言行録』240-247頁)。

	党神戸支部		にし、規律ある訓練を実行することが必要である[132]。
1927/3/28	神戸新聞社	宮崎震作、進藤信義(社長)、山沢●(政治部部長)	国民政府の内政方針。北伐の現状[133]。
1927/3/29	神戸港	新聞記者	「こんどの来朝で私の深く感じたことは朝野ともに思想的に非常な進歩を認めた事です」[134]。
1927/3/30	長崎通天閣	楊草仙、日本労働党代表、陳以一など	「革命の道は、まず民衆が団結一致することにある。全国の民衆を一つの有機体にさせることである」。「わたしのこのたびの行程で忘れられないことは、神阪華僑の聯合一致と各都市の華僑の愛国心が熱烈なことである」。華僑の革命への協力を求める[135]。
1927/3/30	長崎中華総商会	陳以一など	不詳。
1927/3/30 前			「中国国民革命の意義」[136]
1927/3/30 前			「中国革命運動の歴史的考察」[137]
1927/3/30 前			「中国革命の真相」[138]
1927/3/30 前		長野朗に頼まれて	「中山先生遺嘱」[139]
1927/3/30 前		茅原華山に頼まれて	「国民革命軍歌」[140]
1927/3/30 前		萱野長知に頼	「心経一節」[141]

[132]「対於国民党同志之演辞」(前掲『東亜之東』9-15 頁)。「中国国民党史略」(『戴季陶言行録』248-254 頁)。
[133]「議会政治への第一階梯として先づ予備議会を　本社を訪ねて戴天仇氏語る」(『神戸新聞』1927 年 3 月 29 日付)。
[134]「戴天仇氏の帰国　盛んな見送に取まかれ　日本の態度に感謝」(『神戸新聞』1927 年 3 月 30 日付)。
[135]「戴季陶過崎情形及最新行蹤」(上海『時事新報』1927 年 4 月 25 日付)。「対於中日二国人共同列席之演辞」(前掲『東亜之東』16-18 頁)。「政治進歩之階梯与三民主義」(『戴季陶言行録』255-256 頁)。
[136]戴天仇「中国国民革命の意義」(東京『事業之日本』第 6 巻第 4 号, 1927 年 4 月)。漢語訳:「戴季陶対日人解釈中国国民革命之意義」(『広州民国日報』1927 年 4 月 13 日付-4 月 14 日付)、戴季陶「中国国民革命之意義」(中山大学政治訓育部『政治訓育』〈*第 1 巻〉第 9 期, 1927 年 4 月 17 日付)。
[137]戴天仇「中国革命運動の歴史的考察」(東京『中央公論』第 471 号, 1927 年 4 月)。
[138]戴天仇「中国革命の真相」(京城『朝鮮及満洲』第 233 号, 1927 年 4 月)。
[139]戴季陶「中山先生遺嘱」(長野朗『支那国民運動の指導原理』(東京:ジヤパン・タイムス社出版部, 1927 年 5 月))。
[140]戴伝賢「国民革命軍歌」(東京『内観』第 85 号, 1927 年 4 月 1 日付)。
[141]戴伝賢「心経一節」(萱野長知『中華民国革命秘笈』(東京:皇国青年教育協会, 1941 年 2 月))。

		まれて	
1927/3/30 前		萱野長知に頼まれて(?)	「奉命使日憶及旧事不勝愴然」[142]
1927/3/31 もしくは 1927/4/1	上海	新聞記者	日本での「講演は約六十数回を数える」。革命には自己の党政府と民衆の一致団結、一致努力が必要。外交では中国を平等に遇する民族と連携することが必要。宣伝を行い民衆を覚醒させることが必要。日本国民の覚醒と組織は初期の段階にあり、彼らには中国の革命的な民衆と提携する心を持つが、(提携を実現させる)実力を持っていない。中国は現在、実に一農業国家であり、労働者の国家である。そして対外的に主張すべき権益は、すなわち労働者階級と民衆の利益である。なぜならば中国には在外資本がないので、在華の外国すべてが(中国にとって)資本家の地位に立っているからである[143]。
1927/4/2	上海	譚延闓、孫科など中国国民党と国民政府の要人、朱家驊など中山大学の要人	このたびの訪日では、日本「朝野に国民革命の目的と地位を説明し、彼らに自ら覚醒すること、従来の侵略干渉の政策を抛棄することを冀った。欧米の後を追随し、中国民族を敵とし、中国軍閥を援助して中国民衆を圧迫することを冀わなかった」。以上のことに日本朝野はよく傾聴したが、「ただわが党国の地位に関する言動に限り、困難を極めた」。訪日時の言動はまったく個人の意見を挟んでいない。わが党の第一の重要事は党の統一と団結である。中国国民党の基礎は民衆にある。党の行動は民主集中制の組織にある[144]。
1927/4/2	上海	日本朝野	「当面の急務は各国の撤兵〈*断行〉と〈*戦備解除〉を開始すると同事〈*時〉に三民主義の原

[142]伝賢「奉命使日憶及旧事不勝愴然」(前掲『中華民国革命秘笈』)。

[143]この記事には、戴季陶が「昨日」帰国したと見える。戴季陶の上海到着は3月31日であるので、記者が記事を書いたのは4月1日であり、記者が戴季陶にインタヴューをしたのは3月31日か4月1日であることが分かる。「戴季陶之談話▲将赴欧洲考査教育」(上海『民国日報』1927年4月3日付)。

[144]「戴季陶対党事宣言」1927年4月2日(『広州民国日報』1927年4月12日付)。「戴伝賢致函譚延闓等申明訪日心跡, 強調党的団結与統一」(中華民国史事紀要編輯委員会編『中華民国史事紀要――中華民国16年(1927)1至6月』(台北:中華民国史料研究中心, 1977年4月)525-526頁)。後者の史料には、「このたびの南昌と武漢の闘争確執は、わたしがあえて断言するに、まったく互いに信じることができない結果にほかならない」、の一節が見える。前者の史料には見えない。

			則に依りて上海の根本問題を平和的且つ合理的に解決するにあり」[145]。

【表４】戴季陶の訪日に対する評論

年月日	執筆者・掲載箇所	大要
1927/1/27	『東京朝日新聞』	社論「国民政府の対日方針　戴氏の使命」
1927/2/18	「日本と国民党」(『九州新聞』2 月 19 日付)	「露西亜が国民党に対して有つと同様の親善を、日本が国民党に対して有たんと願ふなら、露西亜と同様に、支那に対して裸体にならねばならぬ。日本の政府乃至国民に此覚悟があるか」。
1927/2/21	白川生(西本省三[146])「戴天仇の渡日」(上海『上海』第 719 号)	「今後赤露と結びたる戴天仇の言を聴くことに聡とく無かつたとはば、露支に操つられて遂に変相せる追随外交の禍に陥る其〈*日本の〉心に生じて、其政を害し、其政を害して、其事を害す。」
1927/2/25	水野(水野梅暁)「戴天仇君を迎ふ」(東京『支那時報』第 6 巻第 3 号,3 月 1 日)	国民政府が「本部支那は之を統一し得るの機運に会しての来遊は、蓋し〈*戴〉氏に取りては快心の遊なるべしと信ぜらる。併し其の快心の裏面には、責任の極めて重大なるものがあるから、老成国の為に謀り東亜百年の大計を樹立するには、虚心坦懐力めて人言を容れ、謙抑(ママ)自ら持して革命政府に対する一般の疑惑を解き、人を責むるに急なるよりは、寧ろ自らを修むる所以を明かにするは、即ち氏が其の使命を遂行する上の捷径である」。
1927/2/26	『東京日日新聞』	社説「戴天仇氏を迎へて」
1927/2/26	「戴氏来朝　彼の行動を監視せよ」(『無産者新聞』)	「支那国民党右翼幹部戴天仇氏が国民政府を代表して来朝した〈*。〉氏は国民政府承認を日本政府に求〈*め〉るために派遣されたのであるが〈*、〉氏が果して真実に国民政府の意志を代表し得るや否やを我が無産階級は監視し批判せねばならぬ〈*。〉何故ならば支那国民運動は既に我々の問

[145]「戴天仇氏の声明書　軍国主義の横暴を呪ふ」(『門司新報』1927 年 4 月 4 日付)。この史料の文章は読解する上で語句の不備がある。そこで読解を補助するために、「廃せよ恐怖政策　戴天仇氏声明」(『東京日日新聞』1927 年 4 月 3 日付)の史料を用い、適宜後者の語句を〈*　〉内に補った。

[146]「西本省三先生遠逝」(同前第 781 号,1928 年 5 月 23 日付)。黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻(東京:原書房,1974 年 10 月影印)98-100 頁。石川禎浩「雑誌『上海』『上海週報』記事目録」(濱田正美編『近世以降の中国における宗教世界の多元性とその相互受容』(科学研究費研究(基盤研究(B))成果報告書,2001 年 3 月)11 頁)。

		題であり、而して右翼幹部たる戴氏は既に来朝早々社会民衆党一派と馴れ合つてゐる[147]のを目撃するからである。」
1927/2/27	『東京朝日新聞』	社説「南方支那の使節　戴氏来る」
1927/2/27	「余録」(東京『台湾民報』第 146 号)	「この後日華親善を図ろうとするならば、口先だけの外交でなく、相互尊重の誠意を持って行わなくてはいけない」。
1927/2/27	清沢洌「支那国民運動に対する疑問」(東京『太陽』第 33 巻第 4 号, 1927 年 4 月)	「われ等は合理的な交渉の下に、満洲を支那に返還することすらも主張してゐる。併しそれと殆んど同じ瞬間に「然らば支那人だけで生き得て、日本人が生き得ない状態が来たらどうする」といふ質問が、頭の一部に起るのを拒み得ない」。「日本人のための日本だけで、日本人は将来、文化的生活が営み得られるだらうか。今のところ「アジア人のためのアジア」といふ言葉は「支那人のためのアジア」といふと殆んど同じ意味にすぎない」。「ウイルソンが唱へて、各国がこれに和したところの民族自決主義も、利するものは大なる富源を有する国だけであつて、日本の如き狭少なる国の現状維持は、自己を縛さるゝ結果に過ぎないのではなからうか」。「私はたゞ、支那国民の覚醒に深い同情を寄せながらも、彼等が「租界回収」「帝国主義打破」といふやうな言葉を、訳もなく信仰的に信じて、この言葉の前には如何なる方法、手段も許さるゝ如く信じ叫んで居ることに対して、一つの疑問がある」。
1927/2/28	栄「反革命的右派和醒獅派在日本的活動(東京通信)」(『中国青年』第 158 期, 3 月 12 日)	「現在戴季陶が〈*東京に〉来ているが、彼ら〈*右派〉は東京駅に赴き、〈*戴季陶の宿泊する〉帝国ホテルに赴き、……彼らの結託する手段を大いに発揮した」。
1927/2/28	実(陳独秀)「戴天仇其奈日本人的一定範疇何!」(『嚮導』第 189 期)	戴季陶は日本で、中国の政治上・経済上の独立と、日本による中国経済恢復の援助を訴えているが、〈*東京〉日華実業協会の見解は戴季陶の訴えを聴き容れていない。
1927/3/1	「編輯後記」(東京	「第一革命以来お馴染の戴天仇君、支那国民党の

[147] 当時、労働農民党と社会民衆党は路線闘争を行っていた。労働農民党は「全日本の無産者団体」が戴季陶来京の歓迎会を主催することを提議したが、社会民衆党が「拒否」したという。「日支無産階級の提携を拒否する民衆党　帝国主義の擁護者　階級的裏切者を葬れ」(『無産者新聞』1927 年 3 月 5 日付)。

	『東方公論』第 2 巻第 3 号)	立場につき、我が朝野の諒解を得べく渡日、言ふことは云へ、聞くことは聞く。しかし聞いた上で分別をし直すほど、霞ヶ関の方針は不確定なものではない筈だ」。
1927/3/2	「戴氏来」(労働農民党『労働農民新聞』)	「支那国民政府の使節として国民党右翼の戴天仇氏が国民政府承認を求めて来朝した。氏の来朝はわれらの衷心歓迎する所であるが氏が来朝早々社会民衆党一波〈*派〉に接近してゐることは、氏が右翼として西山会議などで裏切行為をやつた事を思ひ合せてわれらの最も警戒を処する処であ〈*る〉。氏が真に国民政府の意志を代表せるや否やを我らは充分に監視せねばならぬ」。
1927/3/3	「南軍が上海を抜いたら張作霖氏奮起せん　町野〈*武馬〉顧問の談」(東京『報知新聞』3 月 4 日付)	「英国の国民政府に対する猫眼的外交政策」は失敗である。「日本の外務当局は先に来朝した南方代表の戴天仇氏のいはゆる不平等条約撤廃の主張を黙認したのは英国のてつを踏むやり方でやがては満洲における日本の既得利益を根本から覆へす禍根を残す事になると思ふ、国民政府の排外運動は支那民衆の声ではなく一部露国共産主義者の宣伝に過ぎない」。
1927/3/14	「海の彼方　走馬灯の世界相　支那国民党と共産派」(東京『読売新聞』)	「今日本に来てゐる戴天仇もやはり民党側で近頃共産主義に傾いてゐる事は其云ふ処を聴けば瞭然〈*と〉する」。
1927/3/17	鈴木正吾「戴天仇氏に寄す」(東京『内観』第 86 号,5 月 1 日付)中央亭での歓迎会にて	「青年支那と同一のリズムを以て、世界の政局に……青年日本の醒起する時は将に近づいて居る」。日本の問題であり、同時に中国の問題であるのは、日本の人口、食糧問題である。イギリスはこの問題を日本の満洲における「スペシアル、インテレスト」と関連させて、日本と国民政府の関係を離間させようとしている。国民政府は満洲問題について、日本国民の「普遍的感情」を理解した上で、英米を含めず日本と解決してほしい。
1927/3/18	実(陳独秀)「戴天仇願意出売工人嗎?」(『嚮導』第 192 期)	「戴天仇の訪日の任務を私たちは知らないが、おおよそ、国民政府を代表して中国の労働者を日本帝国主義に売り出すような特権なぞ持たないであろう」。
1927/3/26	「戴天仇に応援を求む　日労党の魂胆」	「日労党〈*日本労農党〉幹部等は郵船司厨部争議に関し〈*、〉戴天仇氏を通じて支那国民党に争議

	(『無産者新聞』)	応援を求めてゐる。この事は彼等が支那革命運動に対する全般的な態度と関係あるものであり〈*、〉国民党右翼との積極的提携の意志を現はしてゐる。国民党右翼はブルジョアジーの手先であり〈*、〉支那革命運動をブルジョア革命に止まらしめて無産階級の徹底的な解放に反対するものであつて、日労党の支那国民党右派との提携は即ちブルジョアとの提携であり、日本ブルジョアジーを支持する所以」。
1927/3/29	長野朗「国民党と共産党は分裂するか」(東京『太陽』第 33 巻第 5 号,5 月 1 日)	中国共産党は、列強、奉天派、中国国民党の中国共産党とソ聯に対する「聯合戦線が出来かゝつて、クーデターをやられる虞れが迫つたので、自ら先手を打」ち、蒋介石一派に反対した。「共産派の神経を刺激したのは、戴天仇の日本行と西山派の活動である。国民党と日本との関係にはかなり嫉妬の眼を向けて居る所に戴の日本行があつたので一層邪推の念を強めた」。
1927/3/31(?)	「戴季陶昨日返滬▲陳志羣秘書之談話」(上海『民国日報』4 月 1 日付)	戴季陶の訪日の目的は「広く日本朝野の各方面に、国民革命の目的と国民政府の政策を知らせることで、わが国の革命の意義を了解させることであったが、誤解を生んだことはなかった。そのほかの具体的な計画はなかった」。戴季陶は「東京で 64 回もの講演を行ない、たびたび、国民政府はいかなる外国の借款も受けないこと、このたびの国民革命は決して外力を借りないこと、国民政府は農工階級の利益を擁護しいかなる資本家の借債を受けないこと、以上のことを明言した」。
1927/3/	東邦生(釈尾東邦)「編輯室より」(京城『朝鮮及満洲』第 232 号)	戴季陶が訪日し、「日本人の対支那人態度を云々して居る、支那人自らも少し考慮反省して文明人らしくしては何うか」。
1927/4/1	華山生(茅原華山)「戴天仇来」(東京『内観』第 85 号)	「私は支那の国民的運動に同情するものである。支那が赤化するといふが如きは、一片の杞憂に過ぎない」。ボロディンが「我々は貧乏を社会主義化することは出来ない」と述べたように「富める平等」を図る「露西亜それ自身が共産主義の国ではない」。貧しき「支那は共産主義化せんと欲するも得ずといふのが中つて居る」。 戴季陶は「旧思想の人」、「国民党の右翼」、「ロー

		マンチシスト」、「旧式の革命家」である。「然しながら〈*戴季陶が〉国際上、絶対平等を要求するは、これは抵抗すべからざる支那国民の要求である。そして我々がこれに対して無条件の同情を表するは、人間として当然のことである」。 「私が戴君を迎へての感じは、余りに楽観的ではなかつた。正直にいへば、寧ろ悲観的である。支那人は最も熱心に歓迎したが、日本人の出迎は余り沢山とはいへない。政府を代表したものゝゐなかつたのに不思議はないが〈*、〉支那通を以つて知らるゝ諸名士の出迎もなかつたやうだ〈*。〉故に日本側は頗る寂寞であつた、これには色々の理由がある。彼は……一書生の戴として……同時に孫中山の秘書として知られてゐる、その人に重きを置かれなかつたのが、一つの理由であらう。国民党といへば共産主義を、赤化を聯想するが為めに、態々回避したものもあらう。これも他の一つの理由であるが、何うも日本の同情が国民党の上に雨降らずに、日本は南支那を理会してゐない。多くの日本人には……満洲問題や附加税問題などが〈*に〉こだわつてゐて、倫敦タイム〈*ス〉のいふやうに、大悟一番、新しい形勢は新しき政策を要す A new situation demands a new policy といふ所までは至つてはゐない。英国の新聞紙が〈*1926 年〉十二月の末頃から、盛んに支那の新形勢を論じてゐるにも拘らず、日本の支那に関する智識は極めて稀薄である。これが最も重なる理由といつて、不可はあるまい。私は或は戴君が余り芳ばしからぬ感情を抱いて、帰帆を懸けて返るのではないかと直感せざるを得なかつた。或る識者が戴は今時分何故来たのだ。遠くから眺めて□れば、可かつたのに、といつた〈*。〉私はさうでないことを祈るが、事実さうであるかも解からない。」
1927/4/2	「代表の名を騙る戴天仇氏　彼を卑屈にしたわが政府の買収政策」（『無産者新聞』）	「戴天仇氏は、……来朝後、完全に、支那国民党の代表者として、支那民衆の政治家として、資格なきことを自ら曝露しつづけてゐる。……戴天仇氏は来朝後、先づ、社会民衆党の宮崎龍介を初め、ブルジヨア的な支那浪人と交際し、ブルジヨア学者、ブルジヨア政治家と或ひは熱海温泉に、或ひ

		は築地待合に懇談した以外、支那国民革命に対する意見を、日本の全民衆に訴へるなどのことは全然やらなかつた。彼は、労働農民党がわざわざ主催した歓迎会にも出席を拒み、無産階級諸団体及無産階級言論機関からの招待、執筆、面会、悉くを意識的に拒否した。そしてたゞ恐る恐るブルジヨア雑誌記者の口を藉り、ブルジヨア政治家の代弁を藉りて日本政府への親誼を求めたに過ぎなかつた。……戴天仇氏に対する日本無産階級の期待は悉く裏切られた。」
1927/4/3	安東生「日支非親善論　正当なる交際をこそ望め」(上海『上海』第 725 号)	「恐らく戴氏が予期した目的は達し得なかつたであらう、日本では国民党の主義政策に就て戴氏の弁述を熱心に聴取したに相違ないが、同時に国民党の主義政策に頗る矛盾があり無理のあることをも看破されてしまつたであらう、況して国民革命軍の軍規は他の軍閥の軍規と何等勝る所なく、不平等条約打破、帝国主義打倒を真つ向に振りかざし排外精神の旺盛なる一面において、南京事件勃発に依りて往年の義和団匪と類似した無法排外団たることを暴露するに至つたことは、国民軍の敵たる、孫伝芳張宗昌の軍閥以上に凶悪性を帯ぶることを広告したと同じことであるから、戴氏遊説の効果は殆んど悉く破滅に帰したと見なければなるまい、戴氏が初め上海を起つ時発表された対日方針四項目中の最後の一項に「朝鮮台湾民族に対し憲法上自主的権能を与ふること」云々と衒気満々頗る大きく出てゐたが、帰途大阪では、「今日の国民運動が不幸にして失敗すれば支那民族は生存することが出来な□〈*い?〉のである」と弱音を吐いてをる所を見ると、今日の日本人は案外よく支那人の心理を看抜いてゐて口舌に惑はされないことを悟つたものでなからうか〈*。〉吾等は曰く〈*、〉日支は非親善でよろしい〈*、〉正当なる交際こそ望め〈*、〉と」。
1927/4/4	宮崎龍介「三民主義か共産主義か」(東京『帝国大学新聞』)	戴季陶は、国民革命と共産革命とが並行し得ないことを述べた。
1927/4/	南溟庵主人「戴氏来朝を機として」(東京	日本亡命時期における張継、戴季陶と「南溟庵主人」の交流を回想

	『東洋』30年4月号）	
1927/4/	（吉野作造）「無産政党に代りて支那南方政府代表者に告ぐ」（東京『中央公論』）	第一に「日本の民衆は、南方諸君の改革的精神に同情し、ひとえにその成功を祷って居る」。第二に承認問題については、「我々は、南北対立の事実をありのままに認め、各々その実力の現に及ぶ範囲を限って、それぞれの支配権を認むるの外ない」。第三に「在来の法規慣例の尊重を約せざる以上、我々は少くとも理論上、或る程度の自由行動の留保を主張せざるを得ない」。第四に「我々無産階級は、単純な理論としては、満蒙に於てすらも決して引続き特殊地位を主張せんとする考はない」。しかし「これら特殊地位の原因をいちがいに諸外国の侵略主義に帰する説には、無条件に与し難い。……その外に、支那が一独立国としての形式を完備しなかったと云う事情もある」。「侵略方策の原則的放棄に関連して、諸君に一つ折入って頼みたいことがある。……支那に於ける我々既占の特殊地位の中、一部階級の私慾を充たすに過ぎざるものはどうでもいいが、我国民衆一般の生活に直接の関係を有するものに付ては、その発生原因のいかんに拘らず、これを合理的に整正するに際し、特に穏当な顧慮を加えられんことである」。
1927/5/1	華山生「支那問題再評論」（東京『内観』第86号）	「戴の〈*訪日の〉目的は結局国民党の目的は徹底的英国を排斥するにある、日本とは何処までも親善関係を維持せんとするにある事を吹聴し、又日本をして北方を援助することなからしめ、以つて日本を油断せしめやうとしたのではあるまいか。そして日本をして国民軍が山東軍を撃破し、長江の流域の諸要地特に上海を無事に手に入るゝまで、英国と協同動作をなさしめないことを計つたのではあるまいか」。戴の訪日によって、「国民党は日本をして右傾派の蒋一派と左傾派のボロデインや徐謙一派とは、氷炭相容れざるものであると信ぜしむるに成功した。武漢三鎮は共産派の巣窟であつて、蒋介石一派は南昌に留つて、各々その為さんと欲する所を為しつゝあると信ぜしむるに成功した。蒋は日本に頼りかゝるものであると信ぜしむるに於て成功した。……国民党は日英

		の干渉なくして、無難に上海を占領せんが為めに、国際的大芝居を打つて首尾よくこれに成功した」。「国民革命の目的が、日本に接触せずして達せられるものと思へない。孫文や蒋は言語を慎むも、一般の国民党員は無遠慮に日本を排斥することを公言してゐる。日英を聯合せしむるを不利をする故に、先づ英国を排撃し、英国を排撃する間は、日本排斥の声を潜め、そして左右両派の軋轢を宣伝せしめ、更に日本語を日本人よりも達者に語る使者を日本に遣はした……国民党の最も怖れたのは、日英の聯合である」。
1927/7/	末廣重雄「上海中立に関する一考察」(京都帝国大学経済学会『経済論叢』第 25 巻第 1 号)	イギリス労働党や日本労農党などが国民政府承認論を主張していることに触れて、「先般来朝した戴天仇氏の如きも、日本政府に対して敢て国民政府承認を求めぬけれども、同政府が近く軍閥の傀儡たる北京政府を倒壊して、全支那の支配権を握ること疑なき以上、進んで一日も早く同政府を承認することが、日本政府に取つて賢明の策であらう。日本政府は同政府を率先承認することによつて生ずべき支那人の対日好感によつて利するところ決して尠少であるまい、と公言し、私も氏より直接此の意見を聞かされたが、今日までの事情に照し、国民政府を承認することは果して当を得たことであらうか」。

【表５】新亜細亜学会の幹部

【1931 年 5 月 10 日　成立大会(第一次会員大会)　　会員数約 80 名】

理事：馬鶴天、林競、方治

監事：王維藩、魏乾初、鄭逸庵、陳惟俠

【1932 年 2 月　第二次会員大会　　会員数約 170 名】

会長：戴季陶

【1932 年 12 月 24 日　第三次会員大会　　会員数約 370 名】

名誉董事：蒋中正、戴季陶、班禅(パンチェンラマ 9 世)、章嘉呼図克図

董事：黄慕松、許崇灝、陳大斉、馬鶴天、馬洪煥、方治、狄膺、許静芝、黎照寰、王応榆、何彤、辛樹幟、格桑沢仁(ケサンツェレン)、魏崇陽、李世瓊

監察委員：陳立夫、朱文中、謝健、王維藩、陳天錫

評議員：張継、于右任、居正、蔡元培、鈕永建、張之江、石青陽、克興額(クーシンオ)、張治中、賀耀組、楊杰、余井塘、苗培成、劉家駒、王用賓、楊言昌、林競

【1933 年 1 月-6 月】

董事：黄慕松、陳大斉、許静芝、格桑沢仁、許公武(崇灝)、辛樹幟、馬鶴天、方治、狄膺、馬洪煥、王応榆、何彤、李世瓊、魏崇陽、黎照寰

常任董事：許崇灝、辛樹幟、馬鶴天

評議員：張心一、黄懺華、宋湜、楼桐孫、王啓江、恩克巴図、羅桑堅賛、貢覚仲尼、濮純、王曾善、伊徳欽、王恕、石瑛、頼璉

監察委員：陳立夫、王維藩、朱文中、謝健、陳天錫

研究委員：謝健、劉慎謂、譚雲山、何健民、馬鶴天、林競、王曾善、王子元、黎丹、宮廷璋、劉家駒、格桑沢仁、呉履祥

編審委員：陳大斉、雷震、楊開甲、趙龢、余世鵬、金庸、劉光華、劉奇峯、劉振東、孔力行、王去病、鄭宝善、伍非百、楊宙康、童蒙正、黄序鵷、冒広生、申凌霄、羅鴻詔、劉運籌、邱懐瑾、陳屯、羅篁、陳念中、李世瓊、胡定安、姚荐楠、魏崇陽(1933 年 8 月から)

幹事部総幹事：方治

副総幹事：董道寧、印維廉

組織科主任：謝介眉

副主任：馮挙安

幹事：王昉、万友竹、張増益

出版科主任：楊開甲

副主任：印維廉

幹事：張渭漁、蒋用宏、王孤山

事務科主任：董道寧

副主任：李培国

幹事：馮挙安、〔会計〕劉屹懐(1933 年 7 月辞職、徐家麟継任)、方維徳、〔図書〕陳家軫(1933 年 8 月辞職、易海陽継任)

服務部幹事(1935 年 5 月から)：王発科、朱成瑜

月刊社総経理：許崇灝

総発行：馬鶴天

総編輯：陳大斉

編輯：劉振東、唐啓宇、辛樹幟、黄霖生、印維廉、魏崇陽、劉奇峯、方治、董道寧、陳念中、羅篁

【1936 年 3 月 8 日　第六次会員大会】

名誉董事：蒋中正、戴季陶、班禅、章嘉、蔡孑民、于右任、張溥泉

董事：朱家驊、黄慕松、許静芝、陳大斉、許崇灝、馬洪煥、黎照寰、辛樹幟、劉振東、顧頡剛、蕭一山、蒋復璁、楚明善、張含英、魏崇陽

監察委員：石瑛、謝健、陳天錫、朱文中、杭立武

評議員：居正、鈕永建、陳立夫、王用賓、張之江、張治中、余井塘、方治、林競、馬鶴天、王応榆、李世瓊、苗培成、狄膺、劉家駒、王啓江、羅桑堅賛、貢覚仲尼、王曾善、伊徳欽、王恕、格桑沢仁

【1936 年 3 月 25 日　第一次董事監察委員聯席会議】

常務董事：陳大斉、許崇灝、辛樹幟
常務監察委員：陳天錫
評議員：孫科、葉楚傖、陳樹人、程潜、蒋作賓、馬超俊、梁寒操、周啓剛、賀耀組、楊杰、曾養甫、陳布雷、王暁籟、王震、傅斯年、麦斯武徳、克興額、陳垣、沈兼士、徐炳昶、白瑞、溥侗
幹事部総幹事：〔暫保留〕
副総幹事：董道寧
組織科主任：方保漢
副主任：趙汝言
出版科主任：魏崇陽
副主任：何侃
幹事：張渭漁、蒋用宏、王孤山
専務科主任：董道寧
月刊社経理部総経理：許崇灝
文書：方保漢
会計：劉屹懐
司賑：呉宝善
発行部：〔発行主任〕魏崇陽、方保漢、張渭漁
編輯部総編輯：陳大斉
編輯：沈士遠、袁同疇、劉振東、譚雲山、余文若、何侃、方保漢、魏崇陽、呉体仁、李慶泉、邱慶鏞、王迅川

【1943 年 9 月　理監事評議聯席会議　　会員数 172 名増の 600～700 名】
理事長：戴季陶
(出席者)謝健、王曾善、陳樹人、馬超俊、范揚、楚明善、〔常務理事〕許崇灝、王応榆、濮純、呉忠信、周昆田、袁同疇、顧頡剛、盧毓駿、許静芝、張治中、陳天錫、狄膺、陳大斉

参考文献一覧

（本論・附録で参照しなかった戴季陶に関する著作集・日記・年譜・専著・論文・評伝を含む）

凡例

１．「史料」と「専著・論文・評伝」に大別した。そして、「史料」を「未公刊史料」、「公報・会議録」、「新聞雑誌」、「二次史料」、「著作集・日記・年譜・回想録・訪問記録」に細別した。さらに、「著作集・日記・年譜・回想録・訪問記録」と「専著・論文・評伝」をそれぞれ「戴季陶に関するもの」、「そのほか」に細別した。

２．日本語文献、漢語文献、英語文献、ドイツ語文献、朝鮮語文献の順に配列した。

３．日本語文献は編著者名と文献名の五十音順に、漢語文献は編著者名と文献名の拼音アルファベット順に、英語文献は編著者名と文献名のアルファベット順に配列した。

４．同一の編著者を示す場合は「――」を用いた。

＊＊

Ⅰ　史料

１　未公刊史料

【日本語――外務省外交史料館（東京）】

外務省記録『外国人ニ関スル暴行殺傷関係雑件　在本邦外国人関係（支那人之部）』第２巻, D.2.6.0.1-2

外務省記録『各国内政関係雑纂　支那ノ部　革命党関係（亡命者ヲ含ム）』1.6.1.4-2-1

外務省記録『各国名士ノ本邦訪問関係雑件　中華民国人ノ部』第１巻, L.3.3.0.8-1

外務省記録『本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件　第一巻』→国立公文書館アジア歴史資料センターから提供

外務省記録『満州事変（支那兵ノ満鉄柳条溝爆破ニ因ル日、支軍衝突関係）　各国ノ態度　支那ノ部　国民政府ノ態度』→国立公文書館アジア歴史資料センターから提供

【漢語――広東省档案館（広州）】

全宗号 20（中山大学）・目録号 9・案巻号 7（1）・標題「中大鄒校長戴伝賢告同事、同学書, 教育部訓令, 大事記, 募捐情況及函件, 報告」

【漢語――中国第二歴史档案館（南京）】

全宗号１・案巻号 1790（16J-2315）・標題「戴伝賢等建議保持発展河南洛陽文化古蹟」

全宗号１・案巻号 2361（16J-2360）・標題「国立各中山大学組織与校務」

全宗号 37・案巻号 92・標題「考試院長戴伝賢担任中央党政軍訓練班講座所編党政建制図表」

２　公報・会議録

【日本語】

『外務省報』

社会局労働部編『昭和三年七月調　昭和二年労働運動年報』（東京：明治文献, 1971 年 10 月影印）

台湾総督府警務局編『台湾社会運動史――台湾総督府警察沿革誌第二編・領台以後の治安状況（中巻）』（台北：台湾総督府警務局, 1939 年７月、東京：龍渓書舎, 1973 年５月影印）

『留日学界僑商宣言　附開会通告、会場紀事』1915 年９月１日

【漢語】
国民会議実録編輯委員会編『国民会議実録――選挙総事務所報告』
『国民政府公報』（南京：河海大学出版社，1989 年 7 月影印）
国難会議秘書処編『国難会議紀録』（台北：文海出版社・近代中国史料叢刊続輯第 49 輯 484，1978 年 1 月影印）
『軍政府公報』、『陸海軍大元帥大本営公報』（蔡鴻源・孫必有・周光培編『南方政府公報』（石家荘：河北人民出版社，1987 年 12 月影印））
『考試院公報』
『考試院施政編年録』
『考試院月報』
兪辛焞・王振鎖等編訳『孫中山在日活動密録（1913 年 8 月-1916 年 4 月）――日本外務省档案』（天津：南開大学出版社，1990 年 12 月）
中国第二歴史档案館編『中国国民党中央執行委員会常務委員会会議録』（桂林：広西師範大学出版社，2000 年 4 月影印）
――編『中央党務公報（1937. 7-1947. 12）』（南京：南京出版社，1994 年 12 月影印）
――編『中央党務月刊（1928. 8-1936. 12）』（南京：南京出版社，1994 年 12 月影印）
中国国民党中央委員会党史委員会編編『国防最高委員会常務会議記録』（台北：近代中国出版社，1995 年-1996 年）
「中国国民党中央執行委員会政治会議特種外交委員会議記録」、「中国国民党中央執行委員会政治会議速記録」（劉維開編『国民政府処理九一八事変之重要文献』（台北：中国国民党中央委員会党史委員会，1992 年 6 月））

3　新聞雑誌

【日本語】
『大分新聞』、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『改造』、『解放』、『外交時報』、『九州新聞』、京都帝国大学経済学会『経済論叢』、『基督教世界』、『経済往来』、『洪水以後』、『神戸新聞』、『神戸又新日報』、『国民新聞』、『滬上評論』（上海）、『国家及国家学』、『滬友』（上海の東亜同文書院）、『佐賀新聞』、『事業之日本』、『時事新報』（東京）、『支那時報』、『支那と日本』、『社会主義研究』、『上海』（上海）、『上海時論』（上海）、『政治批判』、『太陽』、『第三帝国』、『中央公論』、『中央新聞』、『朝鮮及満洲』（京城）、『東京朝日新聞』、東京『帝国大学新聞』、『東京日日新聞』、『東方公論』、『東洋』、『内観』、内務省警保局『特秘外事警察報』、『日華公論』（天津）、日本労働総同盟『労働』、『福岡日日新聞』、『北京週報』（北京、北平）、『報知新聞』、『満蒙』、『民報』（東京）、『無産者新聞』、『門司新報』、『雄辯』、『読売新聞』、『労働農民新聞』

【漢語】
『晨鐘報』（後に『晨報』と改称）、『大公報』（天津、長沙）、『輔導通訊』、『革命』、『革命導報』、『広州民国日報』、『国立中山大学日報』（一時期『国立第一中山大学日報』と改称）、『国立中山大学校報』（一時期『国立第一中山大学校報』と改称）、『国民革命週刊』、『国民月刊』（国民党上海交通部）、『国史館館刊』、『海潮音』、『漢口民国日報』、『湖州』、『建設』、『開発西北』、『考政学報』、『労動界』、『蒙蔵旬刊』、『蒙蔵月報』、『民立報』、『民権報』、『民権素』、『民国』（東京）、『民国日報』（上海）、『閩星』、『羣衆』（香港）、『申報』（上海、漢口）、『時報』、『時事新報』（上海）、『順天時報』、『台湾民報』（東京）、『台湾先鋒』、『太平洋』、『天鐸報』、『文化建設』、『文化与教育』、『先駆』（上海）、『嚮導』、『新民国雑誌』、『新青年』、『新生命』、『新亜細亜』、『星期評論』、『血路』、『月華』、『政治訓育』（広州の国立中山大学（一時期、国立第一中山大学））、『政治週報』、『中国辺疆』、『中国国民党周刊』、『中国青年』、『中国社会』、『中国童子軍総会月刊』、『中央半月刊』、『中央日報』（一時期『中央日報、掃蕩報（聯合版）』となる）、『中央夜報』、『中央月刊』、『中央週報』

【英語】
“The Chinese Social and Political Science Review”、“China Tomorrow”(Peiping)

【朝鮮語】
『東亜日報』(京城)

4　二次史料

【日本語】
陳徳仁・安井三吉編『孫文・講演「大アジア主義」資料集』(京都:法律文化社, 1989 年 9 月)

【漢語】
広東省档案館編訳『孫中山与広東――広東省档案館庫蔵海関档案選訳』(広州:広東人民出版社, 1996 年 10 月)
栄孟源主編『中国国民党歴次代表大会及中央全会資料』上下冊(北京:光明日報出版社, 1985 年 10 月)
楊学為総主編『中国考試史文献集成』第 7 巻・民国(北京:高等教育出版社, 2003 年 7 月)
中共中央党史研究室第一研究部訳『聯共(布)、共産国際与中国国民革命運動(1920-1925)』(北京:北京図書館出版社, 1997 年 1 月)
中国第二歴史档案館編『中国国民党第一、二次全国代表大会会議史料』上下(南京:江蘇古籍出版社, 1986 年 9 月)
――編『中華民国史档案資料彙編』(南京:江蘇古籍出版社)
中国国民党中央委員会党史委員会編『革命文献』(台北:中国国民党中央委員会党史委員会)
中国科学院近代史研究所近代史資料編輯組編『一九一九年南北議和資料』(北京:中華書局, 1962 年 12 月)
中華民国大学院編『全国教育会議報告』(台北:文海出版社, 1985 年 6 月影印)

5　著作集・日記・年譜・回想録・訪問記録

A　戴季陶に関するもの

(著作集・日記)

【漢語】
01.『天仇文集』(上海:民権報発行部, 1912 年 11 月[1])
◆影印版:『宋漁父戴天仇文集合刻』[2](上海:国光図書館, 1921 年 7 月)
◆影印版:呉相湘主編『戴天仇文集』(台北:文星書店, 1962 年 6 月)
02.『協作社的效用』(広州:中国国民党中央執行委員会宣伝部広州中国国民党週刊経理処, 1924 年 1 月初版、1926 年 2 月第三版、1926 年 8 月第四版、1927 年 4 月第五版)
03.『孫文主義之哲学的基礎』(上海:中国国民党中央執行委員会上海執行部, 出版時間不詳[3])
◆別版:上海:民智書局, 1925 年 7 月初版
04.『孫文主義之哲学的基礎　校正増補第二版』[4](上海:民智書局, 1925 年 8 月初版、1925 年 12 月第二版、1927 年 1 月第五版、1927 年 9 月第六版)

---

[1]実際は 12 月 15 日以後。
[2]別名は「漁父天仇文集」。
[3]1925 年 7 月初版か。
[4]03. の修訂版にあたる。

05.『中国独立運動的基点』[5](上海:中国国民党中央執行委員会上海執行部, 出版時間不詳)
06.『中国独立運動的基点』[6](広州:広州民智書局, 1925 年 8 月初版、1928 年 7 月第二版)
07.『季陶小文集』[7]
08.『季陶論文集』[8]
09. 林霖等紀録, 何思源整理『戴季陶先生最新講演集』第 1 編(広州:国立中山大学事務管理処出版部, 1927 年 1 月)
10. 戴季陶演講, 陳以一紀述『東亜之東』(出版者不詳, 出版時間不詳[9])
11. 陸友白編『孫文全集・附集「孫文主義討論集」』(上海:卿雲図書公司, 1927 年 5 月初版、1928 年 12 月第二版)
12.『産業合作社之組織』(広州:国立第一中山大学政治訓育部宣伝部, 1927 年 8 月第三版)
13. 中央軍事政治学校政治部宣伝科編『戴季陶先生両個重要的演講』(中央軍事政治学校政治部宣伝科, 1927 年 8 月)
14.『青年之路』(上海:民智書局, 1928 年 2 月初版、1928 年 8 月第四版)
15.『戴季陶講演集』(上海:新生書局, 1928 年)
16.『戴季陶先生政治工作論文』(政治訓練部印刷所(印刷), 1928 年 10 月)
17. 大東書局輯『党国要人戴季陶最近言論集』上中下編(上海:大東書局, 1928 年 11 月初版、1929 年 11 月第二版)
18. 張延灝編『党治訓育叢書』(上海:大東書局, 1929 年 1 月)
19. 時希聖編『戴季陶言行録』(上海:広益書局, 1929 年 6 月初版、1932 年 3 月第二版)
20.『戴季陶集』上下巻(上海:三民公司, 1929 年 11 月)
21. 民智書局編『建設碎金』第 1 編-第 2 編(上海:民智書局, 1930 年 8 月第二版)
22. 戴季陶等著, 張振之編『西北[10]』(南京:新亜細亜学会出版科, 1931 年 10 月初版、1932 年 5 月第二版、1933 年 6 月第三版)
23.『関於西北農林教育之所見』(南京:新亜細亜学会, 1934 年 7 月)
24. 軍事新聞社編『当代党国名人講演集』第 2 集(軍事新聞社, 1935 年)
◆影印版:軍事新聞社編『当代党国名人講演集』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊第 82 輯 814, 1972 年 9 月影印)
25. 戴伝賢等撰『党国先進抗戦言論続集』(重慶:独立出版社, 1940 年)
26. 戴季陶講演, 王貽非選編『三民主義講演集』(泰和:江西省三民主義文化運動委員会, 1941 年 12 月)
27.『学礼録』(重慶:正中書局, 1945 年 5 月)[11]
28. 中国童子軍総会編『戴季陶先生与童子軍教育』(台北:華国出版社, 1952 年 2 月)
29. 陳天錫編『戴季陶先生文存』第 1 冊-第 4 冊(台北:中国国民党中央委員会, 1959 年 3 月)
◆原典:『孝園文稿』第 1 冊-第 35 冊(中国国民党中央委員会党史委員会所蔵)
30. 中国国民党中央党史史料編纂委員会編『革命先烈先進闡揚国父思想論文集』(台北:中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会, 1965 年 11 月)

---

[5]「戴季陶君対国民運動之談話」(上海『民国日報』1925 年 7 月 3 日付)によると、1925 年 7 月初にはすでに出版されていたことが分かる。
[6]05. の修訂版にあたる。
[7]戴季陶は 1925 年 7 月中旬、上海の民智書局から『季陶小文集』を出版する予定であった。しかし、管見の限り、この名前の書籍は研究機関の資料目録や研究論文に見当たらない。実際に出版されたか否かは不詳である。前掲「戴季陶著作出版」によると、約 10 万字からなる文学の小作品集とある。
[8]戴季陶は 1925 年 7 月末、上海の民智書局から『季陶論文集』を出版する予定であった。しかし、管見の限り、この名前の書籍は研究機関の資料目録や研究論文に見当たらない。実際に出版されたか否かは不詳である。前掲「戴季陶著作出版」によると、約 20 万字からなる法律、政治、経済、哲学の長編論文集とある。
[9]1927 年 6 月初版か。
[10]別名は「西北之実況与其開発」。
[11]「重慶:戴伝賢自印, 1944 年版」は未見。

31. 中国国民党中央党史史料編纂委員会編『革命先烈先進詩文選集』第4冊「戴伝賢選集」(台北:中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会, 1965年11月)
32. 戴季陶等『孫文主義論集』(台北:文星書店, 1965年11月)
33. 陳天錫編『戴季陶先生文存続編』(台北:中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会, 1967年5月)
34. 陳天錫編『戴季陶先生文存再続編』上下冊(台北:台湾商務印書館, 1968年5月)
35. 陳天錫編『戴季陶先生文存三続編』(台北:中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会, 1971年10月)
36. 杜元載主編『戴季陶先生墨蹟』(台北:中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会, 1972年3月)
37. 釈東初編『戴季陶先生仏学論集』(台北:中華仏教文化館, 1972年8月)
38. 『太虚大師暨戴季陶居士護国衛教言論選集』(台北:福峰〈*中華仏教居士会?〉, 1979年)
39. 広東革命歴史博物館編『黄埔軍校史料(1924-1927)』(広州:広東人民出版社, 1982年2月初版、1985年5月第二版、1994年5月第三版)
40. 中国人民大学中共党史系中国近現代政治思想史教研室編『戴季陶主義資料選編』(北京:中国人民大学中共党史系, 1983年1月)
41. 考試院考銓叢書指導委員会主編『戴季陶先生与考銓制度』(台北:正中書局, 1984年7月)
42. 南京市档案館・中山陵園管理処編『中山陵档案史料選編』(南京:江蘇古籍出版社, 1986年9月)
43. 朱匯森主編『戴伝賢与現代中国』(新店:国史館, 1989年1月)
44. 唐文権・桑兵編『戴季陶集(1909-1920)』(武漢:華中師範大学出版社, 1990年7月)
45. 桑兵・黄毅・唐文権編『戴季陶辛亥文集(1909-1913)』上下冊(香港:中文大学出版社, 1991年)
46. 中国蔵学研究中心・中国第二歴史档案館編『九世班禅円寂致祭和十世班禅転世座床档案選編』(北京:中国蔵学出版社, 1991年1月)
47. 中国蔵学研究中心・中国第二歴史档案館編『十三世達頼円寂致祭和十四世達頼転世座床档案選編』(北京:中国蔵学出版社, 1991年1月)
48. 中国第二歴史档案館・中国蔵学研究中心編『九世班禅内地活動及返蔵受阻档案選編』(北京:中国蔵学出版社, 1992年8月)
49. 上海市档案館編『旧上海的証券交易所』(上海:上海古籍出版社, 1992年12月)
50. 「戴伝賢奉命前往甘孜致祭班禅経過報告及康行日記」(中国第二歴史档案館・中国蔵学研究中心編『黄慕松呉忠信趙守鈺戴伝賢奉使辦理蔵事報告書』(北京:中国蔵学出版社, 1993年4月))
51. 『戴季陶文存〈*戴季陶先生的文存〉』(中国革命書店, 出版年月不詳[12])

(年譜)

【日本語】

「戴季陶略年譜」(戴季陶『日本論』市川宏訳(東京:社会思想社, 1972年3月初版、1983年2月文庫版))
「戴季陶略歴」(戴季陶『孫文主義の哲学的基礎』中山志郎(山本秀夫)訳(東京:生活社, 1939年10月))
「戴天仇氏略歴」(戴天仇『日本論』森豊太訳(東京:官界情報社, 1940年11月版、1941年2月版、1941年7月版))

【漢語】

陳天錫編「戴季陶先生年譜」(台北:中華日報社, 1951年2月)
――『戴季陶先生編年伝記』(台北:中華叢書委員会, 1958年5月)
――『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊続編第43輯421, 1977年6月影印)
「戴伝賢先生年譜簡表」(前掲『戴伝賢与現代中国』)

[12]1928年11月19日までに書かれた著作を収めている。

B　そのほか

(著作集・日記)

【日本語】

伊地智善継・山口一郎監修『孫文選集』第1巻、第3巻(東京:社会思想社, 1985年5月、1989年6月)
尾崎宏次編『秋田雨雀日記』第2巻(東京:未来社, 1965年11月)
(萱野長知著,)久保田文次編「孫文病床からの萱野長知書簡――玄洋社所蔵書簡二通」(東京『辛亥革命研究』第8号, 1988年12月)
渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第 39 巻、別巻第二　日記(二)他(東京:渋沢青淵記念財団竜門社, 1961年9月、1966年11月)
(孫文)『全訳三民主義』沈観鼎訳(上海:中国国民党中央執行委員会宣伝部, 1930年8月)
(孫文)『孫文全集』外務省調査局訳, 第3巻(東京:第一公論社, 1940年8月)
中下正治「山田純三郎宛の書簡――孫文関係・未公開資料」(東京『東洋大学中国哲学文学科紀要』創刊号, 1993年3月)
原奎一郎編『原敬日記』第4巻、第7巻(東京:乾元社, 1951年6月)
原敬文書研究会編『原敬関係文書』第1巻・書翰篇一、第3巻・書翰篇三、第10巻・書類篇七(東京:日本放送出版協会, 1984年6月、1985年、1988年11月)
宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第1巻、第2巻、第4巻、第5巻(東京:平凡社, 1971年7月、12月、1973年11月、1976年8月)
『山本条太郎　論策二』(東京:山本条太郎翁伝記編纂会, 1939年8月)
『吉野作造選集』第7巻、第14巻、第15巻、別巻(東京:岩波書店, 1995年8月、1996年5月、1996年10月、1997年3月)
(魯迅)「天上と天下」(『偽自由書』より, 近藤龍哉訳, 1933年5月16日付、19日付)、家幹「分からないもの二つ――【分かる論の分析】役人口調だけ」(『偽自由書』より, 佐治俊彦訳, 1933年7月19日付)、「九一八」(『南腔北調集』より, 竹内実訳, 1933年)、「楊霽雲宛」(竹内実訳, 1934年4月24日付)、「実行の困難と懐疑」(『且介亭雑文』より, 今村与志雄訳, 1934年7月1日付)(『魯迅全集』6、7、8、15(東京:学習研究社, 1985年4月、1986年5月、1984年11月、1985年8月))

【漢語】

昂孫「送季陶遊歴南洋羣島序」(『民権素』第2集, 1914年7月)
北京師範大学・上海市档案館編『蒋作賓日記』(南京:江蘇古籍出版社, 1990年10月)
惨仏「贈天仇」(『民権素』第8集, 1915年7月)
(陳幹)「贈戴天仇」(陳雋・佟立容編『陳幹集』(香港:天馬図書, 2001年10月))
陳三井・居蜜主編『居正先生全集』中冊(台北:中央研究院近代史研究所, 1999年6月)
陳旭麓・郝盛潮主編『孫中山集外集』(上海:上海人民出版社, 1990年7月)
丁士源「梅楞章京筆記」(栄孟源ほか主編『近代稗海』第1輯(成都:四川人民出版社, 1985年8月))
段雲章・倪俊明編『陳炯明集』上下巻(広州:中山大学出版社, 1998年9月)
顧頡剛「戴家斉君伝」1941年12月2日付(重慶『中国辺疆』第1巻第3・4合期, 1942年4月)
耿云志主編『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊(合肥:黄山書社, 1994年12月)
海巫亜公編, 時希聖校訂『革命偉人書牘菁華』(上海:中央書店, 1927年10月)
郝盛潮主編『孫中山集外集補編』(上海:上海人民出版社, 1994年7月)
黄彦・李伯新選編『孫中山蔵档選編(辛亥革命前後)』(北京:中華書局, 1986年9月)
剣慧「送希(季)陶」(『民権素』第3集, 1914年9月)

蒋用宏・劉覚民編『政治講演集』(南京:中国国民党中央政治学校附設西康学生特別訓練班, 1931 年 4 月)
柳宗潔編『革命紀念日名人講演集』(上海:世界書局, 出版年月不詳)
羅福恵・蕭怡編『居正文集』下冊(武漢:華中師範大学出版社, 1989 年 10 月)
「羅家倫先生日記(1928 年 1 月-2 月)」(台北『近代中国』第 129 期, 1999 年 2 月)
(羅家倫)「致戴伝賢(季陶)函」1930 年 11 月 14 日(中国国民党中央委員会党史委員会編『羅家倫先生文存補編』(台北:近代中国出版社, 1999 年 12 月))
羅易(M.N.Roy)「注意領導人」1927 年 3 月 9 日(Robert C.North and Xenia J.Eudin『羅易赴華使命　一九二七年的国共分裂』王淇・楊雲若・朱菊卿訳(北京:中国人民大学出版社, 1981 年 4 月))
梅蒐編『魯魯文存』第 3 集(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊三編第 3 輯 23, 1985 年 6 月影印)
秦孝儀主編『国父全集』第 1 冊-第 12 冊(台北:近代中国出版社, 1989 年 11 月)
三民公司編『孫中山評論集』(上海:三民出版部, 1925 年 6 月)
邵元冲『邵元冲日記』王仰清・許映湖標注(上海:上海人民出版社, 1990 年 10 月)
「邵元冲日記――1926 年 1 月至 7 月」上下(南京『民国档案』1986 年第 1 期-第 2 期)
孫中山先生治喪委員会編『哀思録』出版年月不詳
太虚大師講『仏説十善業道経講要(附戴季陶先生仏教信徒報恩弘法要従尋常的十善道做起)』寛道法師・夏献章居士印送(上海:済公印書館, 1937 年 5(?)月)
唐文権主編『雷鉄崖集』(武漢:華中師範大学出版社, 1986 年 7 月)
天仇母「哭小軒夫子」(『民権素』第 1 集, 1914 年 4 月)
天嬰「贈戴季陶」(『民権素』第 9 集, 1915 年 8 月)
呉梅東編『蔡元培文集』巻 11・書信(中)、巻 12・書信(下)(台北:錦繍出版, 1995 年 5 月)
呉拯寰編校『孫中山全集続集』第 4 集(上海:三民公司, 1928 年 10 月)
(伍特公)「上海商団光復上海紀略(選録)――伍特公遺稿」1947 年(上海社会科学院歴史研究所編『辛亥革命在上海史料選輯』(上海:上海人民出版社, 1966 年 2 月))
袁南生『近現代名人名聯品鑒』(北京:人民日報出版社, 1997 年 1 月)
睨観(趙素昂)「贈天仇」(『民権素』第 1 集, 1914 年 4 月)
中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『胡適来往書信選』(香港:中華書局香港分局, 1983 年 11 月)
中山大学歴史系孫中山研究室ほか編『孫中山全集』第 5 巻、第 9 巻(北京:中華書局, 1985 年 4 月 1986 年 4 月)
中央陸軍軍官学校政訓処編輯委員会編『政治講演集』(南京:中央陸軍軍官学校政訓処, 1929 年 6 月)
朱剣芒編, 王景山校『最新党国名人公牘類編』(上海:中央書店, 1936 年 8 月第四版)

【英語】
The Collected Works of Mahatma Gandhi (LXXIII) (New Delhi:The Publications Division, April 1978)
Selected Works of Jawaharlal Nehru (Vol. 11) (Vol. 12) (Vol. 13) (Vol. 15) (B.R.Publishing Corporation, 1978、1979、1980、1982)
Selected Works of Jawaharlal Nehru (Second Series) Vol. 5、*Vol. 7* (Oxford University Press, 1987、1988)

(年譜)

【漢語】
岑学呂編『民国虚雲和尚年譜』(台北:台湾商務印書館, 1982 年 5 月)
曹述敬『銭玄同年譜』(済南:斉魯書社, 1986 年 8 月)
陳福霖・余炎光『廖仲愷年譜』(長沙:湖南出版社, 1991 年 9 月)
陳錫祺主編『孫中山年譜長編』上下冊(北京:中華書局, 1991 年 8 月)
陳興唐主編『中国国民党大事典』(北京:中国華僑出版社, 1993 年 12 月)

丹珠昂奔主編『歴輩達頼喇嘛与班禅額爾徳尼年譜』(北京:中央民族大学出版社, 1998 年 2 月)
段雲章編『孫文与日本史事編年』(広州:広東人民出版社, 1996 年 10 月)
――・沈暁敏編『孫文与陳炯明史事編年』(広州:広東人民出版社, 2003 年 10 月)
郭廷以編『中華民国史事日誌』第 2 冊(台北:中央研究院近代史研究所, 1984 年 4 月)
郭卿友主編『中華民国時期軍政職官誌』上下(蘭州:甘粛人民出版社, 1990 年 12 月)
何仲簫編『陳英士先生年譜』(上海:中国文化服務社, 1946 年 4 月)
胡頌平『朱家驊先生年譜』(台北:伝記文学出版社, 1985 年 9 月)
林献堂先生紀念集編纂委員会編『林献堂先生紀念集』巻一・年譜(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊続編第 10 輯, 1974 年 12 月影印)
劉寿林・万仁元・王玉文・孔慶泰編『民国職官年表』(北京:中華書局, 1995 年 8 月)
劉維開編『羅家倫先生年譜』(台北:中国国民党中央委員会党史委員会, 1996 年 12 月)
羅家倫・黄季陸主編, 秦孝儀・李雲漢増訂『国父年譜』第 4 次増訂本上下冊(台北:中国国民党中央委員会党史委員会, 1994 年 11 月)
(栄徳生)「楽農自訂行年紀事続編」、「栄徳生生平事業年表」(上海大学・江南大学《楽農史料選編》整理研究小組編『栄徳生文集』(上海:上海古籍出版社, 2002 年 7 月)
湯志鈞主編『近代上海大事記』(上海:上海辞書出版社, 1989 年 5 月)
徐詠平編『民国陳英士先生其美年譜』(台北:台湾商務印書館, 1980 年 5 月)
張朋園・沈懐玉編『国民政府職官年表(1925-1949)』第 1 冊(台北:中央研究院近代史研究所, 1987 年 6 月)
中国第二歴史档案館編『蒋介石年譜初稿』(北京:档案出版社, 1992 年 12 月)
中国科学院近代史研究所中華民国史組編『中国近代尊孔逆流史事紀年』下篇 1919-1949(北京:中華書局, 1974 年 12 月)
中華民国史事紀要編輯委員会編『中華民国史事紀要――中華民国 16 年(1927)1 至 6 月』(台北:中華民国史料研究中心, 1977 年 4 月)
中華民国外交部档案資訊処編『中国外交機関歴任首長銜名年表』増訂本(台北:台湾商務印書館, 1988 年 6 月)
――編『中国駐外各公、大使館歴任館長銜名年表』増訂本(台北:台湾商務印書館, 1989 年 6 月)

(回想録・訪問記録)

【日本語】

犬養道子『花々と星々と』増補版(東京:中央公論社, 1974 年 6 月)
(顧頡剛)「私はどうやって『古史辨』を編著したか」小倉芳彦訳(小倉芳彦『抗日戦下の中国知識人――顧頡剛と日本』(東京:筑摩書房, 1987 年 5 月))
沢村幸夫「孫文送迎私記」(東京『支那』1937 年 8 月)。
陳潔如『蒋介石に棄てられた女』加藤正敏訳(東京:草思社, 1996 年 4 月)
山上正義「ボロヂン・磯谷・和知――広東コンミユンの頃の思ひ出」(東京『改造』1938 年 12 月)
山本秀夫, 聞き手:山口一郎「私の三民主義研究」(神戸『孫文研究』第 5 号, 1986 年 8 月)

【漢語】

包恵僧『包恵僧回憶録』(北京:人民出版社, 1983 年 6 月)
陳布雷『陳布雷回憶録』(台北:王家出版社, 1989 年 10 月)
陳立夫『成敗之鑑――陳立夫回憶録』(台北:正中書局, 1994 年 6 月)
◆日本語訳:『成敗之鑑――陳立夫回想録』上下巻, 松田州二訳, 保坂正康解説(東京:原書房, 1997 年 7 月)
陳強立「格桑沢仁、諾那、劉家駒」(『四川文史資料選輯』第 27 輯, 1982 年 10 月)
陳天錫『遅荘回憶録』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊続編第 3 輯 24-27, 1974 年 6 月影印)

程天放「従莱因区域到法比――使徳回憶之五」(台北『伝記文学』第3巻第6期-第4巻第1期, 1963年12月-1964年1月)
――「徳国的華僑和留学生――使徳回憶之二十一」(台北『伝記文学』第8巻第3期, 1966年3月)
――「第十一届世界運動会――使徳回憶之六」(台北『伝記文学』第4巻第2期-第3期, 1964年2月-3月)
鄧家彦「国父遊普陀山述異」1953年10月(郭廷以ほか訪問, 謝文孫ほか紀録, 郭廷以ほか校閲『鄧家彦先生訪問紀録』(台北:中央研究院近代史研究所, 1990年6月))
董竹君『我的一個世紀』(北京:生活・読書・新知三聯書店, 1997年9月)
◆日本語訳:『大河奔流――革命と戦争と。一世紀の生涯』上下巻, 加藤優子訳(東京:講談社, 2000年12月)
(顧維鈞)『顧維鈞回憶録』中国社会科学院近代史研究所訳, 第1分冊、第2分冊、第5分冊、第7分冊、第8分冊(北京:中華書局, 1983年5月、1985年2月、1987年2月、1988年2月、1989年3月)
黄恵龍叙述, 陳鉄生潤辞『中山先生親征録』(上海:商務印書館, 1930年8月)
金紹先・蕭漢澄・胡慶啓・何会源「国民党文官考試的内幕」(北京『文史資料選輯』総第136輯, 1999年6月)
林増華「“五四”運動後至大革命時期広州学生運動中的左右派闘争」1966年6月(広州『広東文史資料』第24輯, 1979年9月)
陸丹林「蒋介石、張静江等做交易所経紀的物証」(北京『文史資料選輯』第49輯, 1964年7月)
倪維熊「《浙江新潮》的回憶」(中国社会科学院近代史研究所編『五四運動回憶録』(北京:中国社会科学出版社, 1979年3月))
沈亦雲『亦雲回憶』(台北:伝記文学出版社, 1968年4月)
汪士淳『千山独行――蒋緯国的人生之旅』(台北:天下文化出版公司, 1996年8月)
汪振国「国民党時期的文官制度与文官考試」(南京『江蘇文史資料』第24輯, 1988年12月)
◆転載:「国民党統治時期的文官制度与文官考試」(前掲『文史資料選輯』総第136輯)
王聿均訪問, 謝文孫紀録, 郭廷以校閲『莫紀彭先生訪問紀録』(台北:中央研究院近代史研究所, 1997年6月)
魏伯楨「上海証券物品交易所与蒋介石」(前掲『文史資料選輯』第49輯)
夏衍『懶尋旧夢録』(北京:生活・読書・新知三聯書店, 1985年7月)
◆日本語訳:『日本回憶――夏衍自伝』阿部幸夫訳(東京:東方書店, 1987年3月)
謝鋳陳(謝健)『謝鋳陳回憶録』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊第91輯909, 1973年5月影印)
徐彬如『六十年歴史風雲紀実』(北京:中国文聯出版社, 1991年8月)
張国燾『我的回憶』第1冊-第2冊(北京:東方出版社, 1998年1月)
張朋園ほか訪問, 陳三井紀録『袁同疇先生訪問紀録』(台北:中央研究院近代史研究所, 1988年6月)
張天放・濮清泉「国民党東京支部的左右派闘争」1975年5月(北京『文史資料選輯』第60輯, 1979年4月)
張治中『我与共産党』(北京:文史資料出版社, 1980年8月)
中国人民政治協商会議江蘇省委員会文史資料研究委員会編『在中山先生身辺的日子里』(南京:江蘇古籍出版社, 1986年9月)
鄒魯『回顧録』1943年10月1日序(長沙:岳麓書社, 2000年9月更新版)

Ⅱ　専著・論文・評伝

A　戴季陶に関するもの

【日本語】

赤松克麿「戴天仇の印象其他」(東京『経済往来』一周年記念倍大号, 1927年)
葦津珍彦「戴季陶『日本論』を読んで――書いてないことの意味を」(東京『中国』第64号, 1969年3月)
安藤文郎「再梓に序して」1938年6月10日(戴天仇『日本論』安藤文郎訳(東京:八洲書房, 1938年6月))

——「訳者序」1934 年 2 月(戴天仇『戴天仇・日本論』安藤文郎訳(東京:章華社, 1934 年 3 月版、1939 年 3 月版))
今村与志雄・小松茂夫・関寛治・竹内好・橋川文三・山口一郎「座談会　日本外交の岐路——戴季陶『日本論』をめぐって」(東京『中国』第 62 号, 1969 年 1 月)
市井三郎「戴季陶『日本論』を読んで——歴史と人生のパラドックス」(東京『中国』第 64 号, 1969 年 3 月)
色川大吉「戴季陶『日本論』を読んで——民族再生の痛切な叫び」(東京『中国』第 64 号, 1969 年 3 月)
岡田英弘「中国人はなぜ日本に無関心なのか——戴季陶の『日本論』」(東京『中央公論』第 1117 号, 1980 年 3 月)
華山生(茅原華山)「戴天仇来」(東京『内観』第 85 号, 1927 年 4 月 1 日付)
北河征四郎「中国国民党「新右派」理論形成の前提——戴季陶を中心に(五・四時期～一全大会)」(愛知教育大学『歴史研究』第 17 号, 1970 年 3 月)
久米茂「わが勘、的中す——「日本論」を読んで」(東京『中国』第 62 号, 1969 年 1 月)
小杉修二「戴季陶主義の一考察——蒋介石政権成立の思想的前提」(東京『歴史評論』第 279 号, 1973 年 8 月)
嵯峨隆「国民革命時期における戴季陶の対外観について」(東京『近きに在りて』第 33 号, 1998 年 5 月)
——「国民革命時期における戴季陶の対日観について——『日本論』の再検討を通して」(慶應義塾大学『法学研究』第 75 巻第 1 号, 2002 年 1 月)
——「五四時期における戴季陶の対日観について——社会主義認識との関連で」(東京『東洋学報』第 82 巻第 2 号, 2000 年 9 月)
——『戴季陶の対日観と中国革命』(東京:東方書店, 2003 年 7 月)
——「満州事変の中での戴季陶——その対外観と現実との接点」(静岡県立大学『国際関係・比較文化研究』第 2 巻第 1 号, 2003 年 9 月)
佐々木英昭「戴季陶『日本論』」(佐伯彰一・芳賀徹編『外国人による日本論の名著』(東京:中央公論社, 1987 年 3 月))
——「戴季陶『日本論』——日本的美徳への畏敬と失望」(東京『国文学　解釈と観賞』第 768 号, 1995 年 5 月)
下畝生(下畝栄吉)「日本論・序」(北平『北京週報』第 328 号, 1928 年 12 月 2 日付)
鈴木正吾「戴天仇氏に寄す」1927 年 3 月 17 日(東京『内観』第 86 号, 1927 年 5 月 1 日付)
関口勝「五四期における戴季陶の思想について」(武蔵野『亜細亜大学教養部紀要』第 50 号, 1994 年 11 月)
◆漢語訳:「戴季陶与《星期評論》雑誌」(台北『近代中国』第 128 期, 1998 年 12 月)
——「戴季陶逸事」(武蔵野『亜細亜大学教養部紀要』第 56 号, 1997 年 11 月)
——「戴季陶と中山大学についての一考察」(武蔵野『亜細亜大学教養部紀要』第 53 号, 1996 年 6 月)
◆漢語訳:「戴季陶先生主持中山大学之前後」(台北『近代中国』第 116 期, 1996 年 12 月)
——「戴季陶について——魯迅と中山大学」(『アジアの文化、特に思想・宗教・言語の多様性の研究』(武蔵野:亜細亜大学アジア研究所, 2003 年 3 月))
——「戴季陶の思想転換の動機とその時代背景について」(武蔵野『亜細亜大学教養部紀要』第 51 号, 1995 年 6 月)
——「戴季陶の「孫文主義」解釈を繞って」(武蔵野『亜細亜大学教養部紀要』第 52 号, 1995 年 11 月)
関戸嘉光「戴季陶『日本論』を読んで——私の答案」(東京『中国』第 65 号, 1969 年 4 月)
蘇徳昌「中国人の日本観——戴季陶」(『奈良大学紀要』第 31 号, 2003 年 3 月)
「戴季陶の筆蹟」(東京『中国』第 62 号, 1969 年 1 月)
髙綱博文「戴季陶の「共和思想」」(松村潤先生古稀記念論文集編纂委員会編『清代史論叢』(東京:汲古書院, 1994 年 3 月))
(竹内好)「戴季陶の日本論・はじめに」(東京『中国』第 56 号, 1968 年 7 月)
——「中国と日本の歴史——戴季陶の『日本論』」(東京『草の実』第 143 号, 1969 年 4 月)
——「わが痛憤の記——戴季陶の『日本論』と日中友好への道」(東京『潮』1969 年 4 月号)
◆転載:「戴季陶の『日本論』」(前掲市川宏訳『日本論』)

張玉萍「辛亥期における戴季陶の日本認識(1909-1912年)」(東京『中国研究月報』第610号, 1998年12月)
――「戴季陶の日本観の研究」(東京大学大学院総合文化研究科博士論文, 2001年)
――「討袁運動期における戴季陶の日本認識(1913-1916年)」(梅屋庄吉関係資料研究会編『近代日中関係史研究の課題と方法「梅屋庄吉とその時代」報告集』1999年3月)
――「討袁運動期における戴季陶の日本認識(1913-1916年)」(東京『近きに在りて』第36号, 1999年12月)
趙軍「武器としての日本論――『日本論』から見た戴季陶の日本観」(趙軍『大アジア主義と中国』(東京:亜紀書房, 1997年3月))
陳舜臣「揺れうごいた熱狂家・戴天仇」(陳舜臣『中国近代史ノート』(東京:朝日新聞社, 1976年10月))
築島謙三「戴天仇『日本論』」(築島謙三『「日本人論」の中の日本人』(東京:大日本図書, 1984年11月))
◆更新版:東京:講談社, 2000年10月
董世奎「戴季陶『日本論』の構造および文体」(東京『中国研究月報』第670号, 2003年12月)
中島及「高知での戴季陶」(東京『中国』第63号, 1969年2月)
――「戴季陶のこと二つ」(東京『中国』第67号, 1969年6月)
白川生(西本省三)「戴天仇の渡日」(上海『上海』第719号, 1927年2月21日付)
萩原延寿「中国人のなかの明治維新――戴季陶『日本論』」(東京『文藝春秋』第50巻第11号, 1972年9月)
◆転載:萩原延寿『書書周游』(東京:文藝春秋社, 1973年9月)
◆転載:東京:朝日新聞社, 1981年8月
深町英夫「中国人の民族意識と日本――戴季陶の『日本論』」(東京外国語大学『歴史と未来』第20号, 1994年)
藤島健一「解題」1946年1月(戴天仇『日本論』藤島健一訳(東京:世界思潮社, 1946年10月版、1946年11月版))
松田道雄「戴季陶『日本論』を読んで――私たちの罪はふかい」(東京『中国』第64号, 1969年3月)
村上一郎「戴季陶『日本論』を読んで――哀しいかな海上の三山」(東京『中国』第65号, 1969年4月)
望月敏弘「五・四時期における戴季陶の政治主張に関する一考察」(小平『嘉悦女子短期大学研究論集』第29巻第2号, 1986年12月)
――「戴季陶の初期日本認識について――辛亥革命前後から日本亡命時期を中心に」(小島朋之・家近亮子編『歴史の中の中国政治――近代と現代』(東京:勁草書房, 1999年7月))
森豊太「訳者序」1940年9月28日(前掲森豊太訳『日本論』)
森昌明「中国民族独立を祈願する警世の書――『日本論』」(東京『潮』第154号, 1972年6月)
森永優子「近代中国の対日観――戴季陶の『日本論』と戴季陶主義に関する一考察」(早稲田大学『史観』第93冊, 1976年3月)
諸橋轍次「『戴天仇・日本論』を読む」(前掲安藤文郎訳『戴天仇・日本論』)
安井三吉「孫文の講演「大アジア主義」と戴天仇」(日本孫文研究会編『孫文とアジア』(東京:汲古書院, 1993年6月))
◆漢語訳:「孫中山《大亜洲主義》(演講)与戴天仇」(広東省孫中山研究会編『“孫中山与亜洲”国際学術討論会論文集』(広州:中山大学出版社, 1994年10月))
中山志郎(山本秀夫)「はしがき」(前掲中山志郎訳『孫文主義の哲学的基礎』)
兪慰剛「抗日戦争期における戴季陶の日本観について」(東京『東瀛求索』第10号, 1999年3月)
――「孫文の日本観・アジア観と戴季陶」(新潟大学『現代社会文化研究』第6号, 1996年11月)
――「戴季陶と日本」(東京『東瀛求索』第8号, 1996年8月)
――「戴季陶の日本人論――『日本論』を中心にして」(新潟大学『現代社会文化研究』第7号, 1997年2月)
――「戴季陶『日本論』の研究」(新潟大学大学院現代社会文化研究科博士論文, 1997年11月)
――「戴季陶「わが日本観」から『日本論』へ」(新潟大学『環日本海研究年報』第3号, 1996年3月)
――「中国人の武士道論――戴季陶の『日本論』を中心にして」(『埼玉大学紀要(教養学部)』第34巻第2号, 1998年)

湯本国穂「五四運動状況と戴季陶の思想」(東京『現代中国』第61号, 1987年6月)
――「五四運動状況における戴季陶――「時代」の方向と中国の進む道」(『千葉大学教養部研究報告』B-19, 1986年11月)
――「戴季陶」(佐藤慎一編『近代中国の思索者たち』(東京:大修館書店, 1998年12月))
劉迪「戴季陶の連邦主義思想について」(早稲田大学大学院『法研論集』第94号, 2000年6月)

【漢語】
朱伝誉主編『戴季陶伝記資料』1-5(天一出版社, 1979年11月)
※『資料』1-5に収められた専著・論文・評伝には、末尾にそれぞれ「(→①)」から「(→⑤)」までを施す。
――主編『戴季陶伝記資料』6(天一出版社, 1981年1月)
※『資料』6に収められた専著・論文・評伝には、末尾に「(→⑥)」を施す。
――主編『戴季陶伝記資料』7(天一出版社, 1985年)
※『資料』7に収められた専著・論文・評伝には、末尾に「(→⑦)」を施す。

安懐音「戴季陶先生的三不朽」(『革命思想月刊』第9巻第3期, 1960年9月)(→②)
蔡鳴琦「火焼戴季陶汽車」(『宝鶏文史資料』第4輯, 1986年4月)
蔡尚思「戴季陶的礼教道統説」1946年4月(蔡尚思『中国近現代学術思想史論』(広州:広東人民出版社, 1986年12月))
――「死聖人与活人民孰重」1931年(前掲『中国近現代学術思想史論』)
蔡運辰「戴季陶先生仏学論集序」1972年仲春(前掲『戴季陶先生仏学論集』)
陳伯中「戴季陶校長与国立中山大学」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
陳長栄「戴伝賢与中国国民党改組」(台北:中国文化学院歴史研究所碩士論文, 1977年)(→④部分)
陳大絡「戴伝賢的言行」1971年7月15日(台北『春秋』第19巻第2期)(→②)
陳大斉「陳跋」(前掲『戴季陶先生文存』第4冊)
――「戴季陶先生治事的一条基本原則」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
◆転載:前掲『戴季陶先生与考銓制度』
――「戴季陶先生与考試」(中国国民党中央党史史料編纂委員会編『革命先烈先進伝』(台北:中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会, 1965年11月))
◆転載:前掲『戴季陶先生文存三続編』
◆転載:中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会編『革命人物誌』第8集, 1971年12月(→①)
◆転載:前掲『戴季陶先生与考銓制度』
――「戴季陶先生与考試掄才」(台北『芸文誌』第209期, 1983年2月)(→⑦)
独秀(陳独秀)「給戴季陶的一封信」1925年8月30日(『嚮導週報』第129期-第130期, 1925年9月11日付、18日付)
◆転載:嚮導週報社編『反戴季陶的国民革命観(一)』(嚮導週報社, 1925年9月)
実(陳独秀)「戴季陶与反共産派運動」(『嚮導週報』第129期, 1925年9月11日付)
――「戴季陶之道不孤矣」(『嚮導週報』第134期, 1925年10月30日付)
――「戴天仇其奈日本人的一定範疇何!」(『嚮導週報』第189期, 1927年2月28日付)
――「戴天仇願意出売工人嗎?」(『嚮導週報』第192期, 1927年3月18日付)
――「康有為章士釗戴季陶」(『嚮導週報』第131期, 1925年9月25日付)
――「這就是戴季陶所謂「仁愛」之言」(『嚮導週報』第148期, 1926年4月3日付)
陳固亭「戴季陶致大養毅書――中日関係史上一段珍貴的史料」(台北『中央日報』1966年8月12日付)
◆転載:台北『中国一周』第854期, 1966年9月5日付

陳桂華「中華民国人事行政之父――戴季陶先生」（前掲『戴伝賢与現代中国』）
陳立夫「我之所知於戴先生者」1970 年 11 月 10 日（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
◆転載：前掲『戴季陶先生与考銓制度』
陳立台「戴季陶早年的革命言論与活動（1910-1915）」（台北：国立政治大学歴史研究所碩士論文，1980 年 6 月）
陳強立「戴季陶赴康致祭九世班禅瑣記」（『雅安文史資料選輯』第 1 輯，1985 年 1 月）
陳天錫「戴伝賢先生伝略（1890-1949）」（大陸雑誌社編『中国近代学人象伝』初輯（台北：大陸雑誌社，1971 年 9 月）（→①）
◆影印：台北：文海出版社・近代中国史料叢刊三編第 1 輯 9，1985 年 6 月
◆更新版：揚州：江蘇広陵古籍刻印社，1997 年 8 月
――『戴季陶先生的生平』（台北：台湾商務印書館，1968 年 5 月）
――「戴季陶先生文存三続編序」1971 年 2 月（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
――「戴季陶先生文存序」1957 年 3 月 1 日（前掲『戴季陶先生文存』第 1 冊）
――「戴任考試各案在事員名録編輯概述」、「戴任考試各案在事員名録」甲乙類、「戴任委託考試各案辦理概況」（前掲『戴季陶（伝賢）先生編年伝記』）
――「謹按」1962 年 1 月 7 日（前掲『革命先烈先進詩文選集』）
――「孝園先生富有人情味之我見」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
――「孝園先生遺風余韵永繋思存」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
――「序言」1962 年 6 月、1965 年 12 月（前掲『戴季陶先生文存続編』）（→⑤）
――「有関戴季陶先生著述及拙著出版経過」1968 年 5 月（台北『東方雑誌』復刊第 2 巻第 1 期，1968 年 7 月）（→②）
陳協中「仁者之言藹如也――記余与戴先生所親歴之一段経過」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
陳頤「追懐戴伝賢老師」（台北『中外雑誌』第 25 巻第 1 期，1979 年 1 月）（→①）
陳哲三「鄒魯与戴伝賢的交誼及其共同志業」（陳哲三『鄒魯研究初集』（台北：華世出版社，1980 年 2 月））
陳仲経「戴先生建立考試権之宏規与作者之受職奉行」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
◆転載：前掲『戴季陶先生与考銓制度』
陳子堅「戴季陶“訓話”挨打記」（西安『陝西文史資料』第 9 輯，1981 年 4 月）
程天放「季陶先生与対日外交」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
――「序」（前掲『戴季陶先生与童子軍教育』）
春蚕「戴季陶投江遇救」（南京『民国春秋』1991 年第 6 期）
「戴伝賢自殺明志」（程西平編『近代名人奇行逸事』（香港：当代文芸出版社，2000 年））
「戴伝賢伝略」（前掲『黄慕松呉忠信趙守鈺戴伝賢奉使辦理蔵事報告書』）
「戴季陶（1891-1949）――日薄西山，難円“主義”夢」（佟山編『人生苦旅――中外名人自絶探秘』（北京：中国社会出版社，1999 年 5 月））
「戴季陶：進孔廟的画像」（黎頸衡・梁伯祥・陳勤英・劉玉祥等編『黄埔軍校』（広州：広東省地図出版社，1994 年 3 月））
「戴季陶君之談話」（北京『政治生活』第 8 期，1924 年 7 月 13 日付）
「戴季陶信仏」（→②）
「戴季陶主義」（高軍ほか主編『中国現代政治思想評要』（北京：華夏出版社，1990 年 3 月））
戴家秀「戴伝賢先生行述」（新店『国史館館刊』復刊第 3 期，1987 年 12 月）
◆転載：新店『国史館館刊』復刊第 10 期，1991 年 6 月
戴稼毅「戴伝賢隆阜祭祖」（『屯渓文史』1988 年第 2 期）
戴永芳「憶我的四叔戴季陶」（鄭州『名人伝記』1998 年第 1 期）
鄧奇峰「創建考銓制度的功臣――戴伝賢先生」（前掲『戴伝賢与現代中国』）
――「戴先生一生述略」（前掲『戴季陶先生与考銓制度』）

鄧文光「戴季陶与中国共産党」1969年6月15日(鄧文光『現代史攷信録――研究現代史的甘苦(初稿)』(香港:東風出版社,1974年1月))
丁文淵「我所認識的戴季陶先生」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
丁永隆「戴伝賢絶望」(丁永隆・孫宅巍『南京政府的覆亡』(鄭州:河南人民出版社,1987年8月))
東初「戴季陶先生与仏教」(前掲『戴季陶先生仏学論集』)
董磊明「第十六号戦犯――蒋記理論家戴季陶(1890年-1949年)」(董磊明『戦犯沉浮――毛沢東圏定的43名国民党戦犯』(北京:中国検察出版社,1994年11月初版、1998年4月第二版))
董長貴「文武搭档、同舟共済――蒋介石与戴季陶」(程舒偉・雷慶主編『蒋介石的人際世界』(長春:吉林人民出版社,1994年3月))
「読告日本国民書」(北京『順天時報』1919年5月20日付、24日付、27日付)
杜負翁「戴季陶先生疾終考証」(台北『中国一周』第994期,1969年5月12日)(→②)
杜元載「跋」(前掲『戴季陶先生墨蹟』)
段雲章・沈暁敏「宋慶齢和戴季陶――以孫中山革命事業為軸心的左右分趨」(広州『中山大学学報(社会科学版)』1993年第3期)
◆転載:宋慶齢基金会編『宋慶齢学術研討会論文集』(北京:中国和平出版社,1994年11月)
◆転載:「以孫中山革命事業為中心的左右分趨――宋慶齢与戴季陶」(中華人民共和国名誉主席宋慶齢陵園編『宋慶齢与中国名人』(上海:上海人民出版社,1999年9月))
◆転載:「以孫中山革命事業為中心的左右分趨――宋慶齢与戴季陶」(段雲章『孫中山対国内情勢的審視』(広州:中山大学出版社,2001年10月))
「反対戴季陶主義与西山会議派的闘争(背景介紹)」(徳辰主編『光栄与輝煌――中国共産党大典』(北京:紅旗出版社,1996年5月))
◆転載:《二十世紀中国実録》編委会編『二十世紀中国実録』(北京:光明日報社,1997年2月)
范小方・包東波・李娟麗『国民党理論家戴季陶』(鄭州:河南人民出版社,1992年5月初版、1996年10月第二版)
房向東「戴季陶」(房向東『魯迅与他“罵”過的人』(上海:上海書店出版社,1996年12月))
封漢章「戴季陶」(宋春・朱建華主編『中国政党要人伝』(長春:吉林文史出版社,1990年11月))
仏因「戴季陶先生之学仏因縁」(『海潮音』第11巻第9期,1930年9月)
高徳福「戴季陶与戴季陶主義」(天津『歴史教学』1980年第5期)
高軍「戴季陶政治思想的三次転変」(『恵州大学学報(社会科学版)』第20巻第2期,2000年6月)
高熙「批判“戴季陶主義”的戦闘檄文――介紹蕭楚女同志的《国民革命与中国共産党》一書」(北京『党史研究』1982年第4期)
龔杰「戴季陶主義与孔孟之道」(『学習与批判』1974年第6期)
「共産党反対戴季陶主義与西山会議派的経過」(前掲『二十世紀中国実録』)
古有成「翻印的話」1927年6月12日(戴季陶『国民革命与中国国民党』(上海:大東書局,1928年6月))
関口勝「資料《星期評論》雑誌刊載的戴季陶文章篇目」(武蔵野『亜細亜大学教養部紀要』第60号,1999年11月)
広東童子軍全中国徒歩旅行隊「広東童子軍全国歩行隊之路線」(上海『新亜細亜』第2巻第3期「通訊与討論」,1931年6月)
桂崇基「懐念季陶先生」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
郭聖福「五四時期戴季陶対馬克思主義的介紹和研究」(上海『学術学刊』1990年9月号)
韓樹声「考試院故院長戴公語録一斑」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
何瑞瑶「戴伝賢」1942年3月(何瑞瑶『風雲人物小誌』(台北:文海出版社・近代中国史料叢刊第98輯977,1978年1月影印))(→①)
何応欽「序」(前掲『戴季陶先生与童子軍教育』)
賀淵「戴季陶的日本観(1910-1931)」(前掲『近代日中関係史研究の課題と方法「梅屋庄吉とその時代」報告集』)

——「辛亥前戴季陶的政治思想」（中国社会科学院近代史研究所編『中国社会科学院近代史研究所青年学術論壇』1999 年巻(北京:社会科学文献出版社, 2000 年 6 月)）
侯宜嶺「浅析戴季陶対孫中山民生主義的闡割」（『青海師範大学学報(社会科学版)』1987 年第 1 期)
胡春長「戴伝賢先生対三民主義的闡釈及其影響之研究」（台北:中国文化学院政治研究所碩士論文, 1978 年)（→④部分)
胡春恵「戴季陶先生与民初的聯邦主義」（前掲『戴伝賢与現代中国』）
胡漢民「序二」1927 年 1 月 18 日(徳国考茨基『資本論解説』戴季陶訳, 胡漢民補訳(上海:民智書局, 1927 年 10 月))
——「序」（戴季陶『日本論』上海:民智書局, 1928 年 4 月)
◆転載:南京『中央半月刊』第 1 巻第 16 号, 1928 年 2 月 1 日付
◆日本語訳:『日本論』の日本語訳を参照のこと
胡有瑞編「「戴伝賢先生百年誕辰」口述歴史座談会紀実」（台北『近代中国』第 68 期, 1988 年 12 月)
◆転載:高純淑編『百年憶述——先進先賢百年誕辰口述歴史合輯』第 5 冊(台北:近代中国出版社, 1999 年 6 月)
黄福慶「論中国人的日本観——以戴季陶的「日本論」為中心」（台北『中央研究院近代史研究所集刊』第 9 期, 1980 年 7 月)（→⑥)
黄公偉「戴伝賢拒就国史館長」（『中国近代人物逸話初集』全民日報社, 1949 年)（→①)
黄季陸「戴季陶先生与早期反共運動——為戴先生逝世十週年紀念而作」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
——「国父逝世与早期反共思想——介紹戴季陶先生宏揚国父正統思想之貢献」（台北『文芸復興月刊』第 63 期, 1975 年 6 月)
——「懐念戴季陶先生——一個偉大的思想家、国父的門徒、中山大学的校長」（台北『伝記文学』第 6 巻第 2 期, 1965 年 2 月)（→①)
——「序」（前掲『戴季陶先生墨蹟』）
撃「国民党的正統派」（北京『政治生活』第 55 期, 1925 年 10 月 21 日付)
撃「孫中山主義的考茨基」（北京『政治生活』第 55 期, 1925 年 10 月 21 日付)
「結論」（前掲『戴季陶先生与考銓制度』）
競西(黄競西)「今昔之玄廬季陶」（『中国国民』第 17 期, 1926 年 1 月 4 日付)
黄明同・周薇「評戴季陶的仁愛史観」（『中国哲学史研究』1985 年第 2 期)
黄埔建国文集編纂委員会資料室「戴伝賢——党尊先導、政戦宗師」（黄埔建国文集編纂委員会主編『黄埔軍魂』(台北:実践出版社, 1985 年 6 月))
黄貽謀「戴季陶二三事」（北京『文史資料選輯』総第 119 輯, 1989 年 5 月)
賈景徳「国史館館長原任考試院院長戴公墓表(戴伝賢墓表)」（前掲『革命先烈先進伝』）
◆転載:周開慶編『民国四川人物伝記』(台北:台湾商務印書館, 1966 年 3 月)
◆転載:前掲『革命人物誌』第 8 集(→①)
◆転載:台北『近代中国』第 68 期, 1988 年 12 月
◆転載:「戴伝賢先生伝略」（前掲『百年憶述』第 5 冊)
江燦騰「戴季陶仏教蔵書被焚之謎」（台北『中央日報』1988 年 7 月 6 日付)
◆転載:「戴季陶仏教蔵書之謎」（北京『団結報』1988 年 8 月 2 日付)
江東「戴季陶広漢建房記」（北京『団結報』1988 年 11 月 5 日付)
蒋復璁「伝賢精神永在——戴季陶学術思想言行対国家的貢献」（台北『中外雑誌』第 45 巻第 4 期, 1989 年 4 月)
——「戴季陶先生八旬誕辰紀念献辞」（台北『伝記文学』第 18 巻第 2 期, 1971 年 2 月)
◆転載:前掲『戴季陶先生文存三続編』(→②)
蒋君章「戴季陶先生的生平与著述」上中下(台北『伝記文学』第 39 巻第 1 期-第 3 期, 1981 年 7 月-9 月)(→⑦)
——「戴季陶先生与辺疆問題」（台北『中国辺政』第 87 期, 1984 年 9 月)
——「戴季陶先生在国家統一初期的貢献」（台北『中華文化復興月刊』第 18 巻第 2 期, 1985 年 2 月)

——「西山会議与戴季陶先生」(台北『伝記文学』第33巻第2期, 1978年8月)(→①)
蒋緯国「戴伝賢先生——我的親伯」(台北『近代中国』第68期, 1988年12月)
◆転載:「我的親伯戴伝賢」(台北『中外雑誌』第45巻第2期, 1989年2月)
◆転載:中華民国史専題第一届討論会秘書処編『中華民国史専題論文集　第一届討論会』(新店:国史館, 1992年12月)
◆転載:前掲『百年憶述』第5冊
◆転載:前掲『戴伝賢与現代中国』
——「戴伝賢先生之礼学思想」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
蒋武雄「戴伝賢先生対我国辺疆的貢献」(台北『中国辺政』第79期, 1982年9月)(→⑦)
——「戴伝賢先生対我国辺政之貢献」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
蒋永敬「孝園尊者——戴伝賢」(台北『近代中国』第40期, 1984年4月)
◆転載:「戴伝賢」(秦孝儀主編『中華民国名人伝』(台北:近代中国出版社, 1984年11月))
蒋作賓「跋」1934年上巳(前掲安藤文郎訳『戴天仇・日本論』)
金紹先「戴季陶与南京国民政府的高等文官考試」(前掲『江蘇文史資料』第24輯)
金声「戴季陶与南京考試院」(中国人民政治協商会議全国委員会『縦横』第24期, 1987年)
◆転載:『中華文史資料文庫』軍政人物編・第11巻(北京:中国文史出版社, 1996年4月)
荊壷「戴季陶軼事」(南京『民国春秋』1989年第5期)
久客「三殺案」(南京『中央日報』1935年1月1日付)(→⑥)
居正「憶季陶入世観」(前掲『革命先烈先進伝』)
◆転載:前掲『戴季陶先生文存三続編』
◆転載:前掲『革命人物誌』第8集(→①)
孔徳成「序」1989年1月(前掲『戴伝賢与現代中国』)
黎潔華「戴季陶与他的賢妻嬌妾」(南京『民国春秋』1998年第2期)
——「戴季陶在中山大学」(広州『中山大学学報(社会科学版)』1992年第4期)
——「戴季陶早期文化観初探」(広州『中山大学学報(社会科学版)』1997年第6期)
——「論戴季陶的民族主義」(広州『中山大学学報(社会科学版)』2001年第1期)
——・虞葦『戴季陶伝』(広州:広東人民出版社, 2003年6月)
李洪河「論五四時期戴季陶的反帝思想」(哈爾濱師範大学『北方論叢』2001年第6期)
——「五四時期戴季陶的日本観」(『遼寧師範大学学報(社会科学版)』第25巻第2期, 2002年3月)
李娟麗・厳雄飛「抗戦時期戴季陶与中印文化交流」(『山東師大学報(社会科学版)』1998年第3期)
李了空「癸酉夏随太虚上人住廬山大林寺十餘日欲作紀事詩而未果帰於船中依季陶戴先生所拈游字韻補成一律」(『海潮音』第14巻第9期, 1933年9月)
李士珍「十年風雨憶季師」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
李学灯「見戴先生之追憶」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
李翼中「塵座紀歴——為先師国立中山大学校長戴公季陶逝世十周年作」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
李雲漢「反共的先駆——戴季陶先生」(台北『中華文化復興月刊』第11巻第1期, 1978年1月)(→②)
——「戴季陶」(中華文化復興運動総会・王寿南主編『中国歴代思想家』(台北:台湾商務印書館, 1978年初版第10冊、1999年10月更新版第23冊))(→③)
李占才「戴季陶五四時期的労工思想」(『史学月刊』1987年第4期)
——「“理論家”戴季陶的扭曲人生」(余敏輝編『夢断総統府——蒋介石文臣秘録』(北京:団結出版社, 1994年8月))
李朝津「戴季陶対日観的変遷」(胡春恵主編『〈近代中国与亜洲〉学術討論会論文集』上集(香港:珠海書院亜洲研究中心, 1995年6月))

梁寒操「孝園先生八秩冥誕」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
梁鵬「戴季陶」(方克立・王其水主編『二十世紀中国哲学』第2巻・人物誌(北京:華夏出版社, 1994年8月))
廖和永「戴伝賢与西山会議之関係」(台北『復興崗学報』第32期, 1984年12月)
林華平「戴季陶先生之死」(台北『伝記文学』第39巻第1期, 1981年7月)(→⑦)
林競「不空居士与仏教」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
林祥徴「急待進行之西北工賑」(上海『新亜細亜』第2巻第3期「通訊与討論」, 1931年6月)
林遠「我対於戴季陶同志之勗勉和希望」1926年1月28日(『中国国民』第29期, 1926年2月9日付)
林子勛「戴季陶先生之生平及其哲学思想」1977年10月22日(台北『文芸復興月刊』第92期, 1978年5月)(→①)
劉半農「南無阿弥陀仏戴伝賢」1934年5月6日(鮑晶編『劉半農研究資料』(天津:天津人民出版社, 1985年2月))
劉福祥「蒋記理論家戴季陶」(王維礼主編『蒋介石的文臣武将』(鄭州:河南人民出版社, 1989年4月))
劉季洪「劉序」(前掲『戴季陶先生与考銓制度』)
劉利民「近20年来戴季陶研究綜述」(蘭州『甘粛社会科学』2003年第4期)
劉太希「無象庵雑記――戴季陶投江不死之謎」(『暢流』第52巻第9期, 1975年12月)(→⑥)
劉先雲「編輯前言」(前掲『戴季陶先生与考銓制度』)
劉友于「戴季陶亡命前後」(北京『団結報』1995年4月12日付)
劉禹輪「従季師民族思想談到当然民族精神教育問題」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
劉贍漢「雲公印贈戴書孝経敬賦」(戴季陶書『戴季陶先生手書孝経』1931年)
盧毓駿「我従工程角度了解戴故院長季陶先生」1951年2月7日(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
――「孝園先生親炙瑣憶」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
陸宝千「戴伝賢先生評論――由事功思想衡定戴伝賢的歴史地位」(中華民国歴史与文化討論集編輯委員会編『中華民国歴史与文化討論集』第3冊・文化思想史組(台北:中華民国歴史与文化討論集編輯委員会, 1984年6月))
――「戴季陶先生的未竟之業――制礼作楽」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
陸雅乾「戴季陶的家庭情況見聞」(上海『徐匯文史資料選輯』第5輯, 1990年12月)
呂曦晨「戴季陶主義批判」(『理論学習』1978年第4期)
羅敦偉「憶戴季陶先生」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
羅宏才「戴季陶挑起的一場考古学大論戦」(『文博』1998年第5期)
羅家倫「我所認識的戴季陶先生」1959年2月12日(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
◆転載:台北『中外雑誌』第17巻第2期, 1975年2月
◆転載:王成聖等『戴伝賢的一生』(台北:中外図書出版社, 1976年3月)
◆転載:台北『中外雑誌』第25巻第1期, 1979年1月(→①)
羅蘇文「“五卅”期間的戴季陶主義」(上海『党史資料叢刊』1985年第1輯)
羅祥俊「接待戴季陶致祭九世班禅点滴回憶」(『雅安文史資料選輯』第1輯, 1985年1月)
羅曜青居士「簽戴季陶書仁王護国般若波羅密多経頌」(『海潮音』第17巻第9期, 1936年9月)
洛生「戴季陶輓呉双熱」(香港『星島日報』1965年10月15日付)(→⑥)
馬伯援から胡漢民、戴季陶、朱執信宛の簡牘(1920年3月16日)(上海『建設』第2巻第4号, 1920年5(6?)月)
馬福祥「題戴公書孝経」1931年6月中浣(前掲『戴季陶先生手書孝経』)
馬洪煥「懐念戴季陶先生」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
――「我対戴季陶先生的敬慕」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
馬佩英「戴季陶早期政治思想論略」(『河南大学学報(社会科学版)』第32巻第4期, 1992年7月)
――「戴季陶政治思想論」(『史学月刊』1997年第3期)
馬汝鄴の『戴季陶先生手書孝経』題詞(1931年7月6日)(前掲『戴季陶先生手書孝経』)
民智書局「序言」1926年12月1日(前掲『建設碎金』)
孟慶春「“一戦”時期共産党人与戴季陶主義的闘争」(『斉斉哈爾師範学院学報』1983年第1期)

鈕華民「戴季陶死因一説」（北京『団結報』1994 年 1 月 5 日付）
――・周新月「戴季陶」（広州『中山大学研究生学刊（文科版）』1981 年第 3 期）
「前言」（高純淑編『百年憶述――先進先賢百年誕辰口述歴史合輯』第 5 冊（台北：近代中国出版社，1999 年 6 月））
銭玄同「介紹戴季陶先生底『孫中山先生著作及演講紀録要目』」1925 年 4 月 21 日（北京大学『語絲』第 25 期，1925 年 5 月 4 日付）
秦孝儀「革命党人的典型――戴季陶先生」（台北『近代中国』第 68 期，1988 年 12 月）
◆転載：前掲『百年憶述』第 5 冊
秋白（瞿秋白）「中国国民革命与戴季陶主義」（前掲『反戴季陶的国民革命観（一）』）
瞿韶華「戴伝賢先生与第一届高等考試」（前掲『戴伝賢与現代中国』）
裘索「戴季陶与成賢街　考試院」（北京『団結報』1993 年 2 月 27 日付）
饒東輝「戴季陶」（曾成貴主編『中国革命史人物研究綜覧』（鄭州：河南人民出版社，1989 年 7 月））
桑兵・黄毅「《戴季陶文集》与戴季陶研究」（桑兵『孫中山的活動与思想』（広州：中山大学出版社，2001 年 10 月））
◆日本語訳：「戴季陶文集の編集状況について」田中比呂志訳（東京『近きに在りて』第 22 号，1992 年 11 月）
――・――・唐文権 1991 年 4 月「序言」（前掲『戴季陶辛亥文集』上冊）
――・――「辛亥時期戴季陶的日本観」（前掲『《近代中国与亜洲》学術討論会論文集』上集）
◆転載：広州『中山大学史学集刊』第 3 輯，1995 年 12 月
◆転載：「辛亥前後戴季陶的日本観」（前掲『孫中山的活動与思想』）
邵父「孫文主義之哲学的基礎研究」（中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会学術論著編纂委員会主編『国父百年誕辰紀念論文集』（台北：中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会，1965 年 11 月））
邵元冲「読『国民革命与中国国民党』書後」（戴季陶『国民革命与中国国民党（上編）』（上海：季陶辦事処，1925 年 7（8?）月））
元冲（邵元冲）「我們要做純粋的孫文主義的信徒」（『広州民国日報』1925 年 5 月 23 日付）
沈忱農「戴季陶先生文存評介」（台北『中国一周』第 573 期，1961 年 4 月 17 日付）（→②）
――「戴季陶先生之記者生涯」（台北『中国一周』第 661 期-第 662 期，1962 年 12 月 24 日付、31 日付）（→②）
沈覲鼎「追慕戴院長季陶先生」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
雁冰（沈雁冰）「戴季陶同志無恙」（『中国国民』第 15 期，1925 年 12 月 29 日付）
――「惜戴季陶同志」（『中国国民』第 6 期，1925 年 12 月 2 日付）
――「再問戴季陶同志」（『中国国民』第 9 期，1925 年 12 月 12 日付）
沈雲龍「「戴季陶先生編年伝記」評介」1958 年 10 月（台北『自由中国』第 20 巻第 4 期，1959 年 2 月 16 日付）
存統（施存統）「評戴季陶先生的中国革命観」（『中国青年』第 91・92 期合刊，1925 年 9 月 1 日付）
石開家「戴季陶受命赴康祭班秘聞」（石家荘『文史精華』第 121 期，2000 年 6 月）
「時人彙誌――戴伝賢」（『国聞週報』第 6 巻第 37 期，1929 年 9 月 22 日付）
「時人彙誌――戴天仇」（『国聞週報』第 4 巻第 41 期，1927 年 10 月 23 日付）
史愛棠「論戴季陶主義」（南京『民国档案』1988 年第 4 期）
「是叛逆，也曾是当之無愧的戦友――戴季陶与孫中山」（趙矢元主編『孫中山和他的助手』（哈爾濱：黒龍江人民出版社，1987 年 5 月初版、1991 年 8 月第二版））
綬百「読戴季陶先生近著『日本論』以後」（上海の立達学園・立達学会『一般』第 6 巻第 4 号，1928 年 12 月）
「暑期廬山之仏化――戴季陶先生向太虚大師之提議」1933 年 7 月 20 日（『海潮音』第 14 巻第 9 期，1933 年 9 月）
束雲章「悼念季陶先生」（前掲『戴季陶先生文存三続編』）
宋会亮「論我党民主革命統一戦線的建立与反対戴季陶主義的闘争」（『斉魯学刊』1991 年第 5 期）
蘇華「戴季陶没有出席国民党二大」（中国革命博物館党史研究室『党史研究資料』1987 年第 11 期）
遂奇「読戴季陶先生日本論要述」（滬江大学附属中学『滬潮月刊』1928 年 6 月号）
孫鏡亜『対於『孫文主義之哲学的基礎』之商榷』（上海：三民公司，1926 年 6 月第三版）

孫科「紀念戴季陶先生八十冥誕」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
◆転載:前掲『戴季陶先生与考銓制度』
孫淑「瞿秋白批判戴季陶主義的歴史功績」(『南京大学学報(哲学社会科学)』1985 年増刊)
――「従同路人到仇敵――瞿秋白与戴季陶」(孫淑・湯淑敏主編『瞿秋白与他的同時代人』(南京:南京大学出版社, 1999 年 1 月))
孫琰「戴季陶」(李振霞・傅雲龍主編『中国現代哲学人物評伝』上巻(北京:中共中央党校出版社, 1991 年 12 月))
孫語聖「浅析戴季陶“馬克思主義”両重観之原因」(『咸寧師専学報』第 20 巻第 5 期, 2000 年 10 月)
太虚「和韻答季陶先生」(『海潮音』第 14 巻第 10 期, 1933 年 10 月)
――「壬戌秋偕竺庵長老遊匡廬秀峯寺曾留此詩癸酉夏与戴季陶先生重游笑月和尚録示因再存之」(『海潮音』第 14 巻第 9 期, 1933 年 9 月)
――「題戴季陶書仁王護国般若波羅密多経頌」(『海潮音』第 17 巻第 9 期, 1936 年 9 月)
唐利国「蒋百里与戴季陶日本観的比較」(北京大学日本研究中心『日本学』第 8 輯, 1997 年 11 月)
唐文権「前言」(前掲『戴季陶集(1909-1920)』)
◆加筆:「戴季陶小伝」(前掲『戴季陶辛亥文集』上冊)
汪済西・曲本蔵尭「羅羅民族之要求」(上海『新亜細亜』第 2 巻第 5 期「通訊与討論」, 1931 年 8 月)
戴季陶「孫文主義民生哲学系統表及説明」に附された汪精衛の文章(1925 年 5 月 21 日)(広州『革命週刊』第 3 期, 1925 年 5 月 16 日付)
王成聖「戴伝賢的一生」(一)-(五)(台北『中外雑誌』第 16 巻第 4 期-第 17 巻第 2 期, 1974 年 10 月-1975 年 2 月)(→③)
◆転載:前掲『戴伝賢的一生』
――「紀念戴伝賢先生」(台北『中外雑誌』第 45 巻第 1 期, 1989 年 1 月)
王更生『孝園尊者――戴伝賢伝』(台北:近代中国出版社, 1978 年 12 月)
◆転載:「戴伝賢先生的徳業与事功」(台北『近代中国』第 68 期, 1988 年 12 月)
王国君「三十余載存知己、王朝末日留挽歌――蒋介石与戴季陶」(董長貴・周知民・王国君主編『蒋介石与他的把兄弟』(長春:吉林人民出版社, 1994 年 11 月))
王恵仁「平凡中益見其偉大的戴季陶先生」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
王覚源「戴伝賢与仏祖」(→②)
王彦民「国民党理論宣伝家戴季陶」(天津『歴史教学』1999 年第 7 期)
王貽非「編者序言」1941 年 9 月 1 日(前掲『三民主義講演集』)
王昭然「為革命大手筆的戴季陶先生」(王昭然『中華民国開国名人伝』1957 年)(→⑤)
王曾才「完美的典型」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
王宗文「書評:戴季陶著「孫文主義之哲学的基礎」」(台北『国立台湾大学中山学術論叢』第 3 期, 1982 年 12 月)
韋杰廷「戴季陶主義論略」(『湖南師院学報』1983 年第 2 期)
――「四一二反革命政変前的戴季陶」(『長沙水電師院社会科学学報』1988 年第 2 期)
「“畏友良師”――戴季陶」(方可編『蒋介石和他的高級幕僚』(鄭州:河南人民出版社, 2000 年 5 月))
魏偉琦『智仁勇的典範――戴伝賢的故事』(台北:中国国民党中央委員会党史委員会, 1983 年)
文守仁「戴伝賢」(台北『四川文献』総第 5 期「蜀風集」1963 年 1 月)(→①)
呉敬恒(呉稚暉)から戴季陶宛の簡牘(1919 年 6 月 25 日)(上海『建設』第 1 巻第 1 号, 1919 年 8 月)
呉十洲「“戴季陶鬼”」(呉十洲『民国人物綽号雑譚』(天津:南開大学出版社, 1998 年 6 月))
呉相湘「戴伝賢我仏心腸」(『春秋』第 3 巻第 1 期, 1965 年 7 月)(→②)
◆転載:「戴伝賢菩薩心腸」(呉相湘『民国政治人物』第 2 集(台北:伝記文学出版社, 1970 年 8 月))
――「戴天仇文集(影印本)前言」(前掲『戴天仇文集』)(→⑤)
――「戴天仇季陶伝賢三位一体」(呉相湘『民国百人伝』第 2 冊(台北:伝記文学出版社, 1971 年 1 月初版、1979

年1月第二版)) (→①)
伍稼青「呉稚暉戴季陶提倡踢毽子」(台北『藝文誌』第23期, 1967年8月) (→④)
――「戴季陶之諧聯」(許金城編『民国外史』台北:文海出版社・近代中国史料叢刊三編第21輯204, 1987年3月影印) (→②)
夏継誠「戴季陶:反共理論家篤信仏教両次自殺死因未解」(夏継誠『民国熱点人物追踪』(南京:江蘇人民出版社, 2001年9月))
抽玉(蕭楚女)「戴季陶擁護掠奪弱小民族的国際資本帝国主義」1925年9月10日(中央党史研究室《蕭楚女文存》編輯組・広東革命歴史博物館編『蕭楚女文存』(北京:中共党史出版社, 1998年7月))
――「国民革命与中国共産党」1925年8月10日(前掲『蕭楚女文存』)
楚女(蕭楚女)「帝国主義与人口問題」(『中国青年』第106期, 1925年12月19日付)
女(蕭楚女)「介紹「正統派」与戴季陶看看」(『中国青年』第107期, 1925年12月26日付)
謝冠生「季陶先生八秩冥誕紀念」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
謝鴻軒「戴伝賢伝」(新店『国史館館刊』復刊第4期, 1988年6月)
◆転載:国史館編『国史擬伝』第1輯(新店:国史館, 1988年6月))
◆転載:前掲『戴伝賢与現代中国』
謝健(謝掞陳)「戴季陶先生逝世二週年紀念献詞」1951年2月20日(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
――「跋」1957年11月(前掲『戴季陶先生編年伝記』) (→⑤)
――「謝序」1958年12月27日(前掲『戴季陶先生文存』第1冊)
忻欣「戴季陶三改其名」(南京『民国春秋』1988年第4期)
◆転載:前掲『二十世紀中国実録』
秀水から戴季陶・葉楚傖・邵元冲宛の書簡「弁論的法則」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1920年3月27日付)
徐鰲潤「戴伝賢対「民族国際」的推行与貢献」(前掲『中華民国史専題論文集　第一届討論会』)
――「戴季陶先生対外交人才的培植」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
徐冰「戴季陶的日本観」(保定『日本問題研究』1994年第3期)
徐道鄰「甄銓点滴」1969年12月(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
徐観餘「編後記」1951年12月25日(前掲『戴季陶先生与童子軍教育』)
――「戴副会長与童子軍教育――為紀念戴季陶先生逝世十週年而作」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
――「戴先生与童子軍」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
徐矛「戴季陶与考試院――国民政府五院制度掇要之一」(南京『民国春秋』1993年第6期)
徐暁林・陸雅乾「我們所知道的戴季陶」(上海『徐匯文史資料選輯』第5輯, 1990年12月)
――・――「我們所知道的戴季陶」(北京『文史資料選輯』第130輯, 1995年8月)
徐詠平「戴天仇才高筆健」1970年4月1日(徐詠平『革命報人別記』(台北:正中書局, 1973年3月)) (→②)
――「革命報人戴伝賢」(台北『中外雑誌』第2巻第3期, 1967年9月)
◆転載:前掲『戴伝賢的一生』(→②)
徐□□「中国西陲之国防」1928年10月6日(上海『新亜細亜』第2巻第5期「通訊与討論」, 1931年8月)
許介鱗「解説」1987年4月8日(劉濰昭主編『日本論』(台北:故郷出版社, 1987年5月))
許敏「反共文人戴季陶」(楊浩・葉覧主編『旧上海風雲人物』(上海:上海人民出版社, 1989年11月))
閻哲吾口述, 曹樹鈞整理「田漢舌戦戴季陶」(南京『民国春秋』1988年第5期)
楊国治「戴季陶在雅安」(『雅安文史資料選輯』第1輯, 1985年1月)
楊力行「略述戴季陶先生生平及其聖雄甘地頌長詩――為紀念戴先生八十冥誕而作」1971年1月5日(前掲『戴季陶先生文存三続編』) (→①)
楊天徳「試論戴季陶主義的出現及其反動実質」(『史学月刊』1980年第1期)
楊忠文「第一次国内革命戦争時期馬克思主義与戴季陶主義的闘争」(『求是学刊』1981年第3期)

姚誠「民国辺政史上的重要媒介人物――戴季陶」(台北『中国辺政』第89期, 1985年3月)
葉溯中「季陶先生軼事瑣綴」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
以寧「戴季陶治下的広州中山大学(広州通信)」(『中国青年』第145・146期合刊, 1926年12月)
于右任「悼念戴季陶先生」(前掲『革命先烈先進伝』)
◆転載:前掲『戴季陶先生文存三続編』
◆転載:前掲『革命人物誌』第8集(→①)
余方徳『風流政客戴季陶』(上海:上海人民出版社, 2003年1月)
俞山「「戴季陶主義」?――資産階級的騙局――白面書生的空想」(『中国青年』第107期, 1925年12月26日付)
俞慰剛「関於戴季陶日本観的変化――従《我的日本観》到《日本論》的再考察」(古厩忠夫教授還暦紀念論文集編輯委員会編『中日関係多維透視』(香港:香港社会科学出版社, 2002年11月))
俞瑩「戴季陶一則貽笑大方的通電」(南京『民国春秋』1992年第1期)
袁同疇「紀念戴伝賢先生」(台北『中外雑誌』第25巻第3期, 1979年3月)(→②)
――「為一個亟応辨正的史実再説幾句話――並以此紀念戴季陶先生八十冥誕」1969年12月15日(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
――「一個亟応辨正的史実――従外伝戴季陶先生参加発起共党説起」1969年2月12日(台北『伝記文学』第14巻第5期, 1969年5月)
◆転載:前掲『戴季陶先生文存三続編』(→②)
――「憶孝園戴先生」1951年2月6日(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
代英(惲代英)「読『孫文主義之哲学的基礎』」(『中国青年』第87期, 1925年8月8日付)
――講, 秦邦憲記「孫中山主義与戴季陶主義」(上海大学『中山主義週刊』第2期, 1925年12月27日付)
則平「呉鼎昌与戴季陶的籍貫」(台北『四川文献』総第171期, 1979年6月30日付)
張利源「戴季陶」(四川省地方志編纂委員会省志人物志編輯組編『四川近現代人物伝』第3輯(成都:四川人民出版社, 1987年11月))
張瑞英「戴季陶与我国考銓制度之研究」(台北:中国文化学院政治研究所碩士論文, 1978年)(→④部分)
張振振(張振之)「読了「青年之路」以後」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1928年3月21日付、23日付-26日付、28日付)
張自中「戴季陶之死」(北京『団結報』1992年5月16日付)
趙春谷「反動的戴季陶主義対孫中山主義的歪曲」(『人文科学雑誌』1957年第3期)
楽生(趙世炎)「病理学家与生理学家」(北京『政治生活』第61期, 1925年12月17日付)
趙文田「戴季陶自殺的真相」(南京『江蘇文史資料選輯』第2輯, 1963年1月初版、1981年7月更新版)
◆転載:「戴季陶自殺真相揭秘」(前掲『夢断総統府――蒋介石文臣秘録』)
◆転載:前掲『中華文史資料文庫』軍政人物編・第11巻
趙暁呼「戴季陶主義与第一次国共合作的破裂」(『内蒙古師大学報(漢文哲学社会科学版)』1989年第1期)
趙蔭華「戴公悦禅・溥老多情」(→②)
趙英蘭「論五四前戴季陶的対日外交観」(『史学集刊』1998年第3期)
鄭佳明「論戴季陶主義的主要特徴」(『求索』1993年第1期)
鄭彦棻「春風化雨懐季師」1971年10月(→②)
――「戴伝賢辞世前後」(台北『中外雑誌』第45巻第4期, 1989年4月)
――「戴故校長逝世前後的追憶――卅八年二月十二日是彦棻永難忘記的一天」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
――「戴季陶先生逝世前後」1981年7月20日(台北『伝記文学』第39巻第2期, 1981年8月)
◆転載:台北『近代中国』第25期, 1981年10月(→⑦)
◆転載:前掲『百年憶述』第5冊
――「紀念戴季陶老師」(台北『中外雑誌』第44巻第3期, 1988年9月)

——「季陶老師対我思想的啓迪」(前掲『戴伝賢与現代中国』)
——「永念季陶先生」(台北『伝記文学』第19巻第4期, 1971年10月)
◆転載:『戴季陶先生文存三続編』(→②)
鄭則民「戴季陶」(中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室・上海社会科学院経済研究所経済史研究室編『中華民国史資料叢稿・人物伝記』第11輯(北京:中華書局, 1981年10月))
——「戴季陶」(朱信泉・厳如平主編『民国人物伝』第4巻(北京:中華書局, 1984月3月))
◆転載:前掲『二十世紀中国実録』
——「結拝於交易所, 訣別在傾覆時——戴季陶与蒋介石」(厳如平主編『蒋介石与結拝兄弟』(北京:団結出版社, 1994年12月))
——「国民党的理論家戴季陶」(厳如平主編『民国著名人物伝』第2巻(北京:中国青年出版社, 1997年10月))
政僧「有情与唯生——為紀念戴居士伝賢円寂二週年而作」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
「致戴張呉三同志書」(『中国国民』第6期, 1925年12月2日付)
中国国民党江蘇省党部「対於戴季陶同志的『国民革命与中国国民党』一書之誤点的辯正」(『中国国民』第2期、第4期, 1925年10月7日付、22日付)
「中山主義与戴季陶」〈*図あり〉(北京『政治生活』第62期, 1925年12月30日付)
鍾貢勛「戴季陶先生与中山大学」(台北『中外雑誌』第17巻第4期-第5期, 1975年4月-5月)
◆転載:前掲『戴伝賢的一生』(→②)
——「季師主持中山大学的五年」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
——「紀念戴季陶師逝世十週年」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
鍾叔河「編者前言」1994年8月(鐘叔河主編『日本論(外一篇)』(海南出版社, 1994年8月))
周邦道「戴伝賢伝略——当代教育先進伝略初集稿之一」(台北『華学月刊』第45期, 1975年9月)
——「経師人師, 十週悼念!」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
——「孝園落莫念程門」(『暢流』第7巻第3期, 1953年3月16日付)(→②)
周徳豊「評戴季陶的文化哲学与歴史哲学」(『人文雑誌』1996年第4期)
周谷「民国奇人戴伝賢」上下(台北『中外雑誌』第44巻第6期-第45巻第1期, 1988年12月-1989年1月)
周開慶「戴季陶先生的詩文」(『暢流』第19巻第9期, 1959年6月16日付)(→②⑥)
周昆田「戴伝賢遺愛遍辺疆」(台北『中外雑誌』第3巻第3期, 1968年3月)(→②)
◆転載:前掲『戴伝賢的一生』
——「季陶先生与辺疆」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
周一志「戴季陶堅決主張討伐張、楊」(呉福章編『西安事変親歴記』(北京:中国文史出版社, 1986年12月))
——「戴季陶為何砸瓶子?」(北京『文史資料選輯』第93輯, 1984年1月)
周玉和「戴季陶主義浅論」(東北師範大学歴史系中国現代史教研室選編『第一次国内革命戦争討論文集(中国現代史第二次学術与教学討論会)』(大連:遼寧師範学院科研処, 出版時間未詳[13]))
朱芾煌「与戴伝賢院長論迎請班禅襲除国難書」(『海潮音』第14巻第3期, 1933年3月)
朱家驊「戴季陶先生与中山大学」1959年2月12日(『大陸雑誌』第18巻第5期)
◆転載:前掲『戴季陶先生文存三続編』(→②)
——「戴季陶著「青年之路」再版序文」1942年4月26日(王聿均・孫斌編『朱家驊先生言論集』(台北:中央研究院近代史研究所, 1977年5月)
——「序」(前掲『戴季陶先生与童子軍教育』)
——「憂国憂民的戴季陶先生」1959年2月12日(『大陸雑誌』第18巻第4期, 1959年3月)(→②)
——「追念戴季陶先生」1951年2月5日(前掲『戴季陶先生文存三続編』)

[13]1981年11月付の編者の序文あり。

◆転載:前掲『朱家驊先生言論集』(→①)
朱雷章「憶1931年我国第一届高等文官考試」(『江蘇文史資料』第24輯,1988年12月)
何銘「戴季陶的文字獄」(北京『団結報』1988年4月23日付)
◆転載:朱宗震「戴季陶的文字獄」(楊天石主編『民国掌故』(北京:中国青年出版社,1993年5月))
伝記文学雑誌社民国人物小伝編輯委員会「民国人物小伝——戴伝賢(1890-1949)」(台北『伝記文学』第24巻第2期,1974年2月)(→①)
◆転載:劉紹唐主編『民国人物小伝』第1冊(台北:伝記文学出版社,1975年6月)
荘宏誼「戴季陶与仏教」(台北『中国歴史学会史学集刊』第15期,1983年5月)(→⑦)
砍石(卓愷沢)「戴季陶心労日拙!」(北京『政治生活』第47期,1925年8月19日付)
宗肖鵬「戴季陶氏之警語」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1928年2月9日付)
鄒魯「悼季陶先生」(前掲『戴季陶先生文存三続編』)
「作者簡歴」(前掲『革命先烈先進闡揚国父思想論文集』)

【英語】
Bernal,Martin, "The Tzu-yu-tang and Tai Chi-t'ao:1912-1913"(*Modern Asian Studies*,Vol.1 No.2,April 1967)
Madame Sun Yat-sen, "Madame Sun Yat-sen Speaks" August 10,1929(*China Tomorrow*,Vol.1No.12,Beiping,October20,1929)
◆漢語訳:「与戴伝賢談話筆記」(天津『大公報』1929年12月12日付)
◆日本語訳:「戴季陶を叱責する」仁木ふみ子訳(『宋慶齢選集』(東京:ドメス出版,1979年4月))
Mast,Herman Ⅲ,*An Intellectual Biography of Tai Chi-t'ao from 1891 to 1928*,Ph.D.Dissertation,Illinois,1970
——,"Tai Chi-t'ao,Sunism and Marxism During the May Fourth Movement in Shanghai"(*Modern Asian Studies*,Vol.5 No.3,July 1971)
◆漢語訳:馬時梓「五四運動前後之戴季陶与中山主義及馬克斯主義(1918-1920)」(中華民国史料研究中心編『中国現代史専題研究報告』第1輯(台北:中華民国史料研究中心,1971年12月))(→⑤)
—— and Saywell,William C.,"The Culturalism of Political Despair:Tai Chi-t'aoism and Chiang Kai-shek"(*Asia Quarterly:A Journal from Europe*,No.3,1972)
—— and ——,"Revolution Out of Tradition:The Political Ideology of Tai Chi-t'ao"(*Journal of Asian Studies*,Vol.34 No.1,November 1974)
◆漢語訳:「由伝統中崛生之革命——戴季陶的政治理念」呉徳発訳,呉心健校訂(李国祁等編『近代中国思想人物論 民族主義』(台北:時報文化出版事業公司,1980年6月))(→⑥)
Samarani,Guido,"The Making of Dai Jitao's Thought:The Japanese Years",*Paper prepared for the International Conference "Reinterpreting Twentieth Century China:New Perspectives"*,Hong Kong,June 7-9,2001
Saywell,William C.,*The Thought of Tai Chi-t'ao:1912-1928*,Ph.D.Dissertation,Toronto,1969
——,"Modernization without Modernity:Tai Chi-t'ao,a Conservative Nationalist"(*Journal of Asian and African Studies*,Vol.5 No.4,October 1970)
"Tai Chi-t'ao(戴季陶)"(Boorman,Howard L.(ed.),*Biographical Dictionary of Republican China,Vol.3*,Columbia University Press,1970)(→①)
◆漢語訳:「戴季陶」沈自敏訳(中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『中華民国史資料叢稿・訳稿・民国名人伝記辞典』第10分冊(北京:中華書局,1981年7月))

【ドイツ語】
Richard Wilhelm, “Vorwort” November 1928 (Tai Tschi-tao, *Die Geistigen Grundlagen des Sun Yat-senismus*, Berlin: Würfel Verlag, 1931)

【朝鮮語】
白永瑞「戴季陶의国民革命論의構造的分析」(閔斗基編『中国国民革命指導者의思想과行動』(서울:知識産業社, 1988年1月))
◆日本語訳:「戴季陶の国民革命論の構造的分析」青柳純一訳(神戸『孫文研究』第11号-第12号, 1990年5月、12月)

B　そのほか

【日本語】
愛知大学東亜同文書院大学記念センター編『愛知大学東亜同文書院大学記念センター収蔵資料図録』(豊橋:愛知大学東亜同文書院大学記念センター, 2003年10月)
安藤久美子「陳其美と辛亥江浙革命(後編)——辛亥江浙革命における陳其美をめぐって」(東京『近きに在りて』第43号, 2002年12月)
飯倉照平「侵略者への抗議——日本とのかかわりから見た五四運動」(東京『中国』第66号, 1969年5月)
石川禎浩「雑誌『上海』『上海週報』記事目録」(濱田正美編『近世以降の中国における宗教世界の多元性とその相互受容』(科学研究費研究(基盤研究(B))成果報告書, 2001年3月)
——「施存統と中国共産党」(京都『東方学報』第68冊, 1996年3月)
——『中国共産党成立史』(東京:岩波書店, 2001年4月)
伊藤信之「抗日前夜の思想潮流」(宇野重昭・天児慧編『20世紀の中国——政治変動と国際契機』(東京:東京大学出版会, 1994年3月))
今村与志雄「五四運動の評価について」(東京『中国』第66号, 1969年5月)
——「日韓併合と中国の日本観」(東京『思想』第537号, 1969年3月)
臼井勝美『中国をめぐる近代日本の外交』(東京:筑摩書房, 1983年9月)
内田知行『抗日戦争と民衆運動』(東京:創土社, 2002年2月)
江口圭一『日本帝国主義史研究』(東京:青木書店, 1998年2月)
大形孝平『日中戦争とインド医療使節団』(東京:三省堂, 1982年11月)
緒形康『危機のディスクール』(東京:新評論, 1995年10月)
カウツキー『マルクス資本論解説』高畠素之訳(東京:売文社出版部, 1919年5月)
片倉芳和「梅屋庄吉と孫文銅像」(前掲『近代日中関係史研究の課題と方法「梅屋庄吉とその時代」報告集』)
可児弘明・斯波義信・游仲勲編『華僑・華人事典』(東京:弘文堂, 2002年6月)
萱野長知『中華民国革命秘笈』(東京:皇国青年教育協会, 1941年2月)
菊池一隆「中国国民党における合作社の起点と展開——孫文、戴季陶、陳果夫、邵力子との関連で」(神戸『孫文研究』第9号, 1988年12月)
北村稔『第一次国共合作の研究』(東京:岩波書店, 1998年4月)
許世楷『日本統治下の台湾』(東京:東京大学出版会, 1972年5月)
姜徳相『呂運亨評伝1　朝鮮三・一独立運動』(東京:新幹社, 2002年6月)
久保純太郎「雑誌『新亜細亜』論説記事目録」(神戸『神戸大学史学年報』第17号, 2002年5月)
久保田文次『萱野長知・孫文関係史料集』(高知:高知市民図書館, 2001年3月)
興亜院政務部編『日本留学中華民国人名調』(東京:興亜院, 1940年10月)

鴻山俊雄『神戸大阪の華僑――在日華僑百年史』(神戸:華僑問題研究所, 1979 年 7 月)
黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻(東京:原書房, 1974 年 10 月影印)
小島晋治ほか『中国人の日本人観 100 年史』(東京:自由国民社, 1974 年 6 月)
小杉修二「五・三〇運動の一考察」(野沢豊編『中国国民革命史の研究』(東京:青木書店, 1974 年 5 月))
近藤邦康「1930 年代中国における抗日の思想」(東京大学社会科学研究所「ファシズムと民主主義」研究会編『運動と抵抗』下(東京:東京大学出版会, 1980 年 3 月))
財団法人孫中山記念会編『孫中山記念館(移情閣)概要』(神戸:財団法人孫中山記念会, 2001 年 6 月)
嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』(東京:研文出版, 1994 年 11 月)
坂元ひろ子『中国民族主義の神話』(東京:岩波書店, 2004 年 4 月)
﨑村義郎著, 久保田文次編『萱野長知研究』(高知:高知市民図書館, 1996 年 9 月)
佐分利貞男「支那に対して執るべき日本の態度に就て」1927 年 3 月 25 日(東京銀行集会所『銀行通信録』第 83 巻第 495 号, 1927 年 4 月 20 日付)
島田虔次「孫文の儒教宣揚の動機論をめぐって」(島田虔次『隠者の尊重』(東京:筑摩書房, 1997 年 10 月))
末次玲子「五・四運動と国民党勢力」(中央大学人文科学研究所編『五・四運動史像の再検討』(八王子:中央大学出版部, 1986 年 3 月))
蒋海波「孫文のキリスト教理解と大亜細亜主義――東京, 大阪キリスト教青年会館での演説をめぐって」(神戸『孫文研究』第 23 号, 1998 年 1 月)
高綱博文「孫文の「大アジア主義」講演をめぐって――『孫文講演「大アジア主義」資料集』を中心に」(東京『歴史評論』第 494 号, 1991 年 6 月)
――「日中関係史における孫文の「大アジア主義」――戦前編」(東京『近きに在りて』第 32 号, 1997 年 11 月)
竹内実編『中国近現代論争年表』上(京都:同朋舎出版, 1992 年 11 月)
竹内好「1968 年の読書」(東京『みすず』1969 年 2 月号)
――「中国近代革命の進展と日中関係」1968 年(『竹内好全集』第 4 巻(東京:筑摩書房, 1980 年 11 月))
――「人間の解放と部落解放運動」1970 年(前掲『竹内好全集』第 8 巻, 1980 年 10 月)
――「明治維新と中国革命」1967 年(前掲『竹内好全集』第 4 巻, 1980 年 11 月))
――「わが回想――毛沢東の思想」1975 年(前掲『竹内好全集』第 13 巻, 1981 年 9 月)
玉嶋信義編訳『中国の日本観』(東京:弘文堂新社, 1967 年 8 月)
中華会館編『落地生根――神戸華僑と神阪中華会館の百年』(東京:研文出版, 2000 年 2 月)
◆漢語訳:『落地生根――神戸華僑与神阪中華会館百年史』忽海燕訳(香港:香港社会科学出版社, 2003 年 12 月)
陳徳仁『辛亥革命と神戸』(神戸:孫中山記念館, 1986 年 11 月)
――・安井三吉『孫文と神戸』増訂版(神戸:神戸新聞総合出版センター, 2002 年 1 月)
寺広映雄『中国革命の史的展開』(東京:汲古書院, 1979 年 2 月)
長野朗『支那国民運動の指導原理』(東京:ジヤパン・タイムス社出版部, 1927 年 5 月)
中村哲夫『移情閣遺聞――孫文と呉錦堂』(京都:阿吽社, 1990 年 3 月)
西田敏宏「東アジアの国際秩序と幣原外交(二)・完――一九二四～一九二七年」(京都大学法学会『法学論叢』第 149 巻第 1 号, 2001 年 4 月)
日本大学編『日本大学七十年略史』(東京:日本大学, 1959 年 10 月)
狭間直樹「吉野作造と中国」(前掲『吉野作造選集』第 7 巻解説)
波多野乾一『中国国民党通史』(東京:大東出版社, 1943 年 8 月初版、1944 年 4 月再版)
服部龍二『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918-1931』(東京:有斐閣, 2001 年 10 月)
平野健一郎「中国における統一国家形成と少数民族――満洲族を例として」(平野健一郎ほか編『アジアにおける国民統合』(東京:東京大学出版会, 1988 年 4 月))

平野聡『清帝国とチベット問題』(名古屋:名古屋大学出版会, 2004 年 7 月)
藤井昇三「孫文の民族主義再論」(東京『歴史評論』第 549 号, 1996 年 1 月)
――「中国人の日本観――第一次大戦直後から幣原外交まで」(東京『社会科学討究』第 20 巻第 2・3 合併号, 1975 年 3 月)
布施勝治「孫文主義は「右」か「左」かはた「中」か」(北平『北京週報』第 331 号, 1929 年 1 月 1 日付)
古厩忠夫「従属地域における国民国家の形成――中国とトルコの国民革命」(歴史学研究会編『必死の代案――期待と危機の 20 年』(東京:東京大学出版会, 1995 年 11 月))
ベーベル『社会主義と婦人』村上正雄訳(東京:三田書房, 1919 年 8 月)
松本亀次郎「中華留学生教育小史」(松本亀次郎『中華五十日遊記』(東京:東亜書房, 1931 年))
丸山昇『ある中国特派員――山上正義と魯迅』(東京:田畑書店, 1997 年 6 月)
宮崎龍介「新装の民国から」(東京『解放』第 1 巻第 7 号, 1919 年 12 月)
向山寛夫『日本統治下における台湾民族運動史』(東京:中央経済研究所・永井守昌, 1987 年 7 月)
村田雄二郎「中華ナショナリズムの表象――顧頡剛における〈民族〉と〈文化〉」(東京『江戸の思想』第 8 号, 1998 年 6 月)
――「もう一つの簡体字――漢字とナショナリズム」(田中克彦ほか編『言語・国家, そして権力』(東京:新世社, 1997 年 1 月))
望月敏弘「中国国民党の対日観」(前掲『20 世紀の中国――政治変動と国際契機』)
安井三吉「講演「大亜細亜問題」について――孫文と神戸(一九二四年)」(神戸大学教養部『近代』第 61 号, 1985 年 3 月)
――「孫文・講演『大アジア主義』の研究を深めるために――高綱博文氏の批判に寄せて」(東京『歴史評論』第 498 号, 1991 年 10 月)
――「孫文「大亜洲主義」のテキストについて」(神戸大学教養部『近代』第 64 号, 1988 年 3 月)
――「孫文の最後の訪日について」(東京『中国研究』第 65 号, 1975 年 9 月)
――「D. S. コートニースとインド医療使節団」(東京『歴史学研究』第 485 号, 1980 年 10 月)
林守仁(山上正義)「支那を震撼させた三日間」(東京『劇場文化』第 1 巻第 2 号, 1930 年 4 月)
山口一郎『近代中国対日観の研究』(東京:アジア経済研究所, 1970 年 9 月)
山田純三郎「シナ革命と孫文の中日聯盟」(嘉治隆一編『第一人者の言葉――同時代人と次代人とに語る』(東京:亜東倶楽部, 1961 年))
山室信一『思想課題としてのアジア』(東京:岩波書店, 2001 年 12 月)
『山本条太郎　伝記』(東京:山本条太郎翁伝記編纂会, 1942 年 3 月)
湯本国穂「国民党統治開始期における政治的思惟(1)――『新生命』、羅隆基、胡適を中心に」(『千葉大学法学論集』第 7 巻第 1 号, 1992 年 6 月)
楊暁文「中国人の日本観――黄遵憲、戴季陶、豊子愷の場合」(滋賀大学『パイデイア』第 4 巻第 1 号, 1996 年 3 月)
横山宏章「蒋介石と上海交易所――株式仲買人時代について」(東京『中国研究月報』第 527 号, 1992 年 1 月)
――・陳東華『写真誌　孫文と長崎』(長崎:長崎中国交流史協会, 2003 年 2 月)
(吉野作造)「日支両国大衆の精神的聯繋」(東京『中央公論』第 472 号, 1927 年 5 月)
(――)「無産階級に代りて支那南方政府代表者に告ぐ」(東京『中央公論』第 471 号, 1927 年 4 月)
読売新聞西部本社編『盟約ニテ成セル　梅屋庄吉と孫文』(福岡:海鳥社, 2002 年 10 月)
鹿錫俊『中国国民政府の対日政策 1931-1933』(東京:東京大学出版会, 2001 年 1 月)
若林正丈『台湾抗日運動史研究』増補版(東京:研文出版, 2001 年 6 月)

【漢語】

辺疆政教制度研究会編『清代辺政通考』(南京:辺疆政教制度研究会<*蒙蔵委員会?>, 1934 年 7 月)
蔡鴻源「一幅珍貴的挂軸」(南京『民国春秋』1987 年第 1 期)
蔡銘沢『中国国民党党報歴史研究(1927-1949)』(北京:団結出版社, 1998 年 9 月)
曹躍明『五四以来的保守主義思潮』(西安:西北大学出版社, 2000 年 9 月)
陳長河「民国初期的中華民国自由党」(上海『档案与史学』1997 年第 6 期)
陳固亭「戴季陶致犬養毅書」(台北『中国一周』第 854 期, 1966 年 9 月 5 日付)
陳志先編『中山先生行誼』上冊(台北:台湾書店, 1995 年 10 月)
陳有豊『日本考試制度調査報告書』(南京:新亜細亜学会, 1931 年)
陳哲夫ほか主編『現代中国政治思想流派』上巻(北京:当代中国出版社, 1999 年 2 月)
陳哲三「鄒魯与国立中山大学石牌建校」(前掲『鄒魯研究初集』)
程淯『歴代尊孔記　孔教外論合刻』(上海:東方読経会, 1938 年 10 月第十五版)
Corbusier, L.『明日之都市』盧毓駿訳(上海:商務印書館, 1936 年 8 月初版(?)、1937 年第三版)
復旦大学編『三十年的復旦(1905-1935)』(上海:復旦大学, 1935 年)
高承元『孫文主義之唯物的哲学基礎』校正再版(北平:平民書局, 1930 年 10 月)
高維昌『民生主義闡微』(上海:民智書局, 1929 年)
顧樹森編訳『最近世界各国政党』(上海:中華書局, 1929 年 1(2?)月)
国立中山大学編『雪恥救国特刊』第 1 冊(広州:国立中山大学, 1928 年 5 月)
『国立中山大学一覧』(広州:国立中山大学, 1930 年 2 月)
国聯教育考察団『中国教育之改進』国立編訳局訳(南京:国立編訳局, 1932 年 12 月)
賀淵『三民主義与中国政治』(北京:社会科学文献出版社, 1995 年 2 月初版、1998 年 4 月第二版)
胡春恵『民初的地方主義与聯省自治』(台北:正中書局, 1983 年 6 月)
胡縄武・金冲及『辛亥革命史稿』第 4 巻(上海:上海人民出版社, 1991 年 9 月)
華企雲著, 張振之編『中国辺疆』(上海:新亜細亜月刊社, 1932 年 4 月)
華生「四川自治之役」(台北『四川文献』第 141 期, 1974 年)
黄懺華居士『金剛頂発菩提心論浅略釈』(上海:上海仏学書局, 1933 年 10 月)
黄福慶『近代中国高等教育研究――国立中山大学(1924～1937)』(台北:中央研究院近代史研究所, 1988 年 6 月)
黄義祥編『中山大学史稿(1924-1949)』(広州:中山大学出版社, 1999 年 10 月)
季特(Charles Gide)『近代欧美社会経済之組織及其発展』何思源訳(広州:中山大学政治訓育部宣伝部, 1927 年)
教育部主編『中華民国建国史』第四篇　抗戦建国(三)(台北:国立編訳館, 1990 年 1 月)
蒋永敬『抗戦史論』(台北:東大図書, 1995 年 10 月)
金世昊「20 世紀 20 年代韓国言論対中国国民革命的反映――以東亜日報特派員朱耀翰“新中国訪問記”之採訪(1928 年 10 月～1929 年 1 月)為中心」(周維宏・砂山幸雄主編『世紀之交的抉択』(北京:世界知識出版社, 2000 年 10 月))
軍事委員会全国知識青年志願従軍編練総監部編『知識青年従軍論叢』(重慶:軍事委員会全国知識青年志願従軍編練総監部, 1945 年 6 月)
考試院編『考銓法規集』(南京:考試院, 1947 年再版)
考試院秘書処主編『考試院則例』<*修訂版>(南京:中国印刷廠, 1947 年 10 月)
梁心(陽光)『対日作戦方略』(上海:日新輿地社, 1933 年 12 月)
李吉奎『孫中山与日本』(広州:広東人民出版社, 1996 年 10 月)
李士珍『警察行政之理論与実際』(南京:中華警察学術研究社, 1948 年 1 月)
李雲漢『従容共到清党』(台北:中国学術著作奨助委員会, 1973 年 8 月影印)
林承節『中印人民友好関係史(1851-1949)』(北京:北京大学出版社, 1993 年 12 月)

林遠「中山大学是闡揚三民主義的中心」（中山大学『政治訓育』第1巻第4期, 1927年3月1日付）
柳無忌編『南社紀略』（上海: 上海人民出版社, 1983年4月）
陸宝千「中国国民党対総理遺教解釈之確定」（中央研究院近代史研究所編『抗戦前十年国家建設史研討会論文集』下冊（台北: 中央研究院近代史研究所, 1985年5月再版））
呂芳上『革命之再起』（台北: 中央研究院近代史研究所, 1989年4月）
――「中国国民党改組前後東京支部党務糾紛初探」（衞藤瀋吉編『共生から敵対へ――第4回日中関係史国際シンポジウム論文集』（東京: 東方書店, 2000年8月））
呂珩「日本帝国主義的研究」（上海『文化（文化批判）』1928年第5期）
羅剛『国父思想之研究』（台北: 幼獅書店, 1966年10月）
馬福祥『蒙蔵状況――回部新疆附』（南京: 蒙蔵委員会, 1931年10月）
馬鶴天『東北考察記』（南京: 新亜細亜学会, 1934年12月）
――『内外蒙古考察日記』（南京: 新亜細亜学会, 1932年12月）
馬洪煥『日本銓敍制度調査報告書』（南京: 新亜細亜学会, 1933年4月）
美濃部達吉『日本行政法撮要』楊開甲訳述, 陳大斉・徐天嘯・董道寧校閲（南京: 考試院, 1933年9月）
裴京漢『従韓国看的中華民国史』（北京: 社会科学文献出版社, 2004年1月）
銭義璋「読了国民導報以後」（上海『民国日報』副刊「覚悟」1925年8月25日付-28日付）
青海省政府民政庁編『最近之青海』（南京: 新亜細亜学会, 1934年1月）
任乃強『西康図経』境域篇（南京: 新亜細亜学会, 1933年10月）
――著, 魏崇陽校閲『西康図経』民俗篇（南京: 新亜細亜学会, 1934年7月）
――『西康図経』地文篇（南京: 新亜細亜学会, 1935年7月）
桑兵「陳炯明事変前後的胡適与孫中山」（前掲『孫中山的活動与思想』）
――「世界主義与民族主義――孫中山対新文化派的回応」（北京『近代史研究』2003年第2期）
沈覲鼎『日本官制官規之研究』（南京: 新亜細亜学会, 1931年）
沈予「国民革命与日蔣関係」（北京『近代史研究』1997年第2期）
史和・姚福申・葉翠娣編『中国近代報刊名録』（福州: 福建人民出版社, 1991年2月）
釈東初『中国仏教近代史』上下冊（台北: 中華仏教文化舘, 1974年9月）
水野錬太郎（寺田精一の誤り）『倫勃羅梭犯罪人論』徐天一訳, 劉蘆隠校編（南京: 国民政府立法院編訳処, 1929年8月）
孫穂芳主編『国父孫中山先生紀念集』（香港: 秋海棠文化企業, 2000年9月）
譚雲山『印度周遊記』（南京: 新亜細亜学会, 1933年4月）
譚中編『譚雲山与中印文化交流』（香港: 中文大学出版社, 1998年）
唐柯三著, 陳大斉編『赴康日記』（南京: 新亜細亜学会, 1934年1月）
陶季邑『中国近代民主革命派与社会主義思潮』（貴陽: 貴州人民出版社, 1997年12月）
王檜林・朱漢国主編『中国報刊辞典』（太原: 書海出版社, 1992年6月）
王功安主編『国共両党関係通史』五巻合訂本（武漢: 武漢大学出版社, 1991年8月）
王凌霄『中国国民党新聞政策之研究（1928-1945）』（台北: 中国国民党中央委員会党史委員会, 1996年3月）
王応榆『黄河視察日記』（南京: 新亜細亜学会, 1934年1月）
王治心編, 范皕誨増訂『三民主義在中国文化上之根拠』（上海: 国学社, 1927年10月）
呉雁南ほか主編『中国近代社会思潮』第3巻（長沙: 湖南教育出版社, 1998年8月）
伍非百『墨子大義述』（南京: 新亜細亜学会, 1933年12月）
蕭邦斉『血路――革命中国中的沈定一（玄廬）伝奇』周武彪訳（南京: 江蘇人民出版社, 1999年9月）
新覚編『中山先生思想概要』（愛知社, 1925年6月）
熊耀文編, 呉鶴齢・張黙濤審校『総理対於蒙蔵之遺訓及中央対於蒙蔵之法令』（南京: 蒙蔵委員会, 1934年1月）

徐瘦秋編『越南』(上海:国立暨南大学海外文化事業部,1936 年 2 月)
許崇灝(許公武)『遊日紀要』(南京:考試院收発股,1933 年 4 月)
――『徴兵之沿革及施行法』(上海:民智書局,1929 年 7 月)
――著,黄士華校対『中印歴代関係史略』(重慶:独立出版社,1942 年 8 月)
許介鱗『日本政治論』(台北:聯経出版事業公司,1977 年 3 月)
◆日本語訳:『中国人の視座から――近代日本論』(東京:そしえて,1979 年 7 月)
許応鑅著,陳天錫・曹冕・潘鳳起・徐天嘯校対『衍祥堂述聞』(南京:考試院印刷所,1934 年 3(?)月)
楊成志訳『民俗学問題格』1928(1929?)年(台北:福禄図書公司・中山大学民俗叢書 15,1969 年 10 月影印)
楊杜宇『導淮之根本問題』(南京:新亜細亜月刊社,1931 年 9 月)
楊奎松「“容共”,還是“分共”?――1925 年国民党因“容共”而分裂之縁起与経過」(北京『近代史研究』2002 年第 4 期)
楊天石『海外訪史録』(北京:社会科学文献出版社,1998 年 9 月)
――『蔣氏秘档与蔣介石真相』(北京:社会科学文献出版社,2002 年 2 月)
――『尋求歴史的謎底』(北京:首都師範大学出版社,1993 年 7 月)
――・王学荘編『南社史長編』(北京:中国人民大学出版社,1995 年 5 月)
楊躍進『蔣介石的幕僚』(北京:中国社会科学出版社,1997 年 3 月)
――『蔣介石幕僚的思想研究』(北京:華文出版社,2002 年 1 月)
尹仲才編『村制学講義』(上海:大中書局,1929 年 3 月再版)
袁偉時『中国現代哲学史稿』上巻(広州:中山大学出版社,1987 年 6 月)
張玉法『近代中国民主政治発展史』(台北:東大図書,1999 年 7 月)
張振之『目前中国社会的病態』(上海:民智書局,1929 年 5 月)
中共陝西省委党校党史教研室・陝西省社会科学院党史研究室編『新民主主義革命時期陝西大事記述』(西安:陝西人民出版社,1980 年 9 月)
中印学会編『中印学会――計劃、総章、縁起』(南京:中印学会,1933 年 6 月)
鍾城芳主編『光華日報七十週年紀念刊』(Penang:光華日報有限公司,1981 年 12 月)
周仏海『中山先生思想概観』(上海:民智書局,1925 年 8 月)

【英語】
A. Dirlik, *The Origins of Chinese Communism* (Oxford University Press, 1989)
Thomas C. Kuo, *Ch'en Tu-Hsiu (1879-1942) and the Chinese Communist Movement* (South Orange, New Jersey: Seton Hall University Press, 1975)

補記

筆者は、博士学位論文「戴季陶における「中国革命」とその思想――中国・日本・アジアをめぐって――」、同附録「戴季陶活動略年譜・著作目録」、同参考論文「雑誌『新亜細亜』論説記事目録」(『神戸大学史学年報』第 17 号,2002 年 5 月)を、2005(平成 17)年 3 月に、大学院文化学研究科(現 大学院人文学研究科)に提出した。

筆者が上の論文、附録、参考論文を、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に登録、掲載するのに併せて、筆者個人のウェブサイト「戴季陶研究ノート／戴季陶研究备忘录」を開設し、論文などの訂正や補足、追加などを行った。

ぜひウェブサイトもご覧いただきたい。

「戴季陶研究ノート／戴季陶研究备忘录」

ＵＲＬ： http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/9639/index01.html

＊ 随時更新する予定

(2007 年 9 月 4 日記)

平成１７(２００５)年3月３１日　提出

戴季陶における「中国革命」とその思想
――中国・日本・アジアをめぐって――

附録
戴季陶活動略年譜・著作目録

指導教員
(主)藤田 裕嗣 教授
(副)森 紀子 教授、緒形 康 助教授

大学院文化学研究科 社会文化専攻 地域社会文化論講座（教育研究分野：地域文化論）

９８４Ｄ７１５Ｈ

久保　純太郎

戴季陶活動略年譜・著作目録

１．本稿では、とくに次の記事を配列する
（１）戴季陶の主な行動、およびその時間・場所
（２）戴季陶の著作・講演やそれに準ずるもの、およびそれが発表された時間・場所など
２．凡例
（１）項目
ａ．年/月/日
著作の執筆年月日、講演・談話のなされた年月日を示す場合は、頭に「△」を付す。著作の出版年月日、講演・談話の公表年月日を示す場合は、頭に「▲」を付す。
記事は原則として年月日の順に配列する。ただし、年月日のいずれかが判明していないものは、内容や前後の関係から適当と思われる箇所にそれぞれ配列する。
不明な年月日は「?」で示す。
ｂ．題名
著作、講演、談話の題名と、「著作」、「講演・談話記録」、「書画」の区別を示す。
題名は初出時のものに従う。後に改められたものは別に注記する。副題・小題は「――」の後に示す。無題のものは空欄とする。
「著作」は戴季陶が執筆・翻訳した文章一般を指す。また、私信などの書簡や行政文書(一部は档案として扱われている)を含む。「講演・談話記録」は「講」、「談」、「演講詞」、「戴季陶いわく」などの記載から、第三者が戴季陶の講演・談話内容を記録・整理したことが明らかな文章を指す。そうでないものは、すべて「著作」に収めた。「書画」は、戴季陶が作成した書画を指す。定期刊行物や他人の著作に寄せた題字(題署)や題辞(題詞)は、文字の内容に応じて「著作」もしくは「書画」のいずれかに区別する。
ｃ．筆名(講演者名)
「君」、「先生」、「同志」など、第三者がつけた呼称も原文のまま示す。無署名のものは空欄とする。
ｄ．書誌
著作、講演・談話記録、書画を最も早い時期に収めた書籍・定期刊行物の書誌を指す。書籍の場合、出版者(社)、版次などを示す。定期刊行物の場合、巻期号などを示す。出版時間は「年/月/日」欄に示したものと同じ場合、省く。
「参考文献一覧」に示された「著書・著作集」に収められている場合、「○」の後に「著書・著作集」の番号を付け、「○01」ように記す。改められた題名は「(　)」の中に示す。
ｅ．活動記事
（２）原則として、日本語の常用漢字で新字体を採用している漢字は、その新字体を用いる。また、数字やアルファベットのつづりなどは、原文のままとして、あえて訂正を施さず、統一をはからない。
（３）補訂のために施す説明は「〈＊　〉」の中に記す。氏名の日本語表記や肩書きなどの不詳な箇所は「●」で表す。
（４）史料の引用に際しては、次のような基準に従う。
①仮名の清濁・半濁、ひらがなとカタカナの表記については、両者が混用されている場合を含めて原文のままとする。
②中略は「……」で表す。
③判読不能は「□」で表す。
３．本稿を作成するにあたり参照した文献は、論文巻末の「参考文献一覧」に示す。

年/月/日	題名	筆名(講演者名)
1891/1/6		
辛丑年冬(1901年末から1902年初にかけて)		
壬寅年(1902年から1903年にかけて)～甲辰年(1904年から1905年にかけて)もしくは乙巳年(1905年から1906年にかけて)		
甲辰年もしくは乙巳年		
1905(乙巳)/8		
1907年(丁未年)春		
1907		
1908年(戊申年)秋		
1909		
1909		
▲1909/12/2-1910/3/1	【著作】憲法綱領	
1910/8		
▲1910/8/5	【著作】短評	散紅
▲1910/8/5	【著作】日韓合邦与中国之関係	散紅
▲1910/8/5-8/8	【著作】劇評	散紅
▲1910/8/6	【著作】併韓	散紅
▲?-1910/8/7	【著作】揚子江航権問題	散紅
▲?-1910/8/7	【著作】《憲法大綱》私議	戴良弼
▲1910/8/7	【著作】短評	散紅
▲1910/8/7	【著作】小説――世態二則(短篇写実体)	散紅
▲1910/8/8	【著作】酒(小説)	散紅
▲1910/8/9-8/23	【著作】文芸小評	散紅
▲1910/8/10	【著作】世界夏季之光景	散紅
▲1910/8/11	【著作】世界市場之比較及一般趨勢	散紅
▲1910/8/11-8/17	【著作】散紅軒余墨	散紅
▲1910/8/11-8/22	【著作】九哭	散紅
▲1910/8/13	【著作】本報閲者諸公請看	散紅
▲1910/8/13	【著作】日本文学之鱗爪	散紅
▲1910/8/13	【著作】短評	散紅
▲1910/8/14	【講演・談話記録】本館記者戴散紅演説辞	戴散紅
▲1910/8/15	【著作】短評	散紅
▲1910/8/15	【著作】半月内之失意人	散紅
▲1910/8/16-8/21	【著作】自然主義論	散紅
▲1910/8/17	【著作】立憲救国乎立憲亡国乎	散紅
▲1910/8/17	【著作】短評	天仇
▲1910/8/19	【著作】嗚呼娜丁格児女士	天仇
▲1910/8/20	【著作】市面恐慌論	散紅
▲1910/8/20	【著作】短評二則	散紅
▲1910/8/21	【著作】近世之国民活動	散紅
▲1910/8/21	【著作】短評(一)	散紅
▲1910/8/21	【著作】短評(二)	天仇
▲1910/8/22	【著作】短評(一)	散紅
▲1910/8/22	【著作】短評(二)	天仇
▲1910/8/23	【著作】短評二則	散紅
▲1910/8/23	【著作】当代第一偉大杜斯退伝略	天仇
1910/9		
▲1910/9/28	【著作】人人当謝恩後再吃飯	散紅
▲1910/9/29-10/12	【著作】俄国之財政与経済	天仇
▲1910/10/1-10/3	【著作】借款問題与財政経済	天仇
▲1910/10/4-12/2	【著作】中国之百面観	天仇
▲1910/10/7	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/7	【著作】痛言	天仇
▲1910/10/7	【著作】談叢	天仇
▲1910/10/8	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/8	【著作】痛言	天仇
▲1910/10/8	【著作】東亜陽秋	天仇
▲1910/10/8	【著作】蝶恋花二首	散紅
▲1910/10/9	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/9	【著作】四十日中之大問題	天仇
▲1910/10/9-10/14	【著作】人生論	天仇
▲1910/10/9-10/18	【著作】杜斯退先生学案	天仇
▲1910/10/10	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/10	【著作】痛言	天仇
▲1910/10/10	【著作】〈*無題〉	天仇
▲1910/10/10	【著作】〈*無題〉	天仇
▲1910/10/10	【著作】〈*無題〉	天仇
▲1910/10/11	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/11	【著作】痛言	天仇
▲1910/10/11	【著作】東亜陽秋	天仇
▲1910/10/11	【著作】十八世紀英国文士之生活	天仇
▲1910/10/12-10/13	【著作】人道主義論	泣民
▲1910/10/12	【著作】嗚呼上海之金融界	天仇
▲1910/10/12	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/12	【著作】痛言	天仇
▲1910/10/12	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/13	【著作】上海十恨	天仇
▲1910/10/13	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/13	【著作】痛言	天仇
▲1910/10/13	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/14-10/16	【著作】世界国民論	泣民
▲1910/10/14	【著作】安重根墓	天仇
▲1910/10/14	【著作】悱言	天仇
▲1910/10/14	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/15	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/16	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/17	【著作】悱言	天仇

書誌	活動記事・注記
	光緒庚寅年(十六年)十一月二十六日、四川省成都府漢州(民国期は広漢県)西街に生まれる。父は戴小軒(順時)、母は黄氏。四男三女の末子。原籍は浙江省湖州府(民国期は呉興県)。名は伝賢、変名(学名)は良弼。字は選堂、季陶。号は天仇、晩号は孝園。法名は不空、不動など。筆名は散紅、散紅生、泣民、思秋、思秋楼主、商孫など。あだ名は戴古董、戴仏爺、戴神経など。
	童子試、州試、府試に合格し、院試で落第した(秀才,生員となれず)という。
	成都の東游予備学校、客籍学堂高等科、華英学堂に就学。日本人教習・服部操(東文学堂)や小西三七(同前)から日本語の訓練を受ける。
	長兄伝薪(尭欽)が工面した金銭で、日本に渡る(都市名不詳)。
	中国同盟会結成の時(東京,8/20)、孫文の同盟会員に対する演説を聴き、初めて孫文の顔を知ったという。按:孫文の東京在住の中国人留学生に対する演説(8/13)であるかも知れない。
	東京の振武学校に就学。
	東京の日本大学専門部法律科に就学。学名は戴良弼。麹町区松浜館に下宿。
	日本大学の留学生同学会会長に選出される。
	日本大学を中途退学し、上海に帰国。東京滞在中、劇団春柳社に参加。
	数ヵ月後、蘇州の官立「江蘇自治研究所」(上海蘇属地方自治籌辦処)の教職に就く。
『江蘇自治公報』第8期-第15期<*未完>○44,45	
	「江蘇自治研究所」を辞し、上海の中外日報の記者に就く。
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○45	
上海『中外日報』○45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○45	
上海『中外日報』○45	
上海『中外日報』○44(《中外日報》十二周年紀念日演説辞),45(同前)	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○44,45	
上海『中外日報』○45	
	上海の天鐸報の記者に就く。ほどなく編集主任に抜擢される。上海の『民立報』にも寄稿。
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44,45,51	
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44,45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44(「詞三首」菩薩蠻),45(同前)	
上海『天鐸報』○44(「詞三首」清平楽),45(同前),51(清平楽)	
上海『天鐸報』○44(「詞三首」臨江仙),45(同前)	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『民立報』○44,45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『民立報』○44,45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44,45	

▲1910/10/17-10/20	【著作】日本人之気質	天仇
▲1910/10/18	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/18-10/21	【著作】嗚呼無能国嗚呼無能国之民	天仇
▲1910/10/19	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/19-10/22	【著作】中国之資本問題与労動問題	泣民
▲1910/10/20	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/21	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/21-12/8	【著作】子規啼(小説)	天仇
▲1910/10/22	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/22-10/26	【著作】鈕機蘭島之社会政策	天仇
▲1910/10/23	【著作】病褝記	泣民
▲1910/10/23	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/24	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/25	【著作】応酬亡国論	天仇
▲1910/10/25	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/28	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/10/28	【著作】耳聞眼見	天仇
▲1910/11/1	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/11/2	【著作】悱言	天仇
▲1910/11/2	【著作】痛言	天仇
▲1910/11/2	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/11/3	【著作】痛言	天仇
▲1910/11/4	【著作】嗚呼罪民	天仇
▲1910/11/4	【著作】嗚呼神明胄	天仇
▲1910/11/4	【著作】悱言	天仇
▲1910/11/5-11/8	【著作】葡萄牙共和始末記	泣民
▲1910/11/5-11/9	【著作】民力拡張論	天仇
▲1910/11/7	【著作】国民経済聯合策	天仇
▲1910/11/7	【著作】再請大家注意	天仇
▲1910/11/7	【著作】嗚呼出版界之前途	天仇
▲1910/11/7-11/8	【著作】片片的日本文学観	天仇
▲1910/11/10	【著作】嗚呼同盟国哈哈同盟国	天仇
▲1910/11/10	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/11/12-11/18	【著作】社会主義之大活動	泣民
▲1910/11/12	【著作】嗚呼親貴国	天仇
▲1910/11/12	【著作】社会之大不幸	天仇
▲1910/11/13	【著作】借銭做甚麽	天仇
▲1910/11/13	【著作】教育為国民之母	天仇
▲1910/11/13	【著作】唉這就是文明中心点	天仇
▲1910/11/13-11/14	【著作】上海最近両大問題——請減房租問題——検査鼠疫問題	天仇
▲1910/11/16	【著作】請足踏実地做人	天仇
▲1910/11/16	【著作】木櫂牽牛之大国民	天仇
▲1910/11/16	【著作】昨日之拉扱橋畔	天仇
▲1910/11/17	【著作】法国内閣之近況	天仇
▲1910/11/21	【著作】這都是斯文敗類	天仇
▲1910/11/21	【著作】可憐這家肥国瘦	天仇
▲1910/11/22-11/24	【著作】内国経済発展策	天仇
▲1910/11/22-12/13	【著作】杜爾斯泰先生伝	泣民
▲1910/11/23	【著作】傷哉世界之大人物	天仇
▲1910/11/24	【著作】請王爺留心点	天仇
▲1910/11/24	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/11/25	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/11/26	【著作】嗚呼鼠目寸光之大国民	天仇
▲1910/11/27	【著作】大国民之恥	天仇
▲1910/11/27	【著作】乱民賊子可殺	天仇
▲1910/11/27	【著作】女子職業之前途	天仇
▲1910/11/28	【著作】鼠目寸光之議員	天仇
▲1910/11/28	【著作】大国民当学小国民	天仇
▲1910/11/28	【著作】嗚呼上海之文人	天仇
▲1910/11/29	【著作】嗚呼民賊	天仇
▲1910/11/29	【著作】怪哉資政院	天仇
▲1910/11/29	【著作】上海人之自治力	天仇
▲1910/11/29	【著作】《非競争》按語	天仇
▲1910/11/29	【著作】病床呻吟録(一)	天仇
▲1910/11/30	【著作】病床呻吟録(二)	天仇
▲1910/12/1	【著作】病床呻吟録(三)	天仇
▲1910/12/2	【著作】病床呻吟録(四)	天仇
▲1910/12/4	【著作】病床呻吟録(五)	天仇
▲1910/12/4	【著作】社会主義論	天仇
▲1910/12/4	【著作】国賊民仇之同志会	天仇
▲1910/12/4	【著作】何人敢刺我者来	天仇
▲1910/12/4	【著作】無理取閙之控案	天仇
▲1910/12/5	【著作】大家都不更事	天仇
▲1910/12/5	【著作】為他人作嫁衣裳	天仇
▲1910/12/5	【著作】可憐哉上海	天仇
▲1910/12/5	【著作】哭笑集(一)	
▲1910/12/6	【著作】哭笑集(二)	
▲1910/12/6	【著作】顧鰲来	天仇
▲1910/12/6	【著作】国民軍	天仇
▲1910/12/6	【著作】敬告房東	天仇
▲1910/12/7	【著作】自命不凡之親貴大臣	天仇
▲1910/12/7	【著作】嗚呼輿論界之前途	天仇
▲1910/12/7	【著作】胆大施典章	天仇
▲1910/12/8	【著作】国民自己放明白点	天仇
▲1910/12/8	【著作】誤国殃民之同志会	天仇
▲1910/12/9	【著作】大弁護士	天仇
▲1910/12/9	【著作】国民病	天仇
▲1910/12/9	【著作】敬告閘北警察局	天仇
▲1910/12/9-12/13	【著作】駁《同志会宣言書》〈*第二篇より「駁《同志会通告書》」と改題〉	天仇
▲1910/12/10	【著作】斬草除根	天仇
▲1910/12/10	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/12/10	【著作】嗚呼将来之責任内閣	天仇
▲1910/12/11	【著作】嗚呼将来之欽定憲法	天仇
▲1910/12/11	【著作】懦哉吾民	天仇
▲1910/12/11	【著作】普告国民	天仇
▲1910/12/12	【著作】民賊機関之報館	天仇
▲1910/12/12	【著作】水性楊花之志士	天仇

上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『民立報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『民立報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『民立報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『民立報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『民立報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	

▲1910/12/13	【著作】陸海両個劣東西	天仇
▲1910/12/13	【著作】可憐這些齷齪官	天仇
▲1910/12/13	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/12/13	【著作】日英関税問題之冷眼観	泣民
▲1910/12/14	【著作】閩浙的醜督抗	天仇
▲1910/12/14	【著作】警告諸親貴	天仇
▲1910/12/15	【著作】最近政界之悲観	天仇
▲1910/12/15	【著作】資政院為人作嫁	天仇
▲1910/12/15	【著作】可憐藏頭蔽面之志士	天仇
▲1910/12/15	【著作】官与狗	天仇
▲1910/12/16	【著作】咄咄《全浙公報》	天仇
▲1910/12/16	【著作】日人真小家子気	天仇
▲1910/12/17	【著作】所謂融和満漢者如是	天仇
▲1910/12/17	【著作】再告全国諸民賊報	天仇
▲1910/12/17	【著作】処分馬賊策	天仇
▲1910/12/21	【著作】呉門小観	天仇
▲1910/12/22	【著作】哀議員	天仇
▲1910/12/22	【著作】哀国民	天仇
▲1910/12/23	【著作】嗚呼不負責任之政府	天仇
▲1910/12/23	【著作】辮禍	天仇
▲1910/12/23	【著作】吃飯問題	天仇
▲1910/12/23	【著作】上海金融界整理談	天仇
▲1910/12/24	【著作】得時之可児	天仇
▲1910/12/24	【著作】怪謬之弁護法	天仇
▲1910/12/24	【著作】爾俸爾禄	天仇
▲1910/12/24	【著作】慎食衛生談	天仇
▲1910/12/25	【著作】不重生男重生女	天仇
▲1910/12/25	【著作】嗚呼売国賊	天仇
▲1910/12/25	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/12/25,12/26,12/30,1911/1/1	【著作】社会党之風雲、世界各国之現状	天仇
▲1910/12/26	【著作】謹告奴隷国民	天仇
▲1910/12/26	【著作】敬謝悪劣専横之政府	天仇
▲1910/12/26	【著作】二十三日後之預言	天仇
▲1910/12/26	【著作】檄告国民――請看卑劣之代表――請看悪劣之政府	天仇
▲1910/12/27	【著作】咄咄奕劻	天仇
▲1910/12/27	【著作】敬告全国軍警	天仇
▲1910/12/27	【著作】敬告全国学生	天仇
▲1910/12/27	【著作】暗殺与改造	天仇
▲1910/12/28	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1910/12/29-12/30	【著作】哀国民	天仇
▲1910/12/29	【著作】敬告海外同胞	天仇
▲1910/12/29	【著作】寄秉鈺書	天仇
▲1910/12/29	【著作】何人再鑄七殺碑	天仇
▲1910/12/29	【著作】嗚呼今日報界	天仇
▲1910/12/30	【著作】公字訣	天仇
▲1910/12/30	【著作】再告海外同胞	天仇
▲1910/12/30	【著作】嗚呼蟻民	天仇
▲1910/12/30	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/1	【著作】嗟嗟武力之世界	天仇
▲1911/1/1-1/3	【著作】武力救国論	天仇
▲1911/1/2	【著作】請看自行弁護之《国風報》	天仇
▲1911/1/2	【著作】等級不平之中国	天仇
▲1911/1/4	【著作】嗚呼中国之党人	天仇
▲1911/1/4	【著作】丁宝楨(一)	天仇
▲1911/1/4	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/5	【著作】対於葡萄牙共和後之希望	天仇
▲1911/1/5	【著作】鼠目寸光之国民	天仇
▲1911/1/5	【著作】噫帝国統一党	天仇
▲1911/1/5	【著作】敬告女同胞	天仇
▲1911/1/5-1/7	【著作】真国会与真内閣	天仇
▲1911/1/6	【著作】咄咄資政院	天仇
▲1911/1/6	【著作】請看帝国統一党員之悪手段	天仇
▲1911/1/6	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/7	【著作】怪謬絶倫之弁護士	天仇
▲1911/1/7	【著作】再告女同胞	天仇
▲1911/1/7	【著作】偉人逸話(一)	天仇
▲1911/1/7	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/8	【著作】可憐哉上海可憐哉上海人	天仇
▲1911/1/8	【著作】拡張即抵制	天仇
▲1911/1/8	【著作】嗚呼腥風血雨之東三省	天仇
▲1911/1/8	【著作】市民苦	天仇
▲1911/1/8	【著作】偉人逸話(二)	天仇
▲1911/1/8	【著作】請公廨注意	天仇
▲1911/1/9-1/11	【著作】檄告全国青年	天仇
▲1911/1/10	【著作】自強即報復	天仇
▲1911/1/10	【著作】咄咄野蛮議員	天仇
▲1911/1/10	【著作】醜哉吾国之青年	天仇
▲1911/1/10	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/11	【著作】嗚呼温昱	天仇
▲1911/1/11	【著作】四告海外同胞<*「三告海外同胞」は未見>	天仇
▲1911/1/12	【著作】梁啓超与袁世凱	天仇
▲1911/1/12	【著作】天良喪尽之資政院	天仇
▲1911/1/12	【著作】青年与青年党	天仇
▲1911/1/12	【著作】偉人逸話(三)	天仇
▲1911/1/13	【著作】小学教育	天仇
▲1911/1/13-1/16	【著作】地方分治論	天仇
▲1911/1/13,1/15,1/20	【著作】法律及法官之腐敗	天仇
▲1911/1/14	【著作】時乎時乎	天仇
▲1911/1/14	【著作】無恥楊度	天仇
▲1911/1/14	【著作】奢侈流行之中国	天仇
▲1911/1/14	【著作】敬告上海女学界	天仇
▲1911/1/15	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/17	【著作】自治乎官治乎	天仇
▲1911/1/17	【著作】嗚呼健児身手	天仇
▲1911/1/17	【著作】再告全国教育界	天仇
▲1911/1/17	【著作】最近両怪事	天仇
▲1911/1/17	【著作】珠璣砂礫	天仇

上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『民立報』	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	

▲1911/1/18	【著作】皇族内閣	天仇
▲1911/1/18	【著作】嗚呼作官人	天仇
▲1911/1/18	【著作】嗚呼中国之大学	天仇
▲1911/1/18-1/20	【著作】資政院之最後観	天仇
▲1911/1/19	【著作】国民諦聴	天仇
▲1911/1/19	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/21-1/25	【著作】哭庚戌	天仇
▲1911/1/22	【著作】俄人之中国政治観	天仇
▲1911/1/22	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/1/23	【著作】同盟嗚呼同盟	天仇
▲1911/1/23	【著作】殺機殺機殺機	天仇
▲1911/1/25	【著作】今年逝世之両大偉人	天仇
1911/1/25-2/18		
▲1911/2/2	【著作】国民之大敵	天仇
▲1911/2/2	【著作】世界去年之大快大惨大不幸	天仇
▲1911/2/2	【著作】無道国	天仇
▲1911/2/2	【著作】除夕之上海与元旦之上海	天仇
▲1911/2/2-2/3	【著作】無政府主義之神髄	天仇
▲1911/2/3	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/2/3	【著作】接財神	天仇
▲1911/2/4	【著作】不平鳴	天仇
▲1911/2/4	【著作】憐哉災民忍哉冨翁	天仇
▲1911/2/4	【著作】上海電車之缺点	天仇
▲1911/2/4	【著作】珠璣砂礫	天仇、散紅
▲1911/2/5	【著作】巴拿馬運河与東洋経済之関係	天仇
▲1911/2/5	【著作】官吏文明	天仇
▲1911/2/5	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/2/6-2/8	【著作】国民借債論	天仇
▲1911/2/7	【著作】咄咄二重外交	天仇
▲1911/2/7	【著作】嗚呼戦雲	天仇
▲1911/2/7	【著作】苦社会	天仇
▲1911/2/7	【著作】《国民以尚武自衛論》抜語	天仇
▲1911/2/7-2/9	【著作】俄報之反間論	天仇
▲1911/2/9	【著作】改造之根本	天仇
▲1911/2/9	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/2/10	【著作】鬼怪画見之宮廷	天仇
▲1911/2/10	【著作】這叫做進退両難	天仇
▲1911/2/10	【著作】還我飯来	天仇
▲1911/2/10	【著作】上海之人妖	天仇
▲1911/2/12	【著作】丁宝楨(二)	天仇
▲1911/2/12-2/13	【著作】徴兵与民兵	天仇
▲1911/2/13	【著作】敬告全国教育界	天仇
▲1911/2/13	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/2	【著作】国防与民兵	天仇
▲1911/3/2	【著作】可憐中国之外交	天仇
▲1911/3/2	【著作】嗚呼第二緬越	天仇
▲1911/3/3	【著作】共和与自治	天仇
▲1911/3/3	【著作】哀哉可憐児	天仇
▲1911/3/3	【著作】空言無補之国民	天仇
▲1911/3/3	【著作】咄咄賊民民賊	天仇
▲1911/3/3	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/3-3/4	【著作】別有天地非人間	天仇
▲1911/3/4	【著作】第二徴欽時代	天仇
▲1911/3/4	【著作】民兵与地商	天仇
▲1911/3/4	【著作】煙毒薬毒	天仇
▲1911/3/4	【著作】哀哉亡国民	天仇
▲1911/3/4	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/5	【著作】亡機与戦機	天仇
▲1911/3/5	【著作】官乎報乎	天仇
▲1911/3/5	【著作】警告老慶	天仇
▲1911/3/5	【著作】民兵之価値	天仇
▲1911/3/5	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/5-3/11	【著作】請看保皇会之逆証——康有為梁啓超斂財之鉄証——十年前之逆拠発現矣	天仇
▲1911/3/6	【著作】敬告雲南代表	天仇
▲1911/3/6-3/8	【著作】小大国民(小説)	天仇
▲1911/3/7	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/7-3/8	【著作】民兵進行策	天仇
▲1911/3/8	【著作】嗚呼志士之難	天仇
▲1911/3/8	【著作】航業発達之初軔	天仇
▲1911/3/9	【著作】紙幣乎紙幣乎	天仇
▲1911/3/9	【著作】誰能作鬼雄	天仇
▲1911/3/9	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/10	【著作】咄咄天殺才	天仇
▲1911/3/10	【著作】秘密亡国	天仇
▲1911/3/10	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/11	【著作】民兵与外交	天仇
▲1911/3/11	【著作】咄咄賊政府	天仇
▲1911/3/11-3/24	【著作】新女訓	天仇
▲1911/3/12	【著作】排外与親外	天仇
▲1911/3/12	【著作】望滇督	天仇
▲1911/3/12	【著作】武装平和之先例	天仇
▲1911/3/12	【著作】杜鵑声	天仇
▲1911/3/12, 3/14	【著作】中俄交渉論——俄人之野心暴発——中国之土地喪失——亡国滅種之先兆	天仇
▲1911/3/14	【著作】精武学校与商団聯合会	天仇
▲1911/3/14	【著作】兵力与実力	天仇
▲1911/3/14	【著作】満朝都是崇厚第二	天仇
▲1911/3/14	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/14-3/15	【著作】霊魂世界	天仇
▲1911/3/15	【著作】江西会館	天仇
▲1911/3/15	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/16	【著作】自治与防外	天仇
▲1911/3/16	【著作】好個借款法	天仇
▲1911/3/16	【著作】傷哉大銷貨場	天仇
▲1911/3/16	【著作】中国之虚空裁判	天仇
▲1911/3/17	【著作】天乎輿論界何辜——咄咄蛮横無道之俄人——咄咄媚外虐民之官吏	天仇

上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
	この間に南社に入社する。
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44(俄報之反間計), 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45(民兵与地省)	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	

▲1911/3/17	【著作】哭告弱国之弱民	天仇
▲1911/3/17	【著作】可憐亡国人之口	天仇
▲1911/3/18	【著作】毛大	天仇
▲1911/3/18	【著作】同行競業会之起点	天仇
▲1911/3/18	【著作】空言	天仇
▲1911/3/19	【著作】内外大敵	天仇
▲1911/3/19	【著作】借款練兵策	天仇
▲1911/3/19	【著作】花花世界	天仇
▲1911/3/20	【著作】敬告今後之寧波人	天仇
▲1911/3/20	【著作】丞相祠堂	天仇
▲1911/3/20	【著作】珠璣砂礫	
▲1911/3/20-3/21	【著作】戦	天仇
▲1911/3/20,3/26	【著作】温葵香(旧劇)	天仇
▲1911/3/21	【著作】自治産業軍隊	天仇
▲1911/3/21	【著作】珠璣砂礫	
▲1911/3/22	【著作】俄国之社会心理	天仇
▲1911/3/22	【著作】肉弾生活	天仇
▲1911/3/22	【著作】浚源則流清	天仇
▲1911/3/22	【著作】近事雑評三則	天仇
▲1911/3/22	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/23	【著作】衛生与衛心	天仇
▲1911/3/23	【著作】姚家詮之四可殺	〈*天仇〉
▲1911/3/23	【著作】好男児	天仇
▲1911/3/23	【著作】敬告学生諸君	天仇
▲1911/3/23	【著作】夔府	天仇
▲1911/3/23	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/3/24	【著作】日美風雲急	天仇
▲1911/3/25	【著作】金融恐慌之原因	天仇
▲1911/3/26	【著作】飛行世界	天仇
▲1911/3/26	【著作】嗚呼窮	天仇
▲1911/3/27	【著作】飛行飛行	天仇
▲1911/3/27	【著作】自治自制	天仇
▲1911/3/27	【著作】疫虐	天仇
▲1911/3/27	【著作】俄禍	天仇
▲1911/4/6	【著作】外交之結果法	天仇
▲1911/4/6	【著作】軍人聴者	天仇
▲1911/4/7	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/4/8	【著作】俄国内閣変動	天仇
▲1911/4/9	【著作】日本海軍之新活動	天仇
▲1911/4/9	【著作】外交術	天仇
▲1911/4/10	【著作】此之謂英日同盟	天仇
▲1911/4/12	【著作】暗殺	天仇
▲1911/4/12	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/4/14	【著作】死	天仇
▲1911/4/14	【著作】忠告青年	天仇
▲1911/4/15	【著作】日英美之新条約観――東洋之緊急風雲	天仇
▲1911/4/15	【著作】英美殺人器之威力――海軍巨炮之競争――殺人威力之競争	天仇
▲1911/4/17	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/4/18	【著作】馬湘伯	天仇
▲1911/4/19	【著作】珠璣砂礫	天仇
▲1911/4/19	【著作】生死関頭	天仇
▲1911/4/19	【著作】敬告留学生	天仇
▲1911/4/19	【著作】請大家看明白	天仇
▲1911/4/20	【著作】千里草	天仇
▲1911/4/20	【著作】劉保昌	天仇
▲1911/4/21	【著作】馬湘伯	天仇
▲1911/4/27	【著作】趙次珊	天仇
▲1911/4/27	【著作】窮	天仇
▲1911/4/27	【著作】珠璣砂礫	天仇
1911年春		
1911/4頃-1911/10頃		
1911/10月下旬		
△1911/?/15	【著作】致陳英士楊譜笙先生書〈*大連より〉	
△1911/?/16	【著作】致陳英士先生書〈*大連より〉	
△1911年冬	【著作】致張静江黄復生藍秀豪〈*藍天蔚〉三先生書	
△1911年冬	【著作】致張静江先生書〈*大連より〉	
△1911年冬	【著作】致藍秀豪張静江黄復生三先生書〈*奉天より〉	
1911/12/25以降		
1912/1/1(辛亥年十一月十三日)		
1912/2/18?		
1912/2/21		
1912/2/28		
1912/2/29-3/1		
▲1912/3/28	【著作】自由与秩序	天仇
▲1912/3/28	【著作】嗟嗟民権	天仇
▲1912/3/28	【著作】鬥狠之共和	天仇
▲1912/3/28	【著作】闇思	天仇
▲1912/3/28	【著作】勧君当早帰	天仇
▲1912/3/28-3/31	【著作】南洋之耳聞目見	天仇
▲1912/3/29	【著作】嗚呼共和之兵	天仇
▲1912/3/29	【著作】神聖之広東都督	天仇
▲1912/3/30	【著作】治兵策	天仇
▲1912/3/30	【著作】政見与意見	天仇
▲1912/3/31	【著作】寄内	天仇
▲1912/3/31	【著作】海遊操	天仇
▲1912/4/1	【著作】政党箴	天仇
▲1912/4/1	【著作】僑民与政治	天仇

上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45(馬相伯(一))	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○45(馬相伯(二))	
上海『天鐸報』○45	
上海『天鐸報』○44, 45	
上海『天鐸報』○45	
	上海で鈕有恒と結婚。鈕有恒、光緒丙戌年(十二年)六月四日(1886年7月5日)生、浙江省湖州府出身。名は浩、字は養吾、法名は蓮花。
	結婚後、両江総督張人駿、上海道台劉襄蓀から上海の『天鐸報』紙上で清朝政府を攻撃した罪で指名手配される。戴季陶は上海会審公堂任法官関炯の援助を得て、上海を離れ、長崎に逃れる。長崎で約二週間過ごし、上海を経て、浙江省湖州に移る。湖州で雷鉄崖(昭性)からペナンに来るように誘う電報を受け取り、英領ペナンに移る。シンガポールでも暫時生活する。ペナンにおいて、中国同盟会の機関紙『光華日報』の記者に就き、中国同盟会に入会する。入会時の主盟人は黄金慶(光華日報第一期董事正監督)、紹介人は陳新政(光華日報第一期董事委員)。当時ペナンにあった孫文宅で、孫文の女児(金琰、金琬)の家庭教師として国文を教えたという。
	武昌蜂起の後、ペナンを離れる。武漢、上海、大連に渡り革命軍に参加。
○33, 45	
○33, 45	
○33, 45	
○33, 45	
○33, 45	
	天鐸報?の新聞記者として、欧米から帰国し上海に着いた(12/25)孫文と会談。
	中華民国成立。孫文は中華民国臨時大総統に就任。南京臨時政府設立。その後、関外都督藍天蔚は戴季陶を関外都督府交通部長に任命。戴季陶は北伐軍に従事。また1月、中華民国自由党(正主裁は孫文、副主裁は黄興、臨時(副)主裁は李懐霜)が上海で結成。戴季陶は入党したとされるが、その時期は不詳。
	孫文は「南京臨時政府迎袁南下専使名単」を作成。「歓迎専使」蔡元培、「歓迎員」、「秘書員」、「庶務員」と、「外(そのほか)」戴季陶など16名で構成される。
	南京発。海路、天津に向かう。船中で李石曾、宋教仁、蔡元培などとともに社会改良会を発起(規約は進徳会から派生し結成されたとされる)。また、進徳会に入り甲部特別会員となる。
	北京着。
	天津滞在。
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	3/28までに、中華民国自由党の機関紙である『民権報』の記者に就く。
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45, 51	
上海『民権報』○44, 45	孫文は臨時大総統を辞任。
上海『民権報』○01, 45	

▲1912/4/1,4/7,4/28	【著作】天仇叢話	天仇
▲1912/4/2	【著作】絶無人道之地方税	天仇
▲1912/4/2	【著作】咄咄公然之強盗	天仇
▲1912/4/2	【著作】民賊乎都督乎	天仇
▲1912/4/2-4/4	【著作】徳国社会民主党政綱評	天仇
▲1912/4/3	【著作】討浙議員	天仇
▲1912/4/5	【著作】議会与財政	天仇
▲1912/4/6	【著作】共和之悲観	天仇
▲1912/4/6-4/7	【著作】議院問題之根本解決	天仇
▲1912/4/7	【著作】告蒋尊簋	天仇
1912/4/7		
▲1912/4/8	【著作】砭律師	天仇
▲1912/4/8	【著作】誅米賊	天仇
▲1912/4/8	【著作】共和国中之走狗	天仇
▲1912/4/8	【著作】議員官——恭喜恭喜——升官発財	天仇
▲1912/4/9	【著作】嗚呼秘密之参議院	天仇
▲1912/4/9	【著作】大哉私人信用	天仇
▲1912/4/9-4/10	【著作】区域問題	天仇
▲1912/4/10	【著作】無政府	天仇
▲1912/4/10	【著作】亡国妖	天仇
▲1912/4/12	【著作】拓殖論	天仇
▲1912/4/13	【著作】咄咄南京兵	天仇
▲1912/4/13	【著作】悲秋	天仇
▲1912/4/13	【著作】寄蜀中故友	天仇
▲1912/4/13-4/14	【著作】嗚呼虚業之中国	天仇
▲1912/4/14	【著作】嗚呼人道	天仇
▲1912/4/16	【著作】海軍世界——観人観我——慚愧慚愧	天仇
▲1912/4/16	【著作】送唐少川	天仇
▲1912/4/17	【著作】送荘蘊寛	天仇
▲1912/4/18	【著作】哀満洲	天仇
▲1912/4/18,4/22	【著作】胆大妄為之袁世凱	天仇
▲1912/4/19	【著作】国際団中之民国	天仇
▲1912/4/19-4/20	【著作】袁世凱之罪状	天仇
▲1912/4/19-5/17	【著作】海外天府論	天仇
▲1912/4/20	【著作】新国承認論	天仇
▲1912/4/20	【著作】宗社党之心	天仇
▲1912/4/21	【著作】三手議員	天仇
▲1912/4/21-4/23	【著作】上海之危機	天仇
▲1912/4/23	【著作】哭言論	天仇
▲1912/4/24	【著作】男女平等教育論	天仇
▲1912/4/24	【著作】奇論	天仇
▲1912/4/25	【著作】天仇之涙	天仇
▲1912/4/26	【著作】討袁世凱	天仇
▲1912/4/28	【著作】告北方報界	天仇
▲1912/4/28	【著作】租界与非租界——反客為主之上海	天仇
▲1912/4/28	【著作】怪哉尹昌衡之政策	天仇
▲1912/4/28	【著作】咄咄軍界統一会	天仇
▲1912/4/29	【著作】嗚呼南満	天仇
▲1912/4/30	【著作】咄咄蒋雁行	天仇
▲1912/4/30	【著作】吾国果為猶太乎	天仇
▲1912/5/1	【著作】昨日所見	天仇
▲1912/5/1	【著作】咄咄縦匪殃民	天仇
▲1912/5/1	【著作】嗚呼経済解決	天仇
▲1912/5/2	【著作】哀章炳麟	天仇
▲1912/5/2	【著作】唐紹儀与施肇基	天仇
▲1912/5/2-5/8	【著作】非民声之《民声報》	天仇
▲1912/5/3	【著作】軍界統一会之結果	天仇
▲1912/5/3	【著作】借款之用	天仇
▲1912/5/3-5/7	【著作】関税改正問題	天仇
▲1912/5/4	【著作】章炳麟之醜史	天仇
▲1912/5/5	【著作】国民捐——愛国国民速起	天仇
▲1912/5/6	【著作】宋漢章案之誤会	天仇
▲1912/5/7	【著作】正告《神州報》	天仇
▲1912/5/9	【著作】告《民声》《神州》両報之最後語	天仇
▲1912/5/8-5/9	【著作】龐青城事略	天仇
▲1912/5/10	【著作】拙哉《民声報》	天仇
▲1912/5/10	【著作】国民捐辦法	天仇
▲1912/5/11	【著作】糾正《神州報》之誤	天仇
▲1912/5/12	【著作】為国民捐事告同業	天仇
▲1912/5/12	【著作】節省財政者如此	天仇
▲1912/5/12	【著作】敬詢統一党	天仇
▲1912/5/13	【著作】荒謬絶倫之《神州報》	天仇
▲1912/5/13	【著作】政見之一斑	天仇
▲1912/5/13	【著作】亡国之外交	天仇
▲1912/5/14	【著作】咄咄不可教誨之《民声報》	天仇
▲1912/5/14	【著作】華僑之選挙権	天仇
▲1912/5/16	【著作】華僑代議権問題	天仇
▲1912/5/16	【著作】怪議員	天仇
▲1912/5/16	【著作】参議院之悲観	天仇
▲1912/5/17	【著作】国民捐之最後策	天仇
▲1912/5/17	【著作】共和中之保案	天仇
▲1912/5/18	【著作】監督財政抗議	天仇
▲1912/5/18	【著作】民国之禍胎	天仇
▲1912/5/19	【著作】我之経済政策	天仇
▲1912/5/19	【著作】該死的章炳麟	天仇
▲1912/5/19	【著作】人心竟死尽乎	天仇
▲1912/5/20	【著作】殺	天仇
▲1912/5/20-5/25	【著作】討熊希齢	天仇
▲1912/5/21	【著作】熊希齢与盛宣懐	天仇
▲1912/5/21	【著作】亡乎不亡	天仇
▲1912/5/22-5/27	【著作】資力集合論	天仇
1912/5/22		
▲1912/5/24	【著作】五月二十二日夜	天仇
▲1912/5/25	【著作】上海会審公堂観	天仇

上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
	同盟会の反袁闘争を支持する『民権報』は闘争に消極的な中華民国自由党との関係を絶つ。その後、『民権報』と『民立報』の論戦が始まる。
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45, 51	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01(尹昌衡之政策), 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
	『民権報』5/20付は、戴季陶の政府が外債を借りることに反対する時評(「殺」)を掲載。5/22、公共租界総巡捕房は『民権報』が「殺人を鼓吹した」疑いで、会審公廨に対し『民権報』主筆戴季陶の逮捕状の発行を請求。5/23、会審公廨は処分保留と裁定。6/13、会審公廨は戴季陶に「中華民国新刑律第270条の秩序妨害罪」として罰金洋30元を払うことと裁定。
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○45	

▲1912/5/25	【著作】唐紹儀与熊希齢	天仇
▲1912/5/25	【著作】章炳麟殺人	天仇
▲1912/5/27	【著作】袁世凱専横無道	天仇
▲1912/5/27	【著作】何為奄奄無生気	天仇
▲1912/5/28	【著作】熊希齢之怪手腕	天仇
▲1912/5/28	【著作】平民与常識	天仇
▲1912/5/28-6/2	【著作】今日之両大問題	天仇
▲1912/5/29	【著作】嗚呼五色旗	天仇
▲1912/5/29	【著作】嗚呼滅種之機	天仇
▲1912/6/1	【著作】嗚呼共和国国民	天仇
▲1912/6/3	【著作】私争亡国論	天仇
▲1912/6/3	【著作】嗚呼無救国	天仇
▲1912/6/3	【著作】国民銀行説復活矣	天仇
▲1912/6/5	【著作】咄咄専制魔王	天仇
▲1912/6/5	【著作】質問国民捐籌辦処	天仇
▲1912/6/5-6/7	【著作】今日之外交界	天仇
▲1912/6/6	【著作】斥《神州報》	天仇
▲1912/6/6	【著作】慰《中央新聞》記者	天仇
▲1912/6/6	【著作】章炳麟非人	天仇
▲1912/6/7	【著作】怪哉今日之争	天仇
▲1912/6/7	【著作】蒙古去了	天仇
▲1912/6/9	【著作】川滇辺防問題	天仇
▲1912/6/9	【著作】趙秉鈞与同盟会	天仇
▲1912/6/9	【著作】請看熊希齢之政策	天仇
▲1912/6/10	【著作】嗚呼無法国	天仇
▲1912/6/10	【著作】怪哉歩軍統領	天仇
▲1912/6/11-6/12	【著作】都市罪悪論	天仇
▲1912/6/11-6/12	【著作】西蔵去了	天仇
▲1912/6/12	【著作】三省平権問題	天仇
▲1912/6/13	【著作】嗚呼無衣之中国人	天仇
▲1912/6/13	【著作】日人之醋意	天仇
▲1912/6/14	【著作】棉布救亡論	天仇
▲1912/6/14	【著作】嗚呼抵制	天仇
▲1912/6/15	【著作】罪大悪極之熊希齢	天仇
▲1912/6/15	【著作】大総統之叛逆	天仇
▲1912/6/16	【著作】劉束軒案憤言——侮蔑人権——侮蔑法律	天仇
▲1912/6/16	【著作】水性楊花之人妖	天仇
▲1912/6/17	【著作】南洋之教育	天仇
▲1912/6/17	【著作】此之謂交渉使	天仇
▲1912/6/18	【著作】応徳閎与熊希齢	天仇
▲1912/6/19	【著作】公道与人道	天仇
▲1912/6/19	【著作】西蔵与全国	天仇
▲1912/6/19	【著作】告袁樹勲	天仇
▲1912/6/20	【著作】頌梁如浩	天仇
▲1912/6/20	【著作】光栄之土耳其	天仇
▲1912/6/21	【著作】政界之大波瀾	天仇
▲1912/6/21	【著作】咄咄暴俄	天仇
▲1912/6/22	【著作】満洲休矣	天仇
▲1912/6/23	【著作】政海之悪潮	天仇
▲1912/6/23	【著作】満洲真亡矣	天仇
▲1912/6/24	【著作】告国民	天仇
▲1912/6/25-6/27	【著作】共和政治与政党内閣	天仇
▲1912/6/27	【著作】人之無良	天仇
▲1912/6/29	【著作】逆党与逆報	天仇
▲1912/6/30	【著作】道徳之賊	天仇
▲1912/7/1	【著作】可笑可笑	天仇
▲1912/7/1-7/2, 7/4-7/5, 7/7, 7/9-7/10	【著作】今日之国是	天仇
▲1912/7/2	【著作】対於陸徴祥之希望	天仇
▲1912/7/2	【著作】怪哉五報之電	天仇
▲1912/7/3	【著作】坐待亡国	天仇
▲1912/7/3	【著作】悲往事	天仇
▲1912/7/4-7/5	【著作】民仇国賊	天仇
▲1912/7/5	【著作】悲西蔵	天仇
▲1912/7/5	【著作】怪哉黎元洪之電	天仇
▲1912/7/6	【著作】組織内閣之怪状——吾早料及之	天仇
▲1912/7/6	【著作】刑罰与人道	天仇
▲1912/7/6	【著作】揭開仮面現真容	天仇
▲1912/7/7	【著作】聯美与聯日	天仇
▲1912/7/7	【著作】減薪与政費	天仇
▲1912/7/9	【著作】借款之昨今	天仇
▲1912/7/9	【著作】告進徳会諸君	天仇
▲1912/7/11	【著作】共和与平和	天仇
▲1912/7/12	【著作】吃飯問題	天仇
▲1912/7/12	【著作】苦了小百姓	天仇
▲1912/7/16	【著作】民性更始論	天仇
▲1912/7/16	【著作】妙哉此答	天仇
▲1912/7/16	【著作】中国人之自殺策	天仇
▲1912/7/16-7/17	【著作】戦争与平和	天仇
▲1912/7/17	【著作】秘密党之救済	天仇
▲1912/7/17, 7/19	【著作】根本与枝葉	天仇
▲1912/7/17-7/18, 7/20	【著作】世界政潮評	天仇
▲1912/7/18	【著作】新国務院之悪因	天仇
▲1912/7/19	【著作】社会之悪徳——嘲罵之罪——誹謗之罪	天仇
▲1912/7/19	【著作】趙秉鈞	天仇
▲1912/7/20	【著作】苦哉中国之外交家	天仇
▲1912/7/20	【著作】承認民国問題	天仇
▲1912/7/21	【著作】痛後痛——驚濤駭浪之政潮	天仇
▲1912/7/21-7/29	【著作】資産与物産——我之中国経済観	天仇
▲1912/7/22	【著作】痛中痛——嗚呼共和之前途	天仇
▲1912/7/23	【著作】破壊《約法》之言論	天仇
▲1912/7/23	【著作】日皇之病	天仇

上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01(滅種之機), 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01(私事亡国論), 31, 44, 45	
上海『民権報』○01(嗚呼無教国), 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	日本語訳(抄訳):伊東昭雄訳「漁夫の利をねらう日本――「今日の外交界」から」(『中国人の日本人観100年史』91-92頁)。
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01(綿布救亡論), 31(綿布救国論), 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01(大総統之叛迹), 44, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01(公論与人道), 31(同前), 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○44, 45	
上海『民権報』○01, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 31, 45	日本語訳:伊東昭雄訳「刑罰と人道――「文明国」日本の正体」(『中国人の日本人観100年史』92-93頁)。
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31(共和与和平), 45	
上海『民権報』○35, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31(民権更始論), 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○35, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 31, 45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 31, 44, 45	
上海『民権報』○01, 45	
上海『民権報』○01, 45	

▲1912/7/24	【著作】今日之政治観	天仇
▲1912/7/25	【著作】瓜分之実現	天仇
▲1912/7/26	【著作】《約法》第三十四条解釈問題	天仇
▲1912/7/27	【著作】兵力専制中之政海潮	天仇
▲1912/7/28	【著作】兵力専制之大成功	天仇
▲1912/7/30	【著作】機会均等之結果	天仇
▲1912/7/30	【著作】斥《神州報》	天仇
▲1912/7/31	【著作】四十五年之日本	天仇
▲1912/7/31	【著作】華僑与商業	天仇
▲1912/7/?	【著作】永嘆	〈*天仇〉
▲1912/8/2	【著作】敬詢行厳先生——邏輯家言如是乎	天仇
▲1912/8/2	【著作】北京之暗殺世界	天仇
▲1912/8/2	【著作】北京之専制世界	天仇
▲1912/8/3	【著作】可憐民国之国民代表——告鉄血主義之国民	天仇
▲1912/8/3	【著作】保皇党之慣技——竊名賊	天仇
▲1912/8/4-8/5	【著作】日本政治方針之誤	天仇
▲1912/8/4-8/5	【著作】斥周学熙	天仇
▲1912/8/5	【著作】他山之石——敬告国民	天仇
▲1912/8/6	【著作】英法同盟説之真象——欧羅巴之緊急風雲	天仇
▲1912/8/6	【著作】虚名与実際——斥中央政府之妄	天仇
▲1912/8/7	【著作】梁啓超来了	天仇
▲1912/8/7	【著作】好個工商次長	天仇
▲1912/8/7	【著作】甚麽民国	天仇
▲1912/8/8	【著作】招商局事之静観	天仇
▲1912/8/9	【著作】日俄与内外蒙古	天仇
▲1912/8/9	【著作】介紹新書	天仇
▲1912/8/10	【著作】今日之党派観	天仇
▲1912/8/10-8/11	【著作】将来之英徳戦争	天仇
▲1912/8/11	【著作】遞解韓人事件与国際法	天仇
▲1912/8/12	【著作】慨言論——質《時事新報》之心史君	天仇
▲1912/8/13	【著作】一年来之文字縁	天仇
▲1912/8/13	【著作】一月中之黄禍祥——両姓走狗	天仇
▲1912/8/15-8/16	【著作】中国之軍事問題	天仇
▲1912/8/18-8/28	【著作】南洋之現状	天仇
▲1912/8/18	【著作】〈*西洋医梁重良の紹介〉	孫文, 黄興, 陳其美, 戴天仇など
▲1912/8/19	【著作】咄咄乱殺世界	天仇
▲1912/8/21	【著作】張振武案之善後策	天仇
▲1912/8/22	【著作】張方被殺再論——並駁為袁世凱弁護者	天仇
▲1912/8/23	【著作】法学上之疑問——質問行厳	天仇
▲1912/8/23	【著作】黎元洪万悪不赦	天仇
▲1912/8/25	【著作】為法典問題答行厳	天仇
▲1912/8/29	【著作】章行厳之人格観	天仇
▲1912/8/29-8/30	【著作】国民国家与国民党——我所希望於国民党者	天仇
▲1912/8/31	【著作】弾劾与讒謗	天仇
▲1912/8/31	【著作】《民国西報》之価値	天仇
▲1912/9/1	【著作】《民国西報》之対英論	天仇
▲1912/9/2-9/4	【著作】大失望	天仇
▲1912/9/4	【著作】遷都問題	天仇
1912/9-1912/10頃		
▲1912/10/19	【著作】沈秉堃与趙秉鈞	天仇
▲1912/10/19	【著作】塩	天仇
▲1912/10/19-10/20	【著作】産業発展策	天仇
▲1912/10/20	【著作】欧亜悪風雲	天仇
▲1912/10/20-11/27	【著作】第三次平和会之研究	天仇
▲1912/10/22-10/26	【著作】巴爾幹半島之悪風雲	天仇
▲1912/10/23	【著作】蒙古亡	天仇
▲1912/10/25	【著作】対俄之最後方針	天仇
▲1912/10/27	【著作】中俄国交断絶	天仇
▲1912/10/29	【著作】告岑春煊	天仇
▲1912/10/29-11/3	【著作】征蒙与拒俄	天仇
▲1912/10/30	【著作】告蒙蔵局	天仇
▲1912/10/31-11/1	【著作】斥岑春煊	天仇
▲1912/11/2	【著作】好馬素——《民国西報》之奮鬥	天仇
▲1912/11/3	【著作】良心昧尽之《新聞報》	天仇
▲1912/11/3-11/5	【著作】省長民選問題	天仇
▲1912/11/5	【著作】福建実業之前途	天仇
▲1912/11/6	【著作】岑春煊狡弁——不違法之違法	天仇
▲1912/11/7	【著作】日本之承認条件	天仇
▲1912/11/7	【著作】告梁如浩	天仇
▲1912/11/8	【著作】美国総統選挙観——威爾遜当選	天仇
▲1912/11/8	【著作】岑春煊又狡弁	天仇
▲1912/11/9	【著作】日本議員観光団之態度	天仇
▲1912/11/9	【著作】日本侵略満洲之決心	天仇
▲1912/11/10	【著作】省長民選——斥主張簡任之都督	天仇
▲1912/11/10	【著作】介紹《好東西》	天仇
▲1912/11/13	【著作】告《時事新報》之斐青君	天仇
▲1912/11/17	【著作】告民主党	天仇
▲1912/11/18	【著作】蒙事中之八面観	天仇
▲〈*1912/11/21〉	【著作】兵与餉	
▲1912/12/1	【著作】庫乱中之内政観	天仇
▲1912/12/1	【著作】管子之経済政策	天仇
▲1912/12/2	【著作】強硬対付之効果	天仇
▲1912/12/2, 12/4	【著作】救上海	天仇
▲1912/12/4	【著作】民国存亡大問題	天仇
▲1912/12/4	【著作】咄咄陸徴祥	天仇
▲1912/12/5	【著作】日本内閣辞職観	天仇
▲1912/12/9	【著作】庫乱中告女界	天仇
▲1912/12/9	【著作】選挙中告女界	天仇
▲1912/12/10	【著作】省長民選与自治	天仇
▲1912/12/11	【著作】中国経済不振之原因	天仇
▲1912/12/11	【著作】書暴俄政府之罪	天仇
▲1912/12/12	【著作】暴俄之現状	天仇

上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○01,31,45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○01,45	
上海『民権報』○35,45	
上海『民権報』○45	
〈*上海『民権報』〉○01,44,45	
上海『民権報』○35,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01(指日本政治方針之誤),31(同前),44(同前),45	日本語訳:戴天仇君「日本政治方針之誤」(上海『滬上評論』第1号,1912/9/1)。
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01,31,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○35,44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○01,31,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○35,44,45	
上海『民権報』○45	
上海『中華民報』	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○35,44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	中国同盟会、統一共和党、国民共進会、国民公党、共和実進会が合併し国民党を結成(北京)。
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○35,44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
	南洋に行き、当地の政治情況などを考察。9/9、袁世凱は孫文を全国鉄路籌劃督辦に任命。10/14、孫文は中国鉄路総公司を設立し、自ら総理に就任することと上海に辦事処を開設することを発表。戴季陶は上海に戻った後、孫文の機要秘書に就く。この頃、国民党上海交通部評議部議員に任命される。
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○31,45	
上海『民権報』○01(巴耳幹半島之悪風雲),31,44(同前),45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○01,31,44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
○35	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	

▲1912/12/12	【著作】内閣辞職後之日本政局	天仇
▲1912/12/13	【著作】評《社会世界》	天仇
▲1912/12/13-12/15	【著作】駁《独立周報》之怪論	天仇
▲1912/12/14	【著作】救苦人——希望平民共済組合	天仇
▲1912/?	【著作】亡国妖	〈*天仇〉
△1912/12/15	【著作】例言	天仇
▲1912/12/17	【著作】評《庸言報》	天仇
▲1912/12/17	【著作】民国之教育問題	天仇
▲1912/12/18	【著作】民国之怪物——勲位	天仇
▲1912/12/18-12/20	【著作】民国之省制問題——並駁梁啓超	天仇
▲1912/12/19	【著作】武力外交——告外交当局者	天仇
▲1912/12/19	【著作】俄国之新国会	天仇
▲1912/12/19	【著作】菲律賓之将来	天仇
▲1912/12/21	【著作】国家精神論	天仇
▲1913/1/7	【著作】中国人民之自治力	天仇
▲1913/1/12	【著作】鉄路与馬路——告英文《楚報》記者	天仇
▲1913/1/29	【著作】正式総統問題——駁《大共和報》	天仇
▲1913/2/10	【著作】民国政治論	戴季陶
1913/2/11		
1913/2/13		
1913/2/14		
1913/2/20		
1913/2/21		
1913/3/2		
1913/3/3		
1913/3/5-3/10		
1913/3/11		
1913/3/13		
1913/3/14		
1913/3/14-3/17		
△1913/3/17▲1913/3/18	【講演・談話記録】〈*福岡日日新聞社にて〉	
1913/3/19-3/21		
1913/3/22		
1913/3/23		
1913/3/25		
▲1913/4/3	【著作】強権陰謀之黒幕	天仇
▲1913/4/3	【著作】送国会議員	天仇
▲1913/4/5	【著作】致梅屋庄吉函	孫文, 馬君武, 何天炯, 戴天仇, 袁華選, 宋嘉樹
▲1913/4/7	【著作】専制与共和之激戦	天仇
▲1913/4/7	【著作】刑法上之《大共和報》	天仇
▲1913/4/8	【著作】昨日之会審	天仇
▲1913/4/8-4/9	【著作】国会開	天仇
▲1913/4/9	【著作】風潮	天仇
▲1913/4/10	【著作】詰会審公堂	天仇
▲1913/4/12	【著作】中華民国与世界	天仇
▲1913/4/12	【著作】華盛頓与袁世凱	天仇
▲1913/4/12	【著作】胆大小毛賊	天仇
▲1913/4/13	【著作】敬告各政党	天仇
▲1913/4/13	【著作】鈍初死中国生	天仇
▲1913/4/14	【著作】嗚呼人道	天仇
▲1913/4/14	【著作】餘生痛	天仇
▲1913/4/15	【著作】準備殺人	天仇
▲1913/4/16	【著作】嗚呼維持大局	天仇
▲1913/4/16	【著作】咄咄無人道之民賊	天仇
▲1913/4/18	【著作】告官僚派政客	天仇
▲1913/4/18	【著作】吁嗟乎走狗	天仇
▲1913/4/20	【著作】魔鬼祷告	天仇
▲1913/4/21	【著作】敬告世界文明国	天仇
▲1913/4/21	【著作】告辦宋案者	天仇
▲1913/4/22	【著作】民賊行動	天仇
▲1913/4/22	【著作】卑劣議員之卑劣手段	天仇
▲1913/4/23	【著作】公論之公論	天仇
▲1913/4/23-4/24	【著作】亡国病民之借款	天仇
▲1913/4/24	【著作】三党合併観	天仇
▲1913/4/24	【著作】詰程徳全	天仇
▲1913/4/26	【著作】詰反対之白種人	天仇
▲1913/4/26	【著作】討叛逆	天仇
▲1913/4/27	【講演・談話記録】在上海紀念黄花崗起義並林述慶追悼大会上演説辞	
▲1913/5/2	【著作】政府売国	天仇
▲1913/5/2	【著作】政府叛国	天仇
▲1913/5/3	【著作】感謝美国	天仇
▲1913/5/3	【著作】鉄案——駁趙秉鈞電	天仇
▲1913/5/6	【著作】告法官	天仇
▲1913/5/6	【著作】民権之敵	天仇
▲1913/5/10	【著作】乱命	天仇
▲1913/5/20-6/1	【著作】愛之真理	天仇
▲1913/5/23	【著作】良心与決心	天仇
▲1913/5/27	【著作】嗚呼恐怖時代	天仇
▲1913/5/27	【著作】嗚呼不愛之時代——弔徐宝山	天仇
▲1913/6/17-6/19	【著作】理勢論〈*下篇は未見〉	天仇
△1913/6/26以前	【著作】軍政及軍備	天仇
▲1913/7/4	【著作】孔子	天仇
1913年夏		
1913/9/?		

上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
〈*上海『民権報』〉○01	
○01	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』臨時増刊○44,45	第4章を抜粋し、転載:天仇「約法与憲法」(上海『国民月刊』第1巻第1号,1913/5)。
	孫文などとともに、山城丸に乗船。上海発。
	長崎着。
	東京着。
	孫文、戴季陶(通訳)、渋沢栄一、大倉喜八郎、山本条太郎などは、中国興業公司の第1回発起人大会(三井物産の集会所)に出席。
	孫文、戴季陶、渋沢栄一などは、中国興業公司の定款について会談(渋沢栄一の事務所)。
	孫文の通訳として、孫文、桂太郎の会談に出席。3/2以外の日にも孫、桂の会談が設けられたとする。
	孫文、戴季陶などは、中国興業公司の定款について会談。
	東京発。横浜、横須賀、名古屋、京都、奈良を経て、大阪着。
	大阪の基督教青年会館講演会に出席。
	神戸着。神阪中華会館での華僑の歓迎会、基督教青年会館での講演会、国民党神戸交通部での歓迎会に出席。
	神戸華僑同文学校、川崎造船所、呉錦堂別荘「松海別荘」を訪問。常磐花壇での神戸市と地元実業家の歓迎会に出席。その後、三上豊夷邸を訪問。
	神戸発。呉、宮島、下関、戸畑を経て、八幡着。
『福岡日日新聞』「孫氏代理の来社」	孫文の代理として福岡日日新聞社を訪問。
	福岡発。大牟田、荒尾、熊本を経て、長崎着。
	青年会館での講演会、福建会館での華僑の歓迎会、小島鳳鳴館での官民歓迎会、精洋亭での長崎医専中国人留学生の歓迎会に出席。鈴木天眼邸を訪問。
	天洋丸に乗船。長崎発。
	上海着。上海の黄興邸にて、黄興、孫文、陳其美、居正、鈕永建、柏文蔚などと宋教仁暗殺事件の対応策について会談。
上海『民権報』○44,45	4/3、4/5、4/9、中国興業公司設立の準備会議(上海の中国鉄路総公司辦事処)に出席。
上海『民権報』○45	
『孫中山全集』第3巻,53-54頁	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○44,45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○45	
上海『民権報』○44,45	
○35	原著:稲田周之助。
上海『民権報』○44,45	
	第二革命では、上海、南京、大連などに渡り、何海鳴とともに討袁軍に参加。商震、金子克巳、山田純三郎などとも連絡を取る。外務省記録『各国内政関係雑纂　支那ノ部　革命党関係(亡命者ヲ含ム)』(東京:外務省外交史料館,1.6.1.4-2-1)第93号(駐南京領事船津辰一郎より外務大臣牧野伸顕宛)1913/8/15付。同前記録　高秘特発第1305号(長崎県知事李家隆介より外務大臣牧野伸顕宛)1913/9/1付。同前記録　高秘特収第1464号(長崎県知事李家隆介より外務大臣牧野伸顕宛)1913/9/16付。同前記録　秘第473号(関東都督府民政長官白仁武より外務次官松井慶四郎宛)1913/9/4付。同前記録　第185号(駐奉天総領事落合謙太郎より外務大臣牧野伸顕宛)1913/9/4付。
	山田純三郎とともに台南丸に乗船。大連発。日本人記者「嶋田政一」と名のる。

△1913/9/27▲1913/9/28	【講演・談話記録】〈*門司にて〉	
△1913/9/28▲1913/9/29	【講演・談話記録】〈*神戸にて〉	
1913/9/29		
1913/9/30		
1913/10/1		
△1913/10/2	【著作】誓約　第六号	中華民国浙江省呉興県人　戴天仇
1913/10/4		
1913/10/6		
1913/10/7		
1913/10/8		
1913/10/9		
1913/10/10		
1913/10/11		
1913/10/14		
1913/10/15		
1913/10/16		
1913/10/17		
1913/10/18		
1913/10/20		
1913/10/22		
1913/10/23		
1913/10/24		
1913/10/25		
1913/10/27		
1913/10/28		
1913/10/29		
1913/10/30		
1913/10/31		
1913/11/2		
1913/11/3		
1913/11/4		
1913/11/5		
1913/11/6		
1913/11/8以前		
1913/11/8		
1913/11/11		
1913/11/13		
1913/11/15		
1913/11/17		
1913/11/18		
1913/11/19		
1913/11/22		
1913/11/23		
1913/11/24		
1913/11/25		
1913/11/26		
1913/11/27		
1913/12/1		
1913/12/3		
1913/12/5		
1913/12/6		

『大阪毎日新聞』「戴天仇来る」;『東京日日新聞』「戴天仇東上す」	門司着。前掲外務省記録　秘第506号(関東都督府民政長官白仁武より外務次官松井慶四郎宛)1913/9/26付。同前記録　高□第5953号(山口県知事馬淵鋭太郎より外務大臣牧野伸顕宛)1913/9/29付。同前記録　高秘第3762号(福岡県知事南弘より外務大臣牧野伸顕宛)1913/9/29付。同前記録　乙秘第1389号「支那亡命客ニ関スル件」1913/10/3付。同前記録　乙秘第1408号「支那亡命客ニ関スル件」1913/10/6付。
『神戸新聞』「戴天仇大に語る」;『大阪毎日新聞』「戴天仇東上」	午後9時、陸恵生、山田純三郎、工藤十三雄、菊池良一とともに東京の孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1366号「孫文ノ動静」1913/9/29付。戴季陶は日本滞在中、孫文宅の隣に位置する頭山満邸を頻繁に訪問。
	菊池良一、何天炯、山田純三郎とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1372号「孫文ノ動静」1913/9/30付。
	何天炯、山田純三郎とともに、孫文宅を訪問。国民新聞社宛に同紙掲載記事の訂正を求める書簡を書く。前掲外務省記録　乙秘第1372号「孫文ノ動静」1913/9/30付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1382号「孫文ノ動静」1913/10/1付。日本の警保局・警視庁関係の資料「在京亡命支那人名簿(大正2年10月1日調査)「乙秘第1376号」」によると、戴季陶については「入京年月日:大正2年9月28日;住所:赤坂区青山南町5ノ45　山田<*純三郎>方;前職:新聞記者;異名:角田正一;氏名:戴天仇;年齢:24」と記されている。『原敬関係文書』第10巻・書類篇七,307-308頁。
『中華民国革命秘笈』巻末付録「党員誓約書」	孫文宅を訪問。孫文とともに犬養毅を訪問。その後孫文宅で、頭山満、寺尾亨と会談。前掲外務省記録　乙秘第1386号「孫文ノ動静」1913/10/2付。同日、中華革命党党員誓約書(第6号)を書き、入党。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1400号「孫文ノ動静」1913/10/4付。
	山田純三郎とともに孫文宅を訪問。孫文とともに渋沢栄一、秋山定輔を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1412号「孫文ノ動静」1913/10/6付。同前記録　乙秘第1415号「孫文ノ動静」1913/10/7付。同前記録　乙秘第1420号「孫文ノ動静」1913/10/7付。
	陸恵生、陳其美、山田純三郎とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1420号「孫文ノ動静」1913/10/7付。
	菊池良一、山田純三郎とともに、孫文宅を訪問。孫文、菊池良一、山田純三郎、頭山満、寺尾亨と会談。山田純三郎とともに退出。前掲外務省記録　乙秘第1430号「孫文ノ動静」1913/10/8付。
	山田純三郎とともに孫文宅を訪問。孫文宅で何天炯、陳其美、宮崎寅蔵、山田純三郎、萱野長知らと「支那地図」を出して会談。前掲　乙秘第1436号「孫文ノ動静」1913/10/9付。
	菊池良一、陳其美、何天炯とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1439号「孫文ノ動静」1913/10/10付。同前記録　乙秘第1440号「孫文ノ動静」1913/10/10付。前者の記録(乙秘第1439号)によると、戴季陶を初めて「戴伝賢」と記している。
	山田純三郎とともに孫文宅を訪問。孫文宅で何天炯、陸恵生、謝玉章、趙謙、宮崎寅蔵、山田純三郎らと「支那地図」を出して会談。前掲外務省記録　乙秘第1447号「孫文ノ動静」1913/10/11付。
	何天炯、山田純三郎、宮崎寅蔵とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第154<*1454?>号「孫文ノ動静」1913/10/14付。
	孫文宅を訪問。孫文は外出するが、戴季陶は外出せず。前掲外務省記録　乙秘第1474号「孫文ノ動静」1913/10/15付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1480号「孫文ノ動静」1913/10/16付。
	孫文宅を訪問。張匯滔、田桐とともに退出。前掲外務省記録　乙秘第1482号「孫文ノ動静」1913/10/17付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1488号「孫文ノ動静」1913/10/18付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1497号「孫文ノ動静」1913/10/20付。同前記録　乙秘第1502号「孫文ノ動静」1913/10/21付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1507号「孫文ノ動静」1913/10/22付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1518号「孫文ノ動静」1913/10/23付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1523号「孫文ノ動静」1913/10/24付。
	陳其美、菊池良一、山田純三郎とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1528号「孫文ノ動静」1913/10/25付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1536号「孫文ノ動静」1913/10/27付。
	孫文宅を訪問。山田純三郎、菊池良一、田桐などと「昨日及本日ノ東京毎夕新聞」記事について会談。前掲外務省記録　乙秘第1543号「孫文ノ動静」1913/10/28付。同前記録　乙秘第1547号「孫文ノ動静」1913/10/月29付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1547号「孫文ノ動静」1913/10/29付。
	孫文は渋沢栄一に招待に応じ、戴季陶、陳其美、何天炯を伴い、日本橋区兜町の渋沢栄一事務所を訪問。孫文は事務所で中野武営と山本條太郎らと会談。その後、戴季陶は孫文に従い、陳其美とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1554号「孫文ノ動静」1913/10/30付。同前記録　乙秘第1559号「孫文ノ動静」1913/10/31付。
	菊池良一とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1559号「孫文ノ動静」1913/10/31付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1566号「孫文ノ動静」1913/11/2付。同前記録　乙秘第1570号「孫文ノ動静」1913/11/3付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1570号「孫文ノ動静」1913/11/3付。同前記録　「乙秘第1578号」1913/11/4付。
	宮崎寅蔵とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1578号「孫文ノ動静」1913/11/4付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。戴季陶は、三井物産の森恪が築地有明舘に泊っているか否かを確認するために、孫文宅を退出。孫文宅に戻り、森恪が同舘に泊っていることを報告し、陳其美とともに退出。前掲外務省記録　乙秘第1586号「孫文ノ動静」1913/11/5付。同前記録　乙秘第1590号「孫文ノ動静」1913/11/6付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1590号「孫文ノ動静」1913/11/6付。
	劉芸舟が「東京戴天仇ノ悪事ヲ報告シ同人ヲ排斥スル」と主張したと記録される。前掲外務省記録　関東都督府民政長官代理佐藤●より外務次官松井慶四郎宛1913/11/8付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1599号「孫文ノ動静」1913/11/8付。同前記録　乙秘第1601号「孫文ノ動静」1913/11/9付。
	「国民党幹事長」楊某とともに孫文宅を訪問。楊某、朱超と会談。前掲外務省記録　乙秘第1611号「孫文ノ動静」1913/11/11付。
	孫文宅を訪問。陳其美、詹大悲、王憲章と談議。前掲外務省記録　乙秘第1619号「孫文ノ動静」1913/11/13付。同前記録　乙秘第1624号「孫文ノ動静」1913/11/14付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1631号「孫文ノ動静」1913/11/16付。
	陳其美、任寿棋とともに、孫文宅を訪問。孫文、陳其美、任寿棋、「西洋人 FREDERICK」と会談。前掲外務省記録　乙秘第1638号「孫文ノ動静」1913/11/17付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1640号「孫文ノ動静」1913/11/18付。同前記録　乙秘第1644号「孫文ノ動静」1913/11/19付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1644号「孫文ノ動静」1913/11/19付。同前記録　乙秘第1647号「孫文ノ動静」1913/11/20付。
	何海鳴、鄭人康、季雨霖、劉大同、鈕永建、ほか1名とともに孫文宅を訪問。洪涛とも会談。前掲外務省記録　乙秘第1653号「孫文ノ動静」1913/11/22付。同前記録　乙秘第1657号「孫文ノ動静」1913/11/23付。
	林天心、陳其美、「国民党支部幹事長」楊某とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1657号「孫文ノ動静」1913/11/23付。同前記録　乙秘第1662号「孫文ノ動静」1913/11/24付。
	林天心とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1662号「孫文ノ動静」1913/11/24付。同前記録　乙秘第1666号「孫文ノ動静」1913/11/25付。
	山田純三郎とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1666号「孫文ノ動静」1913/11/25付。
	林天心とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1673号「孫文ノ動静」1913/11/26付。同前記録　乙秘第1677号「孫文ノ動静」1913/11/27付。
	4名(姓名不詳)とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1677号「孫文ノ動静」1913/11/27付。同前記録　乙秘第1680号「孫文ノ動静」1913/11/28付。
	孫文宅を訪問し、陳其美と会談。前掲外務省記録　乙秘第1689号「孫文ノ動静」1913/12/1付。同前記録　乙秘第1696号「孫文ノ動静」1913/12/2付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1699号「孫文ノ動静」1913/12/3付。同前記録　乙秘第1705号「孫文ノ動静」1913/12/4付。
	孫文宅を訪問。その後、頭山満を訪問。「頭山ハ昨夜来戴天仇ノ来訪ヲ頻ト待受ケ居タリ」。前掲外務省記録　乙秘第1710号「孫文ノ動静」1913/12/5付。
	馬素、林天心、孫棣三とともに、孫文宅を訪問。林虎、施錫周、鄭天楚、吉田忠眞、王志祥、張永正などと会談。「面会ノ要件ハ吉田忠眞ガ外国ニ出発スルニ付キ戴天仇ニ挨拶ノ為メナリシト云フ」。前掲外務省記録　乙秘第1718号「孫文ノ動静」1913/12/6付。

1913/12/8		
1913/12/9		
1913/12/10		
1913/12/11		
1913/12/12		
1913/12/15		
1913/12/17		
1913/12/19		
1913/12/23		
1913/12/24		
1913/12/27		
1913/12/29		
△1913年初冬	【書画】書辛亥旧作	天仇
1913	【講演・談話記録】〈*台湾問題について〉	
△1914	【著作】〈*頭山満宛の書簡〉	
1914/1/2-1/9		
1914/1/9		
1914/1/15		
1914/1/16		
1914/1/18		
1914/1/19		
1914/1/26		
1914/2/3		
1914/2/13		
1914/3/15		
1914/3/17		
1914/3/18		
1914/4/6		
1914/4/8		
1914/4/11		
1914/4/12		
1914/4/19		
1914/4/20		
1914/4/22		
1914/4/26		
1914/4/29		
1914/4/30(?)		
▲1914/4	【著作】南遊雑記	天仇
▲1914/5/1	【著作】国家精神より見たる支那	戴天仇
▲1914/5	【著作】支那に於ける共和思想	天仇戴伝賢
▲1914/5/10, 6/10	【著作】髑髏出海記	戴髑髏生(戴生)戯訳
▲1914/5/10	【著作】一知半解	思秋楼主
△1914/5/17, 5/23▲1914/6/10	【著作】欧美時局観	思秋
▲1914/6/10	【著作】中国革命論	思秋
△1914/6/12, 6/15, 6/17, 6/18, 7/1, 7/4▲ 1914/7/10	【著作】欧美時局観	季陶
1914/6/18		
1914/6/24		
1914/6/25		
1914/7/1		
1914/7/8		
▲1914/7/10	【著作】中華民国与聯邦組織	季陶
▲1914/7/10	【著作】欧羅巴大同盟論	季陶評訳
△1914/7/15, 7/25, 7/31▲1914/8/10	【著作】世界時局観	季陶
1914/7/16		
1914/7/23		
1914/7/26		
1914/7/27		

	孫文宅を訪問。孫文と大井憲太郎の筆談に加わり、通訳を務める。「其大要ハ〈*大井が〉日華実業協会ヲ標目ニ何カ事業ヲ起サン為ノ孫ノ賛助ヲ得ンガ為ノ也」。「然ルニ孫ハ目下ノ處考慮スベキ旨ヲ答ヘ単ニ上海方面ノ実業家ニ紹介状ヲ送ル丈ノ便宜ヲ承諾シタルモノノ如シ」。その後、宋嘉樹、鄭林雙、施錫周、朱華経、張民立、陳其美、岑樓、曽尚武などと会談。また忍邨の訪問を受ける。前掲外務省記録　乙秘第1729号「孫文ノ動静」1913/12/8付。
	「孫ハ戴天仇ニ速ニ中国興業会社ニ行ク可キ旨電話ヲ掛ケントシタルモ戴天仇ノ住所ニハ電話ノ架設ナキ為メ其假中止セリ」。前掲外務省記録　乙秘第1731号「孫文ノ動静」1913/12/9付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1735号「孫文ノ動静」1913/12/10付。
	孫文宅を訪問。頭山満を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1741号「孫文ノ動静」1913/12/11付。北京の袁世凱政権は、革命党員逮捕につながる情報に懸賞金を出すと発表(戴季陶は5000元)。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1747号「孫文ノ動静」1913/12/12付。同前記録　乙秘第1752号「孫文ノ動静」1913/12/13付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1762号「孫文ノ動静」1913/12/15付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1772号「孫文ノ動静」1913/12/18付。
	鈕永建、馬素とともに、孫文宅を訪問。田桐とも会談。前掲外務省記録　乙秘第1781号「孫文ノ動静」1913/12/20付。
	陳其美、馬素とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1804号「孫文ノ動静」1913/12/23付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1822号「孫文ノ動静」1913/12/25付。
	張継とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1842号「孫文ノ動静」1913/12/28付。
	陳其美とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1849号「孫文ノ動静」1913/12/30付。
『中華民国革命秘笈』口絵	12月、戴季陶と鈕有恒の間に男児が生まれる。安国と名づける。
	東京にて林獻堂の側近の甘得中と会談(板垣退助の紹介)。甘得中の言によると、戴季陶は次のように述べた。「祖国〈*中国〉は、現在袁世凱がまさに国を盗んで帝制をしこうとしており、したがって現在袁討伐に尽力するのみで他を顧みる余裕がない。袁消滅の後も、一番の整頓を必要とし、故に十年のうちは台湾人を助けることができない。日本は民権思想の洗礼を経ていない国で、革命運動を洪水猛獣のように視て、いささかも同情がなく、貴君らが革命党の人と往来すると、必ず圧迫をうけ、利を見ざる前にその害を受けよう。貴君らのために計れば、まず道を見つけて日本中央の枢要と結び識り、日本朝野の同情を獲得し、その力をかりて台湾総督府の施策を牽制し、以てその圧力を緩和することを期し、台湾同胞の苦痛を減少できることを計るべきである」。
前掲外務省記録　乙秘第463号「孫文ノ動静」1914/2/15付	
	孫文の命を受け、張継とともに東京発。大連に向かう。戴季陶は途中、長崎で折返し東京に戻る。前掲外務省記録　乙秘第31号「孫文ノ動静」1914/1/10付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第31号「孫文ノ動静」1914/1/10付。
	孫文宅を訪問。陳其美などと会談。前掲外務省記録　乙秘第75号「孫文ノ動静」1914/1/16付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第82号「孫文ノ動静」1914/1/17付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第97号「孫文ノ動静」1914/1/19付。
	孫文の命を受け、陳其美、山田純三郎とともに東京発。大連に向かう。前掲外務省記録　乙秘第126号「亡命者陳其美等ノ行動」1914/1/22付。
	大連着。前掲外務省記録　秘第14号(関東都督府民政長官代理佐藤●より外務次官松井慶四郎宛)「陳其美戴天仇等大連到着ニ付厳重視察中ノ件」1914/1/26付。
	大連滞在中の戴季陶より孫文宛の書簡が孫文宅に着く。前掲外務省記録　乙秘第310号「孫文ノ動静」1914/2/4付。
	「一昨十三日大連病院木村藤吉ヨリ頭山満宛ノ書留郵便一通着シ〈*、〉頭山ヨリ之ヲ孫ニ示シ〈*、〉孫ハ再ビ昨十四日之ヲ頭山ニ返戻シタリ、其内容ハ大要左ノ如クナリキ〈*、〉吾々ハ今満鉄病院ニ在ルモ至ツテ軽症ナリ、吾々ハ現今各方面ニ渉リ運動ナシツヽアルモ目下ノ処実力ナキ為メ遺憾ナガラノ凡テ不能ニ終レリ〈*、〉未ダ何等効果ヲ得ルノ運ビニ至ラズ〈*、〉尚今月中ハ病院ニ在リ〈*、〉各方面ノ調査ヲナシ運動スル筈ナリ、……陳其美、戴天仇」。前掲外務省記録　乙秘第463号「孫文ノ動静」1914/2/15付。大連では南満洲鉄道株式会社理事犬塚信太郎の斡旋を受け、満鉄大連病院を本拠として、東北の討袁世凱・張作霖活動を行おうとするが失敗に終わる。戴季陶は関外民軍籌備処参議に就く。『革命文献』第46輯, 485-490頁。
	台南丸に乗船。大連発。前掲外務省記録　秘第82号(関東都督府民政長官代理佐藤●より外務次官松井慶四郎宛)「革命党員陳其美一行本邦向ケ出帆ノ件」1914/3/15付。
	門司着。列車で長崎に向かう。前掲外務省記録　長崎県知事李家隆介より外務大臣牧野伸顕宛1914/3/18付。同前記録　高秘第2117号(福岡県知事南弘より外務大臣牧野伸顕宛)「支那人来往ニ関スル件」1914/3/18付。
	長崎着。前掲外務省記録　高秘特収804号(長崎県知事李家隆介より内務大臣原敬、外務大臣牧野伸顕、警視総監安楽兼道、福岡県知事南弘、佐賀県知事不破彦麿、山口県知事馬淵鋭太郎宛)「亡命支那人来□〈*往〉ノ件」1914/3/18付。同前記録　高秘特収804号ノ二(同前宛)「亡命支那人ニ関スル件」1914/3/18付。
	長崎発。前掲外務省記録　高秘特収814号(長崎県知事李家隆介より内務大臣原敬、外務大臣牧野伸顕、警視総監安楽兼道、神奈川県知事大島久満次、兵庫県知事服部一三、大阪府知事大久保利武、山口県知事馬淵鋭太郎、福岡県知事南弘、佐賀県知事不破彦麿宛)「支那亡命者ニ関スル件」1914/4/6付。
	山田純三郎、菊池良一とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第754号「孫文ノ動静」1914/4/9付。戴季陶は帰京後、政法学校(神田区錦町三丁目十番地東京工科大学内)において翻訳を務める。吉野作造は政法学校において政治史の講師を務める。この頃、戴季陶と吉野の交流が始まる。
	孫文の命を受け、菊池良一、山田純三郎などとともに秋山定輔を訪問。秋山に孫との会見を要請。前掲外務省記録　乙秘第767号「孫文ノ動静」1914/4/12付。なお、4月21日に孫文と秋山定輔が会談。前掲外務省記録　乙秘第807号「孫文ノ動静」1914/4/22付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第768号「孫文ノ動静」1914/4/13付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第793号「孫文ノ動静」1914/4/20付。
	山田純三郎、菊池良一、榊原政雄とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第803号「孫文ノ動静」1914/4/21付。
	孫文宅を訪問。孫文と犬養毅との会談に出席。前掲外務省記録　乙秘第813号「孫文ノ動静」1914/4/23付。
	孫文宅を訪問するが、孫文不在のため即時退出。前掲外務省記録　乙秘第828号「孫文ノ動静」1914/4/27付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第844号「孫文ノ動静」1914/4/30付。
	田桐は「各省重要人物一覧表」を孫文に提出。戴季陶は「戴天仇　浙江呉興県人前民権報記者」、「次重要人」とされる。
上海『民権素』第1集	
東京『国家及国家学』第2巻第5号	
中華民国通信社(東京)編『支那と日本』第2年第5号	
東京『民国』第1年第1号, 第2号, 第4号	
東京『民国』第1年第1号〇44	
東京『民国』第1年第2号〇31(欧美時局観(一)), 44	
東京『民国』第1年第2号〇31, 44	
東京『民国』第1年第3号〇31(欧美時局観(二))	
	山田純三郎とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1169号「孫文ノ動静」1914/6/19付。
	民国社にて孫文と会談。田桐、曹亜伯、丁仁傑、蕭萱が出席。前掲外務省記録　乙秘第1245号「孫文ノ動静」1914/6/25付。
	山田純三郎、原口聞一とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1254号「孫文ノ動静」1914/6/26付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1294号「孫文ノ動静」1914/7/2付。
	中華革命党結成(東京)。
東京『民国』第1年第3号〇31, 44	単行本:戴伝賢『中華民国与聯邦組織』(上海:戴寓, 1914/7初版;1914/9第二版;1917/12第三版)。
東京『民国』第1年第3号〇44	
東京『民国』第1年第4号〇31	
	「〈*昨十六日〉午後六時戴天仇来訪　談ニ参加シ仝九時廿五分退出ス　午後六時廿分孫ハ来訪者中ノ胡漢民、戴天仇ノ両名ヲ伴ヒ隣家ナル頭山満方ヲ訪問　来合セ居タル千秋某(元海軍佐官ナリト云フ)和田某及頭山ノ三名ト会見シ何事カ密談ヲ凝リシタル後八時頃ヨリ酒宴ヲ開キ九時廿分頃一同退散帰宿セリ」。前掲外務省記録　乙秘第1350号「孫文ノ動静」1914/7/17付。
	「本日発行中央新聞第二面ニ支那亡命者「戴天仇銃殺説」ト題スル北京電報ヲ掲載セシガ戴ハ現ニ在京セリ　右為念内報ス」。前掲外務省記録　乙秘第1376号「新聞記事ニ就テ」1914/7/23付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1395号「孫文ノ動静」1914/7/27付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1399号「孫文ノ動静」1914/7/28付。

1914/7/28		
1914/7/29		
1914/8/3		
1914/8/4以前		
▲1914/8/10	【著作】答問〈*劉真、倦游人、一介からの質問に答える〉	季陶
▲1914/8/10	【著作】独語	季陶
1914/8/11		
1914/8/18		
1914/8/19		
1914/8/20		
1914/8/21		
1914/8/22		
▲1914/8/24	【講演・談話記録】〈*欧州の戦乱および中国革命に関して〉	
1914/8/24		
1914/8/25		
1914/8/26		
1914/8/27		
1914/8/28		
1914/8/30		
1914/8/31		
1914/9/1		
1914/9/3		
1914/9/6		
1914/9/7		
1914/9/8		
1914/9/11		
1914/9/13		
1914/9/16		
1914/9/19		
1914/9/20-12/16		
1914/9/21		
1914/9/21〈*もしくは22〉		
1914/9/23		
1914/9/25		
1914/9/29		
1914/10/1		
1914/10/3		
1914/10/4		
1914/10/9		
1914/10/10		
1914/10/11		
1914/10/12		
1914/10/14		
1914/10/19		
1914/10/20		
1914/10/21		
1914/10/22		
1914/10/24		
1914/10/26		
1914/10/28		
1914/10/29		
1914/10/30		
1914/10/31		
1914/11/4		
1914/11/5		
1914/11/8		
1914/11/11		
▲1914/11/12	【講演・談話記録】〈*時事について〉	
1914/11/14		

	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1402号「孫文ノ動静」1914/7/29付。
	陳其美、菊池良一とともに孫文宅を訪問。その後、陳其美宅を訪問。陳其美宅にて孫文、陸恵生などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1407号「孫文ノ動静」1914/7/30付。
	孫文宅を訪問。その後再度、宋嘉樹とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1428号「孫文ノ動静」1914/8/4付。
	池亨吉が「日本ノ或一部ノ者及ヒ新聞紙カ、戴天仇如キヲ偉人視シ居ルハ大ナル間違」と論じる。前掲外務省記録　乙秘第1432号「池亨吉ノ談」1914/8/4付。
東京『民国』第1年第4号〇44(関於《中華民国与聯邦組織》的通信答問)	主な転載箇所:「復劉真書」(戴伝賢『中華民国与聯邦組織』(上海:戴寓,1917/12第三版));「復倦游人書」(同前)。
東京『民国』第1年第4号〇44(独語<*内12篇>)	全13篇。
	陳其美宅を訪問。陳其美、周応時、一瀬斧太郎、菊池良一、犬塚信太郎、孫文と会談。前掲外務省記録　乙秘第1473号「孫文ノ動静」1914/8/13付。
	陳其美宅を訪問。陳其美、蒋介石、孫文と会談。前掲外務省記録　乙秘第1526号「孫文ノ動静」1914/8/19付。
	宮崎民蔵とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1542号「孫文ノ動静」1914/8/20付。
	陳其美宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1561号「陳其美ノ言動」1914/8/21付。
	陳其美に使いを出す。孫文宅を訪問。頭山満を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1592号「陳其美ノ動静」1914/8/22付。同前記録　乙秘第1576号「孫文ノ動静」1914/8/22付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1598号「孫文ノ動静」1914/8/23付。
前掲外務省記録　乙秘第1615号「支那革命党員戴天仇ノ談話」1914/8/24付	
	孫文宅を訪問。孫文と犬養毅との会談に出席。孫文の代理として呉藻華、劉佐成と会談。前掲外務省記録　乙秘第1628号「孫文ノ動静」1914/8/25付。同前記録　乙秘第1631号「孫文ノ動静」1914/8/25付。同前記録　乙秘第1651号「犬養毅ト孫文会見ノ件」1914/8/27付。「本月<*八月>廿四日大阪毎日新聞所載ノ「支那革命党蹶起セン」ト題スル記事中劉<*芸舟>、張<*堯郷>ハ官費ノ亡命者ニシテ袁探ナルヤノ噂アリ云々ノ件ニ関シ<*、>劉ハ大ニ憤慨シ居リシカ<*、>仝人等該記事ヲ以テ孫黄両派ノ軋轢ニ胚胎スル孫派戴天仇等ノ中傷ニ係ルモノト称シ極力該記事ヲ否認シ居レリ」。同前記録　特秘第713号(大阪府知事大久保利武より外務大臣加藤高明宛)「支那亡命者ノ行動ニ関スル件」1914/8/30付。
	陳其美宅を訪問。陳其美、周応時、孫文、蒋介石と会談。前掲外務省記録　乙秘第1641号「孫文ノ動静」1914/8/26付。
	孫文宅を訪問。孫文、金佐之などと会談(この間に犬養毅が孫文宅を訪れたが会談に出席したか否かは不明)。孫文に従い、高橋医院に入院中の陳其美を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1650号「孫文ノ動静」1914/8/27付。
	孫文宅を訪問。頭山満を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1669号「孫文ノ動静」1914/8/28付。
	高橋医院に入院中の陳其美を訪問。陳其美、孫文、蒋介石、陸恵生、丁仁傑、周応時、山田純三郎、菊池良一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1678号「支那亡命者会合□□ニ関スル件」1914/8/29付。
	高橋医院に入院中の陳其美を訪問。陳其美、孫文、居正、田桐、陸恵生、蒋介石ほか2名と会談。前掲外務省記録　乙秘第1695号「孫文ノ動静」1914/8/31付。
	孫文宅を訪問。その後、孫文に従い、高橋医院に入院中の陳其美を訪問。陳其美、孫文、蔡奎祥ほか2名と会談。前掲外務省記録　乙秘第1705号「孫文ノ動静」1914/9/1付。
	孫文宅を訪問。孫文、方健飛などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1710号「孫文ノ動静」1914/9/2付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、金佐之と会談。前掲外務省記録　乙秘第1751号「孫文ノ動静」1914/9/5付。
	孫文宅を訪問。許崇智、周応時、田桐と会談。前掲外務省記録　乙秘第1775号「孫文ノ動静」1914/9/7付。
	孫文宅を訪問。胡漢民と会談。前掲外務省記録　乙秘第1789号「孫文ノ動静」1914/9/8付。
	胡漢民とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1801号「孫文ノ動静」1914/9/9付。
	孫文宅を訪問。孫文、蔡奎祥と会談。その後、頭山満を訪問か。前掲外務省記録　乙秘第1818号「孫文ノ動静」1914/9/12付。
	「本日午前九時三十分ヨリ頭山満方ニ陳其美、田桐、胡漢民、戴天仇、萱野長知等集会何事カ協議ヲ凝シツヽアリ」。前掲外務省記録　乙秘第1824号「孫文ノ動静」1914/9/13付。「午後二時陳其美、田桐、戴天仇、楊庶堪、王静一、許崇智、胡漢民ノ七名来訪対談何事カ協議ヲナシ」。同前記録　乙秘第1832号「支那亡命者ト頭山満会合ノ件」1914/9/14付。同前記録　乙秘第1830号「孫文ノ動静」1914/9/14付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、許崇智、陳其美、萱野長知、居正、王統一、田桐、丁仁傑などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1848号「孫文ノ動静」1914/9/17付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1876号「孫文ノ動静」1914/9/20付。
	「中華革命党革命方略」制定に関する会合が17回に亘り開かれる。戴季陶はこの内11回出席し、書記を務める。
	孫文宅を訪問。孫文、楊庶堪、田桐、許崇智、王静一、居正、丁仁傑、王統一と会談。その後、孫文、萱野長知とともに板垣退助を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1879号「孫文ノ動静」1914/9/21付。
	上海の東亜同文書院学生小□□一郎とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1889号「孫文ノ動静」1914/9/22付。
	孫文宅を訪問。陳其美、和田瑞と会談。前掲外務省記録　乙秘第1912号「孫文ノ動静」1914/9/24付。
	孫文宅を訪問。陳其美、王静一、楊益謙、閻崇階、張魯藩、余祥輝、金佐之と会談。前掲外務省記録　乙秘第1924号「孫文ノ動静」1914/9/26付。
	陳其美を訪問。孫文、陳其美、陳家麟、楊庶堪などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1951号「孫文ノ動静」1914/9/30付。
	和田瑞とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1966号「孫文ノ動静」1914/10/2付。
	孫文宅を訪問。張孟介、史立斎、方壁、張雨人と会談。前掲外務省記録　乙秘第1702号「孫文ノ動静」1914/10/3付<*10/4付ではないか>
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1985号「孫文ノ動静」1914/10/5付。
	胡漢民、宋嘉樹、宋慶齢、金佐治とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2025号「孫文ノ動静」1914/10/10付。
	孫文宅を訪問。居正、陳其美、丁仁傑、楊庶堪、王統一と会談。退出後、丁仁傑、楊庶堪、田桐とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2035号「孫文ノ動静」1914/10/11付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2042号「孫文ノ動静」1914/10/12付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2052号「孫文ノ動静」1914/10/13付。
	孫文宅を訪問。「胡漢民、居正、王静一、戴天仇、金佐治、陳其美、丁仁傑、許宗<*崇>智、田桐、楊庶堪ノ十名ト一室ニ会合革命党総章ヲ繙キ何事カ協議ヲ凝シタリ」。前掲外務省記録　乙秘第2071号「孫文ノ動静」1914/10/15付。
	孫文宅を訪問。陳其美と会談。前掲外務省記録　乙秘第2019号「孫文ノ動静」1914/10/20付。
	孫文宅を訪問。居正、胡漢民、金佐治、韓恢と会談。その後、林蔚陸を訪問。陳其美、胡漢民などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2115号「孫文ノ動静」1914/10/21付。
	孫文宅を訪問。楊庶堪、王静一、胡漢民、田桐、丁仁傑、居正、金佐治、陳其美、許崇智、劉玉山と会談。再び孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2119号「孫文ノ動静」1914/10/22付。
	中華革命党署理浙江支部長に任命される。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2137号「孫文ノ動静」1914/10/25付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。胡漢民、宮崎寅蔵、何天炯、金佐治、夏重民、陳其美、陳家麟、宋嘉樹などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2146号「孫文ノ動静」1914/10/27付。
	孫文宅を訪問。頭山満を訪問。許崇智宅を訪問。孫文、胡漢民、金佐治などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2157号「孫文ノ動静」1914/10/29付。
	孫文宅を訪問。孫文、夏重民、何友とともに上野公園で開かれた「文部省美術展覧会」を参観。前掲外務省記録　乙秘第2163号「孫文ノ動静」1914/10/30付。
	孫文宅を訪問。孫文、陳其美とともに頭山満、中野徳次郎と会談。前掲外務省記録　乙秘第2170号「孫文ノ動静」1914/10/31付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2177号「孫文ノ動静」1914/11/1付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2203号「孫文ノ動静」1914/11/5付。
	孫文宅を訪問。陳其美、何天炯と会談。孫文とともに犬養毅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2210号「孫文ノ動静」1914/11/6付。
	丁仁傑とともに孫文宅を訪問。任寿祺、余祥輝、陳其美、凌鉞、曽孟啓、何友、夏重民などと会談。孫文、陳其美、何友、夏重民とともに写真撮影。その後、陳其美を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2234号「孫文ノ動静」1914/11/9付。
	孫文宅を訪問。孫文、王統一、周応時、丁仁傑、王静一、金佐治、田桐、陳其美、居正、楊庶堪、許崇智、胡漢民と会談。前掲外務省記録　乙秘第2256号「孫文ノ動静」1914/11/12付。
前掲外務省記録　乙秘第2255号「中国流亡者戴天仇ノ談話」1914/11/12付	
	孫文宅を訪問。丁仁傑、王統一、夏重民、胡漢民、王静一、田桐、陳其美、周応時、許崇智、金佐之、居正、楊庶堪と会談。前掲外務省記録　乙秘第2285号「孫文ノ動静」1914/11/15付。

1914/11/15		
1914/11/18以前		
1914/11/19		
1914/11/21		
▲1914/11/22-1915/1/6	【著作】存歿亡歿	戴天仇(天仇戴伝賢)
1914/11/22		
1914/11/27		
1914/11/28		
1914/11/30		
1914/12/3		
1914/12/5		
1914/12/8		
1914/12/10		
1914/12/15		
1914/12/16		
1914/12/17		
▲1914/12/18	【著作】百訓　上	季陶
1914/12/20		
1914/12/21		
1914/12/25		
1914/12/26		
1914/12/28		
1914/12/29		
1914/12/30		
1915/1/1		
1915/1/3		
1915/1/13		
1915/1/23		
1915/1/26		
1915/1/27		
▲1915/1	【著作】滬北両日聞見記	季陶
1915/2/3		
1915/2/5		
1915/2/17		
1915/2/20		
1915/2/24		
1915/2/27		
▲1915/3/1	【講演・談話記録】〈*時事について〉	
1915/3/1		
1915/3/3		
1915/3/4		
1915/3/9		
1915/3/12		
1915/3/19		
▲1915/3/19前後	【講演・談話記録】東洋ノ命運	戴天仇
1915/3/25		
1915/3/26		
1915/3/31		
1915/4/6		
1915/4/10		
1915/4/12		
1915/4/13		
1915/4/14		
1915/4/17		
1915/4/21		
1915/4/23		
1915/4/24		
△1915/4/26	【講演・談話記録】支那政治思想の変遷〈*吉野作造が担当する東京帝国大学法学部政治史演習の時間において〉	
1915/4/27		
1915/4/29		
1915/5/1		

	林蔚陸を訪問。王静一、陳家麻、田桐、居正、陳中孚、丁仁傑、余祥輝などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2289号「孫文ノ動静」1914/11/16付。
	「金佐治、戴天仇ノ両名ハ事故ノ為メ不参ノ旨電話ニテ孫文ノ許ニ□シ来タリ」。前掲外務省記録　乙秘第2307号「支那革命運動ニ干スル件」1914/11/18付。
	孫文宅を訪問。金佐治などと会談。退出後、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2320号「孫文ノ動静」1914/11/20付。中華革命党浙江支部長に任命される。
	孫文宅を訪問。王統一、丁仁傑、胡漢民、居正、王静一、周応時、金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第3253号「孫文ノ動静」1914/11/22付。
中華民国通信社(東京)『民報』	全22篇。
	孫文宅を訪問。「戴天仇ハ昨二十二日電話ヲ架設ス(芝四六一二)」。前掲外務省記録　乙秘第2354号「孫文ノ動静ニ関スル件」1914/11/23付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2388号「孫文ノ動静」1914/11/28付。
	丁仁傑とともに孫文宅を訪問。退出後、孫文宅を訪問。陳中孚、王統一、王静一、周応時、居正、胡漢民、丁仁傑、金佐治などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2394号「孫文ノ動静」1914/11/29付。
	王統一とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2411号「孫文ノ動静」1914/12/1付。
	孫文宅を訪問。丁仁傑、居正、胡漢民、田桐、陳其美、山田純三郎と会談。孫文、陳其美とともに頭山満、寺尾亨を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2462号「孫文ノ動静」1914/12/4付。
	孫文宅を訪問。王統一、丁仁傑、王静一、楊庶堪、胡漢民、居正、周応時、金佐治、田桐、和田瑞、萱野長知、夏重民などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2495号「孫文ノ動静」1914/12/6付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2530号「孫文ノ動静」1914/12/9付。
	孫文宅を訪問。丁仁傑、王静一、王統一、胡漢民、金佐治、周応時と会談。前掲外務省記録　乙秘第2553号「孫文ノ動静」1914/12/11付。
	孫文宅を訪問。傅文郁、丁仁傑、夏重民、王統一と会談。前掲外務省記録　乙秘第2609号「孫文ノ動静」1914/12/16付。
	王統一、胡漢民とともに孫文宅を訪問。居正、金佐治、王静一、何天炯、丁仁傑、田桐、楊庶堪、周応時と会談。前掲外務省記録　乙秘第2625号「孫文ノ動静」1914/12/17付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2637号「孫文ノ動静」1914/12/18付。
東京『民国』第1年第6号○33	全25篇。一部の転載箇所:「季陶先生百訓之精華録」(『国民必読[中華国民必読]』(上海,1915/7))。
	陳其美、山田純三郎とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2674号「孫文ノ動静」1914/12/21付。
	孫文宅を訪問。曹亜伯、山田純三郎と会談。前掲外務省記録　乙秘第2690号「孫文ノ動静」1914/12/22付。
	陳其美、山田純三郎とともに孫文宅を訪問。夏重民、陳家麻などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2732号「孫文ノ動静」1914/12/26付。
	王統一、許崇智とともに孫文宅を訪問。居正、丁仁傑、金佐治、王静一、胡漢民、夏重民、陳其美、萱野長知、楊庶堪と会談。前掲外務省記録　乙秘第2739号「孫文ノ動静」1914/12/27付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2754号「孫文ノ動静」1914/12/29付。
	孫文宅を訪問。孫文、陳其美とともに秋山定輔、宮崎寅蔵を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2759号「孫文ノ動静」1914/12/30付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。頭山満を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2761号「孫文ノ動静」1914/12/31付。
	孫文宅を訪問。「年賀ノ挨拶ニ来リタル」。前掲外務省記録　乙秘第4号「孫文ノ動静」1915/1/2付。
	張静江とともに孫文宅を訪問。胡漢民、李箕□ 、陳其美、王天鵬、山田純三郎と会談。前掲外務省記録　乙秘第8号「孫文ノ動静」1915/1/4付。
	孫文宅を訪問。曹亜伯、殷文海、王統一、何天炯と会談。前掲外務省記録　乙秘第49号「孫文ノ動静」1915/1/13付。
	孫文宅を訪問。朱超、曹亜伯、居正、金佐之、王静一、楊庶堪、胡漢民、田桐、萱野長知と会談。前掲外務省記録　乙秘第106号「孫文ノ動静」1915/1/24付。
	孫文宅を訪問。山田純三郎、津久井平吉、陳其美と会談。前掲外務省記録　乙秘第120号「孫文ノ動静」1915/1/27付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。山田純三郎と会談。前掲外務省記録　乙秘第129号「孫文ノ動静」1915/1/28付。
上海『民権素』第4集	
	孫文宅を訪問。山田純三郎、陳其美、王統一と会談。前掲外務省記録　乙秘第187号「孫文ノ動静」1915/2/4付。
	孫文宅を訪問。周淡游、張如霞、楊益謙、盛碧譚、陳其美と会談。前掲外務省記録　乙秘第300号「孫文ノ動静」1915/2/6付。
	孫文宅を訪問。孫文、陳其美、胡漢民、王静一、周応時、楊庶堪、田桐、丁仁傑、何天炯、許崇智などと会談。前掲外務省記録　乙秘第311号「孫文ノ動静」1915/2/18付。
	孫文宅を訪問。王静一、胡漢民、陳其美、金佐治、何天炯、田桐、丁仁傑、楊庶堪、夏重民、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第355号「孫文ノ動静」1915/2/21付。
	胡漢民とともに孫文宅を訪問。許崇智、居正、田桐、楊庶堪、王静一、金佐治、丁仁傑、何天炯、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第398号「孫文ノ動静」1915/2/25付。
	孫文宅を訪問。孫文、胡漢民、居正、王静一、金佐治、丁仁傑、夏重民、葉夏声、田桐、蕭萱、陳其美、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第427号「孫文ノ動静」1915/2/28付。
前掲外務省記録　乙秘第435号「中国流亡者戴天仇ノ談話」1915/3/1付	
	孫文宅を訪問。韋玉、夏重民、葉夏声、何天炯、居正、蘇曼殊、金佐治、陳其美と会談。前掲外務省記録　乙秘第445号「孫文ノ動静」1915/3/2付。
	孫文宅を訪問。頭山満を訪問。陳其美、金佐治、居正、王静一、胡漢民、葉夏声、丁仁傑、田桐等と会談。前掲外務省記録乙秘第463号「孫文ノ動静」1915/3/4付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第473号「孫文ノ動静」1915/3/5付。
	孫文宅を訪問。何天炯、胡漢民、鄧鏗、陳其美、許崇智、居正、金佐治、丁仁傑、田桐などと会談。前掲外務省記録　乙秘第517号「孫文ノ動静」1915/3/10付。
	菊池良一とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第544号「孫文ノ動静」1915/3/13付。
	3/12-19の間、和田三郎(板垣退助代理)、田桐などとともに高知に向かう。萱野長知が高知市から衆議院議員に立候補したため(第12回総選挙)、孫文の代理として応援演説を行う(演題は「東洋ノ命運」)。犬養毅も応援演説を行う。3/19、五台山に登る。
崎村義郎「濱口雄幸と争った選挙戦」129-130頁	第二次大隈重信内閣内務大臣大浦兼武より黒岩周六(涙香)宛の書簡(1915/4/11付)に記されている。
	戴季陶(赤坂区青山南町四ノ一八)より孫文宛の電報が孫文の許に着く。前掲外務省記録　乙秘第620号「孫文ノ動静(熱海ニ滞在)」1915/3/28付。
	孫文は戴季陶宛に電報を打つ。前掲外務省記録　乙秘第620号「孫文ノ動静(熱海ニ滞在)」1915/3/28付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第639号「孫文ノ動静」1915/4/1付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第653号「孫文ノ動静」1915/4/7付。
	張如霞とともに孫文宅を訪問。孫文、宋慶齢、張如霞とともに観桜。前掲外務省記録　乙秘第676号「孫文ノ動静」1915/4/11付。
	孫文宅を訪問。韋玉と会談。前掲外務省記録　乙秘第686号「孫文ノ動静」1915/4/13付。
	菊池良一とともに孫文宅を訪問。郭雲□と会談。前掲外務省記録　乙秘第692号「孫文ノ動静」1915/4/14付。
	孫文宅を訪問。夏重民、金佐治、居正などと会談。前掲外務省記録　乙秘第697号「孫文ノ動静」1915/4/15付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第718号「孫文ノ動静」1915/4/18付。
	孫文宅を訪問。宋嘉樹、宋靄齢、宋慶齢、楊庶堪、王静一、金佐治などと会談。前掲外務省記録　乙秘第741号「孫文ノ動静」1915/4/22付。
	居正とともに孫文宅を訪問。宋嘉樹、宋靄齢、宋慶齢と会談。退出後、孫文宅を訪問。金佐治、宋嘉樹、宋靄齢、宋慶齢と会談。前掲外務省記録　乙秘第752号「孫文ノ動静」1915/4/24付。
	孫文宅を訪問。楊庶堪、王静一、金佐治、胡漢民、蔡中和などと会談。前掲外務省記録　乙秘第758号「孫文ノ動静」1915/4/25付。
	津久井平吉とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第768号「孫文ノ動静」1915/4/27付。吉野作造の依頼を受け、東京帝国大学法学部政治史演習の時間に講演。
	津久井平吉とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第779号「孫文ノ動静」1915/4/28付。
	孫文宅を訪問。波多野春房、王静一、王文湘、胡漢民、黄実、金佐治、周知礼、宋嘉樹、蘇無涯などと会談。前掲外務省記録　乙秘第793号「孫文ノ動静」1915/4/3付<*30付であろう>
	田桐とともに孫文宅を訪問。金佐治、楊庶堪、王静一、居正、韋玉、丁仁傑、鄧鏗などと会談。前掲外務省記録　乙秘第811号「孫文ノ動静」1915/5/2付。

1915/5/3		
1915/5/5		
1915/5/5〈*あるいは6〉		
1915/5/7		
1915/5/8		
1915/5/10		
1915/5/20		
1915/5/22		
1915/5/30		
1915/6/4		
1915/6/5		
1915/6/18		
△1915/6/20以前	【講演・談話記録】〈*中日親善について〉	
1915/6/25		
1915/6/27		
1915/7/2		
1915/7/3		
1915/7/4		
▲1915/7/5	【著作】日支親善の理想境――ボイコツトの真相を論ず	戴天仇
1915/7/9		
1915/7/14		
1915/7/19		
1915/7/22		
1915/7/24		
1915/7/27		
1915/7/28		
1915/8/3		
1915/8/11		
1915/8/13		
1915/8/15		
1915/8/28		
1915/8/29		
1915/8/30		
1915/8/31		
▲1915/8	【著作】霊視	天仇
△1915/9/1▲1915/9/15	【講演・談話記録】〈*中国革命について〉	戴天仇
1915/9/3		
1915/9/4		
1915/9/6		
1915/9/7		
1915/9/8		
1915/9/10		
1915/9/11		
1915/9/12		
1915/9/15		
1915/9/16		
1915/9/19		
1915/9/21		
1915/9/23		
1915/9/24		
1915/9/27前後		
1915/9/28		
▲1915/9	【著作】断砕文章	天仇
1915/10/1		
1915/10/8		

	丁仁傑とともに孫文宅を訪問。孫文不在のため即時退出。前掲外務省記録　乙秘第82□号「孫文ノ動静」1915/5/4付。
	孫文宅を訪問。金佐治、波多野春房と会談。前掲外務省記録　乙秘第852号「孫文ノ動静」1915/5/6付。
	章時霞(横浜在住の学生)夫妻および許慨仁(横浜在住の生糸商人)とともに東京発。前掲外務省記録　甲秘第229号「支那亡命者帰京尾行引継ノ件」1915/5/8付。同前記録　兵発秘第583号「支那亡命者来往ノ件」1915/5/10付。
	神戸着。章時霞夫妻および許人天を神戸港で見送る。同日、神戸発。前掲外務省記録　兵発秘第583号「支那亡命者来往ノ件」1915/5/10付。「戴天仇密かに来る」(『神戸新聞』1915/5/11付)。
	東京着。前掲外務省記録　甲秘第229号「支那亡命者帰京尾行引継ノ件」1915/5/8付。同前記録　神高秘収第2229号「支那人尾行引継之件」1915/5/10付。
	孫文宅を訪問。徐蘇中、金佐治、菊池良一と会談。前掲外務省記録　乙秘第833号「孫文ノ動静」1915/5/11付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、金佐治、蘇無涯などと会談。東京府「荏原郡大井町□□川八〇三番地戴天仇方」において、孫文、胡漢民、金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第1067号「孫文ノ動静」1915/5/21付。
	孫文宅を訪問。陳中孚、金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第1095号「孫文ノ動静」1915/5/23付。
	島田経一とともに孫文宅を訪問。王静一、陳樹人、蘇無涯などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1191号「孫文ノ動静」1915/5/31付。
	孫文宅を訪問。韋玉、田桐、居正、鄧鏗と会談。前掲外務省記録　乙秘第1252号「孫文ノ動静」1915/6/5付。
	孫文が「築地三ノ一五同気倶楽部」において講演。戴季陶は通訳を務める。松浦厚、波多野春房、建部遯吾、金井延、中村進午、吉野作造、立作太郎、山川義太郎、和田呉松、福岡美井、渡辺千冬、福岡秀猪などが出席。前掲外務省記録　乙秘第1261号「孫逸仙ト帝国大学教授等会合ノ件」1915/6/5付。同前記録　乙秘第1265号「孫文ノ動静」1915/6/6付。
	孫文宅を訪問。王静一と会談。前掲外務省記録　乙秘第1355号「孫文ノ動静」1915/6/19付。
一記者「亡命客戴天仇君の『日支親善論』を聴く」(東京『雄辯』第6巻8月	
	孫文宅を訪問。厳華生、黎玉書、王静一と会談。前掲外務省記録　乙秘第1399号「孫文ノ動静」1915/6/26付。
	孫文宅を訪問。韋玉、「印度人パワネー及□ノイクモノハルカー」と会談。前掲外務省記録　乙秘第1407号「孫文ノ動静」1915/6/28付。
	孫文宅を訪問。高橋某(芝区南佐久間町旅館麻屋方止宿)に使いを出し書簡を送る。鄧鏗、王静一、金佐治と会談。退出後、孫文宅を訪問。馮自由と会談。前掲外務省記録　乙秘第1440号「孫文ノ動静」1915/7/3付。
	孫文宅を訪問。金佐治、居正、馮自由、韋玉、馬沢、張本漢と会談。前掲外務省記録　乙秘第1444号「孫逸仙ノ動静」1915/7/4付。
	孫文宅を訪問。金佐治、菊池良一と会談。前掲外務省記録　乙秘第1446号「孫文ノ動静」1915/7/5付。
東京『第三帝国』第45号	
	孫文宅を訪問。鄧鏗、林来、金佐治、王静一、林徳軒、王統一、居正、安健などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1478号「孫文ノ動静」1915/7/10付。
	黄孝直とともに孫文宅を訪問。楊庶堪、王静一、金佐治などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1495号「孫文ノ動静」1915/7/15付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1519号「孫文ノ動静」1915/7/20付。
	孫文宅を訪問。金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第1535号「孫文ノ動静」1915/7/23付。
	孫文、胡漢民とともに箱根に向かう。箱根小涌谷三河屋に投宿。前掲外務省記録　乙秘第1547号「孫文ノ動静」1915/7/25付。
	千筋ノ滝、浅間山方面を散策。前掲外務省記録　乙秘第1560号「孫文一行ノ動静」1915/7/29付。
	「印度人「バーグマン、シン」「ピー、エヌ、タクール」「エス、エー、シーフ」」が孫文を訪問。宿主は戴季陶の指示通り、彼らに孫文が逗留していないことを伝える。孫文は戴季陶の意思を問い質し、彼らと会談。前掲外務省記録　乙秘第1569号「孫文一行ノ動静」1915/7/31付。
	三河屋で孫文、胡漢民、渋沢栄一と会談。前掲外務省記録　乙秘第1604号「孫文ノ動静(箱根滞在中)」1915/8/5付。
	孫文宅を訪問。楊庶堪、金佐治、王静一と会談。孫文とともに頭山満を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1646号「孫文ノ動静」1915/8/12付。
	「午前十一時四十分戴天仇ヨリ孫へ電話アリ　何事カ交話ス」。前掲外務省記録　乙秘第1662号「孫文ノ動静」1915/8/14付。
	孫文宅を訪問。徐蘇中、王静一、「印度人アボニムカルジー」、田桐、金佐治、居正などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1674号「孫文ノ動静」1915/8/16付。
	胡漢民、金佐治などとともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第1247号「孫文ノ動静」1915/8/29付。
	孫文宅を訪問。「印度人」、黄理石、陳慶雲、王静一、胡漢民、鄧鏗、蕭萱、居正と会談。前掲外務省記録　乙秘第1251号「孫文ノ動静」1915/8/30付。
	孫文宅を訪問。居正、蕭萱、金佐治、胡漢民、田桐、萱野長知、「印度人アボニムカルジー」、張林生と会談。孫文、胡漢民とともに孫文が「新タニ借入レタル府下豊多摩郡千駄谷原宿百〇九番地」に向かう。前掲外務省記録　乙秘第1258号「孫文ノ動静」1915/8/31付。
	孫文宅を訪問。宮崎寅蔵、萱野長知、居正、蕭萱などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1263号「孫文ノ動静」1915/9/1付。
上海『民権素』第9集	
『留日学界儆商宣言　附開会通告、会場紀事』	記録:林修梅、于一鶴。孫文宅を訪問。楊庶堪などと会談。退出後、孫文宅を訪問。王統一、田桐と会談。前掲外務省記録　乙秘第1267号「孫文ノ動静」1915/9/2付。
	金佐治とともに孫文宅を訪問。鄧鏗、王静一と会談。前掲外務省記録　乙秘第1781号「孫文ノ動静」1915/9/4付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、陳樹材、和田瑞、居正と会談。前掲外務省記録　乙秘第1785号「孫文ノ動静」1915/9/5付。
	孫文宅を訪問。陳其美、胡漢民、田桐、王統一、「鷹取忠明(頭山満妻ノ弟)」、居正、金佐治、陳樹人と会談。前掲外務省記録　乙秘第1798号「孫文ノ動静」1915/9/7付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。陳其美、胡漢民、萱野長知、宮崎寅蔵、犬塚信太郎と会談。前掲外務省記録　乙秘第1800号「孫文ノ動静」1915/9/8付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、鄧鏗、陳其美、黄復生、許崇智と会談。前掲外務省記録　乙秘第1803号「孫文ノ動静」1915/9/9付。
	金佐治とともに孫文宅を訪問。陳其美、胡漢民、許崇智、田桐と会談。前掲外務省記録　乙秘第1814号「孫文ノ動静」1915/9/11付。
	陳其美とともに孫文宅を訪問。和田瑞、朱超と会談。前掲外務省記録　乙秘第1817号「孫文ノ動静」1915/9/12付。
	孫文宅を訪問。陳其美、鈕永建、田桐、居正、王静一、張毅、林徳軒、金佐治、陳中孚、萱野長知と会談。前掲外務省記録　乙秘第1823号「孫文ノ動静」1915/9/13付。
	金佐治とともに孫文宅を訪問。胡漢民、萱野長知、陳中孚、居正、黄復生、楊庶堪、王静一と会談。前掲外務省記録　乙秘第1840号「孫文ノ動静」1915/9/16付。
	金佐治とともに孫文宅を訪問。陳其美、居正、田桐、胡漢民、萱野長知と会談。前掲外務省記録　乙秘第1845号「孫文ノ動静」1915/9/17付。
	孫文宅を訪問。許崇智、王静一、金佐治、楊庶堪、鄧鏗、居正、黄復生、田桐と会談。前掲外務省記録　乙秘第1859号「孫文ノ動静」1915/9/20付。
	孫文宅を訪問。孫文、田桐、許崇智、黄復生、楊庶堪、胡漢民、居正、陳其美、王静一、金佐治、蕭萱等と会談。前掲外務省記録　乙秘第1873号「孫文ノ動静」1915/9/22付。
	孫文宅を訪問。陳其美、楊庶堪、田桐、王統一、胡漢民、許崇智、居正、安健、王静一、宋振、蒋介石、朱超と会談。前掲外務省記録　乙秘第1881号「孫文ノ動静」1915/9/24付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、金佐治、黄復生、楊庶堪、陳其美、鄧鏗、宋振、許崇智、田桐、鈕永建、居正、萱野長知、宮崎寅蔵、陳樹人などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1884号「孫文ノ動静」1915/9/25付。
	「在米ノ黄興ト孫文トハ従前ヨリ多少意見ヲ異ニシ居リ……目下在米ノ同志ヨリ之レガ調停融和ニ関シ孫ニ申シ込ミ来リタル為メ　戴天仇主トナリ　目下黄派ノ在京同志ト専ラ折衝ヲ重ネ居レル模様ナリト云フ”。前掲外務省記録　乙秘第1888号「支那革命党ニ関スル件」1915/9/27付。
	孫文宅を訪問。陳其美、萱野長知、陳中孚、金佐治、宋振、許崇智、胡漢民、黄増考、朱超などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1904号「孫文ノ動静」1915/9/29付。
上海『民権素』第10集	
	孫文宅を訪問。胡漢民などと会談。退出後、孫文宅を訪問。和田瑞などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1921号「孫文ノ動静」1915/10/2付。
	民国社(青山北町七ノ一)へ。民国社に訪れた孫文とともに孫文宅へ。孫文宅で、金佐治、王統一、胡漢民、鄧鏗、羅翼群、王静一、許崇智、田桐、楊庶堪などと会談。前掲外務省記録　乙秘第1968号「孫文ノ動静」1915/10/9付。

△1915/10/10	【講演・談話記録】〈*袁総統ノ皇帝即位計画ニ反対トシテ即位ト同時ニ革命ノ運動ヲ再興スベシ〉	
1915/10/16		
1915/10/18		
1915/10/25		
1915/11/5		
1915/11/10		
△1915/11/12	【著作】呈総務部報告浙江省支部選挙経過	
1915/11/25頃		
1915/11/29		
1915/11/30		
1915/12/1		
1915/12/2		
1915/12/3		
1915/12/6		
1915/12/7		
1915/12/8		
1915/12/9		
1915/12/10		
1915/12/15		
1915/12/17		
1915/12/20		
1915/12/21		
1915/12/22		
1915/12/23		
1915/12/26		
▲1916/1/1	【著作】孫逸仙論	戴天仇
▲1916/1/1	【書画】〈*芳原華山に頼まれて〉	天仇
1916/1/4		
1916/1/5		
1916/1/6		
1916/1/8		
1916/1/9		
1916/1/12		
1916/1/14		
1916/1/15		
1916/1/16		
1916/1/17		
1916/1/18		
1916/1/19		
1916/1/23		
1916/1/24		
1916/1/25		
1916/1/26		
1916/1/27		
1916/1/29		
1916/2/1		
1916/2/3		
1916/2/5		
1916/2/6		
1916/2/8		
1916/2/11		
1916/2/14		
1916/2/15		
1916/2/16		
1916/2/17		
1916/2/18		
1916/2/19		
1916/2/20		
1916/2/25		
1916/3/2		
1916/3/5		
1916/3/6		

前掲外務省記録　乙秘第1980号「中華民国第四週年国慶紀念大会ノ件」1915/10/10付	「在京革命党員中ナル李執中、戴天仇、田桐等及□留学生ノ一□ノ者等□計リ　李執中ヲ会長トナシ　帝政復活反対同志会ナル団体ヲ組織　(本会ノ目的ハ　在京支那人ガ　帝政問題ニ対シ　如何ナル意図ヲ□シ居ルヤヲ探ランガ為メニ設ケタル機関ニシテ　格別役員ト云フガ如キ設ケナク　従ツテ目下目覚シキ活動等ナシ居ラズ)　シ居ル”。前掲外務省記録　乙秘第1977号「支那革命ニ干〈*関〉スル新聞記事ニ就テ」1915/10/10付。10/10、李執中、譚振などとともに、「大中華民国第四週年国慶紀念会」(趣町区大手町の大日本私立衛生会)で講演。
	田桐とともに孫文宅を訪問。萱野長知、蘇無涯などと会談。前掲外務省記録　乙秘第2025号「孫文ノ動静」1915/10/17付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第2038号「孫文ノ動静」1915/10/19付。
	孫文と宋慶齢は和田瑞宅において婚礼を挙げるが、戴季陶は出席せず。
	孫文宅を訪問。孫文とともに民国社へ。前掲外務省記録　乙秘第3029号「孫文ノ動静」1915/11/6付。
	榊原政雄とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第3045号「孫文ノ動静」1915/11/11付。
○33	
	「孫文派」、「黄興派」、「岑春煊派」、「李烈鈞派」のそれぞれの意見が帝政問題を通じて一致することを見通し、各派の折衝を計るべく、鈕永建(黄興派)とともに奔走。前掲外務省記録　乙秘第3104号「支那帝政問題ニ対スル在京革命党ノ動静」1915/11/25付。
	孫文宅を訪問。王子明、王子衡と会談。孫文、宋慶齢、王子明、王子衡とともに散歩。孫文、萱野長知、金佐治、とともに民国社へ。その後、孫文宅へ。前掲外務省記録　乙秘第3167号「孫文ノ動静」1915/11/30付。
	孫文宅を訪問。金佐治、居正などと会談。前掲外務省記録　乙秘第3176号「孫文ノ動静」1915/12/1付。
	孫文宅を訪問。王子明、王子衡、居正、李官雲、金佐治と会談。孫文とともに小林雄介、秋山定輔を訪問(秋山は不在)。孫文宅へ。心準と会談。前掲外務省記録　乙秘第3183号「孫文ノ動静」1915/12/2付。
	孫文宅を訪問。居正、馮自由と会談。前掲外務省記録　乙秘第3189号「孫文ノ動静」1915/12/3付。
	菊池良一とともに孫文宅を訪問。王統一と会談。前掲外務省記録　乙秘第3193号「孫文ノ動静」1915/12/4付。
	孫文宅を訪問。馮自由、王子衡、心準、王静一と会談。退出後、萱野長知とともに孫文宅を訪問。心準、馮自由、王静一と会談。前掲外務省記録　乙秘第3208号「孫文ノ動静」1915/12/7付。
	金佐治とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第3212号「孫文ノ動静」1915/12/8付。
	孫文宅を訪問。金佐治、心準と会談。前掲外務省記録　乙秘第3218号「孫文ノ動静」1915/12/9付。
	丁仁杰とともに孫文宅を訪問。王静一、金佐治、居正などと会談。前掲外務省記録　乙秘第3221号「孫文ノ動静」1915/12/10付。
	孫文宅を訪問。金佐治、萱野長知、秋好善太郎、河田作介と会談。孫文とともに赤星鉄馬、床次竹二郎、小森雄介を訪問。前掲外務省記録　乙秘第3227号「孫文ノ動静」1915/12/11付。同前記録　乙秘第3232号「孫文ト床次代議士等会合ノ件」1915/12/12付。
	島田経一とともに孫文宅を訪問。金佐治、「印度人モズムダル」、丁仁杰と会談。前掲外務省記録　乙秘第3263号「孫文ノ動静」1915/12/16付。
	譚人鳳、蔡今時とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第3286号「孫文ノ動静」1915/12/18付。
	孫文宅を訪問。金佐治、菊池良一、山田純三郎、萱野長知、陳中孚、などと会談。前掲外務省記録　乙秘第3300号「孫文ノ動静」1915/12/21付。
	孫文宅を訪問。王統一、金佐治、山田純三郎、菊池良一、犬塚信太郎と会談。前掲外務省記録　乙秘第3308号「孫文ノ動静」1915/12/22付。
	孫文宅を訪問。寺尾亨と会談。孫文、寺尾亨とともに寺尾寿を訪問。前掲外務省記録乙秘第3312号「孫文ノ動静」1915/12/23付。
	丁仁杰とともに孫文宅を訪問。張継、居正、龍光、伍平一、蘇無涯、伍川坡、徐蘇中、譚人鳳、黄天評、覃振と会談。前掲外務省記録　乙秘第3320号「孫文ノ動静」1915/12/24付。
	孫文宅を訪問。山田純三郎、居正、劉兆銘と会談。前掲外務省記録　乙秘第3333号「孫文ノ動静」1915/12/27付。
東京『洪水以後』第1号	
東京『洪水以後』第1号	
	蘇曼殊とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第10号「孫文ノ動静」1916/1/5付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第12号「孫文之動静」1916/1/6付。
	孫文宅を訪問。孫文とともに菅原伝、秋山定輔(不在)、小森雄介、犬養毅(不在)を訪問。その後、民国社へ。前掲外務省記録　乙秘第15号「孫文ノ動静」1916/1/7付。
	孫文宅を訪問。金佐治、菊池良一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第23号「孫文ノ動静」1916/1/9付。
	津久井平吉とともに孫文宅を訪問。梅屋庄吉、居正、鄧鏗、王静一と会談。前掲外務省記録　乙秘第26号「孫文ノ動静」1916/1/10付。
	孫文宅を訪問。王子衡、鄧鏗、王静一、金佐治、萱野長知と会談。退出後、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第44号「孫文動静」1916/1/13付。
	鄧鏗とともに孫文宅を訪問。蕭萱、心準、梅屋庄吉、梅屋トクと会談。前掲外務省記録　乙秘第44号「孫文ノ動静」1916/1/15付。
	鈕有恒とともに孫文宅を訪問。王統一、王統一夫人、金佐治、金佐治夫人、居正、居正夫人、張継、張継夫人と会談。前掲外務省記録　乙秘第56号「孫文ノ動静」1916/1/16付。
	孫文宅を訪問。金佐治、王子衡と会談。前掲外務省記録　乙秘第62号「孫文ノ動静」1916/1/17付。
	孫文宅を訪問。王静一、黄実、劉兆銘、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第69号「孫文ノ動静」1916/1/18付。
	戴季陶より孫文宛の「速達郵便」物が孫文の許に着く。前掲外務省記録　乙秘第75号「孫文ノ動静」1916/1/19付。
	金佐治とともに孫文宅を訪問。「孫文不在ノ為メ即時退出」。前掲外務省記録　乙秘第81号「孫文ノ動静」1916/1/20付。
	孫文宅を訪問。黄実、心準と会談。前掲外務省記録　乙秘第100号「孫文ノ動静」1916/1/24付。
	孫文宅を訪問。「孫文不在ノ為メ即時退出」。前掲外務省記録　乙秘第106号「孫文ノ動静」1916/1/25付。
	孫文宅を訪問。退出後、居正とともに孫文宅を訪問。「孫不在ノ為メ即時退出」。再度、居正とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第112号「孫文ノ動静」1916/1/26付。
	王統一とともに孫文宅を訪問。林□軒と会談。孫文とともに犬養毅、秋山定輔方(不在)を訪問。前掲外務省記録　乙秘第116号「孫文ノ動静」1916/1/27付。
	鈕有恒とともに孫文宅を訪問。居正、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第124号「孫文ノ動静」1916/1/28付。
	孫文宅を訪問。陳家蔵、金佐治、和田瑞、夏重民などと会談。前掲外務省記録　乙秘第139号「孫文ノ動静」1916/1/30付。
	居正とともに孫文宅を訪問。和田瑞と会談。退出後、孫文宅を訪問。萱野長知、鄧鏗、鄧鏗夫人、王子衡、王子衡夫人、金佐治、菊池良一、王統一、王統一夫人などと会談。前掲外務省記録　乙秘第152号「孫文ノ動静」1916/2/2付。
	周善培(「梁啓超側近」)、張継などと会談。その後、岑春煊を訪ねるため、張継、居正、張人鳳とともに熱海に向かう。前掲外務省記録　乙秘第163号「革命党各派首領会同ニ関スル件」1916/2/4付。
	「大連市ヨリ来レル」藤田礼造とともに孫文宅を訪問。王静一、周世民、金佐治、鄧鏗などと会談。前掲外務省記録　乙秘第174号「孫文ノ動静」1916/2/6付。
	孫文宅を訪問。坂本寿一、王静一、和田瑞などと会談。前掲外務省記録　乙秘第177号「孫文ノ動静」1916/2/7付。
	孫文宅を訪問。陳家蔵、劉兆銘、梅屋庄吉と会談。前掲外務省記録　乙秘第189号「孫文ノ動静」1916/2/9付。
	王静一とともに孫文宅を訪問。居正、張継、金佐治、鄧鏗、簡照南などと会談。前掲外務省記録　乙秘第212号「孫文ノ動静」1916/2/12付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第228号「孫文動静」1916/2/15付。
	戴季陶より孫文宛の郵便物が孫文の許に着く。前掲外務省記録　乙秘第239号「孫文ノ動静」1916/2/16付。
	孫文宅を訪問。金佐治、王静一、鄧鏗、王子衡、胡漢民、馮自由、居正などと会談。前掲外務省記録　乙秘第242号「孫文ノ動静」1916/2/17付。
	孫文宅を訪問。陳中孚と会談。前掲外務省記録　乙秘第249号「孫文ノ動静」1916/2/18付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第254号「孫文ノ動静」1916/2/19付。
	張継、胡漢民とともに孫文宅を訪問。馮自由、王子衡、心準、坂本寿一、頭山満、犬養毅、古島一雄、金佐治、金佐治夫人、寺尾亨と会談。前掲外務省記録　乙秘第261号「孫文動静」1916/2/20付。
	萱野長知とともに孫文宅を訪問。居正と会談。退出後、萱野長知とともに孫文宅を訪問。梅屋庄吉、梅屋庄吉夫人、石浦謙二郎、河喜多某、和田瑞、胡漢民、居正と会談。前掲外務省記録　乙秘第266号「孫文ノ動静」1916/2/21付。
	孫文宅を訪問。丁仁杰、胡漢民などと会談。前掲外務省記録　乙秘第299号「孫文ノ動静」1916/2/26付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、王子衡、張継と会談。前掲外務省記録　乙秘第334号「孫文ノ動静」1916/3/3付。
	伍□□とともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第351号「孫文ノ動静」1916/3/6付。
	胡漢民とともに孫文宅を訪問。王静一、金佐治、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第359号「孫文ノ動静」1916/3/7付。

1916/3/10		
1916/3/11		
1916/3/13		
1916/3/14		
1916/3/15		
1916/3/16		
1916/3/17		
1916/3/18		
1916/3/19		
1916/3/20		
1916/3/21		
1916/3/22		
1916/3/24		
1916/3/25		
1916/3/26		
1916/3/27		
1916/3/29		
1916/3/31		
1916/4/1		
1916/4/2		
1916/4/3		
1916/4/4		
1916/4/5		
1916/4/6		
1916/4/7		
1916/4/8		
1916/4/9		
1916/4/10		
1916/4/11		
1916/4/12		
1916/4/13		
1916/4/14		
1916/4/15		
1916/4/16		
1916/4/17		
1916/4/18		
1916/4/19		
1916/4/20		
1916/4/21		
1916/4/22		
1916/4/23		
1916/4/24		
1916/4/26		
1916/4/27		
1916/4/28		
1916/4/29		
1916/5/1		
▲1916/5/21	【著作】袁世凱論	戴天仇
▲1916/6/12	【講演・談話記録】〈*中日関係について〉	
1916/7/3-?		
1916/7/6		
1916/7/7		
1916/7/28		
1916/7/30		
1916/8/2		
1916/8/4		
▲1916/8/14	【講演・談話記録】〈*時事について〉	
1916/8/16-8/20		

	孫文宅を訪問。「日露貿易合名会社長」松島重太郎、金佐治、胡漢民、王静一などと会談。孫文は松島重太郎の斡旋にて、久原房之助と借款契約を結ぶ。中山某、遠藤某、武田某、孫文、戴季陶が署名。保証人は松島重太郎、中山某。孫文は久原に対し「四川省ニ於ケル或□利権」を担保にしたというが「明カナラス」。前掲外務省記録　乙秘第375号「孫文ノ動静」1916/3/11付。
	孫文宅を訪問。王子衡、金佐治、胡漢民、王静一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第381号「孫文ノ動静」1916/3/12付。
	孫文宅を訪問。金佐治、胡漢民、王子衡と会談。退出後、孫文宅を訪問。胡漢民、王子衡、王静一、坂本寿一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第393号「孫文ノ動静」1916/3/14付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第342号「孫文ノ動静」1916/3/15付。
	孫文宅を訪問。梅屋庄吉、王統一、松島重太郎、和田瑞と会談。前掲外務省記録　乙秘第346号「孫文ノ動静」1916/3/16
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第356号「孫文ノ動静」1916/3/17付。
	孫文宅を訪問。夏重民、陳樹人、金佐治、梅屋庄吉、王統一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第359号「孫文ノ動静」1916/3/18付。
	孫文宅を訪問。胡漢民、金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第366号「孫文ノ動静」1916/3/19付。
	孫文宅を訪問。金佐治、犬塚信太郎と会談。孫文とともに久原房之助、秋山定輔などを訪問。前掲外務省記録　乙秘第370号「孫文ノ動静」1916/3/20付。
	孫文宅を訪問。胡漢民と会談。退出後、孫文宅を訪問。王静一、金佐治、床次竹二郎、周応時などと会談。前掲外務省記録乙秘第374号「孫文ノ動静」1916/3/21付。
	孫文宅を訪問。退出後、王静一、張誠などとともに孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第379号「孫文ノ動静」1916/3/22付。
	孫文宅を訪問。退出後、孫文宅を訪問。胡漢民、金佐治、夏重民、王静一などと会談。前掲外務省記録　乙秘第385号「孫文ノ動静」1916/3/23付。
	孫文宅を訪問。金佐治、厚母二郎(久原鉱業株式会社員)などと会談。前掲外務省記録　乙秘第395号「孫文ノ動静」1916/3/25付。
	孫文宅を訪問。金佐治、胡漢民と会談。前掲外務省記録　乙秘第396号「孫文動静報告」1916/3/26付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第400号「孫文ノ動静」1916/3/27付。
	孫文宅を訪問。退出後、孫文宅を訪問。金佐治、周応時、胡漢民、王静一と会談。再び退出し、改めて孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第404号「孫文ノ動静」1916/3/28付。
	孫文宅を訪問。金佐治、王静一などと会談。孫文とともに陸軍参謀本部第二部長福田雅太郎を訪問。前掲外務省記録　乙秘第414号「孫文ノ動静」1916/3/30付。
	孫文宅を訪問。金佐治、胡漢民、夏重民、徐蘇中、尾崎行輝、王静一などと会談。孫文は秋山定輔を訪問(戴季陶が同行したか否かは不明)。退出後、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第424号「孫文ノ動静」1916/4/1付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第429号「孫文ノ動静」1916/4/2付。
	孫文宅を訪問。孫文とともに福田雅太郎を訪問。前掲外務省記録　乙秘第432号「孫文ノ動静」1916/4/3付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第432号「孫文ノ動静」1916/4/3付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第438号「孫文ノ動静」1916/4/5付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第442号「孫文ノ動静」1916/4/6付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第446号「孫文ノ動静」1916/4/7付。
	王静一とともに孫文宅を訪問。退出後、岡津磯次とともに孫文宅を訪問。秋山定輔宅を訪問し、孫文、秋山、陸軍参謀本部次長田中義一の会談に出席。前掲外務省記録　乙秘第472号「孫文ノ動静」1916/4/8付。同前記録　乙秘第456号「孫文ノ動静」1916/4/9付。
	孫文宅を訪問し、退出することを繰り返す。孫文とともに秋山定輔宅を訪問。孫文、秋山、田中義一の会談に出席。前掲外務省記録　乙秘第456号「孫文ノ動静」1916/4/9付。
	孫文宅を訪問。退出後、胡漢民とともに孫文宅を訪問。その後、宋慶齢、「金佐治及其妻　戴天仇胡漢民萱野ノ妻　其他二三ノ本邦人」が孫文宅を訪問。田中昂宅にて演芸会と写真撮影、晩餐(いわゆる「帝政取消一笑会」)。前掲外務省記録　乙秘第460号「孫文ノ動静」1916/4/10付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第464号「孫文ノ動静」1916/4/11付。
	仇鰲とともに孫文宅を訪問。その後、王統一を訪問。孫文、犬塚信太郎、王統一の会談に出席。孫文とともに阪谷芳郎を訪問。菊池良一、菊池九郎(菊池良一の実父)とともに、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第467号「孫文ノ動静」1916/4/12付。
	孫文宅を訪問。「孫不在ノ為即時退出」。退出後、孫文宅を訪問。孫文、犬塚信太郎とともに「某」を訪問。前掲外務省記録　乙秘第470号「孫文ノ動静」1916/4/13付。
	孫文宅を訪問。菊池良一と会談。前掲外務省記録　乙秘第472号「孫文ノ動静」1916/4/14付。
	孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第476号「孫文ノ動静」1916/4/15付。
	孫文宅を訪問。孫文とともに杉田定一を訪問。その後、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第482号「孫文ノ動静」1916/4/16付。
	孫文宅を訪問。胡漢民とともに福田雅太郎を訪問。胡漢民とともに孫文宅を訪問。孫文とともに福田雅太郎を訪問。戴季陶より孫文宛の「速達郵便」が孫文の許に着く。その後、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第484号「孫文ノ動静」1916/4/17付。
	孫文宅を訪問。夏重民、王静一、金佐治、尾崎行輝、周応時、和田瑞などと会談。前掲外務省記録　乙秘第489号「孫文ノ動静」1916/4/18付。
	孫文宅を訪問。犬塚信太郎と会談。退出後、孫文宅を訪問。仇鰲と会談。退出後、孫文宅を訪問。夏重民、王静一と会談。退出後、孫文宅を訪問。前掲外務省記録　乙秘第494号「孫文ノ動静」1916/4/19付。
	孫文宅を訪問。退出後、孫文宅を訪問。王文成、超蘧郷、章君波と会談。前掲外務省記録　乙秘第499号「孫文ノ動静」1916/4/20付。
	孫文宅を訪問。金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第505号「孫文ノ動静」1916/4/21付。
	孫文宅を訪問。夏重民、陳樹人と会談。前掲外務省記録　乙秘第508号「孫文ノ動静」1916/4/22付。
	孫文宅を訪問。金佐治、犬塚信太郎、周応時、などと会談。退出後、孫文宅を訪問。「孫文不在ノ為メ即時退出」。孫文宅を訪問。金佐治と会談。前掲外務省記録　乙秘第511号「孫文ノ動静」1916/4/23付。
	孫文宅を訪問。金佐治、犬塚信太郎、周応時、王静一と会談。退出後、孫文宅を訪問。王静一、陳戴方などと会談。前掲外務省記録　乙秘第514号「孫文ノ動静」1916/4/24付。
	孫文宅を訪問。金佐治、宮崎寅蔵と会談。退出後、張継とともに孫文宅を訪問。王静一、周応時と会談。頭山満を訪問。孫文、頭山、宮崎寅蔵、張継などと会談。前掲外務省記録　乙秘第517号「孫文ノ動静」1916/4/25付。
	孫文宅を訪問。孫文とともに福田雅太郎を訪問。孫文宅を訪問。菊池良一とともに孫文宅を訪問。金佐治、頭山満夫人などと会談。孫文、王静一とともに外出。孫文、陸軍参謀本部本庄繁などの会談に出席。前掲外務省記録　乙秘第525号「孫文ノ動静」1916/4/27付。
	孫文、廖仲愷などとともに、近江丸に乗船。横浜発。
	神戸着。
	神戸発。
	上海着。
東京『洪水以後』第13号	
上海『民国日報』「戴季陶君之外交談」	
	孫文は戴季陶を東京に派遣し、田中義一などと連絡をとる。
	上海より筑前丸にて長崎着。今町緑屋旅館で休憩をとった後、長崎発。前掲外務省記録　高秘特収第3283号「支那革命党員来往ノ件」1916/7/7付。
	門司連絡船にて下関着。列車にて下関発。東京に向かう。前掲外務省記録　兵発秘第1022号「支那革命党員通過ノ件」1916/7/8付。同前記録　高第3992号「要注意支那人通過ノ件」1916/7/10付。
	吉野作造は後藤新平に対し断りを入れ、戴季陶が体調不良のため後藤を訪ねられない旨を伝える。
	林森とともに神戸着。大阪を訪れる。前掲外務省記録　兵発秘第1125号「支那革命党員来往ノ件」1916/8/3付。
	近江丸に乗船。神戸発。前掲外務省記録　兵発秘第1125号「支那革命党員来往ノ件」1916/8/3付。
	長崎寄港。殷汝耕と合流。上海に向かう。前掲外務省記録　高秘特収第3529号「支那革命党員来往ノ件」1916/8/4付。同前記録　高秘第11054号「支那革命党員来往ニ関スル件」1916/8/4付。
上海『民国日報』「追悼先烈大会記――戴伝賢君報告」	
	孫文、胡漢民、馮自由、鄧家彦などとともに杭州に向かう。杭州で酒に酔い、身体を硝子にぶつけ負傷。前掲外務省記録第50号(在杭州領事館事務代理瀬上恕治より外務大臣石井菊次郎宛)1916/8/17付。同前記録　公第27号(在杭州領事館事務代理瀬上恕治より外務大臣石井菊次郎宛)「孫逸仙来杭ニ関シ報告ノ件」1916/8/21付。

△1916/8月末-9月初	【講演・談話記録】〈*松江の学校にて〉	
1916/9/29	【著作】〈*梅屋庄吉宛の書簡〉	戴天仇
1916/10/6		
△1916/10/31直後	【著作】挽黄興聯	
1916/11/21	【著作】〈*梅屋庄吉宛の書簡〉	戴天仇
△1916/12/5▲1917/4/6	【著作】〈*「上海交易所株式会社」設立に関する三上豊夷と交わした契約書(部分)〉	戴伝賢など
1916	【書画】〈*今井嘉幸に頼まれて〉	戴伝賢
1916	【著作】〈*詠龍華詩〉	季陶
1913-1916	【書画】真理〈*寄せ書き〉	天仇
1917/2/27-3/30頃		
1917/3/19		
1917/3/30		
1917年春		
△1917/5/12直後	【著作】〈*陳英士を追悼する祭文〉	戴伝賢
△1917/5/12直後	【著作】〈*陳英士を追悼する輓聯〉	
1917/6/11		
1917/6/16		
1917/6/21		
1917/6/28		
1917/6/29		
1917/7/3		
1917/7/7		
1917/7/9?		
1917/8/10		
1917/8/12		
△1917/8/17▲1917/8/18	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
△1917/8/18▲1917/8/19	【講演・談話記録】〈*門司にて〉	
△1917/8/19▲1917/8/20	【講演・談話記録】〈*神戸にて〉	
△1917/8/20▲1917/8/21	【講演・談話記録】〈*入京直後にて〉	
1917/8/25		
1917/8/26		
△1917/9/1▲1917/9/2	【講演・談話記録】〈*桜田会有志、憲政会院外団有志主催の招待会にて〉	
△1917/9/2▲1917/9/3	【講演・談話記録】〈*中華民国留日学生総会主催の「大中華民国留学生全体慶祝非常国会並歓迎張戴先生大会」にて〉	
▲1917/9/3	【講演・談話記録】〈*孫文陸海軍大元帥就任について〉	
1917/9/3		
1917/9?/4	【著作】致楊寿彭先生書	
1917/9/6		
1917/9/7		
1917/9/9		
1917/9/11		
1917/9/12		
△1917/9/13▲1917/9/14	【講演・談話記録】支那政界の近状〈*大阪朝日新聞社主催の「朝日講演会」にて〉	戴天仇氏
1917/9/14以前	【著作】覆楊寿彭先生書	
△1917/9/14▲1917/9/15	【講演・談話記録】〈*大阪倶楽部にて〉	
△1917/9/14▲1917/9/15	【講演・談話記録】〈*神阪中華会館にて〉	
1917/9/15		
△1917/9/17▲1917/9/19	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
△1917/9/22▲1917/10/1	【講演・談話記録】日本対於西南護法之態度——戴天仇在非常国会之報告	天仇
1917/10	【著作】自敍〈*上海にて〉	戴伝賢季陶
1917/11	【著作】〈*徐季龍「共和聯邦折中制商権書」の跋〉	伝賢
▲1917/12/13-1918/1/24	【著作】最近之日本政局及其対華政策	商孫　漫記,雲巣道士　増删
△1917/12/30▲1918/1/4	【著作】〈*孫文宛の書簡〉	孫洪伊,徐謙,戴伝賢など
▲1918/1/1,1/3-1/9,1/11-1/13	【著作】俄国革命之真意	脱耳斯泰著,戴伝賢意訳
▲1918/1/1,1/3-1/10	【著作】英国各政党首領之略歴	雲巣道士
▲1918/1/10	【著作】徐謙戴伝賢啓事	徐謙,戴伝賢
△1918/1/11	【講演・談話記録】支那に於ける共和制体〈*東亜同文書院(上海)にて〉	戴天仇氏
1918/2/8		
▲1918/2/24	【著作】游粤感言	戴伝賢
△1918/3/13	【著作】戴伝賢擬自汕回粤致廖仲愷電	季陶
1918/4/2		
▲1918/4/23	【著作?】大元帥通告駐華各国公使書	孫文,林森
△1918/5/下旬▲1918/6/12	【著作】〈*時局について〉	

	不詳。『戴季陶(伝賢)先生編年伝記』30頁。
張玉萍「討袁運動期における戴季陶の日本認識」62-63頁	
	戴季陶と戸村きんの間に男児が生まれる。後日、戴季陶は蒋介石・姚冶誠夫妻に家治の養父母になるように依頼。蒋・姚夫妻は家治を緯国と名づける。
『近現代名人名聯品鑒』274-275頁	黄興、上海で没。
張玉萍「討袁運動期における戴季陶の日本認識」63頁	
『晨鐘報』「孫文壟断上海市面之大計画」	「上海交易所株式会社創立人総代理」として、三上豊夷の代理人中島行一と、「上海交易所株式会社」設立の契約書を交わす。愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵「山田純三郎資料」12-1-54。
今井嘉幸の「揮毫帖」(孫中山記念館(神戸)所蔵)	
○19(民国五年詠龍華詩)	
『盟約ニシテ成セル——梅屋庄吉と孫文』	
	東京滞在。「孫文壟断上海市面之大計画」(『晨鐘報』1917/4/6付)。
	東京の政法学校において、吉野作造と会談。
	吉野作造は「夜戴天仇君ノ帰国を見送ル」。
	孫文は戴季陶を北京に派遣し、「府院の争い」の実情を調査させる。
『陳英士先生年譜』	
『陳英士先生年譜』	
	「中日組合条約」に署名。
	孫文は戴季陶を東京に派遣し、復辟に対する日本政軍財界の態度を調査させる。上海発。
	東京着。秋山真之、田中義一、加藤高明を訪問。「致加藤男爵請求協助函(訳文)」(『国父全集』第4冊, 490頁)。
	犬養毅は原敬宛に戴季陶の紹介状を書く。
	原敬を訪問し、孫文の親書を手渡す。
	殷汝耕とともに、頭山満、寺尾亨、副島義一、吉野作造などを香雪軒に接待。
	殷汝耕、王彦晦とともに、吉野作造などを芝紅葉館に接待。
	広州着。
	孫文は張継と戴季陶を東京に派遣し、日本の政軍財界に孫文ら南方勢力を支持するように訴えさせる。天洋丸に乗船。香港発。
	上海着。
『大阪朝日新聞』「張継日本に向ふ」;『神戸新聞』「張継等上海出発」;『神戸又新日報』「張継出発す」	郵船春日丸に乗船。上海発。前掲外務省記録　第189号(駐上海総領事館総領事有吉明より外務大臣本野一郎宛)1917/8/16付。
『大阪朝日新聞』「張継来る」など	門司寄港。前掲外務省記録　高秘第16522号「支那人来往ニ関スル件」1917/8/20付。
『大阪朝日新聞』「南方の力」;『神戸新聞』「南方の決心牢固たり」;『神戸又新日報』「張継と戴天仇」;『東京朝日新聞』「渡来の使命」など	神戸着。後藤旅館で休憩。寺尾亨、今井嘉幸、大田信三、加納盛蔵、三上豊夷、殷汝耕などが出迎える。列車にて三ノ宮発。東京に向かう。前掲外務省記録　兵庫県知事清野長太郎より外務大臣本野一郎宛, 1917/8/19付。同前記録　兵発秘第1104号「張継一行渡来ニ干スル件」1917/8/19付。
『東京朝日新聞』「重き使命を帯びて」	東京着。旭館に投宿。
	犬養毅と頭山満の招待に応じ、星ヶ丘茶寮へ。
	小寺謙吉など憲政会幹部の招待に応じ、精養軒へ。
『東京日日新聞』「支那名士招待会」	田中義一を訪問。国会非常会議(広州)は孫文を中華民国軍政府海陸軍大元帥に就任。(第一次広東軍政府)
『大阪朝日新聞』「張戴両氏歓迎会」;『東京朝日新聞』「民国旗の前に」	中華民国留日学生総会主催の「大中華民国留学生全体慶祝非常国会並歓迎張戴先生大会」に出席(大手町衛生会館)。
『大阪朝日新聞』「孫大元帥」;『東京朝日新聞』「剣を抜いて起てる大元帥孫文氏」	
	岡崎邦輔など政友会幹部の招待に応じ、三縁亭へ。
○33	
	伊香保滞在の牧野伸顕を訪問。
	伊香保滞在の西園寺公望を訪問。
	盛岡滞在の原敬を訪問。
	頭山満、吉野作造と会談。
	横浜着。横浜華僑黄焯民(ピー・オー汽船会社買辦)発起の食事会に出席(山下町一三一番地の華僑倶楽部)。横浜発。前掲外務省記録　神高秘収第6102<*もしくは6103>号「支那革命党来往ノ件」1917/9/13付。
『大阪朝日新聞』「朝日講演会(第一日)」○44	大阪着。大阪ホテルで休憩。村山龍平(大阪朝日新聞社社長)、上野理一(同社副社長)、野田道三(同社社員)、太田三孝(同前)、丸山幹治(同前)、鳥井赫雄(同前)、今井嘉幸、末広重雄(京都帝国大学教授)などと会談。大阪朝日新聞社主催の「朝日講演会」に出席(大阪朝日新聞社大講堂)。前掲外務省記録　特秘別第276号「支那政客来往ノ件」1917/9/14付。漢語訳:戴天仇「中国政界之近状」(上海『民国日報』1917/9/21付)。
○33	
『大阪朝日新聞』「張継氏等請待」	大阪倶楽部主催の食事会に出席(東区今橋五丁目)。その後、神戸に向かう。前掲外務省記録　特秘別第276号「支那政客来往ノ件」1917/9/14付。
『神戸新聞』「南方志士の熱弁」;『神戸又新日報』「張戴両氏演説」など	神戸華僑有志が設立した「共和維持会」に出席(神阪中華会館)。日本政府外交調査委員会宛の、段祺瑞政権に借款を提供することを見合わせとの陳情書を採択。その後、列車にて門司に向かう。前掲外務省記録　兵発秘第1247号「在留支那人会合ニ関スル件」1917/9/13付。同前記録　兵発秘第1256号「支那名士演説会ニ関スル件」1917/9/15付。
	門司着。川卯旅館で休憩。郵船熊野丸に乗船。上海に向かう。前掲外務省記録　高秘第18446号「支那人来往ニ関スル件」1917/9/17付。
上海『民国日報』「戴季陶君之談話——説明日本朝野対華之意見」	上海着。
上海『民国日報』○44(在非常国会報告日本対西南護法之態度)	第一次広東軍政府の軍政府委員に任命される。孫文は広州の国会非常会議で軍政府の外交経過情形について報告するように命じる。「大元帥致国会非常会議函」(『軍政府公報』第5号, 1917/9/23付)。前掲外務省記録　機密第39号「戴天仇赴日経過情況報告ニ関スル件」1917/10/2付。
戴伝賢『中華民国与聯邦組織』(上海:戴寓, 1917/3第三版)	
戴伝賢『中華民国与聯邦組織』(上海:戴寓, 1917/3第三版)	
上海『民国日報』○44	全39篇。第14篇は12/26付に掲載されたが、誤植があったため、12/27付に訂正の上再掲載された。
「孫総長徐代理秘書長等由滬致大元帥電」(『軍政府公報』第38号)	
上海『民国日報』副刊「民国思潮」	
上海『民国日報』副刊「民国思潮」	
上海『民国日報』	
東亜同文書院(上海)編『滬友』第4号, 1918/3/28付	
	第一次広東軍政府の代理大元帥府秘書長に任命される。
上海『民国日報』副刊「民国思潮」○44	
『革命文献』第50輯, 207頁○44(致廖仲愷電)	1918/3まで汕頭で陳炯明の下で働く。3/14、孫文は陳炯明に戴季陶を広州に帰らせるように依頼。3/18、陳炯明は孫文に戴季陶を引き続き汕頭で働かせるように依頼。「陳炯明請戴伝賢留汕上国父電」(『革命文献』第50輯, 208頁)。
	第一次広東軍政府の代理中華民国軍政府外交次長に任命される。4/9就任。
『軍政府公報』第75号	第一次広東軍政府は各国駐広州領事館、駐北京公使館に軍政府承認を要求。戴季陶による草稿。前掲外務省記録　駐南京領事館事務代理清野長太郎より外務大臣後藤新平宛, 1918/9/15付。
上海『民国日報』「戴季陶君対於時局之感慨」○44(致某君書)	

1918/5/21		
1918/5/26-6/1		
1918/6/1以降、1918/6/10以前		
△1918/6/1以降、1918/6/10以前	【書画】有朋自遠方来不亦楽乎〈*信濃丸パーサー織田英雄に贈る〉	天仇
1918/6/10		
1918/6/11		
△1918/6/11▲1918/6/12	【講演・談話記録】〈*大阪駅にて〉	
1918/6/12-6/19		
1918/6/20-6/23?		
1918/6/23		
1918/6/26		
▲1918/7/16	【講演・談話記録】関於段派造謡的弁明	
▲1918/10/3	【講演・談話記録】〈*原敬内閣に対して〉	
▲1918/10/18	【講演・談話記録】内閣制問題, 省制問題	
△1918/11/19▲1918/11/20	【講演・談話記録】〈*神戸にて〉	
1918/11/20		
1918/12/1		
1918/12/2		
1918/12/4		
△1918/12/17▲1918/12/18	【著作】〈*東京「支那問題聯合大会」に対して〉	
△1918/12/22	【講演・談話記録】〈*上海「中華国民策進永久和平会」にて〉	
△1918/12/25▲1918/12/26	【著作】主張撤退列強之特殊地位	戴伝賢
△1918/12/25▲1918/12/26	【講演・談話記録】	
▲1918/12/28	【著作】	
1918?/?/13	【著作】致楊寿彭先生書	居正, 戴伝賢
1919/2/22?-?		
1919/4/15		
△1919/5/8▲1919/5/9	【著作】張継何天炯戴伝賢告日本国民書	張継, 何天炯, 戴伝賢
▲1919/6/2	【講演・談話記録】孫先生聯段説之辨正	戴季陶
▲1919/6/8	【著作】国民自給与国民自決	季陶
▲1919/6/8	【著作】潮流発動地点的変動	季陶
▲1919/6/8	【著作】『悲劇』的力量	季陶
▲1919/6/8	【著作】写血書的心理	季陶
▲1919/6/8	【著作】中国人的(組織能力)	季陶
▲1919/6/15	【著作】国際同盟和労動問題	季陶
▲1919/6/15	【著作】随便談	
▲1919/6/22	【著作】工人教育問題	季陶
▲1919/6/22	【著作】訪孫先生的談話——社会教育応該怎麽做?	季陶
▲1919/6/22	【著作】対付『布爾色維克』的方法	季陶
▲1919/6/29	【著作】社会民主化的英国政治	季陶
▲1919/6/29	【著作】国際聯盟与世界和平	季陶
▲1919/6/29	【著作】白楽天的社会文学	季陶
△1919/7/2	【著作】〈*胡適宛の書簡〉	戴伝賢, 孫棣三, 沈定一
△1919/7/2	【著作】〈*胡適宛の書簡〉	戴伝賢
▲1919/7/6	【著作】上海的社会改造(上)	季陶
▲1919/7/6	【著作】徳国艦隊的末路	季陶
▲1919/7/6	【著作】愛爾蘭独立運動与美国	季陶
▲1919/7/6, 7/13, 7/20	【著作】社会主義与両性問題	季陶
▲1919/7/6	【著作】我和胡君漢民的談話	季陶
▲1919/7/13	【著作】省長民選?	季陶
▲1919/7/13	【著作】南北和議要復活嗎?	季陶
▲1919/7/13	【著作】這叫做三省聯合	季陶
▲1919/7/13	【著作】鬼打鬼	季陶
▲1919/7/13	【著作】日徳俄聯盟論	季陶
▲1919/7/13	【著作】張作霖与孟恩遠	季陶
▲1919/7/13	【著作】随便談	季陶
▲1919/7/20	【著作】救国儲金拿来做甚麽?	季陶
▲1919/7/27	【著作】女子解放従那裏做起?(其六)	季陶
▲1919/7/27	【著作】『総会』是甚麽東西	季陶
▲1919/7/27	【著作】非法国会是当然不成問題	季陶
▲1919/7/27	【著作】請教講女子教育的	季陶
▲1919/7/27	【著作】五月一日八点鐘	季陶
▲1919/7/27	【著作】人道主義	季陶
▲1919/7/27	【著作】誰教你不自然	季陶
▲1919/7	【著作】軍閥外交の惨害——戴天仇君最近の書簡	天仇
▲1919/8/3	【著作】西蔵問題的最近歴史	季陶
▲1919/8/3	【著作】吊板垣先生	季陶
1919/8/6		
▲1919/8/10	【著作】可憐富強国的国民	季陶
▲1919/8/10	【著作】可憐的我	季陶
▲1919/8/10	【著作】徳国社会民主党的政綱	季陶
▲1919/8/10	【著作】孝慈	季陶
▲1919/8/10	【著作】俄国民族的特性	季陶
▲1919/8/10	【著作】可憐的我	季陶

	孫文、戴季陶などは第一次広東軍政府での全役職を辞任。孫文、胡漢民などとともに、大阪商船蘇州丸に乗船。広州発。
	孫文、胡漢民などとともに汕頭に陳炯明を訪問。また、梅県三河壩などを訪問。
	厦門を経て基隆に寄港。台北の料亭梅屋敷で台湾人民族運動家と会談(?)。その後、郵船信濃丸に乗船。門司に向かう。
『孫中山記念館(移情閣)概要』22頁	
	門司着。列車にて国府津に向かう。宮崎寅蔵、菊池良一が同乗。前掲外務省記録　機第1986号ノ一「孫文一行東上ニ関スル件」1918/6/11付。
	三ノ宮駅<*もしくは神戸駅>で楊寿彭、鄭祝三、本多一太郎、草鹿甲子太郎などが出迎える。
『大阪朝日新聞』「孫逸仙氏は風の如く」	国府津着。箱根塔の沢に宿泊。前掲外務省記録　神高秘二発第34号「孫逸仙来着ノ件」1918/6/12付。
	小湧谷の三河屋ホテルに投宿。何香凝、張継、殷汝耕、何天炯、頭山満、寺尾亨、萱野長知、梅屋庄吉、今井嘉幸、藤村義朗などが孫文を訪問。<策電>艦事件に関与した日本海軍関係者が孫文を訪問。
	京都に宿泊。
	神戸着。近江丸に乗船。上海に向かう。
	上海着。その後、浙江省呉興県(潜園、現在の湖州陸家花園)に移り、読書、書、遊山、道観参拝に勤しむ。
上海『民国日報』「戴季陶君之談話」○44	
上海『民国日報』「戴季陶君之原内閣談」○44(論日本原内閣)	
上海『民国日報』「戴季陶君之制憲談」○44(制憲問題答記者談)	
『大阪毎日新聞』「戴天仇氏の談」;『神戸新聞』「和平の機運熟す」;『神戸又新日報』「戴氏の談」	郵船熊野丸にて上海から神戸に着く。後藤旅館で休憩。京都に宿泊。
	東京着。
	八幡丸に乗船。神戸発。
	門司寄港。
	上海着。
東京『中央新聞』「支那問題聯合大会」	漢語訳:『一九一九年南北議和資料』71-72頁。
末次玲子「五・四運動と国民党勢力」303頁	
上海『民国日報』「戴季陶君対日本朝野之通電」○44(対日本朝野之通電——主張撤退列強之特殊地位)	
上海『民国日報』○44(就《対日本朝野之通電》答《民国日報》記者)	
上海『民国日報』「戴季陶君致報界公会函<*報界会公函>」	
○33	原件写真:「居正、戴伝賢致楊寿彭函」(『居正先生全集』中冊,430頁)。
	日本(都市不詳)滞在。
	上海「全国報界聯合会」は戴季陶が作成した「宗旨」を採択。この頃、上海「全国印刷業工会歓迎北京学生代表大会」に出席。
上海『民国日報』○44(告日本国民書)	張継、何天炯とともに、上海の一品香に上海駐在の日本の新聞社・通信社の記者を招待し、中華革命党を代表して、日本の中国政策に対する意見を表明。日本語訳:「伝統的政策を棄てよ」(『大阪朝日新聞』1919/5/10付);伊東昭雄訳「日本国民に告げる書簡」(『中国人の日本人観100年史』132-135頁);今村与志雄「日韓併合と中国の日本観」395-397頁;飯倉照平編「侵略者への抗議」14-18頁など。
上海『民国日報』	
上海『星期評論』第1号○44	沈玄廬(沈一)、孫棣三とともに、上海『民国日報』の副刊「星期評論」(週刊)を創刊し、主筆を務める。事務所(星期評論社)を愛多亜路新民里5号に設ける(後に白爾路三益路17号に移る)。戴季陶は社会主義理論の「紹介者」の役割を任じるが、当時の学生からはマルクス経済学の「研究者」として見なされる。邵力子、陳独秀、施存統、李漢俊、兪秀松、張国燾などと交流。戴季陶は霞飛路新漁陽里6号(戴季陶が去った後は社会主義青年団、「外国語学社」の所在地となる)に居住。
上海『星期評論』第1号○19,44	
上海『星期評論』第1号○44	
上海『星期評論』第1号○44	
上海『星期評論』第1号○44	
上海『星期評論』第2号○44	
上海『星期評論』第2号	全7篇。
上海『星期評論』第3号○44	
上海『星期評論』第3号○40(戴季陶訪孫中山先生談話),44	日本語訳:「戴季陶氏との社会問題に関する談話」(外務省調査局訳『孫文全集』第3巻,374-380頁)。
上海『星期評論』第3号○44	
上海『星期評論』第4号○44	
上海『星期評論』第4号○44	
上海『星期評論』第4号○44	
『胡適来往書信選』59-60頁	原件の影印:『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊,107-109頁。
『胡適来往書信選』60頁	原件の影印:『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊,97-98頁。
上海『星期評論』第5号○44	
上海『星期評論』第5号	
上海『星期評論』第5号	
上海『星期評論』第5号,第6号,第7号	訂正案内:「本報特別啓事」(上海『星期評論』第7号,1919/7/20付)。
上海『星期評論』第5号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第6号	
上海『星期評論』第7号○44	
上海『星期評論』第8号○44	
上海『星期評論』第8号	
上海『星期評論』第8号	
上海『星期評論』第8号	
上海『星期評論』第8号	
上海『星期評論』第8号○19,40	
上海『星期評論』第8号	
東京『解放』第1巻第2号	
上海『星期評論』第9号○44	
上海『星期評論』第9号	
	中華全国工界協進会茶話会に出席。「工界協進会茶話会」(上海『民国日報』1919/8/8付)。
上海『星期評論』第10号	
上海『星期評論』第10号○19	
上海『星期評論』第10号○44	
上海『星期評論』第10号○19,44	
上海『星期評論』第10号○19,44	
上海『星期評論』第10号○44	

▲1919/8/10	【著作】本社給李純的信	沈定一(玄廬),孫棣三(棣三),戴伝賢(季陶)
▲1919/8/17	【著作】中国女子的地位	季陶
▲1919/8/17	【著作】経済発展史	季陶
▲1919/8/17	【著作】一個新研究	季陶
▲1919/8/17	【著作】教育家的醒後	季陶
▲1919/8/17	【著作】晩上做好事	季陶
▲1919/8/24	【著作】読黎明会的朝鮮問題号	季陶
▲1919/8/24	【著作】国際労動同盟組織	季陶
▲1919/8/24	【著作】呂先生自己覚悟罷!	季陶
▲1919/8/25	【著作】還是要解放	戴季陶
▲1919/8/31	【著作】「法」的基礎(上)	季陶
▲1919/8/31	【著作】中国現在社会問題的意義	季陶
▲1919/8/31	【著作】組織工会第一層的注意事項	季陶
▲1919/8	【著作】我的日本観	季陶
▲1919/9/7	【著作】可憐的「他」	季陶
▲1919/9/7	【著作】威総統的失敗	季陶
▲1919/9/7	【著作】為甚麼悲観?	季陶
▲1919/9/7	【著作】不到黄河心不死	季陶
▲1919/9/7	【著作】再説労動調査	季陶
▲1919/9/7	【著作】工会組織的方法	季陶
△1919/9/11▲1919/10	【著作】革命!何故?為何?——復康君白情的信	戴伝賢
▲1919/9/14	【著作】	季陶
▲1919/9/14	【著作】俄国両政府的対華政策	季陶
▲1919/9/14	【著作】介紹両位新朋友——民風週刊——解放与改造	季陶
△1919/9/20?▲1919/9/22	【講演・談話記録】中国乱事与経済之関係	
▲1919/9/21	【著作】労動運動的新趨向	季陶
▲1919/9/21	【著作】束縛思想的自由的且看!	季陶
▲1919/9/21	【著作】李寧的談話	季陶〈*序,訳〉
▲1919/9/21	【著作】新官僚可悪	泣民
▲1919/9/22	【著作】究竟怎様可辦交易所	泣民
△1919/9/22	【著作】〈*胡適宛の書簡〉	戴伝賢,沈定一
▲1919/9/28	【著作】「世界的時代精神」与「民族的適応」	季陶
▲1919/9/28	【著作】聯合国対俄政策的変動——日本究竟怎麼様?	季陶
▲1919/9/28	【著作】高麗的臨時政府与広東軍政府	季陶
▲1919/9/28	【著作】我和一個朋友的談話	季陶
▲1919/9	【著作】従経済上観察中国的乱源	戴季陶
1919/9		
1919年秋		
1919/10/1		
▲1919/10/2	【著作】甚麼様才算国有?	泣民
▲1919/10/5	【著作】英国的労動運動与三角同盟	季陶
▲1919/10/5	【著作】悲哀寂寞的享楽者!	季陶
▲1919/10/5	【著作】喬治氏的対労動手腕如何?	季陶
▲1919/10/10	【著作】英国的労動組合	季陶
▲1919/10/10	【著作】日本義士山田良政誄	
▲1919/10/12	【著作】為甚麼罷工?	季陶
▲1919/10/12	【著作】評国際航空法	季陶
▲1919/10/12	【著作】宗教与信仰	季陶
▲1919/10/12	【著作】全意識的生活	季陶
△1919/10/18以前▲1919/10/20	【講演・談話記録】〈*米国上院における山東条項修正案否決の報に接して〉	
▲1919/10/19,11/23	【著作】旧倫理的崩壊与新倫理的建設	季陶
▲1919/10/19	【著作】美国的修正和約内山東条項案否決了	季陶
▲1919/10/26	【著作】美国産業界的大恐慌——美国究竟有社会主義的存在没有?	季陶
▲1919/10/26	【著作】人格的自殺与人格的復活	季陶
▲1919/11/2	【著作】十月二十六日的感想	季陶
▲1919/11/2-11/7	【著作】商品生産的性質	考茨基著,季陶訳
△1919/11/6▲1919/11/9	【著作】美国産業戦的準備期	季陶
△1919/11/7▲1919/11/17	【著作】〈*大阪朝日新聞社宛の書簡〉	
▲1919/11/9	【著作】現代女子問題的意義	季陶
▲1919/11/9	【著作】此行珍重	季陶
▲1919/11/9	【著作】日本労動運動的新機軸	季陶
▲1919/11/9	【著作】改造日本的奇論	季陶
▲1919/11/9	【著作】解放与保重	季陶
▲1919/11/16	【著作】国際労動会議与日本労動委員資格問題	季陶
▲1919/11/16	【著作】政治問題応該研究不応該研究?	季陶
▲1919/11/23	【著作】懺悔的人格	季陶
▲1919/11/30	【著作】俄国的近況与聯合国的対俄政策	季陶
▲1919/11/30	【著作】神経病与貧血病	季陶
▲1919/11/30	【著作】現代社会上的自由	季陶
▲1919/11,12,1920/1,3?,4?,6?,12	【著作】馬克斯資本論解説	Karl Kautsky加爾、考茨基著,戴伝賢(戴季陶)訳
▲1919/12/7	【著作】東亜永久和平策	季陶
▲1919/12/14	【著作】意大利的『赤色化』与其反動	季陶
▲1919/12/14	【著作】禁止夜工	季陶
▲1919/12/14	【著作】歓迎「闇星」	季陶
△1919/12/14▲1919/12/15	【講演・談話記録】	
▲1919/12/21	【著作】我対於一切人類的供状(附評)〈*序,跋〉	季陶

上海『星期評論』第10号	
上海『星期評論』第11号○44	
上海『星期評論』第11号○44	
上海『星期評論』第11号○19,44	
上海『星期評論』第11号○19(教育的醒後)	
上海『星期評論』第11号	
上海『星期評論』第12号	
上海『星期評論』第12号	
上海『民国日報』「時評　三」	
上海『民国日報』副刊「覚悟」○44	訂正案内:「更正」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1919/8/26付)。
上海『星期評論』第13号○44,51	
上海『星期評論』第13号○44	
上海『星期評論』第13号○44	
上海『建設』第1巻第1号○21,31,44,51	訂正案内:「読者注意」(上海『建設』第1巻第3号,1919/10)。日本語訳:戴天仇「予の日本観『四』」(天津『日華公論』第7巻第2号,1920/2);戴天仇「日本維新史に於ける階級闘争の瞥見――予の観る日本武士の精神と商人根性」(『日華公論』第7巻第5号,1920/5);戴天仇「自由民権運動の始祖――『軍閥』『財閥』時代よりデモクラシーの時代へ」(『日華公論』第7巻第6号,1920/6);戴天仇「侵略的罪悪の責は日本の特権階級に帰せよ――日本の第四階級は吾等中華民の好朋友=予の日本観(完)」(『日華公論』第7巻第9号,1920/9);嵯峨隆訳「我が日本観」(『戴季陶の対日観と中国革命』137-190頁)など。陳炯明は『建設』の出版経費の一部を負担していたという。
上海『星期評論』第14号○44	
上海『星期評論』第14号	
上海『星期評論』第14号○19	
上海『星期評論』第14号	
上海『星期評論』第14号	
上海『星期評論』第14号	
上海『建設』第1巻第3号○21,31,44,51	主な転載個所:上海『民国日報』副刊「覚悟」1919/10/2付-10/9付,10/11付-10/18付。
上海『星期評論』第15号○44(跋《答友問》)	
上海『星期評論』第15号○44	
上海『星期評論』第15号	
上海『申報』「寰球学生会之演説」	
上海『星期評論』第16号○44	
上海『星期評論』第16号○44	
上海『星期評論』第16号	原著:「露国の片面　レーニン語る」(『大阪毎日新聞』1919/9/7付)。
上海『民国日報』「時評　二」	
上海『民国日報』「時評　三」	
『胡適来往書信選』70頁	原件の影印:『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊,104-106頁。
上海『星期評論』第17号○44	
上海『星期評論』第17号○44	
上海『星期評論』第17号○44	
上海『星期評論』第17号○19,44	
上海『建設』第1巻第2号○21,31,44,51	日本語訳:戴天仇「革命八年後の支那の社会現象――経済上より観察したる中国の乱源」(天津『日華公論』第7巻第3号,1920/3);戴天仇「新文化運動と支那の過・現・未――経済上より観たる中国の乱源『四』」(『日華公論』第7巻第9号,1920/9)など。
	萱野長知は東京で株式会社善隣倶楽部を設立。戴季陶は発起人および株式取引人となる。
	社会主義への志向を持った東京帝国大学「新人会」会員の宮崎龍介、平貞蔵などが戴季陶を訪問。この頃、宮崎龍介が訪問。戴季陶は宮崎龍介に、施存統が東京留学を行うにあたっての受け入れ先を見つけるように依頼。宮崎寅蔵家が受け入れを引き受け、施存統は1920/6/20、上海を発ち東京に向かう。
	薛仙舟、馬君武とともに、上海国民合作儲蓄銀行の設立に出資。
上海『民国日報』「時評　一」	
上海『星期評論』第18号	
上海『星期評論』第18号○44	
上海『星期評論』第18号	
上海『星期評論』紀念号	主な転載箇所:『新青年』第7巻第6号,1920/5。原著:ラーキン「マルクス主義の分化」堺利彦訳(『社会主義研究』第1巻第5号,1919/9);室伏高信「ギルドソーシアリズム及び其の批判」(『批評』第7号,1919/9)など。
○31	中華革命党、中国国民党に改組(上海)。
上海『星期評論』第19号○44	
上海『星期評論』第19号	
上海『星期評論』第19号○44	
上海『星期評論』第19号○44	
『大阪朝日新聞』「修正否決と支那」	
上海『星期評論』第20号,第25号○44	
上海『星期評論』第20号	
上海『星期評論』第21号○44	
上海『星期評論』第21号○19	
上海『星期評論』第22号	
上海『民国日報』副刊「覚悟」	原著:Karl Kautsky, *Karl Marx' Oekonomische Lehren* ,1887.翻訳はカウツキー『マルクス資本論解説』高畠素之訳 からの重訳。
上海『星期評論』第23号	
『大阪朝日新聞』「戴天仇氏より」	
上海『星期評論』第23号	原著:August Bebel, *Woman: in the past,present,abd future* .翻訳は山川菊栄「婦人論に序す」(ベーベル『社会主義と婦人』村上正雄訳)からの重訳。
上海『星期評論』第23号	
上海『星期評論』第23号	
上海『星期評論』第23号	
上海『星期評論』第23号	
上海『星期評論』第24号	
上海『星期評論』第24号○44	
上海『星期評論』第25号○19	
上海『星期評論』第26号○44	
上海『星期評論』第26号○19,44	
上海『民国日報』副刊「覚悟」○44	
上海『建設』第1巻第4号,第5号,第6号,第2巻第2号,第3号,第5号,第3巻第1号	原著:Karl Kautsky, *Karl Marx' Oekonomische Lehren* ,1887.翻訳はカウツキー『マルクス資本論解説』高畠素之訳 からの重訳。単行本:徳国考茨基原著,戴季陶訳,胡漢民補訳『資本論解説』(上海:民智書局,1927/10)。
上海『星期評論』第27号○44	
上海『星期評論』第28号	
上海『星期評論』第28号	
上海『星期評論』第28号	
上海『民国日報』「戴<*戴季陶>銭<*銭伯鈞>両君斐島教育談」	
上海『星期評論』第29号○44(評《我対於一切人類的供状》)	孫少侯「我対於一切人類的供状」(上海『星期評論』第29号,1919/12/21付)。

▲1919/12/28	【著作】熱社会与冷社会	季陶
▲1920/1/1	【著作】民国九年的工作	戴季陶
▲1920/1/1	【著作】満蒙山東与東部西比利亜	戴季陶
△1920/1/1	【著作】〈*孫少侯(毓筠)宛の書簡〉	伝賢
▲1920/1/3	【著作】馬克斯伝	威廉、里布列希Wilhelm Liebknecht著〈*季陶序,訳〉
△1920/1/2▲1920/1/4	【講演・談話記録】労工同盟与吾国之関係	
△1920/1/7▲1920/2	【著作】三民主義〈*枯川(堺利彦)宛の書簡〉	戴天仇
▲1920/1/11	【著作】新年告商界諸君	季陶
△1920/1/13	【著作】致陳競存論革命的信	戴季陶
△1920/1/15	【著作】世界戦争与中国——為太平洋社訳『世界戦争与中国』作的序〈*上海にて〉	戴季陶
▲1920/1/18	【著作】問題是要研究的	季陶
▲1920/1/18	【著作】美国西北利亜撤兵与日本	季陶
▲1920/1/18	【著作】日俄辺界是誰使他接近的?	季陶
▲1920/1/18	【著作】徳国人又想唱第二出戯了	季陶
▲1920/1/18	【著作】美国的労動党	季陶
▲1920/1/25	【著作】『薩波達挙』的研究	季陶
▲1920/1/25	【著作】蹂躙大学的日本政府	季陶
▲1920/1	【講演・談話記録】日本問題之過去与将来——在報界聯合会之演説詞	戴季陶
▲1920/2/1	【著作】中国労動問題的現状——上海的労動条件如何?	季陶
▲1920/2/1	【著作】閲者注意	季陶
△1920/2/7▲1920/2/15	【著作】懶惰?	季陶
△1920/2/8▲1920/2/22	【著作】開差	季陶
△基督降生1920年復活祭前三日▲1920/2/8	【著作】阿們!?	季陶
▲1920/2/12	【著作】敬告全国的市民諸君	季陶
1920/2/27		
▲1920/2/29	【著作】労農政府治下的俄国	季陶
▲1920/2/29	【著作】学潮与革命	季陶
▲1920/2/29	【著作】蔡先生委曲求全的是非	季陶
▲1920/2	【著作】〈*「馬克斯資本論解説」翻訳遅延の告辞〉	戴季陶
▲1920/3/7	【著作】酔酒	季陶
▲1920/3/14	【著作】労動運動的発生与其帰趨(一)	季陶
▲1920/3/14	【著作】日本衆議院解散的結果如何?	季陶
▲1920/3/16	【著作】読秀水君致力子的信	季陶
△1920/3/17▲1920/3/18	【著作】〈*「新生命雑誌社基金収拠」と新生命雑誌社「基金予約簿」の遺失声明〉	戴伝賢
▲1920/3/19	【著作】一個「弁論」的結束——秀水「読季陶的論文」与季陶答信——秀水致力子的信与力子覆信	季陶など
▲1920/3/19	【著作】日本会発生革命嗎?	季陶
▲1920/3/21	【著作】我対於工読互助団的一考察	季陶
△1920/3/23▲1920/4	【著作】工読互助団与資本家的生産制	季陶
▲1920/3/24	【著作】一個人只用一個名字	季陶など
▲1920/3/28	【著作】徳国革命的因果	季陶
▲1920/3?	【著作】労動者解放運動与女子解放運動的交点	季陶
1920/3頃		
1920年春		
▲1920/4/11	【著作】俄国労農政府通告的真義	季陶
▲1920/4/11	【著作】北京二十九校代表做甚麼夢?	季陶
▲1920/4/11	【著作】獵人会	季陶
▲1920/4/11	【著作】経済之歴史的発展	季陶
▲1920/4/25	【著作】国家主義之破産与社会的革命	季陶
▲1920/4/25	【著作】競争与互助	季陶
▲1920/4/25	【著作】必然的悪	季陶
▲1920/4/25	【著作】永生呢?即死呢?	季陶
▲1920/4/29	【著作】五月一日的安寧与社会公衆	季陶
1920/4頃		
▲1920/5/1	【著作】文化運動与労動運動	季陶
▲1920/5/1	【著作】上海的同盟罷工	季陶
▲1920/5/1	【著作】関於労動問題的雑感〈*(一),(二)〉	季陶
▲1920/5/4	【著作】「五一」「五四」「五五」「五七」「五九」	季陶
▲1920/5/9	【著作】教不変的蠢才	季陶
▲1920/5/9	【著作】労工非神聖	季陶
▲1920/5/9	【著作】女子的人格怎様争法?	季陶
▲1920/5/9	【著作】同病相憐的苦況	季陶
▲1920/5/9	【著作】平民与平和	季陶
▲1920/5/9	【著作】新青年的『労動節紀念号』	季陶
△1920/5/18▲1920/5/21	【講演・談話記録】〈*日本から来滬した学生に対して〉	
▲1920/5/20	【著作】自由研究与自由批評	季陶
▲1920/5/23	【著作】労動問題雑感(三)	季陶
▲1920/5?	【著作】〈*馬伯援宛の書簡〉	季陶
1920/6/6		
▲1920/6/9	【講演・談話記録】商業的社会組織之一観察	戴季陶
▲1920/6?	【著作】協作制度的効用	季陶
1920/6/17頃		
▲1920/7/17	【著作】資本主義下面的中日関係	戴季陶
1920/7-1920/8頃		
▲1920/8	【著作】到湖州後的感想	季陶

上海『星期評論』第30号〇44	
上海『民国日報』紀念増刊〇44	
上海『民国日報』紀念増刊〇44	
『胡適来往書信選』513-515頁〇44(致孫毓筠)	原件の影印:『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊,114-117頁。
上海『星期評論』第31号「新年号」〇44(《馬克斯伝》訳按)	主な転載箇所:W.リープクネヒト「馬克思伝」(中国労動組合書記部編『馬克思紀念冊』(中国労動組合書記部,1922/5))。原著:W.リープクネヒト「マルクス伝」志津野又郎訳(『社会主義研究』第1号,1906/3)。
上海『申報』「商界総聯合会迎送会記」	
東京『解放』第2巻第2号	
上海『星期評論』第32号〇44	
上海『建設』第2巻第1号,1920/2〇19(論革命致陳先生書),33,40(論革命致陳先生書),44	陸安(陳炯明)「評康〈*康白情〉戴〈*戴季陶〉両君論革命的書」(漳州『閩星』第1巻第8号,1919/12/25付)に対して。
上海『建設』第2巻第1号,1920/2〇29(世界戦争与中国序),30(同前),44	主な転載箇所:上海『湖州』第1巻第6号,1925/3。
上海『星期評論』第33号	
上海『星期評論』第33号	
上海『星期評論』第33号	
上海『星期評論』第33号	
上海『星期評論』第33号	
上海『星期評論』第34号	原著:河上肇「同盟怠業の道徳的批判に就て」(京都帝国大学経済学会『経済論叢』第9巻第5号,1919/11);山川均「労働運動戦術のサボターヂュ」(東京『改造』1919/9)など。
上海『星期評論』第34号〇44	
上海『黒潮』第1巻第3号〇44	
上海『星期評論』第35号〇44	日本語訳:戴天仇「支那労働問題の現状」(天津『日華公論』第7巻第7・8号合刊,1920/8)。
上海『星期評論』第35号	
上海『星期評論』第37号〇20	
上海『星期評論』第38号〇20	
上海『星期評論』第36号〇20	1920年のイースター(復活祭)は4/4。日本語訳:戴天仇「滴るよ労働十二時間の汗」(天津『日華公論』第7巻第4号,1920/4)。主な転載箇所:上海『先駆』第4号「非基督教学生同盟号」1922/3/15付。
上海『民国日報』「社論」〇44	
	陳独秀、張国燾、沈玄廬などとともに、上海工読互助団在全国各界聯合会籌備会を設立。
上海『星期評論』第39号〇44(為布里特《労農政府治下的俄国》所作按語和注釈)	
上海『星期評論』第39号〇44	日本語訳:季陶「学潮と革命」(天津『日華公論』第7巻第7・8号合刊,1920/8)。
上海『星期評論』第39号	
上海『建設』第2巻第1号	
上海『星期評論』第40号〇20	
上海『星期評論』第41号〇44,51([部分]現代社会生活的本体)	日本語訳:季陶「労働運動の発生及び其帰趨」(天津『日華公論』第7巻第7・8号合刊,1920/8)。
上海『星期評論』第41号	
上海『民国日報』副刊「覚悟」〇44	
上海『申報』;上海『民国日報』「戴伝賢啓事」	戴季陶は1917年、雑誌『新生命』を創刊する計画を立てた。
上海『民国日報』副刊「覚悟」〇44(答秀水信)	
上海『民国日報』〇44	
上海『星期評論』第42号〇44	
上海『新青年』第7巻第5号	日本語訳:季陶「工読互助団と資本家の生産制」(天津『日華公論』第7巻第7・8号合刊,1920/8)。
上海『民国日報』副刊「覚悟」	
上海『星期評論』第43号	
上海『建設』第2巻第2号〇21,31,44,51	主な転載箇所:上海『民国日報』副刊「覚悟」1920/3/10付-3/12付。
	全国学生聯合会の事務所(上海貝勒路義和里14号)で、姚作賓、ボタポフなどと会談。
	孫文、胡漢民、廖仲愷、朱執信などとともに、小中学校の教科書(国文、歴史、地理)を編纂に着手。その後、諸事情のため中断。
上海『星期評論』第45号〇44	
上海『星期評論』第45号〇44	
上海『星期評論』第45号	
上海『民国日報』副刊「覚悟」〇44	
上海『星期評論』第47号〇44	
上海『星期評論』第47号〇44	
上海『星期評論』第47号〇44	
上海『星期評論』第47号〇44	
上海『民国日報』「社論」〇44	
	陳独秀、ヴォイチンスキーと会談。1919年から1920/4の間に、戴季陶は東京『社会主義研究』創刊号(1906/3発行,幸徳秋水・堺利彦訳「共産党宣言」所収)を陳望道に提供。
上海『星期評論』第48号「労動紀念号」〇44	
上海『星期評論』第48号「労動紀念号」〇44	
上海『星期評論』第48号「労動紀念号」〇44	
上海『民国日報』「社論」〇44	
上海『星期評論』第49号	
上海『星期評論』第49号	
上海『星期評論』第49号	
上海『星期評論』第49号	
上海『星期評論』第49号	
上海『星期評論』第49号	
上海『民国日報』副刊「覚悟」「戴季陶君対日本游歴学生的講演」〇44(対於日本游歴学生的講演)	
上海『民国日報』副刊「覚悟」〇44	
上海『星期評論』第51号〇44	
上海『建設』第2巻第4号	
	『星期評論』停刊(実際は廃刊)。停刊以前に、星期評論が『浙江新潮』第3期を代理発行する。6月、陳独秀など上海の共産主義者と党の結成について会談。
上海『時事新報』副刊「工商之友」〇44	記録:韋生。
上海『建設』第2巻第5号〇02(協作社的効用),35(同前),44	主な転載箇所:上海『民国日報』副刊「覚悟」1920/6/14付。
	浙江省呉興県に移る。この頃、楊郁文を養女として引き取り、戴小恒と名づける。
上海『民国日報』副刊「覚悟」〇44	
	7月初、蒋介石に対し陳炯明を補佐するように勧告。また春頃から、廖仲愷、朱執信、張国燾などと頻繁に交流し、張国燾との会話の中で陳炯明を「社会主義の将軍」と賞賛。
上海『建設』第2巻第6号〇31,44,51	

▲1920/10/17	【著作】労動者応該如何努力?	季陶
△1920/10/27	【著作】題周佩箴先生蔵章太炎先生告癸丑以来死義文稿	
1920/11/21		
1920/11/25		
1920/11/28		
△1920/11	【著作】産業協作社法草案理由書	戴季陶
▲1920/12	【著作】反響<*大鐙閣宛の書簡>	戴天仇
▲1920/12/1	【著作】幾徳氏政治経済学的批評	季陶
▲1920/12/1	【著作】懐朱執信先生	季陶
1920/12/15	【著作】<*上海証券物品交易所での仲買事業(恒泰号)に関する契約書>	小恒記など
▲1920/12/22-12/24	【講演・談話記録】改革期<*潮>中的広東——戴季陶君的談話	
△1920/12/23▲1920/12/25	【講演・談話記録】<*上海にて>	
1920/12/25		
1919-1920/4		

社会主義青年団(上海)『労動界』第10冊	
○29	
	上海機器工会の成立大会に出席(上海「外国語学社」)。
	孫文、伍廷芳、唐紹儀、胡漢民、伍朝枢、徐謙、馬君武、宋慶齢などとともに、中国郵船公司中国号に乗る。上海発。広州に向かう。
	香港を経て、広州着。この頃、広東省長陳炯明は戴季陶を省長公署秘書長に任命。「改革期中的広東――戴季陶君的談話」(上海『民国日報』1920/12/22付-12/24付)に附された記者の文章。
『新青年』第9巻第1号,1921/5○02,12(産業合作社法草案理由書),35	
東京『解放』第2巻第12号	『解放』の出版元である大鐙閣から高畠素之訳の『資本論解説』の寄贈を受ける。『星期評論』所載の社会主義関係の論説には『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『上海日日新聞』などの日本語新聞、『新社会』、『批評』、『社会主義研究』、『デモクラシイ』、『改造』、『東洋経済新報』、京都大学『経済論叢』などの日本語雑誌を参考にしたものが多い。
上海『建設』第3巻第1号○31,44	幾徳はCharles Gide。
上海『建設』第3巻第1号○19,31,40,44	
○49(蒋偉記与張静記等関於集資経営恒泰号経紀人営業所的契約)	張静江、蒋介石などと協進社を設立し、上海証券物品交易所で商業活動ための資金を日本の某社から取り付ける。戴季陶、蒋介石、張静江、陳果夫は牌号「恒泰号」の株主となる。戴季陶(「小恒記」)は100元(2株)を出資。1920年末、株価が高騰し高い利潤を得るが、1922年2月、株価が暴落し倒産する。
上海『民国日報』○44	
『大阪毎日新聞』「広東に理想郷を」	
	浙江省奉化に蒋介石を訪問。

年/月/日	題名	筆名(講演者名)
1921/1/12		
△1921/1/14	【著作】致蒋介石先生書	
1921/3/6		
1921/4/5		
△1921/5/31	【著作】〈*上海証券物品交易所での仲買事業(利源号)に関する契約書〉	蒋介石, 戴季陶, 張静江など
▲1921/5	【著作】我所起草的三法案	戴季陶
▲1921/5	【著作】広東省商会法草案理由書——広東省商会法草案——広東省商会議員選挙令草案	戴季陶
▲1921/5	【著作】広東省産業協作社法草案	
▲1921/5	【著作】「協作主義普及協会」組織計画概畧	
▲1921/5	【著作】広東省工会法草案理由書	戴季陶
△1921/7/18	【著作】〈*上海証券物品交易所での仲買事業(利源号)に関する契約書〉	蒋介石, 戴季陶, 張静江など
1921/12/5		
△1921	【著作】〈*上海証券物品交易所での仲買事業(恒泰号)に関する契約書〉	小恒記など
△1921	【著作】致呉興県人士書	
1922		
1922/8/14以後		
1922/10/22		
1922/10/30		
1922/11/9頃		
1922		
▲1923/1/1	【講演・談話記録】〈*県自治は聯省自治と比べ国情に適する〉	
1923/1/2		
1923/1/10		
1923/1/23		
1923/3/10		
1923年秋		
1923/10/19		
1923/10/28		
△1923/11/?	【著作】良縁記	
1923/12/9		
1923/12		
1924/1/6		
1924/1/20-1/30		
△1924/1/27	【著作】〈*熊錦帆、石青陽、向育仁など宛の書簡〉〈*広州大南洋舟中にて〉	戴伝賢
▲1924/1?/?	【著作】国民党的継往開来	戴伝賢
1924/1/30		
1924/1/31-2/6		
△1924/3/13	【著作】〈*稽翥青『中国与暹羅』の序〉	
△1924/3/14	【講演・談話記録】東方問題与世界問題〈*上海大学にて〉	
1924/3/24		
1924/3/30		
△1924/3/?	【著作】演劇与平民	
1924/4/3		
1924/4/8		
1924/4/10		
1924/4/11		
△1924/4/14	【著作】関於本党印刷圏点之議案〈*一期中執会21次常会にて〉	
△1924/4/15	【著作】戴季陶啓事	
△1924/4/18	【著作】呈大元帥告就任法制委員会委員日期並互選為委員長啓用関防文	
▲1924/4/19	【著作】減省漢字問題(致楚傖)	季陶
1924/4/28		
△1924/4/29	【講演・談話記録】革命党員底責任〈*中国国民党陸軍軍官学校(黄埔軍校)にて〉	
1924/4		
1924/5/1		
1924/5/2		
1924/5/5		
△1924/5/7▲1924/5/11	【講演・談話記録】〈*広州学生聯合会主催の国恥紀念会にて〉	

書誌	活動記事・注記
	上海でソコロフ=ストラホフK.N.Sokolov-Strahovと会談。文書9「索科洛夫-斯特拉霍夫関於広州政府的報告」1921/4/21付(『聯共(布)、共産国際与中国国民革命運動(1920-1925)』61頁)。
○29	浙江省呉興県に移る。
	上海の楊庶堪宅で居正、宮崎虎蔵などと午餐。
	孫文は戴季陶に広州に来るように促す。
○49(蒋介石与戴季陶等関於合資経営利源号経紀人営業所的契約)	
『新青年』第9巻第1号	
『新青年』第9巻第1号	
『新青年』第9巻第1号 ○02(産業協作社法草案),12(産業合作社法草案),35(産業協作社法草案)	
『新青年』第9巻第1号 ○02,12(「合作主義普及協会」組織計画概要),35	
『新青年』第9巻第1号	
○49(蒋介石与張静江等関於利源号経紀人営業所拡充営業追加股本的契約)	
	蒋介石と陳潔如の婚礼(上海)に新郎側の家長代理として出席。
○49(蒋偉記与張静記等関於恒泰号経紀人営業所拡充営業股本的契約)	
○33	
	趙季官(文淑)と知り合う。一部の史料には継官(文俶)と記されている。
	陳炯明がクーデターを起こし、孫文は広州を離れ上海に移る。戴季陶は当時、浙江省呉興県に滞在していたが報を聞き上海の孫文の許に移る。
	孫文は戴季陶を成都に派遣し、四川省における軍閥内戦の終結と実業建設の着手を行わせる。
	向育仁(四川省長劉成勲の使者)とともに上海発。
	戴季陶らの船が湖北省宜都から宜昌に向かう途中、戴季陶は長江に身を投げる。翌日湖北省枝江県の住民(屈氏と楊氏)によって保護され、後日向育仁と合流。成都に滞在。
	四川省議会は戴季陶を四川省憲法起草委員会主任委員に任命。
長沙『大公報』「戴天仇赴川之談話」	
	中国国民党改進大会(上海)。
	四川省憲法起草委員会設立。
	中国国民党参議に任命される。
	四川省憲法起草委員会は四川省議会に「四川省憲法草案」を提出。「四川省憲法草案」(上海『太平洋』第3巻第10号,1923/6)。
	成都滞在中、楊吉甫、劉大元などと交流。秋、成都を発ち、嘉陽峨嵋山に向かう。
	中国国民党改組委員に任命される。
	中国国民党臨時中央執行委員会第1次会議(広州)は、戴季陶を臨時(中央)執行委員会上海執行部委員に任命。
○31	
	中国国民党中央幹部会議第10次会議(上海)に出席。
	孫文は廖仲愷を上海に派遣し、上海駐在の党員に党の改組を周知させようとする。11/29、廖仲愷は上海に着く。12月、廖仲愷は戴季陶と会談し、党職就任と中国国民党一全大会(第一期全国代表大会)出席を説得。戴季陶は拒否するが、結局広州に向かう。
	中国国民党一全大会浙江省代表に任命される。
	中国国民党一全大会(広州)は戴季陶を(大会)宣言審査委員会委員、章程審査委員会委員、宣伝審査委員会委員に任命。1/21、1/23、1/28、(大会)宣言、章程の説明を行う。1/25午後-1/27、レーニン逝去に哀悼の意を表するために休会。1/29、孫文が提出した「対於游民士匪及軍隊努力宣伝本党主義案〈*関於感化游民士匪及殊遇革命軍隊之決議案〉」を説明。同会は戴季陶を第一期中央執行委員会委員に選出。
上海『民国日報』「中国国民党改組紀念特刊」○29(致熊錦帆諸先生書),30(第一次全国代表大会之性質与内容致熊錦帆諸先生書)	
上海『民国日報』「中国国民党改組紀念特刊」○29	
	中国国民党一全大会閉会後、広州発。上海に向かう。
	中国国民党一期一中全会(第一期中央執行委員会第一次全体会議)(広州)は、戴季陶を第一期中央執行委員会常務委員に選出し、宣伝部部長と秘書処に任命。
○29(中国与暹羅序)	
○05,06,17,19,29,30,51	単行本:戴季陶先生講演『東方問題与世界問題』(上海:光明書局,1928/9第二版)。
	廖仲愷は戴季陶に電報を打ち、来粤を促す。
	湖社発起人会(上海)は戴季陶を主席、籌備員に任命。この頃、戴季陶は広州に向かう意思を表明。上海『申報』1924/3/31付。
○29	
	孫文は戴季陶の来粤を促す。「致戴季陶電」1924/3下旬(『孫中山集外集補編』387頁)。戴季陶は上海を発ち、広州に向かう。
	広州着。
	一期中執会20次常会(中国国民党第一期中央執行委員会常務委員会第20次会議)(広州)に出席。
	陸海軍大元帥大本営(第三次広東軍政府)の法制委員会委員長に任命される。4/25業務開始。「考試院組織条例」、「考試条例」、「考試条例施行細則」の起草を行う(8/26公布)。『陸海軍大元帥大本営公報』第24号,1924/8/30付。
○35	
『広州民国日報』1924/4/17付など	
○35	
上海『民国日報』副刊「覚悟」	
	陸海軍大元帥大本営の大本営参議に任命される。
○26(党員的文化責任与三民主義),31(党員以明瞭党的主義及党的責任為先務講詞)	
	中央通訊社設立(広州)。
	広州市工人代表大会、広州工人紀念五一国際労動節大会に出席。
	黄花崗先烈公祭(旧暦三月二十九日黄花崗起義紀念日)に出席。譚平山と中国共産党員の二重党籍について会談。
	一期中執会26次常会は戴季陶を農民運動委員会委員に任命。
「戴季陶先生演説辞」(『広州学生聯合会旬刊』第2期)	記録:啓焱。

△1924/5/21	【講演・談話記録】如何完成羣性〈*中国国民党陸軍軍官学校にて〉	戴主任季陶
△1924/6/1▲1924/6/2	【講演・談話記録】介紹三民主義於日本国民	
△1924/6/1▲1924/6/2	【講演・談話記録】中国国民党之歴史及其在中国歴史上之任務	
▲1924/6/12	【講演・談話記録】国民党之革命思想〈*沙面の日本倶楽部にて〉	
▲1924/6/12	【講演・談話記録】国民党之革命思想及三民主義〈*香港日報社主催の講演会にて〉	
1924/6/13以前		
1924/6/13		
1924/6/16		
1924/6/19		
△1924/6/20	【著作】呈総理懇辞中央執行委員会秘書及宣伝部長文	
1924/6/22		
1924/6/24		
1924/6/28		
1924/6/30		
▲1924/7/2	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
△1924/7/5	【著作】致蒋介石先生書	
△1924/7/6?▲1924/7/7	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
1924/7/9、7/10		
▲1924/7/13	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
1924/7/18		
1924/7/19		
1924/8/10頃		
1924/8/11		
1924/11/17		
1924/11/22		
△1924/11/22▲1924/11/23	【講演・談話記録】〈*上海丸にて〉	
1924/11/23		
1924/11/24		
1924/11/25		
▲1924/11/27-11/30	【講演・談話記録】孫文氏と其事業〈*神戸のオリエンタルホテルにて〉	戴天仇氏談
1924/11/28		
△1924/11/29▲1924/11/30	【講演・談話記録】〈*神戸にて〉	
1924/11/30		
▲1924/12	【著作】回想録	
1924/12/1		
1924/12/4		
△1924/12/6以前▲1924/12/8	【講演・談話記録】〈*天津にて〉	
1924/12/6		
△1924/12/4から12/12の間▲1924/12/28-12/30	【著作】支那を救ふは国家主義——孫文氏の思想に就て〈*天津にて〉	戴天仇
1924/12/12		
▲1924/12/13	【講演・談話記録】〈*天津にて〉	
1924		
▲1925/1	【書画】中国国民党党歌詞〈*改造社同人に贈る〉	天仇
△1925/2/5▲1925/3	【著作】評太平洋雑誌第四巻第九号〈*上海から天津への船中にて〉	
1925/2/24	【講演・談話記録】孫文氏革命思想と支那文化の復興〈*北京の大和倶楽部にて〉	
1925/2/26		
▲1925/2	【著作】回想録(二)	季陶
▲1925/3/8	【講演・談話記録】支那は共産化せず	戴天仇
1925/3/11		
△1925/3/12直後	【著作】〈*孫文を追悼する輓聯〉	戴伝賢
▲1925/3/14	【著作】革命与文化復興	戴季陶
△1925/3/15〈*もしくは16〉▲1925/3/20	【著作】孝	戴季陶
1925/3/19		
△1925/3/23	【著作】中国国民党全体党員祭総理文	
△1925/3/27	【著作】敬題中山先生手書建国大綱	季陶戴伝賢
△1925/3▲1925/5/16〈*実際は5/19以後〉	【著作】我們要推翻大英帝国主義——中山先生手書『民族主義自序』書後	戴季陶
△1925/3/?	【著作】創辦独立旬刊的旨趣	
▲1925/3	【著作】日本の東洋政策に就いて〈*上海にて〉	戴天仇
1925/4/3		
1925/4/4		
1925/4/6		
△1925/4/14▲1925/4/19	【著作】〈*励志篤行社宛の書簡〉	戴伝賢

中央陸軍軍官学校校務委員会編『中央陸軍軍官学校史稿』 1936/5〇33(摹性如何完成的方法講詞),39	
『広州民国日報』「戴季陶対日僑講演」	不詳。
『広州民国日報』「戴季陶対日僑講演」	不詳。
『広州民国日報』「日人請戴氏赴港演講」	不詳。
『広州民国日報』「日人請戴氏赴港演講」	不詳。
	陸海軍大元帥大本営法制委員会委員長を辞任。「戴季陶辞法制委員」(『広州民国日報』1924/6/13付)。
	中国国民党陸軍軍官学校政治部主任に任命される。(6/10選出)
	一期中執会37次常会に出席し、革命軍軍歌の歌詞案を提出。
	張継と謝持が主催した「共産党弾劾大会」(恵州会館もしくは鄒魯宅)に出席。張継に「共産党の走狗」と罵倒され、殴打される。「中央執行委員会反共産党的大武劇」(香港『華字日報』1924/6/23付)。
〇35	
	広州発。香港着。香港で廖仲愷に広州に戻るように説得される。その後、上海に向かう。
	陸海軍大元帥大本営粤軍顧問に任命される。
	上海着。中国国民党陸軍軍官学校政治部主任を辞任。
	一期中執会39次常会は、戴季陶を中国国民党上海執行部の常務委員、宣伝部部長に任命。
『広州民国日報』「戴季陶在滬之談話」	
〇29	
上海『申報』「上海夏令講学会昨日開会」	
	一期中執会は、中央執行委員会に政治委員会の設置を決議し、戴季陶を政治委員会委員に任命。また、戴季陶の来粤を促す。
「戴委員季陶之談話」(広州『中国国民党週刊』第29期)	
	閘北市民外交協会は上海市民対外協会と改称し、戴季陶を顧問に任命。
	一期中執会42次常会は、戴季陶を工会条例起草委員に任命。『広州民国日報』1924/7/21付。
	戴季陶は孫文に対し、党内問題を議論するために中国国民党中央拡大委員会の開催を提案。孫文はこれを許可したため、戴季陶は広州に向かう。8/10-8/14、広州滞在の邵元冲を訪問。8/15-8/25中国国民党一期二中全会(広州)に出席せず。その後浙江省呉興県に戻る。
	一期中執会50次常会は戴季陶の来粤と復職を促す。「請戴委員季陶回任宣伝部原職」(広州『中国国民党週刊』第36期,1924/8/31付)。
	上海で北京に向かう孫文一行と合流。
	孫文、宋慶齢、李烈鈞、黄昌穀などと上海丸に乗船。上海発。
『大阪毎日新聞』「孫文氏と同船して(村田特派員)」	インタビュアー:大阪毎日新聞記者村田孜郎。
	長崎寄港。
	神戸着。
	三ノ宮駅で頭山満を出迎える。
『大阪毎日新聞』	大阪毎日新聞記者沢村幸夫が依頼し、速記者を用意して行う。主な転載箇所:戴天仇「支那革命」(『東京日日新聞』1924/11/29付-11/30付、12/5付-12/6付)。漢語訳:「戴季陶与日本人士論孫先生」(上海『民国日報』1924/12/6付)。
	孫文は兵庫県立神戸高等女学校講堂で講演「大亜細亜問題」(大亜洲主義)を行う。戴季陶は日本語通訳を務める。
『神戸又新日報』「今日帰る孫氏」	
	郵船北嶺丸に乗船。神戸発。
湖社(上海)編『湖州』第1巻第3号	12月、粤軍総司令部は軍事政治月刊社を設立し、戴季陶を名誉社長に任命。
	門司寄港。
	天津着。
『大阪毎日新聞』「善後会議に関しては段孫の意見一致」	
	天津で汪精衛、孫科、邵元冲、張継などと、北方の時局に対する中国国民党の主張について会談。
『大阪毎日新聞』	
	「家事」のため天津を発ち、上海に向かう。上海で孫文と合流する予定を立てる。
上海『民国日報』「孫先生到津後之表示」	
	1924年より家斉(二兄伝栄の子)、家駒(長兄伝薪の子)の教育を担当。
東京『改造』第7巻第1号	
湖社(上海)編『湖州』第1巻第6号〇05(対英経済絶交与中国的独立運動——評太平洋雑誌的一節),06(同前),19(同前),20(同前)	上海発。北京に向かう。2/9、北京滞在の邵元冲を訪問。
	不詳。北京夜学会主催の日本語講演会と晩餐会に出席。
	山田純三郎、菊池良一、萱野長知などとともに北京の大陸飯店に逗留。
湖社(上海)編『湖州』第1巻第5号	
『北京週報』第152号	
	孫文の国事「遺嘱」、家事「遺嘱」に副署。
孫中山先生治喪委員会編『哀思録』	3/12孫文、北京鉄獅子胡同行轅で没。その後、治喪処秘書股(鉄獅子行館)、柩前引導人(協和医院から中央公園社稷壇大殿まで)に就く。
上海『民国日報』副刊「覚悟」	
上海『民国日報』副刊「覚悟」 〇17,19,20,31,40,51	
	柩前引導人(協和医院から中央公園社稷壇大殿まで)を務める。3/20より招待所招待員(中央公園)を務める。
〇29,30	
〇35,36(敬題総理手書建国大綱)	主な転載箇所:『国父孫中山先生紀念集』178頁。
広州『革命』第3期	
〇29	
東京『改造』第7巻第3号	
	北京発。北京滞在中、ソ連駐北京大使館でカラハン、ボロディン、呉稚暉、于右任、鄒魯、李大釗、于樹徳などと会談。
	天津発。孫中山先生葬事籌備委員に任命される。
	上海着。
『大公報』「戴季陶対青年之意見」	

△1925/4/14▲1925/4/24	【著作】孫中山先生著作及講演紀録要目	戴伝賢
△1925/4/15	【講演・談話記録】孫中山主義之哲学基礎〈*北京の中国大学にて〉	戴季陶
▲1925/4/18	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
▲1925/4/27	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
1925/4/30		
▲1925/4	【著作】我対湖州的感情和対湖社的希望	戴季陶
▲1925/4	【著作】科学与迷信	戴季陶
▲1925/4	【著作】回想録(三)	戴季陶
1925/5/2		
1925/5/7		
1925/5/11		
1925/5/14		
▲1925/5/15-5/16	【著作】酒	戴季陶
△1925/5/17▲1925/5/25	【講演・談話記録】〈*広州市特別区党部の聯歓会にて〉	
1925/5/18-5/25		
△1925/5/19▲1925/5/16〈*実際は5/19以後〉	【著作】民生哲学系統表〈*孫文主義民生哲学系統表,広州にて〉	戴季陶
△1925/5/19▲1925/5/16〈*実際は5/19以後〉	【著作】民生哲学系統表説明〈*孫文主義民生哲学系統表説明,広州にて〉	
1925/5/20		
△1925/5/21▲1925/5/23	【講演・談話記録】怎様接受総理的遺教?〈*広州全市党員大会にて〉	戴季陶
△1925/5/24以前	【著作】中国国民党接受総理遺嘱宣言	
△1925/5/27▲1925/5/28	【講演・談話記録】中国国民党之歴史的使命	
△1925/5/30頃▲1925/7/2	【講演・談話記録】〈*沈定一、袁同疇との会談,山東号にて〉	
△1925/5/30頃▲1925/7/2	【著作】〈*袁同疇に頼まれて〉	
▲1925/5	【著作】回想録(四)	戴季陶
1925/6/22		
▲1925/6/27	【著作】指導五卅事件国民運動的注意点	戴季陶
△1925/5-1925/6▲1925/7/27-8/1,8/3	【著作】孫文主義之哲学的基礎〈*広州、上海にて〉	戴季陶
1925/6/30		
▲1925/6	【著作】慈悲心深	戴季陶
1925/1-1925/6		
1925/7/1		
▲1925/7/3	【講演・談話記録】〈*国民運動について〉	
▲1925/7/4	【講演・談話記録】〈*国民政府について〉	
△1925/7/5〈*もしくは6〉▲1925/7/10	【講演・談話記録】〈*浙江全省高級党部執行委員全体会議にて〉	
1925/7/12		
△1925/7/22▲1925/7/30	【著作】〈*許世英宛の書簡〉	国民政府委員(戴季陶など)
▲1925/7〈*もしくは8〉	【著作】国民革命与中国国民党(上編)	戴季陶
△1925/7/23▲1925/7〈*もしくは8〉	【著作】導言〈*『国民革命与中国国民党(上編)』の序,上海にて〉	戴季陶
▲1925/7/31	【講演・談話記録】〈*時局について〉	
▲1925/7	【著作】因五卅事件告中国国民	
△1925/8/4▲1925/8	【著作】再版序言〈*周仏海『中山先生思想概観』,上海にて〉	戴季陶
△1925/8/22▲1925/8/24	【著作】無涯的悲痛与無限的責任——哀悼仲愷先生	戴季陶

上海『民国日報』副刊「覚悟」○51	日本語訳:戴天仇「孫中山氏の著作目録」(東京『支那時報』第10巻第6号,1929/6)。
北京『新民国雑誌』第2巻第2期○11(孫文主義之哲学基礎的演講詞),20,31,40(孫文主義之哲学基礎的演講詞)	記録:熊以謙。主な転載箇所:戴季陶先生「孫中山主義之哲学基礎」(『中山先生思想概要』)。
上海『民国日報』「戴季陶回滬後之言論」	
『広州民国日報』「戴季陶与滬商報記者談話」	
	孫中山先生葬事籌備委員会第3次会議(上海)に出席。
湖社(上海)編『湖州』第2巻第1号	
湖社(上海)編『湖州』第2巻第1号	
湖社(上海)編『湖州』第2巻第1号	
	孫中山先生葬事籌備委員会第4次会議(上海)に出席。
	一期中執会79次常会は戴季陶などを党務および地方行政人員の考試委員会委員に任命。
	一期中執会80次常会は戴季陶、沈定一を中国国民党概覧の編纂委員会委員に任命。
	一期中執会81次常会で党紀軍紀問題を提議。同会は戴季陶、沈定一に議案の起草を命じる。
上海『民国日報』副刊「覚悟」	
『広州民国日報』「党声週刊」第65期	一期中執会82次常会は戴季陶を臨時政治宣伝委員会委員に任命。
	中国国民党一期三中全会(広州)に出席し、「接受総理遺嘱宣言」、「関於確定最高原則事訓令全体党員」案(?)を代表執筆。同会は戴季陶を臨時政治宣伝委員会委員に改めて任命。
戴季陶「孫文主義民生哲学系統表及説明」(広州『革命』第3期)○03,04,11,30,40	「表心」と表の「民生主義――主要問題」を補足:戴季陶「民生哲学系統表」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1925/8/3付)。「表心」と表の「民生主義――主要問題」を補足した英語訳:Tai Chi-t'ao "Synopsis of Sun Yat-sen's 'Three Principles of the People'" Y.H.Wu(呉元海)訳("*The Chinese Social and Political Science Review*" Vol.12 No.1,1928/1).「表心」と表の「民生主義――主要問題」を補足したドイツ語訳:"Systemtabelle der Philosophie des Volkslebens"(Tai Tschi-tao, *Die geistigen Grundlagen des Sun Yat Senismus*,訳者不詳(Berlin:Wurfel Verlag,1931)).
戴季陶「孫文主義民生哲学系統表及説明」(広州『革命』第3期)○03,04,11,30,40,51	ドイツ語訳:"Erlauterungen zu der Tabelle des Systems der Lehre vom Volksleben"(Tai Tschi-tao, *Die geistigen Grundlagen des Sun Yat Senismus*).
	一期中執会85次常会は戴季陶などが提出、報告した中央執行委員会政治委員会のこれまでの活動と今後の計画案を採択。
『広州民国日報』「社論」	記録:梁紹文。
○29,30	中国国民党一期三中全会は戴季陶が代表執筆した「接受総理遺嘱宣言」を採択。
『広州民国日報』「広大演講会之第三日」	不詳。
「往汕頭去」(上海『民国日報』副刊「覚悟」)	沈定一とともに広州発。5/30香港発。汕頭着。5/31潮州遊覧。6/5汕頭発。上海に向かう。
前掲「往汕頭去」	
湖社(上海)編『湖州』第2巻第2号	
	虞洽卿、寧波同郷会長李徴五などとともに、日本商業会議所代表と会談し、内外綿事件を中日両国に第三国を加えた仲裁委員会を設置することで解決することを提議。
上海『民国日報』副刊「覚悟」○05,06,19,51	
上海『民国日報』副刊「覚悟」○03,11,40	日本語訳:戴季陶「孫文主義の哲学的基礎」林六夢訳(上海『上海時論』第1巻第3期-第4期,1926/3-1926/4);戴季陶「孫文主義の哲学的基礎」訳者不詳(『満蒙』第9年第1冊-第2冊,1928/1-1928/2);<*戴天仇>「孫文主義の哲学的基礎」訳者不詳,上海の日本語新聞か(?),1925秋-1926(?)(『萱野長知・孫文関係史料集』333-335頁)。一部抜粋:戴季陶「三民主義之理論的基礎」(『孫中山全集続集』第4集)。
	一期中執会91次常会は戴季陶を国民政府委員会委員に選出。7/23一期中執会98次常会に対し、就任の承諾を伝えるとともに十日間の休暇を申請。
三民公司編『孫中山評論集』	
	中国大学、師範大学、中国国民党中央執行委員会北京執行部和政治委員会聯席会議、北京中国国民党中央執行委員会全体会議談話会(以上、北京)、上海大学(上海)、広東大学(広州)、中国国民党陸軍軍官学校(黄埔)、桂軍軍官学校、滇軍幹部学校、カナダ皇后船上などで講演。戴季陶「因五卅事件告中国国民」。
	中華民国国民政府設立(広州)。
上海『民国日報』「戴季陶対国民運動之談話」	
上海『民国日報』「戴季陶関於国民政府之談話」	
上海『民国日報』「中国国民党之浙江全体会議」	
	孫中山先生葬事籌備委員会第6次会議(上海)に出席。
上海『申報』「南北一致対外之接洽」	
戴季陶『国民革命与中国国民党(上編)』(上海:季陶辦事処)○18,30,40,43,51	
前掲『国民革命与中国国民党(上編)』○19(国民革命与中国国民党導言),40(同前)	
上海『民国日報』「戴季陶対於時局之談話」○06(対於商報記者之談話)	
湖社(上海)編『湖州』第2巻第4号○05,06,19(因五卅事告中国国民),40,51	
周仏海『中山先生思想概観』	
上海『民国日報』○29(哀悼廖仲愷先生)	1925/8/20、広州で廖仲愷が暗殺される。

▲1925/8/24	【著作】国旗歌	
△1925/8/22	【著作】致劉蘆隠先生書	
△1925/8/26▲1925/8/29	【著作】高潔的人格——懐何暁柳先生	戴季陶
▲1925/8/28	【講演・談話記録】〈*鄧孟碩に対して〉	
▲1925/8/30	【講演・談話記録】〈*広東の政局について〉	
▲1925/8?	【著作】回想録(五)	戴季陶
▲1925/8	【著作】孫文主義之哲学的基礎〈*補訂版〉	戴季陶
▲1925/9/2	【講演・談話記録】〈*民族国際の構想〉	
▲1925/9/8	【著作】戴季陶啓事	戴季陶
▲1925/9/11	【著作】〈*孫文「遺嘱」について〉	戴季陶など
▲1925/9?	【著作】回想録(六)	戴季陶
1925/10/3		
1925/10/13		
▲1925/10/21など	【著作】独立旬刊改期出版〈*呉興県より〉	戴季陶
▲1925/10?-1925/12?	【著作】国民読本編輯内容	戴季陶
1925/11/18以前		
1925/11/18		
1925/11/19		
1925/11/21		
1925/11/23-1926/1/4		
△1925/11/23	【著作】致呉稚暉李石曾先生請共挽危局護持本党函	戴伝賢
1925/11/25		
1925/11/27		
1925/11/28		
1925/12/9		
△1925/12/13	【著作】解除政治職責電	
△1925/12/13	【著作】解除政治職責宣言	
△1925/12/13	【著作】致蒋介石先生書	
△1925/12/20	【著作】〈*山田純三郎宛の書簡〉	季
1925/12/25		
△1925/12/30▲1926/1/3	【著作】〈*上海孫文主義学会宛の書簡〉	戴伝賢
1926/1/1-1/20		
△1926/1/12▲1926/1/26	【著作】〈*孫文主義学会(広州)宛の書簡〉	戴伝賢
△1926/1/12	【著作】覆中央執行委員会因病不能赴粤請予解除一切職務函	戴伝賢
△1926/1/13▲1926/1/15	【著作】〈*葉楚傖、劉蘆隠宛の書簡〉	伝賢
△1926/1/22▲1926/1/26	【著作】〈*中国国民党二全大会の宴会での鄧演達報告に対して〉	
▲1926/1/27	【講演・談話記録】〈*中国国民党第二期中央執行委員会委員に就任しないことについて〉	
△1926/1/27	【著作】呈中央執監委員会対二全大会処分西山会議関係諸同志失其公平請停止執行文	戴季陶
1926/2/1		
1926/3/1		
1926/3/20		
▲1926/4/8	【著作】邵元冲戴季陶緊要声明	邵元冲, 戴季陶
1926/4/15		
1926/4/20		
1926/6/1〈*もしくは3〉		
▲1926/6/25	【講演・談話記録】〈*広東大学校長職の就任を辞退する, 呉興県にて〉	
▲1926/6/26	【講演・談話記録】〈*広東大学校長職の就任について国民政府の命令に従う, 呉興県にて〉	

上海『民国日報』「無涯的悲痛与無限的責任——哀悼仲愷先生」○10(戴先生墨跡(自書所撰革命軍歌)),19(戴院長之国旗歌),29(哀悼廖仲愷先生),51(青天白日旗歌)	訂正案内:「更正」(上海『民国日報』1925/8/25付)。主な転載箇所:戴季陶「歌国旗」(上海『民国日報』副刊「覚悟」1927/10/10付)。
○29	
上海『民国日報』副刊「覚悟」	
上海『民国日報』「戴季陶之談話」	9/21一期中執会109次常会は邵元冲、戴季陶などが提議する、鄧家彦が孫文を誣蔑したことを弾劾する案を検討し、鄧家彦の党籍解除を決議。
上海『民国日報』「戴季陶君関於粤事重要之談話」	
湖社(上海)編『湖州』第2巻第5号	
○04,30,43,51	ドイツ語訳:Tai Tschi-tao, *Die geistigen Grundlagen des Sun Yat Senismus* . 日本語訳:戴季陶『孫文主義の哲学的基礎』中山志郎<*山本秀夫>訳(東京:生活社,1939/10)。同文異題の単行本:戴季陶『三民主義之哲学的基礎』(重慶:中央組織部党員訓練処秘書処文化駅站総管理処,1940/3)。
上海『民国日報』「戴季陶君関於民族国際的談話」	主な転載箇所:戴季陶「新縦断的民族国際」(孫文主義学会(広州)編『国民革命週刊』創刊号,1925/9/25)。
上海『民国日報』	孫中山先生葬事籌備委員会第10次会議(上海)に出席。
上海『民国日報』「邵元冲等対孫先生遺嘱之宣言」	
湖社(上海)編『湖州』第2巻第6号	1925/9、陳独秀はコミンテルンに、中国共産党員が中国国民党を退出することを求める電報を発する。コミンテルンは陳独秀の要求を却下。
	中国済難会設立に参加。
	一期中執会113次常会は、『国民革命与中国国民党』が戴季陶個人の意見であり中央の審査を経ていないことを確認し、(今後)党の主義や政策の根本原則に関する言論は党部の決議を経る前に発表してはならないこと、戴季陶に来粤、復帰を促すこと(毛沢東の提議による)、の2点を決議。
上海『民国日報』	この頃、沈玄廬などとともに雑誌『独立旬刊』を創刊しようとするが、実現せず。
湖社(上海)編『湖州』第2巻第7号-第8号	1925/10、中国共産党四期中央第一回拡大執行委員会会議(第二回中央拡大執行委員会会議)(中央一〇月拡大会議)(北京)において、陳独秀は、中国共産党員が中国国民党を退出することを提案(却下される)。また、中国共産党員が中国国民党左派と連盟を結ぶが左派に取って代わるべきではないこと、中国共産党は政治上の独立を強化すること、を提案(可決される)。
	この頃、鄒魯などが主催する北京の西山で開く「中国国民党一期四中全会」(後に「西山会議」と称される)に出席することを決心。
	「中国国民党一期四中全会」の予備会議(西山の碧雲寺)に出席。呉稚暉とともに、汪精衛および中国共産党の党籍を持つ中国国民党員に対する処置を穏便に行うように主張。
	中国国民党「同志倶楽部」に関係する江偉藩は、二十数名の手下を率い、香雲旅社に投宿する戴季陶、沈玄廬、邵元冲を襲う。戴季陶と沈玄廬は一時「同志倶楽部」の事務所(菜市口胡同37号)に監禁される。
	北京発。
	「中国国民党一期四中全会」は、『孫文主義之哲学的基礎』の内容は中国国民党の主義と違反しないが宋教仁とそのほか「諸先烈」を難詰する点を修正すべきこと、中国国民党名義で発行する必要がないこと、を決議。また、戴季陶を中執会上海執行部中央執行委員、宣伝部部長に選出。
○35,36(致呉稚暉、李石曾先生書)	
	中国共産党北方区執行委員会は「我們最近在北方国民党工作中応取的態度」を採択し、中央一〇月拡大会議の決議と対立。
	中国国民党中央執行委員会(広州)は、12/11に広州で一期四中全会、1926/1/1に中国国民党二全大会を開催することを決定。その後、ヴォイチンスキーの斡旋により、陳独秀、張国燾、蔡和森、孫科、葉楚傖、邵元冲は、ソ連駐上海領事館で国共関係問題について会談。会談では、第2期中央執行委員会委員の中で中国共産党員が3分の1を占めること、中国共産党が戴季陶などの来粤を待ち二全大会を開催することに同意すること、を取り決める。
	孫中山先生葬事籌備委員会第15次会議(上海)に出席。
	中国共産党中央局は「中央通告第67号」を発表し、戴季陶(「戴季陶主義」)、西山会議派を批判。
○29	浙江省呉興県に向かう。
○29	
○29	
中下正治「山田純三郎宛の書簡——孫文関係・未公開資料」	陳独秀は「戴季陶主義」の信奉者を「新右派」(中間派と反動右派の中間的存在)と名づける。独秀<*陳独秀>「国民党新右派之反動傾向」(『嚮導』第139期,1925/12/20)。この頃、張国燾、中国共産党広東区執行委員会(陳延年、周恩来など)、ボロディンなどは、国共関係問題について会談。
	一期中執会129次常会は戴季陶の来粤を促す。
上海『民国日報』「戴季陶貽書勉励孫文主義学会」	主な転載箇所:「戴季陶同志勗本会書」(上海孫文主義学会編『革命導報』第3号,1926/1/9)。
	中国国民党二全大会(広州)を欠席。同会は「弾劾西山会議決議案」を採択し、戴季陶が中国国民党一期三中全会で「関於容納中国共産党分子加入本党之訓令」<*「関於確定最高原則事訓令全体党員」案を指すのか>を起草して一ヶ月も経たぬ内に、中国国民党中央執行委員会の許可を得ずに個人名義で『国民革命与中国国民党』を執筆し、「良からぬ影響を生み、党内の紛糾を惹起した」ことに対し、「懇切な訓令を与え、二度と誤りを犯さないように猛省を促」す。戴季陶を第二期中央執行委員会委員に選出。
『広州民国日報』「戴季陶覆孫文主義学会同志書」	
○35,36(覆中央執行委員会書)	
上海『民国日報』副刊「覚悟」「戴季陶先生的「一封公開的信」」	
上海『民国日報』「戴季陶対於鄧演達報告的弁明」○29(対鄧演達報告的声明)	1/1、鄧演達は中国国民党二全大会の宴会席上で、戴季陶が「孫文主義之哲学的基礎」と「国民革命与中国国民党」を著した本意は、中国国民党員の一部があまりにも弱くて頼りなく奮起せず、革命の方法を認識できていないので、党員を一斉に奮起させて革命を行わせることにあったが、後に彼は党の綱領に背き不革命、反革命の工作を行う者に騙されて「中国国民党一期四中全会」に出席した、と述べる。
上海『民国日報』「戴季陶対党事意見」	
○35,36(呈中央執監委員会)	2/8二期中執会3次常会は、戴季陶に来粤もしくは休養を促すこと、謝持と鄒魯が反省するならば中国国民党三全大会で党籍を回復させる可能性があることを決議。
	二期中執会1次常会は戴季陶を廖仲愷先生葬事籌備処委員に任命。
	1/12、国民政府軍事委員会は中国国民党陸軍軍官学校を中国国民党中央軍事政治学校に改称、改組することを決議。3/1、中央軍事政治学校成立典礼。戴季陶は中央軍事政治学校政治部主任に任命される。
	中山艦事件勃発。
『広州民国日報』	「西山会議派」が上海で開く「二全大会」を中国国民党の正式な会議として認めず出席しないことを表明。1926/4、陳独秀はコミンテルンに、中国共産党員が中国国民党を退出することを求める電報を発する。
	広州青年軍人聯合会解散。
	孫文主義学会(広州)解散。
	国民政府は戴季陶を国立広東大学校長に任命。
『広州民国日報』「戴季陶因病未能回粤就職」	
『広州民国日報』「広大学生会赴滬代表返粤」	

▲1926/6/28	【著作】〈*広東大学校長職の就任を辞退する理由について, 広東大学諸同学宛の書簡〉	戴伝賢
▲1926/6/28	【著作】〈*褚民誼宛の書簡〉	戴季陶
▲1926/6/28	【著作】〈*鄭国材、蕭宜棻宛の書簡〉	
1926/7/9		
△1926/7-1926/9▲1928/1	【講演・談話記録】八覚・第一章序言	戴季陶
1926/8/17		
▲1926/8/27	【講演・談話記録】〈*中山大学校長職の就任について拒絶も賛同も示さず, 呉興県、上海にて〉	
▲1926/8/27	【講演・談話記録】〈*中山大学校長職の就任を辞退する, 中山大学諸同学宛の書簡〉	戴伝賢
△1926/夏	【著作】受任広東大学校長宣言	
△1926/夏	【著作】赴粤後作法	
△1926/夏	【著作】箴言〈*胡偉克に贈る〉	
▲1926/9/19	【著作】対於中山大学組織上之意見〈*国民政府宛の書簡, 広州行の前に〉	戴季陶
1926/9/25		
△1926/9/30	【著作】上中央執行委員会請准解除中山大学校長一職並陳明大学行政組織委員制較校長制便利呈〈*併せてソ連、欧米の教育事情を視察するため休暇をとることを申請, 広州にて〉	
1926/10/14〈*もしくは16〉		
1926/10/15-10/26		
△1926/10/17	【講演・談話記録】改造中山大学的意義〈*中山大学委員会委員の就職典礼における1度目の講演〉	
△1926/10/17▲1926/10/20	【講演・談話記録】〈*中山大学委員会委員の就職典礼における2度目の講演〉	
△1926/10/17▲1926/10/22-10/23	【著作】〈*中山大学委員会議決辦法〉	戴伝賢, 顧孟餘など
△1926/10/20▲1926/10/22	【著作】〈*劉甫臣、鄒晋康、劉自乾、向育仁、劉禹九宛の書簡〉	戴伝賢
△1926/10/21▲1926/10/22	【講演・談話記録】〈*中山大学の改革について〉	
▲1926/10/22	【講演・談話記録】〈*中山大学の改革などについて〉	
△1926/10/22	【著作】〈*浙江省党部夏軍長、周師長、諸同志宛の書簡〉	戴伝賢
1926/10/26		
△1926/10/29▲1926/10/30	【講演・談話記録】〈*国民革命軍総司令部、総司令部の聯席会議(広州, 国民政府大礼堂)にて〉	
△1926/10/?▲1926/10/30	【著作】〈*復試辦法〉	戴伝賢, 顧孟餘など
△1926/10/30▲1926/11/2	【著作】対於中大全体学生的希望〈*中山大学特別党部、学生会主催の委員歓迎会にて〉	
▲1926/11/4	【著作】〈*中山大学学生代表選出の紛糾に対して〉	戴伝賢, 顧孟餘など
▲1926/11/6	【著作】〈*休職願(教育視察のため欧州行を要望す), 中央宛の書簡〉	
△1926/11/6▲1926/11/8	【著作】〈*庚子賠償金について〉	戴季陶
1926/11/7		
△1926/11/8▲1926/12/1〈*実際は12/18以後〉	【講演・談話記録】我們要怎様宣伝主義〈*総理誕日宣伝隊予備会(中山大学)にて〉	
△1926/11/11▲1926/12/1〈*実際は12/18以後〉	【講演・談話記録】三民主義与民衆的革命〈*孫総理誕生日の記念典礼(中山大学)にて〉	
1926/11/16		
1926/11/18		
1926/11/19		
△1926/11/22▲1926/11/24	【著作】〈*商震宛の書簡〉	丁惟汾, 戴季陶, 朱霽青
1926/11/26		
△1926/11/27▲1926/12/2	【講演・談話記録】対於中大党部的希望〈*中山大学党部聯歓会にて〉	

『広州民国日報』「戴季陶致広大同学等函」	
『広州民国日報』「戴季陶致広大同学等函」	
『広州民国日報』「戴季陶致広大同学等函」	
	国民革命軍(総司令蒋介石)、「北伐」誓師集会。正式に出兵。7月、中国共産党四期中央第二回拡大執行委員会会議(第三回中央拡大執行委員会会議)(中央七月拡大会議)(上海)において、陳独秀は、中国共産党員が中国国民党を退出することを提案(却下される)。同会議は「中国共産党与国民党関係議決案」を採択。
上海『新生命』創刊号○20,31(写八覚経過及目的講詞),40,51	記録:趙元章、戴家駒。
	国民政府は国立広東大学を国立中山大学に改称(戴季陶を国立中山大学校長に任命)。
『広州民国日報』「敦勧戴校長来粤情形」	
『広州民国日報』「敦勧戴校長来粤情形」	
○29	
○29	
○29,36(写自撰箴言)	
上海『民国日報』副刊「覚悟」○20(対於中大組織上之意見),29(呈国民政府陳明関於中山大学組織上之意見文)	主な転載箇所:「戴季陶来粤及対中大主張」(『広州民国日報』1926/9/30付)。参考文献:「戴季陶先生到粤之意見」(『広州民国日報』1926/10/5付)。
	新華輪にて広州着。
○33	参考資料:「戴季陶先生到粤之意見」(『広州民国日報』1926/10/5付)。国立中山大学着。中国国民党中央執行委員会に対し、国立中山大学校長を辞し、ソ連、欧米の教育事情を視察するために休暇をとることを申請。10/4、国民政府に対し、国立中山大学校長の辞任を申請。「戴季陶辞中大校長職」(『広州民国日報』1926/10/6付)。
	国民政府は戴季陶を国立中山大学委員会委員長に任命。
	中国国民党二期中執会及各省区聯席会議(広州)に出席。
○09,15(改造中大的意義),20,51	国立中山大学委員会委員長に就任。記録:宋香舟。参考文献:「本校委員会諸委員就職誌盛」(広州『国立中山大学校報』第1期,1926/11/5付)。
『広州民国日報』「中山大学委員就職再誌——戴季陶先生第二次演説詞」	参考文献:前掲「本校委員会諸委員就職誌盛」。
『広州民国日報』「中大委員会議決之規劃」○29(国立中山大学委員会佈告)	
『広州民国日報』「戴季陶電促川省将領覚悟電」	
『広州民国日報』「戴季陶関於改革中大之談話」	
『広州民国日報』「戴季陶先生与本報記者之談話」	
『広州民国日報』「戴季陶覆浙江将領電」	
	二期中政会(中国国民党中央執行委員会政治会議)第38次会議は戴季陶を中央執行委員会浙江省特派員に任命。
『広州民国日報』「総司令部与総政治部歓讌中央聯席会議代表」	
『広州民国日報』「中大委員会宣佈復試辦法」○29(大学各本科師範部及各科専門部復試之標準佈告)	主な転載箇所:広州『国立中山大学校報』第1期,1926/11/5付。
『広州民国日報』「中大歓迎会中之名人演説」○09,15,20,40,51	主な転載箇所:「戴季陶委員長演説辞(朗読)」(広州『国立中山大学校報』第1期,1926/11/5付)。
『広州民国日報』「中山大学学生糾紛可望平息」	
『広州民国日報』「戴季陶請赴欧考査教育」	
上海『申報』「戴季陶対日庚賠問題通電」	
	蒋介石は中執会代理主席張静江に対し、戴季陶が中山大学校長の身分のままでソ連の教育事情を視察することを提案。
「戴季陶委員長在総理誕日宣伝隊予備会上講説詞」(広州『国立中山大学校報』第2期)○09,15,17,19,20,26,31,40,51	記録:邱啓薫。
黄鼎栄筆記「戴季陶委員長在紀念総理誕生日演説詞」(広州『国立中山大学校報』第2期)○09,15,17,19,20(三民主義与民衆革命),26,31,51	記録:李遇安。二期中政会第45次会議は、李煜瀛、戴季陶、易培基を日本に派遣することを決議。
	二期中政会第47次会議は、戴季陶を二期中政会委員に任命し、(1)李煜瀛、戴季陶、易培基が即日日本に出発すること、(2)戴季陶が申請するロシア、ヨーロッパの教育事情視察は訪日の任務が終わってから行うこと、を決議。
	二期中政会に対し、訪日の随行秘書二名を自ら選定すること、経費として一万元が支給され、不足分は追加支給されること、を申請。二期中政会第48次会議は、戴季陶の申請通り行うことを決議。
	蒋介石は中国国民党組織部長陳果夫に対し、戴季陶が日本に派遣されることに賛成することを伝える。
『広州民国日報』「丁戴朱三委員電勉西北副総司令」	
	二期中政会臨時会議は中国国民党中央党部、国民政府が武漢に移転することを決議。10/10と11/19、蒋介石は中国国民党中央党部、国民政府が武漢に移転することを要求。
『広州民国日報』「中大戴顧丁朱四委員在中大党部聯歓会之演説詞」○09,15,20(在中大党部演詞),51	主な転載箇所:「戴季陶委員長在本校党部聯歓会演説詞」(広州『国立中山大学校報』第2期,1926/12/1付<*実際は12/18以後>)。

1926/11/30		
△1926/11/?	【著作】改低大学本預科考試及格標準及対不及格各生辦法佈告	
△1926/11-1926/12/2以前	【講演・談話記録】革命的知識与革命的工作〈*学術院における1度目の講演〉	
△1926/12/2▲1926/12/1〈*実際は12/18以後〉	【講演・談話記録】本党最近的発展与党員最重要的工作〈*学術院における3度目の講演〉	戴季陶
△1926/12/3▲1926/12/6-12/7	【講演・談話記録】日本人応該信仰三民主義〈*中山大学を参観した日本人の教育視察団に対して〉	
1926/12/13		
△1926/12/14▲1926/12/20	【著作】〈*蒋介石宛(宋子文へ転送)の書簡〉	戴伝賢
△1926/12/16▲1926/12/1〈*実際は12/18以後〉	【講演・談話記録】全体的利益与部分的利益〈*中山大学学生会第1次執行委員会会議にて〉	
△1926/12/18▲1926/12/21-12/22, 12/27-?	【講演・談話記録】中山大学的前途〈*中山大学学生会全体大会にて〉	
△1926/12/19▲1927/2/23, 2/25	【講演・談話記録】孫中山与台湾〈*広東台湾学生聯合会成立大会(中山大学)にて〉	戴季陶
△1926/12/20▲1926/12/30, 1927/1/4, 1/5	【講演・談話記録】国民政府是為人民造産的政府〈*総政治部政治班にて〉	戴季陶先生
△1926/12/21▲1927/1/17-1/21, 1/24-1/27	【講演・談話記録】三民主義的一般意義与時代背景〈*政治訓育班(中山大学)にて〉	戴季陶
▲1926/12/22	【著作】〈*西康屯墾使劉某宛(西康辺防軍総司令某へ転送)の書簡〉	戴
△1926/12/24▲1927/1/6-1/8, 1/10-1/13	【講演・談話記録】三民主義的国家観〈*政治訓育班(中山大学)にて〉	戴季陶
△1926/12/25▲1926/12/27	【講演・談話記録】革命的発展与広東的建設〈*中央政治会議広州分会主催の国民党広東全省第2次全省代表歓迎大会にて〉	
△1926/12/28▲1926/12/29	【著作】〈*中山大学各科院主任宛の書簡〉	戴伝賢
1926/12/29?		
△1926/12/30▲1927/3	【講演・談話記録】民生主義的最重要的概念	戴季陶
△1926/12/30▲1927/4/17	【講演・談話記録】民生主義的最重要的概念(続)	戴季陶
△1926/12/30▲1927/4/30	【講演・談話記録】馬克司主義的特点	戴季陶
△1926/12/30▲1927/4/30	【講演・談話記録】列寧主義的特点	戴季陶
△1926/12/30▲1927/5/23	【講演・談話記録】民生主義的発生与其発展	戴季陶
△1926/12/30▲1927/7/10	【講演・談話記録】民生主義的建設要義	戴季陶
△1926/12/30▲1927/7/10	【講演・談話記録】階級闘争与民衆的聯合	戴季陶
1926/11-1926/12	【講演・談話記録】軍人何以要革命〈*中山艦官長に対して〉	
1926	【著作】華暹両民族応該如何結合序言	
1926/12月末		
1927/1/3		
1927/1/10		
1927/1/12		
1927/1/13		
1927/1/20		

	二期中政会第52次会議は広州分会の設立(12/21正式成立)を決議し、戴季陶を二期中政会広州分会委員に任命。「中央政治会議秘書処啓事」(『広州民国日報』1926/12/1付)。
○29	参考資料:『近代中国高等教育研究――国立中山大学(1924～1937)』56-58頁。
○09,15,17,19,20(革命知識与革命工作),26(革命的知識、工作与三民主義),31,40,51	記録:林霖。
広州『国立中山大学校報』第2期 ○09,15,17,19,20,31,40,51	記録:林霖。ほぼ同じ内容の講演を、党政訓練所、農工行政人員講習所(ともに広州)で行う。主な転載箇所:『広州民国日報』副刊「現代青年」第11期-第17期(1927/1/8付,1/10付-1/15付)。
『広州民国日報』「戴季陶対日本参観団之重要演説」 ○09,15,20,31,40	主な転載箇所:「戴季陶委員長対日本中学校長参観団演説詞」(広州『国立中山大学校報』第2期,1926/12/1付<*実際は12/18以後>)。
	中国国民党中央執行委員会、国民政府委員臨時聯席会議設立(武漢)。1927/1/1業務開始。中国国民党中央党部、国民政府の最高権力を代行。
『広州民国日報』「中大委員長戴季陶為中大経費致宋部長之両電」	
「戴季陶委員長在本校学生会第一次執行委員会議席上訓詞」(広州『国立中山大学校報』第2期)○09,15,17,19,20,31(全体的利益与部分的利益及党団的意義講	記録:周鼎培。
『広州民国日報』「中大現状及将来之進行」 ○09,15,17,19,20(在中大学生会演詞),31,51	記録:林霖。主な転載箇所:「戴季陶委員長在本校学生会全体大会演説辞」(広州『国立中山大学校報』第2期,1926/12/1付<*実際は12/18以後>)。
『広州民国日報』副刊「現代青年」第40期-第41期○33(総理孫中山先生与台湾演詞)	記録:秀哲。主な転載箇所:広東台湾革命青年団(広州)編『台湾先鋒』創刊号,1927/4。日本語訳:『台湾社会運動史――台湾総督府警察沿革誌第二編・領台以後の治安状況(中巻)』128-131頁。
『広州民国日報』副刊「現代青年」第4期,第7期,第8期 ○09,15,17,19,20,31(国民政府為人民造産的政府意義所在講詞),40,51(国民政府是為人民造成的政府)	記録:林霖。
『広州民国日報』副刊「現代青年」第18期-第26期 ○09,13,15,17,18,19,20,26,31,40,51	記録:林霖。抜粋、速報:戴季陶演講,謝光漢筆記「一貫的三民主義」(『広州民国日報』副刊「現代青年」第4期,1926/12/30付)。単行本:戴季陶演講『三民主義的一般意義与時代背景』(上海:三民書店,1927/7第二版)。
『広州民国日報』「中大附設東方民族院」	
『広州民国日報』副刊「現代青年」第9期-第15期 ○09,13,15,17,18,19,20,26,31,40,51	記録:林霖。単行本:戴季陶演講『三民主義的国家観』(広州:中山大学政治訓育編輯科,1927/4第二版)。
『広州民国日報』「政治分会歓迎本党広東全省第二次全省代表大会□事」	
『広州民国日報』「戴季陶対於医科整頓意見」	
	湖北省政務委員会は戴季陶を国立武昌中山大学準備委員会委員に任命。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第5巻-第6巻	「民生主義演講」の第1章「民生主義的意義」。記録:林霖。参考文献:林霖「中山大学是闡揚三民主義的中心」(『政治訓育』<*第1巻>第4期,1927/3)。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第9期	「民生主義演講」の第2章「民生主義与社会主義各派」。記録:林霖。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第10期	「民生主義演講」の第2章。記録:林霖。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第10期	「民生主義演講」の第2章。記録:林霖。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第13期	「民生主義演講」の第2章。記録:林霖。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第17期	「民生主義演講」の第3章「民生主義的建設要義」。記録:林霖。
中山大学政治訓育部編『政治訓育』<*第1巻>第17期	「民生主義演講」の第4章「階級闘争与民衆的聯合」。記録:林霖。
○09,15,20(軍人為什麼要革命),31(我們為什麼要革命与国民革命的意義講詞),51	
○29	1926年、戴季陶と趙季官の間に女児が生まれる。戴子(後の家祥)と名づける。その後、劉雨農に戴子の家庭教師として国文を教えることを依頼。1926年、趙令儀と知り合う。
	朱家驊などとともに広州発。戴季陶らの船が香港に向かう途中、戴季陶は珠江に身を投げようとしたが、朱家驊などに制止される。数日後、広
	蒋介石は二期中政会臨時会議(南昌)で中国国民党中央党部、国民政府が南昌に移転することを要求。
	頤養院(園?)(広州東壩二沙頭)で休養中、との記事。「本館専電　香港十日下午十鐘」(上海『申報』1927/1/11付)。「戴季陶在頤養園休養」(『広州民国日報』1927/1/10付)。
	蒋介石、武漢訪問。
	広州発。海路上海に向かう。「本館要電　広州二十五日上午八鐘」(上海『申報』1927/1/26付)。「戴季陶已抵漢口」(『広州民国日報』1927/1/25付)。
	大福丸に乗船。上海発武漢に向かう。「戴季陶将奉命赴日」(『広州民国日報』1927/2/10付)。

1927/1/21<*もしくは22>		
△1927/1/24?▲1927/1/25	【講演・談話記録】<*対ソ、対日関係について,漢口にて>	
1926/1/26		
1927/1/27		
1927/2/2		
1927/2/3		
1927/2/5		
1927/2/8		
1927/2/9		
1927/2/10		
1927/2/11		
1927/2/12		
1927/2/13		
1927/2/15		
△1927/2/17以前▲1927/2/23	【著作】<*萱野長知宛の書簡>	戴季陶
△1927/2/17▲1927/2/18	【講演・談話記録】<*郵船山城丸にて>	
△1927/2/17▲1927/2/18	【講演・談話記録】<*三井物産主催の歓迎会(門司倶楽部)にて>	
△1927/2/17▲1927/2/18	【講演・談話記録】<*門司の安泰楼にて>	
△1927/2/17▲1927/2/18	【講演・談話記録】<*門司駅にて>	
△1927/2/17▲1927/2/18	【著作】<*日本国民に対して>	
△1927/2/17▲1927/2/19	【講演・談話記録】<*亀の井ホテルにて>	
1927/2/18		
△1927/2/19▲1927/2/21-2/23	【講演・談話記録】中国国民党革命の意義について<*大分県キリスト教青年会主催の講演会(亀の井ホテル)にて>	
△1927/2/19▲1927/2/21	【講演・談話記録】<*亀の井ホテルにて>	
1927/2/21		
△1927/2/22▲1927/2/23	【講演・談話記録】<*神戸のオリエンタルホテルにて>	
△1927/2/22▲1927/2/23	【講演・談話記録】<*中華民国駐神戸総領事館総領事周珏主催の歓迎会(駐神戸総領事館)にて>	
△1927/2/22▲1927/3/6	【講演・談話記録】<*神戸の神阪中華会館にて>	
△1927/2/22▲1927/2/23	【講演・談話記録】<*中国国民党神戸支部主催の歓迎会にて>	
△1927/2/23	【講演・談話記録】<*山本条太郎との会談,神戸にて>	
△1927/2/23▲1927/3/6	【講演・談話記録】<*神戸基督教青年会館にて>	
△1927/2/24	【講演・談話記録】<*山本条太郎との会談,神戸にて>	
△1927/2/24▲1927/2/25	【講演・談話記録】<*ロータリークラブの午餐会(オリエンタルホテル)にて>	
△1927/2/24▲1927/2/25	【講演・談話記録】<*神戸日華実業協会春季総会(杏香楼)にて>	
△1927/2/25▲1927/2/26	【講演・談話記録】<*上り列車車中にて>	
△1927/2/25	【講演・談話記録】<*茅原華山、上野田節男、バイヤスとの会談,帝国ホテルにて>	
△1927/2/25▲1927/2/27	【講演・談話記録】<*佐分利貞男、木村鋭市、小村欣一との会談,外務省にて>	
△1927/2/25▲1927/2/27	【講演・談話記録】<*頭山満との会談>	
△1927/2/26	【講演・談話記録】<*吉野作造との会談,帝国ホテルにて>	
△1927/2/26▲1927/2/27	【講演・談話記録】<*出淵勝次、木村鋭市との会談,外務省にて>	
△1927/2/26▲1927/2/27	【講演・談話記録】<新聞記者に対して>	

	漢口着。孫科宅に逗留。「国民政府委員戴季陶来鄂」(『漢口民国日報』1927/1/23付);「戴季陶已抵漢口」(『広州民国日報』1927/1/25付);「本館要電　広州二十五日上午八鐘」(上海『申報』1927/1/26付)。
『漢口民国日報』「戴季陶与日本記者之談話」	主な転載箇所:「戴季陶与日記者重要談話」(『広州民国日報』1927/2/9付)。徐謙が人に話したことによると、国民政府は日本と充分な諒解を図るため、戴季陶を国民政府非公式代表として日本に派遣することを決議した、との記事。「各社要電　東方社二十四日漢口電」(上海『申報』1927/1/25付)。
	戴季陶は、間もなく李石曾とともに訪日し、非公式の駐日国民政府代表となる、との記事。「各社要電　東方社二十六日広東電」(上海『申報』1927/1/28付)。
	「国民政府は戴天仇を駐日代表として派遣するに決定す」との記事。上海『上海』第718号,1927/2/14付。
	(旧暦正月初一)蒋介石の招きに応じ、江西省廬山で越年。
	鄧演達、蒋介石と決裂。武漢に向かう。
	二期中政会第57次会議は戴季陶を中央政治設計局籌備員に任命。
	二期中政会第58次会議(南昌?)は徐謙と戴季陶をアメリカ、ソ連に派遣することを決議。『中華民国史事日誌』第2冊,142頁。別の資料によると、二期中政会は戴季陶を「党部の名義」で日本に派遣すること、その「使命」を「中日両国国民の将来における親善の基礎を、民族平等、人道正義の上に築き、全中国国民が熱誠して貫徹しようとしている国民革命運動の真意を日本に伝え、日本国民の諒解を求める」こととすること、を決議した。
	中国国民党(中央)高級幹部会議(武漢)は、徐謙、鄧演達、孫科などを行動委員会委員に任命し、独裁反対、党権向上運動の指導を命じる。
	国民政府は中日民族の平等親善を図るために、戴季陶を日本に派遣する、との記事。「本館要電　香港十日下午九鐘」(上海『申報』1927/2/11付)。
	和服に改め、襄陽丸に乗船。漢口?発。「戴天仇前日赴日」(上海『申報』1927/2/17付)。
	上海着。虹口豊陽館に逗留。「戴天仇来滬」(上海『申報』1927/2/14付);「戴天仇前日赴日」(上海『申報』1927/2/17付)。
	居正が「戴天仇に致すの書」を発表した、との記事。白川生<*西本省三>「戴天仇の渡日」(上海『上海』1927/2/21付)。
	鈕有恒、随行秘書・陳以一(志摹)とともに郵船山城丸に乗船。上海発。
『広州民国日報』「戴季陶致日本萱野長知書」	参考資料:「国民党の使として乗込んだ戴天仇氏」(『大阪朝日新聞』1927/2/18付);安東生「日支非親善論」(上海『上海』第725号,1927/4/3付)。
『門司新報』「支那の現状を伝へん為め戴天仇氏の来朝」など	午前、門司に上陸。戴季陶は木村藤吉(45歳)、鈕有恒は木下ふじ(40歳)と名乗る。門司水上署長、三井物産社員、明治専門学校留学生、華僑などが出迎える。三井物産楼で少憩。午後、門司駅発別府へ。門司から宮崎震作が同行。別府温泉亀の井ホテルに逗留。「国民党の使として乗込んだ戴天仇氏」(『大阪朝日新聞』1927/2/18付);「南方政府が南北を統一　時機は近い将来」(『大阪朝日新聞附録九州朝日』1927/2/18付)。
『大阪朝日新聞附録九州朝日』「南方政府が南北を統一　時期は近い将来」	不詳。
『大阪朝日新聞附録九州朝日』「南方政府が南北を統一　時期は近い将来」	
『大阪朝日新聞附録九州朝日』「南方政府が南北を統一　時期は近い将来」	不詳。
『大阪朝日新聞』「わが『朝日』を通じて」	
『大分新聞』「別府に落ちついて打寛いだ戴天仇氏」;『九州日報』「別府に着いた戴天仇氏」	参考資料:「支那国民は日本に好感を持つ」(『佐賀新聞』1927/2/21付)。
	夜、なの字館で素人義太夫を観賞。「素人義太夫を熱心にきく別府の戴天仇氏」(『大阪朝日新聞附録九州朝日』1927/2/20付)。
『大分新聞』「十九日夜別府亀の井ホテルで戴天仇氏の大演説」	終日囲碁に耽る。呉鉄城と会談。前掲「素人義太夫を熱心にきく別府の戴天仇氏」;「呉鉄城氏が戴天仇氏訪問」(『東京日日新聞』1927/2/20付)。
『神戸新聞』「廿一日夜別府発戴天仇氏上京「公使にはならぬ」と語る」	
	別府滞在中に丁文江と会談。「別府で戴天仇と会見した上海市長」(『門司新報』1927/2/22付)。大阪商船紅丸に乗船。別府発。呉鉄城などが見送る。「戴天仇氏一行別府を出発」(『大分新聞』1927/2/22付)。国民政府設立(武漢)。
『神戸新聞』「戴天仇氏来神」など	不詳。午前、神戸に上陸。港で楊寿彭(中国国民党神戸支部支部長)、何世鎬(鎬?)(中国国民党東京支部)、胡炳奐(中国国民党大阪支部)、鮑翼君や李景瑞(幟?)など神戸華僑(華強学校や中華学校の生徒も含む)、菊池良一、森ふく(東京杏花楼主)、沈乃熙(夏衍)(中国国民党東京支部青年会派)などが出迎える。オリエンタルホテルに逗留。ホテルで周珏(中華民国駐神戸総領事)、李鉄五(中華民国駐神戸総領事館副領事)が出迎える。
『神戸又新日報』「国民党熱と支那領事館」	不詳。
振青「日本特約通信「戴天仇抵神戸紀」」1927/2/23(上海『時報』)	
『大阪毎日新聞』「戴天仇氏演説」	不詳。
「支那時局に関する報告覚書」(『山本条太郎　論策二』505頁)	不詳。
前掲　振青「日本特約通信「戴天仇抵神戸紀」」	不詳。
前掲「支那時局に関する報告覚書」505頁	不詳。
『大阪朝日新聞』「戴天仇氏東上」	不詳。
『神戸新聞』「戴天仇氏を迎へて日華実業協会総会」など	三ノ宮駅発東京へ。周珏、神戸華僑などが見送る。京都駅で中国人留学生、奥村甚之助(労働評議会)が歓迎。「人事　戴天仇氏東上」(『神戸新聞』1927/2/25付);「支那留学生に警官が暴行を加ふ　「日本への期待を裏切られた」と目撃の戴天仇氏憤る」、「戴氏の身辺を心配しての事　学生はすぐ放還した――京都七条署員の話」(『大阪毎日新聞』1927/2/26付)。
東京『国民新聞』「同志に迎へられ戴天仇氏入京」;『東京日日新聞』「青天白日旗に迎へられ戴天仇氏入京す」など	午前、東京駅着。中国人留学生、茅原華山、茅原元一郎、茅原退二郎、小村俊三郎、清沢洌などが出迎える。帝国ホテルに逗留。
	「戴君の談話は、当時新聞に出たのと大差はない」。華山生(茅原華山)「戴天仇来」(東京『内観』第85号,1927/4/1付)17-18頁。
『神戸新聞』「戴天仇氏の諒解運動」	不詳。中華民国駐日本公使汪栄宝とともに外務省に佐分利貞男などを訪問。「中国々民政府代表戴天仇の来往」(内務省警保局『特秘外事警察報』第57号,1927/3)163頁。
東京『読売新聞』「戴天仇氏うごく」	不詳。
『吉野作造選集』第15巻,18-19頁	不詳。
『東京朝日新聞』「戴天仇氏外務省を訪問」など	菊池良一とともに外務省に出淵勝次などを訪問。参考資料:「南北両軍主力対峙して上海の風雲急　即時撤兵を要求せよ　日支民衆を欺く外務当局の声明」(『無産者新聞』1927/3/5付)。
東京『国民新聞』「閑話」など	

△1927/2/27▲1927/2/28	【講演・談話記録】中国革命の真相〈*東京記者聯盟創立総会(読売新聞社講堂)にて〉	
1927/2		
△1927/3/1▲1927/3/2	【講演・談話記録】〈*衆議院議員各派有志主催の招待懇談会(丸の内海上ビルの中央亭)にて〉	
△1927/3/4	【講演・談話記録】〈*汎太平洋倶楽部の午餐会にて〉	
△1927/3/6▲1927/3/25	【講演・談話記録】〈*国際倶楽部主催の歓迎会(文化アパートメント)にて〉	
△1927/3/7	【講演・談話記録】民国成立以来の中国思想界の変遷に就いて〈*支那談話会(中央亭)にて〉	
△1927/3/8▲1927/3/10	【講演・談話記録】〈*貴族院議員有志議員の招待会(華族会館)にて〉	
△1927/3/9	【講演・談話記録】〈*茅原華山との会談,旭館にて〉	
△1927/3/10▲1927/4	【講演・談話記録】日・支・露問題討議	福田徳三,戴天仇,後藤新平〈*司会:山本實彦〉
△1927/3/10▲1927/4	【著作】戴季陶氏附記〈*熱海ホテルにて〉	戴季陶
△1927/3/12▲1927/4	【講演・談話記録】民生哲学の基本的概念〈*熱海にて〉	戴伝賢
△1927/3/13	【著作】〈*木村鋭市、佐分利貞男宛の書簡,熱海ホテルより〉	戴伝賢
△1927/3/10-3/17以前	【講演・談話記録】〈*古島一雄との会談,三浦梧楼別邸の雲栖居にて〉	
△1927/3/10-3/17以前	【講演・談話記録】〈*犬養毅との会談,雲栖居にて〉	
△1927/3/17	【講演・談話記録】〈*銀行倶楽部にて〉	
△1927/3/17▲1927/3/21	【講演・談話記録】中国革命の思想と実際の歴史的考察〈*東京帝国大学学友会弁論部主催の講演会にて〉	
△1927/3/17▲1927/3/18	【講演・談話記録】〈*中央亭にて〉	
1927/3/18		
△1927/3/19	【講演・談話記録】〈*陶陶亭にて〉	
▲1927/3/19以後	【著作】〈*林煥庭、孫哲生、朱騮先宛の書簡〉	賢
△1927/3/19-3/20▲1927/3/20	【講演・談話記録】〈*新聞記者に対して〉	
△1927/3/20▲1927/3/23	【著作】〈*朱騮先、顧孟餘宛の書簡〉	戴季陶
△1927/3/21	【講演・談話記録】〈*渋沢栄一主催の招待午餐会(飛鳥山の渋沢栄一私邸)にて〉	
△1927/3/21	【講演・談話記録】〈*旧政法学校関係者の歓迎会(燕楽軒)にて〉	
△1927/3/22▲1927/3/23	【著作】戴季陶啓事	
△1927/2/25-3/23	【講演・談話記録】〈*陸軍省、参謀本部関係者主催の歓迎会(陸軍大臣官邸)にて〉	
△1927/2/25-3/23	【講演・談話記録】〈*黒龍会主催の歓迎会にて〉	
△1927/2/25-3/23	【講演・談話記録】〈*外務省関係者主催の歓迎会にて〉	
△1927/3/22▲1927/3/23	【講演・談話記録】〈*新聞記者に対して〉	
△1927/3/22▲1927/3/23	【著作】去るに臨んで親愛なる日本国民に告ぐ	
1927/3/23		
△1927/3/24▲1927/3/25	【講演・談話記録】〈*久留弘三、川島民、劉同嘉との会談,三ノ宮駅にて〉	

『東京日日新聞』「支那国民の覚醒とその団結運動」	逗留先を帝国ホテルから旭館に移す。『東亜之東』50頁。
	国民政府は国立中山大学を国立第一中山大学に改称(実際は7月頃から)。
『東京朝日新聞』「苦しみの支那を援けよ」など	
外務省記録『本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件　第一巻』外秘第467号(警視総監太田政弘より内務大臣臨時代理安達謙蔵など宛)「汎太平洋倶楽部午餐会ノ件」1927/3/5付○29(東京太平洋倶楽部宴会回憶)	不詳。
『広州民国日報』「日本国際倶楽部歓迎戴季陶盛況」	参考資料:『秋田雨雀日記』第2巻,15頁。
「支那談話会例会」(東京『支那時報』第6巻第4号,1927/4)107頁	
東京『時報』「訳電:日議員与戴天仇会談」○10(五月三十日六月三日上海時事新報連載)	講演後の質疑応答:湘君「戴季陶氏在日言論之片段」(上海『時事新報』1927/6/3付)。
華山生「編輯を終へて」1927/3/10(東京『内観』第85号,1927/4/1付)32頁	
東京『改造』第9巻第4号	午後1時、熱海着。熱海ホテルに逗留。「戴天仇氏熱海へ」(東京『国民新聞』1927/3/11付);『東亜之東』50頁。
東京『改造』第9巻第4号	
東京『支那時報』第6巻第4号○10(漢語訳:四月一日発行東京支那時報所載(訳)),19(漢語訳:孫文主義之哲学的基礎),26(漢語訳:三民主義之哲学的淵源),35(同前)	熱海で支那時報記者(水野梅暁?)と会談。午後、東京の中国国民党員が孫文追悼会を開催(西巣鴨派は上野公園自治会館にて、青年会派は神田区北神保町の中華留日基督教青年会にて)。西神田署が青年会派の孫文追悼会に出席する中国人、朝鮮人を拘置した。「にらみ合で追悼　孫文の霊を引張り合ひ　遂に十名検挙さる」(『東京朝日新聞』1927/3/13付)。「人騒がせの追悼会」(東京『読売新聞』1927/3/13付)。
外務省記録『外国人ニ関スル暴行殺傷関係雑件　在本邦外国人関係(支那人之部)』第2巻(東京:外務省外交史料館D.2.6.0.1-2)	熱海ホテルに投宿。
	不詳。古島一雄「先づ支那を理解せよ」(東京『事業之日本』第6巻第4号,1927/4)11頁。
	不詳。
	不詳。「日華実業協会記事」(東京『支那時報』第6巻第4号,1927/4)107頁。
東京『帝国大学新聞』「支那革命の解決は世界平和の鍵」	東京着。旭館に逗留。『東亜之東』51頁。
『東京日日新聞』「民間有志の戴氏歓迎会」	主な転載箇所:「滞京中の戴天仇氏招待会」(『福岡日日新聞』1927/3/20付);「戴季陶在東京演説」(上海『申報』1927/3/20付)。
	午後、児玉呑象(久原房之助の使者)と会談。「革命政府援助に、久原氏二百五十万円を投げ出す」(東京『読売新聞』1927/3/19付)。
○10(対於日本人之演辞),19(国民革命之前因後果),40(同前)	記録:陳以一。戴季陶は、国民政府援助のために久原房之助から250万円、紡績業者から200万円以上を受け取るはずである、との読売新聞の記事。前掲「革命政府援助に、久原氏二百五十万円を投げ出す」。
○10(關謠通電),19(同前)	
『東京朝日新聞』「無根の風説に戴天仇氏の迷惑」	戴季陶は読売新聞の記事の内容を否定、読売新聞社に抗議。
『広州民国日報』「日本報紙造謡妄言国民政府向日人借款」	読売新聞社、取り消し記事を掲載。「戴天仇氏の迷惑」(東京『読売新聞』1927/3/20付)。主な転載箇所:「戴委員長注意報紙造謡」(広州『国立中山大学校報』第8期,1927/4/4付);「戴季陶啓事」1927/3/22(上海『申報』1927/3/23付)。
	不詳。「日華実業協会記事」(東京『支那時報』第6巻第4号,1927/4)。
	不詳。
上海『申報』	若槻礼次郎(内閣総理大臣)、財部彪(海軍大臣)を内閣総理大臣官邸に訪問?。『東亜之東』51頁。
○29(記民国十六年使日時事略)	不詳。
○29(記民国十六年使日時事略)	不詳。
○29(記民国十六年使日時事略)	不詳。
東京『国民新聞』「熱誠を述べて諒解を」	
東京『読売新聞』「戴天仇氏退京の辞」○10(漢語訳:対日声明書),19(同前),29(題民国十六年使日事竣告別書)	主な転載箇所:「戴氏陳述書発表」(『北京週報』第250号,1927/3/27付);「中国々民政府代表戴天仇の来往」(内務省警保局『特秘外事警察報』第57号,1927/3);「戴氏の陳述書」(東京『支那時報』第6巻第4号,1927/4)。漢語訳:「謹告親愛之日本国民」(「東方社二十二日東京電」上海『申報』1927/3/23付;上海『民国日報』1927/3/23付)。
	夜、東京駅発。神戸に向かう。『東亜之東』51頁。
『神戸新聞』「戴天仇氏を駅頭に迎へて握手を交はした争議団幹部」;『大阪毎日新聞』「日支労働者の提携を望む」	午前、三ノ宮駅着。楊寿彭など神戸華僑(華強学校や中華学校の生徒も含む)、久留弘三(郵司同友会争議本部)、川島民(同前)、劉同嘉(同前)などが出迎える。鮑翼君宅に逗留。南京事件勃発。

△1927/3/24▲1927/3/25	【講演・談話記録】〈*新聞記者に対して〉	
△1927/3/24▲1927/3/26	【講演・談話記録】〈*郵船争議団への支持, 中国国民党神戸支部にて〉	
1927/3/25		
△1927/3/26▲1927/3/27	【講演・談話記録】〈*大阪朝日新聞社にて〉	
△1927/3/26▲1927/3/27	【講演・談話記録】〈*大阪毎日新聞社にて〉	
△1927/3/26▲1927/3/27	【講演・談話記録】〈*大阪クラブ主催の歓迎午餐会にて〉	
△1927/3/26▲1927/4/28	【講演・談話記録】中華革命史与世界之関繋〈*大阪中華総商会にて〉	
△1927/3/27	【講演・談話記録】〈*中国国民党神戸支部にて〉	
△1927/3/28▲1927/3/29	【講演・談話記録】〈*神戸新聞社にて〉	
△1927/3/29▲1927/3/30	【講演・談話記録】〈*神戸港にて〉	
△1927/3/30▲1927/4/25	【講演・談話記録】政治進歩之階梯与三民主義〈*通天閣にて〉	
△1927/3/30▲1927/4/25	【講演・談話記録】〈*長崎中華総商会にて〉	
▲1927/4	【著作】中国国民革命の意義	戴天仇
▲1927/4	【著作】中国革命運動の歴史的考察	戴天仇
▲1927/4	【講演・談話記録】中国革命の真相	戴天仇
△1927/3▲1927/5	【書画】中山先生遺嘱〈*長野朗に頼まれて〉	戴季陶
△1927/3▲1927/4/1	【書画】国民革命軍歌〈*茅原華山に頼まれて〉	戴伝賢
1927年春	【書画】心経一節〈*陶陶亭主人(萱野長知)に頼まれて〉	戴伝賢
1927年春	【書画】奉命使日憶及旧事不勝愴然	伝賢
△1927/3/31〈*もしくは4/1〉▲1927/4/3	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
△1927/4/2▲1927/4/12	【著作】〈*中国国民党、国民政府、中山大学に対する声明文〉	戴伝賢
△1927/4/2▲1927/4/3	【著作】〈*日本朝野に対する声明文〉	
1927/4/5		
1927/4/12		
1927/4/15		
1927/4/17		
1927/4/18		
1927/4/27		
1927/4/29		
1927/5/1		
△1927/5/5以前▲1927/5/29	【著作】告国民党的同志並告全国国民	戴季陶
1927/5/7		
1927/5/11〈*もしくは13〉		
1927/5/17		
1927/5/20		
1927/5/24		
1927/5/28		
1927/5/31		
△1927/6/1▲1927/5/31〈*実際は6/1以降〉	【著作】委員会緊要通告	戴伝賢
1927/6/3		
1927/6/5		
1927/6/10		
△1927/6/15▲1927/6/15	【著作】緊急通告	戴伝賢, 朱家驊など
△1927/6/15▲1927/6/18	【著作】本校呈請中央政治会議嗣後除郵寄函件加書広州二字外若直指本校祇称国立中山大学不再加他字以崇党義而示紀念文	戴伝賢, 朱家驊
1927/6/18		
1927/6/20-6/21		

『神戸新聞』「革軍の第一着手は揚子江一帯の統一」;『大阪朝日新聞』「民国統一の成就を信じる」	
『大阪毎日新聞』「支那からは一人も補給させぬ」	不詳。
	健康上の都合により、大阪での会合(大阪朝日新聞社主催の懇談会、紡績聯合会主催の歓迎会、公開講演会など)への出席を辞退。「戴天仇氏歓迎午餐会」(『大阪朝日新聞』1927/3/26付)。
『大阪朝日新聞』「大阪の戴氏」	不詳。午前11時前、宮崎震作とともに大阪駅着。大阪華僑などが出迎える。中国国民党大阪支部で小憩。夜、大阪発。神戸に向かう。
『大阪毎日新聞』「戴天仇氏来社」○10	不詳。
『大阪朝日新聞』「支那の自由と独立は世界平和の基礎」;『神戸新聞』「親善の根本義は国民的の諒解」	講演後の質疑応答の様子:湘君「戴季陶氏在日言論之片段」(上海『時事新報』1927/6/3付)○10(答日本実業家之質問,五月三十日六月三日上海時事新報連載),14(第1編第14章)。
上海『民国日報』「戴季陶在大阪演辞」○10(対於華僑之演辞),19(中国革命史与中華民族在世界之地位)	記録:陳以一。
○10(対於国民党同志之演辞),19(中国国民党史略)	記録:陳以一。
『神戸新聞』「議会政治への第一階梯として先づ予備議会を」	午後、宮崎震作とともに神戸新聞社を訪問。「戴天仇氏本社来訪」(『神戸新聞』1927/3/29付)。中国国民党中央監察委員会常務委員会会議(上海)は呉稚暉などが提議する「糾察共産党員謀叛党国案」を採択。
『神戸新聞』「戴天仇氏の帰国」	午前11時、郵船上海丸に乗船。神戸発。楊寿彭、鮑翼君など神戸華僑が見送る。宮崎震作は上海まで同行し、4月下旬高麗丸で長崎に帰る。「戴季陶過崎情形及最新行蹤」(上海『時事新報』1927/4/25付)。
上海『時事新報』「戴季陶過崎情形及最新行蹤」○10(対於中日二国人共同列席之演辞),19,26,35,40	記録:陳以一(志摹)。長崎に寄港、上陸。長崎華僑が出迎える。
上海『時事新報』「戴季陶過崎情形及最新行蹤」	不詳。
東京『事業之日本』第6巻第4号	漢語訳:「戴季陶対日人解釈中国国民革命之意義」(『広州民国日報』1927/4/13付-4/14付);戴季陶「中国国民革命之意義」(中山大学政治訓育部『政治訓育』<*第1巻>第9期,1927/4/17付)。
東京『中央公論』第471号	
京城『朝鮮及満洲』第233号	
『支那国民運動の指導原理』口絵	
東京『内観』第85号	4/1、茅原華山は戴季陶を内観社顧問に任命。
『中華民国革命秘笈』附録	
『中華民国革命秘笈』附録	
上海『民国日報』「戴季陶之談話」	3/31午後、上海着。
『広州民国日報』「戴季陶対党事宣言」	中国国民党中央監察委員会全体緊急会議(上海)は呉稚暉などが提議する「請査辦共産分子謀叛案」を採択。
『東京日日新聞』「廃せよ恐怖政策」	主な転載箇所:「戴天仇氏の声明書」(『門司新報』1927/4/4付)。
	汪精衛、陳独秀、聯合宣言を発表(上海)。4/9汪精衛、武漢着。
	四一二クーデタ勃発(上海)。
	四一五クーデタ勃発(広州)。
	二期中政会第75次会議は戴季陶を中央宣伝委員会委員に任命。
	国民政府設立(南京)。国民政府(南京)は「清党」(中国共産党の排除)を命令。戴季陶は国民政府委員会(南京)委員に選出される。国民政府(武漢)は第二次北伐を決定。
	二期中政会第82次会議は戴季陶を法制委員会委員に任命し、戴季陶の来京を促す。
	二期中政会第84次会議は二期中政会広州分会の改組を決議し、戴季陶を二期中政会広州分会委員に任命。
	国立(第一)中山大学政治訓育部委員に任命される。この頃、同大学政治学系主任に任命される。
上海『民国日報』副刊「覚悟」○17(国民党的独立是中国独立的基礎),19(告国民党同志並告全国国民),30,31(国民党的独立是中国独立的基礎),40(「告国民党的同志並告全国国民」と「国民党的独立是中国独立的基礎」),51(国民党的独立是中国独立	整理:香舟<*宋香舟>。主な転載箇所:「戴季陶告国民党的同志並告全国国民」(『広州民国日報』1927/6/6付-6/9付);戴季陶「国民党的独立是中国独立的基礎」(南京『中央半月刊』第1巻第1期,1927/6/15付)。単行本:国立中山大学政治訓育部宣伝部編『戴季陶最近言論』(広州:国立中山大学政治訓育部宣伝部,1927/9初版)。
	国民政府委員会第9次会議は戴季陶を中央法制委員会委員に任命。
	南京着。
	中央執行委員会清党委員会設立(南京)。
	二期中執会92次常会は戴季陶を中国国民党中央党務学校籌備員に任命。
	宮崎龍介(社会民衆党常務委員)、菊池良一、宮崎震作、蒋介石、胡漢民などとの会談に出席。二期中執会93次常会は戴季陶を中国国民党中央党務学校教務主任に任命。
	二期中政会第98次会議は戴季陶を国立中山大学校長に任命。6/10就任。日本政府、山東出兵を声明。6/1日本軍、青島上陸。
	国民政府(武漢)の北伐軍、鄭州入城。
広州『国立中山大学日報』第20号	主な転載箇所:「本校委員会緊要通告」(広州『国立中山大学校報』第15期,1927/6/13付)。
	二期中執会96次常会は戴季陶を中国国民党工人部部長に任命。
	国民政府(武漢)、ボロディンなどを解任。
	国民政府は戴季陶を国立(第一)中山大学校長に任命。6/10-6/11汪精衛、譚延闓、孫科など、馮玉祥と会談(鄭州)。
広州『国立中山大学日報』第31号	
広州『国立中山大学日報』第34号	
	張作霖、討共宣言を発表。
	蒋介石、胡漢民、呉稚暉、蔡元培、張静江など、馮玉祥と会談(徐州)。

△1927/6/21▲1927/6/22	【著作】本校佈告	戴伝賢, 朱家驊
△1927/6/26	【著作】上中央執行委員会辞工人部長書	
1927/6/27		
△1927/6/29▲1927/6/29	【著作】本校佈告〈*第三十六号〉——処置共産份子	戴伝賢, 朱家驊
1927/6?		
△1927/7/10▲1927/7/23	【著作】〈*中央政治会議宛の書簡〉	
1927/7/13	【著作】再上中央執行委員会辞工人部長書	
1927/7/15		
1927/7/18		
1927/7/20		
▲1927/7/21		
1927/7/22		
1927/7/25		
△1927/7/28▲1927/7/30	【講演・談話記録】〈*広東各界慶祝蒋総司令就職及出師北伐一週年紀念大会にて〉	
▲1927/8	【書画】戴季陶著産業合作社之組織修訂第三版	
▲1927/8	【著作】自序〈*戴季陶『産業合作社之組織』三版の序〉	
△1927/8/1▲1927/8/3	【講演・談話記録】〈*広東省政府委員の就職典礼にて〉	
△1927/8/1▲1927/8/12	【講演・談話記録】〈*嶺南大学にて〉	
△1927/8/9▲1927/8/11	【講演・談話記録】〈*中国国民党中山大学特別党部、中山大学学生会主催の歓迎会にて〉	
△1927/8/25▲1927/10/3	【講演･談話記録】〈*華僑団体に対して, 広州にて〉	
△1927/8/25▲1927/10/3	【講演･談話記録】〈*華僑団体に対して, 広州にて〉	
1927/8/13		
△1927/9/3▲1927/10	【著作】序〈*王治心『三民主義在中国文化上的根拠』, 広州にて〉	戴季陶
△1927/9/7▲1927/10/7	【講演・談話記録】中国人応走的大路〈*広州南石頭懲教場にて〉	
△1927/9/8▲1927/9/21	【講演・談話記録】世界的危機与我們応有的覚悟〈*広東地方武装団体訓練員養成所にて〉	戴季陶
▲1927/9/?, 10/?	【講演・談話記録】求学与革命	
1927/9/12		
1927/9月中旬	【著作】対日本出兵山東及撤兵回国之分析	
1927/9/16-9/19		
△1927/9/20▲1927/9/21	【著作】国立第一中山大学布告(二)	戴伝賢, 朱家驊など
1927/9/22		
1927/9/30		
1927/10/2		
▲1927/10/3	【講演・談話記録】〈*中山大学の総理紀念週にて〉	
1927/10/5		
1927/10/11?		
△1927/10/17〈*もしくは18〉▲1927/10/18	【著作】〈*中山大学新校舎の建築資金を募るために出国するつもりである, 李済深宛の書簡〉	戴伝賢
△1927/10/23▲1927/10/24	【著作】希望所同志忍耐合作本校同学刻苦求学〈*李済深など宛の書簡〉	戴伝賢
△1927/10/26▲1927/11/5	【著作】無意于政治上臨時問題, 確実従学術上致力于三民主義之建設〈*中山大学教職員、学生宛の書簡〉	戴伝賢
△1927/10▲1927/10	【著作】序一〈*徳国考茨基原著, 戴季陶訳, 胡漢民補訳『資本論解説』の序〉	戴季陶
△1927/11/1?▲1927/11/2	【講演・談話記録】中国在歴史上文化的演進〈*中国国民党上海特別市江湾第七区党部主催の集会(復旦大学)にて〉	
△1927/11/1▲1927/11/3	【講演・談話記録】今日中国青年応走的道路〈*暨南大学にて〉	
△1927/11/4▲1928/12	【著作】重刊序言〈*戴季陶『国民革命与中国国民党』の序〉	戴季陶
1927/11/7		
1927/11/17		
1927/11/18		

広州『国立中山大学日報』第37号	
○33	
	孫中山先生葬事籌備委員会第48次会議(南京)に出席。
広州『国立中山大学日報』第42号	
	戴季陶演講,陳以一紀述『東亜之東』出版。
『広州民国日報』「戴季陶請中央照撥中大校	主な転載箇所:「戴校長請中央照撥本校経費」(広州『国立第一中山大学校報』第19期,1927/8/25付)。
○33	
	上海着。国民政府(武漢)、分共を決定。
	二期中執会107次常会は戴季陶の中国国民党工人部部長辞任を承認。二期中政会第115次会議は国民政府が戴季陶を起草労動法委員会委員に任命することを決議。
	国民政府委員会第35次会議は戴季陶を起草労動法委員会委員に任命。
上海『申報』	中国国民党中央党務学校考試委員、同校審査学生資格委員に任命される。
	国民政府起草司法委員に任命される。
	広州着。
『広州民国日報』「各界慶祝就職北伐紀念大会紀」	
○12	
○12	
『広州民国日報』「政治会議広州分会代表戴季陶対省政府委員訓詞」	記録:林霖。主な転載箇所:「戴季陶校長対広東省政府委員就職日演説詞」(広州『国立第一中山大学校報』第19期,1927/8/25付)。
『広州民国日報』「戴季陶在嶺南大学之演説詞——華人収回南大自辦挙行交代典礼日演講」	記録:林霖。主な転載箇所:「戴季陶校長在嶺南大学之演説詞——華人収回南大自辦挙行交代典礼日演講」(広州『国立第一中山大学校報』第20期,1927/10/3付)。
『広州民国日報』「中大党部学生会歓迎戴季陶誌盛」	主な転載箇所:「本校党部学生会歓迎戴校長誌盛」(広州『国立第一中山大学校報』第20期,1927/10/3付)。
「戴季陶校長在亜洲酒店歓迎華僑代表席上演説詞」(広州『国立第一中山大学校報』第20期)	記録:宋香舟。
「戴季陶校長在亜洲酒店華僑代表歓迎会席上第二次演説詞」(広州『国立第一中山大学校報』第20期)	記録:宋香舟。
	蔣介石、国民革命軍総司令を辞任。
王治心編,范皕誨増訂『三民主義在中国文化上之根拠』○29(三民主義在中国文化上之根拠序),30(同前)	
上海『民国日報』副刊「覚悟」	記録:林霖。主な転載箇所:「戴季陶校長在懲教場演説詞」(広州『国立第一中山大学校報』第21期,1927/10/10付)。
第一中山大学政治訓育部編『政治訓育』第2巻第1期	記録:林霖。主な転載箇所:広州『国立第一中山大学校報』(第22期,1927/10/17付)。
南京『中央半月刊』第1巻第7期-第8期○17	
	中国国民党中央特別委員会第二次談話会(南京)は戴季陶を中央特別委員会委員に選出。
○35	
	中国国民党中央特別委員会(南京)は戴季陶を国民政府委員会委員に選出し、中央党部宣伝部委員に任命。9/16武漢と南京の国民政府の統一を宣言。
広州『国立第一中山大学日報』第45号	
	国民政府委員会第2次会議は戴季陶を外交委員会委員に任命。
	二期中政会広州分会第●次会議は戴季陶を両広経済委員会委員に任命。
	張発奎、黄琪翔主催の歓迎宴会に出席(広東省政府大礼堂)。
「戴校長在本校演講党政近況」(広州『国立第一中山大学校報』第20期)	中国国民党中央特別委員会第5次会議は、戴季陶に中国国民党二期四中全会出席を促すことを決議。
	「歓迎張発奎同志及第四第十一軍武装同志凱旋大会」に出席(広州東較場)。
	上海に向かう。二期中政会広州分会委員胡春霖は戴季陶に出発を止まるように説得。
上海『民国日報』「致広州李主席電」	主な転載箇所:「戴季陶校長閑于校事之滬電」(広州『国立第一中山大学日報』第67号,1927/10/21付;広州『国立第一中山大学校報』第23期,1927/10/31付)。譚延闓などは中国国民党二期四中全会に出席するように促す。
上海『申報』「第一中大生擁護戴季陶之熱烈」	主な転載箇所:「最近戴校長季陶之滬電」(広州『国立第一中山大学日報』第72号,1927/10/27付;広州『国立第一中山大学校報』第24期,1927/11/14付)。
「戴校長致本校同志同学函」(広州『国立第一中山大学日報』第79号);『広州民国日報』「戴季陶致中大同学書」	中央日報理事に選出される。「中央社　二十六日南京電」(上海『申報』1927/10/27付)。
徳国考茨基原著,戴季陶訳,胡漢民補訳『資本論解説』(上海:民智書局)	
上海『民国日報』「七区党部昨請戴季陶先生演講」	不詳。
上海『民国日報』「戴季陶講演」	不詳。
戴季陶『国民革命与中国国民党』(武漢:中央政治会議武漢分会)○19(国民革命与中国国民党重刊序言),40(同前)	
	中華民国大学院大学委員、同院政治教育委員会総委員に任命される。
	広州事変勃発。
	何香凝などとともに広州発。

△1927/11/20▲1927/11/21	【著作】〈*汪精衛など上海滞在中の中国国民党幹部宛の書簡〉	何香凝, 戴季陶, 顧孟餘など
1927/11/21〈*もしくは22〉		
▲1927/11/22	【著作】〈*広州特別市党部改組委員会宛の書簡〉	戴伝賢, 朱家驊
△1927/11/22▲1927/11/26	【講演・談話記録】〈*時局について, 上海にて〉	
1927/11/25		
▲1927/11/?	【著作】行易知難(上篇)	
▲1927/11/?	【著作】行易知難(下篇)	
1927/12/1		
1927/12/3-12/10		
▲1927/12/4	【著作】〈*中国国民党二期四中全会第1次予備会に提出した宣言書〉	
△1927/12▲1927/12/10-12/11	【著作】序——対全国青年們的一個忠告〈*戴季陶『青年之路』の序, 上海にて〉	戴季陶
▲1927/12/10	【講演・談話記録】〈*中国国民党二期四中全会第3次予備会の誤報について〉	
▲1927/12/10	【著作】〈*誤報の確認, 中央執行委員、中央監察委員宛の書簡〉	戴伝賢
△1927/12/11?▲1927/12/13	【講演・談話記録】〈*大同大学(上海)にて〉	
△1927/12/17? 28年か▲1927/12/18	【講演・談話記録】〈*上海総商会主催の各省商会聯合会開幕典礼にて〉	
1927/12/18 ?28年か▲1927/12/19	【講演・談話記録】〈*倹徳儲蓄会第4次会員同楽会にて〉	
△1927/12/28▲1928/1/7	【著作】〈*沈鵬飛と中山大学教職員、学生宛の書簡〉	伝賢
△1927/12▲1928/1/1	【著作】八覚〈*附言〉	戴季陶
△1927/12	【著作】救党提議案	
△1927	【著作】維持教育救済青年案	
△1927	【著作】〈*季特(Charles Gide)『近代欧美社会経済之組織及其発展』の序〉	
△1927?	【書画】国立第一中山大学校報	
△1927?	【書画】国立中山大学日報合冊	戴季陶
△1927?	【書画】明恥立信〈*ほか〉	
▲1928/1/5	【著作】本校函覆政分会関于優待東方弱小民族学生経過情形	戴伝賢, 朱家驊
1928/1/?		
1928/1/5〈もしくは7?〉		
△1928/1/6?▲1928/1/7	【講演・談話記録】〈*中国国民党浙江省党部にて〉	
1928/1/7		
1928/1/10		
▲1928/1/11	【著作】告別国人書〈*上海にて〉	伝賢
▲1928/2	【書画】戴季陶著青年之路	
▲1928/2	【著作】悲痛的光陰	
▲1928/2	【著作】国民革命軍北伐的原因	
▲1928/2	【著作】北伐中所受的四大打撃	
▲1928/2	【著作】甚麽是団結的基礎	
▲1928/2	【著作】右傾病与左傾病	
▲1928/2	【著作】宣誓和守誓	
▲1928/2	【著作】対於清党的態度応該怎様?	
▲1928/2	【著作】中国民族唯一的生路	
▲1928/2	【著作】革命党与革命軍	
▲1928/2	【著作】革命軍与政治訓育	
▲1928/2	【著作】軍隊政治訓育上的苦経験	
▲1928/2	【著作】党代表制度好不好	

上海『申報』「四次全体会議有擱浅趨勢」；「在粤委員之来電」	
	香港発。
『広州民国日報』「戴季陶函覆市党部」	
上海『申報』「戴季陶何香凝昨晨抵滬」	
	上海着。「戴季陶何香凝昨晨抵滬」（上海『申報』1927/11/26付）。
南京『中央半月刊』第1巻第10期○14(第1編第15章「行易知難」),17,20(信仰整個的三民主義),30(行易知難),51	一部抜粋:「政治投機与経済投機」（『広州民国日報』副刊「現代青年」第329期-第331期,1928/4/24付-4/26付）。
南京『中央半月刊』第1巻第11期○14(第3編「結論――行易知難」),17,20(行易知難),26(三民主義之理論的建設),30(結論),51	主な転載箇所:戴季陶「行易知難」（上海『新生命』第1巻第2号,1928/2）。
	蒋介石と宋美齢の婚礼(上海)に出席。
	中国国民党二期四中全会予備会議(上海)は戴季陶を宣言起草委員、審査委員に任命。
上海『申報』「戴季陶提出宣言書中之要点」	
上海『民国日報』「『青年之路』序言」○14,19(青年之路自序),30,40(《青年之路》序),51	
上海『申報』「戴季陶氏之談話」	
上海『申報』「戴季陶氏之談話」	
上海『申報』「戴季陶在大同演講」	不詳。12/11広州コミューン設立。山上正義「ボロヂン・磯谷・和知――広東コンミユンの頃の思ひ出」は、戴季陶は広州コミューン後に広州を離れ香港に避難した、とするが、その回想の信憑性には問題がある。
上海『申報』「各省商会聯合会昨日開幕」	
上海『申報』「戴季陶昨在倹徳儲蓄会演講」	
「戴校長致沈主任暨同学同志函」（広州『国立第一中山大学日報』第113号）;『広州民国日報』「戴季陶致中大教職員学生書」○29(致中山大学沈鵬飛先生暨同人書)	主な転載箇所:「戴季陶校長致沈主任暨同学同志函」（広州『国立第一中山大学校報』第28期,1928/2/13付）。中国国民党中央特別委員会解散。
上海『新生命』創刊号○20,31(写八覚経過及目的講詞附誌),51	
○35	
○29,30	
季特『近代欧美社会経済之組織及其発展』何思源訳	参考文献:曾同春「告欲来法国里昂研究経済学的同学」（広州『国立中山大学日報』第169号,1928/4/21付）。
	国立第一中山大学鐘楼とその外壁に記す。
広州『国立第一中山大学日報』第112号	主な転載箇所:「呈復政治分会抄送公布優待蒙古朝鮮台湾印度馬来等学生条例備査」（広州『国立第一中山大学校報』第28期,1928/2/13付）。中山大学特別党部は戴季陶の来校、校務遂行を促す。
	杭州滞在。蒋介石は戴季陶の中国国民党二期四中全会出席を促す。「南京八日下午五鐘」（上海『申報』1928/1/9付）;「南京　八日下午十鐘」(同前)。
	上海着。戴季陶は欧米視察を希望しその経費を中山大学に申し込むが、朱家驊は反対。その後、戴季陶は浙江省呉興県に向かう。「戴季陶不出席説」（上海『申報』1928/1/10付）。
上海『申報』「杭州快信」	
	中国国民党中央執行委員会、執務回復。
	蒋介石は戴季陶の中国国民党二期四中全会出席を促す。1/9蒋介石、国民革命軍総司令への復職を発表。
上海『民国日報』「戴季陶赴欧考察――昨発表告別国人書」	主な転載箇所:「戴季陶校長臨別留言」（広州『国立第一中山大学校報』第28期,1928/2/13付）。二期中政会、執務回復。
○14	
○14(第1編第1章),20,30	
○14(第1編第2章),16,20,30,40,51	
○14(第1編第3章),16,20,30,40,51	
○14(第1編第4章),20,30,51	
○14(第1編第5章),20,30,40,51	
○14(第1編第6章),20,30,51	
○14(第1編第7章),20,30,40,51	
○14(第1編第8章),20,30,51	
○14(第1編第9章),16,20,30,40	
○14(第1編第10章),16,20,30	
○14(第1編第11章),16,20,30	
○14(第1編第12章「党代表制度」),16,20(党代表制度),30,40	

▲1928/2	【著作】民衆運動的過去現在和将来	
▲1928/2	【著作】世界的危機逼緊了	
▲1928/2	【著作】中大各科現状	
▲1928/2	【著作】図書館和寄宿舎	
▲1928/2	【著作】大学的財政	
▲1928/2	【著作】東方民族院和移民科的計画	
▲1928/2	【著作】華僑教育問題	
1928/2/2-2/7		
1928/2/4	【講演・談話記録】対軍事制度之意見〈*中国国民党二期四中全会にて〉	
▲1928/2/6	【著作】整理特別党部案	蒋中正,戴季陶
△1928/2/6▲1928/3/11	【著作】〈*国立大学聯合会宛の書簡〉	戴伝賢,朱家驊
△1928/2/7	【著作】在二届四中全会報告起草本次会議宣言大意	
△1928/2/7	【著作】重視青年之意見〈*中国国民党二期四中全会にて〉	
1928/2/15		
1928/2/16		
1928/2/23		
1928/2/24		
1928/2/28		
▲1928/2/29	【著作】〈*中央執行委員会宛の書簡〉	戴伝賢
1928/3/5		
1928/3/9〈*もしくは13〉		
1928/3/10		
▲1928/3/15	【講演・談話記録】〈*劉禹輪、李偉光との会談,香港にて〉	
1928/3/11		
△1928/3/11▲1928/3/12	【講演・談話記録】〈*中央政治会議広州分会主催の新聞記者招待会にて〉	
△1928/3/12▲1928/3/15	【著作】〈*蒋中正、張人傑など宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/3/14▲1928/3/17	【講演・談話記録】〈*中山大学各主任を招待して,広州にて〉	
△1928/3/17▲1928/3/20	【講演・談話記録】〈*広東コミューンに巻き込まれ亡くなった学生の追悼会(中山大学)にて〉	
▲1928/3/23	【著作】本校批詞	戴伝賢,朱家驊
△1928/3/25▲1928/3/28	【講演・談話記録】〈*中山大学経済研究会の成立大会にて〉	
△1928/3/26▲1928/3/27	【講演・談話記録】〈*中山大学附設中学校にて〉	戴季陶
△1928/3/27▲1928/4/6	【講演・談話記録】〈*中山大学の政治講演会にて〉	
△1928/3/29▲1928/4/2	【著作】〈*黄花崗烈士への弔辞〉	戴伝賢
△1928/3/30▲1928/4/2	【著作】本校通告第四五号	戴伝賢,朱家驊
1928/4/1?	【講演・談話記録】中山大学医科附設医院護士的改進講詞〈*中山大学にて〉	
△1928/4/2▲1928/4/4	【著作】〈*Kudicke(古底克)宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/4/3	【著作】〈*胡適宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/4/3▲1928/4/6	【講演・談話記録】〈*中山大学の政治講演会にて〉	
△1928/4/4▲1928/4/12	【著作】〈*蒋介石、譚延闓など宛の書簡〉	戴伝賢
1928/4/7		
△1928/4/12▲1928/4/13	【著作】呈政治分会請予大学以処理番禺県員村古墓全権并令省政府飭属保護	戴伝賢,朱家驊
△1928/4/13▲1928/4/14	【著作】〈*北伐将士の慰労大会に対して〉	戴伝賢,何思源,方覚慧
1928/4/17		
△1928/4/18▲1928/4/19	【講演・談話記録】〈*中山大学主催の国民政府南京遷都1周年の記念会にて〉	
1928/4/19		

○14(第1編第13章),17(民衆運動的過去和将来),20,30,31(民衆運動的過去和将来),40,51(民衆運動的過去和将来)	
○14(第1編第14章),20,30	
○14(第2編第16章),20(関于各科的現象),30	
○14(第2編第17章),20,30	
○14(第2編第18章),20,30	
○14(第2編第19章),20,30	
○14(第2編第20章),20,30	
	中国国民党二期四中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を第二期中央執行委員会常務委員、国民政府委員会委員に選出し、中央執行委員会政治会議委員に任命。
○35	
上海『申報』「中央委員之新提案」	
「復函国立大学聯合会賛同反対俄使以庚款接済張作霖案」(広州『国立第一中山大学校報』第30期)	
○35	
○35	
	上海着。欧米視察を希望。「戴季陶仍想出洋」(南京『中央日報』1928/2/18付)。蒋介石、北伐続行を決定。
	二期中執会117次常会は戴季陶を中国国民党秘書処に任命。
	二期中執会118次常会は戴季陶を中国国民党宣伝部部長、中国国民党民衆訓練委員会委員に任命。
	二期中政会広州分会第83次会議に出席。
	二期中政会第124次会議は戴季陶を二期中政会広州分会委員に任命。
南京『中央日報』「戴季陶辞中宣部長」	中国国民党中央執行委員会に対し全役職の辞任を申請。2月末、国民政府は国立第一中山大学を国立中山大学に改称。
	上海発。
	国民政府軍事委員会政治訓練部主任に任命される。
	香港着。
『広州民国日報』「戴季陶与中大学生代表之談話」	
	中山大学着。中央の役職には就任しないことを表明。
『広州民国日報』「政治分会招待新聞記者詳情」	
上海『申報』「戴季陶電告近況」	
『広州民国日報』「戴季陶歓宴中大主任」	不詳。
「本校追悼共乱殉難烈士紀要」(広州『国立中山大学日報』第144号)	不詳。
広州『国立中山大学日報』第146号	
「本校経済研究会成立大会会議紀事録」(広州『国立中山大学日報』第150号)	不詳。
「戴校長在附中礼堂訓話」(広州『国立中山大学日報』第149号)	記録:宋湜<*宋香舟>。主な転載箇所:戴季陶演講,宋湜筆記「中学時代」(『広州民国日報』副刊「現代青年」第38期,1928/6/20付)。
「戴校長三日下午継続政治演講情形」(広州『国立中山大学日報』第156号)	不詳。記録:林霖。
「戴校長代表中央政府党部祭黄花岡列士紀要」(広州『国立中山大学日報』第153号)	
広州『国立中山大学日報』第153号	
○29	
「戴校長視察医科及第一医院」(広州『国立中山大学日報』第155号)	
『胡適来往書信選』475-476頁	原件の影印:『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊,99-103頁。胡適の返信:「胡適之致戴校長及傅<*孟真(斯年)>主任函」(広州『国立中山大学日報』1928/6/1付);「胡適之将到広州講学」(『広州民国日報』1928/6/7付)。
「戴校長三日下午継続政治演講情形」(広州『国立中山大学日報』第156号)	不詳。記録:林霖。
上海『申報』「戴季陶為中大経費致中央電」	
	国民政府軍事委員会政治訓練部主任を辞任。国民革命軍、北伐再開。
広州『国立中山大学日報』第162号	
南京『中央日報』「戴季陶発起慰労大会」	
	広州政治分会第98次会議に出席し、国立中山大学新校舎の建設費用を請求。
「本校挙行国府遷寧一週紀念典礼情形」(広州『国立中山大学日報』第167号)	記録:林霖。戴季陶講「中国国民道徳与天下為公」(『広州民国日報』副刊「現代青年」第336期-第337期,1929/9/20付-9/21付)。
	二期中執会127次常会は戴季陶を広東省党務指導員補行宣誓監誓員に任命。

△1928/4/21▲1928/4/23	【講演・談話記録】〈*中山大学学生会主催の集会にて〉	
△1928/4/27▲1928/4/29	【著作】〈*蒋伯誠宛の書簡〉	戴季陶
▲1928/4	【著作】日本論	戴季陶
△1928/5/1▲1928/5/4	【著作】〈*何方宛の書簡〉	伝賢
▲1928/5/2	【講演・談話記録】〈*中山大学学生会民衆運動委員会主催の第二次山東出兵反対大会(大礼堂)にて〉	
1928/5/3		
△1928/5/4▲1928/5/7	【著作】〈*大学院宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/5/?▲1928/5/4-5/5, 5/7, 5/9-5/12, 5/14	【著作】確立教育方針実行三民主義的教育建設以立救国大計案	国立中山大学, 広東教育庁, 広西教育庁
△1928/5/?▲1928/5/14	【著作】扶植私立学校教育案	戴季陶, 李応林, 陳宗南, 荘沢宣
△1928/5/?	【著作】〈*蔡元培宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/5/4?	【講演・談話記録】工人救国的任務有十大要点講詞〈*広州にて〉	
▲1928/5/7	【著作】本報今後的方針——告読者	本社同人
△1928/5/7▲1928/5/9	【講演・談話記録】怎様才能湔雪国恥〈*中山大学主催の第二次山東出兵反対大会(東較場)にて〉	
△1928/5/7▲1928/5/10	〈*秋田、黄季陸、道生宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/5/7▲1928/5/7	【書画】挙国一致, 臥薪嘗胆	戴伝賢
△1928/5/7▲?-1928/5/21-?	【著作】研究「日本」之書目——為五七紀念而作	杜定友輯, 戴季陶校
▲1928/5/9	【著作】「晨鐘」的「開巻語」	季陶
△1928/5/9▲1928/5/17	【講演・談話記録】〈*広東省、広州市党務指導委員の就職典礼にて〉	
△1928/5/10〈*もしくは9〉▲1931/10	【講演・談話記録】日本之対華政策与其政治組織〈*中山大学にて〉	戴季陶
△1928/5/15▲1928/5/16	【講演・談話記録】〈*広東総工会第2次全省代表大会の開幕典礼にて〉	
△1928/5/15▲1928/5/16	【著作】校長佈告	戴伝賢, 朱家驊
△1928/5/17▲1928/5/21	【著作】校長佈告(第五十六号)——政治及軍事演講須一律参加	戴伝賢, 朱家驊
△1928/5/18▲1928/5/19	【著作】〈*中山大学教務会議宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/5/19▲1928/5/19	【著作】〈*蔡元培宛(朱家驊へ転送)の書簡〉	伝賢
△1928/5/19▲1929/1/1	【著作】〈*黄季陸宛の書簡〉	賢
△1928/5/19	【著作】華僑教育会議宣言	
△1928/5/20▲1928/5/22以降	【著作】国民政府軍事委員会政治訓練部編纂戦史啓事	戴伝賢, 何思源, 方覚慧
▲1928/5/21	【著作】関於中小学童軍天文台中山紀念楼一切整理計劃〈*沈鵬飛宛の書簡〉	戴伝賢
▲1928/5/22	【著作】停刊「小広州」増置「社会常識」欄的宣言	本社同人
▲1928/5/23	【著作】〈*蔡元培宛の書簡〉	
▲1928/5/25	【講演・談話記録】雪恥救国的根本義	戴季陶
1928/5/29		
▲1928/5	【書画】雪耻救国特刊	戴季陶
△1928/5	【講演・談話記録】確定教育方針是根本救国的起手講詞	
△1928/5▲1928/12/18	【著作】戴序〈*鄧慕韓編「孫中山先生年表」の序, 中山大学にて〉	

「本校学生挙行聯歓大会紀要――并挙行学生会第二届執委就職典礼」(広州『国立中山大学日報』第170号)	不詳。記録:林霖。国民政府、日本の第二次山東出兵に抗議。
『広州民国日報』「戴季陶答謝浙省助款」	主な転載箇所:「本校電謝浙政府協助校款」(広州『国立中山大学日報』第176号, 1928/4/30付)。
戴季陶『日本論』(上海:民智書局)○17, 31(第20章「昨天的田中中将」と第21章「今日的田中大将」を合わせて、「田中之今昔」という一章にする)	一部抜粋、転載:第22章「信仰的真実性」と第23章「好美的国民」が戴季陶「日本人的信仰力和愛美性」(上海『新生命』創刊号, 1928/1);第15章「国家主義的日本与軍国主義的日本」と第16章「軍閥主義的実際」と第17章「中日国際関係与日本的南進北進両政策」が戴季陶「民族主義与武力」(上海『新生命』第1巻第3号, 1928/3)など。日本語訳:①下畝生<*下畝栄吉>訳(第328号、第329号)、和泉生訳(第330号-第349号)「戴天仇[氏][の]日本論」(北平『北京週報』第328号-第349号, 1928/12/2付-1929/5/19付);②藤島留学生<*藤島健一>訳『戴天仇著日本論』(東京:外務省文化事業部, 1932/4<*もしくは5>)→藤島健一訳『日本論』(東京:世界思潮社, 1946/10;1946/11);③安藤文郎訳『戴天仇・日本論』(東京:章華社, 1934/3;1935/9)→安藤文郎訳『日本論』(東京:八洲書房, 1938/6);④森豊太訳『日本論』(東京:官界情報社, 1940/11;1941/2;1941/7);⑤玉嶋信義編訳『中国の日本観』(東京:弘文堂新社, 1967/8)の第6章=『日本論』の第18章-第21章の日本語訳;⑥編集部<*竹内好>訳(第56号、第57号)、市川宏訳(第58号-第63号)「戴季陶[の]『日本論』」(東京『中国』第56号-第63号, 1968/7-1969/2)→市川宏訳『日本論』(東京:社会思想社, 1972/3;1983/2)。
南京『中央日報』「戴季陶在粤籌備慰労北伐将士」	
「本校昨開反日出兵大会紀」(広州『国立中山大学日報』第178号)	不詳。
	済南事件勃発。6/4日本軍、張作霖を爆殺。
『広州民国日報』「中山大学鳴謝大学院」	主な転載箇所:「大学院塾款二万元経匯到本校」(広州『国立中山大学日報』第182号, 1928/5/10付)。
『広州民国日報』「両広在全国教育大会中預備提案序論[全国教育会議中両広提案預備会之重要提案]」	主な転載箇所:『雪恥救国特刊』第1冊。全国教育会議は一部を修改し採択。『全国教育会議報告』39-64頁。
『広州民国日報』「全国教育会議中両広提案預備会之重要提案」○20	主な転載箇所:『雪恥救国特刊』第1冊。全国教育会議は、該案とほか10案を併せて修改を施し、「改進私立学校案」として採択。『全国教育会議報告』623-626頁。
『胡適来往書信選』529-531頁	原件の影印:『胡適遺稿及秘蔵書信』第41冊, 110-113頁。
○29, 30	
『広州民国日報』「社論」	参考文献:「「中大学生」改為月刊」(広州『国立中山大学日報』第192号, 1928/5/22付)。
「本校挙行反日出兵大会紀要」(広州『国立中山大学日報』第181号)○19(為反日出兵告国民書), 20, 31, 40, 51(為反日出兵告全国民衆)	記録:林霖。主な転載箇所:「為反日出兵告全国民衆」(南京『中央半月刊』第1巻第20期, 1928/4/●付);戴季陶「反対日本暴力圧迫与中国国民自強的基本工作」(上海『新亜細亜』第3巻第2期, 1931/11)。
「戴季陶先生来函討論新聞方針」(『広州民国日報』副刊「現代青年」第3期)	主な転載箇所:「関於新聞事業経営和編輯的所見　一」(上海『申報』1929/1/1付)。
『広州民国日報』	
『広州民国日報』	主な転載箇所:『雪恥救国特刊』第1冊。
『広州民国日報』副刊「龍吟」第2期	
南京『中央日報』「広州省市党務指導委員宣誓就職紀詳」	
上海『新亜細亜』第3巻第1期	参考資料:「中大之公開講演会」(『広州民国日報』1928/5/9付);「日対華採爪形侵略」(上海『申報』1928/5/13付);「戴校長今日在大礼堂講「救国的教育方針」」(広州『国立中山大学日報』第190号, 1928/5/19付)。
『広州民国日報』「昨日挙行之広東総工会第二次代表大会開幕礼」	
広州『国立中山大学日報』第187号	
広州『国立中山大学日報』第191号	
「戴校長為学年試験事致教務会議函」(広州『国立中山大学日報』第190号)	
『広州民国日報』「戴季陶致朱家驊之要電」	
上海『申報』「関於新聞事業経営和編輯的所見　二」	主な転載箇所:「致黄季陸」(上海『民国日報』元旦特刊, 1929/1/1付)。
○29, 30	
南京『中央日報』	
「戴校長致沈主任函」(広州『国立中山大学日報』第191号)	
『広州民国日報』「社論」○29(停刊小広州増置社会常識欄的宣言)	
『広州民国日報』「中大戴校長函覆大学院」	
『広州民国日報』副刊「現代青年」第16期	記録:何道生。
	広州政治分会第110次会議に出席し、1930年国慶節に開催される農業博覧会の跡地を国立中山大学の第二農場に、博覧会の一部の建築物を国立中山大学新校舎に流用することを提案。
国立中山大学編『雪恥救国特刊』第1冊(広州:国立中山大学)	
○29, 30	
『広州民国日報』○29(中山先生年表序)	

▲1928/6/1	【著作】〈*広東農業博覧会の計画について〉	
▲1928/6/5	【著作】〈*紀念週出席者の記名簿について〉	伝賢
1928/6/8		
△1928/6/11▲1928/6/12	【講演・談話記録】〈*中山大学主催の総理紀念週にて〉	
△1928/6/12以前▲1928/6/18	【講演・談話記録】〈*第八路軍総司令部政治訓練委員会(広州)にて〉	
1928/6/14-6/15		
△1928/6/15▲1928/6/18	【著作】〈*馮祝万宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/6/16▲1928/6/18	【講演・談話記録】〈*中山大学主催の総理広州蒙難6周年の記念会にて〉	
1928/6/20		
△1928/6/25▲1928/6/26	【講演・談話記録】〈*中山大学の三民主義の試験について〉	
△1928/6/27?▲1928/6/28	【講演・談話記録】〈*中山大学第2回卒業式にて〉	
1928/6/?		
△1928/6-1928/7	【著作】〈*北平にて〉	
△1928/6以後	【講演・談話記録】談日本〈*北平にて〉	
1928/7/2		
△1928/7/6▲1928/7/7	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
1928/7/7		
△1928/7/10▲1928/7/12	【講演・談話記録】〈*漢口の民楽園にて〉	
△1928/7/10▲1928/7/12	【講演・談話記録】〈*中央政治会議武漢分会にて〉	
1928/7/11		
△1928/7/13▲1929/1/1	【講演・談話記録】〈*布施勝治との会談〉	
△1928/7/15▲1928/7/23	【講演・談話記録】〈*北平にて〉	
△1928/7/17▲1928/7/24	【講演・談話記録】〈*北平にて〉	
△1928/7/18?▲1928/7/20	【講演・談話記録】〈*北平にて〉	
△1928/7/19▲1928/7/31	【著作】〈*中山大学教職員宛の書簡〉	伝賢
▲1928/7/23	【講演・談話記録】〈*駐奉天総領事林久治郎の張学良に対する対南妥協反対勧告について,北平にて〉	
△1928/7/23	【著作】〈*国民政府宛の書簡〉	戴伝賢,朱家驊
▲1928/7/25	【講演・談話記録】〈*北平にて〉	
▲1928/7/26	【著作】〈*四川省の将領に対して,北平より〉	
1928/7/28		
△1928/8/1▲1928/8/2	【講演・談話記録】〈*中央宣伝部無線放送局の成立典礼にて〉	
△1928/8/2▲1928/8/3	【講演・談話記録】〈*北伐陣亡者の追悼大会にて〉	
△1928/8/2▲1928/8/3	【講演・談話記録】〈*無線放送にて〉	
▲1928/8/3	【講演・談話記録】〈*中国国民党二期五中全会について〉	
△1928/8/4▲1928/8/6	【講演・談話記録】〈*国民革命軍軍官団、軍官学校主催の歓迎会にて〉	
1928/8/4-8/7		
△1928/8/6▲1928/8/7	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第27次紀念週にて〉	
△1928/8/7▲1928/8/13	【著作】〈*沈鵬飛、陳宗南宛の書簡〉	伝賢
△1928/8/7▲1928/8/9	【著作】〈*中国国民党二期五中全会の議案編制について〉	

「戴校長提議籌辦広東農業博覧会」(広州『国立中山大学日報』第201号)	
「特別通告」(広州『国立中山大学日報』第204号)	
	国民政府対内外重要宣言起草委員に任命される。「国民政府対外宣言」(南京『中央日報』1928/6/16付)。国民革命軍、北京入城。
『広州民国日報』「李主席昨晨在中大訓話」	記録:林霖。
上海『申報』「第八路軍総部成立政訓委会」	
	国民政府、北伐完了を宣言。
「関於本校十七年度予算事戴校長致馮庁長箋函」(広州『国立中山大学日報』第215号)	
「本校挙行総理蒙難六週年紀念誌要」(広州『国立中山大学日報』第215号)	不詳。記録:林霖。
	二期中政会第145次会議は戴季陶を国立北平故宮博物院理事に任命。
『広州民国日報』「戴校長演述三民主義試題要旨」	
『広州民国日報』「昨日之中大第二届畢業典礼誌盛」	記録:林霖。主な転載箇所:「本校第二届畢業典礼誌盛」(広州『国立中山大学日報』第222号,1928/6/29付)。
	第八路軍総司令部政治訓練委員長に任命される。
○20(希望北平的両点),31(希望北平的両点及軍政的問題)	
○51	
	広州より香港着。
南京『中央日報』「李済深戴季陶昨天到滬」	上海着。
	南京着。
上海『申報』「李戴昨晨由漢赴平」○51(如何救国)	武漢着。
上海『申報』「李戴昨晨由漢赴平」	不詳。
	二期中政会第148次会議は戴季陶を建設委員会委員に任命。
布施勝治「孫文主義は「右」か「左」かはた「中」か」	鄭州、石家荘、保定を経て、北平着。北平の外交大楼で布施勝治と会談。
南京『中央日報』「蒋総司令和中央委員北上紀(十二)」	
上海『申報』「戴季陶之談話」	
南京『中央日報』「蒋総司令定今日離平」	不詳。
「戴校長自北平来電」(広州『国立中山大学日報』第232号)	
『東京朝日新聞』「日本の対支態度は独断専行　統一運動と衝突するは当然」	
中国第二歴史档案館・全宗号1・案巻号2361(16J-2360)・標題「国立各中山大学組織与校務」	
南京『中央日報』「戴季陶的中日外交談」	不詳。
南京『中央日報』「戴季陶致川将領電」○31(対四川将領之忠告)	
	北平発。漢口に向かう。
南京『中央日報』「中央五次全会昨日改開談話会」	不詳。南京着。中国国民党二期五中全会談話会に出席。
南京『中央日報』「追悼革命陣亡将士的第二天」	不詳。
南京『中央日報』「戴季陶昨又演講」	
上海『申報』「執委戴季陶之譚話」	閻錫山に中国国民党二期五中全会に出席するように促す。
上海『申報』「軍官団及軍校歓迎革命軍事領袖」	不詳。
	中国国民党二期五中全会予備会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、提案審査委員会委員(政治及軍事組の召集人)に任命。
南京『中央日報』「五次大会声中的中央紀念週」○20(革命須実際為民衆打算),33(在四中全会後半年中重大事件与個人感想)	
「戴校長自京来電」(広州『国立中山大学日報』第236号)	
上海『申報』「戴伝賢対議案編制之意見」○20(対議案編制之意見),33(関於第二届五中全会議案編制之意見)	

1928/8/8-8/15		
△1928/8/9?▲1928/8/10	【講演・談話記録】近年来所発生的幾個感想	
△1928/8/13▲1928/8/25	【講演・談話記録】中国教育問題〈*中国国民党中央党部の第28次紀念週にて〉	戴季陶
▲1928/8/14	【講演・談話記録】〈*中央政治会議分会の存廃、法律制度の確立について，中国国民党中央党部の第28次紀念週にて〉	
1928/8/17		
1928/8/26-8/27		
1928/8/27		
△1928/8/28▲1928/9/1	【著作】〈*周西成宛の書簡〉	戴伝賢，朱家驊〈*代行：沈鵬飛〉
△1928/9/1?▲1928/9/1	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
△1928/9/5▲1928/9/6	【講演・談話記録】新聞学実際的応用〈*上海の景林中学校にて〉	
1928/9/16		
1928/9/18		
1928/9/19		
1928/9/20		
△1928/9/23▲1928/9/24	【講演・談話記録】〈*五院院長の人選などについて，南京にて〉	
▲1928/9/24?	【講演・談話記録】〈*長兄没について，南京にて〉	
1928/9/24		
△1928/9/26?▲1928/9/27	【講演・談話記録】〈*四川の政局などについて〉	
△1928/9/30▲1928/10/1	【講演・談話記録】〈*五院の組織などについて，湯山にて〉	
1928/9/?		
1928/10/1		
1928/10/3		
1928/10/7		
1928/10/8		
▲1928/10/10	【講演・談話記録】〈*考試院の設立について，南京にて〉	
△1928/10/10▲1928/10/10	【著作】国慶日的感想	戴伝賢
△1928/10/10▲1928/10/10	【書画】中山先生遺教〈*中央日報社に頼まれて〉	戴伝賢
1928/10/11		
1928/10/12		
1928/10/13		
1928/10/14		
▲1928/10/15	【講演・談話記録】〈*考試院の設立などについて，上海にて〉	
△1928/10/15▲1928/10/16	【講演・談話記録】〈*中央国術館国術考試(南京)の第1日にて〉	
1928/10/16		
△1928/10/19▲1928/10/27	【講演・談話記録】〈*中央国術館国術考試の第5日にて〉	
1928/10/20〈*もしくは24〉		
△1928/10/22	【講演・談話記録】我們以後応該怎様做〈*中国国民党中央党部の第38次紀念週にて〉	戴季陶
▲1928/10/23	【講演・談話記録】〈*国文教育の重視について，上海にて〉	
1928/10/25		
1928/10/26		
1928/10/28		
△1928/10/30	【講演・談話記録】発展農林事業為発展農林科学之前駆〈*江蘇省農政会議にて〉	
△1928/10/30	【講演・談話記録】思想的本体和趣向及近年青年思想趣向的錯誤〈*南京市立中区実験学校にて〉	戴季陶
1928/10/31		
1928/10		
△1928/11/1▲1928/11/3	【著作】〈*中華国貨展覧会への祝辞〉	戴伝賢

	中国国民党二期五中全会(南京)の後半に出席。大会で採択された決議案を中央執行委員会常務委員会が派遣する専門の担当者によって整理する議案を提出。同会は戴季陶を中央執行委員会政治会議委員、中国国民党財務委員会委員に任命。南京郊外の湯山(一部の史料によると莫干山)に滞在。
南京『中央日報』「戴季陶主任対総政訓部全体属員訓話」	
広州『国立中山大学日報』第243号	
南京『中央日報』「中央第念八次紀念週」;上海『申報』「各中委之談話」	
	上海着。その後、杭州、呉興県、莫干山に向かう。
	莫干山の療養院で沈玄廬、周柏年と会談。
	中央党務学校考試委員に任命される。
「公函」(広州『国立中山大学日報』第249号)	
上海『申報』「李済深戴季陶今晨抵滬」	上海着。
南京『中央日報』「戴季陶氏講演新聞学実際的応用」 ○20,33,51(新聞学実際之応用)	
	上海の宋子文邸で、蒋介石、胡漢民、李済深、李宗仁らとともに、五院院長人選、中政会改組などについて会談。
	上海発。
	南京着。
	二期中執会168次常会は戴季陶などに党治教育の名称の検討を命じる。
上海『申報』「戴季陶之談話」	不詳。上海着。
○20(尭欽逝世与其家庭状況),40	
	二期中執会169次常会は戴季陶を中執会常会秘書処に任命。胡漢民と五院組織法について審議。
南京『中央日報』「戴季陶氏的川事談」 ○20(痛論川事),31(論川事)	9/26、二期中政会第156次会議に五院組織法案を提出。戴季陶に共産党自首条例草案と不動産登記法案の検討を命じる。
南京『中央日報』「湯山各中委訪謁記」	湯山着。
	中山大学法学院負責人に任命される。
	二期中執会171次常会(南京)に出席。
	二期中政会第157次会議は戴季陶などに国民政府五院組織法の起草を命じる。二期中執会172常会は「中華民国国民政府組織法」案、「中国国民党訓政大綱」案を採択。
	湯山に行き、南京に戻る。
	二期中執会173次常会で、総理訓詞「三民主義吾党所宗……」を中国国民党党歌の歌詞とすることを提議。同会は戴季陶を国民政府考試院院長に選出。1930/1/6就任。中政会臨時会議は戴季陶などに建設大綱草案の検討を命じる。11/7、二期中政会第162次会議で建設大綱草案の検討結果を報告。
上海『申報』「戴季陶之考試院談」	
南京『中央日報』国慶特刊○19(革命的根本),20,31(国慶日感想),40(革命的根本,同前),51(革命的根本)	主な転載箇所:戴伝賢「真性革命」(上海『申報』1928/10/10付);戴伝賢「今後建国之本」(南京『中央週報』第19期,1928/10/15付);戴伝賢「戴校長最近之言論」(広州『国立中山大学日報』第276号,1928/10/15付)。
南京『中央日報』	
	二期中執会174次常会は戴季陶に、(1)党員の登記、選挙、共産党防備、および党部工作の問題を検討すること、(2)政治会議暫行条例と立法程序法を合併させて起草すること、(3)中国国民党二期五中全会の速記録を検討すること、を命じる。
	二期中政会第158次会議は戴季陶を外交委員会委員に任命。
	上海着。二期中執会175次常会は戴季陶に、(1)「審査中華民国教育宗旨案報告書」の検討、(2)党員褒揚の辦法の研究、を命じる。
	南京着。
南京『中央日報』「戴季陶氏関於考試院的談話」	主な転載箇所:「戴季陶氏在上海之談話」(『広州民国日報』1928/10/24付)。
南京『中央日報』「首都挙行国考的第一日」	不詳。1928年、国術館顧問に就く。山田純三郎、蒋介石などの会談に出席。
	第1次国務会議は戴季陶を国民政府外交委員会委員に任命。
南京『中央日報』「中央国術考試已閉幕」	不詳。二期中政会臨時会議は戴季陶などに立法院委員人選標準の検討を命じる。
	二期中政会第160次会議は戴季陶などに四川省の軍事政治問題の検討を命じる。11/8、国民政府は四川省の政治軍事の整頓に関する命令を発表(蒋介石は戴季陶に執筆を依頼、戴季陶の代理で謝健が執筆)。
南京『中央半月刊』第2巻第2期○20(人材集中与工作集中),51(同前)	主な転載箇所:「戴伝賢在中央紀念週的演詞」(南京『中央日報』1928/10/23付);戴季陶「我們応該做什麼工作,怎麼去做」(南京『中央週報』第22期,1928/11/5付)。
『広州民国日報』「戴季陶関於教育方面之談話」	
	二期中執会179次常会は戴季陶を中国国民党民衆訓練委員会常務委員に任命。
	国民政府、訓政時期施政宣言を発表。
	湯山に行き、南京に戻る。
南京『中央半月刊』第2巻第3期○19(発展中国農業的初歩),20(発展農林科学之前駆),29,30,51	主な転載箇所:戴季陶「発展農林事業為発展農林科学之前駆」(『広州民国日報』副刊「新農林半月刊」第15期-第16期,1929/8/2付,8/20付)。
南京『中央半月刊』第2巻第5期 ○19,20,29(青年思想的趨向与教育方針講詞),30(同前),40,51(近数年来青年思想之趨向錯誤)	
	二期中政会第161次会議は戴季陶などに「懲治綁匪条例」案の検討を命じる。
	国民政府外交委員会委員を辞任。
上海『申報』「開幕後之中華国貨展覧会記(一)」	二期中執会180次常会は戴季陶を党務審査委員会委員に任命。

△1928/11/2▲1928/11/12	【講演・談話記録】〈*全国禁烟会議第1次大会(南京)にて〉	
1928/11/5		
△1928/11/6▲1928/11/6	【講演・談話記録】〈*最近の政治について,南京駅にて〉	
1928/11/7		
1928/11/8		
▲1928/11/9	【講演・談話記録】〈*考試制度設計委員会と編訳局の設立について〉	
△1928/11/10▲1928/11/11	【講演・談話記録】〈*中央陸軍軍官学校の教職員、学生に対して〉	
1928/11/11		
△1928/11/12▲1928/11/13	【講演・談話記録】〈*江蘇省政府委員の就職典礼にて〉	
1928/11/13		
▲1928/11/14	【著作】上中央執行委員会請令行北平市政府籌建彭家珍烈士紀念堂呈〈*二期中政会第163次会議〉	
△1928/11/14▲1928/11/15	【講演・談話記録】在訓政時期中中国国民党党員之心理建設〈*無線放送にて〉	
△1928/11/16▲1928/11/17	【講演・談話記録】〈*司法院司法行政部部長、最高法院院長の就職典礼にて〉	
△1928/11/19▲1928/12/3, 12/10	【講演・談話記録】訓政期中応有之覚悟〈*中国国民党中央党部の第41次総理紀念週にて〉	戴季陶
△1928/11/20▲1928/11/23	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の党務指導委員の講習会にて〉	
1928/11/21		
1928/11/22		
1928/11/23		
△1928/11/27▲1928/11/28	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党務学校の閲兵式にて〉	
△1928/11/28▲1928/11/30	【講演・談話記録】〈*女子教育について,金陵女子大学にて〉	
▲1928/11/29	【講演・談話記録】〈*考試院の設立について,上海にて〉	
△1928/11/29▲1928/11/30	【講演・談話記録】中国法学之過去及将来〈*中央大学法学院にて〉	
▲1928/11/30	【講演・談話記録】〈*中国建設の方略について,南京にて〉	
1928/12/4		
△1928/12/5▲1928/12/6	【講演・談話記録】〈*蒙蔵代表聯歓会(南京)にて〉	
1928/12/7		
△1928/12/10▲1928/12/11	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第44次総理紀念週にて〉	
△1928/12/10▲1928/12/12	【講演・談話記録】〈*政治訓練処処長などの就職典礼にて〉	
△1928/12/11▲1928/12/13	【講演・談話記録】〈*両粤賑災委員会の成立典礼にて〉	
▲1928/12/12	【講演・談話記録】〈*蒙古代表団との会談,南京にて〉	
▲1928/12/13	【著作】提議第三次全国代表大会議題案〈*二期中執会187次常会〉	
△1928/12/15	【講演・談話記録】国家之基本建設与衛生運動講詞〈*無線放送にて〉	
△1928/12/15▲1928/12/17	【講演・談話記録】〈*江蘇、浙江、安徽、江西、福建五省民政会議にて〉	
△1928/12/15	【著作】〈*梅屋庄吉宛の書簡〉	戴伝賢
△1928/12/21▲1928/12/25	【著作】勗勉同学精誠団結安心力学〈*朱家驊宛の書簡〉	伝賢
△1928/12/22▲1928/12/31	【講演・談話記録】整理軍事是富国強兵的起点〈*無線放送にて〉	戴伝賢
△1928/12/22▲1928/12/23	【講演・談話記録】為政与求学〈*国民政府にて〉	
△1928/12/24▲1931/12	【講演・談話記録】東方形勢之日本与中国〈*中国国民党中央党部の第46次総理紀念週にて〉	戴季陶
△1928/12/24	【講演・談話記録】紀念我們総理的意義講詞〈*考試院籌備処の第1次紀念週にて〉	
△1928/12/25▲1929/1/4	【講演・談話記録】〈*西北墾拓について,西北県長に対して〉	
△1928/12/25▲1929	【著作】〈*高維昌『民生主義闡微』の序〉	戴伝賢
△1928/12/25▲1929/1/1	【著作】〈*戴季陶「関於新聞事業経営和編輯的所見」の序〉	戴季陶
1928/12/26		
1928/12/27		
1928/12/29		
△1928年秋冬間	【著作】対四川将領之忠告	
△1928年孟冬月	【著作】〈*陳●を追悼する輓聯〉	季陶戴伝賢

『広州民国日報』「全国禁烟会議第一次大会」○19(禁煙問題),20(禁烟演説),33(希望国人努力助禁烟会議達到絶毒目的講詞)	
	上海着。
上海『申報』「中央要人聯袂入都」	南京着。
	二期中政会第162次会議は戴季陶などに「国民政府各部会組織法」案の検討を命じる。
	二期中執会181次常会は戴季陶を党歌曲譜審査委員会委員に任命。1929/1/10、二期中執会190次常会は党歌を決定。
上海『申報』「戴季陶之提案」	
上海『申報』「戴伝賢昨在軍校訓話」	不詳。
	中央党務学校は戴季陶を講師として招聘。「戴伝賢任党校講師」(上海『申報』1928/11/12付)。
上海『申報』「蘇省委昨日就職」	
	国民政府豫陝甘賑災委員会委員に任命される。1929/2/26、同委員会解散。
○33	
上海『申報』「訓政期之心理建設」	
上海『申報』「司法院両長官就職」	
南京『中央週報』第26期-第27期○19(公僕与導師),20(為政与為学),29(在訓政時期中同志応有之認識講詞),30(同前),51(為政与為学——同志們在訓政期中応有的覚悟)	日本語訳:「中央を悪罵する党員を戒む戴天仇」(北平『北京週報』第327号,1928/11/25付)。主な転載箇所:「為政与為学」(南京『中央半月刊』第2巻第4期,1928/11/●付)。
『広州民国日報』「中央召集各地指委訓話情形」	不詳。南京発。
	上海着。
	上海発。
	南京着。第6次国務会議に出席。
上海『申報』「中央党校行閲兵式」	不詳。
上海『申報』「戴季陶在金女大演講女子教育」	不詳。
『広州民国日報』「規模漸具之考試院」	
上海『申報』「戴季陶演講中国法学」○29(怎様建設法学的基礎講詞),30(同前)	二期中執会184次常会で、(1)山東国民新聞の停刊と取調、(2)彭家珍の紀念堂建設を提議。また、同会は戴季陶に失学革命青年救済辦法草案の検討を命じる。
朱耀翰「新中国訪問記(14)——建設方略六条」(京城『東亜日報』)	東亜日報(京城)記者朱耀翰と会談。
	国民政府両粤賑災委員会委員に任命される。1929/2/26、同委員会解散。
上海『申報』「蒙藏代表聯歓会」	不詳。立法院設立。立法院院長胡漢民は戴季陶を立法院顧問に任命。二期中政会第166次会議は戴季陶などに中央図書館籌備処設立の意見書・組織大綱・予算概略の検討を命じる。
	二期中執会186次臨時常会は戴季陶に中国国民党三全大会の議題の起草を命じる。
上海『申報』「中央与国府之紀念週」	主な転載箇所:戴季陶「国際形勢下之中国的辺疆開発」(上海『新亜細亜』第2巻第3期,1931/6付)。
上海『申報』「政治訓練処長陳立夫就職」	
『広州民国日報』「両広賑委会成立」	
上海『申報』「蒙人請改組蒙藏会」	不詳。二期中政会第167次会議は戴季陶などに民法総則編の立法原則の検討を命じる。
○33	孫中山先生葬事籌備委員会第64次会議(南京)に出席。二期中執会187次常会は第三次全国代表大会議題草案を修正の上採択し、戴季陶などに文章の整理を命じる。
○29,30	
上海『申報』「五省民政会議開幕詳紀」	不詳。
片倉芳和「梅屋庄吉と孫文銅像」	
「戴校長最近来電」(広州『国立中山大学日報』第327号)	
南京『中央週報』第30期	
上海『申報』「戴伝賢之両次演講」	
上海『新亜細亜』第3巻第3期	
○29	
『広州民国日報』「戴季陶談西北墾拓」	
高維昌『民生主義闡微』	主な転載箇所:戴季陶「民生主義闡微序」(南京『中央日報』副刊「毎週評論」第10号,1929/5/20付)。
上海『申報』「関於新聞事業経営和編輯的所」	
	二期中政会第169次会議は戴季陶に土地法原則と黄河水利委員会組織条例草案の検討を命じる。
	二期中執会189次常会で、失学革命青年救済辦法草案の検討結果を報告し、「中国国民党年鑑」、「国民政府年鑑」、「蒙藏叢書」の編輯を提議。同会は戴季陶に(1)国軍編遣委員会に出席すること、(2)総理奉安紀念の宣伝規則の検討、(3)学術人才、技術人員、各種職業人員、芸術人才の保障と芸術品の保護に関する辦法条文の整理、を命じる。
	張学良など、奉天、吉林、黒龍江、熱河四省の「易幟」を宣言。
○20(対川将領之忠告),31	
○19(戴季陶先生書陳烈士自輓聯)	

△1928年歳暮▲1929/1/1	【書画】〈*広州民国日報に頼まれて〉	戴伝賢
▲1928	【著作】詰誡獄中胞姪	
△1928-1929	【講演・談話記録】革命談話	
△1929/1/1	【著作】〈*呉興県の人々に対して〉	戴伝賢
△1929/1/1▲1929/1/1	【講演・談話記録】〈*励志社の開幕典礼にて〉	
1929/1/1-1/25		
△1929/1/7▲1929/1/8	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第48次総理紀念週にて〉	
△1929/1/10▲1929/1/17	【講演・談話記録】〈*中国国民党宣伝部主催の新聞記者招待会にて〉	
1929/1/14		
1929/1/16		
1929/1/17		
△1929/1/23▲1929/1/24	【講演・談話記録】〈*中国国民党宣伝部主催の内外新聞記者招待会にて〉	
1929/1/24		
△1929/1/28▲1929/2/4	【講演・談話記録】我們要用節制来度今年的難関〈*中国国民党中央党部の第51次総理紀念週にて〉	戴季陶
△1929/1/28▲1929/2/19-2/21	【講演・談話記録】今年是我們的難関〈*国民政府の第17次総理紀念週にて〉	戴季陶
△1929/1/29▲1930/12	【講演・談話記録】建設東北是中国強盛的起点〈*東北党務視察団に対して〉	戴季陶
1929/1		
△1929/1/?-7/?	【著作】〈*閻錫山宛の書簡〉	中国国民党中央執行委員会常務委員と連名
△1929/1/?-7/?	【著作】〈*閻錫山宛の書簡〉	譚延闓、胡漢民、于右任、陳果夫、葉楚傖、孫科と連名
△1929/1/?-7/?	【著作】為西北叛変通電全国	国民政府四院長と連名
▲1929/1〈*実際は2/7以後〉	【書画】最近世界各国政党	戴伝賢
1929/2/4		
△1929/2/7▲1929/1〈*実際は2/7以後〉	【著作】〈*顧樹森編訳『最近世界各国政党』の序〉	戴伝賢
△1929/2/7▲1929/8	【著作】〈*寺田精一著,徐天一訳『倫勃羅梭犯罪人論』の序〉	戴季陶
△1929/2/12	【著作】青年的訓練与組織——青年訓練教範序	戴伝賢
△1929/2/16▲1929/2/23	【講演・談話記録】〈*党政について,上海にて〉	
△1929/2/18▲1929/2/25	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の総理紀念週にて〉	
△1929/2/23〈*もしくは26〉▲1929/6	【講演・談話記録】第三次代表大会的責任〈*中央陸軍軍官学校にて〉	戴季陶先生
△1929/2/25▲1929/3/8	【講演・談話記録】確定区分部為本党基本組織的原理〈*中国国民党南京市第5区党部第9分部の成立典礼にて〉	戴季陶
△1929/3/1	【書画】妙法蓮華経観世音菩薩普音品〈*母の冥福を祈る〉	伝賢
1929/3/2		
1929/3/6		
▲1929/3/11	【講演・談話記録】〈*母を悼む〉	
1929/3/11		
1929/3/15-3/28		
△1929/3/16▲1929/3/16	【著作】大学通告	戴伝賢,朱家驊〈*代行:沈鵬飛〉
△1929/3/?	【著作】第三次全国代表大会議題草案提議案	蒋中正,胡漢民,戴伝賢
1929/3/27		
1929/3/28-4/8		
△1929/3以前	【書画】村制学講義	戴季陶
△1929/3/?	【著作】〈*母を悼む〉	伝賢
△1929/4?▲1929/7	【書画】許公武先生著　徴兵之沿革及施行法	戴伝賢
△1929/4/5▲1929/7	【著作】〈*許公武『徴兵之沿革及施行法』の序〉	戴伝賢
△1929/4/11〈*もしくは10〉▲1929/4/12	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央訓練部、民衆訓練設計委員会の職員に対して〉	
△1929/4/18▲1929/4/19	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部、国民政府主催の国民政府南京遷都2周年の記念会にて〉	

『広州民国日報』「元旦特刊」	
○51	
○20	
○19(新年告郷人書),20(十八年元旦述懐),31(元旦述懐)	
上海『申報』「励志社定元旦挙行開幕礼」	不詳。
	国軍編遣会議(南京)に出席。
上海『申報』「中央与国父之紀念週」	
『広州民国日報』「中央宣伝部招待記者」	不詳。二期中執会190次常会は王寵恵、戴季陶に、中央執行委員会に法規審査委員会を常設することの研究を命じる。
	国民政府総理奉安委員会委員に任命される。
	二期中政会第171次会議は戴季陶を建設委員会委員に任命。
	二期中執会191次常会は戴季陶などに北方各省の党務問題の検討を命じる。また、戴季陶、孫科、葉楚傖は総理奉安紀念の宣伝規則案を提議(修正の上採択される)。
上海『申報』「中宣部招待記者」;『広州民国日報』「中央宣伝部招待中外新聞記者」	国民政府首都建設委員会委員に任命される(1933/4/30、同委員会解散)。二期中政会第172次会議は戴季陶などに商会法、工商同業公会条例、工廠法、消費合作社条例の草案の検討を命じる。
	二期中執会192次常会は戴季陶を国民政府財政委員会に派遣することを決議。1930/9/30、同委員会解散。
南京『中央週報』第35期	
『広州民国日報』	
上海『新亜細亜』第1巻第3期	記録:暁林。整理:張振之。主な転載箇所:戴季陶「建設東北是中国強盛的起点」(南京『中央月刊』第3巻第2期,1930/12付)。日本語訳:戴天仇「東三省の建設は中国富強の起点なり」(東京『邦文外国雑誌』第1巻第2号,1931/4付)。
	立法院は戴季陶を民法起草委員会顧問に任命。その後、法典審査会顧問に任命。民法総則編、債権編、物権編の起草に参与。
『最新党国名人公牘類編』	
『最新党国名人公牘類編』	
『最新党国名人公牘類編』	
顧樹森編訳『最近世界各国政党』	原著:外務省欧米局編『各国の政党』(東京:国際聯盟協会,1927/2-1928/5)。
	二期中執会195次常会は、戴季陶などに第三次全国代表大会会議規則草案、第三次全国代表大会秘書処組織条例草案、第三次全国代表大会代表資格審査委員会規則草案、第三次全国代表大会各省及各特別市代表名額草案、第三次全国代表大会各特別党部代表名額及其産生方法草案の検討を命じる。
『最近世界各国政党』	
寺田誠一『倫勃羅梭犯罪人論』徐天一訳,劉蘆隠校編	原著:Gina Lombroso Ferrero校編“*Criminal Man: According to the Classification of Cesare Lombroso*”1911.翻訳は寺田精一訳『ロンブローゾ犯罪人論』(東京:厳松堂,1917/9)からの重訳。戴季陶「介紹感化犯罪人的学説」(南京『中央半月刊』第2巻第8期,1929/?/?付)。
南京『中央半月刊』第2巻第7期○29(中学校用青年訓練教範序)	主な転載箇所:「中学校用青年訓練教範序」(南京『新亜細亜』第13巻第4期,1937/4<*実際は5/31以後>)。
『広州民国日報』「戴季陶之党政談」	
『広州民国日報』「中枢両紀念週」	二期中執会198次常会で、中央広播無線電台の拡充を提議。同会は戴季陶などに、河北省、北平特別市、天津特別市における補行登記問題について検討することを命じる。
中央陸軍軍官学校政訓処編輯委員会編『政治講演集』○29(対於三全大会応有正確的認識	記録:張皎。
『広州民国日報』○20,29(区分部的基本工作講詞)	母黄氏没。その後、黄氏が1924年孫(戴安国か)に書き与えた孝経の解説文を、印刷し冊子にして配布。また、南京の五台山に「孝園」(一般開放の公園)(園内に医療施設を設け、冬季には米穀切符と衣料を施す)を開き、宝華山に「孝経碑」を建て(1933年落成)、「孝経鼎」を鋳造し中山陵に据える(1934/11/12)。
戴伝賢書『孝園写経(第一)』	
	国民政府賑災委員会委員に任命される。1930/1、同委員会解散。
	二期中政会第178次会議は戴季陶などに曲阜孔氏林廟の国有化案と「整理曲阜林廟委員会条例」案の検討を命じる。
南京『中央日報』「「孝於党国友於同志」戴季陶氏之時局感想」	
	二期中執会204次常会は戴季陶を中国国民党三全大会秘書長に任命。
	中国国民党三全大会(南京)は戴季陶を第三期中央執行委員会委員に選出。
広州『国立中山大学日報』第373号	全2篇。
○35	
	「桂蒋」戦争勃発。李宗仁、蒋介石に対抗。5/15馮玉祥など、蒋介石に対抗。
	中国国民党三期一中全会(南京)に出席。同会は第三期中央執行委員会常務委員に選出し、中央党部訓練部部長に任命。また、戴季陶などに党部組織の修改について具体方策を検討することを命じる。
尹仲才編『村制学講義』	
○19(哀啓),20(黄太夫人哀啓),29(先母行略),40(黄太夫人哀啓)	
許崇灝『徴兵之沿革及施行法』	
『徴兵之沿革及施行法』	
南京『中央日報』「中央訓練部戴何両部長昨視事」○29(中央訓練部的最大任務与訓練部本身的訓練講詞)	三期中執会1次常会は戴季陶などに、大会移交提案整理委員会の設置案、中央執行委員会政治会議組織条例の修正案、政治会議人選決定案の検討を命じる。
南京『中央日報』「荘厳隆重之建都南京二週紀念会」	

△1929/4/22▲1929/4/23	【講演・談話記録】〈*中国国民党総章の修改について，中国国民党中央党部の総理紀念週にて〉	
△1929/4/22▲1929/4/24	【著作】〈*馬超俊宛の書簡〉	漢民(胡漢民)，伝賢，科(孫科)
1929/4/29		
△1929/4	【書画】没世不忘	戴伝賢
△1929/5/1	【講演・談話記録】五一労働運動紀念与中国経済建設講詞〈*中央大学主催の紀念会にて〉	
△1929/5/2	【講演・談話記録】対浙江省政府暫停試行二五減租辦法向中央常会陳明意見案〈*中国国民党三期中執会第七次会議にて〉	
△1929/5/2▲1929/5/3	【講演・談話記録】〈*南京の初等教育について〉	
△1929/5/3▲1929/5/4	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の五三紀念大会にて〉	
△1929/5/4?▲1929/5/5	【講演・談話記録】〈*山東省政府主任と中央政治会議の人選について〉	
△1929/5/4▲1929/5/5	【講演・談話記録】五四運動的功過与今後的趨向講詞〈*首都各校五四紀念講演会(中央陸軍軍官学校)にて〉	
△1929/5/5?▲1929/5/6	【講演・談話記録】〈*中央陸軍軍官学校第6期学生の畢業典礼にて〉	
1929/5/6		
▲1929/5/7	【講演・談話記録】〈*時局について〉	
1929/5/8		
△1929/5/9▲1929/5/10	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の五九国恥紀念大会にて〉	
▲1929/5/11	【講演・談話記録】〈*李済深の動静について〉	
△1929/5/14?▲1929/5/15	【講演・談話記録】〈*首都第2期衛生運動大会の開幕典礼にて〉	
△1929/5/15	【講演・談話記録】〈*中央陸軍軍官学校第6期学生の畢業典礼にて〉	
1929/5/16		
△1929/5/18	【講演・談話記録】陳英士先生之殉国歴史〈*中国国民党中央党部主催の陳英士先生殉国紀念会にて〉	戴伝賢
△1929/5/20▲1929/5/27	【講演・談話記録】剷除害国害民作威作福的新軍閥〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	戴伝賢
△1929/5/27	対于総理奉安的誠敬講詞〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	
▲1929/5/28	【著作】〈*馮玉祥軍の将士に対して〉	譚延闓，胡漢民，戴伝賢，陳果夫
▲1929/5/29	【著作】国民政府主席及五院院長等祭文	
▲1929/5/29	【著作】考試院祭文	戴伝賢
△1929/5/30以前▲1929/6/14	【著作】国立中山大学祭文	戴伝賢，朱家驊
1929/5/31		
▲1930/3/?	【著作】五院長告全国軍人書——中央之根本政策為和平統一——今後革命軍人応力行者四項	譚延闓、胡漢民、王寵恵、趙戴文と連名
▲1929/5	【書画】〈*張振之『目前中国社会的病態』の題詞〉	戴伝賢
1929/6/1	【著作】国民政府誄文(併序)	
△1929年総理奉安後七日〈*6/8〉▲1929/6/17	【著作】中山大学第三届畢業同学録序	戴伝賢
1929/6/10-6/18		
△1929/6/17	【著作】治権行使之規律案〈*中国国民党三期二中全会にて〉	戴伝賢
1929/6/20		
△1929/6/24▲1929/6/25	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第72次紀念週にて〉	
△1929/6/25▲1929/7/16	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央訓練部の第1次拡大部務会議にて〉	
△1929/6/25▲1929/6/29	【著作】〈*閻錫山宛の書簡〉	譚延闓，胡漢民，王寵恵，戴伝賢，陳果夫
1929/6/26		
1929/6/27		
1929/6/28		
△1929/6/?	【著作】題孫中山先生在日本演講遺像	
1929/7/3		
△1929/7/4	【講演・談話記録】芸術的目的在生死人而肉白骨講詞〈*南国社に対して〉	
1929/7/10		
△1929/7/13▲1929/7/14	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央宣伝部主催の米国記者団招待会にて〉	
1929/7/15		
1929/7/16		
△1929/7/17▲1930/8	【著作】〈*黄恵龍叙述『中山先生親征録』の序〉	戴伝賢
1929/7/18		
△1929/7/21?▲1929/7/22	【講演・談話記録】中俄絶交後国民応有之態度与努力方針	
△1929/7/22▲1929/7/23	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の総理紀念週にて〉	
△1929/7/22	【著作】党証党徳之標準案〈*三期中執会26次常会採択〉	

南京『中央日報』「戴伝賢報告三全会修改総章之意義」○29(修正本党総章的解釈講詞)	三期中執会4次常会に対し「訓政時期経済建設実施綱要方針」案の検討結果を報告。同会は報告案を承認し、「方針」案を「確定訓政時期物質建設之実施程序及経費」案に修正して採択。
南京『中央日報』「中央常会決議特派馬超俊出席日内瓦国内労工大会」	
	三期中執会6次常会は戴季陶に僑務委員会組織条例草案の検討と、救国基金用途辦法案の起草を命じる。
『在中山先生身辺的日子里』	
○29, 30	中国国民党中央軍事政治学校政治部主任を辞任。孫中山先生葬事籌備委員会第67次会議(南京)に出席。
○35	
南京『中央日報』「戴院長談興辦首都小学之計劃」	三期中執会7次常会で首都国民小学校の建設案を提議(採択される)。9/19、三期中執会36次常会は戴季陶などに籌款事務を行うことを命じる。
南京『中央日報』「中央昨日挙行五三紀念」	不詳。
南京『中央日報』「戴季陶談話」	
南京『中央日報』「悲壮激昂之五四運動十週紀念会」○29, 30	日本語訳:今村与志雄「五四運動の評価について」(東京『中国』第66号, 1969/5)28-30頁。
南京『中央日報』「中央軍校」	不詳。
	三期中執会8次常会は、総理奉安大典での党政高官の制服(素地藍袍黒馬褂)を決定し(戴季陶の臨時提議に基づく)、戴季陶を中央執行委員会政治会議委員に任命。
『広州民国日報』「有関豫局要人談話」	
	三期中政会第180次会議は戴季陶などに、民法と商法の統一法典を立てることについて検討を命じる。
『広州民国日報』「中央党部昨挙行五九国恥紀念」	
南京『中央日報』「戴季陶之談話」	
南京『中央日報』「第二届衛生運動」	
	三期中政会第181次会議は戴季陶に、公債法原則十一条と、中央執行委員会政治会議の分組辦法の検討を命じる。
	三期中執会12次常会は戴季陶などに上海商人団体整理委員会組織大綱案の起草を命じる。5/23、三期中執会14次常会は組織大綱案を修正の上採択。
柳宗潔編『革命紀念日名人講演集』	
南京『中央週報』第51期	日本軍、山東から撤退。
○29	南京で頭山満一行を迎える。
南京『中央日報』「五院院長以大義暁馮部将士」	南京浦口で孫文の霊柩列車を迎える。中国国民党中央党部礼堂で通夜当番に就く。
○42	5/29-5/31中国国民党、国民政府主催の公祭に出席。
○19(中山先生奉安戴院長之祭文), 42	
「総理奉安日本校校長及員生代表敬謹致祭訊」(広州『国立中山大学日報』第442号)	
	封棺典礼に出席。
南京『中央半月刊』第2巻第19期	
張振之『目前中国社会的病態』(上海:民智書	
○42	総理奉安大典に出席。
『広州民国日報』「戴季陶贈中大同学序」○35, 36	主な転載箇所:「戴校長贈畢業同学序」(広州『国立中山大学特刊』国立中山大学第三届畢業紀念特刊, 1929/6/29付)。
	中国国民党三期二中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団に任命。
○35	
	三期中執会17次常会は戴季陶に(1)党報登記条例草案の検討、(2)党員の留学について検討を命じる。9/2三期中執会32次常会は戴季陶などの報告を採択。
南京『中央日報』「二中全会決議案之意義」	主な転載箇所:「二中全会決議案之意義」(『広州民国日報』「代論」1929/7/4付)。三期中執会18次常会は戴季陶などに中国国民党各級童子軍改組計劃草案の検討を命じる。
南京『中央日報』「戴季陶対中訓部全体之訓詞」	
『広州民国日報』「各方一致通電留閻」	主な転載箇所:『最新党国名人公牘類編』。
	三期中政会第184次会議は戴季陶などに中国国民党三期二中全会から移された議案の検討を命じる。
	三期中執会19次常会は(中国国民党)中央党務学校を中央政治学校に改称、改組。7/22、三期中執会26次常会は戴季陶を中央政治学校校務委員に任命。
	国民政府国務会議は戴季陶を総理陵園管理委員会委員に任命。
○19	
	三期中政会第185次会議は戴季陶などに票據法原則の検討を命じる。
○29, 30	戴季陶はこの講演で南国社に対し、南国社が計画していた「孫中山之死」公演の中止を要請。田漢(南国社)は戴季陶に抗議。
	中東路事件勃発。
『広州民国日報』「中宣部招待美記者団」	7/4-7/23の間、三期中政会第186次会議は戴季陶などに省政府組織法の検討を命じる。
	三期中執会24次常会は戴季陶などに中央執行委員会政治会議の小組設置に関する条例の検討を命じる。
	総理奉安専刊編纂委員会委員に任命される。
黄恵龍叙述, 陳鉄生潤辞『中山先生親征録』	ソ連、国民政府と国交断絶を宣言。
	三期中執会25次常会は戴季陶などに全国国民廃除不平等条約促進会組織大綱案の検討を命じる。
南京『中央日報』○20(論中俄問題), 31(同前)	主な転載箇所:戴伝賢「対於中俄絶交之意見」(南京『中央週報』第61期, 1929/8/5付);戴季陶「中俄絶交後国民応有之態度与努力方針」(南京『中央半月刊』第2巻第11期, 1929/?/?付)。日本語訳:戴天仇「露国の横暴に起つ」沈観鼎訳(東京『外交時報』第594号, 1929/9/1付)。
南京『中央日報』「中央及国府紀念週中, 対於中俄問題之報告」	参考資料:「戴季陶向記者発表対中俄絶交之意見」(南京『中央日報』1929/7/22付);「中央及国府紀念週中　対於中俄問題之報告▲戴伝賢謂吾人須努力鞏固国基」(南京『中央日報』1929/7/23付)。
○35	6/27、三期中執会19次常会は戴季陶などに党証党徳之標準案の検討を命じる。

1929/7/24		
1929/7/25		
△1929/7/28	【著作】致中央秘書長赴浙会商二五減租案起程日期書	
△1929/7/30▲1929/8/1	【講演・談話記録】〈*浙江省二五減租案について, 杭州にて〉	
△1929/7▲1929/8	【書画】〈*太虚に頼まれて〉	戴伝賢
△1929/8/1▲1929/8/5	【講演・談話記録】〈*西湖博覧会にて〉	
▲1929/8/12	【著作】大学布告	戴伝賢, 朱家驊〈*代行:沈鵬飛〉
△1929/8/10▲1929/10/20	【講演・談話記録】〈*宋慶齢との会談, 上海にて〉	
△1929/8/13?▲1929/8/14	【講演・談話記録】〈*南京にて〉	
1929/8/15		
1929/8/21		
1929/8/22, 8/29		
1929/8/24		
△1929/8/26?▲1929/8/27	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	
1929/8/28		
△1929/8/29▲1929/8/30	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の南京和約国恥紀念会にて〉	
▲1929/9	【著作】呈中央常務委員会請核議出版条例原則草案呈為呈請事案奉	戴季陶, 陳立夫
1929/9/2		
1929/9/5		
△1929/9/7▲1929/9/8	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の辛丑条約国恥紀念大会にて〉	
△1929/9/11▲1929/9/12	【講演・談話記録】〈*監察院正副院長の就職典礼にて〉	
1929/9/12		
1929/9/19		
△1929/9/20▲1929/10/2	【著作】〈*廖言揚の墓誌〉	戴伝賢
▲1929/9/21	【著作】〈*中山大学新校舎建設の必要性について〉	戴伝賢
△1929/9/23▲1929/10/3	【著作】〈*陳真如、陳伯南宛の書簡, 南京の宝華山より〉	戴伝賢
△1929/9/23▲1929/10/20	【著作】〈*沈雲程〈*沈鵬飛〉宛の書簡, 南京の宝華山より〉	戴伝賢
△1929/9▲1930/8	【著作】〈*沈覲鼎訳『全訳三民主義』の序〉	戴伝賢
△1929年秋▲1929/10	【書画】〈*『上海時論』に頼まれて〉	戴伝賢
△1929/10/10▲1929/10/10	【書画】〈*南京『中央週報』に頼まれて〉	戴伝賢
△1929/10/11▲1929/10/12	【講演・談話記録】〈*西北の情勢について, 中国国民党中央党部主催の総理倫敦蒙難33週年紀念会にて〉	
△1929/10/15	【講演・談話記録】個人求学的経過及対于青年学生的希望講詞〈*浙江省立第三中学校(呉興県)にて〉	
△1929/10/23▲1929/10/28	【著作】国民政府四院長為最近時局告全国国民	譚延闓, 胡漢民, 戴伝賢, 趙戴文
1929/10/24		
△1929/10/26▲1929/10/28	【講演・談話記録】〈*時局について, 上海にて〉	
1929/10/30		
△1929/10/?▲1930/11	【講演・談話記録】統一的民族性基於統一的教育〈*中央陸軍軍官学校にて〉	戴季陶
△1929/10/?	【講演・談話記録】向西北猛進的両大意義〈*中央陸軍軍官学校にて〉	戴季陶
△1929/10/?	【講演・談話記録】考試院的籌備成立和五院制的運用講詞〈*中央紀念週にて〉	
△1929/10/?	【講演・談話記録】党歌是精神教育的基礎講詞〈*中央陸軍軍官学校にて〉	
△1929/11/2	【著作】上中央執行委員会擬由本党購回日本熊本市宮崎民蔵宮崎寅蔵先生旧家為総理在日永久紀念提議案	
△1929/11/7▲1929/11/8	【著作】〈*閻錫山宛の書簡〉	譚延闓, 胡漢民, 戴伝賢, 趙戴文
1929/11/9		
△1929/11/12▲1929/11	【講演・談話記録】総理一生革命事業〈*中国国民党中央党部主催の総理誕辰紀念大会にて〉	
△1929/11/12▲1929/11/14	【講演・談話記録】〈*孫文の革命事跡について, 首都各界主催の総理誕辰紀念大会にて〉	
1929/11/13		
1929/11/14		
1929/11/21		
1929/11/22		

	三期中政会第188次会議は戴季陶に教育方案編製委員会組織大綱草案の検討を命じる。
	三期中執会27次常会は戴季陶などに党の僑務組織の整理について検討(召集人)を命じる。
○33	
南京『中央日報』「戴伝賢抵杭」	8/8、三期中執会29次常会は浙江省佃農二五減租暫行辦法を採択。
『海潮音』第10巻第7号	
南京『中央日報』「戴季陶在西湖博覧会中之演詞」	三期中執会28次常会は戴季陶などに登記を行っていない党員の処理について検討を命じる。9/19三期中執会36次常会は報告を採択。
広州『国立中山大学日報』第475号	
“Madame Sun Yat-sen Speaks”(Peiping“*China Tomorrow*”Vol.1 No.12)	鈕有恒とともに、上海に宋慶齢を訪問。漢語訳:「孫夫人与戴伝賢談話筆記」1929/11/7訳(天津『大公報』1929/12/12付)。
南京『中央日報』「戴宋鹿熊昨晩来京」	不詳。
	三期中執会30次常会は戴季陶に、(1)僑務委員会管轄の招待所の名称と3箇所(厦門、汕頭、上海)の増設について検討(召集人)、(2)江蘇省党部の紛糾に関する検討、を命じる。
	三期中政会第192次会議は戴季陶を中央執行委員会政治会議の経済組委員、法律組委員、教育組委員(主持委員)に任命。その後改組を行い、1931/6、戴季陶を経済組委員、法制組委員(召集人)、教育組委員に任命。
	三期中執会談話会、三期中執会31次常会は戴季陶を裁兵協会籌備委員会委員に任命。
	江蘇省執行委員会(鎮江)を訪問。
南京『中央日報』「最近党務糾紛的原因」	
	三期中政会第193次会議は戴季陶を全国運動大会会長に任命。
南京『中央日報』「中央党部昨晨挙行南京和約紀念会」	
南京『中央党務月刊』第14期	
	三期中執会32次常会は戴季陶が提議した「商会組織之原則及新商法運用之方法要点」案を採択。
	三期中執会33次常会は戴季陶を中央(執行委員会)党義教師検定委員会委員に任命。また、戴季陶、蒋介石、胡漢民、孫科、宋子文などに国立中山大学の新校舎建設の検討を命じる。9/14、戴季陶は蒋介石、胡漢民、孫科、宋子文などと国立中山大学の新校舎建設について会談。9/23、三期中執会37次常会は国立中山大学の維持、建設に関する辦法を採択。
南京『中央日報』「中央昨挙行辛丑条約国恥紀念会」	
南京『中央日報』「監察院正副院長就職」	総理陵園管理委員会第6次会議(南京)に出席。同会は戴季陶を園林設計委員会委員に任命。
	三期中執会35次常会は戴季陶などに蒙蔵訓練班卒業生の工作計劃と経費の検討を命じる。
	三期中執会36次常会は戴季陶を中央派遣党員留学考選委員会委員に任命。
「戴校長為廖生撰墓誌」(広州『国立中山大学日報』第507号)	
「戴校長向中央條陳整理本校概略」(広州『国立中山大学日報』増刊<*第498号>)○29(呈遡陳中山大学校舎朽壊経費困難情形請指撥款項修理並批准新予算通過建築校舎計劃文)	
「戴校長与陳主席陳総指揮商議校事書」(広州『国立中山大学日報』第508号)	三期中執会37次常会は「関於中山大学之維持及建設事宜辦法」を採択し、戴季陶を国立中山大学董事会主任董事に任命。
『広州民国日報』副刊「民国画報」「戴季陶先生最近之墨蹟」	
沈覲鼎訳『全訳三民主義』	日本語訳:「戴季陶の筆蹟」(東京『中国』第62号,1969/1)7頁。
『上海時論』第4巻第10号	
南京『中央週報』第70期「国慶紀念号」	
南京『中央日報』「中央党部昨挙行総理倫敦蒙難紀念会」	
○29	
南京『中央週報』第73期	日本語訳:「四院長の時局通電」(北平『北京週報』第370号,1929/10/27付)。
	三期中執会43次常会は戴季陶に、中央執行委員会政治会議に小組を設ける案の検討を命じる。
『広州民国日報』「戴院長謂西北不足平」	
	三期中政会第202次会議は戴季陶などに全国民食問題の研究組織設置について検討を命じる。
南京『中央月刊』第3巻第1期○29(国民教育与軍事教育講詞),30	
○22,40	
○29,30,41	
○29,30	
○33	11/4、三期中執会46次常会は同案を採択。
『広州民国日報』「賀閻」	
	華僑教育会議閉幕典礼(南京)に出席。
南京『中央党務月刊』第16期	
『広州民国日報』「首都各界総理誕辰紀念会盛況」	
	三期中政会第204次会議は戴季陶を中政会外交組委員に任命。
	三期中執会48次常会は戴季陶、劉紀文を中国国民党軍の慰問に「西北」<*実際は河南省>に派遣することを決議。
	南京発。
	鄭州着。第五站医院に負傷兵を慰問。人民大会場で講演。洛陽に向かう。

▲1929/11/30	【講演・談話記録】〈*馮玉祥軍の将士に対して,洛陽にて〉	戴伝賢,劉紀文
△1929/11/24▲1929/12/3-12/4	【講演・談話記録】〈*洛陽にて〉	
△1929/11/25▲1930/10	【講演・談話記録】復興中国文化的道路〈*鄭州普楽園拡大紀念週にて〉	戴季陶
△1929/11/25▲1930/10	【講演・談話記録】救済西北与開発西北〈*開封にて〉	戴季陶
1929/11/26		
▲1929/11/27	【著作】〈*国民政府宛の書簡〉	
△1929/11/27▲1931/4	【講演・談話記録】東北西北西南三個問題的総解決〈*中国国民党湖北省党部(武漢)にて〉	
△1929/11/27	【講演・談話記録】童子軍教育最大的任務〈*武昌秋季運動会にて〉	
△1929/11/27?▲1929/11/28	【講演・談話記録】〈*河南視察の感想,武漢にて〉	
△1929/11/28▲1929/11/29	【講演・談話記録】〈*河南視察の感想,南京にて〉	
▲1929/11/?	【著作】〈*四川各軍長宛の書簡〉	
△1929/12/2▲1929/12/3	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第30次紀念週にて〉	
1929/12/18		
△1929/12/19▲1929/12/20	【講演・談話記録】考試院工作之困難点〈*考試院職員に対して〉	
△1929/12/20▲1929/12/21	【講演・談話記録】〈*内政について,南京にて〉	
△1929/12/25▲1931/7	【講演・談話記録】開発西北的重要与其下手〈*西北工作人員に対して〉	戴季陶
1929/12/26		
△1929/12/30▲1929/12/31	【講演・談話記録】不学礼無以立講詞——対来京之広州市童子軍教練赴日考察団訓話	
△1929/12/?	【著作】指定人員組織官制官規討論会着手研究起草之指示	
▲1928-1929	【書画】民俗学問題格	戴伝賢
1929		
▲1930/1	【著作】考試権之理論的根拠及考試院的組織	戴伝賢
▲1930/1	【著作】考試院工作紀実与進行計劃	戴伝賢
▲1930/1	【書画】〈*『考試院月報』の表紙・中扉の題字〉	戴伝賢
△1930/1/1▲1930/1/1	【書画】〈*首都建設について〉	
△1930/1/1▲1930/1/4	【著作】〈*中山大学新校舎の建設について〉	戴伝賢
△1930/1/1▲1930/1	【書画】〈*海潮音社に頼まれて〉	戴伝賢
△1930/1/6▲1930/1/7	【講演・談話記録】〈*考試院の成立典礼にて〉	
△1930/1/13〈*もしくは14〉▲1930/1/17	【講演・談話記録】〈*考選委員会の会議にて〉	
1930/1/14〈*もしくは15〉		
1930/1/18		
△1930/1/20?▲1930/1/21	【講演・談話記録】〈*中山大学の紀念週にて〉	
△1930/1/20?▲1930/1/21	【講演・談話記録】〈*中山大学附設中学校の童子軍に対して〉	
△1930/1/20?▲1930/1/21	【講演・談話記録】〈*中山大学附設中学校の全校生徒に対して〉	
△1930/1/24▲1930/1/27	【著作】〈*蒋介石、譚延闓、胡漢民、孫科、宋子文宛の書簡〉	
△1930/1/25▲1930/1/27	【講演・談話記録】〈*中国国民党広州市党部宣伝部主催の集会にて〉	
△1930/1/27▲1930/1/27	【講演・談話記録】〈*中国国民党広東省党部、広州市党部聯合の紀念週にて〉	
△1930/1/?	【講演・談話記録】考試制度中教養人材的問題講詞〈*中山大学にて〉	
△1930/1?	【講演・談話記録】中山大学所負的歴史的使命講詞〈*中山大学にて〉	
△1930/1?	【講演・談話記録】中山大学新校舎建設的計劃講詞〈*中山大学にて〉	
△1930/1?	【講演・談話記録】中山大学法科的建設講詞〈*中山大学にて〉	
△1930/1/?	【著作】在考試未挙行前院会部任用人員応注意之事項	
△1930/2/10?▲1930/2/11	【講演・談話記録】〈*中山大学の紀念週にて〉	
1930/2/13		

南京『中央日報』「戴劉電討逆将士」	鞏県站、孝順站を経て洛陽着。労軍授旗(「為民前鋒」旗)典礼と講演。鄭州に向かう。
南京『中央日報』「戴季陶在洛陽授旗時講慰労将士意義」○22(西北文明之再造),40(同前)	主な転載箇所:戴季陶「慰労西北前方将士的意義」(南京『中央週報』第79期,1929/12/9付);戴季陶「再造中国黄金時代的繁栄」(南京『中央半月刊』第2巻第16期,1929/?/?付)。
○22,40	許昌に向かう。
上海『新亜細亜』創刊号○22,40	三期中執会51次常会に対し、考試院のこれまでの事業について書面報告を行う。
	武漢着。
南京『中央日報』「考試院組織臨時銓叙審査委員会」	
上海『新亜細亜』第2巻第1期	
○28,29	
南京『中央日報』「戴劉在漢談視察経過」	
南京『中央日報』「戴劉両委昨乗飛機回京」	武漢発。空路、南京着。
『海潮音』第10巻第10号「戴季陶先生致四川各軍長電」	
南京『中央日報』「戴伝賢報告西北労軍之感想」	
	三期中政会第209次会議は戴季陶を考試院考選委員会委員長に任命。1930/1/6就任。
南京『中央日報』○29(考試院創作工作的困難講詞),30(同前),41(同前)	
南京『中央日報』「考試院一月六日成立」	
上海『新亜細亜』第2巻第4期○22(開発西北工作之起点),40(同前)	三期中政会第210次会議は戴季陶を民食委員会委員に任命。
	三期中執会60次常会は戴季陶などに党史の編纂意見と党史編纂委員会組織方案の検討を命じる。
南京『中央日報』「戴季陶接見粤党童軍参観団」○28,29	
○33	
楊成志訳『民俗学問題格』	原著:Charlotte Sophia Burne“*The Handbook of Folklore*”1914(New ed.,revised and enlarged).
	山東省参議会議員王鴻一は1929年、三皇五帝が神話伝説上の存在で実存しないと顧頡剛が記述した『中学用本国史教科書』(商務印書館より発行予定)を弾劾して、これは「聖を非(そし)り法を無(なみ)する」ものであり、発行停止とすべきであると提案する(提案を執筆したのは北京大学の陳亜三)。戴季陶は当時中山大学校長であったが、この提案に対し、「中国が団結して一体となるには、人民がみな自分たちは一つの祖先から出たのだと信ずることが必要である。いま三皇・五帝が存在しなかったなどと言えば、全国人民が団結して一体とならんとする要求を分散させることになり、甚だ困ったことになる」。「民族問題は大きな問題であり、学者たちが自分の意見を討論しあうのは差支えないが、書店が出版する教科書となると、大量に発行されるから、それは犯罪となり、きびしく処分せねばならぬ」と述べたという。
南京『中央週報』新年増刊;南京『考試院月報』1930年第1期	
南京『中央週報』新年増刊	
南京『考試院月報』1930年第1期以降	
南京『中央日報』	
広州『国立中山大学日報』第582号	
『海潮音』第11巻第1号	
南京『中央日報』「考試院昨日正式成立」	三期中執会62次常会は戴季陶を党史史料編纂委員会委員に任命。考試院正式設立(南京)。
南京『中央日報』「考選委員会両次会議」	
	広州に向かう。
	中山大学着。
「昨日戴校長在校訓話」(広州『国立中山大学日報』第596号)	不詳。
「昨日戴校長在校訓話」(広州『国立中山大学日報』第596号)	不詳。
「昨日戴校長在校訓話」(広州『国立中山大学日報』第596号)	不詳。
「戴校長報告校務之敬(廿四)電」(広州『国立中山大学日報』第600号)	
「戴校長昨在大礼堂演講撤廃領権問題」(広州『国立中山大学日報』第600号)	不詳。
「戴校長昨在大礼堂演講撤廃領権問題」(広州『国立中山大学日報』第600号)	不詳。
○29,30,41	
○29	
○29	
○29	
○33	
「昨日両校長在礼堂講演」(広州『国立中山大学日報』第606号)	不詳。
	三期中執会73次常会は戴季陶を中国国民党党史史料編纂委員会常務委員に任命。

△1930/2/17?▲1930/2/18	【講演・談話記録】〈*中山大学の紀念週にて〉	
△1930/2/20▲1930/2/22	【著作】〈*同徳会宛の書簡〉	戴伝賢
△1930/2/22以前▲1930/3/1	【講演・談話記録】〈*閻錫山について，広州にて〉	
△1930/2▲1930/2	【著作】戴序〈*『国立中山大学一覧』の序〉	季陶戴伝賢
1930/3/1-3/6		
△1930/3/2▲1930/3/3	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
△1930/3/14▲1930/3	【著作】〈*何応欽宛の書簡〉	伝賢
△1930/3/?	【著作】呈中央執行委員会請辞訓練部長職務文	
△1930年仲春月▲1930/7	【著作】物質建設　建国方畧題表	戴伝賢
1930/3/31		
1930/4/1		
△1930/4/2	【講演・談話記録】現代体育競賽的意義講詞〈*第1次全国運動大会にて〉	
△1930/4/2	【講演・談話記録】体育為立国的基礎講詞〈*第1次全国運動大会にて〉	
△1930/4/?	【講演・談話記録】運動会的意義与参加運動会的責任講詞〈*第1次全国運動大会の各省代表男女選手歓迎会にて〉	
△1930/4/7▲1930/4/14	【講演・談話記録】和平統一与経済建設〈*浙江省党部拡大紀念週にて〉	戴季陶
△1930/仏生日(4/8)	【書画】六波羅密大要節録諸経論	戴伝賢
△1930/仏生日(4/8)	【著作】〈*六波羅密大要を書いて〉	伝賢
△1930/4/12	【講演・談話記録】全国運動大会閉会辞	
△1930/4/18▲1930/4/20	【講演・談話記録】童子軍教育是起死回生的教育〈*全国童子軍総検閲にて〉	
△1930/4/19▲1930/4/20	【講演・談話記録】教育会議与教育方案講詞〈*第2次全国教育会議にて〉	
△1930/4/20?▲1930/4/21	【講演・談話記録】〈*両江女校童子軍に対して〉	
△1930/4/21▲1930/4/22	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第56次総理紀念週にて〉	
△1930/4/21▲1930/4/22	【講演・談話記録】〈*全国童子軍に対して，中山陵にて〉	
△1930/4/21▲1930/4/22	【講演・談話記録】〈*中小学教育について，遼寧省新民教育参観団に対して〉	
△1930/4/22▲1930/4/23	【講演・談話記録】〈*全国童子軍総検閲の閉幕典礼にて〉	
△1930/4/23▲1930/4/24	【講演・談話記録】〈*第2次全国教育会議の閉幕典礼にて〉	
△1930/4/27	【著作】致鄭逸庵先生書	
△1930/5/1▲1930/5/5	【講演・談話記録】為五一節告実業家及工友〈*上海にて〉	戴伝賢
△1930年立夏後三日(5/9)	【著作】〈*自箴〉	伝賢
▲1930	【書画】孝園写経(第一)	王震ではないか
▲1930	【書画】〈*表白〉	
△1930/5/10▲1930/5	【書画】中国国民党党歌	戴伝賢
1930/5/11		
△1930/5/19▲1930/5/20	【講演・談話記録】〈*日本が進歩した原因について，中国国民党中央党部の第60次総理紀念週にて〉	
1930/5/22		
△1930/5/29▲1930/5/31	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の蒙古代表歓迎会にて〉	
△1930/5/?	【著作】塩政年鑑序	
△1930/6/1	【著作】劉通西君著蔵文初階序	
△1930/6/1	【著作】〈*犬養毅宛の書簡〉	戴伝賢
△1930/6/2▲1930/6/3	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の設立について，革命記念日の再検討について，中国国民党中央党部の第62次総理紀念週にて〉	
△1930/6/3▲1930/6/6	【講演・談話記録】〈*中国国民党浙江省第3次全省代表大会にて〉	
△1930/6/4▲1930/6/16	【講演・談話記録】目前中国的新生路〈*中国国民党浙江省第3次全省代表大会第7次会議にて〉	戴伝賢
1930/6/5		
△1930/6/14▲1930/6/17-6/21	【講演・談話記録】銀価低落〈*問題，〉与中国応取之方策〈*無線放送にて〉	
△1930/6/19▲1930/6/20	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央宣伝部主催の新聞記者招待会にて〉	
△1930/6/?	【講演・談話記録】建設第一	

「昨晨紀念週両校長出席報告」(広州『国立中山大学日報』第612号)	不詳。
「戴校長関心同徳会擬具改良要点六則」(広州『国立中山大学日報』第616号)	
南京『中央日報』「「閻錫山不足以語革命」——戴季陶在粤之談話」	
『国立中山大学一覧』	
	3/3南京着。3/3と3/5、中国国民党三期三中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を審査委員会委員(党務組の召集人、政治組、教育組)に任命。
南京『中央日報』「戴季陶今晨准到京」	
「全国訓練会議開会紀」(南京『中央党務月刊』第20期)	上海にて療養。3/15全国訓練会議(中国国民党訓練部)を欠席。
○35	
南京『考試院月報』1930年第7期	
	中国国民党浙江省党部と浙江省政府の総理紀念週(杭州)に出席。
	第1次全国運動大会(杭州)に大会組織委員長として出席。
○29, 30	
○29, 30	
○29	
南京『中央週報』第97期	
戴伝賢書『孝園写経(第一)』	
戴伝賢書『孝園写経(第一)』○29(節録六波羅密法要兼誌所感)	主な転載箇所:「孝園写経記」(『海潮音』第12巻第11号, 1931/11);「写六波羅密大要竟有感」(南京『新亜細亜』第13巻第2期, 1937/2)。
○29	
南京『中央日報』「童軍総検閲訓詞」○28, 29(以童子軍教育救中国講詞)	
南京『中央日報』「全国教育会議第五日」○29, 30	
南京『中央日報』「戴季陶昨対両江女童軍訓話」	
南京『中央日報』「戴伝賢報告最近的幾件大事」○29(五件大事的平議講詞)	主な転載箇所:戴季陶「最近的幾件大事」(南京『中央半月刊』第2巻第21期)。
南京『中央日報』「童軍総検閲今晨閉幕」	
南京『中央日報』「遼寧新民教育団昨日参観中央党部」	
南京『中央日報』「全国童軍総検閲閉幕」	
南京『中央日報』「全国教育会議昨閉幕」	
○29	
南京『中央週報』第100期○29(中国国家的生存与中国工人的生存講詞), 30(同前)	主な転載箇所:戴伝賢「告実業家及工友」(南京『中央党務月刊』第22期, 1930/5)。
戴伝賢書『孝園写経(第一)』	
戴伝賢書『孝園写経(第一)』	
戴伝賢書『孝園写経(第一)』	
南京『考試院月報』1930年第5期	
	「中原大戦」勃発。3/15馮玉祥、閻錫山、李宗仁など、蒋介石に対抗。10/9馮玉祥など敗退。
南京『中央日報』「中央第六十次総理紀念週」	
	三期中執会93次常会は戴季陶などに革命紀念日簡明表および革命紀念日紀念儀式の検討を命じる。また戴季陶を中央資助党員升学審査委員会委員、中央派遣党員留学考選委員会委員に任命。
南京『中央日報』「中央党部歓宴蒙代表」	主な転載箇所:「招待蒙古会議代表」(南京『中央党務月刊』第23期, 1930/6)。三期中執会94次常会は戴季陶などに甄選県長方案の検討(召集人)を命じる。
○33	
○29	
陳固亭「戴季陶致犬養毅書」○33(致日本犬養毅先生書)	
南京『中央日報』「昨日中央紀念週」	
南京『中央日報』「中委戴季陶氏対浙省三全代会之訓詞」	主な転載箇所:戴伝賢「全省代表大会是一省訓政時期的総教師」(南京『中央週報』第105期, 1930/6/9付);戴伝賢「全省代表大会是一省訓政時期的総導師」(南京『中央党務月刊』第23期, 1930/6)。6/12、三期中執会96次常会で復命。
南京『中央週報』第106期	主な転載箇所:南京『中央党務月刊』第23期, 1930/6。
	三期中執会95次常会は戴季陶を中央党部の官舎建設に関する籌備委員会委員(召集人)に任命。また戴季陶に「華僑勧学委員会組織規定」条文の整理を命じる。
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「銀価低落与中国応取之方策」(南京『中央週報』第107期, 1930/6/23付);戴季陶「銀価低落与中国応取之方策」(南京『中央半月刊』第2巻第23期);戴伝賢「銀価低落問題与中国応取之方策」(南京『中央党務月刊』第23期, 1930/6)。
南京『中央日報』「中宣部昨招待新聞界」	主な転載箇所:戴伝賢「経済建設為当今要図」(南京『中央週報』第108期, 1930/6/30付)。
南京『中央半月刊』第2巻第24期	主な転載箇所:戴季陶「建設第一」(上海『新亜細亜』第4巻第1期, 1932/5)。

△1930/6/30▲1930/7/7	【講演・談話記録】革命使命在建設成功〈*中央党部の総理紀念週にて〉	戴伝賢
1930/7/3		
△1930/7/9▲1930/7/11	【講演・談話記録】〈*国民政府の国民革命軍北伐誓師4週年紀念大会にて〉	
1930/7/17		
△1930/8/4▲1930/8/5	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第71次総理紀念週にて〉	
△1930/8/〈*10〉▲1932/4	【著作】戴序〈*華企雲著,張振之編『中国辺疆』〉	戴伝賢
1930/8/21		
1930/8/23		
△1930/8/25▲1930/8/26	【講演・談話記録】〈*前線将士の慰労の出発前に,浦口駅にて〉	
1930/8/26		
△1930/8/30▲1930/8/31	【講演・談話記録】〈*済南にて〉	
△1930/8/30▲1930/9/1	【講演・談話記録】〈*中国国民党山東省党部(済南)にて〉	
1930/9/1		
1930/9/2		
△1930/9/5▲1930/9/6	【講演・談話記録】〈*前線より帰京して,浦口駅にて〉	
△1930/9/8▲1930/9/9	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第76次総理紀念週にて〉	
△1930/9/8▲1930/9/9	【著作】慰労前方将士経過〈*中国国民党中央執行委員会への復命書〉	戴伝賢,劉紀文
△1930/9/12▲1930/9/16	【著作】〈*沈雲程、陳真如宛の書簡〉	伝賢
△1930/9/17	【著作】致中山大学同学書	戴伝賢
△1930/9/18▲1930/9/20	【著作】〈*中山大学各科、部、院、処、館、場、所、附校の主任宛の書簡〉	戴伝賢
△1930/9/20▲1931/8	【講演・談話記録】西康建設之開創〈*中国国民党中央政治学校附設西康学生特別訓練班の学生に対して〉	戴季陶
△1930/9/28▲1931/3	【講演・談話記録】如何建設欧亜交通骨幹之徐州〈*中国国民党徐州市党部にて〉	戴季陶
△1930/9/29▲1930/10/2	【著作】〈*朱家驊宛の書簡〉	伝賢
△1930/9/29▲1930/10/6	【著作】〈*朱家驊と中山大学教職員、学生宛の書簡〉	戴伝賢
▲1930/10/6	【著作】〈*教育部、行政院、国民政府、中央政治会議宛の書簡〉	戴伝賢
△1930/9/?	【著作】批引港員考試条例草案	
△1930/9▲1930/10	【著作】考試院図書館基石之銘	戴伝賢
△1930年初秋▲1930/11	【著作】遊泰山作	伝賢
▲1930/10	【著作】民生的物質建設之初歩	戴季陶
△1930/10/1▲1930/10/2	【著作】〈*中山大学教職員、学生宛の書簡〉	戴伝賢
△1930/10/10▲1930/11	【著作】中日俄三民族之関係	伝賢
△1930/10/10	【講演・談話記録】国術運動与道徳基礎講詞〈*中央国術館にて〉	
△1930/10/10	【著作】雲　　楼印譜序	
△1930/10▲1930/10/22	【書画】〈*蒋介石の凱旋を祝って〉	戴伝賢
△1930/10/22▲1930/10/24	【講演・談話記録】〈*首都各界主催の蒋総司令、前線将士の凱旋歓迎大会にて〉	
△1930/10/?	【著作】批銓叙部請示「書記一職擬不以委任官甄別」案	
△1930/11/9	【講演・談話記録】宗教与人生〈*上海基督教青年会主催の第2期学術講演会にて〉	戴季陶
1930/11/12-11/18		
△1930/11/12▲1930/11/13	【講演・談話記録】〈*国民政府主催の総理誕辰紀念慶祝大会にて〉	
1930/11/24		
△1930/11▲1931/4	【著作】東方民族与東方文化	戴伝賢
△1930/11/?	【著作】批考選委員会呈擬規劃第一届高普考試案	
▲1930/12	【著作】関於地方自治幹部人員養成之意見	戴伝賢
△1930/12/8?▲1930/12/9	【講演・談話記録】〈*政府各機関の工作で改良すべき点について,国民政府の総理紀念週にて〉	
△1930/12/8▲1930/12/10	【著作】〈*拒金迎戴(金曾澄を拒否し戴季陶を歓迎する)運動を止めよ,中山大学教職員、学生宛の書簡〉	伝賢
△1930/12/8-12/22	【著作】〈*拒金迎戴運動を止めよ,中山大学学生宛の書簡〉	
△1930/12/15▲1930/12/16	【講演・談話記録】〈*党務の反省と目標,中国国民党中央党部の第90次総理紀念週にて〉	
△1930/12/15▲1930/12/16	【講演・談話記録】〈*銓叙部部長の就職典礼にて〉	

南京『中央週報』第109期	主な転載箇所:戴伝賢「革命使命在建設成功」(南京『中央党務月刊』第24期,1930/7)。
	三期中執会99次常会は戴季陶に沈縵雲を顕彰する具体方策の検討を命じる。
南京『中央日報』「中央国府挙行北伐誓師四週年紀念」	主な転載箇所:戴伝賢「我們応作拯救北方民衆目前最急的準備」(南京『中央週報』第110期,1930/7/14付)。
	三期中執会101次常会は戴季陶などを沈縵雲先生紀念碑建立の籌備委員会委員に任命。
南京『中央日報』「昨日中央紀念週戴委員対時局之報告」	主な転載箇所:戴伝賢「如何根本消弭共禍」(南京『中央週報』第114期,1930/8/11付);戴伝賢「対於目前時局的分析」(南京『中央党務月刊』第25期,1930/8)。
華企雲著,張振之編『中国辺疆』○29(中国辺疆之実況序)	主な転載箇所:戴伝賢「中国辺疆之実況序言」(上海『新亜細亜』第1巻第5期,1931/2)。
	三期中執会106次常会は戴季陶、劉紀文を中国国民党軍の慰問に派遣することを決議。
	譚延闓、古応芬とともに立法院に胡漢民を訪問。
南京『中央日報』「戴劉両委員昨日北上」	南京発。羅家倫同行。徐州を経て、帰徳に蒋介石を訪問。
	柳河着。
南京『中央日報』「戴劉両委員昨抵済南」	鄒県、兗州を経て済南着。
南京『中央日報』「戴季陶劉紀文今返京」	不詳。
	中国国民党中央執行委員会拡大会議(北平)は「国民政府組織大綱」を採択。国民政府委員閻錫山(主席)、汪精衛、馮玉祥、李宗仁など。9/9国民政府設立(北平)。9/20中国国民党中央執行委員会拡大会議は太原に移転。10/27同会議は約法草案を採択。
	泰安、曲阜、兗州を経て、徐州着。
南京『中央日報』「戴季陶劉紀文昨返京」	帰徳、徐州を経て、南京着。
南京『中央日報』「昨日中央紀念週」	主な転載箇所:戴伝賢「慰労前方将士経過」(南京『中央週報』第119期,1930/9/15付)。
南京『中央日報』	
「戴董事長電告董事会決議案」(広州『国立中山大学日報』第751号)	
広東省档案館・全宗号20(中山大学)・目録号9・案巻号7(1)・標題「中大鄒校長戴伝賢告同事、同学書,教育部訓令,大事記,募捐情況及函件,報告」	
「戴校長通啓」(広州『国立中山大学日報』第755号)	国立中山大学校長を辞任。
上海『新亜細亜』第2巻第5期	
上海『新亜細亜』第1巻第6期	
「朱校長昨日就職」(広州『国立中山大学日報』第765号)	
「戴校長臨別贈言」(広州『国立中山大学日報』第768号)	
「戴校長辞職原呈」(広州『国立中山大学日報』第768号)	
○33	
南京『考試院月報』1930年第10期	
上海『新亜細亜』第1巻第2期	
上海『新亜細亜』創刊号	
「戴校長通啓」(広州『国立中山大学日報』第765号)	
上海『新亜細亜』第1巻第2期○29	
○29,30	
○29	
南京『中央日報』	
南京『中央日報』「首都各界熱烈挙行祝捷及歓迎凱旋大会」	
○33	
	不詳。上海基督教青年会主催の第2期学術講演会(総題「宗教与人生」)(全9回)の1回に当たる。
	中国国民党三期四中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団に任命。
南京『中央日報』「万衆歓騰慶祝総理誕辰紀念」	
	三期中執会116次常会は戴季陶の中国国民党訓練部部長辞任を承認し、戴季陶などに召集国民会議方案の起草を命じる。
上海『新亜細亜』第2巻第1期○29(内外蒙古考察日記序)	主な転載箇所:「戴序」(馬鶴天『内外蒙古考察日記』)。
○33	
南京『考試院月報』1930年第12期○29,30	12月、第一次囲剿戦の開始。
南京『中央日報』「国府紀念週」	
南京『中央日報』「戴院長電粤中大師生」	
○29(致中山大学諸同学書)	参考資料:『近代中国高等教育研究——国立中山大学(1924～1937)』108-110頁。
南京『中央日報』「本党明年応進行工作」○29(今後応做的建設工作)	主な転載箇所:戴伝賢「本党明年応進行之工作」(南京『中央週報』第133期,1930/12/22付);戴伝賢「明年応進行之工作」(南京『中央党務月刊』第29期,1930/12)。
南京『中央日報』「鈕永建昨就銓叙部長」	考試院考選委員会委員長を辞任。

△1930/12/20▲1930/12/21	【講演・談話記録】〈*中央大学校長の就職典礼にて〉	
△1930/12/20▲1930/12/21	【講演・談話記録】〈*第2期立法院開会式にて〉	
△1930/12/20	【講演・談話記録】中国教育之根本建設講詞	
▲1930/12/21	【著作】戴伝賢啓事	戴伝賢
△1930/12/22▲1930/12/25	【著作】〈*拒金迎戴運動を止めよ,沈鵬飛宛の書簡〉	戴伝賢
▲1930/12/25	【著作】〈*中山大学評議会宛の書簡〉	
1930/12/26		
▲1930/12/29	【著作】戴伝賢啓事	戴伝賢
△1930/12/29▲1930/12/30	【講演・談話記録】〈*来年の国民政府の施政計画について,国民政府の総理紀念週にて〉	
△1930/12/29▲1930/12/30	【講演・談話記録】〈*主計処籌備主任の就職典礼にて〉	
△1930/12/?	【著作】対修正高等考試普通行政人員考試条例草案中科目之指示	
△1930	【講演・談話記録】国産絲綢業的衰落与救済講詞〈*浙江省呉興県にて〉	
△1930	【著作】批引水人考試暫行条例草案	

南京『中央日報』「中央大学校長朱家驊昨晨宣誓就職」	
南京『中央日報』「立法委員昨挙行開会式」	
○29,30	
南京『中央日報』	
南京『中央日報』「戴院長最後警告粤中大学生」	
「戴主任董事最近来電匯誌」(広州『国立中山大学日報』)	
	駐南京領事上村伸一は沈覲鼎と、1931年1月末の戴季陶の訪日について会談。外務省記録『各国名士ノ本邦訪問関係雑件　中華民国人ノ部　第一巻』第951号(駐南京領事上村伸一より外務大臣幣原喜重郎宛)1930/12/27付(東京:外務省外交史料館,L.3.3.0.8-1)。
南京『中央日報』	
南京『中央日報』「三月内消滅三省匪共」	三期中執会121次常会は蒋介石、胡漢民、孫科、戴季陶などが提議した国民会議代表選挙法草案を修正の上採択。1936/2/20、五期中執会6次常会は国民大会代表選挙法原則を修正の上採択。
南京『中央日報』「主計処籌備主任陳其采昨宣誓就職」	
○33	
○29	
○33	

△1931/1/1▲1931/1/1	【著作】戴院長元旦日告同人書	戴伝賢
△1931/1/1▲1931/1/1	【著作】本年応做的建設工作	戴伝賢
△1931/1/1▲1931/4	【著作】勗西康諸生	戴伝賢
△1931/1/1	【書画】血濃於水〈*『台湾民報』に寄せて〉	戴伝賢
1931/1/2以前		
△1931/1/6▲1931/5	【講演・談話記録】実業計画与国防計画〈*上海から香港へのSphinx号にて〉	戴季陶
△1931/1/6▲1932/2	【講演・談話記録】三民主義講稿之研究〈*Sphinx号にて〉	戴季陶
△1931/1/6▲1932/3	【講演・談話記録】関於孫文学説〈*Sphinx号にて〉	戴季陶
△1931/1/7?▲1931/1/9〈*もしくは20〉	【講演・談話記録?】〈*拒金迎戴運動を止めよ,中山大学学生に対して〉	戴季陶
△1931?/1/8	【著作】致李潤章先生書	
1931/1/15		
△1931/1/19	【講演・談話記録】統一童子軍組織〈*広州市童子軍領袖に対して,中国国民党広東省党部にて〉	
△1931/1/21▲1932/7	【講演・談話記録】中国的経済建設与教育建設〈*中山大学法科経済研究会、文科教育研究会主催の集会にて〉	戴季陶
△1931/1/22▲1936/11	【著作】提議拡充医薬衛生教育以救民族之衰微而立民生之基本文	
1931/1/23		
△1931/1/?▲1931/9	【講演・談話記録】中国之統一与復興〈*中山大学附設中学校にて〉	戴季陶
△1931/1/?	【講演・談話記録】〈*白雲山公安橋(広州)の通車典礼にて〉	
△1931/1/?	【講演・談話記録】〈*デューイJohn Deweyとの会談,嶺南大学(広州)にて〉	
△1931/1/?	【講演・談話記録】〈*仲愷農工学校にて〉	
△1931/1/?	【講演・談話記録】〈*第一女子師範学校(広州)にて〉	
△1931/1/?	【講演・談話記録】〈*広東省保安隊教練所(広州)にて〉	
△1931/1/?	【講演・談話記録】〈*海軍鷹飛班の開学典礼(軍艦・鷹飛)にて〉	
△1931/1/29▲1932/6	【講演・談話記録】中国文在世界上之地位及其価値〈*香港大学にて〉	戴季陶
△1931/1/?	【著作】挙行本院職員及警士考課之指示	
△1931/1/?	【著作】対建議制定勳功栄典案之指示	
△1931年孟春月▲1931/5/9	【著作】隆昌寺復名記	戴伝賢
△1931/2/19以前	【著作】中国童子軍歌	
△1931/2/19以前	【著作】中国童子軍(的)偉大精神歌	
△1931/2/19以前	【著作】同舟共済歌	
△1931/2/19以前	【著作】日行一善歌	
△1931/2/19以前	【著作】野火歌	
1931/2/23		
△1931/2/24▲1931/3	【著作】呈中央執行委員会請令河北省政府北平市政府籌建彭家珍及北平辛亥死難諸先烈墳墓並紀念堂提案文	
△1931/2/?	【著作】批銓叙部呈擬「另訂雇員特種甄別条規」案	
△1931/3/2▲1931/3/3	【講演・談話記録】〈*国民会議について,中国国民党中央党部の第101次総理紀念週にて〉	
△1931/3/2▲1931/3/3	【講演・談話記録】〈*国民会議選挙総事務所主任の就職典礼にて〉	
△1931/3/4	【著作】致孫夫人〈*宋慶齢〉書	
1931/3/5		
1931/3/8		
1931/3/19		
1931/3/?		
△1931年新春	【著作】題鍾国楼君杜甫研究	
▲1931/4	【書画】新亜細亜	伝賢
1931/4/2-5/18		
1931/4/9		
△1931/4/12▲1931/4/13	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の清党4週年紀念大会にて〉	
1931/4/16		
△1931/4/25▲1931/4/28	【著作】〈*曲阜孔子林廟修復のための募捐について〉	戴伝賢など
△1931/4/27▲1931/4/28	【講演・談話記録】国民会議籌備経過〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
1931/4/30		
1931/5/1-5/2		
1931/5/5		
1931/5/6-5/7		
△1931/5/8▲1931/5/9	【講演・談話記録】〈*約法草案について,国民会議第1次会議にて〉	
1931/5/8-5/17		
△1931/5/10▲1931/6	【講演・談話記録】新亜細亜学会之使命〈*新亜細亜学会成立大会(第1次会員大会),考試院にて〉	戴季陶
△1931/5/17▲1931/5/18	【講演・談話記録】〈*国民会議の閉幕典礼にて〉	
1931/5/27		
▲1931/6	【著作】国際形勢下之中国的辺疆開発	
△1931/6/1▲1931/6/3	【講演・談話記録】〈*首都各界主催の約法公布の慶祝大会にて〉	
△1931/6/1▲1931/6/1	【著作】〈*約法公布を祝って〉	戴伝賢
1931/6/5		
△1931/6/7▲1936/6	【著作】班禅大師説六字大明真言法要	
△1931/6/7▲1931/8	【著作】中蔵思想溝通之重要	戴季陶
△1931/6/10▲1931/8	【著作】贈班禅大師	戴伝賢
△1931/6/12	【著作】〈*国民政府会議宛の書簡〉	戴伝賢
1931/6/13-6/15		
△1931/6/16▲1931/6/17	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の総理広州蒙難9周年の記念会にて〉	
△1931/6/18▲1931/6/21	【著作】〈*測験学会に対して〉	戴伝賢
△1931/6/20▲1931/6/24-6/26	【講演・談話記録】蒙蔵華僑学生之使命〈*中央政治学校附設蒙蔵華僑学生特別訓練班の畢業典礼にて〉	戴季陶
△1931/6/22-6/23	【著作】跋〈*孫文から焦易堂宛の書簡を照合して記す〉	戴伝賢
1931/6/25		

南京『考試院公報』1931年元旦号	張振之とともに南京発。広州に向かう。
南京『中央日報』民国二十年元旦特刊;南京『考試院公報』1931年第1期○29(関於二十年份応行建設之計劃)	主な転載箇所:戴伝賢「本年応做的建設工作」(『上海時論』第6巻第1号,1931/1;上海『新亜細亜』第1巻第4期,1931/1)。
蒋用宏、劉覚民編『政治講演集』	
「国民革命与台湾光復図輯」(台北『近代中国』第19期,1980/10)	
	駐中華民国臨時代理公使重光葵は南京滞在中、林出賢次郎に命じて沈観鼎と戴季陶の訪日について会談させる。林出は沈に「我方ニテハ小幡公使「アレグマン」問題ニ関シ当時戴氏ノ努力ニ期待スルモノ多カリシ丈ケ失望セルモノ多カリシ次第」。訪日時期を「我国開会中ノ政治期節ヲ過サレシ後」の「三、四月ノ頃ヨリ最モ適当ト思ハルル」、と話す。前掲外務省記録『各国名士ノ本邦訪問関係雑件　中華民国人ノ部第一巻』第5号(駐中華民国臨時代理公使重光葵(上海)より外務大臣幣原喜重郎宛)1931/1/2付。
上海『新亜細亜』第2巻第2期	記録:張振之。
上海『新亜細亜』第3巻第5期	記録:張振之。
上海『新亜細亜』第3巻第6期	記録:張振之。
「対学生代表的訓話」(広州『国立中山大学日報』第847?号)	不詳。参考資料:『近代中国高等教育研究――国立中山大学(1924～1937)』111頁;『中山大学史稿(1924-1949)』162頁;「戴院長向中大生訓話」(南京『中央日報』1931/1/10付)。
○33	
	三期中執会123次常会は戴季陶を現任の中央党部工作人員、省・特別市党部、海外総支部委員および工作人員の甄別審査委員会委員に任命。10/22、三期中執会166次常会は同審査条例の修正案を採択。
○28,29	
上海『新亜細亜』第4巻第3期	記録:張振之。参考資料:『中山大学史稿(1924-1949)』199頁。
南京『新亜細亜』第12巻第5期○29	1/28、三期中政会第●次会議は戴季陶が提出した「拡充医薬衛生教育案」を採択。
	国民政府第７次会議は戴季陶を国民会議選挙総事務所主任に任命。2/17事務開始。
上海『新亜細亜』第2巻第6期	
	不詳。参考資料:張振之「天南鴻雪記」(上海『新亜細亜』第3巻第4期-第5期,1932/1-2)。
	不詳。参考資料:張振之「天南鴻雪記」(上海『新亜細亜』第3巻第4期-第5期,1932/1-2)。
	不詳。参考資料:張振之「天南鴻雪記」(上海『新亜細亜』第3巻第4期-第5期,1932/1-2)。
	不詳。参考資料:張振之「天南鴻雪記」(上海『新亜細亜』第3巻第4期-第5期,1932/1-2)。
	不詳。参考資料:張振之「天南鴻雪記」(上海『新亜細亜』第3巻第4期-第5期,1932/1-2)。
	不詳。参考資料:張振之「天南鴻雪記」(上海『新亜細亜』第3巻第4期-第5期,1932/1-2)。
上海『新亜細亜』第4巻第2期	記録:張振之。
○33	
○33	
南京『中央日報』「宝華山慧居寺仍恢復隆昌寺原名」	主な転載箇所:戴季陶「隆昌寺復名記」(『海潮音』第12巻第7号,1931/7)。
○28(中国童子軍歌楽譜)	2/19、三期中執会128次常会で中国童子軍誓詞の改定、「中国童子軍(軍)歌」、「中国童子軍日行一善歌」、「野火歌」、「国旗歌」の導入を提議。また、同会は中国国民党が上海『民国日報』を直轄することを決議し、戴季陶を董事に任命。3/19、三期中執会132次常会は中国童子軍誓詞、中国童子軍(軍)歌を改定。
○28	
○28,29	
○28,29	全2篇。
○28(野火歌、野火歌楽譜),29	
	南京着。
南京『中央党務月刊』第32期○35	3/5、三期中執会131次常会で提議。
○33	
南京『中央日報』「中央昨日総理紀念週」	主な転載箇所:戴伝賢「国民会議之任務」(南京『中央週報』第144期,1931/3/9付)(南京『中央党務月刊』第32期,1931/3);戴季陶「籌備国民会議経過」(南京『中央月刊』第3巻第6期,1931/4)。
南京『中央日報』「昨晨国府紀念週後戴伝賢等挙行就職典礼」	
○33	
	2/28、蒋介石は胡漢民を湯山に軟禁。3/5、戴季陶は胡漢民を訪問。
	邵元冲とともに胡漢民を訪問(会えず)。
	三期中執会132次常会は戴季陶などに国民会議組織法の起草を命じる。4/2三期中執会134次常会は国民会議組織法草案を修正の上採択。4/23-4/24三期中執会137次常会は一部条文の修正案を採択。
	新亜細亜学会発起人大会が開かれる。
○29	
上海(のち南京)『新亜細亜』第2巻第1期-第13巻第4期	4月、第二次囲剿戦の開始。
	国民政府は沈観鼎(考試院参事)、許崇灝(同院秘書)、馬洪煥(同院銓叙部秘書長)、陳有豊(同院考選委員会)などを日本に派遣し政治制度などを考察させる。
	三期中執会135次常会は戴季陶に、鎌倉稲村の孫文関連の施設購入について検討を命じる。
南京『中央日報』「中央党部昨晨挙行清党紀念会」	主な転載箇所:「清党紀念大会」(南京『中央党務月刊』第33期,1931/4)。
	三期中執会136次常会は戴季陶などに「三民主義教育実施原則」案(9/3、三期中執会157次常会は修正の上採択)、「中学党義課程標準」案、「小学党義課程標準」案の検討を命じる。
南京『中央日報』「修復曲阜孔子林廟戴伝賢等電各方募捐」	
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「国民会議籌備経過」(南京『中央週報』第152期,1931/5/4付)。三期中執会138次常会は戴季陶に(1)「およそわが国の国情とそぐわぬ理論論著は一概に出版を禁止する」案と、(2)中国童子軍司令部の中国童子軍総会への改組、について検討を命じる。
	中国国民党中央監察委員会委員鄒沢如、林森など、蒋介石を弾劾(広州)。
	中国国民党三期中執会第一次臨時全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席に任命。
	パンチェンラマ9世を蒋介石、胡漢民などに紹介。
	国民会議予備会議(南京)は戴季陶を主席団に任命。
南京『中央日報』「約法草案昨日大会縝密討論」	
	国民会議(南京)に出席。5/14主席団を代表して報告。同会は「中華民国訓政時期約法」を採択(6/1公布施行)。戴季陶は約法全文の正本を清書。
「新亜細亜学会成立会彙紀」(上海『新亜細亜』第2巻第3期)	パンチェンラマ9世も成立大会に出席。
南京『中央日報』「国民会議使命完成」	主な転載箇所:「国民会議閉幕」(南京『中央週報』第155期,1931/5/25付)。
	中国国民党中央執監委員非常会議開催(広州)。5/28汪精衛、孫科など、国民政府設立(広州)。
上海『新亜細亜』第2巻第3期	
南京『中央日報』「望全国同志同胞遵守約法擁護和平」	国民政府と中国国民党主催の拡大紀念週、約法告成典礼、奉安紀念典礼に出席。
南京『中央日報』慶祝公佈訓政約法特刊	
	パンチェンラマ9世は、戴季陶、王用賓などの招きを受け、宝華山隆昌寺に入る。戴季陶は同行したか?
南京『新亜細亜』第11巻第6期○29	パンチェンラマ9世は宝華山隆昌寺で「六字大明真言」を講演し、戴季陶は解説を施す。単行本:班禅曲吉尼瑪講,戴伝賢記『六字真言法要』1931。
上海『新亜細亜』第2巻第5期	
上海『新亜細亜』第2巻第5期	
○50(考試院長請授予達賴班禅名号事致国民政府会議函)	6/24、国民政府はパンチェンラマ9世に護国宣化広慧大師の称号を与える。7/1、称号授与典礼(戴季陶出席)。
	中国国民党三期五中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を中央執行委員会政治会議委員、考試院院長(国民政府委員会当然委員;12/30まで)に任命。
広州『中央日報』「中央昨晨挙行総理蒙難紀念大会」	主な転載箇所:「中央挙行総理広州蒙難(第九週年)紀念大会」(南京『中央週報』第159期,1931/6/22付)。
南京『中央日報』	三期中執会146次常会は戴季陶などに中国国民党四全大会の議題の起草を命じる。7/8、三期中執会149次常会は議題十則を採択。
南京『中央日報』	記録:馬星野。主な転載箇所:戴季陶「対于康蔵蒙古及華僑学生的希望」(上海『新亜細亜』第2巻第5期,1931/8)。
『在中山先生身辺的日子里』	全3篇。
	三期中執会147次常会は戴季陶を現任の党務工作人員の甄別審査委員会委員に任命。

△1931/6▲1931/7/1以後	【著作】孝経序	戴伝賢
1931/7/1		
1931/7/2		
▲1931/7/3	【著作】〈*馮軼裴を追悼する輓聯〉	
△1931/7/6▲1931/7/7	【講演・談話記録】考試的理論与根拠〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1931/7/6▲1931/7/7	【講演・談話記録】〈*高等考試官員の就職典礼にて〉	
△1931/7/7	【著作】題冒鶴亭先生文字因縁冊	
1931/7/15		
1931/7/16		
△1931/7/?	【著作】論軍事教育立正之意義	
△1931/7/?	【著作】致蒙蔵青康各地同胞書	
△1931/7/?	【著作】題邵翼如先生贈其夫人張默君天馬賦後	
△1931/7/?	【著作】題王太蓁先生五十紀念冊	
△1931/8/1	【著作】題張默君先生手書心経	
△1931/8/10▲1931/8/11-8/12	【講演・談話記録】高等考試経過情形〈*中国国民党中央党部の第124次総理紀念週にて〉	
△1931/8/12▲1931/8/13	【講演・談話記録】〈*高等考試授証典礼にて〉	
△1931/8/14▲1931/8/15	【講演・談話記録】〈*高等考試の採点・処分誤りを自責する, 国民政府委員会常会にて〉	
▲1931/8/15	【著作】〈*高等考試の採点・処分誤りを自責す, 国民政府宛の書簡〉	
1931/8/27		
△1931/8/28▲1936/9	【著作】嘗口楞厳寺同戒録序	
△1931/8/?▲1936/8	【著作】致宝華山融忍和尚書	
▲1931/9/2	【著作】〈*国民政府文官処宛の書簡〉	
1931/9/18		
1931/9/19	【著作】〈*蒋介石宛の書簡〉	敬恒, 右任, 伝賢, 惟汾, 培徳
△1931/9/20	【講演・談話記録】〈*岩崎某との会談〉	
△1931/9/21▲1931/9/22	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の先烈朱執信先生殉国11週年紀念大会にて〉	
△1931/9/22▲1931/9/23	【講演・談話記録】〈*中国国民党南京市党部主催の党員大会にて〉	
1931/9/23		
△1931/9/29?▲1931/9/30	【講演・談話記録】〈*上海各大学の学生代表に対して, 中央陸軍軍官学校(南京)にて〉	
1931/9/30		
△1931/9▲1931/12	【著作】戴院長手書第一届高等考試典試委員会総報告書序文	戴伝賢
▲1931/9	【書画】楊杜宇著遵淮之根本問題	戴伝賢
▲1931/9以後	【書画】沈覲鼎著日本官制官規之研究	戴伝賢
▲1931/9以後	【書画】陳有豊著日本考試制度調査報告書	戴伝賢
△1931/10/1▲1931/10/2	【講演・談話記録】〈*中央宣伝部主催の新聞記者招待会にて〉	
△1931/10/5▲1931/10/6	【講演・談話記録】〈*外交部の紀念週にて〉	
1931/10/8		
1931/10/8-10/9		
△1931/10/10▲1931/10/11	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の国慶紀念大会にて〉	
1931/10/11		
1931/10/12		
△1931/10/13	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	戴伝賢
1931/10/16		
▲1931/10/17	【著作】戴委員伝賢対於中央農業研究所章程之意見	
△1931/10/17▲1931/10	【著作】〈*馬福祥『蒙蔵状況』の序〉	戴伝賢
1931/10/19		
1931/10/21		
1931/10/22		
1931/10/23		
△1931/10/26▲1931/10/27	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第135次総理紀念週にて〉	
1931/10/27		
1931/10/29		
△1931/10	【著作】〈*戴季陶等『西北』に寄せて〉	伝賢
△1931/10/?	【著作】批本院陳秘書長大斉簽呈各級学校職員似可与普通公務員同受銓叙案之批示	
△1931/11/2▲1931/11/4	【講演・談話記録】国際道徳与世界平和〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1931/11/2▲1931/11/3	【講演・談話記録】〈*行政事務の改良について, 外交部の紀念週にて〉	
1931/11/7		
1931/11/9-11/11		
△1931/11/12▲1931/12/2	【著作】〈*外交考試及格人員への訓辞〉	孝園
1931/11/12-11/23		
1931/11/13		
△1931/11/16▲1932/5	【著作】仁王護国法会発願文	戴伝賢
1931/11/17		
△1931/11/20▲1931/11/21	【講演・談話記録】〈*中国国民党四全大会第6次会議にて〉	
△1931/11/23▲1931/11/24	【講演・談話記録】尽職救国〈*中国国民党四全大会拡大紀念週にて〉	
△1931/11/23▲1931/11/25	【著作】〈*呉鉄城宛の書簡〉	戴伝賢
1931/11/24		
1931/11/26		
1931/11/27		
△1931/11/30▲1931/12/1	【講演・談話記録】負責尽職保邦衛国〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
▲1931/11/30	【著作】〈*特種外交委員会の中国国民党中央執行委員会政治会議に対する報告〉	
△1931/11/?	【著作】批考選委員会呈擬挙行引水人考試案	
△1931/12/5▲1931/12/6	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の肇和軍艦挙義紀念大会にて〉	
△1931/12/7▲1931/12/9	【著作】〈*全国の教育家、学生の父母を戒める〉	戴伝賢
1931/12/8		

『孝園先生写孝経』(石印本,南京図書館古籍・特蔵部所蔵)	
	万宝山事件勃発。
	三期中執会148次常会は戴季陶などに中国国民党第四次全国代表大会代表選挙法草案の検討を命じる。
南京『中央日報』「蒋戴輓馮軼裴聯」	
南京『中央日報』「昨晨国府紀念週戴伝賢講考試制度」	主な転載箇所:戴伝賢「考試的理論与根拠」(南京『中央週報』第162期,1931/7/13付)。
南京『中央日報』「高等考試官員戴伝賢等宣誓就職」	
○29	
	第一期高等考試(南京)で主考官を務める。
	三期中執会150次常会は戴季陶を中国国民党四全大会の提案起草委員会委員に任命。
○35	7月、欧陽竟無(漸)編『在家必読内典』の刊行を発起。同月、太虚、何鍵などとともに世界仏学苑に発起し、その図書館と講演堂の建設工事が南京の仏国寺で始まる。第三次囲剿戦の開始。
○29	
○29	
○29	
○29	
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「第一届高等考試的経過与感想」(南京『中央党務月刊』第37期,1931/8)。 三期中政会第●次会議は戴季陶を法制組委員に任命。
南京『中央日報』「第一届高等考試昨晨挙行授証典礼」	
南京『中央日報』「戴院長尊重考政——戴兼主考官自請処分呈」	
南京『中央日報』「戴院長尊重考政——戴兼主考官自請処分呈」	
	三期中執会156次常会は戴季陶を中国国民党浙江省全省代表大会に派遣することを決議し、戴季陶などに「関於第三党案之処置辦法案」の検討を命じる。
南京『新亜細亜』第12巻第3期○29	
南京『新亜細亜』第12巻第2期○29	
南京『中央日報』「戴季陶為已故同志請恤」	
	柳条湖事件勃発。
「呉敬恒、于右任<*、戴伝賢、丁惟汾、朱培徳>等為九一八事変請蒋主席即日返京共議方策電」『革命文献』第35輯,1191-1192頁	午後8時、三期中執会160次常会(臨時会)に出席し、蒋介石の帰京と国際連盟や世界各国への宣伝活動を促すことを決議。
外務省記録『満州事変(支那兵ノ満鉄柳条溝爆破ニ因ル日、支軍衝突関係)　各国ノ態度　支那ノ部　国民政府ノ態度』第563号(駐南京領事上村伸一より外務大臣幣原喜重郎宛)1931/9/21付	三期中執会臨時常会談話会は戴季陶などに「中国国民党中央執行委員会告全国同胞書」(9/22発表)、「国民政府告全国国民書」(9/23発表)の起草を命じる。
南京『中央日報』「日本蛮横挙世所無」	主な転載箇所:戴伝賢「一致団結奮闘到底」(南京『中央週報』第173期,1931/9/28付);「先烈朱執信先生殉国紀念大会」(南京『中央党務月刊』第38期,1931/9)。国民政府、柳条湖事件を国際連盟に提訴。
南京『中央日報』「悲壮熱烈之京市党員大会」	蒋介石、于右任、丁惟汾などと柳条湖事件の対応について会談。胡漢民を訪問。
	三期中政会第290次会議に出席し、柳条湖事件の対応について議論。
南京『中央日報』「蒋主席昨対滬学生請願団訓話」	
	三期中政会第291次会議は戴季陶を中央執行委員会政治会議特種外交委員会委員長に任命。特種外交委員会第1次会議で、「日本国内各方面」の中国問題に対する態度について報告。
南京『考試院公報』1931年第12期○29(第一届高等考試総報告書序),41(同前)	
楊杜宇『導淮之根本問題』	
沈覲鼎『日本官制官規之研究』	
陳有豊『日本考試制度調査報告書』	
南京『中央日報』「中宣部昨招待新聞界」	三期中執会162次常会で、「中央」が満蒙回蔵各族同胞に対する宣言を発表する案などを提議。
南京『中央日報』「外部紀念週戴院長対職員訓話」	
	三期中執会163次常会は陳布雷、戴季陶に中国国民党が「告日本国民書」を発表する方式と時期について検討を命じる。
	特種外交委員会第8次、第9次会議で、戴季陶と米・独・仏の外交官との会談内容について報告。
南京『中央日報』「中央挙行国慶紀念」	主な転載箇所:戴季陶「国難中之覚悟」(上海『新亜細亜』第3巻第4期,1932/1)。
	特種外交委員会第10次会議で、中央通訊社による海外メディアに対する宣伝の現状について報告。
	三期中政会第20次臨時会議で、国民政府の駐中華民国特命全権公使重光葵宛の声明文稿を修訂。
○50(戴伝賢為請対満蒙同胞切実教導事致班禅電)	特種外交委員会第12次会議で、日本の軍閥の中国政策について報告。
	顧維鈞、顔恵慶、蒋介石、宋子文、李錦綸などと対日交渉の方法について会談。
○43	
馬福祥『蒙蔵状況——回部新疆附』○29(蒙蔵状況序)	主な転載箇所:「蒙蔵状況序」(南京『新亜細亜』第12巻第4期,1936/10)。
	顧維鈞、顔恵慶、蒋介石、宋子文と、現在および将来の対日交渉の方法について最終的な検討を行う。
	三期中政会第294次会議で、現在および将来の対日交渉の方法について報告。
	三期中執会166次常会は(1)宣伝部と外交部が特別情報部を組織すること、(2)一致対外の効果を収めるために、党、政、国民がモラルある行動をとり、国家の法律、行政の尊厳を擁護すること、などを提議。
	宋子文宅で顧維鈞、顔恵慶と、駐国際連盟代表施肇基宛の訓令を起草。
南京『中央日報』「日本已受正誼制裁」	主な転載箇所:戴伝賢「東北事件近状及国人応有的努力」(南京『中央党務月刊』第39期,1931/10)。
	特種外交委員会第23次会議で、国民政府が日本政府に対し国際連盟決議を実行するように要求することを提議。10/26-11/7、京粤代表会議(上海)。
	特種外交委員会第25次会議は戴季陶などに外交部が起草した対外宣言稿の修訂を命じる。
○22	
○33	
南京『中央日報』「維持全世界和平」	顧維鈞、蒋介石、于右任、呉稚暉などと対日交渉の方法について会談。
南京『中央日報』「外部紀念週」	不詳。
	中華ソヴィエト共和国臨時中央政府設立(江西省瑞金)。
	中国国民党三期中執会第二次臨時全会(南京)に出席。同会は戴季陶を中国国民党四全大会主席団に任命。
南京『中央日報』「戴院長対外交考試及格人員特頒訓条」	
	中国国民党四全大会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、対日問題専門委員会委員(召集人)に任命し、第四期中央執行委員会委員に選出。また戴季陶などに「対全世界宣言(対外宣言)」の起草を命じる。11/17、対日外交問題について報告。
	特種外交委員会第39次会議で、蒋介石と英・米・仏の公使との会談内容について報告。同会は戴季陶と顧維鈞に、日本側の要求(天津における中国軍警の撤退)に対する国民政府の照会稿を定めることを命じる。
『海潮音』第13巻第5号○29	宝華山隆昌寺で仁王護国法会を修建。
	特種外交委員会第42次会議は戴季陶を特種外交委員会総務組委員(負責人)に任命。
南京『中央日報』「四全会六次会決議捍衛国権保護疆土」	特種外交委員会第45次会議で、中国国民党四全大会対日問題研究委員会が全会に提出した議案と、全会にて発表した宣言について報告。
南京『中央日報』「昨四全大会紀念週」	主な転載箇所:戴伝賢「尽忠職務是救国的惟一途経」(南京『中央党務月刊』第41期,1931/12)。
南京『中央日報』「対日外交完全一致」	
	特種外交委員会第49次会議で、戴季陶が呉鉄城に宛てた書簡の内容(汪精衛、伍梯雲、鄒海濱の意見に対する返答)について報告。
	四期中執会臨時全会(南京)に出席。同会は戴季陶を第四期中央執行委員会常務委員に選出。
	特種外交委員会第52次会議で、本会委員は「中央」(*中央執行委員会?)および本会の決定を経ずに個人名義で意見を発表しないことを提議(採択される)。
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「負責尽職保邦衛国」(南京『中央週報』第183期,1931/12/7付)。
○29(任特種外交委員会委員長時上中央政治会議報告)	主な転載箇所:「特種外交委員会委員長戴伝賢上中央政治会議報告」(『国民政府処理九一八事変之重要文献』206-209頁)。特種外交委員会第54次会議で本会の中政会に対する報告を朗読。12/2四期中政会第297次会議は同報告を採択。
○33	
南京『中央日報』「中央党部昨挙行肇和挙義紀念大会」	
南京『中央日報』「戴院長箴誡学生親筆書」	
	特種外交委員会第59次会議で、現在の情勢の対応策について私見を述べる。

1931/12/9		
▲1931/12/12	【著作】〈*中央の外交方針について,某君宛の書簡〉	戴伝賢
△1931/12/12	【著作】朱伯廬先生治家格言繹義序	
△1931/12/14▲1931/12/15	【講演・談話記録】民国明日之希望〈*中国国民党中央党部の第4次総理紀念週にて〉	
△1931/12/15▲1932/1	【著作】新亜細亜学会綱領	戴伝賢
▲1931/12/17	【著作】〈*中央執行委員会政治会議宛の書簡〉	戴伝賢,宋子文
1931/12/18?		
1931/12/22-12/29		
▲1931/12/24	【著作】〈*中国国民党中央党部、国民政府宛の書簡〉	戴伝賢
▲1931/?/?	【書画】孝経	戴季陶
▲1931/?/?	【著作】〈*『戴季陶先生手書孝経』の跋〉	伝賢
△1931/?/?▲1935/3	【著作】程母夏太夫人家伝	
△1931/?/?	【著作】改革寺院僧伽制度之意見	
△1932/1/1▲1932/1/1	【著作】中華民国之建国精神	戴伝賢
△1932/1/1	【著作】示考試院諸同人	
△1932/1/27	【著作】致彭代柄君書〈*呉興県より〉	
1932/1/28		
1932/1/30		
△1932/2/2	【著作】懺悔正義	
1932/2/24		
1932/2/25		
▲1932/2/26	【講演・談話記録】〈*南京にて〉	
△1932/2/27▲1936/10	【著作】致妙柔大師書	
△1932/2/27▲1937/3	【著作】致戒澄和尚書	
1932/2/?		
1932/3/1-3/6		
△1932/3/25	【著作】致鄭逸庵先生書	
△1932/3/29	【著作】題自著国民革命与中国国民党原稿〈*呉興県にて〉	
1932/3/31		
△1932年春月	【著作】〈*『国民会議実録――選挙総事務所報告』の序〉	
△1932/4/6▲1932/4/7	【講演・談話記録】〈*進退問題、考銓の改進、洛陽行きについて〉	
▲1932/4/7	【著作】〈*中国国民党中央党部、国民政府宛の書簡〉	戴伝賢
△1932/4/7▲1932/4/8	【著作】〈*国難会議宛の書簡〉	戴伝賢
△1932/4/9	【著作】〈*中山陵の孝経鼎について〉	戴季陶
1932/4/10		
1932/4/14		
△1932年季春月▲1932/5	【著作】目前救国之途径〈*洛陽にて〉	戴伝賢
△1932/4/12▲1932/4/14	【講演・談話記録】〈*国難会議の閉幕典礼(洛陽)にて〉	
1932/4/14		
1932/4/15		
△1932/4/16▲1932/10〈*実際は10/18以後〉	【講演・談話記録】開展西北文化与建設新中国〈*河洛中学校にて〉	
△1932/4/16	【著作】致本院劉副院長〈*劉蘆隠〉電〈*洛陽より〉	
△1932/4/16	【著作】致胡展堂先生電〈*洛陽より〉	
△1932/4/18▲1937/3	【著作】請中央修復洛陽周公廟白馬寺龍門文	
△1932/4/18▲1932/5	【講演・談話記録】欲救中国応恢復中国固有之道徳智能〈*中国国民党中央党部の拡大紀念週(洛陽)にて〉	
1932/4/20		
△1932/4/21▲1932/5/6-5/7	【講演・談話記録】建設西北〈*西安各界主催の歓迎会にて〉	
△1932/4/25▲1932/5/3-5/4	【講演・談話記録】確立自信心以拯救中国〈*西安教育庁の聯合紀念週にて〉	
△1932/4/26	【講演・談話記録】〈*西安の各学校聯合の総理紀念週にて〉	
△1932/4/27	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電〈*西安より〉	
△1932/4/28▲1937/2	【著作】書高母馬太夫人事略	
△1932/4/29▲1937/2	【著作】三十三年浮雲影序	
△1932/4/29	【著作】覆中央党部秘書処電〈*西安より〉	
△1932/4/29	【著作】覆蒙蔵委員会馬委員長〈*馬雲亭〉電〈*西安より〉	
△1932/4/?▲1935/3	【著作】基督教与三民主義序	
△1932/4/?▲1937/2	【著作】中国人口数目考序	
△1932/4/?▲1935/3	【著作】周易便蒙序	
△1932/4/?	【著作】東北血痕序〈*洛陽にて〉	
△1932/4▲1936/9	【著作】致仏教団体書	
△1932/5/5	【著作】陳伯稼楷写拙述般若波羅密多門論頌書後	
△1932/5/8	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,西安より〉	
△1932/5/10	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電〈*西安より〉	
△1932/5▲1932/5/14	【著作】修治咸陽原上周代諸陵園及編纂周陵志辦法概要	戴伝賢
△1932/5	【著作】建設西北専門教育之初期計劃〈*西安にて〉	提議人　戴伝賢
△1932/5/14	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電〈*洛陽より〉	
△1932/5/14	【著作】致于右任先生書〈*洛陽より〉	
△1932/5/15▲1937/3	【著作】致南漢宸先生書〈*洛陽より〉	
△1932/5/22▲1936/5	【著作】覆丁師汝先生函	
△1932/5/22	【著作】上中央執行委員会政治会議電〈*洛陽より〉	
△1932/5/23▲1932/5/24	【講演・談話記録】〈*日本の内閣について,中国国民党中央党部、国民政府の拡大紀念週(洛陽)にて〉	
1932/5/25		
1932/5/26		
△1932/5/28▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致達賴大師書	
△1932/5/30▲1932/5/31	【講演・談話記録】〈*三民主義的哲学基礎,中央陸軍軍官学校の紀念週にて〉	
1932/5/31		
▲1932/6	【著作】倡修洛陽白馬寺通電	戴伝賢
▲1932/6	【著作】中国童子軍総会籌備処章程	
△1932/6/21▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致班禅大師書	
△1932/6/22	【著作】発願偈	
▲1932/7	【著作】敬告隆昌寺諸僧衆書	戴伝賢
△1932/7/2	【著作】致班禅大師書	
△1932/7/20	【著作】致王一亭先生書〈*呉興県より〉	
△1932/7/?▲1936/8	【著作】長興育嬰普済院募捐序〈*呉興県にて〉	戴伝賢
△1932/7/?▲1936/8	【著作】呉興国術年刊序〈*呉興県にて〉	戴伝賢

	四期中政会第●次会議は戴季陶を特種教育委員会委員に任命。1932/1/2同委員会解散。 上海の各界人士と対日外交問題について会談。
南京『中央日報』「戴季陶覆某君電文」	主な転載箇所:「戴伝賢為述中央外交方針覆某君電」(南京『中央週報』第184期, 1931/12/14付)。
○29	
南京『中央日報』「民国明日之希望」	主な転載箇所:戴伝賢「民国明日的希望」(南京『中央党務月刊』第41期, 1931/12)。
上海『新亜細亜』第3巻第4期○29	主な転載箇所:南京『新亜細亜』第5巻第1・2期合刊, 1933/1。四期中執会第4次常会臨時会は、戴季陶が事前に申請していた考試院院長の辞任を承認せず。同日、蒋介石は国民政府主席、行政院院長を辞任。
南京『中央日報』「中央政治会議慰留特外委会両長」	12/16四期中政会第299次会議は、戴季陶の特種外交委員会委員長辞任を承認せず。
	南京発。宝華山に向かう。「戴天仇氏仏門に走る」(『大阪朝日新聞』1931/12/19付);「国府慰留戴伝賢」(南京『中央日報』1931/12/23付)。後に、浙江省呉興県に向かう。
	中国国民党四期一中全会(南京)を欠席。同会は戴季陶を提案審査委員会(外交組)に任命し、第四期中央執行委員会政治会議委員、考試院院長(国民政府委員会委員を兼職しない)に選出。
南京『中央日報』「戴伝賢再堅辞本兼各職」	全3篇。第1篇の要約:「国府慰留戴伝賢」(南京『中央日報』1931/12/23付)。
『戴季陶先生手書孝経』(石印本, 上海図書館所蔵)	
『戴季陶先生手書孝経』(石印本, 上海図書館所蔵)	
南京『新亜細亜』第9巻第3期○29	
○29	
南京『中央日報』民国二十一年元旦特刊	主な転載箇所:戴伝賢「中華民国之建国精神」(上海『新亜細亜』第3巻第4期, 1932/1)。国民政府(南京)改組、国民政府(広州)撤廃。
○29, 41	
○29	
	四期中政会臨時会議は汪精衛を行政院院長に選出。第一次上海事変勃発。
	国民政府、遷都洛陽宣言を発表。
○29	
	南京発。湯山に向かう。
	南京着。
南京『中央日報』「戴伝賢即回湖州」	
南京『新亜細亜』第12巻第4期○29(致宝華山妙柔和尚書)	南京発。浙江省呉興県に向かう。
南京『新亜細亜』第13巻第3期○29(致宝華山戒澄和尚書)	
	新亜細亜学会第2次会員大会(南京)に出席。同大会は戴季陶を会長に選出。
	中国国民党四期二中全会(洛陽)を欠席。3/1「満洲国」成立。3/6四期中政会第●次会議は蒋介石を国民政府軍事委員会委員長に選出。
○29	
○29	
	南京着。
国民会議実録編輯委員会編『国民会議実録――選挙総事務所報告』○29(国民会議実録序)	主な転載箇所:「国民会議実録序」(南京『新亜細亜』第13巻第3期, 1937/3)。
南京『中央日報』「戴季陶再呈辞考試院長職」	参考資料:「中央慰留戴季陶」(南京『中央日報』1932/4/11付)。
南京『中央日報』「戴季陶再呈辞考試院長職」	
南京『中央日報』「国難会議昨晨開幕」	
○42(戴伝賢関於孝経鼎倣法之説明)	パンチェンラマ9世は蒋介石、戴季陶らに内モンゴルにおける抗日の状況を報告し、国民政府が内モンゴルの住民を守ることを要求する。
	洛陽着。
	国民政府はパンチェンラマ9世を西陲宣化使に任命。10/29就職典礼。
上海『新亜細亜』第4巻第1期	
南京『中央日報』「戴院長対国難会議之演詞」	主な転載箇所:戴伝賢「抵抗暴日是為全世界人類之公理而奮闘」(『革命文献』第36輯)。
	四期中執会16次常会(洛陽)で考試院の三年来の活動について報告。同会は中国童子軍司令部の改組を決議し、戴季陶を中国童子軍総会副会長に任命。
	中華ソヴィエト共和国臨時中央政府、「対日戦争宣言」を発表。
上海『新亜細亜』第4巻第6期	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第13巻第3期○29(呈中央執行委員会修復洛陽周公廟白馬寺龍門文)	参考資料:中国第二歴史档案館・全宗号1・案巻号1790(16J-2315)・標題「戴伝賢等建議保持発展河南洛陽文化古蹟」1932/4/19付。
南京『中央党務月刊』第45・46期合刊	主な転載箇所:戴季陶「中華民族自救之道」(上海『新亜細亜』第4巻第4期, 1932/8)。洛陽発。甘粛、青海、新疆各省の視察に向かう。
	西安着。
南京『中央日報』○23(中央関於開発西北之計画)	主な転載箇所:戴季陶「西北建設」(上海『新亜細亜』第4巻第5期, 1932/9)。
南京『中央日報』○23(確立自信心拯救中国)	主な転載箇所:戴季陶「確立自信心以拯救中国」(上海『新亜細亜』第4巻第4期, 1932/8)。
	西安にて国民政府の対日政策に不満を持つ聴衆(学生)の一部は、戴季陶の講演を遮り、彼の乗ってきた自動車を焼き討ちにする。
○29	全2篇。
南京『新亜細亜』第13巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第13巻第2期○29	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第9巻第3期○29, 30	
南京『新亜細亜』第13巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第9巻第3期○29	
○29	
南京『新亜細亜』第12巻第3期○29	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33	
南京『中央日報』「戴季陶擬修治咸陽周陵並編纂周陵志」○23(修復咸陽諸陵及編纂周陵志辦法概要)	主な転載箇所:上海『新亜細亜』第4巻第5期, 1932/9;南京, 第5巻第1・2期合刊, 1933/1。
○23, 43	1932/10/12、四期中政会第327次会議は「建設西北専門教育之初期計画案」を採択し、戴季陶を籌備委員会委員(召集人)に任命。
○33	洛陽着。
○33	
南京『新亜細亜』第13巻第3期○29(致陝西省政府南秘書長書)	
南京『新亜細亜』第11巻第5期○29(覆丁師汝夫子書)	
○33	
南京『中央日報』「洛陽昨拡大紀念週」	
	洛陽発。
	南京着。
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
南京『中央日報』「軍校紀念週」	不詳。
	浙江省呉興県に向かう。
『海潮音』第13巻第6号	
○28	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
○29	
『海潮音』第13巻第7号○37	この頃、中山陵の蔵経楼や各大学図書館に仏典を寄贈するために、仏典の影印を発起。7月、第四次囲剿戦の開始。
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第12巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第12巻第2期○29(呉興国術館年刊序)	

△1932/8/1	【書画】報恩十八頌	
△1932/8/6▲1936/9	【書画】仁王護国般若波羅密多経頌〈*呉興奮県にて〉	
△1932/8/24▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致班禅大師書	
△1932/8(仲秋月)▲1933/3	【著作】仏教各宗大意敍	戴伝賢
1932/9/15		
1932/9/17		
△1932/9/22▲1936/8	【著作】致徳寛、妙柔和尚書	
1932/9/24		
1932/9/25-9/29		
1932/9/28		
△1932/9/?	【著作】挽馬雲亭先生詩〈*太湖にて〉	戴季陶
△1932/9/?	【著作】致班禅大師書	
△1932/10/2▲1933/8	【著作】贈銭味莘序〈*呉興県にて〉	孝園主人戴伝賢
△1932/10/3▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致班禅大師書	
1932/10/8		
△1932/10/10▲1932/10/10-10/11	【著作】民国二十一年国慶日述懐〈*呉興県にて〉	戴伝賢
△1932/10/15▲1932/10/16	【講演・談話記録】〈*南京の第1期高等考試及格人員に対して〉	
△1932/10/18▲1932/10〈*実際は10/18以後〉	【著作】当前之両大生死関頭	戴伝賢
△1932/10/19▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致班禅大師書	
△1932/10/19	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
1932/10/15-1937/8/23		
▲1932/10/24	【講演・談話記録】〈*四川問題について〉	
1932/10/26		
△1932/10/28▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致班禅大師書	
△1932/10/28	【著作】致陝西楊主席〈*楊虎城〉電	
▲1932/10/31	【講演・談話記録】〈*四川問題について〉	
△1932/10/31▲1932/11/1	【講演・談話記録】四川事件之解決辦法〈*中国国民党中央党部の第50次総理紀念週にて〉	
△1932/10/?	【著作】新青海月刊序	
△1932/10/?	【著作】対通告考場地名不必沿用「武廟前」字様之指示	
▲1932/10〈*実際は10/18以後〉	【著作】吁嗟乎誰為之続〈*張振之を悼む〉	戴伝賢
△1932/11/2	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
▲1932/11/5	【講演・談話記録】〈*民権艦にて〉	
▲1932/11/6	【著作】〈*民権歌とその序文〉	戴伝賢
1932/11/4		
△1932/11/7▲1932/11/8	【講演・談話記録】〈*孫文の遺教について,三省剿匪総司令部の拡大紀念週(武漢)にて〉	
△1932/11/7▲1932/11/8	【著作】三民主義之教育価値〈*教科書の編集審査について,武漢にて〉	伝賢
△1932/11/8	【講演・談話記録】童子軍対於社会国家民族世界人類応負的責任〈*漢口市童子軍に対して〉	
△1932/11/10	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,武漢より〉	
△1932/11/13	【著作】覆朱騮先先生電〈*洛陽より〉	
1932/11/14		
△1932/11/15	【著作】〈*陪都建設案、洛陽復興案を政府の南京還都案とともに決議されることを請う〉	蒋中正,戴伝賢など
△1932/11/15	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,洛陽より〉	
△1932/11/17	【著作】致陝西楊主席〈*楊虎城〉電	
△1932/11/20	【著作】致中央党部葉〈*葉楚傖〉陳〈*陳果夫、立夫〉諸先生電〈*洛陽より〉	
△1932/11/20	【著作】致四川建設庁向庁長〈*向育仁〉電〈*洛陽より〉	
△1932/11/20	【著作】致陝西建設庁寿天章電	
△1932/11/21▲1933/5	【著作】為重修洛陽白馬寺呈洛陽行政督察専員文〈*王震、徳浩宛の書簡〉	戴伝賢
△1932/11/21▲1932/11/24	【講演・談話記録】政府遷京与建設西北〈*中国国民党中央党部、国民政府の紀念週(洛陽)にて〉	
1932/11/23		
△1932/11/24▲1933/1	【講演・談話記録】振興中国与振興仏教〈*河南仏学社(開封)にて〉	戴季陶
△1932/11/24?▲1932/11/25	【講演・談話記録】〈*時局について,徐州にて〉	
△1932/11/25▲1932/11/25	【講演・談話記録】〈*政局について,南京にて〉	
△1932/11/28▲1932/11/29	【講演・談話記録】国府遷回首都之意義〈*考試院の紀念週にて〉	
1932/11/30?		
△1932/11/?	【著作】童子軍訓練的教育価値	
1932/12/1		
1932/12/8		
1932/12/12		
1932/12/14		
△1932/12/15▲1932/12/16	【講演・談話記録】〈*第2次全国内政会議の閉幕典礼(南京)にて〉	
△1932/三中全会開会之日(12/15)▲1932/12	【著作】〈*『中国教育之改進』の序〉	戴伝賢
1932/12/15-12/22		
△1932/12/17	【著作】致李任潮先生電	
△1932/12/21▲1933/1	【著作】文徳与文品	戴伝賢
△1932/12/22▲1932/12/22	【講演・談話記録】〈*中国国民党四期三中全会の閉幕典礼にて〉	
1932/12/23		
▲1933/3	【講演・談話記録】致本会〈*新亜細亜学会〉職員論本会方針及進行書	戴伝賢
△1932/12/24▲1933/1	【講演・談話記録】〈*新亜細亜学会第3次会員大会の開幕典礼にて〉	
△1932/12/26▲1932/12/26	【講演・談話記録】〈*中国国民党三中全会について,国民政府の総理紀念週にて〉	
△1932/12/26▲1932/12/27	〈*蒙旗宣化使の就職典礼にて〉	
1932/12/29		
△1933/1/1〈*実際は1932/12/31以前〉▲1932/12/31	【著作】一個美術的建築設計案略稿〈*蒙蔵会館について〉	戴伝賢
△1932/12▲1933/1/1	【著作】世界之大勢与中国之大勢	戴伝賢
△1932/12/?	【著作】批修正考試法等原則草案	
△1932/12/?	【著作】批銓叙部呈擬教育行政人員甄別任用変通辦法	
△1932/?/?▲1935/4〈*実際は4/16以後〉	【書画】般若波羅密多門論頌,般若波羅密多門論	
△1933/1/1▲1933/1/1	【著作】〈*建国之首要在民生〉	戴伝賢
1933/1/5		
△1933/1/9▲1933/1/10	【講演・談話記録】〈*監察院副院長などの就職典礼にて〉	
1933/1/16		
△1933/1/24	【著作】覆馬鴻逵先生電	
△1933/1/30	【著作】復黄復生先生書	

○29	
『海潮音』第17巻第9号○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
『海潮音』第14巻第3号○29(仏教各宗大意序)	主な転載箇所:南京『新亜細亜』第9巻第3期,1935/3。
	四期中執会38次常会は戴季陶などに宗教団体組織原則草案并説明、宗教団体組織大綱草案、宗教団体組織大綱施行細則草案の検討を命じる。日本、「満洲国」を承認。
	上海発。鎮江に向かう。
南京『新亜細亜』第12巻第2期○29(致宝華山徳寛、妙柔和尚書)	
	南京着。
	パンチェンラマ9世は段祺瑞の招きを受け北平で時輪金剛法会を開く。戴季陶は刺繍を施した(鈕有恒による)チベット式白緞日罩を寄贈。
	南京発。湯山に向かう。
『月華』第4巻第25・26・27期合刊	
○29	
南京『新亜細亜』第6巻第2期○29(贈銭味莘先生序)	更正:南京『新亜細亜』第6巻第2期,1933/8。
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
	南京着。
南京『中央日報』○29,30(地方建設問題)	主な転載箇所:戴伝賢「民国二十一年国慶日述懐」(上海『新亜細亜』第4巻第6期,1932/10<*実際は10/18以後>);(南京『中央党務月刊』第51期,1932/10)。
南京『中央日報』「戴院長昨召集高考及格人員訓話」	
上海『新亜細亜』第4巻第6期	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	陳独秀は中国国民党に逮捕され、江寧地方法院看守所、後に江蘇第一監獄に収監される。この間、戴季陶はたびたび陳独秀を訪問。Thomas C. Kuo, *Ch'en Tu-Hsiu(1879-1942) and the Chinese Communist Movement*, pp.224-225.
「戴伝賢談川戦」(南京『中央週報』第229期)	
	四期中政会第329次会議は戴季陶を建設西北専門教育籌備委員会(12/14、建設西北農林専科学校籌備委員会と改称)常務委員に任命。
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
○33	
「川籍中委商弭川戦」(南京『中央週報』第230期)	
南京『中央日報』「解決四川問題辦法」	主な転載箇所:戴伝賢「解決四川問題的辦法」(南京『中央党務月刊』第51期,1932/10);(南京『中央週報』第231期,1932/11/7付)。
○29	
○33	
上海『新亜細亜』第4巻第6期	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	民権艦に乗船。南京発。
南京『中央日報』「戴季陶昨日抵漢」	
南京『中央日報』「戴伝賢作民権歌并序述作歌感懐」	主な転載箇所:戴伝賢「民権歌并序」(南京『中央党務月刊』第55期,1933/2)。
	武漢着。
南京『中央夜報』「戴院長在漢講述総理遺教」	
南京『中央夜報』○29,30	主な転載箇所:南京『新亜細亜』第11巻第5期,1936/5。
○28,29,30	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	武漢発。
○33	
	洛陽着。
○29(与中央諸同志上中央常会電)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	四期中執会47次常会は、12/1に中国国民党中央党部、国民政府が南京に移転することを決議。
○29	
○29	
○33	
『海潮音』第14巻第5号○29(代修建白馬寺籌備委員会擬呈洛陽行政督察専員文)	
南京『中央夜報』	主な転載箇所:戴伝賢「政府遷京与積極建設西北」(南京『中央党務月刊』第52期,1932/11)。
	洛陽発。開封着。
『海潮音』第14巻第1号○29(致開封衆大徳居士書)	四期中執会48次常会は戴季陶などに教育「改進」方案の検討(召集人)を命じる。
南京『中央日報』「戴季陶鈕永建返京」	
南京『中央夜報』「戴院長返京」	南京着。「戴季陶鈕永建返京」(南京『中央日報』1932/11/25付)。
南京『中央日報』	
	パンチェンラマ9世は戴季陶に託し、一万元を国内15ヶ所の慈幼院に寄附。
○28,29	
	中国国民党中央党部主催の回京典礼(南京)に出席。「精神不適」のため、典礼の講演を居正に替わってもらう。
	治療のため上海に向かう。
	国民政府、ソ連と国交回復。
	パンチェンラマ9世は、戴季陶、鈕有恒、王一亭、黄慕松らの招きを受け、宝華山隆昌寺に入る。12/14-12/17パンチェンラマ9世は薬師七仏灌頂を行う(戴季陶に不空(金剛)の法名を与える)。戴季陶は同行したか?
南京『中央日報』副刊「全国内政会議特刊」第7号	
国聯教育考察団『中国教育之改進』国立編訳局訳○29(中国教育之改進序)	主な転載箇所:「中国教育之改進序」(南京『新亜細亜』第12巻第3期,1936/9)。
	中国国民党四期三中全会(南京)に出席し、閉幕詞を述べる。同会は戴季陶を主席団、特種外交審査委員会委員に任命。
○33	
南京『新亜細亜』第5巻第1・2期合刊○29	
南京『中央夜報』「四届三中全会今晨閉幕」	主な転載箇所:「安内攘外大計已定三中全会昨挙行閉幕式」(南京『中央日報』1932/12/23付)。
	考試院院長に就任。湯山に向かう。数日後、南京に向かう。
南京『新亜細亜』第5巻第3期	
「会報――新亜細亜学会第三次会員大会記事」(南京『新亜細亜』第5巻第1・2期合刊)	新亜細亜学会第3次会員大会(南京)は「新亜細亜学会総章」を採択し、戴季陶を名誉董事に任命。
南京『中央夜報』「中央国府今晨紀念週」	主な転載箇所:「三中全会精神上成就」(南京『中央日報』1932/12/27付)。
南京『中央日報』「蒙旗宣化使章嘉昨行就職礼」	
	四期中執会51次常会は戴季陶などに国民参政会召集の具体方案の起草と検討(召集人)を命じる。1933/2/23、四期中執会59次常会は国民参政会組織法案と国民参政会会員選挙法原則案を採択。
南京『中央日報』○29,30(地方建設問題)	主な転載箇所:南京『新亜細亜』第5巻第3期,1933/3。
南京『新亜細亜』第5巻第1・2期合刊○29	
○33	
○33	
南京『新亜細亜』第9巻第4期○29	1932年、湯山に望雲書屋(沐浴場)、上海に覚園(居士のサロン)を建てる。
南京『中央日報』元旦特刊	
	四期中執会52次常会は戴季陶が中国童子軍総会籌備処籌備主任に就くことを確認。
南京『中央日報』「丁惟汾王用賓等昨在国府宣誓」	
	孫科、立法院院長に就任。その後、孫科は憲法草案起草委員会を組織し、国民政府は戴季陶を同会の顧問に任命。
○33	
○29	

△1933/1/30▲1933/1/31	【講演・談話記録】整理行政法規与推行奨学考課制度〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1933/1/?	【著作】薬師七仏法会発願文	
△1933/1▲1933/4	【書画】許公武著遊日紀要	戴伝賢
1933/2/1〈*もしくは4/5〉		
△1933/2/2▲1936/12	【著作】励志社牢刊序	
△1933/2/8	【著作】代教育部擬覆内政部仏教学苑組織案咨文	
△1933/2/18	【著作】致陝西楊主席〈*楊虎城〉電	
△1933/2/18	【著作】致沈司長鵬飛電	
△1933/2/22	【著作】致沈司長鵬飛電	
△1933/2/22	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	
△1933/2/28▲1934/12	【著作】新嘉坡星洲日報新福建専刊序	
△1933/2▲1933/4	【著作】〈*許公武『遊日紀要』の序〉	伝賢
△1933/2/?	【著作】宗喀巴伝	
△1933/2/?	【著作】対参事簽註案件之指示	
△1933/2/?	【著作】批修正普通考試監獄官警察行政人員考試条例草案	
△1933/2/?	【著作】批修正普通考試建設衛生人員考試条例草案	
△1933/2/?	【著作】対修正普通考試各類行政人員考試条例草案中科目等之指示	
△1933/2/?	【著作】批修正典試委員会組織法草案	
△1933/3/6▲1933/3/6	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第68次総理紀念週にて〉	
△1933/3/6▲1933/3/7	【講演・談話記録】救国唯一的途径〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1933/3/6▲1933/3/6	【講演・談話記録】〈*審計部部長などの就職典礼にて〉	
△1933/3/6▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致達賴大師函	
1933/3/10		
△1933/3/12▲1934/12	【著作】中央陸軍軍官学校軍官訓練班同学録序	
△1933/3/15	【著作】童子軍訓育要義	
△1933/3/16	【著作】為修改童子軍規律告童子軍工作人員書	
△1933/3/18	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1933/3/18	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	
△1933/3/18	【著作】致商総指揮〈*商啓予〉電	
▲1933/3/19	【著作】〈*宋哲元宛の書簡〉	戴伝賢
▲1933/3/19	【著作】〈*孫殿英宛の書簡〉	戴伝賢
▲1933/3/19	【著作】〈*関麟徴宛の書簡〉	戴伝賢
△1933/3/19	【著作】致閻師長麟徴電	
△1933/3/19	【著作】致李任潮先生電	
△1933/3/19	【著作】致方振武先生電	
△1933/3/20?▲1933/3/23	【講演・談話記録】三民主義的五権憲法要義〈*無線放送にて〉	
△1933/3/21	【著作】覆青海馬主席暨各委員電	
△1933/3/22▲1933/5	【講演・談話記録】中国之宗教改革与救国事業〈*無線放送にて〉	戴季陶
△1933/3/25	【著作】覆邵主席〈*邵仲輝〉電	
1933/3/26		
1933/3/27		
△1933/3/30	【著作】祝晨報周歳	
△1933/3/?▲1933/4	【著作】余之読書記	
△1933/3/?▲1934/12	【著作】国術館五週年紀念叢刊序	
△1933/3/?	【著作】説音楽	
△1933/3/?	【著作】海声週報序	
△1933年春	【著作】〈*猪民誼『**鍵**子運動』の序〉	伝賢
▲1933/4	【書画】馬洪煥著日本銓叙制度調査報告書	戴伝賢
▲1933/4	【書画】譚雲山著印度周遊記	戴伝賢
△1933/4/4	【講演・談話記録】童子軍的教育目的和三条誓約〈*浙江省童子軍第二次大検閲にて〉	
△1933/4/9▲1936/9	【著作】致後林小学成機禅先生書〈*湯山より〉	
△1933/4/9▲1933/6	【著作】致某君函〈*湯山より〉	戴伝賢
▲1933/4/10	【著作】〈*辺疆政教制度研究会簡章〉	
△1933/4/10▲1933/7	【著作】金剛頂発菩提心論浅略釈敍〈*湯山にて〉	孝園主人
△1933/4/12〈*もしくは13〉	【著作】上蔣会長〈*中国童子軍総会会長蔣介石〉書	
△1933/4/15	【著作】致中国童子軍総会籌備処諸同人書	
△1933/4/17▲1933/4/18	【講演・談話記録】団結救国〈*国民政府の紀念週にて〉	
△1933/4/17▲1933/4/18	【講演・談話記録】〈*中国童子軍訓練設計委員会議の閉幕典礼にて〉	
1933/4/19		
△1933/4/20	【著作】本院向中政会議建議国立省立公立学校教職員応認為官吏之一同受国家之銓叙案	
△1933/4/22▲1933/8	【著作】重修明倫堂記	戴伝賢
△1933/4/26	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1933/4/下旬	【著作】中国参与美国召集之経済会議応決定活動目標提議案	
△1933/4/?	【著作】選択童子軍規律之補充教材標準	
△1933/4/?	【著作】対院会部出版書籍格式之指示	
△1933/5/8▲1933/5/9-5/11	【講演・談話記録】〈*国民政府の紀念週にて〉	
△1933/5/9▲1933/5/9	【講演・談話記録】〈*陝西視察の出発前に，南京にて〉	
1933/5/10		
1933/5/11		
1933/5/12		
△1933/5/13	【著作】致陝西教育庁周庁長書	
△1933/5/14	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡，西安より〉	
△1933/5/15	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉電〈*西安より〉	
△1933/5/18	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉電〈*西安より〉	
△1933/5/19	【著作】致財政部鄒次長〈*鄒玉林〉電〈*西安より〉	
1933/5/20		
△1933/5/21	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉電〈*西安より〉	
△1933/5/23	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉電〈*西安より〉	
1933/5/24		
△1933/5/25	【著作】対於改定校址及工作進行之意見	
1933/5/27		
1933/5/28		
△1933/5/29▲1933/7	【著作】贈達修和尚序〈*開化律寺(滁州)にて〉	戴伝賢
△1933/5/30▲1933/5/30	【講演・談話記録】〈*陝西視察から帰京して〉	
△1933/5/30▲1933/5/31	【講演・談話記録】〈*陝西視察から帰京して〉	
△1933/5/31▲1933/6/1	【講演・談話記録】〈*陝西視察報告，中政会第359次会議にて〉	
▲1933/6	【著作】仏教与総理遺教的平等観	孝園　重校
▲1933/6	【著作】院長手諭	伝賢
▲1933/6	【著作】〈*『中印学会――計劃、総章、縁起』の序〉	
△1933/奉安紀念日(6/1)▲1936/6	【著作】題林文忠公行輿日課	
△1933/6/1▲1936/6	【著作】致潘鑑卿書	
△1933/6/3	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1933/6/4	【著作】呈中央執行委員会文	
△1933/6/4	【著作】為改定校址及推進工作事呈政治会議文	
△1933/6/4	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	

南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「整理行政法規与推行奨学考課制度」(南京『中央党務月刊』第54期,1933/1)。
○29	
許公武『遊日紀要』	
	四期中政会第342次会議は戴季陶を行政法規整理委員会委員長に任命。1934/10、同委員会解散。
南京『新亜細亜』第12巻第6期○29	四期中執会56次常会は戴季陶を中国童子軍副司令(兼任)に任命。
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
南京『新亜細亜』第8巻第6期○29	
許公武『遊日紀要』○29(遊日紀要序)	主な転載箇所:「遊日紀要序」(南京『新亜細亜』第12巻第6期,1936/12)。2月、日本軍、熱河作戦・関内作戦を開始。
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
南京『中央日報』「公理戦勝不足以懲暴日」	
南京『中央日報』「戴院長在国府報告」	
南京『中央夜報』「国府紀念週後李元鼎等宣誓就職」	
南京『新亜細亜』第11巻第1期	
	節約救国会設立、同会は戴季陶を監事に任命。
南京『新亜細亜』第8巻第6期○29	中山文化教育館設立(南京)、同館は戴季陶を常務理事に任命。
○28,29	
○28,29	四期中執会62次常会は于右任、孫科、林森、戴季陶、居正が提議する対日三原則案を採択。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33	
○33	
南京『中央日報』「戴院長慰前方将領」	
南京『中央日報』「戴院長慰前方将領」	
南京『中央日報』「戴院長慰前方将領」	
○33	
○33	
○33	
南京『中央日報』○24,29,30	主な転載箇所:戴季陶「三民主義的五権憲法要義」(南京『中央党務月刊』第56期,1933/3);(南京『新亜細亜』第5巻第4期,1933/4)。
○33	
南京『新亜細亜』第5巻第5期;『海潮音』第14巻第5号	
○37	
○33	
	保定から帰京した蒋介石、汪精衛、孫科などと、日本の国際連盟脱退後の対日政策について会談。
	日本、国際連盟脱退。
○29	
南京『新亜細亜』第5巻第4期○29	日本語訳:「戴季陶の日本語学習法」(東京『中国』第62号,1969/1)。
南京『新亜細亜』第8巻第6期○29	
○29,30	
○29	
伍稼青「呉稚暉戴季陶提倡踢毽子」	
馬洪煥『日本銓敍制度調査報告書』	
譚雲山『印度周遊記』	1930年代初より、在印学者の譚雲山は蔡元培、戴季陶などの支持を得つつ、中印文化交流組織の設立を運動。1933年、中印学会発起のための籌備会議を開催。戴季陶は賛助人として参与。
○28,29(童子軍的教育目的和三条誓詞講詞)	
南京『新亜細亜』第12巻第3期○29	戴季陶は浙江省呉興県後林木橋頭地方で後林小学校を運営し、また土地を所有していた。1934年冬、県政府に土地(土地収入)を寄付し、県政府が後林小学校を運営するように改める(県立二礼小学校に改組)。
南京『新亜細亜』第5巻第6期	
南京『中央日報』「辺疆政教研究会」	
『海潮音』第14巻第7号○29(金剛頂発菩提心論浅略釈序)	主な転載箇所:「金剛頂発菩提心論浅略釈序」(南京『新亜細亜』第9巻第2期,1935/2)。原著:黄懺華居士『金剛頂発菩提心論浅略釈』。
○28,29(致蒋会長書)	
○28,29(致童子軍総会籌備処諸同志書)	
南京『中央日報』○24(怎様団結救中国)	
南京『中央日報』「童子軍設計委会閉幕」	
	中政会第353次会議に出席し、西北農林専科学校籌備委員会常務委員の辞意を表明。
『考試院施政編年録』第二編	
南京『新亜細亜』第6巻第2期○29(重修呉興明倫堂記)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○28,29	
○33	
南京『中央日報』「救国于危亡憂患中」	
南京『中央夜報』「林主席戴院長今晨赴西安視察」	国民政府主席林森とともに南京発。副首都と西北農林専科学校の建設に関して陸路で陝西の視察に向かう。
	徐州を経て鄭州着。
	陝西省華陰県着。華山に登る。
	臨潼着。
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	西安着。中国考古学会設立、同会は戴季陶を理事に任命。
○33	
○33	
○33	
	咸陽原の周陵、涇陽県の涇恵渠を見学。
○33	興平県、武功県に向かう。西安に戻る。
○33	
	西安発。臨潼着。
○23	洛陽着。
	洛陽発。
	安徽省滁州着。瑯琊山に登る。
南京『新亜細亜』第6巻第1期○29	更正:南京『新亜細亜』第6巻第2期,1933/8。
南京『中央夜報』「林主席等今午抵京」	南京着。
南京『中央日報』「林主席戴院長返京」	
南京『中央日報』「今日奉安紀念」	国民政府、塘沽停戦協定を調印。
『海潮音』第14巻第6号	原典:班禅原著,劉家駒初訳,楊質夫校訳。
南京『考試院公報』1933年第6期	
中印学会編『中印学会——計劃、総章、縁起』○29(贈譚雲山先生序)	主な転載箇所:「贈譚云山序」(南京『新亜細亜』第6巻第4期,1933/10)。参考資料:『中印人民友好関係史(1851-1949)』236-237頁。
南京『新亜細亜』第11巻第6期○29	
南京『新亜細亜』第11巻第6期○29(致潘鑑卿妹丈書)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○23	
○33	

△1933/6/5▲1933/6	【講演・談話記録】興復陝西是興復中国重大工作〈*国民政府の紀念週にて〉	戴伝賢
△1933/6/9▲1933/8	【著作】〈*王一亭、聞蘭亭宛の書簡〉	賢
△1933/6/9	【著作】致行政院汪院長〈*汪精衛〉書	
△1933/6/10	【著作】致王次甫先生書	
△1933/6/10	【著作】致中国童子軍総会籌備処諸同人書	
△1933/6/11	【著作】致于右任、張溥泉先生書	
△1933/6/11	【著作】致鈕惕生先生書	
△1933/6/12▲1933/7	【著作】致陳大白先生書	賢
△1933/6/12	【著作】致于右任、張溥泉先生書	
△1933/6/12	【著作】致李滄礎先生書	
△1933/6/14	【著作】致宝華山妙柔、戒澄和尚書	
△1933/6/15	【著作】遊陝述懐致楊虎城書〈*宝華山隆昌寺にて〉	
△1933/6/15	【著作】致熊天翼先生書〈*宝華山隆昌寺にて〉	
△1933/6/15	【著作】致張伯英先生書〈*宝華山隆昌寺にて〉	
△1933/6/16▲1936/12	【著作】蔣校長中央陸軍軍官学校第一期同学録序書後	
△1933/6/16▲1937/1	【著作】中央陸軍軍官学校先烈紀念塔碑文	
△1933/6/17	【著作】致宝華山隆昌寺妙柔和尚暨監院教授書	
△1933/6/18	【著作】致鈕惕生先生書	
△1933/6/19	【著作】致林璧予諸同志書	
△1933/6/19	【著作】致総理陵園工程処諸同志書	
△1933/6/19	【著作】致許公武先生書	
△1933/6/19	【著作】致洛陽白馬寺徳浩和尚書	
△1933/6/19	【著作】致瑯琊山開化寺達修和尚書	
△1933/6/22	【著作】致陳炳光先生書	
△1933/6/22	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	
△1933/6/23	【著作】伍非百先生所著名学諸書序	
△1933/6/23	【著作】〈*伍非百宛の書簡〉	
△1933/6/24	【著作】致呉稚暉先生書	
△1933/6/24	【著作】致于右任先生書	
△1933/6/25	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1933/6/25▲1935/1	【著作】贈某喇嘛僧	
△1933/6/25	【著作】致林壁予部長書	
△1933/6/27	【著作】致朱騮先先生書	
△1933/6/28	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉書	
△1933/6/28	【著作】致発姪書	
△1933/6/30	【著作】致朱騮先先生書	
△1933/6/?	【著作】関於経営西北農林専校辦法之意見書	
△1933/7/1	【著作】贈蓮花十偈並答其所説三偈	
△1933/7/1	【著作】致盧于正先生書	
△1933/7/1	【著作】致盧于正工程師書	
△1933/7/2▲1936/12	【著作】致許秘書長〈*許公武〉書	
△1933/7/2	【著作】致許秘書長書	
△1933/7/2	【著作】致呉興戴県長〈*戴時熙〉書	
△1933/7/2	【著作】致陝西邵主席〈*邵仲輝〉楊主任〈*楊虎城〉電	
△1933/7▲1938/10	【著作】〈*程淯『歴代尊孔記　孔教外論合刻』の序〉	
△1933/7/5	【著作】〈*王一亭宛の書簡〉	
△1933/7/6▲1936/7	【著作】致王一亭先生書	
△1933/7/5	【著作】致于右任先生書	
△1933/7/7	【著作】致中央党部葉秘書長〈*葉楚傖〉書	
△1933/7/10▲1937/1	【著作】致辛樹幟先生書	
△1933/7/11	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉書	
△1933/7/12	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	
△1933/7/13	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	
1933/7/16		
1933/7/18		
△1933/7/19	【著作】題自書孝経拓本贈廬山黄龍寺	
△1933/7/22▲1933/9	【講演・談話記録】仏教信徒報恩弘法要従尋常的十善道做起〈*大林寺蓮社(廬山)にて〉	戴季陶
△1933/7/25	【著作】致太虚法師書	
△1933/7/25	【著作】自書孝経拓本贈周生天健	
△1933/7/26	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1933/7/?	【著作】関於考試院印刷所之意見	
△1933/7/?	【著作】致天池寺心月和尚書〈*廬山より〉	
△1933/7/?▲1933/10	【著作】廬山頌	
△1933/7/?▲1933/10	【著作】万松林雅集以遠公廬山詩分韻得遊字	
△1933/7/?▲1933/10	【著作】花径雅集以楽天桃花詩分韻得人字	
△1933/7/?▲1933/10	【著作】観音成道日廬山聯句(有序)	
△1933/7/?▲1936/12	【著作】致許秘書長書	
▲1933/8	【著作】研究辺疆政教的重要	戴季陶
△1933/8/1	【著作】致曹纕蘅先生書	
△1933/8/2	【著作】致家斉姪書	
△1933/8/5	【著作】贈曹纕蘅先生序	
△1933/8/5	【著作】〈*曹纕蘅宛の書簡〉	
△1933/8/5	【著作】致太虚法師書	
△1933/8/6▲1933/9	【著作】薬師仏法会十二大願文	
△1933/8/9	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉書	
△1933/8/14	【著作】致小江弟書	
△1933/8/15	【著作】致陳鳴謙師長書〈*廬山より〉	
△1933/8/15	【著作】致楊暢卿先生書	
△1933/8/16▲1933/10	【著作】贈中国口琴会序〈*長江船中にて〉	
1933/8/17		
△1933/8/?▲1933/10	【著作】有感寄太虚上人	戴伝賢
△1933/8/?▲1933/10	【著作】遊南山有感	
△1933/8/?▲1933/10	【著作】観山花有感	
△1933/8/?▲1933/10	【著作】廬林訪膺白〈*黄膺白〉不遇	
▲1933/9	【著作】秀峯瀑題石	戴伝賢
▲1933/9	【書画】美濃部達吉著　楊開甲訳日本行政法撮要	孝園
1933/9/1		
△1933/9/6	【著作】覆曹纕蘅先生書	
△1933/9/7	【著作】致王一亭先生書	
△1933/9/9	【著作】作人根本訓条(敬書慈母手書孝経後以貽緯国〈*蔣緯国〉賢姪)	
△1933/9/9	【著作】覆楊纘緒先生書	
△1933/9/9	【著作】致蔣緯国姪書	
△1933/9/13▲1933/10/16	【著作】祝第五届全国運動会	戴季陶
△1933/9/13	【著作】中国国民党印度醒儞第二支部中山学校開幕贈言	
△1933/9/13	【著作】時事月報全国運動大会専号題詞	
△1933/9/13	【著作】致蔣委員長〈*蔣介石〉電	

南京『中央党務月刊』第59期	
『海潮音』第14巻第8号「仏教要聞:上海――戴伝賢提倡追薦陣亡将士」○29(致王一亭、聞蘭亭先生書)	
○29	
○29	
○28,29(致童子軍総会籌備処諸同志書)	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第6巻第1期○29	
○29	
○29	
○29	
○23,29(致陝西楊主任書)	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第12巻第6期○29	
南京『新亜細亜』第13巻第1期○29	
○29	
○29	全2篇。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29(附致伍非百先生書)	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第9巻第1期○29(贈某喇嘛僧序)	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○23	
○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第12巻第6期○29(致本院許秘書長書),41(同前)	
○29,41	
○29	
○33	
程済『歴代尊孔記　孔教外論合刻』第十五版○29(歴代尊孔記書後)	主な転載箇所:南京『新亜細亜』第13巻第1期,1937/1。
○29(附致王一亭先生書)	
南京『新亜細亜』第12巻第1期○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第13巻第1期○29	
○29	
○29	
○29	
	蒋介石の招待に応じ、南京発。廬山に向かう。
	廬山着。
○29	
南京『新亜細亜』第6巻第3期	主な転載箇所:戴季陶「仏教信徒報恩宏法要従尋常的十善道做起」(『海潮音』第14巻第9号,1933/9);「暑期廬山之仏化」(同前);太虚大師講『仏説十善業道経講要(附戴季陶先生仏教信徒報恩弘法要従尋常的十善道做起)』寛道法師、夏献章居士印送。
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第12巻第6期	
南京『新亜細亜』第6巻第2期	
○29	
○33	
○29	
○29(附致曹纕蘅先生書)	
○29	
『海潮音』第14巻第9号	主な転載箇所:「戴院長創七仏法会」(南京『蒙蔵旬刊』第85期,1934/6/10付)。
○29	
○33	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	廬山発。
	南京着。
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	主な転載箇所:『海潮音』第14巻第10号,1933/10。
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期○29(廬林訪膺白不遇)	
『海潮音』第14巻第9号	
美濃部達吉『日本行政法撮要』楊開甲訳述,陳大斉・徐天嘯・董道寧校閲	
	上海着。
○29	
○29	
○29	中国国民党中央党部の総理第一次起義第38週年紀念大会(南京)に出席。
○29	
○29	
『東方雑誌』第30巻第20号	
○29	
○29	
○33	

△1933/9/13<*もしくは16>▲1933/9/17-9/18	【講演・談話記録】心力体力財力節約真義<*無線放送にて>	
△1933/9/15	【著作】致王一亭先生書	
△1933/9/16	【著作】致于右任先生書	
△1933/9/16	【著作】致行政院楮秘書長<*楮民誼>書	
△1933/9/16	【著作】致宝華山徳寛、妙柔和尚書	
△1933/9/18▲1933/9/18	【講演・談話記録】<*国民政府の紀念週、九一八第二週紀念にて>	
△1933/9/19	【著作】致唐三先生書	
△1933/9/21	【著作】再致中国童子軍総会籌備処同人書	
△1933/9/23	【著作】致駐徳劉公使<*劉子楷>書	
△1933/9/25	【著作】現代歩兵軽重兵器詳解序	
△1933/9/25	【著作】致張溥泉王子元先生電	
△1933/9/28以前	【著作】中国童子軍教育綱領	
△1933/9/28	【著作】中国童子軍総会総章	
1933/9/?		
△1933/9▲1933/10/10	【著作】<*第2期全国運動大会のために>	戴伝賢
△1933/9▲1933/9	【著作】序<*美濃部達吉『日本行政法撮要』>	戴伝賢
△1933年秋九月	【著作】林文忠公回疆竹枝詞書後	
△1933/9/?	【著作】批典試委員会処務規定草案	
△1933/9▲1945/5/10	【著作】関於高考及格人員分発規程草案之意見	
△1933年仲秋月	【著作】康蔵軺征記序	
△1933年秋	【著作】勗印度中学校従事教育諸君	
△1933年秋▲1933/10	【著作】中印両民族之関係	戴伝賢
△1933/10/2▲1937/4<*実際は5/31以後>	【著作】致円瑛書	
△1933/10/3	【著作】致瑯琊山開化寺達修和尚書	
△1933/10/8▲1936/1<*実際は2/4以後>	【著作】致班禅大師電	
△1933/10/10▲1933/10/11	【講演・談話記録】<*第2期全国運動大会(南京)にて>	
△1933/10/10	【著作】致蔡哲夫先生書	
△1933/10/12	【著作】致国術館張館長<*張子蘆>書	
△1933/10/12	【著作】覆王一亭先生書	
△1933/10/13	【著作】致蔣委員長<*蔣介石>電	
△1933/10/13	【著作】致国術館張館長<*張子蘆>書	
△1933/10/14	【著作】<*九世班禅大師宛の書簡>	
△1933/10/16▲1933/10/17	【講演・談話記録】関於考試制度之建立的問題<*中国国民党中央党部の第100次総理紀念週にて>	
△1933/10/17	【著作】国府公布高等考試及格人員分発規定	
△1933/10/23	【著作】暹邏晨鐘日報贈言	
△1933/10/29	【著作】為咸陽造林事致王子元書	
△1933/10/31	【著作】説五権制度	
△1933/10/?	【著作】三宝顔中華学校十二週年紀念贈言	
▲1933/11	【著作】勉高等考試及第諸生<*論今後官吏保障之趨勢>	
△1933/11/1	【著作】<*九世班禅大師宛の書簡>	
△1933/11/2▲1933/12	【著作】慎餘書屋画記	伝賢
△1933/11/2	【著作】為咸陽造林事致斉敬鑫書	
△1933/11/<*3>▲1933/12	【著作】<*Corbusier, L.『明日之都市』の序>	戴伝賢
▲1933/10, 1934/7, 1935/7	【書画】子任乃強先生著西康図経	孝園
△1933/11/3▲1933/10	【著作】<*任乃強『西康図経　境域篇』の序>	戴伝賢
△1933/11/8	【著作】吉安劉府君墓表	
△1933/11/9	【著作】<*劉経扶宛の書簡>	
△1933/11/9	【著作】致唐鏡円先生書	
△1933/11/14	【著作】曹浄修先生修辞学序	
△1933/11/17	【著作】致鈕惕生先生書	
△1933/11/18▲1933/11/19	【講演・談話記録】<*高等考試及格者の発表日にあたって>	
△1933/11/20	【著作】致汪院長<*汪精衛>書	
1933/11/22		
△1933/11/25▲1933/11/26	【講演・談話記録】<*中央陸軍軍官学校第8期第二総隊学生の畢業典礼にて>	
△1933/11/27▲1933/11/28	【講演・談話記録】<*中国国民党中央党部の第106次総理紀念週にて>	
△1933/11/28▲1934/1	【著作】<*敬礼大慈・大悲・十方・三世・常住三宝>	戴伝賢
△1933/11▲1936/10	【著作】因明入正理論浅釈序	伝賢
△1933/11/?	【著作】<*陳百年宛の書簡>	
△1933/冬<*11>月▲1934/1/1	【著作】教育立国之前例——清代之教育方針	戴伝賢
△1933/11/?	【著作】教授鈕琇江先生伝	
▲1933/12	【書画】伍非百先生著墨子大義述	孝園
▲1933/12	【書画】<*梁心『対日作戦方略』の題詞>	
△1933/12/2	国府公布頒給勲章条例	
△1933/12/3	【著作】覆陳樹人先生書	
△1933/12/4▲1933/12/5	【講演・談話記録】<*高等考試について,国民政府の総理紀念週にて>	
△1933/12/8▲1936/1<*実際は2/4以後>	【著作】致班禅大師函	
△1933/12/10▲1934/2	【著作】為留日同学会事致居覚生王太蕤先生書	
1933/12/17		
△1933/12/18	【著作】致蕭文哲同志書	
△1933/12/18	【著作】致夏之時先生書	
△1933/12/20▲1936/1<*実際は2/4以後>	【著作】致班禅大師電	
△1933/12/20	【著作】勗中国日報諸同志	
△1933/12/20	【著作】中国日報二週年紀念贈言	
△1933/12/20	【著作】致雷吉九先生書	
△1933/12/21▲1936/1<*実際は2/4以後>	【著作】致拉薩安欽大師電	
△1933/12/22	【著作】<*九世班禅大師宛の書簡>	
△1933/12/23	【著作】致向副軍長<*向育仁>電	
△1933/12/23	【著作】致向副軍長<*向育仁>書	
△1933/12/27	【著作】<*九世班禅大師宛の書簡>	
△1933/12/27	【著作】致浙江教育庁陳庁長<*陳布雷>書	
△1933/12/30	【著作】本院<*考試院>向中政会議提出公務員登記条例草案	
△1933/12/?	【著作】告隆昌寺衆対於災禍降臨応有之修省	
△1933/12/?	【著作】跋薬師法会願文贈譚雲山先生書	
△1933/12/?	【著作】召集全国考銓会議之指示	
△1933	【著作】敬告隆昌寺大衆詞	
△1933	【著作】論都市建設	
△1933	【著作】対公務員登記条例草案内五六七各条文之批示	
▲1934/1	【著作】贈言十四則<*第2期高等考試及格者,監試委員などに対して>	
△1933-1934	【著作】対編輯行政教程之指示	
▲1934/1	【書画】青海省政府民政庁編最近之青海	戴伝賢
▲1934/1	【書画】唐柯三著赴康日記	孝園
▲1934/1	【書画】王応榆著黄河視察日記	孝園
△1934/1/1▲1934/1	【著作】礼楽与民生	戴伝賢
△1934/1/4	【著作】<*九世班禅大師宛の書簡>	

南京『中央夜報』○24(心力体力財力的節約真義)	主な転載箇所:戴季陶「心力体力財力節約的真義」(南京『新亜細亜』第6巻第5期,1933/11)。
○29	
○29	
○29	
○29	
南京『中央夜報』「今晨中央国府沈痛紀念「九一八」」	汪精衛、葉楚傖、陳果夫などと華北事件、党務、外交などの問題について会談。
○29	国民政府委員会第8次会議は戴季陶を中央陸軍軍官学校校務委員会委員に任命。
○28,29(致童子軍総会籌備処諸同志書)	
○29	
○29	
○33	
○28,29	
○28	四期中執会90次常会は「中国童子軍総会総章」を採択。
	第二期国術国考考試委員長に任命される。南京『中央日報』1933/9/29付。
南京『中央日報』国慶紀念特刊	
『日本行政法撮要』	
○29	
○33	
『考政学報』第2期○33(批修正高等考試及格人員分発規程草案)	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第6巻第4期	
南京『新亜細亜』第13巻第4期○29(致円瑛法師書)	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
南京『中央日報』副刊「中央日報全国運動大会特刊」;「林汪蒋等之訓詞」	(第2期)全国運動会名誉副会長に任命される。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「考試制度之建立」	主な転載箇所:戴伝賢「関於考試制度之建立的問題」(南京『中央党務月刊』第63期,1933/10)。
『考試院施政編年録』第二編	
○29	
○23,29(致王子元先生書)	
○29	
○29	10月、第五次囲剿戦を開始。
南京『考試院公報』1933年第11期○29,41	主な転載箇所:考試院人事処編『輔導通訊』創刊号,1944/6。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第6巻第6期○29	
○23,29(致斉敬鑫先生書)	
「明日之都市序」(南京『新亜細亜』第6巻第6期)○29(明日之都市序),30(明日之都市)	原著:Corbusier,L.『明日之都市』盧毓駿訳。
任乃強『西康図経』境域篇;魏崇陽校閲,民俗篇;地文篇	
任乃強著,魏崇陽校閲『西康図経　境域篇』○29(西康図経	
○29	
○29(附致河南劉主席書)	
○29	
○29	
○29	
南京『中央日報』「高考昨発榜」	
○29	福建事件勃発(福州)。
	四期中政会385次会議は戴季陶を国際問題研究組委員(召集人)に任命。中華共和国人民革命政府設立(福州)。主席李済深。1934/1/16-1/21同政府解散。
南京『中央日報』「軍校八期生昨行畢業典礼」	主な転載箇所:戴季陶「以厳為愛的教育精神」(南京『新亜細亜』第6巻第2期,1933/8)。
南京『中央日報』「中央紀念週」	主な転載箇所:戴伝賢「危難時期人人応自省」(南京『中央党務月刊』第64期,1933/11)。
南京『新亜細亜』第7巻第1期○29(歓迎照空法師等致詞)	
南京『新亜細亜』第12巻第4期○29	
○29(附致陳百年先生書)	
南京『中央日報』元旦増刊○29(教育立国之前例——一名清代之教育方針)	主な転載箇所:南京『考試院公報』1934年第1期,1934/1。
○29	
伍非百『墨子大義述』	
梁心(陽光)『対日作戦方略』	
『考試院施政編年録』第二編	
○29	
南京『中央日報』「本届高考経過」	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29(致班禅大師書)	
南京『新亜細亜』第7巻第2期○29(致居覚生、王太蘧先生書)	
	ダライラマ13世、ラサで没。
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29	
○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○33(致安欽大師電)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
『考試院施政編年録』第二編	
○29	
○29	
○33,41	
○29	1932年、浙江省呉興県の旧帰安県学宮大成殿(文廟)に明倫堂(公会所)と明倫園(一般開放の公園)を建立することを発起。1933年落成。
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第7巻第1期	全14篇。
○33	
青海省政府民政庁編『最近之青海』	
唐柯三著,陳大斉編『赴康日記』	
王応榑『黄河視察日記』	
南京『新亜細亜』第7巻第1期;南京『考試院公報』1934年第1期○29,30	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	

△1934/1/5▲1934/1/7	【著作】〈*伍朝枢の家族への弔電〉	戴伝賢
△1934/1/6	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書	
△1934/1/8▲1934/1/28	【著作】〈*陳伯南、鄒海濱宛の書簡〉	伝賢
△1934/1/8▲1935/1	【著作】致龍積之先生書	
△1934/元月四十五歳心斎之日(1/10)▲1934/2	【著作】仁声歌集序	
△1934/1/10▲1935/1	【著作】辺疆叢書序	
△1934/1/10	【著作】第一次中国教育年鑑序	
△1934/四十五歳心斎之日(1/10)▲1934/1	【著作】〈*熊耀文編『総理対於蒙蔵之遺訓及中央対於蒙蔵之法令』の序〉	戴伝賢
△1934/1/13	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/1/14▲1934/2	【講演・談話記録】〈*新亜細亜学会第4次会員大会にて〉	
△1934/1/16	【著作】致傅煥光先生書	
△1934/1/18	【著作】呈中央執行委員会全体会議文	
△1934/1/18	【著作】致劉克謙諸同志書	
△1934/1/18	【著作】致班禅大師書	
△1934/1/19	【著作】致林璧予先生書	
△1934/1/19	【著作】致羅桑堅賛先生書	
△1934/1/19	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
1934/1/20-1/25		
△1934/1/22▲1934/1/23	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部、国民政府の総理紀念週にて〉	
△1934/1/26▲1934/1/27	【講演・談話記録】〈*首都市民慶祝四中全会暨歓迎蒋委員長剿匪討逆凱旋大会にて〉	
△1934/1/29▲1934/1/30	【講演・談話記録】〈*中国国民党四期四中全会の経過などについて,国民政府の紀念週にて〉	
▲1934/1/31	【著作】〈*周柏年(覚)を追悼する輓聯〉	
△1934/1(立春後七日)▲1934/3	【著作】懺摩之自覚——聞首都将迎梅蘭舞而作	
△1934/1/?	【著作】批中央学術院畢業同学呈請核定資格案	
△1934/1▲1935/8?	【著作】〈*問礼亭碑陰〉	戴伝賢
▲1934/2	【著作】〈*周湘舲を追悼する輓聯〉	戴伝賢
▲1934/2	【著作】〈*周柏年を追悼する輓聯〉	戴伝賢
1934/2/1?		
△1934/2/3	【著作】致蒙蔵委員会石委員長〈*石青陽〉書	
1934/2/8		
△1934/2/10▲1934/4	【著作】与徳浩和尚書	
△1934/2/10	【著作】致国府謝秘書書	
△1934/2/14	【著作】致于右任先生書	
△1934/2/16▲1934/2/17	【講演・談話記録】〈*中国育嬰保育会4週年成立紀念、新会所落成典礼にて〉	
△1934/2/17	【著作】致家興姪電	
△1934/2/21▲1936/7	【著作】致太虚大師書	
△1934/2/21	【著作】覆劉仁航先生書	
△1934/2/21	【著作】致家興姪電	
△1934/2/22▲1934/3	【著作】与王玉堂先生書	戴伝賢
△1934/2/22▲1934/4	【著作】与徳寛和尚書	
△1934/2/25▲1937/4〈*実際は5/31以後〉	【著作】致康寄遥先生書	
△1934/2▲1934/3	【著作】農隠園序	孝園主人
1934/3/1		
△1934/3/4▲1934/6	【著作】与王玉堂先生書〈*臥龍寺にて〉	伝賢
△1934/3/7▲1934/3/30	【著作】〈*孫科宛の書簡,憲法草案について,上海より〉	伝賢
△1934/3/10▲1934/4	【著作】〈*太虚宛の書簡〉	伝賢
△1934/3/11▲1935/2	【著作】致譚雲山先生書	
1934/3/19		
△1934/3/24	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書	
△1934/3/25	【著作】致太虚法師書	
△1934/3/25	【著作】致陳百年先生書	
△1934/3/25	【著作】致林璧予先生書	
△1934/3/26▲1934/3/27-3/28	【講演・談話記録】西北救災興業的起点〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1934/3/27	【著作】致于院長〈*于右任〉電	
△1934/3/27	【著作】致王一亭先生及仏教会電	
△1934/3/28▲1934/3/28	【講演・談話記録】〈*西北各省視察の出発前に,南京にて〉	
1934/3/30		
△1934/3/31	【著作】致青海馬主席〈*馬麟臣〉書	
△1934/3▲1934/4	【著作】去迷生信乃救国救人之道	戴伝賢
△1934/3/?	【著作】論迷信	
△1934/3/?	【著作】周夫人墓表	
△1934/3/?	【著作】批銓叙部呈覆「奉令銓用田僑未有法律依拠」案	
△1934/4/1▲1934/4/10	【講演・談話記録】〈*潼関にて〉	
△1934/4/1	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,西安より〉	
△1934/4/3▲1935/1	【著作】与慈雲和尚、康寄遥先生書	
△1934/4/3	【著作】致王子元先生書〈*臥龍寺(長安)にて〉	
△1934/4/3▲1934/6	【著作】〈*太虚宛の書簡〉	伝賢
△1934/4/3	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉書	
1934/4/4		
1934/4/5		
△1934/4/9	【著作】敬告武装同志諸君	
△1934/4/11▲1934/4/13	【著作】請厳禁学術界発掘古墓電	戴伝賢
△1934/4/12	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,蘭州より〉	
△1934/4/13▲1934/4/16	【講演・談話記録】〈*蘭州にて〉	
△1934/4/13▲1934/4/16	【講演・談話記録】〈*中国国民党甘粛省党部にて〉	
△1934/4/13▲1934/4/16	【講演・談話記録】〈*甘粛省高等法院にて〉	
△1934/4/15-4/18▲1934/5	【著作】告青海同胞書〈*西寧にて〉	戴伝賢
△1934/4/18▲1934/4/20	【講演・談話記録】〈*西安にて〉	
△1934/4/18	【著作】上国府林主席〈*林森〉電〈*西安より〉	
△1934/4/18	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,西安より〉	
1934/4/19		
1934/4/20		
△1934/4/21	【著作】国立西北農林専科学校奠基祝詞	戴伝賢
△1934/4/21	【著作】記西北農林専科学校奠基另一祝詞	

南京『中央日報』「国府令恤伍朝枢」	
○29	
『広州民国日報』「陳済棠復戴季陶――論読経尊孔以正人心」○29(致陳伯南、鄒海濱先生書)	主な転載箇所:「致陳伯南、鄒海濱先生書」(南京『新亜細亜』第7巻第2期,1934/2);「為中山大学建設事戴院長致陳済棠等函」(南京『中央日報』1934/2/8付)。
南京『新亜細亜』第9巻第1期○29	
南京『新亜細亜』第7巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第9巻第1期○29	
○29	
熊耀文編,呉鶴齢・張黙濤審校『総理対於蒙蔵之遺訓及中央対於蒙蔵之法令』	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
「会務概要――新亜細亜学会第四次会員大会記事」(南京『新亜細亜』第7巻第2期)	
○29	
○29,41	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	中国国民党四期四中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、大会宣言起草委員会委員(召集人)に任命。
南京『中央日報』「戴伝賢昨出席報告中央拡大紀念週」	
南京『中央日報』「昨晨市民大会慶祝全会迎蒋凱旋」	
南京『中央日報』「昨国府紀念週」	
南京『中央日報』「中政会秘書処暨監院等昨日公祭周柏年」	
南京『新亜細亜』第7巻第3期○29	
○33	
戴伝賢輯『問礼亭詩初集』(南京:考試院)	
上海『湖州』第5巻第7・8号合刊	
上海『湖州』第5巻第7・8号合刊	
	党史史料陳列館建築委員会委員に任命。1936/10/10党史史料陳列館落成(南京)。
○29	
	四期中執会108次常会は戴季陶を国史館建築委員に任命。
南京『新亜細亜』第7巻第4期○29(致徳浩和尚書)	
○29	
○29	2/14-2/16国民政府はダライラマ13世追薦法会を開く(考試院寧遠楼と鶏鳴寺)。
南京『中央日報』「中国育嬰保育会昨挙行四週紀念会」	
○33	
南京『新亜細亜』第12巻第1期○29(致太虚法師書)	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第7巻第3期	
南京『新亜細亜』第7巻第4期○29(致宝華山徳寛和尚書)	
南京『新亜細亜』第13巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第7巻第3期○29	
	「満洲国」、帝政実施。3月、安徽省隆阜の戴氏宗祠、戴震読書処、東原図書館を訪問。戴震の字は東原。
南京『新亜細亜』第7巻第6期	
南京『中央夜報』「戴院長致書孫院長対憲草案貢献意見四点」○29(致立法院孫院長書),30(関於憲法問題)	
『海潮音』第15巻第4号「戴季陶居士来書」	
南京『新亜細亜』第9巻第2期○29	
	時輪金剛法会設立、同会は戴季陶を副理事長に任命。
○29	
○29	
○29	
○29	
南京『中央日報』	
○33	
○33	
南京『中央夜報』「戴院長今晨北上」	南京発。交通、水利、慈善救済事業、西北農林専科学校建設に関して陸路で河南、陝西、甘粛、青海の各省の視察に向かう。徐州着。
	洛陽着。
○29	
南京『新亜細亜』第7巻第4期	
○29	
○29	
○33	
南京『中央日報』「戴院長到陝後行動」	潼関着。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第9巻第1期○29(致慈雲和尚、康寄遥先生書)	
○29	
『海潮音』第15巻第6号「戴季陶先生来書」	
○29	
	西安着。
	焦易堂、許公武、楊虎城、邵力子、王応榆などとともに、咸陽の周陵に行き、文王、武王、周公の墓を祀り植樹する(第一次民族掃墓典礼)。その後、興平の茂陵に行き、前漢武帝、衛青、霍去病の墓を祀り植樹する。関連した批判記事:「異哉所謂民族掃墓!」(『文化与教育』第16期,1934/4/20付)。
○29	
上海『時事新報』「戴伝賢通電請厳禁発掘古墓尋取学術材料亦在厳辦列」○29	「救国救民」、「国本を培いて国力を厚くする」を名目に、「国学、科学を研究する諸家が古墓を発掘する」ことを厳禁するという通電を発する。主な転載箇所:「戴請厳禁掘墓取物」(南京『蒙蔵旬刊』第85期,1934/6/10付)。王世杰の返信:「為発掘古墓事　王世杰覆戴伝賢――発掘取物係古董商之行為　学術機関実際上尚属罕見」(上海『時事新報』1934/4/14付)。蔡元培の返信:〈*傅斯年代作〉「覆戴季陶函」1934/4/14付(南京『中央日報』1934/4/18付);『蔡元培文集』巻12・書信(下)261-264頁。関連した批判記事:「沢及枯骨」(上海『時事新報』「星期評壇」1934/4/15付);熊夢飛「家中枯骨作祟――我亦参加戴季陶与蔡子民王世杰徐炳昶先生之筆戦」(『文化与教育』第17期-第18期,1934/4/30付-1934/5/10付);張競生「論発掘古墓」(上海『時事新報』「奇論之篇」1934/5/23付)。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	西安発。空路、蘭州着。
南京『中央日報』「戴院長等抵蘭州」	不詳。
南京『中央日報』「戴院長等抵蘭州」	不詳。
南京『中央日報』「戴院長等抵蘭州」	不詳。
南京『新亜細亜』第7巻第5期○29	主な転載箇所:戴季陶「敬告青海省諸位同胞伯叔兄弟姊妹書」(南京『蒙蔵旬刊』第86期,1934/6/30付)。4/15、蘭州発。空路、西寧着。モスクを訪問。
南京『中央日報』「戴院長等赴武功」	西寧発(その後、西寧の青海省立中学聯合図書館、中央政治学校青海分校と、陝西省の眉県民衆図書館に書籍を寄贈)。空路、西安着。
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	武功着。
	西北農林専科学校(武功)の奠基典礼に出席。
○23,29(西北農林専科学校奠基祝詞),40(同前)	
○29	

△1934/4/21▲1934/4/23	【講演・談話記録】〈*眉県にて〉	
△1934/4/22	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,西安より〉	
△1934/4/?▲1934/6	【著作】仁王護国般若波羅密多経頌書後〈*長安にて〉	
△1934/4/?	【著作】致許秘書長〈*許公武〉書〈*長安臥龍寺より〉	
△1934/4/23	【著作】国府公布公務員登記条例	
△1934/4/24	【著作】致陝西邵主席〈*邵仲輝〉電〈*洛陽車中にて〉	
1934/4/25		
△1934/4/26▲1934/4/27	【講演・談話記録】〈*西北各省視察から帰京して〉	
△1934/4/26	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/4/27▲1934/4/28	【著作】〈*朱紹良など宛の書簡〉	戴伝賢
△1934/4/27▲1934/4/28	【著作】〈*王子元など宛の書簡〉	戴伝賢
△1934/4/27▲1934/4/28	【著作】〈*鄧徳輿宛の書簡〉	戴伝賢
△1934/4/27	【著作】致于院長〈*于右任〉電	
△1934/4/27	【著作】致林璧予部長電	
△1934/4/28▲1934/4/29	【講演・談話記録】〈*安欽大師を迎えて〉	
△1934/4/28	【著作】蒋校長人格与修養演講集序	
△1934/4/28	【著作】覆林璧予部長電	
△1934/4/28	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/4/30▲1934/5/1	【講演・談話記録】視察西北之情形与感想〈*国民政府の紀念週にて〉	
△1934/4/30	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電(一)	
△1934/4/30	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電(二)	
△1934/4	【著作】周陵志敍	戴伝賢
△1934/4/?	【著作】贈汶潔甫先生序	
△1934/5/1	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電	
1934/5/2		
△1934/5/7?▲1934/5/8	【講演・談話記録】〈*杭州にて〉	
1934/5/16		
1934/5/17		
△1934/5/21	【著作】致張心一先生電	
△1934/5/21	【著作】致張公権呉達銓先生電	
▲1934/5/23	【著作】〈*王一亭、屈文六など宛の書簡〉	
△1934/5/24	【著作】致行政院汪院長〈*汪精衛〉書〈*曲阜の孔子廟修理について〉	
△1934/5/24	【著作】呈中央政治会議文	
△1934/5/24	【著作】覆斉敬鑫先生書	
1934/5/25頃		
△1934/5/27▲1934/5/28	【講演・談話記録】一件大事一件小事〈*全国財政会議の閉幕典礼にて〉	
△1934/5/28	【著作】致張公権先生書	
△1934/5/28	【著作】致于右任先生書	
△1934/5/28	【著作】〈*タゴールRabindranath Tagore宛の書簡〉	戴伝賢
△1934/5/31▲1934/6	【著作】致青海馬主席〈*馬歩芳〉函	
△1934/5▲1934/3〈*実際は1934/6以後〉	【著作】序言一〈*許応錤『衍祥堂述聞』の序〉	戴伝賢
△1934/?/?▲1937/4〈*実際は5/31以後〉	【著作】記班禅大師	
1934/5		
△1934/6/4▲1934/7	【著作】復康寄遥先生函	
△1934/6/8	【著作】致魏乾初先生書	
△1934/6/9	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/6/10	【著作】致太虚法師書	
△1934/6/14	【著作】覆葉誉虎先生書	
△1934/6▲1934/6/16	【著作】〈*中央陸軍軍官学校10周年を記念して〉	戴伝賢
△1934/6/15▲1934/6/17	【講演・談話記録】〈*中央陸軍軍官学校陣亡先烈追悼、成立10周年記念の懇親大会にて〉	
△1934/6/17▲1934/6/18	【講演・談話記録】〈*中央陸軍軍官学校軍官訓練班第2期学生などの畢業典礼、第10期学生入学典礼にて〉	
△1934/6/19	【著作】批答童子軍理事会関於裴列濱美分会要求我国在裴童子軍加入一案文	
△1934/6/19	【著作】覆蒋緯国姪書	
△1934/6/19	【著作】致虎臣先生書	
△1934/6/20	【著作】覆山東韓主席〈*韓向方〉電	
▲1934/6/25	【著作】仁道正法論	戴伝賢
△1934/6/28	【著作】復陳樹人先生書	
△1934/6/29	【著作】編訂贈送青海図書館図書目録序	
△1934/6/?▲1935/2	【著作】鋳献三民主義銅鐘案	
▲1934/7	【講演・談話記録】救中国須従心理革命始	
▲1934/7	【講演・談話記録】実行三民主義的基礎	
▲1934/7	【講演・談話記録】是非善悪的辨別真偽利害的判断	
▲1934/7	【講演・談話記録】総理紀念週的意義	
△1934/7/7▲1936/9	【著作】般若二呪	戴伝賢
△1934/7/9	【著作】致李儀祉先生電	
△1934/7/13	【著作】覆修理曲阜孔廟籌備会電	
△1934/7/16	【著作】覆陶甲三先生書	
△1934/7/16	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/7/19	【著作】致甘粛教育庁水庁長〈*水楚琴〉書	
1934/7/26		
△1934/7/28	【著作】覆斉敬鑫先生書	
△1934/7▲1934/7	【著作】〈*辺疆政教制度研究会編『清代辺政通考』の序〉	戴伝賢
△1934/8/1	【著作】再覆修復曲阜孔廟籌備委員会電	
△1934/8/2	【著作】復劉子任先生書	
△1934/8/3	【著作】致教育部顧司長〈*顧樹森〉書	
△1934/8/3	【著作】致焦易堂先生書	
△1934/8/3	【著作】覆山東教育庁何庁長〈*何仙槎〉電	
△1934/8/11▲1934/9/3	【著作】〈*林雲陔、劉紀文宛の書簡〉	伝賢
△1934/8/13▲1934/8/14	【講演・談話記録】〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1934/8/16	【著作】与石青陽先生同致汪院長〈*汪精衛〉書	
△1934/8/16	【著作】〈*石青陽宛の書簡〉	
△1934/8/16	【著作】致向育仁先生電	
△1934/8/19▲1934/9/3	【著作】〈*林雲陔、劉紀文宛の書簡〉	賢
△1934/8/19▲1934/9	【著作】致楊虎城先生書	賢
△1934/8/19	【講演・談話記録】統一公共目的与方針是童子軍成功的要訣〈*教育部童子軍訓練班の畢業典礼にて〉	
△1934/8/19	【著作】致南京石市長〈*石衡青〉書	
△1934/8/19	【著作】致劉振東先生書	
△1934/8/20▲1934/8/21	【講演・談話記録】建国与建設首都〈*南京市政府の総理紀念週にて〉	
△1934/8/25	【著作】致許公武先生書	
△1934/8/25	【著作】覆呉興県孫教育局長電	
△1934/8/27▲1934/8/28	【講演・談話記録】国民文化復興的開始〈*中国国民党中央党部、国民政府主催の先師孔子誕辰紀念典礼にて〉	
△1934/8/28	【著作】致本院伍参事〈*伍非百〉書	
△1934/8/29▲1934/10	【著作】復司法行政部羅部長書〈*関於冠服制度及法官服制之意見〉	伝賢

南京『中央日報』「戴院長昨返西安」	不詳。眉県訪問。眉県の学宮大成殿を修建し明倫園(一般開放の公園)と建国堂(孫文記念)を建立し、学宮の前に民衆教育館を建設することを発起(その後、民衆教育館に書籍を寄贈)。武功に戻る。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	武功発。西安着。
南京『新亜細亜』第7巻第6期○29	
○29	
『考試院施政編年録』第二編	西安発。
○33	洛陽を経て鄭州着。
	開封、徐州を経て安徽省滁州着。
南京『中央日報』「戴院長返京」	瑯琊山に登る。南京着。関連する批判記事:「要人紛去西北考察」(『開発西北』第1巻第5期,1934/5)。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「戴院長昨電朱紹良等」	
南京『中央日報』「戴院長昨電朱紹良等」○33(致王子元先生電)	
南京『中央日報』「戴院長昨電朱紹良等」○33(致鄧徳輿先生電)	
○33	
○33	
南京『中央日報』「戴院長昨設宴歓迎安欽」	霊隠寺(杭州)で時輪金剛法会を発起。4/28、九世班禅大師が主持し開場。
○29	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
上海『申報』「戴伝賢報告西北情形」	主な転載箇所:戴季陶「視察西北之情形与感想」(南京『蒙蔵旬刊』第86期,1934/6/30付)。
○33	
○33	
戴伝賢鑑定,宋伯魯・王健総纂『周陵志』○23	
○29	
○33	南京発。
	湯山を経て杭州霊隠寺着。
南京『中央日報』「時輪法会定期挙行灌礼」	5/11-5/15パンチェンラマ9世は霊隠寺で時輪金剛法会を開く(戴季陶は灌頂を受け不動の法名を受ける)。
	杭州発。
	湯山を経て南京着。
○33	
○33	
南京『中央日報』「時輪法会余款戴主張撥賑災民」	
○29	
○29	
○29	
	成都で中国国民党軍を慰問。約2週間後、南京に向かう。
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴季陶「中国経済財政建設的根本問題」(南京『新亜細亜』第8巻第1期,1934/7)。
○29	
○29	
『譚雲山与中印文化交流』41-42頁	
南京『新亜細亜』第7巻第6期	四期中執会123次常会は戴季陶などの提議に基づき8/27を孔子誕辰日に決定。
許応錄著,陳天錫・曹冕・潘鳳起・徐天嘯校対『衍祥堂述聞』○29(衍祥堂述聞序)	主な転載箇所:「衍祥堂述聞序」(南京『新亜細亜』第8巻第1期,1934/7)。
南京『新亜細亜』第13巻第4期○29	
	インドの中印学会設立。同会はタゴールを主席、ネルーを名誉主席に選出。
南京『新亜細亜』第8巻第1期○29(復康寄遥先生書)	主な転載箇所:「復康寄遥先生書」(南京『新亜細亜』第12巻第1期,1936/7)。
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○29	
「題詞一斑」(南京『中央日報』副刊「中央軍校十週紀念専刊」第1号)○29(中央陸軍軍官学校十週年紀念頌)	主な転載箇所:南京『考試院公報』1934年第5期。
南京『中央日報』「軍校成立十週紀念鋳献三民主義銅鐘」	
南京『中央日報』「軍校昨畢業升学典礼」	
○28,29(関於裴列濱美分会要求我国在裴童子軍加入美国童子軍案之意見)	
○29	
○29	
○33	
南京『蒙蔵月報』第1巻第3期	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第9巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第8巻第1期	
南京『新亜細亜』第8巻第1期	
南京『新亜細亜』第8巻第1期	
南京『新亜細亜』第8巻第1期	
『海潮音』第17巻第9号○29	附記2篇:不空,1935?/10/18;伝賢,1935?/10/18。
○33	
○33	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
	四期中執会131次常会は戴季陶を中央党部工作人員従事政治工作考選委員会委員(召集人)に任命。
○29	
辺疆政教制度研究会編『清代辺政通考』○29(清代辺政通	主な転載箇所:戴伝賢「清代辺政通考序」(南京『新亜細亜』第8巻第2期,1934/8)。
○33	
○29	
○29	
○29	
○33	
南京『中央日報』「戴伝賢等呈請中央明令褒揚林直勉」	
南京『中央日報』「昨晨国府紀念週」	
○29	
○29(附致石青陽先生書)	
○33	
南京『中央日報』「戴伝賢等呈請中央明令褒揚林直勉」	
南京『新亜細亜』第8巻第3期○29(致陝西楊主席書)	
○28,29	
○29	
○29	
南京『中央日報』	
○29	
○33	
南京『中央日報』「中央国府昨晨合併挙行先師孔子誕辰紀念典礼」	主な転載箇所:「先師孔子紀念日戴院長演説詞」(南京『考試院公報』1934年第7期);戴伝賢「国民文化復興的開始」(南京『中央党務月刊』第73期,1934/8)(南京『中央週報』第326期,1934/9/3付);「先師孔子紀念日戴先生演説詞」(南京『新亜細亜』第8巻第3期,1934/9)。
○29	
南京『新亜細亜』第8巻第4期○29	

△1934/8/29	【著作】致蒋緯国姪書	
△1934/8/29	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1934/8/30	【著作】覆范天任君書	
△1934/8/30	【著作】覆王徳光先生書	
△1934/8/30	【著作】致王亮疇先生電	
△1934/8	【著作】民族掃墓与祭礼之意義	戴伝賢
△1934/8▲1934/9	【著作】普告全中国的詩家音楽家	戴伝賢
△1934/8▲1934/9	【著作】寧夏追悼討逆陣亡将士大会専刊序	戴伝賢
△1934/8/?	【著作】中墨両国之関係	
△1934/8/?	【著作】新民報五週年紀念贈言	
△1934/8/?	【著作】批文件保存年限辦法	
△1934/9/1▲1934/10	【著作】復呉興教育局孫局長〈*孫瑞桓〉書	賢
▲1934/9/3	【著作】〈*中央執行委員会宛の書簡〉	戴伝賢, 林雲陔, 劉紀文など
△1934/9/3	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1934/9/4	【著作】致雅安向副軍長〈*向育仁〉電	
△1934/9/4▲1934/9/5	【著作】〈*曾篤斎、方鶴斎、徐子休宛の書簡〉	伝賢
△1934/9/4	【著作】覆向育仁先生電	
△1934/9/6	【著作】致葉楚傖先生書〈*論革命勲績作任用法上資格目前趨勢〉	
△1934/9/6	【著作】致本院張〈*張忠道〉劉〈*劉光華〉参事書	
△1934/9/6	【著作】覆黄専使慕松電	
△1934/9/8	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/9/11?▲1934/9/12	【講演・談話記録】〈*上海から帰京して〉	
△1934/9/14▲1934/9/15	【講演・談話記録】〈*ドイツ製大型飛行機の歓迎会にて, 南京にて〉	
△1934/9/14	【著作】致伍参事〈*伍非百〉書	
△1934/9/14	【著作】覆山東教育庁何庁長〈*何思源〉電	
△1934/9/15▲1934/10	【著作】北平西北公学紀念刊題詞	戴伝賢
△1934/9/15▲1934/10	【著作】致張静江先生書	賢, 有恒
△1934/9/15	【著作】上泗滁叔書	
△1934/9/17	【著作】致上官修同志書	
△1934/9/17	【著作】致陝西楊主席〈*楊虎城〉書	
△1934/9/20▲1934/9/21	【講演・談話記録】〈*全国考銓会議予備会にて〉	
△1934/9/20	【著作】致山東教育庁何庁長〈*何仙槎〉書	
△1934/9/20	【著作】致駐日蒋公使〈*蒋作賓〉書	
△1934/9/20	【著作】致徐子休先生電	
△1934/9/25	【著作】覆黎雨民先生電	
△1934/9/27	【著作】致考選委員会王太蘧、陳百年先生書〈*対考試国文科目出題方法之仮定方案〉	
△1934/9/27	【著作】致宝華山妙柔和尚書	
△1934/9/27	【著作】致王一亭先生書	
△1934/9/27▲1934/10	【著作】復張静江先生書	伝賢
△1934/9/29▲1934/10/4	【著作】〈*韓復榘宛の書簡〉	伝賢
△1934/9/29	【著作】致山東何庁長〈*何思源〉書	
△1934/9/?	【著作】二十三年中国国民党年鑑題詞	
△1934/9/?	【著作】人類生活史序	
△1934/9/?	【著作】現代欧洲各国侵略史序	
△1934/10/9	【著作】致朱騮先先生書	
▲1934/10/10	【著作】中国考試制度的概況〈*『考試院工作総報告書』「中国考試制度概況」〉	戴季陶
△1934/10/10▲1934/10/12	【講演・談話記録】〈*考試院の国慶紀念典礼にて〉	
△1934/10/11	【講演・談話記録】全国慈幼領袖会議開幕頌詞	
▲1934/10/15	【著作】函汪精衛論救済青年	考試院院長戴伝賢
△1934/10/15	【講演・談話記録】〈*教育問題にて, 国民政府の紀念週にて〉	
△1934/10/17	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1934/10/17	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/10/19▲1934/10/20	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部工作人員従事政治工作考試及格者の発表日にあたって〉	
△1934/10/19▲1934/11/13	【著作】〈*徐子休宛の書簡〉	戴伝賢
△1934/10/20	【著作】致葉楚傖、陳立夫先生書	
△1934/10/22	【著作】致陳百年先生書	
△1934/10/24▲1934/11〈*実際は11/13以後〉	【著作】救国週刊序〈*上海にて〉	
△1934/10/29	【著作】電請国府林主席〈*林森〉在会期中蒞臨訓誨	
△1934/10/30	【著作】跋栗恭勤公家書墨蹟	
△1934/10/31	【著作】致萱野先生、鳳梨夫人書	
△1934/10/31	【著作】致葉楚傖先生書	
△1934/10/31	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/10▲1934/10	【著作】日記之一頁	
▲1934/11/1	【書画】考銓会議特刊	伝賢
△1934/11/1▲1934/11/2	【著作】祝告文	戴伝賢
△1934/11/1▲1934/11/2	【講演・談話記録】全国考銓会議開会致詞	戴伝賢
△1934/11/1	【著作】復駐日蒋公使〈*蒋作賓〉書	
△1934/11/1	【著作】致滔天夫人〈*宮崎槌子〉書	
△1934/11/2▲1934/11〈*実際は11/13以後〉	【著作】致楊虎城、邵仲輝先生書	
△1934/11/5▲1934/11/6	【講演・談話記録】〈*全国考銓会議の拡大紀念週にて〉	
△1934/11/5▲1934/11/6	【講演・談話記録】全国考銓会議閉会辞	戴伝賢
△1934/11/7	【著作】覆鄒校長〈*鄒海濱〉電	
△1934/11/8	【著作】致本院会部王〈*王太蘧〉陳〈*陳百年〉林〈*林璧予〉馬〈*馬旭楼〉許〈*許公武〉諸先生書〈*対考銓会議議決案会同行政院組織委員会研究実施方案之指示〉	
△1934/11/9▲1934/11〈*実際は11/13以後〉	【著作】致山東教育庁何庁長〈*何仙槎〉書	
△1934/11/9▲1934/11〈*実際は11/13以後〉	【著作】覆甘粛夏河県鄂県長〈*鄂徳輿〉書	
△1934/11/9	【著作】復駐日蒋公使〈*蒋作賓〉書	
△1934/11/9	【著作】致王一亭先生書	
△1934/11/10	【著作】致鄒校長〈*鄒海濱〉暨全体同学電	
△1934/11/11	【著作】致宝華山妙柔和尚書	
△1934/11/11	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1934/11/11	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1934/11/12▲1934/11/13	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部、国民政府主催の総理誕辰紀念大会にて〉	
△1934/聖誕節(11/12)▲1934/12	【著作】孝経鼎祝詞	
△1934/11/12	【著作】致康寄遥先生書	
△1934/11/13▲1934/11〈*実際は11/13以後〉	【著作】致康寄遥先生書	
△1934/11/14	【著作】復譚雲山先生書	
△1934/11/17▲1936/9	【著作】仁王護国般若波羅密多経頌〈*宝華山にて〉	戴伝賢
△1934/11/19	【著作】致駐日蒋公使〈*蒋作賓〉書	
△1934/11/26▲1935/2	【著作】致陳百年、許公武先生書	
△1934/11/28	【著作】致斉敬鑫先生書	
1934/11/29		

○29	
○33	
○29	四期中執会136次常会は戴季陶などに孔子尊崇、民族文化の精神発揚を目的とした施策の企画を命じる。
○29	
○33	
戴伝賢『民族掃墓与祭礼之意義』(石印本, 南京図書館古籍・特蔵部所蔵)	
南京『新亜細亜』第8巻第3期○29	
南京『新亜細亜』第8巻第3期○29	
○29	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第8巻第4期○29	
南京『中央日報』「戴伝賢等呈請中央明令褒揚林直勉」	
○33	
○29	
南京『中央日報』「戴伝賢関切川乱」○29(致成都曾篤斎諸先生電), 33(致四川曾篤斎諸先生電)	
○33	
○29	
○29	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「戴院長昨晨返京」	
南京『中央日報』「欧亜巨型機昨抵京」	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第8巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第8巻第4期○29	
○33	
○29	
○29	
南京『中央日報』「考銓予備会開幕」	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29, 41	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第8巻第4期○29	
南京『中央日報』「韓復榘電陳中央修復孔廟経費甚鉅」○33(覆山東韓主席電)	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
上海『文化建設』創刊号	「考試院工作総報告書」は南京『考試院公報』1935年第11期に収められる。
南京『中央日報』「戴院長講演国慶紀念中的感想」	
○29	第1期全国慈幼領袖会議は戴季陶を名誉副主席に任命。
南京『中国社会』第1巻第2期	
「請注意読経通令禁止胡適等之雑濫教科書」(『歴代尊孔記　孔教外論合刻』)	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「中央党部工作人員考試発榜」	
南京『中央日報』「各路難民紛逃成都戴院長関心川災」	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第8巻第5期○29	
○33	
○29	
○29	
○33(致葉楚傖先生在滬接洽賑務経過書)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第8巻第4期○29(論仏家服食薬物)	1934/10-1936/10、紅軍、長征開始。
南京『中央日報』副刊「考銓会議特刊」〈*第1号〉	
南京『中央日報』副刊「考銓会議特刊」第2号	四期中執会145次常会は戴季陶を災区冬期急賑委員会委員に任命。中国童子軍総会設立、同会は戴季陶を副会長に任命。
南京『中央日報』副刊「考銓会議特刊」第2号○29(全国考銓会議開幕詞), 41(同前)	主な転載箇所:「全国考銓会議開会詞」(南京『新亜細亜』第8巻第5期, 1934/11<*実際は11/13以後>)。
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第8巻第5期○29(致陝西楊主席書)	
南京『中央日報』「考銓会議昨閉幕」	
南京『中央日報』副刊「考銓会議特刊」第6号○29(全国考銓会議閉会詞), 41(同前)	
○33	
○29	
南京『新亜細亜』第8巻第5期○29	
南京『新亜細亜』第8巻第5期○29(覆夏河鄧県長書)	
○29	
○29	
○33	
○29	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「昨日総理誕辰中央国府合併紀念会」	
南京『新亜細亜』第8巻第6期○29(敬献孝経鼎於総理陵祝詞)	
○29	
南京『新亜細亜』第8巻第5期○29	
○29	
『海潮音』第17巻第9号○29	
○29	
南京『新亜細亜』第9巻第2期○29	
○29	
	四期中執会149次常会は戴季陶を中央工作同志従事政治工作考試及格人員の分発委員会委員に任命。

▲1934/12	【書画】馬鶴天著東北考察記	戴伝賢
△1934/12/8	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
1934/12/9		
1934/12/10-12/14		
△1934/12/17	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
△1934/12/19▲1934/12/21	【著作】〈*閻錫山をを追悼する電報〉	戴伝賢
△1934/12/27	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
△1934/12/31	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
△1934	【著作】論密教	
△1934	【著作】定鼎堂存碑拓本弁言	
△1935/1/12	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電〈*上海より〉	
△1935/1/15	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/1/26	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
1935/1/27		
△1935/1/?	【著作】対編印全国考銓会議報告書辦法之指示	
△1935/2/6	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
△1935/2/28	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
1935/3/4		
1935/3/6		
△1935/3/9	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,上海より〉	
1935/3/14		
1935/3/21		
1935/3/23		
△1935/3/27	【著作】致呉市長〈*呉鉄城〉電	
△1935/3/30	【著作】致楊周熙同志書	
△1935/3/31	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/3/?	【著作】致葉楚傖先生書	
△1935/4/1▲1935/4/2	【講演・談話記録】対於中小学校教科書之意見〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1935/4/1▲1935/7	【著作】致施省之先生書	
△1935/4/2	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/4/2	【著作】致青海譚庁長電	
△1935/4/3	【著作】致陳布雷先生書	
△1935/4/4	【著作】覆王一亭先生書	
△1935/4/14	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/4/16▲1935/4〈*実際は4/16以後〉	【著作】復鄭炳庚書	戴伝賢
△1935/4/17	【著作】致柯柯都王書	
△1935/4/17	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/4/22▲1935/4/23	【講演・談話記録】救済国民経済〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	
△1935/4/22	【著作】致王一亭先生書	
△1935/4/24	【著作】致呂蘧孫先生書	
△1935/4/26▲1935/5	【著作】告首都青年書	
△1935/4/28	【著作】致沈剣農世講書	
△1935/4(暮春之初)▲1935/4〈*実際は4/16以後〉	【著作】復潘公展問言行書〈*『晨報』一千号記念に寄せて〉	戴伝賢
△1935/4/?	【著作】批本院人員補習教育考試奨励辦法	
▲1935/5	【著作】仏説孛経跋	三宝弟子不空
△1935/5/1	【著作】覆唐三先生書	
△1935/5/3▲1935/5/4	【著作】〈*中印学会発起人会・成立大会にて〉	
△1935/5/3	【著作】致鄄力餘同志書	
△1935/5/4▲1935/7	【著作】船山遺書跋	
△1935/5/9	【著作】致政治会議常務委員諸同志書	
△1935/5/9	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/5/9	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/5/11	【著作】上中央政治会議常務委員会書	
△1935/5/11	【著作】覆張幹之先生書	
△1935/5/16	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/5/17	【著作】覆王蔭椿処長書	
△1935/5/20▲1935/5/22-5/23	【講演・談話記録】考銓行政的前途〈*考試院の拡大紀念週にて〉	
△1935/5/20	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/5/22▲1935/7	【著作】致覚明善知識書	
△1935/5/24	【著作】致行政院汪院長〈*汪精衛〉書	
△1935/5/24	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/5/24	【著作】致劉甫澄総司令電	
△1935/5/25	【著作】致汪院長〈*汪精衛〉書	
△1935/5/26▲1935/6〈*実際は6/12以後〉	【著作】与班禅大師書	
△1935/5/26▲1935/6〈*実際は6/12以後〉	【著作】致馬子香師長書	
△1935/5/27▲1935/5/28	【講演・談話記録】〈*成都にて〉	
△1935/5/29	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,成都より〉	
△1935/6/8	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,成都より〉	
△1935/6/11▲1935/6/12	【講演・談話記録】〈*帰京して〉	
△1935/6/11	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/6/12▲1935/6〈*実際は6/12以後〉	【著作】与広漢県陳師長〈*陳静珊〉書	
△1935/6/13	【著作】致宋雨村甥書	
△1935/6/15▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致塔爾寺班禅大師電	
△1935/6/16▲1935/7	【著作】覆太虚法師書	
△1935/6/17	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書〈*湯山より〉	
1935/6/19		
△1935/6/22▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致塔爾寺班禅大師電	
△1935/6/26	【著作】致斉敬鑫先生書	
△1935/6/29	【著作】致陝西楊主任〈*楊虎城〉邵主席〈*邵力子〉電	
△1935/7/5▲1935/7/6	【講演・談話記録】〈*林翔を追悼する,南京にて〉	
△1935/7/5	【著作】上国府林主席〈*林森〉電	
▲1935/7/8-7/11	【講演・談話記録】〈*袁同嚞との会談〉	
△1935/7/8▲1935/7/9	【講演・談話記録】〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1935/7/9	【著作】致羅志希先生書	
△1935/7/9▲1935/9〈*実際は9/8以後〉	【著作】答謝睿渝金漢諸郷人書	
△1935/7/9	【著作】上国府林主席〈*林森〉書	
△1935/7/9	【著作】致宋雨村甥書	
△1935/7/9	【著作】致三姊書	
△1935/7/10	【著作】致陳師孝同志書	
△1935/7/19	【著作】致陳布雷先生書	
△1935/7/22	【著作】致林雲陔先生書	
△1935/7/24▲1936/4	【著作】致程尚林君書	
△1935/7/26▲1936/7	【著作】致何庁長〈*何仙槎〉書	
△1935/7/27▲1935/8〈*実際は9/2以後〉	【著作】清代対大小金川及青海西康用兵紀要序	
△1935/7/27	【著作】致張孟劬先生書	
△1935/7	【著作】世界之現在与将来	戴伝賢

馬鶴天『東北考察記』	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	南京着。
	中国国民党四期五中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、憲法草案審査委員会委員に任命。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「戴院長電唁閻錫山」	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	新亜細亜学会第5次会員大会(南京)に出席。
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	新亜細亜学会・開発西北協会・西北問題研究会共同主催の西北文物展覧会名誉会長に任命される。
	四期中政会第447次会議は戴季陶を審査預算計画委員会委員に任命。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	南京発。呉興県に向かう。
	四届中執会163次常会は戴季陶を中央及各省市党部工作人員従事司法工作考試委員会委員に任命。
	南京着。
○33	
○29	
○33	
○29	
南京『中央日報』「昨晨国府紀念週」	
南京『新亜細亜』第10巻第1期○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第9巻第4期○29(復鄭炳庚同志書)	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
上海『申報』「中央・国府両紀念週報告」	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第9巻第5期○29	
○29	
南京『新亜細亜』第9巻第4期○29(復潘公展先生書)	
○33	
南京『新亜細亜』第9巻第5期	
○29	
南京『中央日報』「中印学会昨成立」	中国の中印学会設立(南京の新亜細亜学会会所)。同会は戴季陶を監事会主席(監事長)に任命。戴季陶が1932年、インドの国際大学に中国図書館を寄贈する計画を立てたことに起因。
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第1期○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
南京『中央日報』○29(考銓行政的前途講詞), 41(同前)	
○33	
南京『新亜細亜』第10巻第1期○29	
○29	
○33	
○33	
○29	南京発。空路、南昌着。
南京『新亜細亜』第9巻第6期	成都着。九日に亙り広漢県、金堂県を訪問、展墓。
南京『新亜細亜』第9巻第6期	
南京『中央日報』「戴院長飛渝転成都」	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「戴院長昨晨由漢口飛京」	成都発。空路、南京着。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第9巻第6期○29(致陳静珊師長書)	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第10巻第1期○29	
○29	
	四期中政会第462次会議で蔡元培、呉稚暉、孫科、戴季陶などが汪精衛などの対日外交政策を難詰。
南京『新亜細亜』第11巻第1期○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○33	
南京『中央日報』「銓叙部長林翔逝世」	
○33	
梧江「寧海楼上一席話」(南京『中央日報』「中央園地」)	参考資料:梧江(袁同籌)「「寧海楼上一席話」書後」(南京『中央日報』「中央園地」1935/7/12付)。
南京『中央日報』「国府昨晨紀念週」	奉祀官就職典礼、高(等)考(試)司法官考試再試典試委員就職典礼に出席。
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第3期○29(答謝蓉渝新金漢諸郷人書)	
○29, 41	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第4期○29(覆程尚林君書)	
南京『新亜細亜』第12巻第1期○29(致山東教育庁何庁長書)	
南京『新亜細亜』第10巻第2期○29	
○29	
戴伝賢『世界之現在与将来』(石印本, 南京図書館古籍・特蔵部所蔵)	

△1935/7▲1936/2〈*実際は2/29以後〉	【著作】致蜀中郷人書	
△1935/7	【著作】呈中央執行委員会、国民政府文	
1935/8/1		
△1935/8/4▲1935/8〈*実際は9/2以後〉	【著作】致徐子休先生書	戴伝賢
△1935/8/4▲1935/8〈*実際は9/2以後〉	【著作】与陳師孝先生書	伝賢
△1935/8/4▲1936/3〈*実際は3/3以後〉	【著作】致留英同学諸君書	
△1935/8/4▲1936/4	【著作】致中国童子軍総会理事会函	
△1935/8/6▲1935/8〈*実際は9/2以後〉	【著作】考試院則例敍	戴伝賢
▲1935/8〈*実際は9/2以後〉	【著作】考試院則例書後	伝賢
△1935/8/8	【著作】致中央宣伝委員会書	
△1935/8/8	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/8/10	【著作】対於外交官任用之意見	
△1935/8/11	【著作】致張孟劬先生書	
△1935/8/12	【著作】致王亮疇先生書	
△1935/8/12	【著作】致何玉書主任書	
△1935/8/12▲1935/9〈*実際は9/8以後〉	【著作】致三姊書	
△1935/8/12	【著作】致家斉姪書	
△1935/8/14▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】致于右任、張溥泉先生書	
△1935/8/16▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】致馬師長〈*馬子香〉書	
△1935/8/24▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】与孔奉祀官書	
△1935/8/26▲1935/8/27	【講演・談話記録】民族求存之道〈*中国国民党中央党部、国民政府の第197次紀念週にて〉	
△1935/8/29	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/8(新秋)▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】致劉得天君書	
△1935/8/?	【著作】致覚明善知識両偈	
△1935/9/1▲1935/9/2	【著作】〈*林翔を追悼する輓聯〉	
△1935/9/1▲1935/9/2	【著作】〈*林翔を追悼する祭文〉	戴伝賢, 鈕永建, 陳大斉, 石瑛
△1935/9/1	【著作】致黄慕松先生書	
△1935/9/1	【著作】致賑務委員会許静仁王一亭先生電	
△1935/9/2▲1935/9/3	【講演・談話記録】〈*土地委員会の紀念週にて〉	
△1935/9/2	【著作】致陳師孝同志書	
△1935/9/2	【著作】覆宋雨村甥書	
△1935/9/2▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致塔爾寺班禅大師電	
1935/9/5		
△1935/9/6	【著作】致孫俍工先生書	
△1935/9/8▲1935/9〈*実際は9/8以後〉	【著作】致徐深甫先生書	
△1935/9/9	【著作】関於憲法問題之所見	
△1935/9/9	【著作】致徐深甫先生書	
△1935/9/10	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/9/16▲1935/9/17	【講演・談話記録】〈*全国司法会議の開幕典礼にて〉	
△1935/9/19▲1935/9/20	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の第189次常務会議にて〉	
△1935/9/20▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】致施景鑾先生書	
△1935/9/20	【著作】致張孟劬先生書	
△1935/9/20	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1935/9/22▲1935/11〈*実際は11/23以後〉	【著作】致美国童子軍領袖韋思徳博士書	
△1935/9/25	【著作】致陳伯稼先生書	
△1935/9/25	【著作】致陳百年先生書	
△1935/9/29	【著作】致朱〈*朱騮先〉、王〈*王雪艇〉部長書	
△1935/9/30	【著作】致宋雨村甥書	
△1935/9/30▲1936/4	【著作】与福長甥書	
△1935/9▲1936/1	【著作】〈*徐子休の文を選録した「備忘録」の序〉	
△1935/10/1▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】致斉敬鑫先生書	
△1935/10/2	【著作】致王一亭先生書	
△1935/10/2	【著作】致閔炯之先生書	
△1935/10/2	【著作】致陶甲三先生書	
△1935/10/2	【著作】致本院伍参事〈*伍非百〉書	
△1935/10/2	【著作】致陳援庵先生書	
△1935/10/3	【著作】致教育部王部長〈*王雪艇〉書	
△1935/10/3▲1935/11〈*実際は11/23以後〉	【著作】致朱部長〈*朱騮先〉書	
△1935/10/3	【著作】致司法院居院長〈*居覚生〉書	
△1935/10/8	【著作】致広東教育庁許庁長〈*許志澄〉書	
△1935/10/8▲1935/11〈*実際は11/23以後〉	【著作】致馬徳斎先生書	
△1935/10/10▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【著作】民国二十四年国慶日感想之一節	
△1935/10/10	【著作】二十四年国慶日書懐	
△1935/国慶日(10/10)	【著作】致〈*中国童子軍総会〉全国理事会書	
△1935/10/14▲1935/12〈*実際は12/21以後〉	【著作】与雨村甥書	
△1935/10/18▲1935/12〈*実際は12/21以後〉	【著作】致覚明夫人書	
△1935/10/18▲1936/9?		
△1935/10/19▲1935/12〈*実際は12/21以後〉	【著作】致徐子休先生書	
△1935/10/23	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/10/26	【著作】致陳伯南鄒海濱林雲陔三先生電	
△1935/10/30▲1935/12〈*実際は12/21以後〉	【著作】覆悲観大徳等函	
△1935/10/30	【著作】致許汝為先生電	
△1935/10/30	【著作】致劉蘆隠黄季陸諸先生電	
△1935/10/31	【著作】致許汝為先生電	
△1935/10/?▲1935/10〈*実際は10/10以後〉	【講演・談話記録】中華民国二十四年開国紀念日第六届全国運動会祝詞	
1935/11/1-11/6		
△1935/11/1	【著作】致考選委員会許志澄副委員長電	
1935/11/4		
△1935/11/7	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電〈*広州より〉	
△1935/11/7	【著作】致葉楚傖秘書長電〈*広州より〉	
△1935/11/7	【著作】致行政院汪院長〈*汪精衛〉電〈*広州より〉	
△1935/11/8	【著作】致陳布雷先生電〈*広州より〉	

南京『新亜細亜』第11巻第2期○29	
○29, 41	
	中国共産党、抗日民族統一戦線を提唱(八一宣言)。7月、第7回コミンテルン大会(モスクワ)は人民戦線戦術を承認。
南京『新亜細亜』第10巻第2期○29(上徐子休夫子書)	
南京『新亜細亜』第10巻第2期○29(致陳師孝同志書)	
南京『新亜細亜』第11巻第3期○29	
南京『新亜細亜』第11巻第4期○28(致全国理事会諸先生書), 29(致中国童子軍総会理事会書)	
南京『新亜細亜』第10巻第2期○29(考試院則例序), 41(同前)	主な転載箇所:考試院秘書処主編『考試院則例』〈*修訂版〉。
南京『新亜細亜』第10巻第2期	主な転載箇所:『考試院則例』〈*修訂版〉。
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29, 41	
○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第3期○33	
○33	
南京『新亜細亜』第10巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第10巻第4期	主な転載箇所:南京『新亜細亜』第11巻第3期, 1936/3〈*実際は3/3以後〉。
『新亜細亜』第10巻第4期○29(致孔奉祀官書)	この頃孔学会設立(南京)?、同会は戴季陶を会長に任命。
南京『中央日報』「中枢合併紀念週」	不詳。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	8/18パンチェンラマ9世は戴季陶らに金樹仁の特赦を請う。
南京『新亜細亜』第10巻第4期○29	
○29	
南京『中央日報』「林翔追悼会昨日挙行」	
南京『中央日報』「林翔追悼会昨日挙行」	
○29	
○33	
南京『中央日報』「戴院長講土地政策」	不詳。
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	8/21パンチェンラマ9世は戴季陶に託し、国内の洪水の被災地域に五千銀元を寄附。
	四期中執会187次常会は戴季陶などに私立蒙蔵学校(九世班禅大師創設, 上海)の改組について検討を命じる。9/12、四期中執会188次常会は私立蒙蔵学校を中央政治学校附設蒙蔵学校に編入することを決議。
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第3期	
○29, 30	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「全国司法会議昨在考試院挙行開幕礼」	
南京『中央日報』「中常会昨推戴伝賢報告」	不詳。
南京『新亜細亜』第10巻第4期○29(覆施景鑾先生書)	
○29	
○33	
南京『新亜細亜』第10巻第5期○29(覆美国童子軍領袖韋思徳博士書)	
○29	
○29	
○29	1936/1/15中国国民党五期中政会第5次会議は、前年6月の中国国民党四期中政会第460次会議が決議した簡体字制定を撤回し、教育部の「簡体字表」の実施を遅らせることを決議。銭玄同の説明によると、戴季陶と湖南省主席何健が「簡体字表」の実施に最も強く反対したという(『銭玄同年譜』129頁)。戴季陶が「簡体字表」の実施に反対した理由は、議事録においては明らかでない。しかし、戴季陶より王世杰(雪艇)宛の書簡からその理由を知ることができる。戴季陶は1935/9/29付「致朱、王部長書」と10/3付「致教育部王部長書」の二度にわたり、教育部長王世杰に反対意見を表明している。戴季陶は、高等文官採用試験の成績の低さを嘆き、政府の人材不足は国家・政府の弱体化に直結する由々しき問題であると論じた。また、中国の教育不振の原因を、教育部が小学校教科書から文言文を排除したこと、漢字の廃止とアルファベット化、簡体字採用を提唱したことなど、国民政府の国語政策に帰し、四書五経を国語教科書の教材にすべきであると主張した。戴季陶は国家・民族意識の強化には伝統文化の擁護が必要不可欠と考えていた。
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第4期○29(致鍾福長甥書)	
「人生津逮」(南京『新亜細亜』第11巻第1期)	
南京『新亜細亜』第10巻第4期○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第5期○29(致朱騮先先生書)	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第5期○29(致蜀華中学馬校長書)	
南京『新亜細亜』第10巻第4期○29(国慶日感想之一節)	
○29	
○28, 29(致中国童子軍総会理事会書)	
南京『新亜細亜』第10巻第6期○29(覆宋雨村甥書)	
南京『新亜細亜』第10巻第6期○29(致覚明善知識書)	
『海潮音』第17巻第9号	
南京『新亜細亜』第10巻第6期○29(覆徐子休夫子書)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33	
南京『新亜細亜』第10巻第6期○29(覆悲観大徳等書)	
○33	
○33	
○33	中政会第●次会議は、戴季陶を広州に派遣し、陳済棠、李宗仁など広州に留まる中央執行委員会委員に対し、中国国民党五全大会に出席するように説得することを決議。
南京『新亜細亜』第10巻第4期○29(第六届全国運動会祝詞)	
	中国国民党四期六中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、中華民国憲法草案審査委員会委員に任命。会期中、汪精衛は狙撃され受傷。
○33	
	南京市市長馬超俊(星野)とともに南京発。空路、広州着。
○33	全2篇。
○33	
○33	
○33	広州発。空路、南昌着。

△1935/11/9▲1935/11/10	【講演・談話記録】〈*広州より帰京して〉	
△1935/11/11▲1935/11〈*実際は11/23以後〉	【著作】致孔部長〈*孔庸之〉書	
△1935/11/11▲1935/12〈*実際は12/21以後〉	【著作】致陳伯南先生書	
1935/11/11		
1935/11/12-11/23		
△1935/11/14	【著作】覆京市工務局宋局長〈*宋希尚〉書	
△1935/11/14	【著作】致鄒海濱、林雲陔先生書	
▲1935/11/18	【著作】中国国民党党員守則前文	
△1935/11/20	【著作】致中央大学羅校長〈*羅家倫〉書	
△1935/11/22	【著作】致比国紀佑穆公使書	
△1935/11/22	【著作】勗粤試及第諸生電	
△1935/11/22	【著作】嘉慰第二典試委員会第二試務処在事諸公電	
△1935/11/?	【著作】五全大会有関中央委員名額分配之提議	
△1935/11/?	【著作】対五全大会代表与主席団之希望及起草大会宣言之意見	
▲1935/11/23	【著作】中国国民党第五次全国代表大会宣言	
△1935/11/23▲1935/11〈*実際は11/23以後〉	【著作】為第二期新疆繞回学生易名序	
1935/11/25		
△1935/11/27	【著作】上中央執行委員会全体会議懇准辞去考試院院長並附陳各項意見文	
△1935/11/30	【著作】致陳布雷先生書	
△1935/11/?	【著作】対第三届高考進行中之指示	
1935/12/2-12/7		
1935/12/11		
△1935/12/15▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】致塔爾寺班禅大師電	
△1935/12/20	【著作】勗蒋孝先同志	
△1935/12/21▲1935/12〈*実際は12/21以後〉	【著作】与劉振東先生書	
△1935/12/31	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1935/?/?	【著作】致司法院居院長〈*居覚生〉書	
▲1935/?/?	【書画】日進高明	戴伝賢
▲1935/?/?	【著作】考試院工作報告節略	
▲1936/1/9	【著作】〈*高等考試の採点誤りを自責する，中央政治会議宛の書簡〉	戴伝賢
△1936/1/12	【著作】致葉秘書長〈*葉楚傖〉書	
△1936/1/12	【著作】致鄒海濱先生電	
△1936/1/12	【著作】致胡展堂先生電	
1936/1/13		
△1936/1/15	【著作】致中山大学鄒校長〈*鄒海濱〉電	
△1936/1/22	【著作】覆上海籌募各省水災義賑会書	
△1936/1/27▲1936/1/28	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	
△1936/1/28▲1936/3〈*実際は3/3以後〉	【著作】題太平天国玉璽	
△1936/1/30	【著作】致中央政治学校書	
1936/1		
▲1936/2	【書画】前事之不忘後事之師也	戴伝賢
△1936/2/2	【著作】致新亜細亜学会同志書	
△1936/2/4▲1936/1〈*実際は2/4以後〉	【著作】四年間致広慈広慧諸大師函電稿	
△1936/2/11	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書	
△1936/2/11	【著作】覆葉楚傖先生書	
△1936/2/11	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1936/2/12▲1936/2〈*実際は2/29以後〉	【著作】勗本院同人書	
△1936/2/12▲1936/2〈*実際は2/29以後〉	【著作】致雨村甥書	
△1936/2/14	【著作】致王一亭先生書	
△1936/2/15	【著作】致康寄遥先生書	
1936/2/16		
△1936/2/17	【著作】致徐申〈*深〉甫先生電	
△1936/2/18	【著作】致中国童子軍総会理事会書	
△1936/2/20〈*もしくは22〉	【著作】覆中央政治委員会秘書処書	
△1936/2/21▲1936/2〈*実際は2/21以後〉	【著作】新亜細亜月刊前途之工作要点	戴伝賢
△1936/2/21	【著作】致嘉本様禅師書	
△1936/2/24	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1936/2/24	【著作】致陳百年先生書	
△1936/2/27	【著作】致胡展堂先生書	
△1936/2/28	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1936/2/29▲1936/2〈*実際は2/29以後〉	【著作】莫干山蓮社敍	
△1936/2/29	【著作】〈*施省之宛の書簡〉	
△1936/2/?▲1936/2〈*実際は2/29以後〉	【著作】蒙古要覧序	
△1936/2/?▲1936/3〈*実際は3/3以後〉	【著作】中央軍校〈*中央陸軍軍官学校〉十期一総隊同学録序	
△1936/2/?▲1936/3〈*実際は3/3以後〉	【著作】回教青年週報序	
△1936/3/1	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書	
△1936/3/3▲1936/3〈*実際は3/3以後〉	【著作】致広漢林県長茀叢書	
△1936/3/3	【著作】致陳斯孝同志書	
1936/3/6		
1936/3/8		
△1936/3/12▲1936/3/13	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部、国民政府主催の総理逝世第11週年紀念会〉	
△1936/3/15▲1936/3/16	【講演・談話記録】要完成作人的四大責任必須照着童子軍的誓詞去作〈*童子軍紀念節、南京市各理事の宣誓就職典礼にて〉	
△1936/3/15	【著作】対羅広瀛君密呈之所見	
△1936/3/21	【著作】致徳国陶徳曼大使〈*トラウトマン〉書	
△1936/3/22	【著作】覆孫棣三先生書	
▲1935/8?	【書画】問礼亭詩初集	戴伝賢
△1936/3/25▲1935/8?	【著作】〈*前掲『問礼亭詩初集』の序〉	戴伝賢
△1936/3▲1944/9/9	【著作】目前外交官任用上之意見並自跋	戴伝賢
△1936/3/?▲1936/3〈*実際は3/3以後〉	【著作】王光祁先生遺著序	
△1936/3/?	【著作】題宋監本周易正義	
△1936/3/?	【著作】題周柏年先生手書	
△1936/3/?	【著作】跋傅孟真先生見贈書籍	
△1936年仲春月▲1936/4	【著作】庚子議和交渉要覧序	
△1936年仲春▲1936/6	【著作】〈*「天眉詩集」の序〉	戴伝賢
△1936/4/1▲1936/4	【著作】跋芬次爾〈*Fenzel〉博士西北造林計画	
△1936/4/1	【著作】対控告厳家麟諸人之批示	
△1936/4/3▲1936/5	【著作】致邵翼如先生書	
△1936/4/4	【著作】致李君佩先生書	
△1936/4/6	【著作】覆徐孝恢先生書	

南京『中央日報』「南行結果円満戴馬昨日返京」	南京着。
南京『新亜細亜』第10巻第5期○29(致財政部孔部長書)	
南京『新亜細亜』第10巻第6期○29	
	四期中執会●次常会は戴季陶を中国国民党五全大会の主席団、提案起草委員会委員(召集人)に任命。
	中国国民党五全大会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員(召集人)に任命し、第五期中央執行委員会委員に選出。また、戴季陶が代表執筆した「中国国民党党員守則」案、「中国国民党第五次全国代表大会宣言」草案を採択。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29, 30(完成救国建国二大使命――中国国民党第五次全国代表大会宣言)	
南京『新亜細亜』第10巻第5期○29(為第二期新疆禮回学生倣漢唐易名旧制易名文)	
	冀東防共自治委員会設立(河北省通県)。
○33	中国国民党中央執行委員会に対し考試院院長の辞任を申請。
○29	
○33	
	中国国民党五期一中全会(南京)を欠席。同会は戴季陶を主席団に任命し、考試院院長に選出。12/16院長に就任。「中央執行委員会組織大綱」を採択し、五院院長に対し、中央執行委員会常務委員会への傍聴を可能にし、中央執行委員会政治会議への出席を義務づける。
	冀察政務委員会設立(北平)。
南京『新亜細亜』第11巻第1期○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
南京『新亜細亜』第10巻第6期○29(致劉振東先生書)	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	1935年、成都の蜀華中学校、四川省金堂県と広漢県に書籍を寄贈。広東省翠亨村中学校、インド、ネパールにも書籍を寄贈。
復旦大学編『三十年的復旦(1905-1935)』	
戴伝賢『考試院工作報告節略』	
南京『中央日報』「中政会議決高考試題錯誤案鈕永建罰俸一月」	五期中執会3次常会は戴季陶を党史史料編纂委員会委員に任命し、中央執行委員会常務委員が中央執行委員会政治委員会に出席することを義務づける。
○29	
○33	
○33	
	蔣介石と中野正剛の会談に列席。
○33	
○29	
南京『中央日報』「戴伝賢在中央紀念週追述過去革命工作」	主な転載箇所:戴伝賢「過去革命工作之追述」(南京『中央党務月刊』第90期, 1936/1)。
南京『新亜細亜』第11巻第3期○29	
○29	
	鈕有恒、戴季陶を通じて中国童子軍総会に銀二万元を寄付。
徐瘦秋編『越南』	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第1期○29(発表四年間致広慈広慧両大師函電弁言)	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第11巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第11巻第2期○29	
○29	
○29	
	2月上旬、徐子休(炯)、成都で没。2/16、南京在住の門下生とともに慰霊祭を開く。
○33	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第2期○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『新亜細亜』第11巻第2期○29	蔣介石などとともに中国国民党中央政治学校(南京)を参観。
○29(附致施省之先生書)	
南京『新亜細亜』第11巻第2期○29	
南京『新亜細亜』第11巻第3期○29	
南京『新亜細亜』第11巻第3期○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第3期○29(致広漢林県長書)	
○29	
	首都党政軍学体育促進会第7次常会は戴季陶を名誉顧問に任命。
	新亜細亜学会第6次会員大会(南京)に出席。
南京『中央日報』「中央国府昨在陵前挙行総理逝世紀念」	主な転載箇所:戴伝賢「総理北上之志願及対於世界人類之貢献」(南京『中央党務月刊』第92期, 1936/3)。
南京『中央日報』「京市童軍三千余熱烈慶祝童軍節」○28, 29	
○29	
○29	
○29	
『問礼亭詩初集』	主な転載箇所:「問礼亭詩初集」(南京『新亜細亜』第11巻第4期, 1936/4)。
『問礼亭詩初集』	
『考政学報』創刊号○29(跋自写外交官任用意見), 41(同前)	
南京『新亜細亜』第11巻第3期○29	
○29	
○29	
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第4期○29	
南京『新亜細亜』第11巻第6期	
南京『新亜細亜』第11巻第4期○29	五期中政会第11次会議は戴季陶を国民政府代表としてベルリンオリンピックに派遣することを決議。
○29	
南京『新亜細亜』第11巻第5期○29	
○29	それまでに陳公博、甘乃光と工役法案について会談。1943/12/4、国民義務労働法公布、施行。
○29	

1936/4月半		
△1936/4▲1936/4/19	【書画】〈*中国心理衛生協会の成立にあたって〉	戴伝賢
▲1936/4/20	【書画】愛民実政〈*江蘇全省禁煙会議特刊に頼まれて〉	戴伝賢
△1936/5/3?▲1936/5/5	【講演・談話記録】〈*盲唖学校聾唖童子軍第一団に対して〉	
△1936/5/3?▲1936/5/5	【書画】〈*盲唖学校聾唖童子軍第一団に贈る〉	
1936/5/5		
△1936/5/8▲1936/5/9	【講演・談話記録】童子軍訓練之目的〈*中国童子軍総会童子軍幹部訓練班にて〉	
△1936/5/8▲1936/5/10-5/11	【講演・談話記録】救国教育之基本原則〈*無線放送にて〉	
△1936/5/10▲1936/5/11	【講演・談話記録】〈*ベルリン行出発の前に,南京にて〉	
△1936/5/11	【著作】覆広東林主席〈*林雲陔〉電	
△1936/5/11	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1936/5/13▲1936/5/14	【著作】〈*致胡漢民夫人、胡木蘭への弔電〉	戴伝賢,鈕永建
△1936/5/18	【著作】上中央政治委員会電〈*上海より〉	
△1936/5/19▲1936/5/20	【講演・談話記録】〈*上海にて〉	
1936/5/21		
1936/6/13		
1936/6/14-6/23		
1936/6/22	【講演・談話記録】〈*中国国民党パリ総支部の紀念週にて〉	
1936/6/23		
1936/6/24		
1936/6/25		
1936/6/27		
△1936/7/7▲1936/7/8	【講演・談話記録】〈*ベルリンにて〉	
△1936/7/15以前▲1936/7/16	【講演・談話記録】〈*ドイツ留学の中国人留学生に対して,ベルリンにて〉	
1936/7/23	【講演・談話記録】〈*中国代表選手に対して,ベルリンにて〉	
1936/7/27	【講演・談話記録】〈*ベルリンにて〉	
△1936/7/28▲1936/7/30	【講演・談話記録】〈*ドイツ遠東協会主催の歓迎会にて〉	
1936/7/29		
△1936/7/?	【著作】陶鵬飛同志著徳文「中国的蒋委員長」序〈*ベルリンにて〉	
1936/8/1		
△1936/8/3▲1936/8/5	【講演・談話記録】〈*ヒトラーとの会談〉	
1936/8/4		
1936/8/5		
△1936/8/6▲1936/8/7	【講演・談話記録】〈*シーラハとの会談〉	
1936/8/13		
1936/8/16		
△1936/8/17	【著作】示安国児〈*戴安国〉〈*ベルリンより〉	
△1936/8/18▲1936/8/20	【講演・談話記録】〈*孫文の革命と青天白日旗の歴史について〉	
1936/8/27		
△1936/9/2▲1936/9/4	【著作】〈*ゲッペルス宛の書簡〉	
1936/9/8		
1936/9/12		
1936/9/14		
△1936/10/6▲1936/11	【講演・談話記録】〈*香港仏教団体主催の歓迎会にて〉	
△1936/10/7▲1936/10/8	【講演・談話記録】〈*広東省政府主催の歓迎会にて〉	
1936/10/9		
△1936/10/11▲1936/10/12	【講演・談話記録】童子軍的志願是恢復固有道徳智能和迎頭趕上世界文化〈*中国童子軍第2次大検閲大露営の閉幕、総理倫敦蒙難紀念の典礼にて〉	
△1936/10/12▲1936/10/13	【講演・談話記録】参加世運会情形及個人観察所得〈*中国国民党中央党部の第45次総理紀念週にて〉	
△1936/10/16▲1936/10/17	【講演・談話記録】〈*臨時高等考試授証典礼にて〉	
△1936/10/17	【著作】致呉鉄城市長電	
1936/10/25		
△1936/10/31▲1936/11/1	【著作】〈*蒋介石50歳誕生日の祝辞〉	
△1936/10/31▲1936/11/2-11/3	【講演・談話記録】蒋先生成就勲業之根本〈*無線放送にて〉	
△1936/11/1?▲1936/11/2	【講演・談話記録】〈*首都飯店にて〉	
△1936/11/11	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
1936/11/12		
1936/12/10		
△1936/12/12	【著作】覆綏遠傅主席〈*傅宜生〉電	
△1936/12/16	【著作】覆広東黄主席〈*黄慕松〉電	
△1936/12/17	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1936/12/20	【著作】〈*閻錫山宛の書簡〉	居正,孫科,戴伝賢など
△1936/12/22	【著作】致〈*中国童子軍〉総会函	
△1936/12/23	【著作】致西蔵熱振呼図克図電	
△1936/12/31▲1937/1/1	【講演・談話記録】〈*ドイツ政府からベルリンオリンピック一等勲章を授与されて〉	
△1936	【著作】中央陸軍軍官学校校史序	
△1936	【書画】中国童子軍総会月刊	戴伝賢
△1936	【著作】〈*中国童子軍総会月刊に寄せて〉	戴伝賢
△1936	【書画】忠孝仁愛信義和平	戴伝賢
1936/?/?		
△1937/1/1▲1937/1	【講演・談話記録】元旦演詞〈*考試院にて〉	
△1937/1/2?▲1937/1/5	【講演・談話記録】〈*南京滞在の辺疆出身の知識人や政府関係者に対して〉	
△1937/1/6	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1937/1/29	【著作】題鈕恂言女士画冊	
▲1937/2	【著作】菩薩戒本経羯磨文訳主唐三蔵法師玄奘伝略並頌	
△1937/2/2	【著作】致蒙蔵委員会呉委員長〈*呉忠信〉書	
1937/2/5		
△1937/2/6	【著作】致宋雨村甥書	
△1937/2/10	【著作】致上海呉市長〈*呉鉄城〉書	
△1937/2/12▲1937/2/13	【著作】〈*林森誕生日の祝辞〉	戴伝賢
1937/2/15-2/22		
△1937/2/18▲1937/2/19	【著作】〈*朱培徳を追悼する祭文〉	
△1937/2/22	【著作】致宋雨村甥書	
△1937/2/22	【著作】致三姊書	
1937/3/3		
△1937/3/6	【著作】致鍾福長甥書	
△1937/3/15	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1937/3/20	【著作】覆馬軍長馬師長電	
△1937/3/21▲1937/3/22	【講演・談話記録】〈*新亜細亜学会第7次会員大会(南京)にて〉	
1937/3/?		
△1937/立春前五日	【著作】題陳鳴謙先生蔵方正学先生手巻	
△1937/立春日	【著作】題呉礼卿忠信先生龍珠感旧図	
△1937/仲春	【著作】誌日本東京政法学校概略	
△1937/4/1	【著作】致印度泰果爾Rabindranath Tagore先生電	蔡元培,戴伝賢,陳大斉
1937/4/4		

	孫科、葉楚傖、王寵恵と憲法草案について審議。
南京『中央日報』副刊「中国心理衛生協会成立大会特刊」	
南京『中央日報』副刊「江蘇全省禁煙会議特刊」	
南京『中央日報』「京市童軍今挙行大検閲」	不詳。
南京『中央日報』「京市童軍今挙行大検閲」	
	国民政府、中華民国憲法草案(五五憲草)を公布。
南京『中央日報』「戴院長明晩赴滬」○28,29	
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「救国教育之基本原則」(南京『中央党務月刊』第94期,1936/5)。
南京『中央日報』「参加世運政府代表戴院長昨晩赴滬」	秘書丁文淵とともに南京発。上海着。
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
南京『中央日報』「各方唁慰胡主席家属」○33(致胡夫人暨木蘭賢姪電)	
○33	
南京『中央日報』「出席世運政府代表戴院長今晨出国」	5/19<*もしくは20>上海発。
	香港滞在。
	マニラ、シンガポール、ペナン、メダン、コロンボを経て、マルセイユ着。
	パリ滞在。Majestic Hotelに投宿。駐ドイツ特命全権大使程天放や駐フランス特命全権大使顧維鈞が戴季陶を訪問。歌劇「Golden Cock」やバレエ、エッフェル塔を参観。
	不詳。
	パリ発。ブリュッセル着。Hotel Astoriaに投宿。
	駐ベルギー全権公使朱鶴翔が戴季陶を訪問。ベルギー国立歴史美術館を参観。館の「東方図書室」が所蔵する自著『青年之路』に署名。
	陸軍体育学校、古代美術館、ワーテルロー戦場址を参観。
	アムステルダム着。
南京『中央日報』「我参加世運総代表戴院長昨抵柏林」	不詳。ストックホルムを経てベルリン着。その後、ワルシャワ訪問。
南京『中央日報』「戴院長招待留徳学生」	不詳。この頃、ハイデルベルク大学Ruprecht-Karls-Universität Heidelbergに鄒魯を訪問するなど、ドイツの各都市を訪問。
	不詳。
	不詳。
南京『中央日報』「徳遠東協会歓宴戴院長等」	不詳。ベルリン駐在の唐縦と会談。
	宣伝大臣ヨーゼフ=ゲッペルスを表敬訪問。
○33	
	ベルリンオリンピック開会式に出席。
南京『中央日報』「戴院長謁希特勒」	アドルフ=ヒトラーを表敬訪問。不詳。
	行政院第272次会議は、警官高等学校を中央警官学校に改組することを決議し、戴季陶を校務委員に任命。
	外務大臣ヨアヒム=フォン=リッベントロップ主催の晩餐会に出席。
南京『中央日報』「戴院長昨訪希拉克」	ヒトラー・ユーゲント指導者バルドゥーア=フォン=シーラハを表敬訪問。不詳。ドイツ国立歌劇院で開催された晩餐会に出席。
	空軍大臣ヘルマン=ゲーリング主催の晩餐会に出席。
	ベルリンオリンピック閉会式に出席。
○33	駐ドイツ中国大使館の紀念週に出席。
南京『中央日報』「中国留欧学聯会在柏林挙行年会」	Bad Sarrow(ベルリン郊外)のHotel Esplanadeで開催された中国留欧学生聯合会の常年大会に出席。
	ベルリン発。
南京『中央日報』「戴院長電謝戈培爾」	
	ベルン、ジュネーヴ、ミュンヘン、プラハ、ウィーンを訪問。9/8ウィーン発。
	ローマ発。その後ジェノヴァを経て、ニースに汪精衛を訪問。
	ニース発。ジェノヴァで乗船。
『海潮音』第17巻第11号「香港仏教団体歓迎戴院長」	香港着。
南京『中央日報』「戴院長祭胡故主席」	広州着。
	空路、南京着。
南京『中央日報』「童軍大検閲大露営」○28,29	
南京『中央日報』	
南京『中央日報』「考試院昨晨挙行臨時高考授証典礼」	
○33	
	胡漢民国葬典礼(南京)に出席。
南京『中央日報』「戴院長賀寿詞」	
南京『中央日報』	主な転載箇所:戴伝賢「蒋先生成就勲業之根本」(南京『中央党務月刊』第99期,1936/10)。
南京『中央日報』「首都飯店軽歌曼舞戴院長苦口勧勉」	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	国民政府は戴季陶に一等采玉勲章を授与。
	五期中執会27次常会は戴季陶を党務工作人員従政資格甄審委員会委員に任命。
○33	西安事件勃発。五期中執会28次常会(臨時会議)に出席し、張学良と楊虎城の武力「討伐」を主張。
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
『海外訪史録』440頁	
○28,29(致中国童子軍総会書)	
○33	
南京『中央日報』「徳政府贈戴院長等世界運動会勲章」	
○29	
南京『中国童子軍総会月刊』	12月、中国童子軍総会に五万余元を寄付。
南京『中国童子軍総会月刊』	
南京『中国童子軍総会月刊』	
	南京市四川同郷会は戴季陶の四川省籍を解除することを決議するが、後に撤回。
南京『新亜細亜』第13巻第1期	
南京『中央日報』「戴院長歓宴辺疆人士」	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
南京『新亜細亜』第13巻第2期○29	
○29	
	国民政府教育部は戴季陶を国立中央図書館建築委員長に任命。
○29	
○29	
南京『中央日報』「各方祝賀林主席寿辰」	
	中国国民党五期三中全会(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員に任命。
南京『中央日報』「三中全会全体委員為朱培徳黙哀致敬」	
○29	
○33	
	五期中政会第37次会議は戴季陶を中央執行委員会政治委員会国防委員会委員に任命。
○29	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33	
南京『中央日報』「新亜細亜学会昨開第七届大会」	不詳。
	丁鼎丞、陳果夫などと中央政治学校の改組について会談。
○29	
○29	
○29	
『譚雲山与中印文化交流』54頁○33	
	四川旅京旅滬両同郷会は戴季陶を川省旱災救済協会会長に任命。

△1937/4/8▲1937/4〈*実際は5/31以後〉	【著作】〈*タゴール宛の書簡〉	戴伝賢
△1937/4/10以前▲1937/4/11	【著作】〈*沙王、安欽大師など来京の歓迎詞(代読)〉	
△1937/4/14	【著作】致劉振東先生書	
1937/4		
△1937/5/3	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書	
△1937/5/3	【著作】致丁鼎丞先生書	
△1937/5/3	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1937/5/3	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1937/5/12	【著作】致譚伯羽世講書	
△1937/5/12	【著作】致中央政治委員会汪主席〈*汪精衛〉書	
▲1937/5/20	【著作】〈*中央政治学校建立十週年紀念祝詞〉	
△1937/5/31▲1937/4〈*実際は5/31以後〉	【著作】法国航空現状序	
△1937/6/8	【著作】批考選委員会纏陳高等考試分為初試再試並加訓練辦法之意見案	
△1937/6/10	【著作】批本院秘書処摘録院会部同人対高考分初試再試並加訓練及中央政治学校改組各辦法意見案	
△1937/6/16	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1937/6/17	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
△1937/6/17	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉電	
1937/6/18		
△1937/6/22	【著作】覆蒋委員長〈*蒋介石〉電	
1937/6/30?		
△1937/7/2	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
1937/7/3		
1937/7/6		
1937/7/7		
△1937/7/9	【講演・談話記録】童子軍教育的基本精神〈*廬山暑期訓練団にて〉	
1937/7/16		
△1937/7/21	【著作】致魯通礼先生書	
1937/7/22		
△1937/7/24	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡,廬山より〉	
△1937/7/26	【著作】致許秘書長〈*許公武〉書	
△1937/7/27	【講演・談話記録】童子軍幹部的責任与信念〈*童子軍組第二期学員に対して,廬山暑期訓練団にて〉	
△1937/7/31	【著作】致江西熊主席〈*熊天一〉書	
△1937/7/?	【著作】対中央商訂高考分為初試再試並加訓練辦法各条文之意見	
△1937/7/?	【著作】対中央政治学校改組辦法各条文之意見	
1937/8/1		
△1937/8/2▲1937/8/3	【著作】〈*佟麟閣の家族、趙登禹の家族への弔電〉	戴伝賢
△1937/8/5▲1937/8/7-8/8	【講演・談話記録】抗敵救国的要点〈*無線放送にて〉	
1937/8/13		
△1937/8/21	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
△1937/8/24	【著作】覆浙江朱主席〈*朱騮先〉電	
△1937/8/?	【著作】中央軍校〈*中央陸軍軍官学校〉第十二期学生総隊同学録序	
△1937/9/12	【著作】覆大剛法師書	
1937/9/23		
△1937/10/14	【著作】致河南劉主任商主任電	
△1937/10/19	【著作】致山西閻主任〈*閻百川〉電	
△1937/10月霜降日	【著作】防空学校第一期畢業同学録序	
△1937/11/3▲1937/11/4	【講演・談話記録】〈*中国紅十字会本京分会救護訓練班の第3期開学典礼にて〉	
△1937/11/15	【著作】〈*九世班禅大師宛の書簡〉	
1937/11/18		
1937/11/19		
1937/11/20		
1937/11/23		
1937/11/29		
1937/11/30		
△1937/11月以前	【著作】〈*孫文、胡漢民、廖仲愷の寄せ書きに題す〉	伝賢
△1937/12/8	【著作】致西陲宣化使行轅暨趙専使〈*趙守鈺〉電〈*貴陽より〉	
△1937/12/8	【著作】覆李司令長官〈*李徳鄰〉電〈*貴陽より〉	
1937/12/10		
△1937/12-1946/5	【著作】書日本古歌附記〈*重慶にて〉	
1937/12/13		
△1937/12/14	【著作】致蒋委員長〈*蒋介石〉書	
△1937/12/17	【著作】〈*西陲宣化使署宛の書簡〉	戴伝賢,呉忠信
△1937/12/18	【著作】致熱振禅師電	
△1937/12/23以後	【著作】〈*九世班禅大師を追悼する祭文〉	戴
△1937/12/25	【著作】致賀主席〈*賀元靖〉夏総参議〈*夏靈炳〉書	
△1937/?/?	【著作】題丁文江先生著書	
1938/1/16		
△1938/1/21	【著作】致劉司令長官〈*劉甫澄〉治喪委員会電	
△1938/1/21	【著作】致四川省政府電	
△1938/1/30	【著作】致欧陽竟無先生書	
△1938/2/3	【著作】覆教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1938/2/3	【著作】致趙専使班禅大師治喪委員会等電	
△1938/2/6	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1938/2/9	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1938/2/9	【著作】致蒙蔵委員会呉委員長〈*呉礼卿〉書	
△1938/2/12	【著作】致蒙蔵委員会呉委員長〈*呉礼卿〉書	
△1938/2/14▲1938/2/15	【講演・談話記録】日本明治維新以後政治上観感〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	
△1938/2/17	【著作】危険時間応守之秩序	
△1938/2/23	【著作】致成都陳市長〈*陳炳光〉書	
△1938/2/?	【著作】致中央政治学校諸同学書	
△1938/3/17	【著作】致四川鄧主任〈*鄧晋康〉電	
△1938/3/25	【著作】致四川鄧主任〈*鄧晋康〉電	
△1938/3/26	【著作】致陳静珊師長電	
△1938/3/26	【著作】致呂立南王志遠両旅長電	
△1938/3/?	【著作】致朱騮先先生書	
1938/3/28		
1938/3/29-4/1		
△1938/4/3	【著作】致蒙蔵委員会呉委員長〈*呉礼卿〉電〈*武漢より〉	
1938/4/5		
1938/4/6-4/8		
△1938/4/19	【著作】上総裁副総裁電	
△1938/4/19▲1938/4/20	【講演・談話記録】〈*九世班禅致祭、戦況などについて,成都にて〉	
△1938/4/19-12/8	【著作】康行日記	
1938/4/24		

南京『新亜細亜』第13巻第4期○29(致泰果爾先生書)	
南京『中央日報』「戴院長鈕副院長昨宴沙王安欽等」	
○29	中国学院Cheena-Bhavana設立典礼(インド・サンティニケタンの(タゴール)国際大学The Visva-Bharati)。
	湯山、浙江省南潯の張静江宅に滞在。
○29	
○29	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○29	
南京『中央日報』「中央政治学校成立十週紀念」○29	
南京『新亜細亜』第13巻第4期○29(法国航空現況序),30(同前)	
○33	
○33	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○33	
○33	
	漢民学院董事会設立、同会は戴季陶を董事に任命。
○33	
	蒙蔵館暨蒙蔵委員会新会址(湯山賓館)建設委員会設立、同会は戴季陶を主任委員に任命。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	袁同疇、陳大斉、丁文淵、陳伯稼とともに南京発。
	廬山着。
	盧溝橋事件勃発。
○28,29	
	五期中政会廬山談話会に出席。
○29	
	五期中執会48次常会は戴季陶を中央党部工作同志分撥服務籌備委員会(従政籌備委員会)委員に任命。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
○29	
○28,29	
○29	
○33	
○33	
	廬山発。
南京『中央日報』「戴院長電唁佟趙家属」	南京着。
南京『中央日報』	
	第二次上海事変勃発。その後、南京が空襲に遭いはじめる。
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	国民政府、中ソ不可侵条約を調印。
○33	
○29	
○29	
	蔣介石が中国共産党の「国共合作宣言」を承諾し同党の合法的地位を承認。第二次国共合作成立。
○33	
○33	
○29	
南京『中央日報』「紅会京分会三期救護班昨開学」	
○33(歴年致班禅大師電或覆電(計六十七通)の1通)	
	熊錦帆、但怒剛、陳古枝、劉大元などと会談し、「抗戦必勝,匪勢必張,将来内乱甚於外患」を憂いて泣いたという。鈕有恒、上海に留まる。趙季官、重慶に向かう。趙令儀、浙江省遂安県に向かう。
	南京発。陸路、重慶に向かう。
	国民政府は12/1に中国国民党中央党部、国民政府が重慶に移転することを発表。
	安徽省の蕪湖、宣城、黄山隆阜、休寧、江西省の景徳鎮、南昌を経る。11/23湖南省長沙通過。
	湖南省の衡山(南嶽福厳寺)を経る。11/29零陵(永州)通過。
	広西省桂林通過。桂林で呉礼卿、徐道鄰、張平群と合流。
蔡鴻源「一幅珍貴的挂軸」	
○33	広西省柳州、貴州省都匀を経る。12/8貴州省貴陽通過。貴陽でパンチェンラマ9世没(12/1)の報を受け取る。
○33	
	重慶着。
○33	歌詞:君ならで誰にかみせむ梅の花　色をも香をも知る人ぞ知る(『古今和歌集』に収められた紀友則の作)
	日本軍、南京入城。南京大虐殺。
○33	
○46(戴伝賢呉忠信為速定班禅霊櫬移康啓程事致西陲宣化使署電)	
○33	
○50(祭班禅大師文)	12/23、国民政府は故パンチェンラマ9世に護国宣化広慧円覚大師の称号を追贈し、戴季陶を西康省康定に派遣し故パンチェンラマ9世を祀ることを決議。1938/4上旬、国民政府は祭祀の地を西康省甘孜に改めることを決議。
○29	
○29	
	内閣総理大臣近衛文麿、「国民政府を対手にせず」と声明。
○33	
○33	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	
漢口『申報』「中央国府両紀念週」	不詳。
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29	
	「中華民国維新政府」設立(南京)。
	中国国民党臨時全国代表大会(武漢)に出席。同会は戴季陶を主席団、中央執行委員会政治委員会法制専門委員会委員に任命。
○33	
	重慶着。4月、趙季官を香港経由で上海に遣る。
	中国国民党五期四中全会(武漢)は戴季陶を第五期中央執行委員会常務委員に選出。
○33	向伝義、陳天錫などとともに重慶発。空路、成都着。考試院院長行轅――総参賛:向伝義(西康建省委員会委員);秘書:陳敬修(前蒙蔵委員会総務処処長);参賛:馬鶴天(蒙蔵委員会委員),劉家駒(西陲宣化使公署秘書),孔慶宗(蒙蔵委員会蔵事処処長);許崇灝(考試院秘書長),陳天錫(考試院秘書)など。
漢口『申報』「戴伝賢抵蓉」	
○50	
	広漢県着。その後、金堂県訪問。展墓。

1938/5/1		
△1938/5/3	【著作】上総裁副総裁電〈*成都より〉	
△1938/5/5	【著作】致宋雨村甥書	
△1938/5/5	【著作】致朱騮先先生書	
△1938/5/5	【著作】致呉委員長〈*呉礼卿〉電〈*成都より〉	
△1938/5/28	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉汪副総裁〈*汪精衛〉電〈*成都より〉	
△1938/5/?	【著作】跋徐子休夫子書孝経〈*成都にて〉	
△1938/5/?	【著作】贈益廷先生序〈*成都にて〉	
△1938/5/?	【著作】安岳陳氏族譜序	
1938/5/29		
△1938/5/30	【講演・談話記録】〈*総理紀念週(雅安)にて〉	
△1938/6/1	【著作】致雅安県籌修文廟、総理紀念堂諸君書	
△1938/6/1	【講演・談話記録】〈*学生に対して,滎経にて〉	
1938/6/2		
1938/6/3		
△1938/6/4	【著作】致漢源鄧県長〈*鄧明枢〉書	
1938/6/5		
△1938/6/6	【著作】致瀘定李県長〈*李竹修(林)〉第二区謝区長〈*謝明亮〉書	
△1938/6/6	【講演・談話記録】〈*興隆場にて〉	
△1938/6/8	【著作】致瀘定李県長〈*李竹修〉書	
△1938/6/8	【講演・談話記録】〈*学生に対して,瓦斯溝にて〉	
1938/6/9		
△1938/6/10	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉汪副総裁〈*汪精衛〉電〈*康定より〉	
△1938/6/10	【著作】致魏文官〈*魏子杞〉長電〈*康定より〉	
△1938/6/10	【講演・談話記録】〈*康定にて〉	
△1938/6/12	【講演・談話記録】〈*党政軍各機関、学校、法団に対して,康定にて〉	
△1938/6/13	【講演・談話記録】〈*西康建省委員会拡大総理紀念週(康定)にて〉	
△1938/6/14	【著作】致丁傑大徳書	
△1938/6/14	【講演・談話記録】〈*党政軍各機関、学校、法団の長に対して,康定にて〉	
1938/6/21		
1938/6/22		
△1938/6/23	【講演・談話記録】〈*学界教職員に対して,康定にて〉	
△1938/6/24	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党務学校、中国国民党陸軍軍官学校、中山大学の卒業生に対して,康定にて〉	
△1938/6/24	【講演・談話記録】〈*西康建省委員会、一三六師師部合学術研究会に対して,康定にて〉	
△1938/6/25	【講演・談話記録】〈*僧侶、居士に対して,康定にて〉	
△1938/6/25	【講演・談話記録】〈*中国国民党西康省党部の幹部に対して,康定にて〉	
△1938/6/26	【著作】致中央党部葉〈*葉楚傖〉、朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*康定より〉	
△1938/6/28	【著作】致朱騮先先生書	
△1938/6/30	【著作】致西康建省委員会、省党部書	
△1938/7/7	【著作】致国民参政会電〈*康定より〉	
△1938/7/8	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉汪副総裁〈*汪精衛〉電〈*康定より〉	
△1938/7/13	【著作】康導週刊序	
△1938/7/13	【著作】致西康教育界諸先生書	
△1938/7/13	【著作】致大剛法師書	
△1938/7/15	【著作】致劉蘊光夫人書	
△1938/7/15	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉汪副総裁〈*汪精衛〉電〈*康定より〉	
1938/7/16		
1938/7/17		
1938/7/18		
1938/7/19		
1938/7/20		
1938/7/21		
1938/7/22		
1938/7/23		
△1938/7/24	【著作】致道孚戴県長〈*戴安琴〉書〈*霊雀寺より〉	
△1938/7/24	【著作】覆朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*道孚より〉	
△1938/7/24	【講演・談話記録】〈*道孚にて〉	
△1938/7/27	【著作】致道孚霊雀寺僧伽書	
1938/7/29		
△1938/7/30	【著作】致道孚戴県長〈*戴安琴〉書	
△1938/7/31	【著作】致鑪霍黄県長〈*黄騰(靖宇)〉書	
△1938/7/31	【講演・談話記録】〈*学生に対して,蝦拉沱県立小学校〉	
△1938/8/1	【著作】致鑪霍黄県長〈*黄騰〉書	
△1938/8/1	【著作】致鑪霍寿寧寺諸大徳書	
△1938/8/1	【講演・談話記録】〈*拡大総理紀念週(寿寧寺)にて〉	
1938/8/2		
1938/8/3		
1938/8/4		
△1938/8/5	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉汪副総裁〈*汪精衛〉電〈*甘孜より〉	
△1938/8/6	【著作】致魏文官長〈*魏子杞〉呂参軍長〈*呂漢羣〉電〈*甘孜より〉	
△1938/8/7	【著作】護国宣化広慧円覚大師班禅額爾徳尼頌〈*甘孜にて〉	不空金剛
△1938/8/7?	【著作】護国宣化広慧円覚大師頌	
△1938/8/8	【講演・談話記録】〈*拡大総理紀念週(甘孜)にて〉	
△1938/8/8	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉電〈*甘孜より〉	
△1938/8/9	【著作】覆中央党部朱秘書長〈*朱騮先〉電	
△1938/8/12	【著作】致甘孜章県長〈*章家麟(逸仙)〉書	
△1938/8/15	【著作】総理紀念週述詞〈*総理紀念週(甘孜)にて〉	
△1938/8/16	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*甘孜より〉	
△1938/8/18	【著作】〈*23日に甘孜を発つ予定である,国民政府主席林森宛の書簡〉	
△1938/8/22	【講演・談話記録】〈*拡大総理紀念週(甘孜)にて〉	
△1938/8/22	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉電〈*甘孜より〉	
1938/8/23		
1938/8/24		
1938/8/25		
△1938/8/?	【著作】鑪霍県寿寧寺比丘殉道碑文	
1938/8/26		
△1938/8/27	【著作】致道孚戴県長〈*戴安琴〉書	
1938/8/28		
△1938/8/29	【著作】致道孚戴県長〈*戴安琴〉書	
1938/8/30		
1938/8/31		
△1938/9/1	【著作】致呉委員長〈*呉礼卿〉電〈*長壩村より〉	
1938/9/2		
△1938/9/3	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*折多塘より〉	
△1938/9/4	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉電〈*康定より〉	
1938/9/5	【講演・談話記録】〈*西康建省委員会拡大紀念週(康定)にて〉	
△1938/9/7	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*康定より〉	
△1938/9/9	【著作】答班禅大師堪布会議庁偈	
△1938/9/9	【著作】致格聡大徳書	
△1938/9/9▲1944/8	【著作】誦大剛法師〈*康定にて〉	不空金剛

	成都着。
○33	
○29	
○33	
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	
	成都発。雅安着。
○50	不詳。
○29	雅安発。滎経着。
○50	不詳。
	滎経発。鳳儀堡(黄泥舗)着。
	鳳儀堡発。漢源着。
○29	漢源発。泥頭駅(宜東郷)着。
	泥頭駅発。化林坪着。
○29	化林坪発。興隆場を経て、瀘定着。
○50	不詳。
○29	瀘定発。瓦斯溝着。
○50	不詳。
	瓦斯溝発。康定着。
○33	午前、競馬観覧(馬山)。
○33	
○50	不詳。
○50	不詳。
○50	不詳。
○29	
○50	不詳。
	南無寺(法明寺)、奪吉扎寺(金剛寺)、多乍寺、易襲寺、薩迦寺、俄巴寺、安却寺に参る。代理人を郭達将軍廟に参らせる。安却寺を安覚寺に改名。
	天主堂、清真寺、安息会、天主教真原堂、福音堂に参る。
○50	不詳。
○50	不詳。
○50	不詳。
○50	不詳。
○50	不詳。
○29	
○29	馬に左踵を蹴られ負傷。幼少期に負った踵の傷も痛み出す。
○29	7/1、中国国民党西康省党部、西康建省委員会主催の国民政府成立紀念典礼を欠席。
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
	康定発。折多塘着。
	折多塘発。水橋子着。
	水橋子発。固墟着。
	固墟発。中谷着。
	中谷発。恵遠廟着。
	恵遠廟(泰寧寺)を参り、出発。官寨子着。
	官寨子発。郭卡着。
	郭卡発。道孚の霊雀寺着。
○29	
○33	
○50	不詳。その後、霊雀寺を参る。
○29	発熱。
	霊雀寺発。大寨着。
○29	大寨発。甲吉隆着。
○29	甲吉隆発。蝦拉沱県立小学校を経て鑪霍の寿寧寺着。
○50	不詳。
○29	
○29	
○50	不詳。
	寿寧寺発。卡当着。
	卡当発。卡撒着。
	卡撒発。蒲玉龍着。
○33	蒲玉龍発。甘孜着。班禅大師の遺体を納めた香根寺を参る。その後、遺体を甘滋寺に移す。
○33	
○29, 50	
○29	
○50	不詳。
○33	甘滋寺で祭祀を行う。
○29	甘滋寺で祭祀を行う。
○29	甘滋寺で「護国宣化広慧円覚大師班禅額爾徳尼頌」を唱え、七日間の誦経を始める。
○29	書面報告。
○33	
○50	不詳。
○50	不詳。
○33	
	甘滋寺を参る。甘孜発。卡撒着。
	卡撒発。卡当着。
	卡当発。鑪霍の寿寧寺着。
○29	
	寿寧寺発。将軍橋着。
○29	先師孔子誕辰紀念典礼を行う。将軍橋発。道孚着。
	霊雀寺を参る。
○29	総理紀念週の行事を行う。道孚発。龍灯壩着。
	龍灯壩発。泰寧着。
	泰寧発。中谷着。
○33	中谷発。長壩村着。
	長壩村発。山垠子着。
○33	山垠子発。折多塘着。
○33	折多塘発。康定着。
○50	不詳。
○33	
○29	
○29	
重慶『新亜細亜』第14巻第2期○29(贈大剛法師)	

△1938/9/?	【著作】勗班禅大師行轅諸護衛士〈*康定にて〉	
1938/9/10		
1938/9/11		
1938/9/12		
1938/9/13		
1938/9/14		
△1938/9/14	【講演・談話記録】〈*漢源駐在の将士に対して〉	
1938/9/15		
△1938/9/16	【著作】致榮経県復興場教養保衛各界人士書〈*復興場(榮経県)にて〉	
△1938/9/16	【著作】贈宋玉堂先生序	
△1938/9/16	【著作】致榮経県長暨士紳書	
1938/9/17		
△1938/9/18	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉電〈*雅安より〉	
△1938/9/19▲1944/8	【著作】聯語十四則〈*雅安にて〉	
△1938/9/19	【著作】致向総参賛〈*向育仁〉等電〈*雅安より〉	
△1938/9/20	【著作】致魏文官長〈*魏子杞〉電〈*雅安より〉	
△1938/9/20	【著作】中国童子軍(的)偉大精神(歌)序言及解釈〈*雅安にて〉	
△1938/9/21	【著作】致陳伯稼秘書電〈*雅安より〉	
△1938/9/24直後	【書画】	
1938/9/26		
△1938/9/27	【著作】覆徐孝恢先生書	
△1938/10/3	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*成都より〉	
△1938/10/4	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*成都より〉	
△1938/10/6	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*成都より〉	
△1938/10/16	【著作】覆朱秘書長〈*朱騮先〉電〈*成都より〉	
△1938/10/22	【著作】覆外交部王部長〈*王亮疇〉電〈*成都より〉	
△1938/10/25	【講演・談話記録】検閲四川学生集中訓練第一総隊訓詞	
△1938/10/?▲1944/8	【著作】大士賛〈*成都にて〉	不空金剛
△1938年霜降月(11月)	【著作】防空学校第一期畢業同学録序	
△1938/11/3	【著作】致宋雨村甥書	
△1938/11/19	【講演・談話記録】川省挙行抗戦週年紀念致詞	
△1938/11/21以前	【著作】致家興姪書	
△1938/11/21	【著作】広漢新置房屋簡章	
△1938/11/21	【著作】覆許公武先生書	
▲1938/11/22-11/24	【著作】〈*国民政府代表として没した九世班禅大師を西康省甘孜で祀ったことに関する復命書〉	戴伝賢
△1938/11/22	【著作】致大二嫂並姪輩書	
△1938/11/22	【著作】致大嫂書	
1938/11/21〈*もしくは29〉-1939/1/22		
1938/12/1		
1938/12/6		
1938/12/15		
△1938/12/16	【著作】銓叙部呈擬考試及格国難期内失業人員救済辦法四項	
1938/12/19		
△1938/12/?	【著作】中国童子軍誓詞要義	
△1939/1/2▲1939/1/3	【講演・談話記録】去年奉派赴康致祭班禅大師之経過〈*国民政府の総理紀念週にて〉	
△1939/1/5	【著作】致向育仁副軍長書	
△1939/1/7	【著作】致宋雨村甥等書	
△1939/1/13	【著作】致陳果夫先生書	
△1939/1/13	【著作】致安国児〈*戴安国〉電	
△1939/1/13	【著作】致葉佩林姪婿永年姪書	
△1939/1/14	【著作】覆中央執行委員会秘書処書	
△1939/1/18	【著作】覆呉兆棠同志書	
△1939/1/20	【著作】覆陳果夫先生書	
1939/1/21-1/30		
△1939/1/22	【著作】致宋雨村甥書	
△1939/1/23	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉二書	
△1939/1/26	【著作】致張一寛君書	
△1939/1/26	【著作】致宋雨村甥書	
△1939/1/30	【著作】上胡俊卿夫子書	
△1939/1/30	【著作】致宋雨村甥書	
△1939/1/30	【著作】致広漢杜県長〈*杜徳沛〉書	
△1939/1/30	【著作】致張一寛君書	
△1939/2/2	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉書	
1939/2/2		
△1939/2/3	【著作】致中央党部朱秘書長〈*朱騮先〉書	
△1939/2/3	【著作】致朱叔癡、熊錦帆先生書	
△1939/2/3	【著作】致家興姪書	
△1939/2/7▲1939/2/8	【講演・談話記録】警察之概念〈*中央警官学校にて〉	
△1939/2/10	【著作】覆陳果夫先生書	
△1939/2/12▲1939/2/20	【著作】〈*国民参政会第1期第3次大会への祝辞〉	戴伝賢
△1939/2/12	【著作】致財政部徐次長〈*徐可庭〉書	
△1939/2/12	【著作】致国府印鋳局周局長〈*周仲良〉書	
△1939/2/12	【著作】覆周中礼同志書	
△1939/2/13	【著作】書中央紀念週報告大意	
△1939/2/25	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉書	
△1939/2/26	【著作】致蔣緯国姪書	
△1939/2/26	【著作】致宋雨村甥書	
△1939/2/26	【著作】致審計部劉次長〈*劉紀文〉書	
△1939/2/26	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1939/2/27	【著作】院会部職員家属疏散事項之指示	
△〈*1939/〉3/1	【著作】〈*許公武、沈士遠など宛の書簡〉	賢
△1939/3/8	【著作】覆中央秘書処関於党綱解釈之意見書	
△1939/3/10	【著作】覆蒙蔵委員会呉委員長〈*呉礼卿〉書	
△1939/3/10	【著作】覆胡俊卿夫子書	
△1939/3/10	【著作】致広漢杜県長〈*杜徳沛〉書	
△1939/3/11	【著作】致広漢諸郷長書	
△1939/3/11	【著作】致朱騮先先生書	
△1939/3/15	【著作】童子軍節致童子軍書	
△1939/3/19	【著作】致譚伯羽世講書	
△1939/3/19	【著作】致重慶市童子軍爬山比賽遇険各位小弟妹書	
△1939/3/19	【著作】致向育仁副軍長書	
△1939/3/19	【著作】致蔣緯国姪書	

○29	
	康定発。瓦斯溝着。
	瓦斯溝発。瀘定着。
	瀘定発。化林坪着。
	化林坪発。宜東着。
	宜東発。康荘橋(戴季陶が往路の通過時に命名)の落成式典に出席。漢源着。
○50	不詳。
	漢源発。鳳儀堡着。
○29	鳳儀堡発。麻柳場(福星場もしくは復興場)着。
○29	
○29	
	麻柳場発。雅安着。
○33	
重慶『新亜細亜』第14巻第2期○29(夢中得聯語十四副)	
○33	
○33	
○28,29(中国童子軍歌)	
○33	
	戴季陶は故班禅大師の愛馬を譲り受ける。その馬は重慶に着くまでに死ぬ。戴季陶は雅安郊外に埋葬させ碑を建てる。碑に「烏騅」と記す。
	雅安発。成都着。
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29	
重慶『新亜細亜』第14巻第2期○29(蓮花生大士賛)	
○29	近衛文麿、「東亜新秩序」に参加するならば「国民政府といえども否定せず」と声明。
○29	
○33	11月下旬、広漢県滞在。広漢県に転居するための住宅を探す。宋雨村に購入と修築を委託するが、1939年失敗する。
○33	
○29	
重慶『中央日報』「致祭班禅経過」○29(呈報奉命前往甘孜致祭班禅大師経過情形文),50(陳報奉命前往甘孜致祭護国宣化広慧円覚大師班禅額爾徳尼任務完畢経過情形呈文)	11/23中国国民党中央執行委員会政治委員会、国民政府に提出。
○33	
○33	
	インド国民会議派の派遣した医療使節団The National Congress Medical Mission to China、重慶滞在。その間、戴季陶はバスーBejoy Kumar Basuなど使節団団員と会談。
	五期中執会103次常会は戴季陶を各省臨時参議会籌備委員会委員に任命。
	成都発。空路、重慶着。
	五期中執会105次常会は戴季陶などに「国内各民族自治時期之宣告案」の起草(召集人)を命じる。
『考試院施政編年録』第四編	
	汪精衛、陳璧君、周仏海、陶希聖など重慶の国民政府を離脱。12/20、陳公博離脱。
○28,29(書中国童子軍誓詞要義)	12月、趙季官、家祥とともに香港を経て重慶着。
重慶『中央日報』「国府紀念週」	不詳。
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	
	中国国民党五期五中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団に任命。
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
	五期中執会112次常会は、戴季陶を国防最高委員会常務委員に任命。また、中国国民党の党綱を定めるために中央執行委員の意見を徴集することを決議。4/6、五期中執会118次常会は党綱を三民主義と五権憲法とすることを決議。
○29	
○29	
○33	
『中央日報』「戴院長昨赴中央警校訓話」	
○29	
『中央日報』「第三次参政会電慰前方将士」○25(我所切祷於参政会者),29(国民参政会第三次大会開会祝詞)	主な転載箇所:戴伝賢「我所切祷於参政会者」(重慶『血路』第52期,1939/3/4付)。
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
中国第二歴史档案館・全宗号37・案巻号92・標題「考試院長戴伝賢担任中央党政軍訓練班講座所編党政建制図表」,缺首頁	考試院の許崇灝、陳天錫などに、中国国民党、国民政府の歴次組織系統と法制の図表を作成することを命じる。5月完成。1940/3、『党政建制図表』として出版。
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	中国行政学会設立。戴季陶は同会賛助会員に就任。
○29	
○29	
○29	

△1939/3/19	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1939/3/20	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	
△1939/3/21	【著作】致譚伯羽世講書	
△1939/3/21	【著作】致向育仁副軍長書	
△1939/3/25	【著作】致向育仁副軍長書	
△1939/3/25	【著作】致朱騮先葉楚傖陳布雷先生電	
△1939/3/29	【著作】致陳果夫諸先生書	
△1939/3/29	【著作】覆浙江童子軍書	
△1939/3/29	【著作】自励	
△1939/3/?	【著作】書贈中山大学旅川同学会	
△1939/3/?	【著作】千手千眼観自在菩薩賛	
△1939/3/?	【著作】自警	
△1939/3/?	【著作】自儆	
△1939/3/?	【著作】自守	
△1939/3/?	【著作】建国九章	
△1939年春	【著作】自誓	
△1939/4/3	【著作】自警	
△1939/4/3	【著作】致夏光宇先生書	
△1939/4/4	【著作】上国府林主席〈*林森〉、蒋総裁〈*蒋介石〉書	
△1939/4/4	【著作】致陳布雷先生書	
△1939/4/4	【著作】児童節題詞	
△1939/4/5	【著作】覆中央党部秘書処書	
△1939/4/5	【著作】覆陳靄士先生書	
△1939/4/6	【著作】対編製本院及所属会部両年施政計劃之指示	
△1939/清明前三日	【著作】座右銘	
1939/4/9		
△1939/4/10▲1939/4/12	【講演・談話記録】〈*四川省党部人員に対して,成都にて〉	
△1939/4/11	【著作】致朱秘書長〈*朱騮先〉、魏文官長〈*魏子杞〉書	
△1939/4/13	【著作】致家斉姪書	
△1939/4/14	【著作】致四川大学程校長〈*程天放〉書	
△1939/4/16	【著作】致家興姪書	
△1939/4/17	【著作】致辛樹幟、陳可忠教授書	
△1939/4/?	【著作】対編製本院工作年暦及限年計劃之指示	
1939/5/4		
△1939/5/5▲1939/5/6	【講演・談話記録】〈*戦時児童保育会四川分会週年紀念の各保育院成績展(重慶)にて〉	
△1939/5/5	【著作】致盧于正先生書	
△1939/5/7	【講演・談話記録】全国生産会議開会致詞	
1939/5/8		
1939/5/9	【著作】致魏文官長〈*魏子杞〉書	
1939/5/13		
△1939/5/16	【著作】上胡俊卿夫子書	
△1939/5/16	【著作】致広漢孫県長〈*孫実先〉書	
△1939/5/20	【著作】致曾子正先生書	
△1939/5/21	【著作】為国殤薦福文並傷	
△1939/5/21	【著作】致広漢県長暨諸郷長書	
△1939/5/21	【著作】上胡俊卿夫子書	
△1939/5/23	【著作】致章嘉大師書	
△1939/5/24	【著作】致審計部劉次長〈*劉紀文〉伉儷書〈*成都より〉	
△1939/5/29	【著作】覆中央党部朱秘書長〈*朱騮先〉電	
△1939/5/29	【著作】致大嫂書	
△1939/6/5	【著作】致盧于正先生書	
△1939/6/28	【著作】致許秘書長〈*許公武〉電	
△1939/6/29	【著作】致本院鈕副院長〈*鈕惕生〉電	
△1939/7/1	【著作】致章嘉大師書〈*成都より〉	
△1939/7/2	【著作】致銓叙部李部長〈*李滌礎〉書〈*論破格用人与建立保挙制度,対各種銓叙制度之指示,論現行考績法呆滞簡単実行頗多窒礙,論京員互調外官与京員対調制度特宜注意〉	
1939/7/13		
△1939/7/24	【著作】致魏文官長〈*魏子杞〉書〈*成都より〉	
△1939/7/27	【著作】致中央党部朱秘書長〈*朱騮先〉書	
△1939/7/30	【著作】示安国児〈*戴安国〉〈*成都より〉	
△1939/7/?	【著作】論精神総動員	
△1939/8/10	【著作】致朱騮先先生書〈*成都より〉	
△1939/8/11	【著作】致陳伯稼先生書	
1939/8/23-9/5		
△1939/8/31	【著作】致陳伯稼先生書	
1939/9/1		
△1939/9/4	【著作】致陳伯稼先生書	
△1939/9/7	【著作】致陳伯稼先生書	
1939/9/15以前		
△1939/9/20	【著作】致許秘書長〈*許公武〉書	
△1939/9/20	【著作】致四川王主席〈*王治易〉書	
△1939/9/?	【著作】成都修建護国息災法会発願文	
△1939/9/?	【著作】題長特種外交委員会時上中央政治会議報告〈*成都にて〉	
△1939/10/7	【著作】致陳伯稼先生書	
△1939/10/12	【著作】覆中央党部朱秘書長〈*朱騮先〉電	
△1939/10/14	【著作】覆朱秘書長〈*朱騮先〉書	
△1939/10/15	【著作】銓叙部呈擬修正考試及格国難期内失業人員救済辦法第三項	
△1939/10/16	【著作】致成都市運動大会楊会長〈*楊全宇〉書	
1939/10/19		
△1939/10/20	【著作】致呉委員長〈*呉礼卿〉電〈*成都より〉	
△1939/10/22	【著作】致朱騮先先生書〈*成都より〉	
1939/10/26		
△1939/10/28	【著作】六中全会決議案綱領草案	
△1939/10/31	【著作】致葉楚傖、李君佩先生書	
△1939/10/?	【著作】関於文官制服制帽徽章辦法之意見	
△1939/10/?	【著作】題喩元慶君著戦的人生観	
△1939/11/7▲1939/11/9	【著作】〈*馬相伯の家族への弔電〉	戴伝賢,鈕永建
1939/11/8		
1939/11/12-11/20		
△1939/11/17	【著作】覆家斉姪書	
△1939/11/25	【著作】致陳布雷先生書	
△1939/11/28	【著作】致丁鼎丞先生書	
△1939/11/30	【著作】対文官制服制帽式之指示二則　其一	
△1939/11/30	【著作】対高考初試及格人員訓練要点之指示〈*第37次院務会議にて〉	
△1939/11/30	【著作】対考選委員会二十九年度行政計劃草案之指示〈*第37次院務会議にて〉	
△1939/11/30	【著作】対銓叙部二十九年度行政計劃草案之指示〈*論保挙制度与破格用人〉〈*第37次院務会議にて〉	
△1939/11/?	【著作】題蜀風月刊	
△1939/12/2	【著作】致本院鈕副院長〈*鈕永建〉暨諸同人書〈*召集中央人事行政会議之意見〉	
△1939/12/2	【著作】致鈕副院長〈*鈕永建〉書〈*辺省人才応使参加各主要行政部門之意見〉	

○33	全2篇。
○33	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	護国息災法会設立(重慶)、同会は戴季陶を会長に任命。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33, 41	
○29	
	重慶発。空路、成都着。祖先の墓の修繕を計画(1937年春、墓が荒らされていることを発見)。
重慶『中央日報』「戴院長由蓉返渝」	不詳。
○29	成都発。空路、重慶着。
○33	
○29	
○33	
○29	
○33	
	五期中執会120次常会は戴季陶を三民主義叢書編纂委員会主任委員に任命。
重慶『中央日報』「戴院長参観難童作品」	
○29	
○29	
	国民政府の総理紀念週で昏倒。
○29	
	重慶発。空路、成都着。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29, 41	
	五期中執会125次常会は南京の中央政治学校附設蒙蔵学校を辺疆学校に改称し、中央政治学校の5分校を辺疆学校の分校に改制することを決議。
○33	
○29	
○33	
○29, 30, 36	
○33	
○29	
	ネルーJawaharlal Nehru、重慶、成都訪問。戴季陶は成都でネルーと会談。8月、ネルーの歓迎準備を行う諸団体は戴季陶を顧問に任命。
○29	
	蒙疆聯合自治政府設立(張家口)。ドイツ軍、ポーランド侵攻(ヨーロッパで戦争勃発)。
○29	
○29	
	仏教訪問団(団長太虚)は戴季陶を指導委員に任命。
○29	
○29	
○29	成都滞在時は向育仁宅に投宿することが多かったが、9月、吉祥街に住宅を構える。
○33	
○29	
○29	
○29	
『考試院施政編年録』第四編	
○29	
	五期中執会132次常会は戴季陶を中国国民党六中全会の提案起草委員会委員に任命。
○33	
○33	
	安国、成都着。
○29	
○29	
○29, 41	
○29	
重慶『中央日報』「国府明令褒揚馬相伯」	
	重慶で復職。
	中国国民党五期六中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団、決議案整理委員会委員、大会宣言起草委員会委員(召集人)に任命。第五期中央執行委員会常務委員会当然委員に就く。
○33	
○29	
○29	
○33, 41	五期中執会135次常会は戴季陶に文官の制服、佩章を定める委員会の組織を命じる。
○33	
○33	
○33	
○29	
○29, 41	
○29, 41	

△1939/12/2	【著作】迅議広登庸辦法手論〈*要使各省各族必有服務中央之行政人員〉	
△1939/12/3	【著作】致許秘書長〈*許崇灝〉書〈*調整本院秘書参事両処人事与工作之指示〉	
△1939/12/3	【著作】致銓敘部李部長〈*李滌礎〉書	
△1939/12/5	【著作】致王仲武先生書	
△1939/12/5	【著作】致陳伯稼先生書	
△1939/12/6	【著作】関於辦理登記事項之指示	
△1939/12/6	【著作】致陳委員長〈*陳百年〉李部長〈*李滌礎〉書	
△1939/12/6	【著作】致陳布雷先生書	
△1939/12/6	【著作】対文官制服制帽式之指示二則　其二	
△1939/12/8	【著作】致五姪書	
△1939/12/10	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1939/12/15	【著作】致丁鼎丞諸先生書	
△1939/12/20▲1939/12/21	【講演・談話記録】〈*重慶訪問のビルマ訪華団との会談〉	
△1939/12/20	【著作】致本院許秘書長〈*許公武〉書	
△1939/12/?	【著作】批銓叙部呈擬設立中央及地方機関人事専管部門暫行辦法草案	
△1939	【著作】貴陽各界第二期抗戦宣伝週題詞	
△1939	【著作】重慶市節約献金蔵事感言	
△1939	【著作】致任覚五同志書	
△1939	【著作】自誡	
△1940/1/3	【著作】致朱騮先先生書	
△1940/1/11	【著作】請迅速組織審定人文科学名詞委員会文	
△1940/1/11	【著作】呈総裁〈*蔣介石〉陳明対中央設置三民主義叢書編纂委員会意見文	
△1940/1/16	【著作】致本院同人書〈*本届不提新考績辦法及重提考課制度之故〉	
△1940/1/16	【著作】五十初度録雲巣先生贈序銘座右附誌	
△1940/1/17	【著作】対挙行考課有関出題限字之指示	
△1940/1/17	【著作】以後往来成渝務請同事免除迎送之通告	
△1940/1/18	【著作】致院部会同人書〈*対全国中央地方官吏員缺任務等六項之指示，対本院同人参加党政訓練班之指示〉	
△1940/1/20	【著作】致陳果夫先生書	
△1940/1/24	【著作】陸軍大学第十七期開学典礼祝詞	
△1940/1/24	【著作】宣示本院挙行月課之用意	
△1940/1/24	【著作】致呉委員長〈*呉礼卿〉電〈*成都より〉	
△1940/1/24	【著作】致朱騮先先生書	
1940/1/25		
△1940/1/28	【著作】致許秘書長〈*許崇灝〉電〈*成都より〉	
△1940/1/?	【著作】考試院職員月課辦法	
△1940/1/?	【著作】対銓叙部呈擬設置各機関人事管理人員暫行規程草案之批示	
△1940/2/4	【著作】致三姊書	
△1940/2/5	【著作】致広漢孫県長〈*孫実先〉書	
△1940/2/5	【著作】上胡俊卿夫子書	
△1940/2/6▲1940/2/8	【著作】〈*熱振宛の書簡〉	戴伝賢
△1940/2/14▲1940/2/17	【著作】〈*曹譲蘅宛の書簡〉	戴伝賢，張継，屈映光，陳其采
△1940/2/15	【著作】致熱振呼図克図電	
△1940/2/16	【著作】電勗公務員訓練部高等科第一期受訓人員〈*成都より〉	
1940/2/17		
△1940/2/18	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	
△1940/2/20	【著作】致楊啓周先生書	
△1940/2/20	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1940/2/21	【著作】致韓樹声隊長書	
△1940/2/22	【著作】致達賴大師電	
1940/2/23?		
△1940/2/24	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1940/2/25	【著作】致陳伯稼先生書	
△1940/2/26	【著作】致丁鼎丞、陳果夫先生書	
△1940/2/26	【著作】致陳鳴謙軍長書	
△1940/2/27	【著作】対本院提付中央人事行政会議討論各案事先応作処理之指示	
△1940/2/29	【著作】対宣伝部之意見	
△1940/2/?	【著作】勗海外僑胞	
△1940/2/?	【著作】致許秘書長〈*許崇灝〉電〈*成都より〉	
△1940/2/?	【著作】致会部長官川省行政人員甄訓等事会部須各派員赴省接洽辦理電〈*成都より〉	
△1940/2/?	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉〈*成都より〉	
△1940/2-1941年新秋	【著作】跋趙松雪行書心経墨宝九則	
△1940/3/1	【著作】致李司令長官〈*李徳鄰〉書	
△1940/3/2	【著作】題仲母節孝図	
△1940/3/3	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1940/3/3	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	
△1940/3/4▲1940/3/5	【講演・談話記録】〈*中央人事行政会議開幕典礼、中国国民党中央党部、国民政府の紀念週にて〉	
△1940/3/5▲1940/3/6	【講演・談話記録】〈*考試院が提出した全提案の要旨について，中央人事行政会議にて〉	
△1940/3/6	【講演・談話記録】中央人事行政会議談話会中対出席人員発表意見之解答	
△1940/3/7	【講演・談話記録】中央人事行政会議大会中対本院交議案各方発表意見之説明	
△1940/3/8▲1940/3/9	【著作】〈*呂志伊の家族への弔電〉	戴伝賢
△1940/3/9	【著作】致康寄遥先生書	
△1940/3/10	【著作】中央人事行政会議総決議文	
△1940/3/10▲1940/3/11	【講演・談話記録】閉会詞〈*中央人事行政会議閉幕典礼にて〉	
△1940/3/11	【著作】致朱騮先先生書	
△1940/3/13	【著作】中央人事行政会議閉幕後対本院全部工作之指示	
△1940/3/16	【著作】致許秘書長〈*許崇灝〉書〈*対規画設置登記処之指示〉	
△1940/3/19	【著作】党政建制図表序	
	【著作】党政建制図表	
△1940/3/19	【著作】致朱騮先先生書	
△1940/3/20▲1940/3/25	【著作】悼蔡子民先生	戴伝賢
△1940/3/20	【著作】添建辦公房屋及汽車防空洞之指示	
1940/3/21		
△1940/3/22▲1940/3/23	【講演・談話記録】〈*中央政治学校新聞事業専修班甲組第1期学生の畢業典礼にて〉	
△1940/3/29▲1940/3	【著作】〈*戴季陶『三民主義之哲学的基礎』重慶重版の序〉	戴伝賢
1940/3/30		
△1940/3/31	【著作】対二十八年十二月六日指示本院辦理登記事項之補充	
△1940/3/31	【著作】批本院饒参事炎等簽呈遵令擬具全国建置人事財富調査計劃綱要案	
△1940/3/?	【講演・談話記録】勗中央政治学校新聞専修班同学〈*中央政治学校にて〉	
△1940/3/?	【著作】祝泰果爾先生八旬大寿	
△1940/4/1	【著作】致中央党部葉秘書長〈*葉楚傖〉書	
△1940/4/2	【著作】批本院許秘書長崇灝簽擬調整本院人事案	

○29	
○29	川康建設協会第1次理事会は戴季陶を名誉理事に任命。
○29, 41	
○29	
○29	
○29, 41	
○29	
○29	全2篇。
○33, 41	
○33	
○29	1934年、小中学校教科書を研究。1939年、国文、歴史、地理、公民、常識の教科書に注文をつける。
○29	
重慶『中央日報』「第一次中緬童軍携手」	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29, 41	
○33, 36(書雲巣先生賜序)	
○33	
○33	
○29, 41	
○29	
○29	重慶発。成都に向かう。
○33	
○33	
○33	
	五期中執会139次常会は戴季陶を中央政治学校校務委員会常務委員に任命。
○33	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
重慶『中央日報』「戴院長電熱振」○33(致熱振呼図克図電), 47(戴伝賢祝賀拉木登珠継任第十四世達賴喇嘛事致熱振電)	主な転載箇所:「戴院長致電」(『海潮音』第21巻第4号, 1940/4)。
重慶『中央日報』「冊封電熱」	
○33	
○33	
	重慶着。
○33	中国県政学会設立、同会は戴季陶を名誉副会長に任命。
○29	
○33	
○29	全2篇。
○33	
	中国合作協会設立、同会は戴季陶を名誉副会長に任命。
○33	
○29	
○29	
○29	
○33, 41	
○29	
○29	
○33(電詢許秘書長有関会議予備事項)	
○33	
○33	
○29	全9篇。
○29	
○29	
○33	
○33	
重慶『中央日報』「人事行政会議開幕」	不詳。中央人事行政会議(重慶)に出席。
重慶『中央日報』「人事行政会議昨開審査会」○33(対中央人事行政会議説明本院全部提案之要旨), 41(同前)	
○33	
○33, 41	
重慶『中央日報』「戴院長電唁呂志伊家属」	
○29	
○29, 41	
重慶『中央日報』「人事行政会議昨日円満閉幕」○33(中央人事行政会議閉幕後対本会議之感想), 41(同前)	
○33	
○33	
○29, 41	
○29	
中国第二歴史档案館・全宗号37・案巻号92・標題「考試院長戴伝賢担任中央党政軍訓練班講座所編党政建制図表」, 缺首頁	
○33	
重慶『中央日報』○29(蔡孑民先生述)	
○33	
	五期中執会143次常会は戴季陶などが提議する、周浩の遺族に弔慰金を支給する案を採択。
重慶『中央日報』「新聞専修班甲組第一期昨晨挙行畢業典	参考資料:「新聞専修班甲組畢業礼——戴院長頌詞」(重慶『中央日報』1940/3/24付)。
戴季陶『三民主義之哲学的基礎』(重慶:中央組織部党員訓練処秘書処文化駅站総管理処, 初版)○29(重印三民主義哲学之基礎序)	
	「中華民国国民政府」設立(南京)。
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	国民参政会第一期第五次大会(重慶)に出席。国民政府、孫文の尊称を「国父」と定める。
○33	

△1940/4/2	【著作】批銓叙部組織法修正要点草案	
△1940/4/3	【著作】致陳布雷先生書	
△1940/4/3	【著作】致中央党部葉秘書長〈*葉楚傖〉書	
△1940/4/3	【著作】致鄧孟碩先生書	
△1940/4/11	【著作】致五姪書	
△1940/4/11	【著作】致家斉姪書	
△1940/4/24	【著作】致本院陳秘書〈*陳天錫〉書	
1940/5/20		
△1940/5/24	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉書	
△1940/5/24	【著作】致陳可忠先生書	
△1940/5/25	【著作】題李仙根先生所著論書法詩	
△1940/5/25	【著作】上国府林主席〈*林森〉書	
△1940/5/28	【著作】致唐執礼先生書	
△1940/5/28	【著作】覆于乃仁君書	
△1940/5/28-7/18	【著作】加強本院防空工程之指示	
△1940/5/28	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
1940/5/30		
△1940/5/31	【著作】致王東原主任書	
△1940/5/?	【著作】批考選委員会呈擬検選条例草案	
△1940/6/1▲1945/5/10	【著作】批銓叙部請示人事行政会議時交通部提請制定公務員保障法応如何擬訂案	
△1940/6/1-6/?	【著作】題珂羅版印蘭亭序二則	
△1940/6/2	【著作】題北海雲麾碑拓	
△1940/6/4	【著作】致盧于正先生書〈*為加強防空進行工程致盧于正先生書〉	
△1940/6/5	【著作】致呉委員長〈*呉礼卿〉電	
△1940/6/12	【著作】秘書長〈*許公武〉書〈*為加強防空進行工程致許秘書長書〉	
1940/6/13		
△1940/6/14	【著作】上国防最高委員会文〈*為搶修防空工程上国防最高委員会請特許臨時追加予算十万元文〉	
△1940/6/14	【著作】致財政部徐次長〈*徐可亭〉書〈*為搶修防空工程致財政部徐次長請転陳孔部長特別設法挪借五万元書〉	
△1940/6/18	【著作】批院会部調整機構案	
△1940/6/24	【著作】勗星島僑胞	
△1940/6/24	【著作】党軍日報抗戦第三週年紀念特刊題詞	
△1940/6/30	【著作】致周佩箴先生書〈*為搶修防空工程致農民銀行周佩箴先生請透支十五万元書〉	
△1940/6/?	【著作】対西康省参議会候選参議員名冊圏出各員之意見	
1940/7/1-7/8		
△1940/7/3	【著作】呈請組織中央考績委員会専負考簡任官服務成績文	戴伝賢
△1940/7/3	【著作】対本院空襲服務隊之嘉奨及疏散部分人員到歌楽山用意之指示	
△1940/7/4	【著作】致葉楚傖朱騮先先生書〈*成都より〉	
△1940/7/18	【著作】建立院会部臨時機要辦公処及調整機構之指示	
1940/7/25		
1940/7月下旬		
△1940/8/10	【著作】致辛〈*辛樹幟〉蒋〈*蔣慰堂〉陳〈*陳可忠〉三先生書〈*成都より〉	
△1940/8/20	【著作】管理防空洞及内外監察防護辦法之指示〈*成都にて〉	
1940/8月末頃		
△1940/9/1	【著作】致五姪書	
△1940/9/3	【著作】致陝西教育庁王庁長〈*王捷三〉電	
△1940/9/3	【著作】致西北農学院周校長〈*周伯敏〉電	
△1940/9/5	【著作】致文淑〈*趙文淑〉書	
△1940/9/9	【著作】致達賴大師熱振禅師電	
△1940/9/10	【著作】致王捷三庁長、周伯敏校長書	
△1940/9/12▲1940/9/13	【著作】致雲南大学熊校長電〈*中国科学社、中国天文学会、新中国数学会、中国物理学会、中国植物学会、新中国農学会へ転送の書簡〉	
1940/9月上旬		
1940/9/18		
△1940/9/22	【著作】覆陳司令長官〈*陳辞修〉電	
1940/9/27		
△1940/10/9▲1940/10/10	【講演・談話記録】歓迎第卅個双十節〈*無線放送にて〉	
△1940/10/10▲1940/10/11	【講演・談話記録】〈*全国国民体育会議第1次会議の開幕典礼にて〉	
△1940/10/10	【著作】規定院会部職員須従考試及格人員中侭先任用	
△1940/10/11	【著作】派韓樹声前往党政訓練班受訓以後院会部簡薦任人員並応按期分別派往受訓之指示	
△1940/10/12	【著作】覆四川省参議会電	
△1940/10/14▲1940/10/20	【講演・談話記録】〈*中印学会、中緬文化協会主催の歓送茶会にて〉	
△1940/10/17	【著作】致印度黄総領事〈*黄朝琴〉電	
1940/10/19		
△1940/10/20▲1940/12	【講演・談話記録】〈*全僑歓迎大会(ヤンゴン)にて〉	
△1940/10/22▲1940/12	【講演・談話記録】〈*緬中仏教会もしくは緬中文化協会の歓迎会(ヤンゴン)にて〉	
△1940/10▲1940/10/28	【著作】謹擬具三民主義叢書編纂委員会工作計劃附同預算書送請核定以利進行案	戴伝賢
△1940/10/28	【著作】緬甸舟中作偈	
△1940/10/31〈*もしくは22〉▲1940/12	【講演・談話記録】向緬甸人民致親善之意〈*無線放送(ヤンゴン)にて〉	
△1940/10/?	【著作】題贈仰光覚民日報社	
△1940年秋	【著作】勗緬甸新聞界〈*ヤンゴンにて〉	
△1940/10/?	【著作】達堵歌	
△1940/10/?	【著作】遊緬甸旧京〈*マンダレー〉	
△1940/11/?	【著作】由曼徳里〈*マンダレー〉返仰光舟中雑感	
1940/11/10		
1940/11/18		
△1940/11/22-11/23▲1942/8	【講演・談話記録】〈*ガンディMahatma Gandhiとの会談〉	
△1940/11/?	【著作】致印度国民大会領袖孟買大会主席某白髪翁書	
△1940/12/?▲1942/8	【著作】寄尼赫魯獄中	
△1940/12/?▲1942/8	【著作】印度国民大会旗讃	
△1940/12/?	【著作】祝未央	
1940/12		
△1940年冬	【著作】〈*鹿野苑中華仏寺碑文〉	戴伝賢
△1940年冬▲1944/7	【著作】参加摩訶菩提会年会感述〈*国際大学中国学院にて〉	戴伝賢
△1940/12/10〈*もしくは9〉▲1941/1/2	【講演・談話記録】中印文化与衰合離因縁〈*国際大学中国学院にて〉	戴伝賢
△1940/仲冬月▲1942/3/17	【著作】二十九年冬告別印度人士書〈*国際大学中国学院にて〉	戴伝賢
△1940/12	【書画】中国学院〈*国際大学中国学院にて〉	

○33	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29, 41	
	五期中執会148次常会(臨時会)は戴季陶を中国国民党五期七中全会の提案委員会委員に任命。
○29	
○29	1938年から1939年にかけて『広漢志』刊行を発起し、1940年、国立編訳館館長陳可忠に協力を請う(集まった原稿は、1946/4-1946/5の中国国民党中央党部、国民政府が南京に移転する際に損失)。
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
	五期中執会149次常会は戴季陶などに、中央執行委員会常務委員会を代表して党務基層工作叢書の原稿を検討することを命じる。
○29	
○33	
『考政学報』第2期○33(批銓叙部請示如何制定公務員保障法案)	
○29	全2篇。
○29	
○29	
○33	
○29	
	五期中執会150次常会は戴季陶を国民大会選選代表資格審査委員会(及提名委員会)委員に任命。
○29, 41	
○29	
○33, 41	
○29	
○29	
○29	
○29	
	中国国民党五期七中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団、決議案整理委員会委員、宣言起草委員会委員に任命。「考試院及所属考選委員会銓叙部調整機構案」と「組織考績委員会以京察制度為主要参考専負考簡任官之服務成績案」を提議。
『中国国民党中央執行委員会常務委員会会議録』第30冊, 303-304頁○29, 41	
○33	
○33	
○33, 41	
	五期中執会153次常会は戴季陶などに、中央設計局と党政工作考核委員会の設置案について検討することを命じる。
	重慶発。成都に向かう。
○29	
○33	
	陝西省武功の西北農林専科学校が日本軍の空襲に遭う。
○33	
○29, 33	
○33	
○33	
○33	
○29	
重慶『中央日報』「六科学団体在滇挙行年会」○33	
	重慶着。
	五期中執会157次常会は戴季陶を国防最高委員会党政工作考核委員会(当然)委員に任命。
○33	
	日独伊三国同盟結成。
重慶『中央日報』「戴院長播講」	不詳。
重慶『中央日報』「国民体育会議昨晨挙行開幕式」	
○33	
○33	
○33	
重慶『中央日報』「戴院長訪問緬印」	要約:「戴院長訪問緬印仏国」(『海潮音』第21巻第12号, 1940/12)。
○33	中央撫卹委員会第99次会議は戴季陶、商震が提議する、高子培の遺族に弔慰金を支給する案を採択。
	中国国民党代表としてインドに派遣される。国防最高委員会参事沈宗濂、戴安国とともに、重慶発。空路、昆明を経てヤンゴン(ラングーン)着。
『海潮音』第21巻第12号「戴院長訪問緬印仏国」○29(致全緬僑胞書)	主な転載箇所:戴伝賢「全緬僑胞歓宴答詞」(重慶『新亜細亜』第14巻第2期, 1944/8)。
『海潮音』第21巻第12号「戴院長訪問緬印仏国」	不詳。参考資料:「戴院長昨晩在仰光広播」(重慶『中央日報』1940/10/23付)。
『中国国民党中央執行委員会常務委員会会議録』第31冊, 246-254頁、290-294頁	10/28、五期中執会161次常会は同案を検討。11/11、五期中執会162次常会は同案を採択。
○29	全8篇。ネルー、戴季陶のインド訪問を歓迎。参考資料:*Selected Works of Jawaharlal Nehru(Vol. 11)*, pp. 347-349.
『海潮音』第21巻第12号「戴院長訪問緬印仏国」	参考資料:「戴院長昨晩在仰光広播」(重慶『中央日報』1940/10/23付)。
○29	
○29	
○29(南遊雑詩)	
○29(南遊雑詩)	マンダレー訪問。
○29(南遊雑詩)	一節の日本語訳:「日本をよんだ戴季陶の漢詩」(東京『中国』第62号, 1969/1)18頁。ヤンゴンに戻る。ヤンゴン発、空路カルカッタに向かう。
	カルカッタ(サンティニケタン?)にタゴールを訪問。
	アーグラーなどを経て、ニューデリー着。その後、ボンベイ(ムンバイ)に向かう。
許崇灝編著, 黄士華校対『中印歴代関係史略』26頁	ワルダにガーンディーを訪問。参考資料:*The Collected Works of Mahatma Gandhi (LXXIII)*, pp. 189-
○29	
『中印歴代関係史略』	
『中印歴代関係史略』○29(南遊雑詩——贈印度国旗)	
○29(南遊雑詩)	
	アラハーバードにネルーの家族を訪問(当時ネルーは投獄されていた)。その後、シラーヴァスティー、カピラヴァスツ、クシナガラを経て、ベナレスの摩訶菩提会年会に出席。同会は戴季陶を大会主席に任命。
『遅荘回憶録』第6編, 附録　文鈔16-19頁	サールナート訪問。
重慶『新亜細亜』第14巻第1期○29	ナーランダーなどを経て、サンティニケタン訪問。
重慶『中央日報』「中印文化与衰合離因縁——代三十年元旦祝詞」○29(中印両国文化与衰離合因縁頌)	
重慶『中央日報』副刊「印度日特刊」○29(告別印度人士書)	主な転載箇所:戴伝賢「告別印度人士書」(重慶『新亜細亜』第14巻第1期, 1944/7)。
『譚雲山与中印文化交流』48頁	

1940/12/14		
1940/12/23		
1940/12/24		
△1940/12/25▲1940/12/26	【講演・談話記録】〈*復命〉	
△1940/12/26	【著作】致仰光曾次長〈*曾鎔浦〉栄総領事〈*栄宝澧〉電〈*重慶より〉	
△1940/12/27	【著作】致沈宗濂先生電	
△1940/12/28	【著作】致沈宗濂先生電	
△1940	【著作】釈文化救亡	
△1940	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	

	カルカッタ発。空路、ヤンゴン着。
	ヤンゴン発。空路、昆明着。
	昆明発。空路、重慶着。復職。
重慶『中央日報』「戴院長昨謁最高当局」	不詳。
○33	
○33	
○33	
○29	
○33	

年/月/日	題名	筆名(講演者名)
△1941/1/1	【著作】題恕庵(呉礼卿先生)礼仏図	
△1941/1/3▲1941/1/4	【講演・談話記録】〈*中印学会、中緬文化協会主催の招待会にて〉	
△1941/1/4▲1941/1/5	【講演・談話記録】〈*東方文化協会主催の茶会にて〉	
1941/1/6		
△1941/1/13	【著作】致外交部曾次長〈*曾鎔浦〉書	
△1941/1/14	【著作】対編輯考試院公務人員手冊之指示二則　其一	
△1941/1/15	【著作】致軍政部何部長〈*何敬之〉公函	
△1941/1/15	【著作】致軍事委員会商主任〈*商啓予〉公函	
△1941/1/16	【著作】致中央党部葉秘書長〈*葉楚傖〉、朱部長〈*朱騮先〉書	
△1941/1/18	【著作】対編輯考試院公務人員手冊之指示二則　其二	
△1941/1/23	【著作】令考選委員会文〈*令考選委員会従速規画建立学位授与制度〉	
△1941/1▲1942/3/14など	【書画】警声	孝園
△1941/1/?	【著作】致陳委員長〈*陳百年〉暨諸同人書〈*文官制服案応派員与有関機関切実商定以便集会決定呈報中央之指示〉	
△1941/1/?	【著作】辞謝証婚啓事	
△1941/1/?	【著作】厳防招揺啓事	
▲1941/2	【書画】〈*萱野長知に頼まれて〉	戴伝賢
△1941/立春日(2/4)	【著作】仁王護国般若波羅密多経陀羅尼釈	
△1941/2/7	【著作】批文官服制図説	
△1941/2/10	【著作】上国防最高委員会、国民政府文	
△1941/2/10	【著作】覆行政院孔副院長〈*孔庸之〉書	
△1941/2/12	【著作】国府公布勲章条例	
1941/2/17		
△1941/2/22	【著作】致衛司令長官〈*衛俊如〉電	
△1941/2/23	【著作】覆班禅大師行轅電	
△1941/2/23	【著作】致熱振禅師電	
△1941/2/28	【著作】致朱叔癡先生書	
1941/3/1-3/10		
△1941/3/14	【著作】対本院提出八中全会報告書「考銓工作之検討与制度之確立」草案考銓部分之指示〈*第41次院務会議にて〉	
▲1941/3/15	【書画】民国三十年十五週年紀念中国童子軍節特刊	戴伝賢
▲1941/3/15	【著作】有志竟成歌	戴伝賢
△1941/3/15	【著作】対本院提出八中全会報告書「考銓工作之検討与制度之確立」草案緒言及結論部分之指示〈*第42次院務会議にて〉	
△1941/3/15	【著作】対本院行政三年計劃之指示〈*第42次院務会議にて〉	
△1941/3/15	【著作】対修正考選委員会組織法原則及甲乙草案之指示〈*第42次院務会議にて〉	
▲1941/?/?	【著作】第五届中央執行委員会第八次全体会議考試院報告書	
△1941/3/16▲1941/3/17	【講演・談話記録】〈*中国新聞学会の成立大会典礼にて〉	
△1941/3/23	【著作】致劉雨農先生書	
1941/3/24-4/2		
△1941/4/4	【著作】致防空学校黄教育長〈*黄剣霊〉書	
1941/4/13		
△1941/4/15	【著作】対院務会議紀録決議案外応行紀録事項之指示〈*第43次院務会議にて〉	
△1941/4/15	【著作】対著作審査之指示〈*第43次院務会議にて〉	
△1941/4/15	【著作】対特種考試制度必須随時修正之指示〈*第43次院務会議にて〉	
△1941/4/15	【著作】対籌劃辺地司法人員考試辦法案之指示〈*第43次院務会議にて〉	
△1941/4/15	【著作】関於決議中央挙行高普考試録取名額按区域及成績分配之説明(以百分之五十按区域分配以百分之五十憑成績録取)〈*第43次院務会議にて〉	
△1941/4/15	【著作】対公務員考績之指示〈*第43次院務会議にて〉	
△1941/4/15	【著作】対公務員待遇之指示〈*第43次院務会議にて〉	
1941/4/16		
△1941/4/21	【著作】批本院許秘書長崇灝筌擬訓練駐外使領人員辦法草案	
△1941/4/25	【著作】対擬請国府将考試任用各種法規上著作発明之審査事項明令委託中央研究院辦理案之指示	
△1941/4/25	【著作】国府公布公務員内外互調条例	
△1941/4/26	【著作】致盧洽卿先生書	
△1941年暮春之甲辰(4/26?)	【書画】興中会成立宣言	戴伝賢
△1941/4/27	【著作】致童子軍総会陳理事長〈*陳立夫〉書	
△1941/4/27	【著作】致財政部徐次長〈*徐可亭〉書	
△1941/4/27	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉及〈*中国童子軍〉総会諸理事論修改総章書	
△1941/4/30	【著作】覆中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉書	
△1941/4/30?	【著作】対院務会議議程報告事項討論事項外応加列処理事項之指示〈*第43?次院務会議にて〉	
△1941/4	【書画】中華民国軍官誓詞	戴伝賢
△1941/5/2	【著作】関於本院与党政工作考核委員会聯繋之指示	
△1941/5/6	【著作】致中正学校劉校長〈*劉詠堯〉書	
△1941/5/10▲1941/5/12	【著作】請将高等考試司法官初試及格人員送由中央政治学校訓練一個月其余五個月由司法院法官訓練所訓練以重司法実務訓練案	戴伝賢
△1941/5/13	【著作】致向育仁議長書	
△1941/5/14	【著作】致向育仁議長伉儷書	
△1941/5/15	【著作】致伍非百先生書	
△1941/5/18	【著作】致張厲生先生書	
△1941/5/?	【講演・談話記録】認識人事行政的重要忠心努力於本職講詞〈*第1期人事行政人員訓練班学員工作報告に対する講評〉	
△1941/5/?	【著作】説密宗教義	
△1941/5/?	【著作】甘地先生転贈印度国民大会為尼赫魯氏特製紀念紡紗機記	
△1941/5/?	【著作】祝大公報膺美国米蘇里新聞学院栄誉奨章	
△1941/5/?	【著作】批銓叙部呈擬備用人員総登記条例草案	
△1941/6/2	【著作】覆四川省臨時参議会電	
△1941/6/4	【著作】致中央図書館蒋館長〈*蒋慰堂〉書	
△1941/6/13	【著作】致武漢大学王校長〈*王撫五〉電	
△1941/6/19	【著作】致陳百年諸先生書〈*成都より〉	
△1941/6/?	【著作】批銓叙部呈擬文職保挙法原則草案	
△1941/7/5	【著作】致外交部郭部長〈*郭復初〉電〈*成都より〉	
△1941/7/6	【著作】致陳教育長〈*陳果夫〉電〈*成都より〉	
△1941/7/14	【著作】奨励本院救護人員警役電〈*成都より〉	
△1941/7/16	【著作】致劉雨農先生書〈*成都より〉	
△1941/7/28	【著作】致本院陳伯稼劉雨農両秘書電〈*成都より〉	
△1941/7▲1945/5/10	【著作】関於文職保挙案之指示〈*成都にて〉	
△1941/9/7	【著作】致徐川副隊長書	
△1941/9/11	【著作】上蒋総裁〈*蒋介石〉書	
△1941/9/11	【著作】致国府魏文官長〈*魏子杞〉書	
△1941/9/18	【著作】九一八十週年紀念日感言	
△1941/9/20	【著作】致夫人〈*鈕有恒〉書	
△1941/9/26	【著作】致夫人〈*鈕有恒〉書	
△1941/9/29	【著作】致安国児〈*戴安国〉	
△1941/9/30	【著作】致向育仁議長書	
△1941/9/30	【著作】致安国児〈*戴安国〉	

書誌	活動記事・注記
○29	
重慶『中央日報』「戴院長講述緬印観感」	
重慶『中央日報』「各文化団体招待緬記者団」	不詳。
	皖南事件勃発。
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	全国慰労総会主催の「出銭労軍運動」籌備委員会名誉主席に任命される。
○33	
○29, 41	
重慶『中央日報』副刊「警声」	
○29	
○29	
○29	
『中華民国革命秘笈』口絵	
○29	
○33	
○29, 41	
○29	
『考試院施政編年録』第六編	
	五期中執会169次常会は戴季陶などに陳果夫が起草した「党員須知草案」の検討を命じる。中央政治学校(校務委員会)は五期中執会169次常会に対し、中央政治学校の党務講習会、人事行政人員訓練班の責任者名簿を提出(戴季陶を党務講習会副会長、人事行政人員訓練班班長・当然委員に任命)。3/17、五期中執会171次常会は名簿を承認。
○33	
○33	
○33	
○29	
	国民参政会第二期第一次大会(重慶)に出席。
○33, 41	
重慶『中央日報』副刊「中国童子軍節特刊」	
重慶『中央日報』副刊「中国童子軍節特刊」	
○33, 41	
○33	
○33	
戴伝賢『第五届中央執行委員会第八次全体会議考試院報告書』	
重慶『中央日報』「中国新聞学会成立」	
○29	
	中国国民党五期八中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団(提案審査委員会の政治組と教育組を「指導」)、宣言起草委員会委員、決議案整理委員会委員に任命。
○29	
	日ソ中立条約締結。6/22ドイツ軍、ソ連侵攻。
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
	五期中執会173次常会でカルカッタの漢語新聞『印度日報』に漢字活字を寄贈することを提議(採択される)。同会は戴季陶、孫科に、中国国民党五期八中全会に提議された党務に関する議案の検討(召集人)を命じる。
○33	
○33	
『考試院施政編年録』第六編	
○29	
○36(敬書興中会成立宣言), 43	
○29	
○29	
○28, 29(致童子軍総会陳理事長暨諸理事書)	
○29	
○33	
○36(書軍官誓詞), 43, 45	
○33	
○29	
『中国国民党中央執行委員会常務委員会会議録』第33冊, 500頁	5/12、五期中執会175次常会は同案を検討。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29, 30, 41	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○33	
○33	
○33	6月、成都で流行性感冒、アメーバ赤痢を治療。空襲のため防空壕に避難することが多く、治療が進まず。さらに左臂関節を痛める。
○33	
○33	
○33(電致本院陳秘書本院救護人員及警役忠勇尽職着伝令嘉奨並特別奨銀二千元)	
○29	
○33	
『考政学報』第2期○33(対文職保挙法案之意見)	国民政府稽勲委員会委員に任命される。11/1、同委員会設立。
○29	
○29, 41	重慶着。
○29, 41	
○29	
○33	
○33	
○33	家斉、四川省西昌で没。参考資料:顧頡剛「戴家斉君伝」1941/12/2付。
○29	
○33	全2篇。

△1941/10/2	【著作】致安国児〈*戴安国〉	
△1941/10/3	【著作】致農林部林次長〈*林翼中〉書	
△1941/10/3	【著作】致夫人〈*鈕有恒〉書	
△1941/10/6	【著作】致譚雲山先生書	
△1941/10/6	【著作】致薛司令長官〈*薛伯陵〉書	
△1941/10/6	【著作】致泰果爾先生哲嗣書	
△1941/10/8	【著作】覆陳孝威先生書	
△1941/10/8	【著作】致蒋緯国姪書	
△1941/10/9	【著作】致衛司令長官〈*衛俊如〉電	
△1941/10/11	【著作】致陳司令長官〈*陳辞修〉書	
△1941/10/12	【著作】致楊軍長〈*楊子惠〉書	
△1941/10/12	【著作】致王軍長〈*王耀武〉書	
△1941/10/21	【著作】勗中央軍校高等教育班諸同志	
△1941/10/22	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	
△1941/10/23	【著作】致向育仁議長書	
△1941/10/24	【著作】題中央軍校第四分校戦術研究班同学録	
△1941/10/27	【著作】題温幼菊先生像賛	
△1941/10/27	【著作】覆黄昌穀先生書	
△1941/10/27	【著作】致陳布雷先生書	
△1941/10/29	【著作】致夫人〈*鈕有恒〉書	
△1941/10/?	【講演・談話記録】開辦人事行政人員訓練班的目的講詞〈*第2期人事行政人員訓練班にて〉	
△1941/10/?	【講演・談話記録】人事行政的特別性能要在政治上有一個制度来推動一切政治講詞〈*第2期人事行政人員訓練班学員工作報告に対する講評〉	
△1941/11/1	【著作】致夫人〈*鈕有恒〉書	
△1941/11/2	【著作】致譚雲山先生書	
△1941/11/2	【著作】致向育仁議長書	
△1941/11/5	【著作】致陝西熊主席電	
△1941/11/6	【著作】致徐孝恢先生書	
△1941/11/6	【著作】題空軍軍士学校第二期学生畢業紀念冊	
△1941/11/6	【著作】泰京中原日報三十一年元旦特刊題詞	
△1941/11/6	【著作】致張伯常先生書	
△1941/11/8	【著作】致向育仁議長書	
△1941/11/8	【著作】覆劉文彬先生書	
△1941/11/8	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1941/11/13	【著作】対銓叙部咨覆教育部擬具教育人員銓叙暫行綱要草案之批示	
△1941/11/14	【著作】呈国防最高委員会文	
△1941/11/14	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1941/11/15▲1941/11/16	【講演・談話記録】〈*日本の侵略行為に対する一致抵抗を望む,インド、ビルマへの国際無線放送にて〉	
△1941/11/16	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1941/11/16	【著作】致夫人〈*鈕有恒〉書	
△1941/11/16	【著作】致向育仁議長書	
1941/11/17-11/26		
△1941/11/18	【著作】国府公布備用人員登記条例	
△1941/11/18	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1941/11/19	【著作】告中央政治学校畢業及入学同志書	
△1941/11/19	【著作】警政要領並敍言	
△1941/11/20	【著作】〈*束雲章宛の書簡〉	
△1941/11/20	【著作】題中央警官学校第八期学生畢業同学紀念冊	
△1941/11/20	【著作】薛仙舟先生遺稿跋	
△1941/11/20	【著作】覆向育仁議長書	
△1941/11/25	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1941/11/26	【著作】致四川張主席〈*張岳軍〉書	
△1941/11/29	【著作】対本院档案整理之指示	
△1941/11/29	【著作】批考選委員会呈擬修正博士学位評定会組織法草案第五条第二款権威二字	
△1941/11/29	【著作】批考選委員会呈擬修正博士学位考試細則原則草案	
△1941/11/29	【著作】批考選委員会呈擬修正博士学位考試細則草案	
△1941/11/30	【著作】致農林部林次長〈*林翼中〉書	
1941/11/?		
△1941/12/1▲1941/12/2	【講演・談話記録】考試院工作近況〈*中国国民党中央党部、国民政府の紀念週にて〉	
△1941/12/5	【講演・談話記録】第三次全国内政会議開幕致詞	
1941/12/8		
1941/12/9		
△1941/12/10	【著作】致糧食部徐部長〈*徐可亭〉書	
△1941/12/11	【著作】覆西北農学院周院長〈*周伯敏〉電	
1941/12/15-12/23		
△1941/12/21	【著作】致陳布雷先生書	
△1941/12/26	【著作】批銓叙部呈擬各機関各級主管人員特別辦公費支給標準案〈*第56次院務会議にて〉	
△1941/12/28	【講演・談話記録】考試与銓叙講詞〈*第3期人事行政人員訓練班にて〉	
△1941/12/28	【講演・談話記録】中国省制的演変講詞〈*第3期人事行政人員訓練班にて〉	
△1941/12/29	【講演・談話記録】中華民国官吏必須了解的道理和必読的書目講詞〈*第3期人事行政人員訓練班にて〉	
△1941/12/30	【著作】致賈煜如部長電	
△1941/12/?	【著作】黄河志序	
△1941/?/?	【著作】致中央党部葉〈*葉楚傖〉陳〈*陳布雷〉朱〈*朱騮先〉三先生書	
△1941/?/?	【著作】空軍紀念節華僑献機命名典礼祝詞	
△1941/?/?	【著作】致金鋭新先生書	
△1942/1/1	【著作】告本院及会部全体同人書	
△1942/1/2-1945/1/4	【著作】対蒋経国先生常言実録眉批五十二則	
△1942/1/5	【著作】致陳登皞先生書	
△1942/1/9	【著作】致長沙薛長官〈*薛伯陵〉電	
△1942/1/11	【著作】致張君勱先生書	
△1942/1/14	【著作】致許公武先生書	
△1942/1/15	【著作】対於辦理人事行政学会月刊之指示	
△1942/1/16	【著作】対於本院今後施設要端之指示〈*指示七種事項必須定入院務会議規程作為応行審議之事項〉	
△1942/1/19	【著作】致束雲章先生書	
△1942/1/19, 1/26	【講演・談話記録】総理行誼演講詞〈*中央訓練団党政訓練班第18期に対して〉	戴伝賢
△1942/1/20	【著作】致陝西教育庁王庁長〈*王捷三〉書	
△1942/1/20	【著作】対審議院務会議出席人員案之意見〈*第57次院務会議にて〉	
△1942/1/23	【著作】致立法院孫院長〈*孫科〉書	
△1942/1/23	【著作】致英国卡爾大使〈*チャールズ〉書	
△1942/1/26▲1942/1/27	【講演・談話記録】三十年度考試院施政概況〈*中国国民党中央党部、国民政府の紀念週にて〉	
△1942/1/31	【著作】覆曲江余主任〈*余握奇〉電	
△1942/2/4	【著作】致四川張主席〈*張岳軍〉書	
△1942/2/8	【著作】〈*傅煥光宛の書簡〉	
△1942/立春後五日(2/9)	【著作】為国府林主席就任十年紀念創立森林学研究所縁起	
△1942/2/15	【著作】致蒋慰堂先生書	
△1942/2/16	【著作】致中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉朱王両部長〈*朱騮先,王雪艇〉書	
△1942/2/20	【著作】批銓叙部呈擬暫行中央地方各機関各級主管人員特別辦公費支給標準草案	
△1942/2/25▲1942/3/5	【講演・談話記録】中国童子軍的精神〈*中国童子軍創立30週年、第15期中国童子軍節の紀念典礼にて〉	戴伝賢
△1942/2/26	【著作】覆広益中学楊校長〈*楊芳齢〉書	
△1942/2/?	【著作】覆中山大学張校長〈*張子春〉書	

○33	
○29	人事行政学会設立、同会は戴季陶を名誉会長に任命。
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29, 41	
○29, 41	
○33	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
重慶『中央日報』「対印緬広播」	
○33	
○33	
○29	
	国民参政会第二期第二次大会(重慶)に出席。
『考試院施政編年録』第六編	
○33	
○29	
○29	
○29(附致束雲章先生書)	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29	
	三民主義青年団中央団部指導員に任命される。
重慶『中央日報』「中枢紀念週」	不詳。
○29	
	日本軍、マレー半島のコタバル奇襲上陸とハワイの真珠湾攻撃、米、英に宣戦布告。
	国民政府、日、独、伊に宣戦布告。中国共産党、「太平洋戦争に対する宣言」発表。
○29	
○33	
	中国国民党五期九中全会(重慶)に出席し、大会宣言を朗読。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員、決議案整理委員会委員に任命。12/22施政報告を行う。
○29	
○33	
○29, 30, 41	
○29, 30(中国省治的演変)	
○29, 30, 41	
○33	
○29	按:1931?年、『黄河志』の編集を発起し編纂会会長に就く。
○29	
○29	
○29	
○29, 30, 41	
○35	全52篇。
○29	
○33	
○29	
○29	
○29, 41	
○29, 41	
○33	
○35	記録:余湛邦,陽春暄。主な転載箇所:戴伝賢「総理行誼」(『中山先生行誼』上冊)。
○29	
○33	
○29, 41	
○29	
重慶『中央日報』「中枢紀念週」	不詳。
○33	
○29	
○29(附覆傅煥光先生書)	
○29	2月、森林学研究所の建設を発起(実現されず)。
○29	
○29	
○33	
重慶『中央日報』○28, 29, 30	
○29	
○29	

△1942/2/?	【著作】対考選委員会呈転各省対県参議員及郷鎮民代表候選人検覈声請改用指紋代替相片案之指示〈*第60次院務会議にて〉	
△1942/2/?	【著作】対審査特種学校畢業生銓定資格考試規程草案之指示〈*第60次院務会議にて〉	
△1942/3/2	【講演・談話記録】印度行動教義中佈施愛語利行同事四語的真諦講詞〈*第4期人事行政人員訓練班にて〉	
△1942/3/4	【著作】致河南李主席〈*李涵礎〉電	
△1942/3/5▲1942/3/6	【講演・談話記録】〈*中国童子軍の大検閲にて〉	
△1942/3/5	【著作】致河南李主席〈*李涵礎〉郵電〈*最近院部人事状況〉	
△1942/3/8	【著作】覆中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉書	
△1942/3/16	【著作】対院務会議議程所列報告審議処理各事項内容格式応再加整理之指示〈*第61次院務会議にて〉	
△1942/3/16	【著作】対核派高等考試初試各試区辦事処処長案之指示〈*第61次院務会議にて〉	
△1942/3/16	【著作】対院務会議議程中考選委員会会務報告案之指示〈*第61次院務会議にて〉	
△1942/3/16	【著作】銓叙部審核県長辦理兵役成績考覈奨懲暫行辦法及社会部試用職員考核辦法之指示〈*第61次院務会議にて〉	
△1942/3/17▲1942/3/8	【講演・談話記録】中印両国国民的救世精神〈*無線放送にて〉	
△1942/3/18	【著作】呈中央執行委員会文	
△1942/3/19	【著作】致徐道鄰先生書	
△1942/3/25	【著作】国府公布修正勲章条例	
△1942/3/?	【著作】中国童子軍創始三十週年紀念文集序	
△1942/3/?	【著作】重印青年之路序	
△1942年春	【著作】対印度建築一書感詰所見	
△1942/4/7	【著作】電致陳〈*陳辞修〉司令官擬借重范揚先生任本院参事	
△1942/4/10	【著作】覆山東何庁長〈*何仙槎〉電	
△1942/4/11	【著作】行政考試両院会同公布公務員内外互調条例施行細則	
△1942/4/16▲1942/4/17	【講演・談話記録】〈*中央警官学校の典礼、中華警察学術研究社第2期年会、考試院の第2期全国警察学術考課給奨典礼にて〉	
1942/5/4		
△1942年立夏節(5/6)	【著作】何敬之先生主軍政部十年紀念冊書後	
△1942/5/6	【著作】〈*何敬之宛の書簡〉	
△1942/5/22	【著作】覆薛司令長官〈*薛伯陵〉書	
1942/5/25以前		
△1942/5/28	【著作】対特種考試湖北安徽湖南等省県各級幹部人員考試暫行条例草案之指示〈*第64次院務会議にて〉	
△1942/5/28	【著作】対銓叙部銓叙審査委員会決議公務員因抗戦傷亡従優加叙核恤在原官等無級可加時各按其級差数加叙案之指示〈*第64次院務会議にて〉	
△1942/5/30	【著作】関於国防最高委員会法制専門委員会函請派員参加審査軍事委員会呈請修改人事機構統一管理綱要之意見	
△1942/5/?	【著作】蒋百里先生文選序	
△1942/6/2	【著作】致朱騮先諸先生書	
1942/6/3		
△1942/6/4	【著作】題中央警官学校正科第九期学生畢業同学録	
△1942/6/4	【著作】批本院宋主任秘書湜簽呈奉派列席国防最高委員会法制専門委員会審査軍委会修改人事機構統一管理綱要経過案	
△1942/6/5	【著作】批専門職業或技術人員考試法草案中標名「或」字	
△1942/6/13	【著作】対於三十一年授勲之意見	
△1942/6/14▲1942/6/15	【講演・談話記録】〈*日本の侵略行為に対する一致抵抗を望む,インドへの国際無線放送にて〉	
△1942/6/16	【著作】批銓叙部解釈戦区県長須具軍事学識認定曾任少校以上軍官佐或得少校軍用文官者及具有軍事智識才堪応変能指揮群衆者即為具有軍事学識案〈*第65次院務会議にて〉	
△1942/6/17	【著作】致中央図書館蒋館長〈*蒋慰堂〉書	
△1942/6/22	【著作】致本院史秘書長〈*史尚寛〉書	
△1942年季夏	【著作】題王一亭先生所作陳英士先生摹戯図	
△1942/7/2	【著作】対檢覈大学学生畢業成績銓定任用資格辦法草案之指示〈*臨時院務会議にて〉	
△1942/7/7	【著作】題軍政部兵役宣伝特刊	
△1942/7/19	【著作】致宣伝部王部長〈*王雪艇〉書	
△1942/7/19	【著作】覆甘粛谷主席〈*谷紀常〉電	
1942/7/20		
△1942/7/21	【著作】対於辺疆問題之指示	
△1942/7/23	【著作】致傅斯年先生書	
△1942/7/27	【著作】覆任国栄同志書	
△1942/7/27	【著作】批銓叙部函陳審査河南県長張漢英介景福二員資格経過案	
△1942/7/27	【著作】批銓叙部呈擬文官官職俸等級表原則草案	
△1942/7/28	【著作】致陳布雷先生書	
△1942/7/30	【著作】覆浙江省党部省政府振済会電	
△1942/7月初伏日	【著作】節録総理軍人精神教育講義並誌所見	
△1942/7/?	【著作】最高普考再試及格諸生	
▲1942/8	【書画】許公武先生著中印歴代関係史畧	戴伝賢
△1942/8/2	【著作】覆康寄遥先生書	
△1942/8/2	【著作】対本院法規委員会修訂法規程序案之指示	
△1942/8/3	【著作】覆甘粛省行政会議工程師学会電	
△1942年立秋(8/8)	【著作】賀向育仁議長抱孫	
△1942/8/9	【著作】対銓叙部復議高等考試及格人員県長挑選辦法草案之指示〈*第68次院務会議にて〉	
△1942/立秋後一日(8/9)	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1942/8/13▲1942/8/14	【講演・談話記録】〈*中印学会会員大会にて〉	
△1942/8/13	【著作】致陳百年先生書	
△1942/8/14	【著作】致陳立夫、陳百年先生書	
△1942/8/18	【著作】致秘書、参事両処同人書	
△1942/8/18	【著作】致僑務委員会陳委員長〈*陳樹人〉、海外部劉部長〈*劉桂新〉書	
△1942/8/18	【著作】致孔副院長〈*孔庸之〉書	
△1942/8/21	【著作】批本院史秘書長尚寛簽呈考銓配合及連繋辦法案	
△1942/8/23?	【著作】対詳定研究考銓制度計劃及奨励辦法之指示〈*第69?次院務会議にて〉	
1942/8/24		
△1942/8/26?	【著作】対本院史秘書長尚寛簽請核示非常時期公務員任用補充辦法草案内之代理二字可否改為権理案〈*第69?次院務会議にて〉	
△1942/8/26?	【著作】批非常時期公務員任用補充辦法草案第八条条文〈*第69?次院務会議にて〉	
△1942/8/25	【著作】対社会部擬社会保険法原則暨康健保険法各草案及説明書之意見	
△1942/8/26	【著作】致朱司令長官〈*朱一民〉書	
△1942/8/28	【著作】覆振済委員会許委員長〈*許静仁〉書	
△1942/8/31	【著作】致孔副院長〈*孔庸之〉暨許〈*許俊人〉屈〈*屈文六〉諸先生書	
△1942/8月処暑後二日	【著作】題黄秋士先生遺像二則	
△1942/8/?	【著作】題重慶遭炸図二則	
△1942/8/?	【著作】批非常時期公務員任用補充辦法草案中各条文及説明	
△1942/9/6	【著作】致陳百年、沈士遠先生書	
△1942/9/6	【著作】批銓叙部徐司長道鄰函呈所附非常時期公務員任用補充辦法増列第九条条文	
△1942/9/8	【著作】致陳百年、沈士遠先生書	
△1942/9/10	【著作】対本院擬呈国防最高委員会非常時期公務員任用補充辦法草案及年資計算表文稿之批示	
△1942/9/10	【著作】覆伝炳弟書	
△1942/9/12	【著作】対行政院主張県長叙簡任不以県等為標準純以県長本人資歴為断之意見	
△1942/9/15直後▲1942/9/17	【著作】訃告	戴伝賢,安国など
△1942/9/18	【著作】致成都草堂寺戒乗諸大徳書	
△1942/9/20	【著作】致金誦盤先生書	

○33	
○33	
○29	
○29	
重慶『中央日報』「全国童軍代表向会長致敬」	
○33	
○29	
○33	五期中執会197次常会は戴季陶などに国定紀念日辦法の検討を命じる。
○33	
○33	
○33	
『中印歴代関係史略』○29	「印度日」実施。
○29	
○29	
『考試院施政編年録』第七編	
○28,29	
○29	
○29	全2篇。
○33	
○33	
『考試院施政編年録』第七編	
『中央日報』「警校六大典礼」	不詳。4月下旬、成都で静養。
	重慶着。
○29	
○29(附致軍政部何部長書)	
○29	
	蒋介石、葉楚傖、陳果夫、朱家驊と籌措党費基金辦法について会談し、「籌組経理党営事業基金機構之初歩計劃」、「経営電影事業之計劃」、「経営印刷事業計劃大綱」を草案。
○33	
○33	
○33	
○29	鈕有恒、4月上海発。浙贛路を進み衡陽、桂林、柳州、貴州省を経る。5月上旬重慶着。
○29	
	唐縦と会談。
○29	
○33	
○33	
○29,41	
重慶『中央日報、掃蕩報(聯合版)』「中印協力抵抗侵略」	
○33	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○33	
	五期中執会206次常会は、朝鮮の独立運動支援に関する問題を研究する小委員会の設置を決議。同会は戴季陶、朱家驊、何応欽、呉鉄城、陳果夫、王寵恵を委員に任命。
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○33	
○29	
○29,41	
『中印歴代関係史略』	
○29	
○33	
○33	
○29	
○33	
○33	
重慶『中央日報、掃蕩報(聯合版)』「中印学会挙行年会」	不詳。中国の中印学会は会員大会を開催(重慶)。章程の修改、組織の拡充、会員の募集を決議。同会は戴季陶を監事長に任命。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33,41	
	五期中執会209次常会は戴季陶などに民国32年度党務工作方針案の検討を命じる。
○33	
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○33	
○29	
○33	
○33	
○33	
重慶『中央日報』	9/15鈕有恒、重慶で没。その後、重慶の華岩寺で静養。
○29	
○29	

△1942/9/?	【著作】批考選委員会呈擬非常時期検覈中学学生畢業成績銓定任用資格辦法草案	
△1942/9/?	【著作】批銓叙部呈擬文官保挙法草案	
△1942/9/?	【著作】批本院史秘書長尚寛箋請核示法規委員会第六次会議討論公務員退休条例草案決議案	
△1942年初秋	【著作】「童子軍做甚麽」序	
△1942/10/9	【著作】覆康寄遥居士書	
△1942/10/12▲1942/11	【著作】〈*太虚宛の書簡〉	伝賢
△1942/10/?	【著作】致世界摩訶菩提会瓦里新哈大善知識書	
△1942/11/10	【著作】致虚雲法師電	
△1942/11/11	【著作】対銓叙部賈部長景徳録呈函報蒋委員長陳述籌備訓練党政軍機関人事管理人員経過情形之意見	
1942/11/12-11/27		
△1942/11/18	【著作】致張子廉居士電	
△1942/11/18	【著作】致李主任任潮電	
△1942/11/20	【著作】対於護国救災法会会務処理之指示	
△1942/11/29	【著作】覆虞洽卿先生電	
△1942/12/3	【著作】致銓叙部賈部長〈*賈煜如〉書	
△1942/12/6	【著作】致李主任任潮電	
1942/12/7		
△1942/12/8	【著作】致虞洽卿先生書	
1942/12/9-1943/1/26		
△1942年仲冬月	【著作】護国息災会祈願文	
△1942/12/18	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉、社会部谷部長〈*谷正綱〉書	
△1942年冬月	【著作】題民国二十年外交三文件	
△1942/?/?	【著作】題泰果爾先生紀念冊	
△1943/1/7	【著作】致虞洽卿先生書	
△1943/1/7	【著作】致向育仁議長書	
△1943/1/8	【著作】致陳伯稼先生書	
△1943/1/16	【著作】致虞洽卿先生書	
△1943/1/19▲1943/1/20	【講演・談話記録】抗戦建国与取銷不平等条約〈*無線放送にて〉	
△1943/1/22▲1943/1/23	【講演・談話記録】〈*浙災籌振会大会にて〉	
△1943/1/30	【著作】覆趙志游先生電	
△1943/1/?	【著作】潔軒公誕生百二十〈*百二十五の誤記〉年誌感	
△1943/2/1	【著作】致李主任任潮電	
△1943/2/2	【著作】致行政院孔副院長〈*孔庸之〉書	
△1943/2/8	【著作】致本院姜科長〈*姜寿椿〉書	
△1943/2/24	【著作】中国童子軍栄誉裁判庭首次開庭讃言	
△1943/2/?	【著作】国父賛	
△1943/2/?	【著作】読瑜伽師地論書感	
△1943/2/?	【著作】書感印度情況贈叔嘗同志	
△1943/2/?	【著作】春日書懐	
△1943/3/1	【著作】覆青海馬主席〈*馬子香〉電	
△1943/3/4	【著作】諭本院秘書長	
△1943/3/4	【著作】諭本院秘書処	
▲1943/3/6	【著作】介紹名医	于右任, 王寵恵, 戴伝賢, 顧維鈞
△1943/3/7	【著作】致虞洽卿先生書	
△1943/3/12	【著作】致新疆盛主席〈*盛晋庸〉書	
1943/3/22		
△1943/3/29▲1944/9/9	【講演・談話記録】〈*中国考政学会第4期年会にて〉	
1943/3/29-4/12		
△1943/3/31▲1943/4/2	【講演・談話記録】做人方法〈*三民主義青年団第1次全国代表大会第2次大会にて〉	
△1943年春	【著作】阿弥陀婆多陀阿加陀賛	
△1943/4/2	【著作】批本院法規委員会修正公務員保挙条例草案	
△1943/4/5	【著作】致組織部朱部長〈*朱騮先〉書	
△1943/4/5	【著作】書感五則	
△1943/4/6	【著作】覆行政院孔副院長〈*孔庸之〉書	
△1943/4/6	【著作】発願四事	
△1943/4/6	【著作】致連声海先生書	
△1943/4/9	【著作】致朱〈*朱騮先〉呉〈*呉鉄城〉張〈*張道藩〉陳〈*陳立夫〉四先生書	
△1943/4/10	【著作】呈中央執行委員会文	
△1943/4/13	【著作】致宋禮孫世兄書	
△1943/4/16	【著作】覆李君佩先生書	
△1943/4/?▲1944/9/9	【著作】易時大義	戴伝賢
△1943/4▲1945/5/10	【著作】関於改進各種銓叙制度之意見	
△1943/4▲1945/5/10	【著作】関於三等九級官制草案之指示	
△1943/5/3	【著作】致組織部朱部長〈*朱騮先〉書	
△1943/5/5	【著作】勗空軍将士	
△1943/5/5	【著作】勗中央陸軍軍官学校第十八期畢業諸生	
△1943/5/5	【著作】勗中央陸軍軍官学校第四分校畢業諸生	
△1943/5/5	【著作】致組織部朱部長〈*朱騮先〉書	
△1943/5/5	【著作】呈中央執行委員会文	
△1943/5/5	【著作】上国府林主席〈*林森〉書	
△1943/5/5	【著作】覆藍文彬先生書	
△1943/5/7	【著作】致中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉書	
△1943/5/7	【著作】致蒋慰堂先生書	
△1943/5/7	【著作】覆潘公展先生書	
△1943/5/8	【著作】致中央党部呉秘書長書	
△1943/5/8	【著作】三民主義叢書編纂委員会調整辦法	
△1943/5/8	【著作】致蒋経国姪書	
△1943/5/8	【著作】致蕭紉秋先生書	
△1943/5/9	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1943/5/14	【著作】致中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉諸同志〈*朱騮先, 張道藩, 陳立夫〉書	
△1943/5/20	【著作】勗中央警官学校第十一期畢業諸生	
△1943/5/22	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1943/5/25	【著作】黄埔軍官学校建立十九週年紀念詞	
△1943/5/?	【著作】批修正特種考試塩務人員考試規則草案(内分文書会計統計業務技術五類)	
△1943/6/4	【著作】致蒙蔵委員会呉委員長〈*呉礼卿〉書	
△1943/6/10	【著作】勗格桑沢仁同志	
1943/6/14		
△1943/6/16	【著作】周易卦象	

○33	
○33	
○33	
○28,29(童子軍作甚麽序)	
○29	
『海潮音』第23巻第11期「戴院長来書」	
○29	インドの中印学会(サンティニケタン)はロティンドロナト=タゴールRatindranath Tagore(タゴールの長男)を主席、ネルー、戴季陶を名誉主席に選出。
○33	
○33	
	中国国民党五期十中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団、浙災籌振会理監事会理事長に任命。第五期中央執行委員会常務委員会当然委員に就く。
○33	
○33	
○29	11月、張継などと護国息災大悲道場(四十九日)の修建を発起。国民政府主席林森の賛同を得て、虚雲法師を重慶に招く。11/26虚雲法師、重慶着。
○33	
○29,41	
○33	
	五期中執会215次常会は戴季陶を党政軍人事管理人員訓練教育委員会主任委員に任命。
○29	
	重慶の慈雲寺、華岩寺で護国息災大悲道場を開く。1/29虚雲法師、重慶発。
○29	
○29	
○29	
○29	1942年、戴季陶が建設を発起した洛陽の行都慈幼院、落成。
○29	
○29	
○29	
○29	
重慶『中央日報、掃蕩報(聯合版)』「戴院長播講」	
重慶『中央日報、掃蕩報(聯合版)』「浙江籌振会」○29(浙災籌振会大会致詞)	
○33	
○29	
○33(致李主任任潮会長官握奇等電)	
○29	
○29	
○28,29(書旧作忠信篤敬四讃贈童子軍総会並誌)	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
重慶『中央日報、掃蕩報(聯合版)』	
○29	
○29	
	五期中執会223次常会は戴季陶に歴次大会宣言および決議案の実施状況を検討する小委員会の召集を命じる。
『考政学報』創刊号	記録:簡文忠。
	三民主義青年団第1次全国代表大会(重慶)は戴季陶を第1期中央幹事会指導員に任命。
重慶『中央日報』「青年団代表大会第二第三次大会」	
○29	
○33	
○29	
○29	全5篇。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
『考政学報』創刊号○29	
『考政学報』第2期○33(対改進各種銓叙制度之意見<*論破格用人,対考績年考総考奨懲之意見>)	
『考政学報』第2期○33(対三等九級官制草案之指示<*以革命功績作為銓叙上合法資格只有求其改良合理不能根本排除,論現行考績法将学識工作操行分立各占若干分実主要缺点所在、官俸職俸必須劃分之意見>)	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	5/17、五期中執会227次常会は同辦法を採択し、戴季陶に三民主義叢書編纂委員会組織条例の修正を命じる。
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
	五期中執会231次常会は戴季陶などに三民主義青年団団章の検討を命じる。
○29	

△1943/6/22	【著作】介紹国医林業農先生啓事	
△1943/6/22	【著作】古蘭経分類索引序	
△1943/6/24	【著作】致広東李主席〈*李伯豪〉書	
△1943/6/29	【著作】覆石門王軍長〈*王耀武〉電	
△1943/6/29	【著作】致恩施陳長官〈*陳辞修〉電	
△1943/6/29	【著作】致長沙薛長官〈*薛伯陵〉電	
△1943/7/11	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1943/7/11	【著作】致浙災籌振会陳総幹事〈*陳凌雲〉書	
△1943/7/11	【著作】致河南省仏教会電	
△1943/7/14	【著作】覆青海馬主席〈*馬子香〉書	
△1943/7/25	【著作】致繆秋杰先生書	
△1943/7/27	【著作】致束雲章先生書	
△1943/7/28	【著作】致洛陽仏教会書	
△1943/7/28	【著作】覆広東李主席〈*李伯豪〉書	
△1943/7/?	【著作】南岳忠烈祠碑記	
△1943/8/10	【著作】致甘粛王故庁長芸圃家属電	
1943/8/28		
△1943/8/?	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
1943/9/6-9/13		
△1943/9/17	【著作】中国国民党党員守則書後	
1943/9/18-9/27		
1943/9/20		
△1943/9/25	【著作】批銓叙部呈擬将薦任職最低級俸改自薦任十級起叙案	
△1943/9/?	【著作】批銓叙部甄核司徐司長道鄰呈擬公務員保挙条例草案之批示	
1943/9/?		
△1943年季秋月	【著作】節録三略中通於修斉治平者各則書後	
△1943/10/1▲1943/10/2	【講演・談話記録】〈*中国新聞学会第2期年会の開幕典礼にて〉	
△1943/10/2	【著作】致浙江省党部省政府省参議会電	
△1943/10/11	【著作】致葉楚傖先生書	
△1943/10/11▲1943/10/12	【講演・談話記録】保持韓国独立〈*中韓文化協会成立週年紀念茶会にて〉	
1943/10/18		
△1943/10/20	【著作】与同人論礼制服制書	
△1943/10/21	【著作】致陳布雷先生書	
△1943/10/21	【著作】覆西康省政府張少揚秘書長電	
△1943/10/28	【著作】致向育仁議長書	
△1943/10/28	【著作】対繕写油印会議紀録文件人員之嘉奨〈*第88次院務会議にて〉	
△1943/10/28	【著作】対公務員進修規則草案之指示〈*第88次院務会議にて〉	
△1943/10/28	【著作】対考試及格人員通訊輔導辦法之指示〈*第88次院務会議にて〉	
△1943/10/29▲1943/10/30	【講演・談話記録】発起印災籌賑会経過〈*印災籌賑会発起人大会にて〉	
△1943/10/29	【著作】致孔庸之先生書	
△1943/10/?	【著作】大道之行天下為公詮釈	
△1943/10/?	【著作】読書有感引証経史節録三略中通於修斉治平各則	
△1943/11/1	【著作】対院参事簽擬人事管理人員成績考核実施辦法案「佐理人員考績表内工作操行学識各事蹟由主管人員依拠平時考核結果填註並得擬定分数」之指示〈*第89次院務会議にて〉	
△1943/11/1	【著作】批銓叙部擬具軍文改制後研究進行事項意見案之指示〈*第89次院務会議にて〉	
△1943/11/2	【著作】致宣伝部梁部長〈*梁均默〉書	
△1943/11/3	【著作】制礼原則示要	
△1943/11/6	【著作】与陳立夫、賈煜如先生論現行儀節書	
△1943/11/6	【著作】与陳立夫、賈煜如先生論礼書体例書	
△1943/11/8	【著作】致教育部顧次長〈*顧一樵〉書	
△1943/11/9	【著作】致教育部顧次長〈*顧一樵〉書	
△1943/11/11	【著作】批考選委員会呈会同司法行政部擬具外国人在中国充任律師意見及辦法草案	
△1943/国父聖誕節(11/12)	【著作】致陳凌雲先生書	
△1943/11/13	【著作】中華民国礼制之基本観念	
△1943/11/14	【著作】致甘家馨同志書	
△1943/11/15	【著作】書贈全美華僑抗日救国籌餉機関代表大会	
△1943/11/18	【著作】対院務会議議程所附擬任人員履歴表応記入任用職務之指示〈*第90次院務会議にて〉	
△1943/11/18	【著作】対整理法規之指示〈*第90次院務会議にて〉	
△1943/11/18	【著作】対准予試用任用派用及見習人員成績考核辦法規定以優良或不良評定成績之指示〈*第90次院務会議にて〉	
△1943/11/18	【著作】対内外互調人員旅行費用之指示〈*第90次院務会議にて〉	
△1943/11/18	【著作】対非常時期公務員資歴証件補充辦法草案之指示〈*第90次院務会議にて〉	
△1943/11/26▲1943/11/27	【著作】〈*陳屺懐を追悼する祭文〉	戴伝賢
1943/11/29		
△1943/11/?	【著作】批文官授官法草案	
△1943/11/?	【著作】対政務官任職法草案中開除党籍者不得為政務官之規定	
△1943/11/?	【著作】対行政院函増派公務員内外互調審查委員会委員一人請由本院遴派之意見	
△1943/12/1	【著作】致長沙薛長官〈*薛伯陵〉電	
△1943/12/8	【著作】対公務員任職法文官授官法政務官任職法政務官授官法公務員俸給法公務員考績法各草案之指示〈*第91次院務会議にて〉	
△1943/12/8	【著作】批政務員授官法草案中規定現任選任或特任政務官簡任政務官授官之指示〈*第91次院務会議にて〉	
△1943/12/16	【著作】批銓叙部組織法修正草案暨説明	
△1943/12/21	【著作】致印度泰果爾先生暨中印学会年会電	
△1943/12/25	【著作】対考試及格人員著作審查奨励辦法草案之指示〈*第92次院務会議にて〉	
△1943/12/25	【著作】対銓叙部呈擬人事行政人員儲訓計劃草案之指示〈*第92次院務会議にて〉	
△1943/12/25	【著作】対公務員撫恤法施行細則草案第四条因公死亡似可加由職務所生疾病一項之指示〈*第92次院務会議にて〉	
△1943/12/25	【著作】対専売事業人員管理条例草案第二十七条条文之指示〈*第92次院務会議にて〉	
△1943/12/26	【著作】致陳凌雲先生書	
△1943/12/29	【著作】中国歴代戦史序	
△1943/12/30	【著作】覆許宝駒先生書	
△1943/12/31	【著作】中山大学医科学報序言	
△1943年初冬	【著作】扇陳世莞世弟書	
△1943年孟冬	【著作】致教育部顧次長〈*顧一樵〉書	
△1944/歳首(1/1)	【著作】題宋子安先生蔵張猛龍碑拓	
△1944/1/4	【著作】致国防最高委員会王秘書長、陳副秘書長書〈*対建立文官保険制一案之意見〉	
△1944/1/16	【著作】致浙災籌振会陳〈*陳健庵〉宋〈*宋漢章〉銭〈*銭新之〉周〈*周佩箴〉四先生書	
△1944/1/27▲1944/1/28	【講演・談話記録】中国礼制問題〈*中央政治学校にて〉	
△1944/1/28	【著作】対今後院務進行之指示	
△1944/1/28	【著作】批公務員退休法施行細則草案第二八条規定「公務員在本法施行前退休者依旧法核定之金額得依本法第九条規定比例増給之」条文〈*臨時院務会議にて〉	
1944/2/5		
△1944/2/12	【著作】勲章条例施行細則	
1944/2/21		
△1944/2/22▲1944/2/23	【講演・談話記録】〈*中国合作事業協会第1次会員大会にて〉	
△1944/2/25	【著作】致銓敘部徐司長〈*徐道鄰〉書	
△1944/2/28	【著作】致中央警官学校李教育長〈*李士珍〉書	

○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
	高等考試及格人員県長挑選委員長に任命される。
○29	
	中国国民党五期十一中全会(重慶)に出席し、大会宣言を朗読。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員(召集人)に任命し、考試院院長、国民政府委員会委員に選出(10/11考試院院長、国民政府委員会委員に就任)。また、戴季陶などに「戦後工業建設及外人在華投資辦法両案」の検討を命じる。
○29	
	国民参政会第3期第2次大会(重慶)に出席。
	五期中執会238次常会に出席。同会は戴季陶の民生哲学論を採用した文化運動綱領草案を検討。
○33	
○33	
	新亜細亜学会理監事評議聯席会議(重慶)に出席。同会は戴季陶を理事長に任命。
○29	
重慶『中央日報』「中国新聞学会二届年会」	
○33	
○29	
重慶『中央日報』「中韓文協成立一週年」	
	五期中執会240次常会は戴季陶などに党務工作人員任用規程草案の検討を命じる。
○27(巻三),31	
○29	
○33	
○29	
○33	
○33	
○33	
重慶『中央日報』「印災籌賑会昨成立」	不詳。中国の中印学会は中国印度災荒籌振会を設立し、戴季陶を理事長に任命。
○29	
○29,30	
○35,36(読書有感引証経史節録三略中有関修斉治平各則)	
○33	
○33	
○29	
○29,30	
○27(巻三),31(与陳立夫、賈煜如両先生論現行儀節書)	
○27(巻三),31(与陳立夫、賈煜如先生論礼書体例書)	
○29	
○29	
○33	
○29	蒋介石などとともに中国国民党中央政治学校を参観。中国辺疆問題研究会第3期年会は戴季陶を名誉理事に任命。
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
重慶『中央日報』「在渝親友同郷昨公祭陳屺懐」	
	五期中執会243次常会は、中国童子軍総会が三民主義青年団に隷属することを確認。
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	国民政府は戴季陶に一等卿雲勲章を授与。朱家驊と時局について会談。
○29,41	
○29	
重慶『中央日報』「陪都動態」	不詳。趙季官と結婚。
○33	
○33	
	国民政府は、戴季陶を高等考試及格人員県長挑選第一次定年挑選及第二次考後挑選委員会委員長に任命。
『考試院施政編年録』第九編	
	五期中執会249次常会は戴季陶を第五期中央執行委員会秘書処憲草宣伝指導委員会召集人、同委員会委員に任命。
重慶『中央日報』「合作事業協会挙行会員大会」	不詳。
○29	
○29,36(致中央警官学校李夢周教育長書)	

△1944/2/29	【著作】覆陳藹士先生書	
△1944/2/?	【著作】休寧戴氏重修族譜序	
△1944/3/6▲1944/3/7	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部、国民政府の紀念週にて〉	
△1944/3/7	【著作】致張道藩先生書	
△1944/3/8▲1944/3/11	【講演・談話記録】〈*国立中央研究院評議会第2期第2次年会の開幕典礼にて〉	
△1944/3/11	【著作】致張道藩先生書	
△1944/3/12	【著作】与周〈*周惺甫〉賈〈*賈煜如〉陳〈*陳立夫〉三先生約期会読北泉礼制全稿書	
△1944/3/12	【著作】致束雲章先生書	
△1944/3/15	【著作】対修正銓叙部組織法原則暨条文草案	
△1944/3/17	【著作】致孔庸之先生書	
1944/3/22		
△1944/3/23	【著作】与陳立夫先生述起草礼制通議経過書	
△1944/3/23	【著作】致陳布雷先生書	
△1944/3/23	【著作】致陳伯稼先生書	
△1944/3/23	【著作】対文官職務等級表説明書之指示〈*第96次院務会議にて〉	
△1944/3/23	【著作】銓叙部呈擬文官職務等級標準表国民政府欄刪去主席五院欄刪去院長各規定〈*第96次院務会議にて〉	
1944/3/26		
▲1944/3/27	【著作】敬謝〈*娘の家祥が結婚〉	束士方, 戴伝賢
△1944/3/27	【著作】致宣伝部梁部長〈*梁均默〉書	
△1944/3/29▲1944/3/30	【講演・談話記録】〈*三民主義青年団第1期中央幹事会第2次全体会議の開幕典礼にて〉	
△1944/3/29▲1944/3/30	【講演・談話記録】〈*陪都各界革命先烈紀念日暨第1期青年節紀念大会にて〉	
△1944/3/30	【著作】致警政研究班同学書	
△1944/3/30	【著作】上蔣総裁〈*蔣介石〉書	
△1944/3/?	【著作】関於編印考銓法規集之指示	
△1944/3/?	【著作】紀東坡先生一則	
△1944/3/?	【著作】釈仏経四摂意義	
△1944/3/?	【著作】批銓叙部呈擬文官職務等級標準表説明書	
△1944年孟春	【著作】読史札記	
△1944年孟春	【著作】闡明周官司徒之教	
△1944年暮春月	【著作】書合肥戴母劉太夫人撫孤事	
△1944年春	【著作】贈中国合作事業協会	
△1944/4/2	【著作】致中央通訊社蕭社長〈*蕭同茲〉書	
△1944/4/13	【著作】致宋子文先生書	
△1944/4/15	【著作】致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
1944/4/17		
△1944/4/18	【著作】致中央通訊社蕭社長〈*蕭同茲〉書	
△1944/4/20	【著作】致黄〈*黄衝秋〉陳〈*陳藹士〉屈〈*屈文六〉三先生書	
△1944/4/30	【著作】致西康親増禅師書	
△1944/4/?	【著作】周代文教与民族復興	
△1944/4/?	【著作】釈文	
△1944/4/?	【著作】贈応権君	
△1944/5/5	【著作】致沈士華先生書	
△1944/5/6▲1944/5/7	【講演・談話記録】〈*中国国民党中央党部主催の全国学術団体聯合年会会員の招待会にて〉	
△1944/5/9▲1944/5/10	【講演・談話記録】〈*三民主義学会成立大会にて〉	
△1944/5/17	【著作】覆鄭彦棻同志書	
1944/5/20-5/26		
△1944/5/24	【著作】呈請開去本兼各職文	
△1944/5/30	【著作】呈懇辞三民主義叢書編纂委員会主任委員職務文	
△1944/5/30	【著作】致浙災籌振会陳、宋、銭、周四先生書	
△1944/5/31	【著作】致何敬之先生書	
△1944/6/2	【著作】致銓叙部徐司長〈*徐道鄰〉書	
△1944/6/2	【著作】致孔庸之先生書	
△1944/6/3	【著作】致呉鉄城、梁寒操先生書	
△1944/6/7	【著作】致呉〈*呉鉄城〉陳〈*陳布雷〉梁〈*梁寒操〉三先生書	
1944/6/12		
△1944/6/13	【著作】致李其相総司令家属電	
△1944/6/14	【著作】答周惺甫先生問北泉礼制草案何時呈頒書	
△1944/6/16	【著作】自序〈*戴伝賢『学礼録』の序〉	戴伝賢
△1944/6/16▲1944/7	【著作】中央陸軍軍官学校二十週年紀念頌	戴伝賢
△1944/6/21	【著作】覆沈宗濂先生書	
△1944/6/21	【著作】批銓叙部賈部長景徳摺呈公務員送審案件更名規則草案並請廃止旧頒銓叙案件同姓名処理規則案	
△1944/6/24	【著作】書王臨川詠史詩跋贈美副総統華莱士〈*ヘンリー・ウォーレス〉先生	
△1944/6/24	【著作】〈*宋子文宛の書簡〉	
△1944/6/25▲1944/6/26	【講演・談話記録】適応環境与創造環境〈*中国童子軍総会の職員に対して〉	
△1944/6/26	【講演・談話記録】四川省第五次行政会議重慶区会議講詞	
△1944/6/30	【著作】覆河南李主席〈*李漢礎〉電	
△1944/6/30	【著作】致加爾各答僑印同胞七七紀念会電	
△1944年孟夏月	【著作】釈礼楽	
△1944/7/4	【著作】致陳布雷先生書	
△1944/7/6	【著作】対文書人員考試科目表之指示〈*第102次院務会議にて〉	
△1944/7/6	【著作】対公務員内外調任条例草案規定「行政督察専員及県市長内調時其服務機関以行政院及其所属各部会署為準」之指示〈*第102次院務会議にて〉	
△1944/7/6	【著作】対辺疆人員派赴中央機関服務規程草案第四七両条文之批示〈*第102次院務会議にて〉	
△1944/7/13	【著作】致葉北平世兄書	
△1944/7/15	【著作】致陳立夫先生書	
△1944/7/17▲1944/7/18	【著作】〈*韓国臨時政府首脳宛の書簡, 中国国民党中央党部主催の宴会にて〉	戴伝賢
△1944/7/?	【著作】批考選委員会呈請核定挙行高等考試及格人員考後県長挑選案	
△1944/8/5	【著作】致賈煜如先生書	
△1944/8/12	【著作】致陳布雷先生書	
△1944/8/12	【著作】致印度民衆暨国際大学師生書	
△1944/8/14	【著作】致陳立夫、陳百年先生書	
△1944/8/16	【著作】滄海遺珠集序	
△1944/8/23	【著作】覆世界宗教聯合会名誉秘書容博士書	
△1944/8/27	【著作】致中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉書	
△1944/8/31	【著作】記者節感言	
1944/8/?		
1944/9/5-9/18		
△1944/9/8▲1944/9/9	【著作】発刊辞	戴伝賢
△1944/9/8	【著作】覆宋子文先生書	
▲1944/9/9	【書画】考政学報	戴伝賢
△1944/9/9	【著作】覆趙重陽姪書	
△1944/9/9	【著作】批考銓処組織条例草案〈*第104?次院務会議にて〉	
△1944/9/9	【著作】対考選委員会呈擬修正高等暨普通考試初試及格人員延期受訓辦法草案之指示〈*第105?次院務会議にて〉	
△1944/9/9	【著作】対抗戦守土傷亡文職人員従優核給退休撫恤辦法草案之指示〈*第105?次院務会議にて〉	

○29	
○29	
重慶『中央日報』「中枢紀念週」	不詳。
○29	
重慶『中央日報』「中研院評議会年会円満閉幕」	
○29	
○27(巻三),31	
○29	
○33	
○29	
	家祥、束雲章の長男会時(士徴)と結婚。
○27(巻三),31	
○29	
○29	
○33	
○33	
	社会行政学会設立。同会は戴季陶を名誉理事に任命。
重慶『中央日報』	
○29	
重慶『中央日報』「三民主義青年団中央幹事会議開幕」	
重慶『中央日報』「復興関上充満青春蓬勃気象懐先烈・望青年」	
○29,36	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○35	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
	日本軍、一号作戦(大陸打通作戦)を開始。
○29	
○29	
○29	
○29,30	
○29	
○29	
○29	
重慶『中央日報』「中央党部招待年会会員」	
重慶『中央日報』「以実事求是之精神為精益求精之研究三民主義学会成立」	三民主義学会設立。同会は戴季陶を名誉理事に任命。
○29	
	中国国民党五期十二中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員(召集人)に任命。全役職の辞任を申請。
○29,41	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
	五期中執会258次常会は戴季陶の三民主義叢書編纂委員会主任委員辞任を承認。
○33	
○27(巻三),31	
○27,31(学礼録序),40(同前)	
重慶『新亜細亜』第14巻第1期○29	
○29	
○33	
○29	
○29(附致外交部宋部長書)	
重慶『中央日報』「陪都動態」○28,29(適応環境与創作環境)	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○29	
○29	
重慶『中央日報』「中央党部呉秘書長宴韓臨時政府首長」	
○33	
○29	8月上旬、蒋介石の招きに応じ、黄山訪問。呉稚暉と会談。
○29	
○29	
	国防最高委員会第142次常務会議(重慶)に出席。
○29	
○29	
○29	
○29	
	考政学会は、同会が四川省巴県西郷に建設した中学校の名誉董事長に任命。戴季陶は同校を中和中学校と命名。
	国民参政会第3期第3次大会(重慶)に出席。
『考政学報』創刊号○29(考政学報弁言),41(同前)	
○29	
『考政学報』創刊号	
○29	
○33	
○33	
○33	

△1944/9/13	【著作】 勗考政学会諸同志	
△1944/9/13	【著作】 書貽廖夢醒女士	
△1944/9/28	【著作】 覆張玉田、陳秉鈞暨諸郷長書	
△1944/中秋前十日	【著作】 記少時事	
△1944年仲秋月	【著作】 題松雪道人書般若心経	
△1944年仲秋	【著作】 題蕭次尹先生蔵譚畏廬昆季法書	
△1944年白露節	【著作】 隨筆	
△1944年秋	【著作】 斉敬鑫教授著述序	
△1944/10/4	【著作】 対陳世材君論「五五憲章」書「国民」「人民」節所引事例之指示	
△1944/10/7	【著作】 致宣伝部梁部長〈*梁均默〉書	
△1944/10/7	【著作】 致新疆吳主席〈*吳礼卿〉電	
△1944/10/18	【著作】 致宣伝部梁部長〈*梁均默〉書	
△1944/10/20	【著作】 対朱副院長提議本院擬具之非常時期公教人員生活津貼辦法草案応呈請国防最高委員会定期実施案之意見〈*第107次院務会議にて〉	
△1944/10/22	【著作】 致教育部陳部長〈*陳立夫〉書	
△1944/10/27	【著作】 覆張玉田先生書	
△1944/10▲1945/5/10	【著作】 関於作戦期間及戦事終結時考銓制度応与時代配合之指示	
△1944/10/?	【著作】 批派遣国外実習農工礦業技術人員考試辦法草案	
△1944/10/?	【著作】 批考選委員会呈請核示三十三年第一次高等考試考後県長挑選可否挙行案	
▲1944/11/2	【著作】 書贈従軍公務員	戴伝賢
1944/11/5		
△1944/11/12	【著作】 玄圃遺書特輯題詞	
△1944/11/12	【著作】 国父誕辰挙行興中会創立五十週年紀念告全国軍民令〈*国民政府令〉	
△1944/11/14	【著作】 致束雲章先生書	
△1944/11/15	【著作】 致徐可亭先生書	
△1944/11/15	【著作】 対交通事業人員任用規則草案審査修正各点中「該項条例郵電人員一律適用」句之指示〈*第108次院務会議にて〉	
△1944/11/20	【著作】 致許公武、陳百年先生書	
△1944/11/23〈*もしくは20〉	【著作】 対聘用派用人員管理条例実施辦法草案之指示〈*第109次院務会議にて〉	
△1944/12/12	【著作】 致陳布雷先生書	
△1944/12/15	【著作】 致中央研究院朱院長〈*朱騮先〉書	
△1944/12/15	【著作】 覆四川省参議会電	
△1944/12/18	【著作】 覆西蔵沈処長宗濂電	
△1944/12/20	【著作】 致印度中印学会大会電	
△1944/12月冬至日(12/22)	【著作】 致陳布雷先生書	
△1944/12/23	【著作】 覆浙江趙参議員舒電	
△1944年初冬	【著作】 開国会議録題詞	
△1944年冬	【著作】 説蓮花仏法因縁並頌	
△1944/?/?	【著作】 致政工学校幹部某君書	
△1944/?/?	【著作】 書護国宣化広慧円覚大師班禅額爾徳尼事	
△1944/?/?	【著作】 礼運大同篇書後	
△1944/?/?	【著作】 紀周官大司徒施教大要	
△1944/?/?	【著作】 戒貪篇	
△1944/?/?	【著作】 記旧事貽廖夢醒	
△1945/1/20	【著作】 致陳布雷先生書	
△1945/1/28	【著作】 家祥于帰南陽束氏祝詞	
△1945/2/7	【著作】 示安国児〈*戴安国〉	
△1945/2/16	【著作】 致永発諸姪電	
△1945/2/26	【著作】 覆居覚生先生書	
△1945/2/26	【著作】 〈*居励今を讃える〉	
△1945/2/?	【著作】 対衛生事業人員任用条例草案規定「製造」「配方」列入総務類之指示〈*第115次院務会議にて〉	
△1945/2/?	【著作】 勗家祥児〈*戴家祥〉	
△1945/3/19▲1945/3/20	【講演・談話記録】 考試院工作概況〈*中国国民党中央党部、国民政府の紀念週にて〉	
△1945/3/19	【著作】 国府公布公務員内外調任条例	
△1945/4/14	【著作】 覆譚雲山先生書	
△1945/4/16▲1945/4/17	【講演・談話記録】 開会辞〈*中国童子軍全国幹部会議にて〉	
△1945/4/16▲1945/4/17	【著作】 〈*フランクリン・ローズヴェルトを追悼する輓聯〉	戴伝賢
△1945/4/28	【著作】 批中医検覆面試辦法草案第六条規定筆試科目中之選試科目所列内科学外科学児科学婦科針灸科学〈*第116次院務会議にて〉	
△1945/4/28	【著作】 対博士学位考試細則草案第五条第三款「主要」字様之指示〈*第116次院務会議にて〉	
△1945/4/28	【著作】 対修正博士学位評定会組織法草案第六条規定設正副主任委員之指示〈*第116次院務会議にて〉	
△1945/4/29	【著作】 致朱騮先先生書	
△1945/4/?	【著作】 批国家銀行職員任免規則暨薪給規則二草案	
▲1945/5	【著作】 礼制通議前編初稿	
▲1945/5	【著作】 読礼札記	
▲1945/5	【書画】 学礼録	戴伝賢
1945/5/5-5/21		
▲1945/5/10	【著作】 戴院長訓詞	
▲1945/5/10	【著作】 関於県長挑選之感想及今後進程之指示	
△1945/5/22	【著作】 修正勲章条例施行細則	
1945/5/23		
1945/5/28-5/31		
△1945/5/31	【著作】 贈蒋経国姪	
△1945/6/2	【著作】 対銓叙部提請任楊裕芬為該部甄核司司長案之指示〈*第117次院務会議にて〉	
△1945/6/2	【著作】 対博士学位評定会組織法草案第七条修正案〈*第117次院務会議にて〉	
△1945/6/5	【著作】 致向育仁議長書	
△1945/6/28	【著作】 致陳布雷先生書	
△1945/6/29	【著作】 対暫行警察官官等官俸表修正要点第二項規定納教官等叙級於本表案之指示〈*第118次院務会議にて〉	
△1945/6/?	【著作】 対秘書処簽呈請示院会部応向院務会議報告処理事項可否由主管人員或院務会議秘書口答宣読不再印附議程案之指示〈*第118次院務会議にて〉	
△1945/6/?	【著作】 対院務会議議程不再印附処理事項之指示〈*第118次院務会議にて〉	
△1945/6/?	【著作】 聞聯合国憲章簽字作	
△1945/7/3	【著作】 致加爾各答僑印同胞七七紀念会電	
△1945/7/4	【著作】 批審査糧食業務人員任免条例草案報告案〈*第119次院務会議にて〉	
1945/7/7-7/20		
△1945/7/21	【著作】 致江蘇医学院胡院長〈*胡定安〉書	
△1945/7/26	【著作】 対於公務員内外調任条例施行細則草案第二条規定須任現職満三年部方主限制解釈院方主拡張解釈之意見〈*第120次院務会議にて〉	
1945/8/8		
△1945/8/9	【著作】 致教育部朱部長〈*朱騮先〉書	
△1945/8/9	【著作】 批考選委員会李委員竟容函陳視導川康公職候選人検覈計劃案(原函有内地辺疆施用同一条例実有不便之語)	
1945/8/11		
1945/8/14		
△1945/8/24	【著作】 致陳藹士先生書	

○29, 41	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	全2篇。
○33	
○29	
○33	
○29	
○33	
○29	
○29	
『考政学報』第2期○29(関於戦時戦後考銓制度応与時代配合之指示), 41(同前)	
○33	
○33	
重慶『中央日報』○29(敬告公務人員従軍諸同志書)	主な転載箇所:考試院人事処編『輔導通訊』(第3・4期合刊, 1944/12);軍事委員会全国知識青年志願従軍編練総監部編『知識青年従軍論叢』。
	中国著作人協会設立。同会は戴季陶を名誉会員に任命。
○29	
○29	
○33	
○29	
○33	
○29	
○33	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	家祥、東会時と結婚。
○33	
○33	
○29	
○29(附居励今先生像讃)	
○33	2/11、米英ソによるヤルタ協定が成立。蒋介石はヤルタ協定に沿い、外蒙古の「現状維持」(モンゴル人民共和国の独立)を認めようとするが、「戴季陶先生と私〈*陳立夫〉は「我々は外蒙古の独立を正式に承認する必要はなく、他日これを撤回する余地を残しておくべきである」ということで意見が一致した」。陳立夫『成敗之鑑——陳立夫回想録』下巻, 173頁。1946/1/5、国民政府、モンゴル人民共和国を承認。
○33	
重慶『中央日報』「中枢紀念週」	不詳。
『考試院施政編年録』第十編	
○29	
重慶『中央日報』「蒋会長勉童軍幹部注重青年体魄鍛錬」	不詳。
重慶『中央日報』「嗟一代睿哲懐患難知交陪都荘厳紀念大会」	
○33	
○33	
○33	
○29	
○33	1945年春、神経痛が激しくなる。
○27(巻一), 31	
○27(巻二), 31, 36(読礼札記三十六則)	全42則。内36則の単行本:戴伝賢『戴伝賢先生墨宝——読礼札記』(台北:正中書局, 1966)。
○27	
	中国国民党六全大会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員に任命し、第六期中央執行委員会委員に選出。
『考政学報』第2期	
『考政学報』第2期	
『考試院施政編年録』第十編	
	蒋介石と首都問題について会談。
	中国国民党六期一中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団に任命。第六期中央執行委員会常務委員に選出。
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29	
○33	
○33	
	国民参政会第4期第1次大会(重慶)に出席。
○29	
○33	
	ソヴィエト連邦、日本に宣戦布告。8/9ソヴィエト連邦軍、満洲侵攻。
○29	
○33	
	国防最高委員会と中国国民党中央執行委員会常務委員会の聯合緊急会議に出席。夜、抗戦の勝利に喜色を表さず。
	国民政府、中ソ友好同盟条約を調印。日本、降伏。
○29	

1945/9月上旬		
1945/9/3		
△1945/9/3以後	【著作】〈*毛沢東など宛の書簡〉	
△1945/9/4	【著作】鐘鼓香三讃並誌	
△1945/9/5?▲1945/9/6	【講演・談話記録】〈*重慶駐在の中国国民党中央党部、国民政府幹部主催の勝利慶祝会にて〉	
△1945/9/9▲1945/10/9	【著作】〈*上海『民国日報』復刊を祝して，重慶にて〉	戴伝賢
△1945/9/11	【著作】祭夫人〈*鈕有恒〉文並誌	
△1945/9/12	【著作】致中央陸軍軍官学校万教育長〈*万武樵〉書	
△1945/9/12	【著作】覆求精中学楊校長書	
1945/9/13		
△1945/9/14	【著作】本院接收示要	
△1945/9/15	【著作】記蓮花夫人〈*鈕有恒〉一則	
△1945/9/15	【著作】覆何総司令〈*何敬之〉電	
△1945/9/19	【著作】覆陳藹士、屈文六先生書	
△1945/9/27	【著作】致教育部朱部長〈*朱騮先〉書	
△1945/10/7	【著作】致朱騮先、陳百年先生書	
△1945/10/8	【著作】国防最高委員会通過勝利勲章条例	
1945/10/10		
△1945/10/12	【著作】告成都童子軍全体兄弟姊妹書	
△1945/10/14	【著作】致宋湘舟甥書	
1945/10/15		
△1945/10/25	【著作】覆本院宋主任秘書〈*宋湘舟〉書	
△1945/10/25	【著作】覆馬尼拉蔡梅渓先生電	
△1945/10/27	【著作】周易復卦辞注	
△1945/11/15	【著作】行政考試両院会同公布公務員内外調任条例施行細則	
△1945/11/?	【著作】告墓文	
1945/11/17		
△1945/11/18	【著作】致守愚国祥両姪書	
△1945/11/20	【著作】致張〈*張傅泉〉陳〈*陳藹士〉屈〈*屈文六〉三先生書	
△1945/11/20	【著作】致蒋緯国姪書	
△1945/11/20	【著作】致国祥姪書	
△1945/11/21	【著作】批対考選委員会専門委員及編纂聘任規則草案第五条任期規定之指示〈*第125?次院務会議にて〉	
△1945/11/21	【著作】批頒給勝利勲章条例第三条第四款規定「考績優異」一語建議案〈*第127?次院務会議にて〉	
△1945/11/21	【著作】対考試及格人員復員辦法草案第二条第二款規定「現無工作迄未参加敵偽工作経査明属実者」之指示〈*第124?次院務会議にて〉	
△1945/11/22	【著作】致国祥姪書	
△1945/11/25	【著作】歓迎甘歌利先生詞	
△1945/11/25	【著作】覆王司令官〈*王耀武〉電	
△1945/11/30	【著作】致許汝為先生書	
△1945/12/1	【著作】致銭慕尹、沈士華先生書	
△1945/12/1	【著作】致陳健庵先生書	
△1945/12/2	【著作】示安国児〈*戴安国〉	
△1945/12/5	【著作】対本院会部還都辦法之指示	
△1945/12/8	【著作】致南京陸軍何総司令〈*何敬之〉電	
△1945/12/11	【著作】勗中央警官学校師生	
△1945/12/12	【著作】致向議長〈*向育仁〉書	
△1945/12/14	【著作】致張道藩先生書	
△1945/12/18	【著作】批銓叙部核議県警察局長任用補充規定決議案〈*第128次院務会議にて〉	
△1945/12/20	【著作】致印度中印学会大会電	
△1945/12/23	【著作】王将軍〈*王耀武〉所部陣亡将士祝詞	
△1945/12/?	【著作】考試院施政編年録序	
△1945/12/?	【著作】宋子文先生五旬晋二寿序	
△1945年初冬	【著作】記民国十六年使日時事略	
△1945年初冬	【著作】題民国十六年使日事竣告別書	
△1945年仲冬月	【著作】題文昌符樹秀同志保存中華革命党任命状	
1946/1/10-1/31		
△1946/1/14	【著作】致本院秘書処書	
△1946年庚寅月(1月)月円之日	【著作】子歴代班禅大師織錦法像賛	
△1946/1/?	【著作】中華民国法学会題詞	
△1946/2/23	【著作】贈宋湘舟甥序	
△1946/2/24	【著作】致盧于正先生書	
1946/3/1-3/17		
△1946/3/8	【著作】誌国民政府琢製玉璽両方之経過	
△1946/3/9	【講演・談話記録】在白崇禧委員宣読閻錫山委員報告中共活動情形後之発言〈*中国国民党6期2中全会第11次会議にて〉	
△1946/3/12	【著作】致中央組織部陳部長〈*陳立夫〉、国民大会代表選挙総事務所張主任〈*張厲生〉書	
△1946/3/15	【著作】菲律濱中正日報発刊週年紀念題詞	
1946年春		
1946/4/13		
△1946/4/21	【著作】対偽組織或其所属機関団体任職人員候選及任用限制辦法草案之指示〈*第135次院務会議にて〉	
1946/4/29		
1946/4/30		
1946/5/1		
△1946/5/4	【著作】致川康両省党政軍及参議会電	
△1946/5/4	【著作】致重慶市党政軍及参議会電	
△1946/5/20	【著作】致陳立夫先生擬請酌任本院会部高級人員史尚寛等六人為専門委員函	戴伝賢
△1946/5/29	【著作】致中央図書館蒋館長〈*蒋慰堂〉書	
△1946/5/?	【著作】題国府印鋳局周仲良局長記琢製中華民国玉璽経過	
△1946/奉安紀念日(6/1)	【著作】還京感懐	
△1946/6/7	【著作】誄王芃生先生	
△1946/6/7	【著作】対考銓処業務案原擬意見之指示〈*第137次院務会議にて〉	
△1946/6/12▲1946/6/13	【著作】〈*戴雨農を追悼する輓聯〉	
△1946/6/15	【著作】対糧食部聘用専門人員遴用規則草案之指示〈*第137次院務会議にて〉	
△1946/6/15	【著作】対審査糧食部聘用専門人員遴用規則草案認為資格過濫不能成立報告案之指示〈*第137次院務会議にて〉	
△1946/6/29	【著作】対本院選派出国考察人員辦法草案之指示〈*第138次院務会議にて〉	
△1946/6/?	【著作】民生建国史略	
△1946/6/?	【著作】贈各省考銓処処長	
△1946/6/?	【著作】三事偈	
△1946年仲夏	【著作】甘節亭記	
△1946/7/5	【著作】致本院周副院長〈*周惺甫〉暨賈部長〈*賈煜如〉、陳委員長〈*陳百年〉書	
△1946/7/5	【著作】批安徽江西考銓処呈擬遷設南昌並於安慶設立辦事処案〈*第140次院務会議にて〉	
△1946/7/9	【著作】贈劉家駒居士序	
1946/7/10		
△1946/7/16	【著作】修忍行	
△1946/7/17	【著作】対於用考試及格名義反対某員任某職宣言之処理	
△1946/7/23	【著作】蒋鹿苹先生重遊泮水頌	
1946/7/24		
1946/7/29		

	陳立夫宅で、朱家驊、何応欽、白崇禧、陳立夫などと会談し、東北の接収よりも華北での軍事力強化を優先させることを主張。
	8月末、重慶で国共会談が開始。9/3午後、戴季陶は毛沢東の訪問を受ける。
『我与共産党』66-67頁	不詳。
○29	
重慶『中央日報』「留渝中央委員挙行祝勝晩会」	
上海『民国日報』○29(民国日報復刊祝詞)	
○29	
○29	蒋介石と首都問題について会談。
○29	
	夜、毛沢東などを招き宴会を開く。
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	10月上旬、成都に向かう。
『考試院施政編年録』第十編	
	国民政府は戴季陶に勝利勲章を授与。
○28,29	
○29	
	六期中執会12次常会は国民大会選挙代表資格審査委員会委員に任命。
○29	
○33	
○29	
『考試院施政編年録』第十編	
○29	
	重慶着。復職。
○33	
○29	
○29	
○33	
○33	
○33	
○33	
○33	
○29	
○33	
○29	11月末、睡眠薬を大量に服用し、一時人事不省に陥る。
○29	
○29	
○33	
○33,41	
○33	
○29,36(勗中央警官学校師生,其二,其三)	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29,41	
○29	
○29	
○29	
○29	
	政治協商会議(重慶)。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
	中国国民党六期二中全会(重慶)に出席。同会は戴季陶を主席団に任命し、第六期中央執行委員会常務委員、中国国民党国民大会代表に選出。会期前後(3/21、4/7など)4回に亙り右臀膿疱疹の摘出手術を受ける。
○35	
○35	
○29	
○29	
	インドのいくつかの学術団体は沈宗濂を通じて戴季陶を各大会年会に招く。ベナレス大学は戴季陶を講師に招き、戴季陶に最高学位を授与する旨を伝える。国際大学は戴季陶を度歳に招く。
	六期中執会28次常会は戴季陶を国民大会党団指導委員会委員に任命。
○33	
	重慶発。空路、南京に向かう。
	南京着。国民政府は還都令発表(5/5に中国国民党中央党部、国民政府が南京に移転)。
	南京で考試院の業務開始。
○33	
○33	
○35	
○29	
○35	
○29	
○29	
○33	
南京『中央日報』「戴雨農将軍哀栄」	
○33	
○33	
○33	
○29	6月、国共内戦全面化。
○29,41	
○29	
○29	
○29,41	
○33	
○29	国民政府国父陵園管理委員会常務委員に任命される。
	六期中執会35次常会は中央執行委員会常務委員会の分組案を検討。7/24、六期中執会35次常会は戴季陶を第一組(組織)委員(召集人)、第二組(文化宣伝)委員に任命。
○29	
○29	
○29	
	六期中執会36次常会は戴季陶が中国国民党六期二中全会決議案督導実施委員会救済組委員(召集人)に就くことを確認。
	蒋介石の招きに応じ、周惺庵とともに廬山に向かう。

△1946/7/?	【著作】致考試院同人書	
△1946/8/23▲1946/8/24	【講演・談話記録】〈*三民主義青年団廬山夏令営にて〉	
1946/9/1-12		
1946/9/4		
1946/9/5		
△1946/9/6	【著作】致江西王主席〈*王方丹〉書	
1946/9/7	【著作】国府公布修正勲章条例	
△1946/9/10▲1946/10/23	【著作】〈*ネルー宛の書簡〉	
△1946/9/10	【著作】致陳布雷先生書	
△1946/9/11	【著作】致向育仁議長書	
△1946/9/12	【著作】致束雲章先生書	
△1946/9/14	【著作】致束雲章先生書	
△1946/9/15	【著作】示挑選県長諸君	
△1946/9/16	【著作】致国父陵園管理委員会書	
△1946/9/18	【著作】示挑選県長諸君	
△1946/9/19	【著作】致本院陳秘書〈*陳伯稼〉書	
△1946/9/20	【著作】対公務員服務法修正草案第十五十六条条文之指示〈*第143次院務会議にて〉	
△1946/9/21	【著作】致交通部譚次長〈*譚伯羽〉書	
△1946/9/22▲1946/9/23	【講演・談話記録】〈*考政学会第6期年会(南京)にて〉	
△1946/9/24▲1946/9/25	【講演・談話記録】〈*挑選県長訓練班の開学典礼にて〉	
△1946/9/24▲1946/10/31	【講演・談話記録】主席平生之為人及其思想行為要点	戴伝賢
△1946/9/29	【著作】上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
△1946/9/30	【著作】致史秘書長〈*史尚寛〉書〈*対本院出国考察人員組織之指示〉	
△1946/10/1▲1946/10/2	【講演・談話記録】〈*挑選県長訓練班の結業典礼にて〉	
△1946/10/1	【著作】覆哈世昌先生書	
△1946/10/1	【著作】覆麻傾翁法師書	
△1946/10/3	【著作】致趙本枚君書	
△1946/10/5	【著作】致陳秘書〈*陳天錫〉書	
△1946/10/8	【著作】上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
△1946/10/8	【著作】覆戴園晨先生書	
△1946/10/9	【著作】致譚雲山先生書	
△1946/10/10	【著作】致永年姪書	
△1946/10/12	【著作】対院会部員工子弟幼稚園籌備人員擬請撥借明志楼房屋作為園舎案之指示〈*第144次院務会議にて〉	
1946/11/3		
△1946/11/6	【著作】覆陳協中同志書	
△1946/11/8	【著作】致印度婆羅痘斯大学〈*ベナレス・ヒンドゥー大学〉副校長〈*ラーダークリシュナン〉書	
1946/11/15-12/25		
1946/11/20		
△1946/11/?	【著作】〈*国民大会代表宛の書簡〉	戴伝賢
△1946/12/3	【著作】致朱騮先先生書	
△1946/12/5	【著作】致居覚生先生書	
△1946/12/14	【著作】上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
△1946/12/17	【著作】致宝華山妙柔和尚書	
△1946/12/17	【著作】鼎湖種樹法及本人対宝華山意見	
△1946/12/21	【著作】上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
△1946/12/23	【著作】致呉礼卿先生書	
△1946/12/26	【著作】致呉文官長書	
△1946/12/26	【著作】上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
△1946/12/26	【著作】再上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
1946/12/31		
△1946年孟冬月▲1947/3/31	【著作】中印学会年会致辞	戴伝賢
△〈*1946年仲冬月〉▲1947/3/28	【著作】印度婆羅痘斯〈*ベナレス〉大学年会致辞	
△1946/仲冬月▲1947/3/31	【著作】摩訶菩提会年会致詞	
△1946年季冬月	【著作】対印度尼赫魯発起召集泛亜会議之感想	
△1946年冬	【著作】覆暹羅国外交部部長書	
△1946年冬月▲1947/3/28	【著作】国際大学年会致泰果爾大師賛	戴伝賢
△1946年冬月▲1947/3/28	【著作】加爾各答美術社十週年紀念会致辞	戴伝賢
△1946年冬月▲1947/3/28	【著作】天竺加城文化会議致辞	戴伝賢
△1946/?/?	【著作】贈林子鶴医士	
△1946/?/?	【著作】贈台湾同胞代表	
△1947/1/4	【著作】致本院宋主任秘書姜科長書	
△1947/1/8	【著作】致方興成姪婿等書	
△1947/1/16	【著作】致徐啓丞君書	
△1947/1/16	【著作】致王耀武同志書	
△1947/1/17	【著作】対本院出国考察団団員缺額不補決議案之指示〈*第148次院務会議にて〉	
△1947/1/17	【著作】対銓叙部議擬確立人事制度与行政機関切取聯繋辦法之指示〈*第148次院務会議にて〉	
△1947/1/20	【著作】致教育部朱部長〈*朱騮先〉書	
△1947/1/20	【著作】致志仁姪電	
△1947/1/24	【著作】上蒋総裁〈*蒋介石〉書	
△1947/1/26	【著作】致賈部長〈*賈煜如〉陳委員長〈*陳百年〉書〈*対現行考績辦法所定項目与毎項目所占最高分数頗感難於解釈運用之意見〉	
△1947/1/27	【著作】致向育仁議長伉儷書	
△1947/1/27	【著作】致蒋文軒先生書	
△1947/1/28	【著作】致方興成姪婿兆蘭姪女書	
△1947/1/28〈*もしくは20〉	【著作】致志仁姪電	
△1947/1/29	【著作】題青芝老人手札	
△1947/1/30	【著作】贈真夫君	
△1947/1/?	【著作】示挑選県長諸君	
△1947/1/?	【著作】致本院副院長秘書長暨会部長官書	
△1947/2/2	【著作】致方興誠姪婿兆蘭姪女書	
△1947/2/4▲1947/2/5	【講演・談話記録】〈*中央訓練団対党政軍人事管理人員訓練班にて〉	
△1947/2/14	【著作】致李伯英先生書	
△1947/2/14	【著作】致国祥姪書	
△1947/2/18	【著作】覆兪時中世講書	
△1947/2/19	【著作】覆陳百年先生書	

○29, 41	
南京『中央日報』「廬山夏令営結業典礼」	
	三民主義青年団第2次全国代表大会(廬山)は戴季陶を第2期中央幹事会指導員に任命。
	六期中執会39次常会は中央執行委員会甄選委員会委員の候補者名簿(戴季陶を含む)を採択。9/18、六期中執会40次常会で甄選委員会委員の選挙を行い、戴季陶は落選。
	南京着。高等考試及格人員県長挑選委員長に任命される。その後、インドのいくつかの学術団体は譚雲山を通じて戴季陶を各大会年会に招く。9月末、戴季陶は私人の資格と静養の目的でインド訪問の計画を立てる(上海で虫歯を抜き義歯を入れ、11月の国民大会閉会直後に出発)。
○29	
『考試院施政編年録』第十一編	
南京『中央日報』「戴院長函賀尼赫魯」	不詳。
○29	
○29	9月から12月頃、趙令儀とその養女慕儀は浙江省遂安県から上海を経て南京に戴季陶を訪ねる。戴季陶は向育仁に彼女らへの生活支援を依頼し、彼女らを成都に遣る。
○29	
○29	
○29, 41	
○29	
○29, 41	
○29	
○33	
○29	
南京『中央日報』「考政学会年会」	
南京『中央日報』「挑選県長訓練班昨行開学礼」○29(示挑選県長諸君), 41(同前)	
南京『中央日報』「全民同慶主席華誕――主席思想行為要点」○29(蒋主席平生為人及其思想行為要点), 43	
○29	
○29	
南京『中央日報』「県長訓練班結業」○29(挑選県長受訓結業講詞)	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○33	10月上旬、歯茎が化膿し痛む。上海で治療を始める。年末までに完治できないと診断される。インド訪問を断念。
	国民政府は遴選国民大会代表の名簿を公示。
○29	
○29	「国民大会代表中央遴選委員会選任代表」の資格で国民大会(南京)に出席。国民大会は中華民国憲法草案を採択。1947/1/1中華民国憲法公布、12/25施行。戴季陶は、公選候選人考試制度が憲法に盛り込まれなかったことに不満であった。
	六期中執会46次常会は戴季陶を国民大会党団指導委員会召集人に任命。
○43	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29, 30(西蔵高度自治問題再上国府蒋主席書)	
	簽署公布憲法令儀式(南京)に出席。戴季陶は憲法に公職候選人考試制度が記されなかったことに対し不満。
南京『中央日報』「戴院長致印書緘　五」○29	
南京『中央日報』「戴院長致印書緘　一」○29(印度婆羅痕斯大学年会致詞)	
南京『中央日報』「戴院長致印書緘　六」○29	
○29	
○29	
南京『中央日報』「戴院長致印書緘　二」○29(泰果爾大師賛)	
南京『中央日報』「戴院長致印書緘　三」○29(加爾各答美術社十週年紀念会致詞)	
南京『中央日報』「戴院長致印書緘　四」○29(天竺加城文化会議祝詞)	
○29	
○29	
○29	
○33(致方興成姪婿暨発姪等書)	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○33	
○29	
○29, 41	
○29	
○29	
○33	
○33	
○29	
○29	
○29, 41	
○29, 41	
○33	
南京『中央日報』「戴院長在中訓団講人事制度問題」	
○29	
○33	
○29	
○29	

△1947/2/21	【著作】上蒋総裁〈*蒋介石〉書	
△1947/2/21	【著作】致中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉書	
△1947/2/22	【著作】本院花木計画	
△1947/2/22	【著作】示陳念志圃公	
△1947/2/23▲1947/2/24	【講演・談話記録】〈*中央訓練団対党政軍人事管理人員訓練班の第9期畢業典礼にて〉	
△1947/2/25	【著作】致盧于正先生書	
△1947/2/26	【著作】覆中央党史史料編纂委員会書	
△1947/2/27	【著作】致朱騮先先生書	
1947/3/6,4/30-11/27		
△1947/3/7	【著作】覆張東蓀先生書	
△1947/3/7	【著作】致向育仁議長書	
△1947/3/9	【著作】致国祥姪書	
△1947/3/10	【著作】致譚雲山先生書	
△1947/3/10▲1947/3/25	【著作】〈*ネルー宛の書簡〉	戴伝賢
△1947/3/10▲1947/3/25	【著作】〈*ネルー、ナイトSarojini Naidu宛の書簡〉	戴伝賢
1947/3/15-3/24		
△1947/3/17	【著作】誌所著整理金融財政方案経過	
1947/3/18		
△1947/3/20	【著作】覆中国仏教会中国仏学会電	
1947/3/26		
△1947/3/29	【著作】致虚雲老和尚書	
△1947/3/29	【著作】致内政部張部長〈*張厲生〉書	
△1947/4/17	【著作】致三姊書	
△1947/4/18	【著作】覆本院陳参事〈*陳伯稼〉書	
△1947/4/18	【著作】致本院陳参事〈*陳伯稼〉書	
△1947/4/19	【著作】致北平何市長〈*何仙槎〉書	
△1947/4/22	【著作】覆陳参事〈*陳伯稼〉書	
△1947/4/23	【著作】致中央党部呉秘書長〈*呉鉄城〉書	
△1947/4/27	【著作】致張岳軍先生書	
△1947/4/?	【著作】記日本佐分利〈*佐分利貞男〉事〈*滬江恒安廬にて〉	
△1947/5/5	【著作】致拉卜楞菩提法苑諸大徳電	
1947/6		
△1947年首夏	【著作】記日本二則	
△1947年夏	【著作】蒋主席教育言論類選序	
△1947/7/1	【著作】致束雲章先生書	
1947/7/4		
△1947/7/8	【著作】致四川鄧主席等電	
△1947/7/14	【著作】致向育仁議長伉儷書	
△1947/7/14	【著作】致蒋文軒先生書	
△1947/7/17	【著作】致北平何市長〈*何仙槎〉書	
△1947/7/21	【著作】致丁鼎丞諸先生書	
△1947/7/22	【著作】致丁鼎丞諸先生書	
1947/7/23		
△1947/7/25	【著作】致丁鼎丞、陳果夫先生書	
△1947/7/?	【著作】勗中央政治学校畢業諸生	
△1947/7/?	【著作】題創建航空学校紀念留影	
△1947/8/8	【著作】致四川省参議会向議長〈*向育仁〉書	
△1947/8/8	【著作】致陳果夫先生書	
△1947/8/15	【著作】覆張岳軍先生書	
△1947/8/16	【著作】致張岳軍先生書	
△1947/8/20	【著作】致束会時婿家祥児〈*戴家祥〉書	
△1947/8/26	【著作】覆外交部王部長〈*王雪艇〉書	
1947/8		
△1947/9/2	【著作】顧一樵先生就任政治大学校長祝詞	
△1947/9/5▲1947/9/6	【講演・談話記録】〈*三民主義青年団第2期中央幹事会第2次全体会議暨幹事監察聯席会議の開幕典礼にて〉	
1947/9/9-9/13		
△1947/9/9▲1947/9/10	【講演・談話記録】〈*考試院主催の基本教育会議代表招待茶会にて〉	
△1947/9/29	【著作】致宝華山妙柔和尚書	
△1947年旧暦中秋節(9/29)	【著作】致束雲章先生書	
△1947/9/30	【著作】致束雲章先生書	
△1947/9/?	【著作】対遠東区基本教育会議致詞	
△1947/9/?	【著作】致襄魯考銓処馬処長溫華電	
△1947年秋月	【著作】甘地先生七旬晋八祝詞	
△1947年秋月	【著作】題蒋介石先生写心歌	
△1947年中秋後二日(10/1)	【著作】中有聞教得度密法頌	
△1947年中秋後二日(10/1)	【著作】中有聞教得度密法序	
△1947年中秋後三日(10/2)	【著作】〈*張秉三宛の書簡〉	
△1947/10/2	【著作】致束会時書	
△1947/10/26	【著作】復鄒海濱先生書	
△1947/10/?	【著作】記玄奘法師所伝般若波羅密多心経	
△1947/10/?	【著作】蓮花鄔波斯迦信行因縁記略	
△1947/10/?	【著作】記五祖於神秀大師明道偈語所見	
△1947/10/?	【著作】記成都文殊院法宝壇経印本経過	
△1947/10/?▲1947/10		
1947/11/10		
△1947/11/13	【著作】覆印度拉達克利希南爵士電	
△1947/11/15▲1947/11/17	【著作】〈*呉鉄城、朱騮先、陳立夫、張厲生など宛の書簡〉	戴伝賢
△1947/11/16	【著作】致志昂姪書	
△1947/11/19▲1947/11/20	【著作】〈*呉鉄城、朱騮先、陳立夫、張厲生など宛の書簡〉	戴伝賢
△1947/11/19▲1947/11/22	【著作】〈*陳立夫宛の書簡〉	戴伝賢
△1947/11/19▲1947/11/22	【講演・談話記録】〈*上海中正学校童子軍に対して,考試院にて〉	

○29	
○29	
○29	
○29	
南京『中央日報』「中訓団人事班第九期畢業礼」	
○29	
○33	
○29	
	国民政府は范揚(考試院参事)、張忠道(同院考選委員会)、陳念中(同院考選委員会秘書長)などをアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、スウェーデンに派遣し政治制度などを考察させる。陳念中は団体に遅れて出国、帰国。
○29	
○29	
○33	
○29	
南京『中央日報』「泛亜会議開幕致辞尼赫魯讃我国父――戴院長函尼赫魯致意(一)」○29(致印度尼赫魯総理書)	
南京『中央日報』「泛亜会議開幕致辞尼赫魯讃我国父――戴院長函尼赫魯致意(二)」○29(致印度尼赫魯総理、乃都夫人書)	
	中国国民党六期三中全会(南京)に出席するが、会期中に昏倒。同会は戴季陶を主席団、審査委員会委員(党務組)、決議案整理委員会委員、宣言起草委員会委員に任命。第六期中央執行委員会常務委員会当然委員に就く。閉会後、上海で義歯を入れる。
○29	
	三民主義青年団中央団部第2期指導員に任命される。
○33	
	国防最高委員会第225次常務会議(南京)に出席。
○29	
○29	
○33	六期中執会65次常会は五院院長が国民政府委員会当然委員、中国国民党(第六期)中央執行委員会常務委員会当然委員に就くことを決議。同会は戴季陶を考試院院長(国民政府委員会当然委員は1948/5/20まで)に選出。
○29, 41	
○29	
○29	
○29, 41	
○29	
○29	
○29	
○33	
	南京着。その後も神経痛や心臓衰弱に苦しみ、睡眠薬を大量に服用し、一時人事不省に陥る。
○29	
○29	
○33	
	国務会議6次会議は戴季陶を国民政府法制審査委員、国民政府政治審査委員に任命。
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
	六期中執会76次常会は戴季陶を中央党団統一組織委員会指導委員に任命。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
○29	
	江南大学董事会(無錫)は呉稚暉を董事長、戴季陶と栄徳生を副董事長に任命。なお、戴季陶は1930年頃、董竹君が経営する群益紗管(綿糸)工場(上海)に融資し、群益紗管工場の製品(綿糸)を栄徳生の紡績工場へ直接納められるようにするため、栄徳生に董竹君を紹介したことがある。また、戴季陶の婿束会時の父雲章は、栄徳生の知己であった。
○29	
南京『中央日報』「貫澈党団統一政策」○29(勉三民主義青年団和気忍耐節省講詞)	
	中国国民党六期四中全会及中央党団聯席会議(南京)に出席。同会は戴季陶を主席団、宣言起草委員会委員に任命し、第六期中央執行委員会常務委員に選出。
南京『中央日報』「基教会議各代表参観教育展覧会」	
○29	9月中旬、静養の目的で宝華山隆昌寺に滞在。
○33	
○33	
○29	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29(附致張秉三先生書)	
○33	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
考試院秘書処主編『考試院則例』〈*修訂版〉	
	国民大会代表選挙事務所は国民大会代表候選人の名を公示。戴季陶は中国国民党国民大会代表候選人の浙江省代表。
○33	インドの某大学は12/14に戴季陶に文学博士学位を授与することを決定。
南京『中央日報』「懇請中央另行推定賢能戴院長函辞国代候選人」○29(致呉鉄城諸先生書), 36(致呉鉄城、陳立夫、朱騮先、張厲生先生辞国民大会代表候選人提名録)	11/15、11/19、12/13など、中国国民党中央執行委員会などに対し国民大会代表候選人の辞任を繰り返して表明。
○33	
南京『中央日報』「戴院長再辞国代候選人」○29(致呉鉄城諸先生書)	
南京『中央日報』「戴院長再辞国代候選人」○29(致陳立夫先生書)	
南京『中央日報』「滬中正学校童子軍昨向戴副会長献旗」	

△1947/11/23	【著作】覆某君書	
△1947/11/23	【著作】論中華楽教	
△1947/11/24	【著作】致平少黄先生書	
△1947/11/27▲1948/1/31	【著作】双度心灯	戴伝賢
△1947/11/?	【著作】題迦葉摩騰竺法蘭両大徳四十二章経	
△1947/11/?	【著作】題李学灯仁弟与王太蕤先生合影	
▲1947/12	【著作】国民政府林故主席〈*林森〉事略	葉楚傖,戴伝賢,但燾
△1947/12/1	【著作】覆向育仁議長書	
△1947/12/1	【著作】上泗澄叔書	
△1947/12/7	【著作】致呉鉄城諸先生〈*呉鉄城,陳果夫,陳立夫〉書	
△1947/12/7	【著作】再致呉鉄城諸先生書	
△1947/12/9	【著作】致向育仁議長伉儷書	
△1947/12/13▲1947/12/14	【著作】〈*呉興県選挙事務所主任委員袁某宛の書簡〉	戴伝賢
△1947/12/13	【著作】致陳立夫先生書	
△1947/12/19	【著作】致印度羅諦泰果爾Ratindranath Tagore先生電	
1947/12/25		
△1947/12/31	【著作】歳暮感述	
△1947/12/?	【著作】東京太平洋倶楽部宴会回憶	
△1947/12/?	【著作】説教養	
△1947/12/?	【著作】両印離合	
△1947/12/?	【著作】憂思	
△1947/仲冬月	【著作】中山大学同学会同学録序	
△1947/仲冬月	【著作】記達摩祖師見梁武帝事	
△1947年冬	【著作】整理金融財政方案序	
△1947年冬月	【著作】六祖法宝壇経跋	
▲1947	【書画】考銓法規集	
▲1948/1	【書画】李士珍著警察行政之理論与実際	戴伝賢
△1948/1/12	【著作】致陳果夫先生書	
△1948/1/12	【著作】致正中書局諸公書	
△1948/1/16▲1948/1/18	【著作】〈*ネルー宛の書簡〉	戴伝賢
△1948/1/17	【著作】上国府蒋主席〈*蒋介石〉書	
△1948/1/17	【著作】致教育部朱部長〈*朱騮先〉論童子軍教育書	
△1948/1/30▲1948/1/31	【著作】〈*ガーンディーを追悼する輓聯〉	戴伝賢
△1948/1/31▲1948/2/1	【著作】〈*ガーンディーを悼む,ネルー宛の書簡〉	戴伝賢,朱家驊
△1948/1/31	【著作】覆呉興袁県長〈*袁右任〉書	
△1948/1/31	【著作】致李登同将軍書	
△1948/1/31	【著作】致広東省宋主席〈*宋子文〉書	
△1948/1/31	【著作】覆台湾省魏主席〈*魏伯聡〉書	
△1948/1/?	【著作】礼楽与政教〈*1936年訪欧直前に林森から助言を受ける〉	
△1948/1/?	【著作】記悉陀羅画菩薩像	
△1948/1/?	【著作】偶題二則	
△1948年立春前二日(2/3)	【著作】題国父書尚武楼横額	
△1948/2/4	【著作】致北平何市長〈*何仙槎〉書	
△1948/2/4	【著作】致国祥姪書	
△1948/2/9▲1948/2/10	【講演・談話記録】考試院工作概況〈*中国国民党中央党部の紀念週にて〉	
△1948/2/19	【著作】反省	
△1948/2/19	【著作】致永年姪書	
△1948/2/19	【著作】致国祥姪書	
△1948/2/21	【著作】致中央図書館蒋館長〈*蒋慰堂〉書	
△1948/2/22▲1948/2/23	【講演・談話記録】〈*公務員の忠勤奨励会にて〉	
△1948/2/23	【著作】致国府主席北平行轅李主席〈*李徳鄰〉書	
△1948/2/24▲1948/2/25	【講演・談話記録】〈*国際聯歓社主催の「聖雄甘地図片展覧会」の開幕典礼(南京)にて〉	
△1948/3/5▲1948/3/6	【講演・談話記録】如何做一個標準的童子軍〈*中国童子軍総会、中国童子軍南京市支会主催の第22期童子軍節慶祝大会にて〉	
1948/3/15		
1948/3/29-5/1		
△1948/3/31	【著作】致印度梅農K.P.S.Menon大使伉儷書	
△1948/3/31	【著作】致向育仁議長書	
△1948/3/?	【著作】愛児阿花生日寄贈並蒂花	
△1948/3/?	【著作】新時代都市建築学序	
△1948年初春▲1948/3/5	【著作】聖雄甘地頌	戴伝賢
1948/4/4-4/6		
△1948/4/11	【著作】致計晋美処長書	
1948/4/29		
△1948/4/30	【著作】上蒋総裁〈*蒋介石〉書	
△1948/4/?	【著作】跋譚伯羽世講宝蔵国父与組安先生〈*譚組安〉墨蹟三則	
△1948/4/?	【著作】松声琴韻廬記	
△1948/5/2▲1948/5/3	【講演・談話記録】〈*中国回教協会第3期全国会員代表大会の開幕典礼にて〉	
△1948/5/5▲1948/5/6	【講演・談話記録】怎様達成童子軍的目的〈*南京市童子軍大検閲にて〉	
△1948年立夏(5/5)	【著作】題中国健康之友社発起冊	
△1948/5/13	【著作】批台湾省籍人員任用資歴審核変通辦法之指示〈*第171次院務会議にて〉	
△1948/5/18	【講演・談話記録】忍耐沉着努力做去事業終有成功一日〈*全国童子軍教育行政会議にて〉	
1948/5/20		
△1948/5/23	【著作】致国防部第一庁張副庁長〈*張之珍〉書	
△1948/5/27	【著作】致虚雲老和尚書	
△1948/5/29	【著作】対教育部反対本院擬訂東北人員応考及任職資歴審核変通辦法草案第一項規定所持異議之意見〈*第3次臨時院務会議にて〉	
△1948/6/1	【著作】致王耀武将軍書	
1948/6/5		
△1948/6/20	【著作】致国祥姪書	
1948/6/24		
△1948/6/25	【著作】致陳叔諒先生書	
△1948/6/26	【著作】致宝華山妙柔和尚書	
△1948/6/?	【著作】上泗澄叔書	
△1948年夏正上九	【著作】致向育仁議長伉儷書	
△1948年夏正上九	【著作】致譚伯羽世講書	
△1948/7/10▲1948/7/11	【講演・談話記録】〈*考試院新旧院長交接典礼にて〉	
△1948/7/15	【著作】覆家麟姪電	
△1948/7/16	【著作】致警官学校李校長〈*李夢周〉書	
△1948/7/17	【著作】覆孔令侃世講書	

○29	国民大会代表の選挙が行われ、首位で当選。
○29,30	
○29	
南京『中央日報』○29	附記:1947/12月下旬。
○29	
○29	
南京『国史館館刊』創刊号	
○29	
○33	
○29	中央広播公司、中央日報社、正中書局、国民出版社の党有股票代表に任命されるが拒否。
○29	
○29	
南京『中央日報』「戴院長三辞国大代表」	
○33	
○33	
	五権憲法学会設立(南京)。同会は戴季陶を名誉理事長に任命。
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29	
考試院編『考銓法規集』	
李士珍『警察行政之理論与実際』	
○29	
○29	
南京『中央日報』「戴院長電慰甘地」○33(致印度尼赫魯総理電)	参考資料:“To Mahatma Gandhi”(*Selected Works of Jawaharlal Nehru(Second Series)Vol.5*)p.19の注記箇所(英訳)。ただし日付は1/18。
○29	
○28,29(致教育部朱部長書)	
南京『中央日報』「戴院長揮涙致輓」○29(驚聞甘地先生捨身作)	
南京『中央日報』「主席夫婦電尼赫魯弔唁和平鬥士之喪」○33(致印度尼赫魯総理電)	
○29	
○29	
○29	
○29	
○29,30	
○29	
○29	
○29	
○29	
○33	
南京『中央日報』「中央紀念週戴院長報告」	不詳。主な転載箇所:「考試院長戴季陶在総理紀念週報告考選行政」(『中国考試史文献集成』第7巻・民国)。「考試院長戴季陶在総理紀念週報告考選行政」には日時が記載されていないが、管見の限り、戴季陶が総理紀念週に考試院の工作を論じたのは1948/2/9だけであるので、「考試院工作概況」と「考試院長戴季陶在総理紀念週報告考選行政」を同一の講演と見なすこととする。
○29	
○33	
○33	
○29	
南京『中央日報』「励志社挙行忠勤奨励会」○29(忠勤奨励会致詞)	
○29	
南京『中央日報』「甘地図片展覧」;同前「発揚甘地精神」○29(聖雄甘地生平照片展	
南京『中央日報』「童軍節各首長訓話一致勗勉自助助人」○28	記録:陸震元、張培西。
	六期中執会臨時常会は戴季陶を約見中央提名候選人聯誼会及簽署提名候選人聯誼会代表に任命。
	第一次国民大会(南京)は戴季陶を主席団に任命。
○29	
○29	
○29	
○29	
南京『中央日報』○29	春、孝園(南京の五台山)に移る。
	中国国民党六期中央臨時全会(南京)に出席。総統、副総統選挙候補者の指名問題について発言。
○29	
	泛亜会議について羅家倫と会談。
○29,41	
○29	
○29	
南京『中央日報』「回教協会三全大会昨在京挙行開幕礼」;同前「中国回教協会代表大会	不詳。
南京『中央日報』「首都童軍昨大検閲」○28,29	
○29	
○33	
○28	記録:陸震元。
	中華民国政府総統府設立(南京)。
○29	
○29	
○33	
○29	
	国史館館長に任命される。戴季陶は病身のまま趙季官を看病したために体力が落ちて、館長就任を断念。
○33	
	考試院院長を辞任。
○29	
○29	
○33	6月初旬末、趙季官が中風、脳膜炎を患う。
○29	
○29	
南京『中央日報』「張伯苓就職」○29(考試院院長交接典礼致詞),41(同前)	考試院「院長交接儀式」が行われる。新院長は張伯苓。
○33	
○29	
○29	

△1948/8/26	【著作】致重慶華岩寺宗鏡和尚書	
△1948/8/26	【著作】上泗澄叔書	
△1948年暮秋之初	【著作】題蓮花夫人〈*鈕有恒〉心経解釈	
△1948/10/1	【著作】覆家祥児〈*戴家祥〉書	
△1948/10/16	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	
△1948/10/20	【著作】覆汪脩元先生書	
△1948/11/?	【著作】書蜀中治水利益之溥	
1948/12/5		
1948/12/25		
1948/12/28		
△1948/?/14	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉	
△1948/?/?	【著作】題国父最後演講留影	
△1949/1/15	【著作】覆家祥児〈*戴家祥〉書〈*広州より〉	
△1949/1/20?	【著作】示家祥児〈*戴家祥〉〈*広州より〉	
△1949/1/25	【著作】覆家祥児〈*戴家祥〉書〈*広州より〉	
1949/2/4		
1949/2/6		
1949/2/8		
1949/2/12		
1949/2/14		
1949/2/15		
1949/3/12, 3/31		
1949/4/3		
?/?/?	【著作】哀日本	
?/?/?	【著作】祈昇平	
?/?/?	【著作】述志	
?/?/?	【著作】表明公職二字之意義	
?/?/?	【著作】天竺所知之世界	

○29	
○33	
○29	9月上旬、身体の激痛に苦しみ、睡眠薬を大量に服用し、一時人事不省に陥る。その後、杭州の胡偉克宅で静養。9月、遼瀋戦役。
○33	
○33	
○29	
○29	11月、淮海戦役。
	国史館副館長但植之と陳天錫は戴季陶を訪問。
	「一級戦犯」に挙げられる。新華社陝北二五日電「陝北権威人士提出首要戦犯名単」(香港『羣衆』第3巻第1期,1948/12/30付)。12月中旬、身体の激痛に苦しみ、睡眠薬を大量に服用し、一時人事不省に陥る。
	12月頃、蒋緯国は戴季陶に台北移住を勧める。12/28、趙季官とともに南京発。空路、広州着。広州市政府の国際迎賓館に入る。
○33	
○29	
○33	1月下旬、成都移住を計画。
○33	
○33	
	広東省政府の東園招待所(東山)に移る。
	于右任、東園招待所に入る。2/11戴季陶は于右任と会談。
	六期中執会177次常会(広州)に出席。
	午前10時40分東園招待所で没。享年58歳。睡眠薬を大量に服用し心臓が衰弱したことが直接の死因であり、遺書は見つからなかったという。六期中執会178次常会は治喪委員会の設置を決議。委員は孫科(主任)、呉稚暉、丁惟汾、居正、鄭彦棻など。
	大殮(孫科主祭)(広州市東川路粤光製殮公司)。
	公祭(孫科主祭、蒋介石など出席)(粤光製殮公司)。出殯。民間諸団体主催の公祭(中山紀念堂)。公祭(白雲空港)。戴安国、遺体を成都に移す(2/16?)。
	総統令(褒揚令,国葬令)。
	国葬(居正主祭、朱家驊、戴安国など出席)(成都)。鈕有恒と合葬。
	戴安国は台北に移住。1984/11/12、台北で没。趙季官は成都に移住し、趙令儀、慕儀とともに住む。1950年、趙季官没。
○29	日本語訳:「日本をよんだ戴季陶の漢詩」18-19頁。
○29	
○29	
○35	
○35	

補記

筆者は、博士学位論文「戴季陶における「中国革命」とその思想――中国・日本・アジアをめぐって――」、同附録「戴季陶活動略年譜・著作目録」、同参考論文「雑誌『新亜細亜』論説記事目録」(『神戸大学史学年報』第 17 号,2002 年 5 月)を、2005(平成 17)年 3 月に、大学院文化学研究科(現 大学院人文学研究科)に提出した。

筆者が上の論文、附録、参考論文を、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に登録、掲載するのに併せて、筆者個人のウェブサイト「戴季陶研究ノート／戴季陶研究备忘录」を開設し、論文などの訂正や補足、追加などを行った。

ぜひウェブサイトもご覧いただきたい。

「戴季陶研究ノート／戴季陶研究备忘录」

ＵＲＬ： http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/9639/index01.html

＊ 随時更新する予定

(2007 年 9 月 4 日記)